

雪の楽園

ホネ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社会人になった八幡が女性との快楽に溺れていくお話。

※オリキャラが何人か出ます。

追記：エロありのエピソードには☆を付けておきました。(2018/5/27)

←他の自分の作品

『幸せの先』 原作 Ⅱ WHITE ALBUM2：春希xかずさの日常（ほのぼの系）

<https://syosetu.org/novel/2358>

38／

目次

IF Route 陽乃

【IF】Episode 1 | 1

序章

プロローグ☆ | 7

第一部

第一話 | 11

第二話 | 18

第三話 | 26

第三・五話 | 36

第四話 | 47

第五話 | 56

第六話 | 62

第七話☆ | 72

第八話☆ | 83

第九話 | 95

第二部

第十話 | 102

第十・五話 | 110

第十一話 | 117

第十二話☆ | 125

第十三話 | 132

第十三・五話 | 140

第十四話 | 151

第十五話 | 164

第三十五話☆	390
第三十四話	381
第三十三話	366
第三十二・五話 Part. B	352
第三十二・五話 Part. A	344
第三十二話	327
第三十一話	322
第三十話	314
第二十九話	308
第二十八話	303
第二十七話	294
第二十六話☆	286
第二十五話	277
第二十四話☆	273
第二十三話	259
第二十二話	252
第三部	
第二十一話	244
第二十話	232
第十九話	223
第十八・五話 Part. B	216
第十八・五話 Part. A	209
第十八話	204
第十七話☆	190
第十六話	182

第三十六話

第三十七話

第三十八話☆

第三十九話

第四部

第四十話☆

第四十一話☆

第四十二話☆

第四十三話

第四十四話☆

第四十五話☆

第四十六話☆

第四十七話

第四十八話☆

第四十九話

第五十話

第五十一話

第五十二話

第五十三話

第五十四話☆

第五十五話☆

第五十六話

第五十七話☆

第五十八話☆

第五部

397

402

409

418

425

438

443

456

463

479

490

498

502

507

514

523

540

552

560

571

578

584

592

第五十九話	603
第六十話	608
第六十・五話☆	621
第六十一話	628
第六十二話	634
第六十三話	645
第六十四話	657
第六十五話	665
第六十六話	675
第六十七話	684
第六十八話☆	698
第六十九話☆	711
第七十話☆	722
第七十一話	734
第七十二話	744
第七十三話	751
第七十四話☆	760
第七十五話☆	766
第七十六話	775
第七十七話	784
第七十八話	791
第七十九話☆	799
第八十話☆	806
第八十一話☆	815

IF Route 陽乃

【IF】 Episode 1

「おーい！比企谷くん、こっちこっち」

俺を呼ぶ声の方へ視線を向けると、あまりにも悪目立ちした美女がそこには立っていた。今日は大学の講義が無く、午前中にゼミに顔を出しただけだった。

周りの男達が飢えた獣のような目で彼女を見ている。勿論中には同性からの羨望の眼差しや嫉妬に満ちた黒いものもある。こうなることがわかっていたからこそ集合時刻の30分以上前に来たはずだった。しかし、どうしてか彼女はそこに居た。まるで俺が早く到着することをわかっていたかのようだった。しかも待ち合わせ場所が駅前の時計塔の下というのがまたいやらしい。そんな場所、どう考えでも目立つ。いや、目立つ場所にわざと設定したのだ。しかも俺が悪目立ちするためだろう。会う前から機嫌が良い方ではなかったが、たった今すこぶる機嫌が悪くなった。

「おはようございます、陽乃さん」

俺をここに呼びつけた女性——雪ノ下陽乃さんは蠱惑的な笑みを浮かべて俺を迎えた。映画のワンシーンを想起させるような美麗さだ。長袖にロングスカートで素肌はほとんど見えないのにもかかわらずどうして、こんなにもエロく見えるんだろうか。大学院を卒業して社会人になったからなのか妖艶さが倍増している気がする。

「あれ？もしかしなくてもご機嫌ナナメだったりする？」

「どうですかね」

「男と女が言う方入れ替わってるような会話だね」

「それって俺が女々しいってことですか？」

「比企谷くんはとても格好良い男の子だと思ってるよ」

「俺も陽乃さんはとても素敵な女性だと思ってますよ」

「うわ〜こんなにも心がこもってない口説き文句初めて〜」

「お互い様でしょうに」

超本気の口説きしかされたことないのにわたしとぶつぶつと文句を言っているがこれ以上は反応しないことにした。陽乃さんのこういった嫌がらせはいつものことだ。一々反応しては身がもたない。俺は陽乃さんを置いて歩き始めた。彼女はぴつたりとついてくるように後ろから小走りについてくると直ぐに俺の隣に並んだ。周囲の視線がこちらに集まるのはいつものことなのだが、どうにも慣れない。

「比企谷くんってやっぱりわたしのこと嫌い？」

「100の自信を持って好きとは言えないかもしれないですね」

「じゃあちよつとは好きが入ってるんだ？」

「嫌いなのに付き合ってるとしたら、それは何か弱みを握られているか契約かのどっちかですよ」

「素直にわたしのこと好きとは言ってくれないの？」

「露骨に胸を押し付けたり、腕を公共の場でわざとらしく絡めてきたりしなければもう少し好感が上がるかもしれないです」

「その割にはおっぱいから目線を外してない気がするんだけど？」

「生理現象です」

これは女性を恋愛対象としている人間なら皆そうなる。真理と言っても過言ではない。万乳引力ははるか古代から存在するのだ。現代の人類の細胞に本能として刻まれていることは自明の理ではないだろうか。

「また頭の中で屁理屈こねてるんでしょ…」

「そ、そんなことはないですよ」

「なんか唐突に外国人キャラみたいな話し方になってるし」

「陽乃さんって漫画とか読むんですか？」

「そんなに。でも比企谷くんが『年上のお姉さんに甘やかされる』系のライトノベルを愛読しているからね。一応彼氏の性癖ぐらいは今後のことを考えてしつかりと把握しておこうかなと」

「え？」

なんでそれ知ってるの？というかそのシリーズは隠してたはずだ

よね？いつの間に勝手に見つけたの？絶対に見つかるはずのない場所に置いておいたはずなのに…。

「今度アレやってあげようか？4巻の267ページに書いてある、」

「陽乃さん行きましょう。ここは目立ちます」

「いやん」

強引に彼女の腕を引っ張る。これ以上彼女のペースに付き合うとロクな事にならない。中学生の頃に書いた自作のポエムを朗読されるような気持ちになりたくない。中二病はまだ卒業できてないけど羞恥心というものはあるわけで。

「偶には男らしいところあるんだね、比企谷くん」

「草食系だからこういう行動をとってるんですよ。肉食ならあの場所で陽乃さんに迫ってるんじゃないですか？」

「それされちゃったらコロッと行ってたかもよ？」

「ご冗談を。冷ややかな目で一瞬見た後に作り笑顔になる未来しか見えません」

「あはは。それは比企谷くん以外の男にされた場合の話だね。というか作り笑顔ってひどいなあ」

「されたことあるんですか？」

「あるって言ったら嫉妬してくれる？」

「陽乃さんがその相手にお熱だった過去があるんなら嫉妬するかもしれないですね」

「ずるい答え方するなあ」

「自己紹介ですか？」

「そういう事言うと、ここで思いつきキスするよ？」

陽乃さんが更に一步詰め寄ってくる。目を輝かせないでほしい。

「なんですか、その斬新な脅迫。やるなら誰も見てないところでお願いしますごめんなさい」

「誰かのマネかな？でもキスはしたいんだよね。もう可愛いなあ…ん」

陽乃さんはこちらが身構える前に襲いかかってきた。痛恨の一撃。ハチマンは萌え死んでしまった！

「っ…け、結局するんですね」

「興奮した？」

「最初の行き先をホテルに変更する可能性が出てくるくらいには」

「じゃあ行く？」

「映画見に行くんじゃないですか？」

「そうだった。まあ比企谷くんを呼び出す口実に使っただけだからそこまで興味は無いんだけどね。公開してから2ヶ月くらい経ってる映画だし」

陽乃さんは腕を絡めたままもう片方の手で人差し指を口元に当てる。その仕草はとてつもなく可愛らしいのは勿論なのだが、密着した双丘の方に意識を奪われてしまう。

「口実って。普通にデートしようって言えばいいのに」

「デートって言葉。比企谷くん嫌いそうな感じするから」

「どこまで俺をひねくれ者だと思ってるんですか。俺だってデートってものにはそれなりのあこがれがありますよ」

「高校生の時はリア充に対して否定的な感じだったじゃんね」

「それは今も若干そう思ってますよ」

「えく。わたしのどこが不満なの？やっぱり性格？それとも雪乃ちゃんくらいのおっぱいの大きさが趣味になったの？」

「性格の次に胸のサイズが評価基準だと思ってるどころとか結構直してほしいですね。普通に失礼ですよ俺に対して」

「おっぱい凝視しながらそんなこと言っても何の説得力も無いんだけど…」

陽乃さんは呆れたように大きなため息をついた。

「ふふ、まあいいや。とりあえず映画見よっか」

「そうですね」

「映画館では大人しく出来るの？」

「子供じゃないんですから普通に見ますよ」

「触ってくるんじゃないかって話だよ」

「暗いからって俺が痴漢するかもってことですか？むしろ陽乃さんの方からしてくるんじゃないかって俺のほうが心配してますけど…」

「それはくうん。あるかも」

あるのかよ。意外とこの人甘えたがりというか寂しがりだよなあ。結構一人が平気な人って印象だったのに。いや、でもよくよく考えたら雪ノ下や俺によく絡んできてたし、その節はあったかもしれない。「でも比企谷くん、されるの好きじゃない?」

「それはそうですけど」

「比企谷くんはマグロだからなあ」

「もうちよつと言い方ありませんか? しかも別になにもしないわけじゃないでしょ…。というか陽乃さんが何もさせてくれないというか」

「それはそうだね」

くすくすと陽乃さんが笑う。この人工ツチの時めちやくちや責めてくるから抵抗する間もなくひたすら蹂躪されるのがいつもの流れだった。

「後でしてあげるね♡」

陽乃さんは耳元でそう囁く。耳元で言われるのはとても嬉しいのですが、言いながら股間をなで上げるのはやめてもらっても良いですかね? すぐ固くなっちゃうし、今日ジーパン履いてるから苦しくなるし。

「あはは。こういうところはいつまで経っても童貞だね♡可愛い♡」

「そういう陽乃さんだって強がってはいるけど意外と押しに弱いじゃないですか」

「それはそうだけど、比企谷くんの押しに弱いだけで他の人なら突っぱねてるよ」

可愛い。何この彼女超可愛い。お姉さんのくせに死ぬほど可愛い。この人、俺の彼女です。

「ちよろ谷くんだ」

「雪ノ下みたいに新しい名前を俺に付けないでくださいよ…」

「雪乃ちゃん、わたしが会った時は比企谷くんのことよく話題に出してるよ。こんな美人姉妹に愛されてるなんて罪な男だね」

「雪ノ下は別に面白がってるだけでしょう。別に俺のことは好きじゃ

ないと思いますよ」

「……………」

「なんで急に黙るんですか」

「これ本気で言ってるんだもんなあ…。雪乃ちゃんにいつまくられるかわかったもんじゃないよね…。敵は多いなあ」

何かボソボソと陽乃さんが呟いているがギリギリ聴き取ることが出来ない。正直何を言ったのか聞いてみたいのだが、ここで何て言ったなどと言おうものなら彼女がその日終わるまで口をきいてくれないまでである。

「券買ってくるからちよつとここで待っててね」

「え、一緒に行きますよ」

「大丈夫大丈夫。列にいつぱい人いたら迷惑でしょ？おすわりだよ比企谷くん」

「待てじゃなくておすわりなんですね」

「わたしのペットでしょ？」

「それは語弊がありすぎる」

「ふふ。冗談だよ。わたしのカレシくんだもんね」

それを最初から言えないのかなあこの人は。そういうところがめっちゃ面倒くさくて可愛いんだけども。

続く

序章 プロローグ☆

閑散とした部屋の中、高級ベッドの軋む音が時の止まったマンションの一室で鳴り響く。

ベッドルームは余計なものが配置されておらず、ダブルベッドや照明、ベッドの側にポツンと置かれた小さな机と一脚のソファアームのみだった。

暖色の間接照明に照らされたそんな一室で俺は雪ノ下雪乃と激しく交わっていた。

「はぁー……んん!!くっ……ああああ!!」

雪ノ下が俺の上で淫らに腰を振っている。

あの氷の魔女すら凍てつかせるほどの妖艶さとクールさを持った彼女がこうも本能に逆らえず快楽を貪る様を俺のような男が特等席で見ても良いものなのか。そう自問しながらも下半身に伝わる極上の刺激に酔いしれていた。

雪ノ下は一定のリズムで硬直した一物を攻め立てている。

「んぐ……う……雪ノ……し……t」

「あぁんーあーはぁ!ひ……ひきがや……く……ふうーんん!!!」
乱れたシートに腕をやりおもむろに起き上がると、慎ましやかな胸の先端を口に含んだ。

乳飲み子に戻ったかのように一心不乱に吸い上げる。

何度も飽きることなく形の整った乳首を舌で転がした。刺激を与える度に雪ノ下の身体が敏感に律動する感触が伝わってくるのが心地よい。

突然の奇行に雪ノ下は最初、一瞬目を見開いたが、まもなく飲み込んだ肉棒に意識を戻すと俺の頭を細長く美しい両の腕で包み込んだ。

「はぁ……うう!……ん……嬉しい……比企谷くん……」

愛おしそうに後頭部を撫でる。子供をあやす母親のような優しい

温もりが全身を支配した。

その間にも雪ノ下は下半身の運動を止めていない。愛撫に合わせるように腰を滑らかに動かしている。

甘美な快樂の浴槽に浸かったかのようだ。

雪ノ下に抱かれているだけで満たされていくのが分かる。

満たされてはいけないのに。

「比企谷君・・・？」

見上げると雪ノ下が不安げな顔でこちらを見ていた。どうやら物思いにふけていたせいで、動きが緩慢になっていた。雪ノ下はとうとう、その間にも緩やかな腰の動きで奉仕を続けている。底の見えない母性とも言えるほどの愛情に身体も心も何もかもが彼女に奪われていく。

「あ、いや。なんでもない」

思考を止めると雪ノ下の引き締まった尻を乱暴に掴んだ。そして彼女の身体を持ち上げると勢いよくペニスに引きつけた。

「あああああああーん!!いや・・・!だめ!!」

抜いては突き、また抜いては突く。

楔を打ち込むように強く。

男根を打ち付ける度に雪ノ下の嬌声が鼓膜を通り抜けて脳の中樞を麻痺させていった。

こんな麻痺のような快樂が存在したのか。

俺はたった今知ってしまった。

気づけば二度と抜け出すことの出来ない禁断の果実を口にしてしまっている。

それは雪ノ下雪乃も同じだった。

脳髓の芯まで痺れさせる交わりに思考を奪われた男女がそこにはいた。

虚ろな目で雪ノ下の目を見ると、彼女も既に焦点が定まっていな

い。

「んん！ああっ！．．．はあ、はあう!!」

「雪ノ下．．．そろそろ．．．んぐ!!」

「はあ．．．！はあ．．．！いいわよ。出して！」

「いや、でも、お前．．．」

「いいから。お願い．．．んん!!」

雪ノ下が腰の動きを早めた。両腕を前に突き出し俺の胸で突っ張る。止めどない刺激に下半身がまるごと持つていかれてしまいそうな感覚に陥った。

「我慢しないで．．．んん．．．だ．．．して」

そう言うとき雪ノ下は唇を重ねつつ柔らかな舌を唇の隙間にねじ込んできた。

激しい下半身の運動と口内の蹂躪から生じる快感の波に為す術もなく飲み込まれていく。

「ゆひの．．．した、出る!!」

「イ．．．くう。。んん!!!あああああああああああああああああああああ
ああああ！」

限界は突然訪れ、雪ノ下の絶頂とともに、精液が間欠泉のように吹き出した。

溢れ出た白濁が雪ノ下の膣内へと注がれていく。

中出しを許した雪ノ下は恍惚とした表情で蜜壺をうねらせ砲身に残された子種の発射を促した。

くぐもつたうめき声をあげてそれに応える。

「はあ．．．はあ．．．」

長い射精を終えてようやく肉欲の鎖から開放されると、全身から力が抜けて落ちてしまった。

雪ノ下も同じく力尽きたのか胸の中にすっぽりと倒れ込む。

互いの体液でベトベトにぬらついた身体を合わせると、また下半身が固くなってしまいそうになった。

「雪ノ下．．．」

「ごめんなさい．．．でも、嬉しかった」

雪ノ下が、そつと手を握る。

「俺は．．．」

「あなたは悪くないわ。私が弱かったから．．．また、あなたに甘えてしまったの」

背徳の蜜はすすってはならない。

一度その味を知ってしまった者は二度とその味を忘れることは出来ず永遠に求めてしまうから。

第一部 第一話

Mundane Monday:ありふれた月曜日という言葉がある。

月曜日の朝はどんなときも普遍でそして週末への名残をあざ笑うかのように全ての人類に平等に押しかける。

たとえ俺たちがどれだけ年齢を重ねようとも技術の革新が進もうとも不文律の如く、全ての人類をつつがなく社会という腐れきった歯車仕掛けの装置に送り込むのだ。何百年と繰り返され、受け継がれてきた先の見えない奉仕活動に人々は心血を注ぎ思考を奪われていく。

高校生の俺であればそんな社会に一石を投じ、数多の有名政治家達が舌を巻くような感動的な演説文を記し、喝采を浴びたことだろう。実際には後世に語り継がれるべき我が渾身の力作は、当時の担任の魔の手によって日の目を浴びることなく黙殺されてしまった次第だが。今となってはそんな社会の波に抗うことにすら面倒になってしまった自分がいる。

とどのつまり、高二病と診断されたこの俺も世俗という不明瞭な人間の集合が作り出す時代の流れに逆らわないことが一番であると考えるようになった。

・・・月曜日の朝が嫌すぎて頭の働きの良いんだか悪いんだか。

「そんじゃ、まあ行ってくるわ」

気を取り直して、使い込んだ鞆を手取る。

玄関の鏡を見るとそこにはシワのない清潔なグレーのビジネススーツを着て、幼少期から全く変わらない細い目をした無気力なサラリーマンの姿がはつきりと写っていた。

ドアに手をかけようとしたその時、リビングの方から大きな足音が聞こえてくる。

「あ、行ってらっしやい八幡ー!」

気だるげな朝のマンションの一室に響く活発で明るい声が響いた。今日も俺の愛する妻は変わらぬ笑顔で俺を送り出してくれる。

由比ヶ浜結衣。

いや、比企谷結衣か、未だに慣れないな。

ともあれ彼女が俺が専業主夫の道を捨てて働かざるを得なくなつた要因である。

あれだけ働くことに嫌悪感を出し、女性に養ってもらうことを望んでいた自分が愛する女性のために仕事に向かうことになるうとはなんと皮肉な話だった。

「おう、サンキューな」

「うん」

結衣はとつくに成人したとは思えないほどのあどけなさを残しており、彼女と話す度に学生時代の初々しい会話を思い起こさせる。

「八幡、お昼はどうするの?」

「会社の食堂でテキトーに食う」

「もー!体に悪いよ!」

こんなことを言うのは夫として最低だが敢えて言わせてもらうと、お前の手料理をまともに胃の中に入れるよりかは数段マシだ。

相も変わらず結衣の料理スキルは壊滅的で進歩が見えない。それ以外の一般的な家事はそつなくこなすことが出来るのに何故食材を扱うことになるか力が出ないのか。

…誰かこの超問を解いて欲しい。

「今、すごく失礼なこと考えたでしょ？」

頬を指で突かれた。正鵠を射ている。女の勘はやはり侮れない。

「なんのことやら」

「もう！それなりに付き合い長いんだから八幡が嘘ついた時は直ぐ分かるからね？」

結衣は年甲斐もなく頬をぷくーと膨らませていた。そんなあざとい仕草も結衣がやると彼女のためにあるような仕草だと理解できる程愛らしさを感じさせる。

「八幡、キモい」

「いい加減、夫のニヤケ顔くらい許してくれませんかね」

「マジキモイじゃなくなった分だけ良いんじゃないかな？」

「結局キモイは取れないのかよ・・・」

「えへへ」

結衣が屈託のない笑顔を見せる。

俺と結衣はそれくらいの軽口はたたき合える仲になっていた。昔は、こんなやりとりを出来る相手は小町を除けば一人だけだろうと思っていたのだが。

「今日も帰りは遅いの？」

「そうだな。悪い、先に夕飯食べておいてくれ」

「うん、分かった。気をつけてね！」

そう言うと結衣は顔を近づけて唇を重ねてきた。嫌がることなく彼女の愛に応える。

結衣が背中中に手を回してきた。自分も彼女に倣って華奢な腰を両腕で包んだ。出る所はきちんと出てへこんでいる所はきちんと締まっているメリハリのついた彼女の身体はいつ抱きしめても筆舌に尽くしがたい高揚をもたらした。

高校の時から結衣のプロポーションは悪化するどころかさらに良くなっていた。

おまけに大人の色香を帯びるようになり、連れて歩けば周りの人間から嫉妬の目を向けられるのが日常になっている。当然俺の居ない

間に彼女を口説こうとする男が後を絶たないわけだが結衣はその勧誘をあつさりとかわしていた。

かつての彼女であればどんな相手であっても、最低限仲良くするという対応を取っていただろう。しかし、最近はわりと自分の感情を外に出すようになっており、きちんと断るか、露骨に俺以外目に入らないという仕草を周りに見せることで相手を牽制するようになった。

こんないい女を独占できるという優越感がないといえれば勿論嘘になる。

貪るように彼女の唇を奪い続けた。

ひとしきり彼女を堪能するともう時間だよと促すかのよう結衣が両手で体をそつと突き放した。

「行ってらっしゃい、八幡」

本心はもつと一緒に居たいであろう気持ちを押し殺し、満面の笑みで俺を送り出す。家を出る度に天然で名残惜しさを植え付けてくるのは卑怯ではないのか。

「あゝよ」

眩くように返すと扉を開けた。

振り返ることはしなかった。

妻の顔を見ると仕事に行きたくなくなるとか、新婚か。

結婚してそれなりに経つが、未だ夫婦円満が過ぎるのが我が家である。

今日もまた長い1日になりそうだ。

一週間の始まりを告げる朝の日差しが職場への道のりを眩しいくらいに明るく照らしていた。

仕事場への道のりはDoor to Doorで一時間程度だ。

駅まで自転車で向かったあとは快速に乗って東京駅へ向かう。中央口から出て、整頓された道を10分も歩けば地上40階建てほどの高層ビルが見えてくる。そこが俺の職場なのだ。

：おいこら、そこ。嘘だなんて顔をするんじゃないや。八幡泣いちゃうよ？

ビルの自動ドアを抜けるとだだっ広い空間に出迎えられた。

全体ガラス張りの開放的な入り口は警備という点で見れば手薄に思える。

勿論、センサーやら監視カメラといった現代的な警備装置は配備されているわけだが。

一階の受付のOL達の無機質な『おはようございます』は毎朝のことでだがどう返して良いものなのか分からない。

軽く会釈だけを返し、大広間の奥に目をやった。

ちやぶ台よりも少しだけ高いガラスの机に、座っている人を見たことがないソファが4つ囲むように鎮座している。こんな無駄に広い場所では座ったとしても正直落ち着かないだろ……。空間を持って余さないためのインテリア的役割として設置されているだけ。家具たちも不本意な役回りだなと下らないことを考えつつエレベーターへと向かった。

一階のゲートで社員証をかざすとSNSのメッセージ受信音のような簡素な効果音が吐き出された。俺にとってはプライベートから仕事モードのスイッチに切り替わる大事な音でもある。

上へ向かうボタンを押してエレベーターが降りてくる間、他の人間が来ないことを必死に願った。高層ビルのくせにエレベーターがそこまで広くないため、知らない誰かと一緒に乗ると息苦しさを感じてしまう。その上、話しかけられでもしたら地獄だ。

来るなよ、来るなよ。フリじやないからな。

扉のベルが到着を告げる。幸いにも自分が乗り込んだときには一人だった。安堵の息を漏らしつつ37階のボタンを押すと、まもなく扉が閉まった。

重厚な音をたてることもなく静かに機体は上昇をする。かなりの

速度で動いているはずなのにこれほどの静音を維持するとは感服ものだ。

ガラス張りの機体の中、外に目をやると人々の往来が遠くなっているのが見えた。東京駅のホームを見ると豆粒のような大きさになった社会人達が忙しなく動き回っているのが確認できた。

見ろ、人がゴミのようだ。タワーとかホテルの上階に行ったら皆が絶対に思うことランキング三位くらい。一位と二位は知らん。

そんなことを考えているうちに目的の37階に到着した。

扉が開くと廊下をまっすぐ道なりに歩いて入り口へと向かう。

自分が勤める会社の従業員の数は500人ほどで事業内容としては経営コンサルタントや監査がメインだ。俺の配属先はコンサルティングである。数学が苦手な俺が監査法人は無理だ。

不本意ではあるが、学生時代の奉仕部の活動の経験によって問題解決能力、ボトルネックの把握や解消は他と比べると自分の長所と言えるものになっていた。今ではそれなりに、会社のエースの一人としてこの会社の稼ぎ頭になりつつある。コンサルテイングも無論、数学的分野は必要とされるが、自分の場合、根本的な経営方針や人事に対する問題解決を基軸としているので俺でも充分務めることが出来た。

入り口の自動ドアをくぐると、会社の受付嬢がこちらを見てにっこりと微笑んだ。

「おはようございます、比企谷さん」

「お、おはようございませう」

今日はこの人なのか。

「ふふ。まだ慣れてはくれないんですか？」

「からかわれるのに耐性がない人なんて中々居ないんじゃないですかね？」

女性は「ごめんなさい。そんなつもりはないですよ」と言っているが、くすくすと笑っていた。

その目は明らかに悪戯心を含んでいる。

会社の受付嬢は複数おり、時間帯や曜日によって異なるのだがその

中でも玉木さんが担当の時は勤務開始前から試練だった。

彼女は俺が女性が苦手なのを知ってかやたらと艶めかしい声で挨拶をしてくる。露骨には言わないが、他の男性社員には若干の淡白さを織り交ぜているのに。

俺が非難の目で玉木さんに目をやると真っ直ぐに見つめ返してきた。

普通なら目を逸らすはずなのに。結衣もそうなのだが見つめ返してくる女性は俺にとっては天敵だ。

「っ・・・では失礼します」

自分が仕掛けたはずなのに目のやり場に困り、そそくさと先に退散する羽目になってしまう。名状しがたい敗北感が両肩に重くのしかかった。

「またね、比企谷くん」

背後からの玉木さんのダメ押しの一発に赤面しながらもオフィスの中へと逃げ込むように足を運んだ。

第二話

オフィスに入ると既に何人かは席に着いて仕事の準備を始めていた。

乱雑に置かれた資料を整理する者。

これからやってくるであろうファイルの山に備え、ゆつたりとコーヒーを飲んでいる者。

昨日：いや、今日寝るのが遅かったのか、惰眠を貪る者など過ごし方は多種多様だ。

従業員500人の内、コンサル部門に所属している人間は30人ほどである。

自身の席に着くと鞆から今日使う資料の入ったクリアファイルや間食用の菓子を取り出した。あとはマツカン。まこと不思議なことに、このビルの自動販売機にはマツカンが置かれていない。何故あのベストセラー商品が導入されていないのだろうか。思い切つてAm●zonで中国人観光客並に箱で爆買いしたらものすごい剣幕で結衣に怒られた事は記憶に新しい。しばらく夢に出てきたし。

席についてうんと一つ伸びをした。これからやってくる長い仕事に備える。

今日も帰りが遅くなるだろう。繁忙期ではないとはいえ、深夜近くに食い込みそうな量の仕事が待ち構えていることは昨日の時点で上司から連絡を受けていた。

残業代がきちんと出る辺り総武高校時代のボランティア活動よりはマシなのかもしれない。アレはアレで嫌なことはたくさんあるが…。

結局のところやっていることは、どこぞの知らない誰かの幸せと時間のために奉仕活動を行う。自分の本質は変わらないなと乾いた笑いがこぼれ出た。

手持ち無沙汰になりズボンのポケットに手を入れて、椅子にもたれかかっていると隣の机にドスンと大きな鞆が置かれた。

「よ、比企谷」

見上げると芦間が快活な顔でこちらを見下ろしていた。

「相変わらずその甘ったるいコーヒーなのな」

「うるせー。逆に聞きたい、マツカンの良さが何故わからない？」

「そんなこと言われましても…私甘いのが苦手ですしおすし。なんだあれか？もしかして、俺は他のやつとは一味違うってやつか？」

芦間はケタケタと笑いながら鞆をあさっている。

たまにしているなあ。一匹狼を誇るやつ。ぼっち最高ってか。

「マイノリティであることを過大に誇っている面倒くさい連中と一緒にしないでくれ」

「ん？それは特定の誰かさんのことを言っている？」

「不特定の大衆を揶揄しただけだ。孤高を誇るなんてのは今時もう寒い」

「これはこれは。どっかの国の野党みたいなブーメラン発言ありがとうございます」

「ほつとけ。ぼつちなめんなよ？固有スキル満載だからな。異世界物のラノベだったら人気者だ」

「奥さん居るやつがぼっち語ったらもう嫌味だろ…」

芦間がやれやれと溜息をつく。

俺と同じ時期に入社した芦間は正直苦手な部類の人間だった。どんなやつかと聞かれると、例えるなら葉山と海老名さんを足して2で割ったような人間だ。人当たりはとても良く、彼を嫌いな人間を見たことがない。ただ親しいものからの評価は軒並み変態の一言。それだと海老名さんが変態みたいない方に聞こえるかもしれないが決してそういうことではない、うん。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

芦間はテキパキと自分の机の上にパソコンや必需品を並べていった。俺と同じく、物を置く positioning を決めており、それはまるで自分の領域を主張しているかのようにも見える。

「比企谷、今日から新しい取引先だろ？メールや昨日配られた資料にはもう目を通したのか？」

「お前は俺のお目付け役か。まあ昨日受け取ったものに関しては昨日

の時点で見てあるぞ。お前は？」

「殊勝だねえ。俺は引き続き取引先の相談相手だわ。私、コンサル業っていうのは恋愛相談みたいなものかと思っていましたけど、そうでもないというのを最近、身に沁みて理解してきました。あいつら無茶苦茶無理言ってくるぞ」

席に着いた芦間が毒づきながら器用にペン回しをしている。そういえば昔ようつべにペン回しの動画を上げていたとか言ってたっけか。興味がまったく無かったのでそんな自慢話を聞かされた当時、華麗に右から左に受け流したのでそこら辺の記憶が定かではない。

こいつの見た目は率直に言う絵に描いたような好青年である。高い身長に整った顔、ワックスでキメた爽やかな髪型。スーツ姿もモデルのそれと言っても差し支えない風貌だった。それ故に当然のごとく社内での女性人気は圧倒的一位を記録している（※ハチマン調べ）。

言っておくが褒めていない。目の前にある事象を淡々と説明しただけでコイツに対しては何一つ感情を抱いていない。

こいつのことなんかどーでもいいんだからね！

…流石に我ながら吐き気がしてきたな。

とりあえず、リア充爆発しろ。

もうコレも俺が言ったら嫌味か。

「ふっ・・・」

「なんかキモいぞ比企谷。どうせまた、妙ちきりんなこと考えてんだろ」

「っ…。ほっといってくれ」

露骨な苛立ちをぶつけてみるも、芦間はその飄々とした表情を全く崩さなかった。

マツカンのプルトップに手をかけて勢い良く上に引き上げると心地よい開封音が響き渡った。うん、美味しい。マツカン最高。

ちびちびと飲みながら、机の上のクリアファイルを手にとって今日

の俺の担当企業の資料を見る。

— EIGHT KNOWS —

聞いたこともない会社だ。記載してある会社概要を読むと事業内容が資料調達、会計補佐、探偵業等かなり幅広く展開しているようだが、いまいち企業理念が見えてこない。

時間もあつたのでホームページを検索して開いてみた。それなりに整ったインターフェースと共に、社員であろう男女達が仕事をしている風景の写真がスライドショーのように代わる代わる映し出された。こんなこと言つては顰蹙《ひんしゆく》を買うかもしれないが上場企業でありがちな美男美女で綺麗に固めるといふレイアウト一辺倒というわけではなく、日常的なデスクワークの写真も織り混ぜていて好感が持てる。

それ以外の企業説明等のレイアウトに関しては特に変わった所は無く、総評としてはそつなくまとまったウェブサイトという印象だ。企業理念の項目をクリックしてみる。

「お客様の改革を共に促す」

改革を促すねえ…。

何処かで聞いたことあるようなワードだ。

『奉仕部は生徒たちの自己改革を促す』

ふと懐かしい面々の顔が浮かび上がった。今となつては高校時代の知人とそうそう会うことも無くなつていたし、思い出すことすらも少なくなつていた。戸塚の事は毎日想っているけど。

マツカンをズルズルとすすりながらぼんやりしていると頭の上にポンと軽い衝撃がのしかかった。

「おはよう比企谷君。今日はいつにもまして辛気臭さが過ぎるぞ？」
振り返るとオフィススーツを着た、男ばかりの空間に似つかわしく

ない妖艶さを帯びた女性が立っている。

「おはようございます、智佐吹さん。辛気臭いのはいつものことでしょうか？ 大体、月曜日の朝に元気が良い人なんてこの世に居たら教えてほしいものですね。後、柄にもない元気な上司の振る舞いというも全然似合っていないですよ」

「あらま、辛辣。だってもうね、これくらい自分に嘘つかないとやってらんないのよ。取引先のおっさんにセクハラまがいのことされて、こちららストレスマツハよ。なくに『個人的に、色々相談に乗って欲しいな』っての。夜の遊びしこたまやってる人間の悩みつたら、新しい女のストックの悩みが相場よ相場」

マシンガントークを終えて、智佐吹さんは赤茶色のウェーブがかかった長い髪をかき上げてふうと一つ溜息をついた。月曜日の朝からアクセル全開だなこの人。

あの人、自分のデスクに向いながら「そんなしょーもない話を日曜の朝からしてくれてからに…」と未だにぶつくさ言っているぞ…。

彼女はこの会社の男性社員の人気女性社員にして俺の直属の上司でもある。この人のパートナーになれるどうかは新入社員になった男性社員の最初の明暗を分けるイベントの一つとなっていた。

現在は俺と芦間が彼女の下につく事になっているわけだが同期は勿論の事、他の男性上司まで敵に回すことになってしまうという特典がついてきて相当肩身の狭い思いをしている。

芦間や智佐吹さんという眉目秀麗なコンビに混ざっている目の腐った新人：自分で目の腐ったとか言うの悲しくなるわ。

とどのつまり、こちらら平穩に暮らしたかったのだが、入社早々から現在に至るまで妬み嫉みにさらされる会社生活なのである。

横目で智佐吹さんを見ると既に喫煙室で太めのタバコをスパスパと豪快に吸っていた。ポケットに手をつ込み、壁を背に持たれかけながら煙を吐く。

どこかの少年漫画が大好きな女教師の姿がトラウマのように浮かび上がった。見た目や性格も結構似ているから智佐吹さんに会う度に若干の身震いがする。もうPTSDみたいになってるじゃねーか

俺。

余談だが、件の女教師は未だ独り身である。本当に早く誰か貰ってあげて、もう俺が貰うこと出来ないから！それどころか未だに彼女から一緒にラーメン行こうとか週一でLINE来るんですけど（泣）怖くて未読無視してるわ。

無論、未読無視でも『なんで読んでいるのに返信してくれないの?』とかは来るが、既読無視は言い訳が出来ない。未読無視なら忙しくて本当に読んでいない可能性を残してある程度は寿命を伸ばすことが出来る。

でも多分一週間後くらいには朝、家の前に左ハンドルのスポーツカーが止まってそうではあるな…。

「あ、そうだ。比企谷、ちよつといいか?」

芦間が先程まで回していたペンで俺の肩を小突いた。

「なんだ?」

首だけ傾けて芦間を見る。

「いや、あのさ。今日、アレ頼めるかな?」

またか。この時だけ拜むように頼むよなこいつ…。商談の時より平身低頭。

「おう。まあいいぞ」

「ありがとうございますございます兄貴!今度マツカン奢らせていただきやす!

調子良いな。前言撤回、芦間は葉山と海老名さんと戸部を足して3で割ったようなやつだわ。

あと、意外にも義理堅いのかこいつはマツカンを必ず次の日にちゃんと買ってくる。

「本当にありがとな比企谷」

「急に真面目になるなよ、調子狂うわ」

「何を言うのだ。俺はオールウェイズ真面目やぞ!（。D。）」

「へいへい」

その後もだらだらと他愛もない会話を続けていると、智佐吹さんに頭を小突かれ実務に戻ることになった。

午前中は来客も無いので情報の整理や午後の打ち合わせの準備をした。何枚もの資料と取引先の情報を頭に叩き込んだ頃には気づけば13時になっていた。

背もたれに背中を預けながら大きく身体を伸ばすとバキバキと体の関節から悲鳴が上がった。20代とはいえ流石に多少なりとも年齢を感じるようになったわけだ。

思えば自分もあの時の平塚先生と同じくらいの歳になっている。一応、まだそれよりは歳下だけど。

「腹減ってきたな…」

「お、比企谷飯行くか？」

芦間が年甲斐もなく、そわそわしていた。こいつ、めちやくちや顔に出るタイプだな。

とは言いつつも、キリが良かったので休憩を取ることにしよう。

出入口のタイムカードを切って廊下に出ると、既に昼食を終えた他の社員と何人かすれ違った。

この様子なら混み合い時は避けられただろうか。

すれ違う女性社員たちは芦間に羨望の眼差しを送り、俺に対しては様子をうかがいながら、コソコソと会話をしている。いかにも俺が邪魔な存在であると言わんばかりに煙たがっている様子であった。最早恒例行事と言ってもいい。

ため息を漏らしつつ階段を登り、上階の食堂に向かった。

隣りにいる芦間は横目で俺をじっと見ている。何やら言いたげな表情だったが、絡んだとしても有耶無耶にされるだけだろう。

食堂に着く頃には大学の学食のような喧騒が聞こえてきた。

この時間でも人が多いことこの上ない。

「さてと…あいつを探すか」

「そだねー」

と言ってもすぐ見つかるけどな。

芦間の足が早くなる。

俺も遅れないようにほんの少しだけ早く歩いたが、五秒と持たな
かった。

うん、お腹すいてるからそんなに機敏には動けない。

第三話

遠足前の子供のような顔をした芦間を引き連れて社員食堂に入ると、案の定、多くの社員たちで賑わっていた。

食堂はよくある食券式のものでメニューはと言うと、日替わり定食は勿論、中華や、和食、メキシカン、フランス料理やイタリアンまで幅広く用意されている。味も悪くないことから下手に外食するよりは食堂で食べたほうが美味しい。しかもそれだけのバリユエーションをたった4人の調理師だけでこなしているというのが驚きだ。その要領の良さを呆然と眺めているのが俺の昼休みの楽しみの一つでもある。決して食堂の美人給仕に目を奪われているわけではない。いいね？

早速あたりを見渡すと一人の女性をあからさまではないにしても確実に囲むように人だかりができてるのが確認できた。集團の構成を見ると男性社員が大半を占めている。

いつもの自分であれば当然ああいった、地雷の満漢全席のような危険地帯は避けるのが定石だ。

しかし、俺達のお目当てはあの群衆の中心に居るに違いないのでそうもいかない。

その中のある一人の社員がこちらを見た瞬間に敵意むき出しのオーラを爆発させた。スーパーサ●ヤ人になる時の演出が想像で補完出来る程にはバリンバリンの全開である。

他の男性社員たちも続いて一斉にこちらを睨む。ジョイント型の念能力であれば俺達はまさしくオーラで仲良く即死なこと請負だ。

「すごい敵意っつーか、殺意が向けられているぞ芦間」

「いや、俺じゃなくて主にお前に対してじゃねーか？」

ものぐさに芦間が呟く。

「そうか？俺はイケメンでデキる男の芦間クンに対する嫉妬の目だと思いがね？」

「お前、皮肉を言う時だけ褒め言葉使うのな。普段から言ってくれてもいいのよ八幡クン？☆」

「何言ってるんだ？この世に存在する褒め言葉の99.9%はお世辞だぞ」

「夢の無いこと言うなよ…。じゃああの時たくさん甘い台詞を囁いてくれた新宿のあの子の言葉は嘘だったのか…」

芦間がそうぼやくと周りの女性がこぞって距離を取っていた。午後には芦間が夜の歓楽街に通いつめていているなどと噂が立つのだろう。その前に俺はこいつと一緒に行っていないことを釘を差しておかねば。

やれやれと肩をすくめていると、

「あー！」

人だかりの中心にいた人物が俺の姿を認めると駆け寄ってきた。

「せくんぱーい!!」

そのまま腕に絡みつこうとしてきたのでサラリとかわして彼女を見る。

「おう一色」

一色いろは。俺達が探していた人物だ。

「むう？なんで避けるんですか？」

「タツクルは避けるものだろ、常識だ」

「うわ、女の子からのアタックをスポーツのそれと一緒にするなんて本当、先輩は相変わらず無神経ですね。もう少し女性を気遣える人にならないと駄目ですよっ」

「ほっとけ、これでも妻帯者だ。どうか他のやつにやってくれ。俺がそれに応えたら浮気になるだろーが…」

「ん、その何が悪いんですか？」

ワーオ。この子マジだ。

「おい、俺を社会的に殺す気か？恨みを買うような事はしていないはずだぞ」

「え…先輩忘れちゃったんですか…？」

突然一色が信じられないと言った表情でこちらを見た。そして、先程よりも倍近い声の大ききさで

「私のことをあんなにも弄んだくせに、忘れたなんて先輩は最低です！」

「ちよ！おま！！」

予想通り、食堂内の人間が一斉にこちらを非難の目で見つめている。男女問わず軽蔑の視線が四方から突き刺さる。まさしく針のむしろ、四面楚歌とはこのことである。

隣では芦間が腹を抱えて笑っていた。

「おい芦間。助けろ」

「くくく…。夫婦漫才乙」

「ほくんと、先輩つてば罪深い男ですよね〜☒ こうなったら責任取って私を貰うしかないですよね〜?」

「もしかして口説いてますか? すいません、私、妻がいるので無理です。誠に申し訳ございませんが他をあたってください。ごめんない」

「はあ? 今のもしかして私の真似ですか? 全然似てないので二度としないでください。あと、返事は『はい! よろしくお願いします!』ですよ、先輩☒」

「いや、だから俺、結衣がいるから」

「もお。中々折れないですね、先輩。いい加減私のこと貰ってくださいよ」

「この国は一夫一妻制だ」

「じゃあ一夫多妻制なら貰ってくれるんですか?」

「いや、そういうことではない」

「じゃあ俺がいろはちゃんを貰うよ☆」

頭を抱えていると、芦間が我こそは! と立候補している。因みに日常の光景だ。

「もしかして口説いてますか? すいません、今は先輩にしか興味がありません、誠に申し訳ございませんが他をあたってください。ごめん

なさい」

「キターーーー！今日で連続奪543三振！」

芦間が悲恋と陽気さが混ざった独特の声と共に、右腕を高々に突き上げた。

両腕で自分の肩を抱くようにして恍惚とした表情を見せている。気持ち悪いやつだと思つた矢先、気づけばいつものように整つたビジネス顔に戻つて日替わり定食をあっという間に買つていた。

俺と一色のことを夫婦とからかつたかと思いきや、毎度のように一色との食事をセツティングしてもらうようにお願いしてきたりと、本当によく分からない奴。芦間に対する印象はそんな感じだった。

というか高校の時から付き合いのあるやつが居なくなつてきたとか言つていたが、よくよく考えてみれば一人忘れていたな。一色だけはこういうわけか大学から就職先までなぞるように後をついてきている。

こうして、からかわれることは日常茶飯事ではあるのだが、一つ高校時代から変わったことと言えばご覧の通りで、一色が俺に対する好意を全く隠さなくなったことだった。

実は高校の卒業式に何人かの女子生徒から告白されていた。勿論、そのうちの一人が結衣なのだが、それ以外にも全く接点のない後輩の女子生徒からも想いを打ち明けられたことはまさに青天の霹靂であつた。自分の悪評は後輩たちにも知れ渡つていたはずだからな。

一色には卒業式の一週間ほど前に告白されていたのだがその時には断つていた。いつもの生徒会の手伝いと聞かされて呼び出されたから、当時は余計に驚いたのを覚えている。

その後は結衣と付き合うことになり、大学でもずっと一緒だった。

ところが、一年後には何かと一色が結衣と二人きりの時に混ざつてきたり、俺が一人でいる時を狙つて話しかけてくるようになった。俺と結衣が恋人関係になつたことを知らない彼女ではない。

『アレで諦めたつもりないですから』

それが大学のキャンパスで再会した一色の一言目だった。

葉山にフラれたときもそんなことを言っていたのを思い出した。

勿論、所構わずというわけではなく結衣の手前ではきちんと彼女のことを立てており、一歩引いた立ち位置で俺たち夫婦を見守っている。

こちらから彼女の行動にとやかく言うのも憚られるので彼女の好きにさせていた。

というのも大学時代、有耶無耶にしているのも嫌だったのではっきりと一色に言ったほうが良いと思いついてその旨を結衣に話したことがあった。

しかし…

『私は大丈夫だから。いろはちゃんのことでも大事にしてあげて』

と言われ、これ以上追求できなくなってしまっていた。

どうやら、大学時代に結衣と一色の間で話があったらしいがその内容は未だに俺に知らされていない。詳細を聞きたい衝動に何度も駆られたのだが、あの時の結衣の表情がそれを止めさせた。

しつこく聞いたとしても、結衣は墓場まで持っていく覚悟だと言わんばかりの顔つきだった。

まあ、そもそも論ではあるが、結衣に話す前に一色に直接言わない俺の優柔不断さもいけないのは否めない。

そうしてズルズルと引き伸ばされて現在に至るといのが事の顛末である。

券売機に小銭を入れて日替わり定食Bのボタンを押すとぺらぺらとした食券が吐き出された。

食券を手にとって列の最後尾に並ぶとその後ろを忠犬のごとく一

色がベツタリと張り付いた。嫉妬と憎悪に満ちた空気の中で自分の食事が用意されるのを待たざるを得ないのは毎日のことだが慣れるものでもない。

気づけば後ろで芦間と一色が仕事の愚痴を堂々と話している。ここには上司もいるのにも関わらずなんとも豪胆なやつらだなホント。会話している二人の姿を見るとやはり眉目秀麗な二人なことから非常に絵になる。ドラマのワンシーンを切り取ったかのような華やかさがそこにあった。

こうして見るとやはり芦間は一色のことが好きなのだろう。

一色は芦間との会話をしながらもこちらを気にかけている。その度に芦間の表情がわずかながらに曇るのがその証拠だった。

おそらく他の人間ではわからないであろう一瞬の余韻を俺は見逃さなかった。

知らないほうが、気づかないほうがどれだけ楽なことだろうか。

芦間はその視線に気づいたのか、俺を見ると微笑を浮かべた。

その気遣いが居心地を悪くさせた。俺が気まづくなるのを承知でやっているのだろうか、余計にたちが悪い。

一色は芦間の本心や俺の心境にも察しがついているようだった。

芦間と話しつつ時折、俺の袖をそつと掴む。

まったく。早く定食を食わせてほしい。

食事が来るまでのこの時間が正直苦手だった。

ようやく自分の日替わり定食が用意されると手にとって、足早に食堂のカウンター席に向かう。

人も少なく、トイレや出入り口からも遠いこの場所は高校時代のベストプレイスよろしく心安らぐ場所である。

飢えた農民のごとく食事にありつく。間もなく次いで、一色、芦間と並んで座った。だいたい席順はこの並びだ。因みに2 x 2のテーブル席に座った時は大抵は俺と一色、対面に芦間が座る。

「そういえば先輩。今日から新しい企業の担当になるんですよね？」

一色がエビフライを頬張りながら横目でこちらを見る。

なんで知ってるんだ。

情報提供者をじろりと睨むと件の人物はてへぺろと言わんばかりに舌を出してアピールしてきたがにべもなく無視した。一色の真似だろうが全く似ていない。芦間は鼻白むと味噌汁を行儀悪くすすり始めた。

子供かこいつは…。取り合っても仕方がないので一色との会話に戻る。

「まあそうだな。初めて聞く会社の名前だったわ」

「そーなんですよね。私も初耳の会社でした」

「おい、なんで会社名まで知ってるんだ…」

芦間は素知らぬ顔で器用に漬物を次々と口へ運んでいる。こいつに話したら情報ダダ漏れじゃねーか。

ん？いや、俺こいつに話してないよな？

勝手に資料見やがったのか…。

今度から貴重品だけでなく資料までトイレに持っていかないといけないのか俺は。思わず頭を抱えてしまった。

「気にはすることはない！そこまで深くは読んでいない！」

芦間がビシッと箸を立てて自慢げに言う。

勝手にモノログに侵入してくるなし…。

「それで今回、先方から来る担当の方の名前とかはチェックしたんですか？」

一色がスイッチの切替を促すように質問をした。間の取り方が絶妙である。

「いや、それが社長らしき人間の名前はあったんだが、他に名前が書いてなかった。だからこっちは鬼が出るか蛇が出て感で感じて前情報かぼぼ無いし、そもそも社長が来るのかすらも分かってない」

「それ、ちよつとどころか、かなり怪しくくないですか？」

一色の言う通りだった。

勿論昨日、智佐吹さんにその事を訪ねたのだが、それとなくはぐら

かされてしまった。

他にも渡された資料に基本的な企業情報が少なかった事もあって、今朝ウェブサイトの方を検索した経緯がある。代表取締役の男は若い見た目の40代の男の者でとくに不思議な所は見当たらなかった。会社の所在地が幾度となく変更されている等の怪しさがあるわけでもない。ネットの評判を見ると匿名チャットでアンチスレはあれこそ、評価は総合的に見れば高めであった。他にも色々調べてみたものの、きな臭さが漂う点は渡された資料以外には別段見受けられなかった。

「じゃあ先輩も今日誰が来るのか分かってないってわけですよね？ まあ午後、私入り口の受付担当やるんで先輩よりも先にどんな人か確認できちゃいますね」

「まあそうなるな」

「じゃあ、お先に先輩のお客さん見よつと☒」

一色は箸を目元に持っていていつてVサインを作るとウインクした。高校の時からずつと使っているポーズだ。行儀が悪いが、若干ドキツとしてしまったので注意できない。

「はいはい、あざと可愛い」

ぶつきらぼうにそれだけ告げるとお椀に少しだけ残っていた白米を一気に平らげた。

一気に食べすぎたせいで、喉に詰まった。水で流し込んで整える。ちらりと芦間を見ると一色とおかずの交換をしていた。一色から貰ったエビフライを美味しそうに食べている。

時計を見るともう休憩時間が終わりに近づいていた。

先に立ち上がり、返却口の方に向かった。運良く人が少なかったため直ぐに返すことが出来た。

トレーを置くとカウンター越しに割烹着を着た若い女性の控えめな「ありがとうございます」が聞こえた。

ちらと見ると自分とほとんど変わらない年齢だろうか。一色や智佐吹さんのように見た目が非常に華やかな女性が多く目に入る職場で、彼女の存在が逆に際立っていた。

なんというか今日は朝っぱらから女性に目を奪われ過ぎな気がする。

「先輩、今ゆかさんに見とれてましたよね？」

「いつの間にか一色が横にいる。」

「あの人、ゆかさんっていうのか・・・っついてえ！」

「思いっきり一色に脇腹をつねられた。」

「結衣さんに言いつけますよ？私、職場で他の女性に浮ついたことしてないか監視するように頼まれているので」

「おい、聞いてないぞそれは。比企谷先生の初耳学エ・・・」

思い返せば、それで玉木さんや智佐吹さんにデレデレした日とかに家に帰ると結衣の機嫌が悪かったのか。ちなみに玉木さんの脚を凝視した日には晩御飯が白飯となめ茸だけにされた事がある。密告者はこいつだったわけだ。

「それで、『他の女性』の対象に自分は含まれてないのか？」

「そうですね☒ 私は特別です！」

「自分で言うんかい。」

「そうだぞ、比企谷。俺もお前のカミさんから頼まれてるからな」

「しれっと芦間も合流していた。」

「お前は俺の嫁に会ったことないだろ・・・」

「バレたか、じゃあ紹介してくれないか？」

「断る」

「んじゃあ妹さんは？」

「絶対断る」

「なんで妹さんの時の方が語気が強いんだよ・・・」

馬鹿野郎。小町をお前のような馬の骨の視界に入れることすら烏漕がましいというものだ。たとえ両親が許したとしても俺が許さん。

「先輩は重度のシスコンですからね」

「薄々、これまでの会話から感じてはいたけどどこまでとは・・・」

「そりゃあもう、医者が匙投げるレベルですから、手遅れです」

「妹さんもこんな兄を持って苦労されただろうに。とても出来た方なんでしょうな」

「小町ちゃんとは先輩とは比べ物にならないくらい人としての器が違いますよ。本当に兄弟なのか疑わしいです。私も会う度に何回も本人に確認しました。『残念ながら血の繋がった兄妹です』って言質取れましたよ」

本人の目の前で堂々と失礼な会話をするな……。あと、最後のはまた初耳だ（泣）

とぼとぼと歩きながら食堂の外へと向かった。小町に残念ながらとか思われていたなんて……。しばらく立ち直れなさそう……。

「それじゃあ先輩☒ また後で会いましょうね！ 芦間さん、先輩の面倒っちゃーんと見てあげてくださいいね！」

「了解であります！ じゃあねーいろいろはちやくん！」

一色はひらひらと手を降って受付部の控室へと消えていった。芦間はというと娘を見送る父親のような目で一色が視界から消えるまで目で追いつけている。

俺と二人になると芦間は別人になったかのように顔を切り替えた。

「んじゃあ、行くか。午後から初対面の人と話すんだろ？ 腹壊すんじゃないぞ比企谷。あとサンキューな」

ニヤニヤと意地悪そうに背中を叩かれる。人見知りは一生涯モノだから仕方がないだろ。

「お気遣いどうも。あと、それは気にしなくても良い」

ぶつきらぼうにポケットに手を突っ込み、そそくさとオフィスの机へ戻った。

時計を見ると一時前であった。

一時半には先方がやってくる。気を引き締めると本日二本目のマツカンを開封した。朝とは違い一気に飲み干すと資料の山に埋もれた、今日使うクリアファイルの発掘作業に取り掛かった。

続く

第三．五話

Side Iroha

——先輩との昼食を終えて、私は持ち場に戻ってきていた。会社入り口のカウンター前でポツンと座っており、隣ではOL仲間の玉木さんが首を回しながら、リラックスしている。

「いろはちゃん、今日も比企谷くんと食べてきたの？」

ふと気がつくとき、玉木さんがペットボトルのキャップをくるくると回しながらこちらを見ている。彼女が毎日飲んでいるレモン炭酸水だ。プシューという炭酸の抜ける独特の音と共に柑橘系の爽やかな香りが鼻孔をくすぐった。

「はい☑ 今日先輩を思いっきりからかってきました！」

猫をかぶることなくあっけらかんと答えた。

「そう」

にっこりと微笑んで短く返事を返すと炭酸水をごくごく飲み始めた。

私の目から見ても玉木さんはあの人たちに引けをとらないほど超美人だ。ありていに言うと、水を飲む今の姿が広告にそのまま使えるくらいに。

普通であれば私ですら、嫉妬してしまいそうな容姿だけど、玉木さんは私にとって素顔で接することの出来る数少ないOL仲間だった。美人すぎるが故に意地の悪さが全くない・・・というより直球すぎる人だから逆に清々しさすらおぼえる。

「比企谷君、凄く動揺していたんじゃない？」

炭酸水を飲み終えた玉木さんが探りを入れるように聞いてきた。

「全然です。そろそろアプローチの仕方変えた方が良くないかなあと思ってんですけど・・・」

「うーん、どうだろう？でも彼、遠回しに言うとき絶対、解釈をわざと間違えて逃げ道に入るわよ」

その通りだ。だから婉曲的に言うのは全く効果がない。

「玉木さん人のこと、よく見てますよね」

「そう？見たい人のことを見ているだけだよ。未だに私に毎朝、挨拶してくる背の高い社員さんの名前知らなかったり、昨日食事に誘ってきた男性社員さんの顔も思い出せないし…」

〇L失格ね、と、ぼやきながら玉木さんは肩をほぐしている。大きな胸のせいで肩がこるのだろう。結衣さんといい勝負が出来そう。うらやまs・・・大きくて大変そうだ。

実のところ、ゴシップ好きな〇L仲間の子達よりも玉木さんの方が情報を持っていることが多い。

控室でよく噂話が大好きな女の子達が他の部署の社員の恋愛ネタなどで盛り上がっているのをよく見るけど、聴く話聴く話全てが一ヶ月以上も前に玉木さんから教えてもらった話だった。本当に何なんだこの人。

私は心の中で玉木さんの事を畏敬の念を込め、歩く文春砲と名付けた。

そんなこと言っておきながらも週間玉木の購読者なのだから偉そうな事は言えないんだけども…。

時計を見ると、針は1時25分を指していた。まもなく先輩の担当企業がやってくる時刻になろうとしている。私が別に取り合うわけでもないのに、どうしてか胸騒ぎが止まらない。

「大丈夫？いろはちゃん。また比企谷くんの事考えてたでしょ？」

「え？どうして分かったんですか？」

「いろはちゃん、直ぐ顔に出るから」

仲の良い人にはいつも言われる言葉だ。自分では上手く隠しているつもりなのに。

「先輩よりは顔に出てないとは思いますが」

ちよつとムツとして語気が強くなってしまう。

「また比企谷くんの話。本当に好きなのね、彼のことか」

くすくすと玉木さんに笑われてしまった。ダメだ、お手玉さされている…。

何と言われようと、自分で制御が効かないのだからしょうがない。つて思っただけけど、この人も先輩の話になるとそれまでと明らかに雰囲気が違う気がする…。

「もしかして玉木さん、先輩のこと狙ってますか？」

想定外の質問だったのか、玉木さんは泡を食ったような顔になった。

一矢報居ることが出来たような気持ちになり、少しだけ気持ちが晴れた。流石に、我ながら自分の器の小ささに呆れるけども…。もうこの歳になると、そういう自分も良さとして捉えるようにしていた。

さて、玉木さんの反応はというと…、

「ん？まあ、気にはなっているかな？でも、彼、奥さん居るのよね。どうやって誰にもバレずに落とすか…」

顎に手をあて小さく溜息をもらす。やっぱりこの人先輩の事好きだよなあ…。

私が言えたことでもないけれど、玉木さんもかなり露骨に人によって態度を変える人だ。その中でも先輩に対しては特に甘い声を出している。

それなのに同性からもほとんど嫌われていないのがこの人のすごいところだと思う。

奥歯を噛み締めなくなるのを必死にこらえた。

オフィスの電話がなっている。内線でビルの一階からだ。

おそらく件の客が来たという連絡。

「お電話ありがとうございます。……」

玉木さんが受話器を取った。もう少し、遅かったら私が思わず取るところだったので助かった。

私は受験の合格発表をまっているかのような緊張の面持ちで電話の内容に耳を傾けた。

ここからだとよく聴こえないなあ、……。

「はい、承知いたしました」

間もなくして、玉木さんは機械的な返事と共に内線を切った。その

後、盗み聞きは駄目よと目で注意される。

「お客さん、もう着いたみたい」

玉木さんが私の心情を察したのか、状況を説明してくれた。なんだろう、別に私が応対するわけでもないのになぜかホツとしている。

平和な時間も束の間、階数表示器が1を示すと私の心臓の鼓動がいやに早くなつていくのを感じた。

頭の中で先方の客が乗り込む姿を想像する。

37階のボタンを押して、扉を締める。

静かにエレベーターは動き出し、上昇を始める。。。

相手は男だろうか、女だろうか。女性なら一応用心しないと…。

女性だったら………？

………嫌だ。

………凄く嫌だ。

絶対に嫌だ。

先輩の周りにこれ以上女性が増えるのは嫌だ。

結衣先輩とこのことを認めるだけでもどれだけ辛かったか。

毎晩泣いた。

毎晩後悔した。

それなのに私は先輩の後ろをついていくことをやめなかった。

先輩が私の中からいなくなることが耐えられなかった。もし、進路を変えてしまったら自分が自分でなくなってしまうような喪失感に私は耐えられない。

だから大学も同じ場所にした。

サークルも。授業も。

他の男に言い寄られたことは何度もあった。同じサークルや授業を受けていた人だと自己紹介をされて食事や飲み会にいつも誘われた。そんな下らない、あまりにも単調すぎる勧誘に辟易した。

その時には既に先輩以外の男性が目に入らなくなっていたのかもしれない。

しばらくすると私は取り合うのもやめてそんな男たちを無視するようになっていた。

中学高校の私にしてみれば考えられない行為だったが、違和感もなく新しい自分を受け入れられた。女性の友人はもとよりいなかったが、男達の勧誘も綺麗サツパリ無くなって清々した。

そうして自分の周りに存在する人間関係のあまりの薄っぺらさが浮き彫りになっていった。

自分にとって大切な人間関係だけに集中しよう。

そう思えるようになることが出来た。そうなった時、少しだけあの人達に近づけたような気がして嬉しかったのを今でも覚えている。

それから休みの日になると毎週のように先輩を誘って遊びに出かけた。本当は先輩は結衣先輩と遊びたかったはずなのに私が声をかけると必ず相手をしてくれた。

結衣先輩は私に何一つ文句を言うこともなく許してくれた。

私は二人の厚意にとことん甘えることにした。

あの場所と一緒に過ごした三人以外は私にとってはどうでも良い存在だ。

大学で築いた新たなコネクションは一つも無い。

私が先輩以外の大学の人間のことを誰一人として覚えていなかった事に気づいたのは卒業式の時だった。

先輩がいなくなった最後の一年。私は殆どの単位を既に取り終えていた。

最低出席日数だけを淡々とこなし、まっすぐ家へ帰る。
今思い返せば抜け殻のような生活と言ってもいい。

先輩が入った会社に受かるための企業研究やインターンの獲得。それだけに奔走した。

一年後私はついに入社し、先輩に追いついた。

先輩は卒業した時から変わっていなかった。

再会して、私の止まっていた時間がまた動き出した。

心躍るような社会生活が待っている……はずだった。

先輩とご飯に行つて、一緒に帰つて、たまに一緒にお酒も飲んで……でも、思い描いていたはずの未来はそこにはなかった。

現実には昼食を共にするだけの関係だ。

それ以外に何の接点もない。

私がいに行きくことをやめてしまえば明日にでもなくなってしまうようなちつぽけな繋がりがなかった。

一年という空白が私と先輩の本当の距離をはっきりと映し出していた。

曇気楼が晴れるように、私の幻想を粉々に打ち砕く。

そうだ……。

隣りにいるのは私じゃない……。結衣さんじゃないか。

先輩に会う度に、笑顔を見せる度に胸が締め付けられていく。それでも先輩にすぎるしか私には道がない。

先輩と居るということは私にとって、毒を緩やかに摂取していく事に等しかった。

毎日のように後悔を積み重ねていく。

もっと早く出会えていれば。もっと早くあの場所に出ることが出来たら。

断ち切ったはずの思いが募るばかりだった。

……私は何を言っているんだろう。

断ち切ったのなら先輩のことをストーリーカーみたいに追いかけるはずがないじゃないか。

止まっていた時間が動いた……？

いや違う、逆だ。

私は進むことを、変わることを拒んだんだ。

結局あの時から私は私のままなんだ。

脆くて儂い……。偽物にすぎる醜い女だ。

本物が欲しくなって先輩のことを好きになって……。なのに。

いつから私の中の先輩は偽物になったのだろうか……。

1 : 2 : 3 : 4 …。

心の中で自然とエレベーターを追った。

心臓の音がやけにうるさい。

数字が増える度に鼓動が大きくなっていくのが分かった。

頬に伝わる冷や汗を拭うこともなく私は昇降口を凝視していた。

異様な雰囲気を感じ取ったのか、私の緊張が隣の玉木さんにまで伝わっている。手持ち無沙汰になって、玉木さんはまたレモン炭酸水を口につけた。

炭酸の噴き出る音が全く耳に入らなかった。

ベルの音が聞こえた。

到着の合図だ。机の下で握る拳に力が入る。

玉木さんに軽く肩を小突かれた。私を諫めるかのようだった。

当然か、オフィスレディは会社の看板。先方にとっては最も始めに会う会社の人物。実際に業務上の会話をかわすわけではないとはいえ、第一印象は私たちにかかっている。

こちらが警戒心を見せてはならない。

大きく一つ息を吐いて改めて正面に向き直った。

扉が開かれる。ただ一階から客を運んできただけの機体から冷たく、重苦しい空気が解き放たれた。

エレベーターの中から現れたのは二人だった。

一人は40代くらいの男性。グレーのビジネススーツに黒縁眼鏡をかけている。会社の社長だろうか。柔らかな物腰で悠然とこちらに向かってくる。

そして後方から現れたもう一人の女性の姿が目に入った刹那、私は背筋が一気に凍りつくのを感じた。

私はその人とは面と向かってきちんと言ったことは殆ど記憶にな

い。

だがあまりにも似付かわしいその容姿、女優と言っても差し支えない美貌、腹の底に潜ませた邪悪。

初めて会った時から好きになれなかった人。

私の心臓は先程までとは違った意味で激しく警鐘を打ち鳴らしていた。

相手が相手だった。

心中は全く穏やかではないが、相手に動揺を見せてはならない。

それでも私は隣りにいる玉木さんに気配をさとりられないように尽くすことで精一杯だった。

件の人物は怪訝な顔でこちらを見ている。

「あれ？もしかして…」

気づかれたか。

顔を見つめられたくなくて、深くお辞儀をした。

「こんにちは。ようこそお越しくございました」

努めて冷静に言葉を返した。

「こんにちは。久しぶりだね、いろはちゃん」

その女性は、際限なく完璧に近い営業スマイルで答えた。

これは果たして、同族嫌悪からくる不快感なのか。

せつかく手に入れた偽りの平穏を脅かす外敵の襲来からくる戦慄か。

そんなことはどちらでも良かった。

邪魔な女が現れた。

眼の前に居るのは私と先輩の花園を汚す害悪だ。

その情報だけで充分ではないか。

不思議と心が冷たくなっていく。心が深く、闇の中に沈んでいくようだった。

お陰で私は動揺することなく、あるがままに目の前の事象をすんなりと受け入れることが出来た。

「ご無沙汰しています。EIGHT KNOWSから参りました。雪ノ下陽乃と申します」

雪ノ下先輩のお姉さんは深々とお辞儀をした。本当に顔だけは雪ノ下先輩と瓜二つの佳人だ。

その顔色を伺うことは出来なかったが、胸の内を探るのは容易いとだった。

だったらこちらも大きく出てやろう。

「ええ。お久しぶりです。雪ノ下さん」

一色いろはは史上最高の笑顔で答えてやった。今この時だけは主演女優賞を総ナメに出来るに違いない。

闘志の炎なんていう生易しいものではない。

冷たくて、どす黒い業火が焚き木のように静かに燃え続ける。

ただ、今は形の見えない実体を持った憎悪がうねりを上げて全身に回っていく感覚に身を任せようと思う。

偽物を守るために…。

偽物を守る・・・？

いや、違う。
どうして気づかなかったのだろう。

偽物を本物にすればいいじゃないか。

今度は本心から、笑みがこぼれ出た。

続く

第四話

変事や事故というものは突然起こるものである。

その言葉を知っていながら、それに対して備える者は決して多くないだろう。

そして不幸なことに突然やって来たそれは、己が想定していた物とは形も大きさも遥かに異なる事が多い。

つまり何が言いたいかというと大事なのは起こった時にどう対応するかということなのだ。

今の俺のように：

さて、状況を整理しよう。有事の際にはまず現状確認だ。

自分は今、応接室の椅子に座り、客人を迎えている。理由は勿論、この会社によつてきた依頼人の応対だ。

隣には上司の智佐吹さんがおり、基本的な商談の進行を取つていた。

そして長机を挟んで、目の前に居るのが、今回俺が担当することになる企業の代表だ。

最早、挨拶や名刺の交換の記憶が殆ど無い。あまりにも頭が真っ白になっていたせいか、先程までの出来事であつたはずなのに自分でも驚くほど覚えていない。

先方の手前、仕事の会議中に他所を向くことは流石にマズいので顔を上げて前を見た。

目の前にはいかにも仕事ができそうな男が一人と、一見非の打ち所のない絶世の麗女が一名。

置いてある来客用の水の入ったペットボトルをわざと端において、

目の前のスペースを広く取っていた。先程渡した名刺をわざとらしく目の前に並べてあるのがまたいやらしい。

開放的に見せることによって、丸腰で小細工も無しに真正面からやって来たことを主張しているのか。それとも無防備を装って男を誘い込むように隙を見せているのか。どちらにしろ、こちらの出方を窺う意図には大差なかった。

願わくば二度と会いたくない人物の一人だった。

とは言え、全く予想だにしていなかったわけではない。

「……の件についてですが……」

智佐吹さんの説明が遠く聞こえる。

目の前に居る女性……雪ノ下陽乃さんは資料に目をやりながらチラチラとこちらを見てくる。黒のビジネススーツが扇情的な身体のラインを強調させており、昔と変わらないセミロングの黒髪とナチュラルメイクが文句無しの調和を演出している。お世辞抜きで男が喉から手が出るほど欲しがる女だ。自分は遠慮しておく。

彼女が髪を靡かせる度に、控えめだが存在を際立たせる香水の香りが伸びてきた。神経を直接撫でられているようなざわざわとした感覚に陥った。

さて、一言で現状を要約すると、『一刻も早くここから立ち去りたい』である。

もう居心地が悪くて仕方がない。

すると、突然右足に強い痛みを感じた。

足を踏まれたか、小突かれたか。

角度から考えて智佐吹さんだろう。どうやら、呆けて本業を忘れてしまっている自分に激しく釘を刺されたかのようだった。

智佐吹さんはこちらに目を向けず淡々と商談を進めている。担当であるのだから勿論自分もしっかりと会話を耳に入れて反芻する必要がある。

仕事についてだが、一人で全てを行うということではなく、基本的には上司である智佐吹さんと組んで仕事に取り組むのが通例になっている。

一秒ほど自戒して素早く切り替えると手元にある資料に目を落とした。

会議の説明をかいつまんで解釈すると、どうやら俺の担当企業は雪ノ下さんの父親の建設会社を大元とした子会社であることが分かった。どうりで雪ノ下さんがいるわけだな……。

依頼内容は純粋に経営方針に関する相談だった。雪ノ下さんがいながら組織が上手く回らないなんてことがあるのだろうかとも考えたが、ビジネスともなるとそうもいかないのだろうか。

いや、やろうと思えば造作も無いが本人のやる気がないのでだろう。よくよく考えてみれば、この人は忖度は出来るが斟酌はまずしない。

それに依頼内容自体には怪しさは勿論ないのだが、この会議そのものにきな臭さをおぼえた。本当の狙いは別のところにあるような気がする。

先方の社長さんの話を借りるのであれば、あくまで彼女は現場にはおらず実際の仕事場の指揮は別の人間が取っているということだった。

英断だ。雪ノ下さんを現場に送り込むのは愚にも付かない。現場にいたとしたら、ハンター協会の副会長並に厄介なこと、この上ない。またもや足に鈍い痛みが走った。

今度は正面からか。雪ノ下さんがジト目でこちらを睨んでいた。何、俺ってそんなに分かり易いの…？

「では、その方針でよろしいでしょうか？」

横では智佐吹さんが話のまともに取り掛かっている。気づけば佳境もとつくに通り過ぎていた。一応、話の概要は聴いてはいるのだが、終わった後に智佐吹さんに抜き打ちテストでもされたらすぐにボロが出る。

三人が席を立った。
頭の中が纏まらない内に話し合いが終わってしまった。
自分もそれに倣い、慌てて席を立つと背後に人影を感じた。

「ひゃっはろー！比企谷君、久しぶりだね」

いつの間に後ろを取られていた。有無を言わせない勢いを感じる。

「…ご無沙汰しております」

出来れば二度と会いたくなかったが。

「本当に久しぶりだね。連絡先教えただから連絡してくれると思っ
てたのに」

想像に反してかなりフランクな話し方だった。こちらの本拠地だ
ろうと関係無いと言ったところか。

「連絡先を頂いた記憶が無いですね」

「あくひどーい！昔、ちゃんとLINEのID書いた紙渡したでしょ
〜？」

そうだったような気もするが定かではない。

「なんだ比企谷。君は雪ノ下様とお知り合いだったのか？」

会話を割って入ったのは智佐吹さんだった。会話を終わらせてく
れるのかと思いきや、話に水をやるという。なんとも余計なことを
…。

「そうなんです。私の妹と同級生でして、大変懇意にさせて頂いてお
りました」

雪ノ下さんが代わりに答えた。

「妹？そうか、妹さんと…」

智佐吹さんが意味ありげに呟く。何か思う所があるのだろうか。

「そうですね。その節は大変お世話になりました」

その節は…と言って良いものなのか。ともかく本当に世話になっ
たのは事実ではある。

「雪乃ちゃんの事は聞かないの？」

またこの人は……。

「その、今は何うべきではないかと」

「今は…ね。やっぱり気になるんだ。雪乃ちゃんのことフツたのに」

その一言はいらないだろう。

「その、、妹様の事は大切な知己である事に変わりはありませんので」

自分で言っておきながら吐き気がする物言いだ。

雪ノ下さんは納得したような、悪事を思いついたような顔をしている。

「ねえ、雪乃ちゃんは君に会いたがっているよ。今でも君のことを…」
「どうですかね。自分をフツて逃げるように消えたやつに会いたいだなんて。彼女の中にある感情はもつと別のものだと思いますが」
「制するように口を挟んだ。」

客観的に見ても自分が今、明らかに激しく動揺しているのが分かる。

「……まあ今はそういうことにしといてあげる」

一瞬、気色ばんだように見えたが、この場で追求する気はないようだ。

とはいえ、一見矛を収めたように見えるが実際は、それと同時に機会はいつでももあるぞ、と首元に刃物を突きけられている。現状は悪化していると言ってもいい。

完全に雪ノ下さんのペースだな。

周りの様子を窺おうとチラと横を見たが、上司のお二人さんは静観と言ったところか。ことの成り行きを見守るつもりなのが見てとれた。

すると雪ノ下さんが一枚の紙を取り出した。

「はいこれ、私の名刺ね。個人の連絡先付き♡」

レア物だからね〜と自慢げに渡された。さつき会議前に名刺交換しただろ…。昔、連絡先を渡したと自分で言っておきながらまた渡

してくるのか。まあ、自分が登録していないのをわかってる上でだろう。

雪ノ下さんの直筆の連絡先、メル●リで売ったら相当な値打ちになるな。勿論、個人情報悪用は御法度だ。

「連絡待ってるね」

「仕事の進展がございましたらご連絡いたします」

「そうじゃなくて、プライベートで」

「私には家内がおりますので」

「お硬いなあ。比企谷君モテるでしょ？いつもそうやって断ってるの？」

あくまで形を崩さない俺に対し、興奮めしつつも雪ノ下さんは砂の山をスプーンで少しずつ崩していくように内心をえぐる。

「いえ、そういった話を受けたことは一度も・・・」

「えー…。比企谷君の連絡先欲しいって思っている女の子は多いと思うけどなあ」

雪ノ下さんは意味ありげに辺りを見渡した。

気がつくと雪ノ下さんは髪をかきあげて下から覗き込むようにこちらを見ていた。

透き通るような眼と艶味のかかった黒髪。

あどけなさや妖艶さが共存した鼻筋。潤った唇。

均斉の取れた顔立ちに思わず彼女の姿と重ねてしまう自分がいた。心臓から送られてくる血液が全身を駆け巡る感覚が大きくなっている。脈打つ胸の鼓動が、忘れ去ろうとした彼女の記憶を思い起こさせるように促す。

彼女は今どこで何をしているのだろうか？

ゆき・・・の・・・し・・・

「はる、雪ノ下様。そろそろ」

智佐吹さんが雪ノ下さんと呼ぶ。

その声が幸いにも虚妄の世界に沈んでいた自らの意識を引き戻す

事に一役買ってくれた。

「ええ、そうですね」

そう言うと雪ノ下さん達は軽く会釈をして出口の方へと向かった。応接室を出ると、受付のカウンターで一色が心配そうにこちらを見ている。

問題ないとの意味を込めて軽くカウンターの机をトンと叩くと、一色はそつと胸を撫で下ろしていた。

二人がエレベーターの中に入る。

「本日は誠にありがとうございます」

代表の男性が深々と頭を下げた。雪ノ下さんもこちらを一瞬見て微笑を浮かべると右に倣った。

扉が閉まり機体が動くまでこちらも深くお辞儀をし続け、客人達を見送った。

そうしてやつとのことと息の詰まるような接客の時間から解放された。

「はあ〜」

思わず、大きな溜息がこぼれた。受付のカウンターの方でも同じような嘆息が漏れる音が聞こえる。間違いなく一色だろう。

「まったく……。君は集中していなさ過ぎだぞ」

智佐吹さんが横目で睨んでいる。

「その…申し訳ございませんでした」

本心から頭を下げた。自己評価でも及第点とはお世辞にも言えない程に仕事に打ち込んでいなかった。

「まあ、いいよ。深い事情ってやつなんでしょ？ でも次からは私情を挟まないように」

ネチネチとしつこく叱るわけでもなく、一度だけズバツと言って終

わりというのが智佐吹さんの指導のやり方だ。厳しい一面もあるが、内外問わず素直に尊敬できる人間たる所以（ゆえん）とも言える。

「しかし、君がフツた女性の姉ねえ。雪ノ下さんの妹さんともなると、さぞ綺麗な方なんじゃない？」

不思議な事に智佐吹さんの興味は俺の恋愛遍歴に向いているようだった。

あまりそこは触れられない話題だったので、こちらも気になってきた疑問をぶつけてみる。

「智佐吹さんも雪ノ下さんとお知り合いなんですか？」

智佐吹さんは一瞬、面食らったような顔をしたが、直ぐに表情を元に戻した。

「…まあ、大学同じなのよ。私が四年か院生だった時に新一年生として入ってきたのが陽乃」

手を首に当ててゴキゴキと鳴らしながら呟いた。

思わぬところで繋がりがあった。とはいえ、見た感じそこまで仲の良いといった関係ではないように思える。

この人、少年漫画や胸熱アニメが好きとかいう点を除いたら性格が平塚先生に結構、似ているからお察しなところはまああるな。いや、別に三十路超えて独り身だという共通点については何も言っていない、うん。

思ったが、少年漫画成分無くなった平塚先生って平塚先生じゃない気が……。それはもうメガネが無い志村●八だ。

智佐吹さんは興を削がれたのかこれ以上俺と雪ノ下さんに関する情報を聞き出そうとはしなかった。それとも、こちらの話を聞く代わりに自分の大学時代の話を尋ねられることを拒んだからだろうか。どちらにしろ、ありがたいことに変わりはなかった。

「疲れたな」と智佐吹さんが小さく声を漏らすと先にオフィスの中へ入っていった。こちらに振り向かず「少し休むよ。10分後に私のデスクに来てほしい」と聞こえる。

気を回したのかどうなのか分からないが、とりあえずさつきからずっとこちらを見ている張本人の元へそそくさと向かった。

「・・・先輩」

「別に何も無かったぞ。そんな辛気臭い顔しなくてもいい」

何もなかった言えば嘘になってしまいが、彼女を落ち着かせるためにもここは一つ平静を装うことにした。

「…そうですか」

一色は一瞬黙り込んでから返事を返した。思い詰めたような表情のままじつとこちらを見ている。

「じゃあ行くわ」

これ以上一緒に居ると取り繕うのが困難になるので、早めに話を切り上げて持ち場に戻ろう。

「先輩！」

大きな声で一色が自分を呼んだ。

「ん、何だ？」

「ファイトですよ！」

一色がいつもの決めポーズを披露した。いい歳になったのだから、いい加減ピースしてウインクから卒業したらどうだろう。

しかしながら、いつもなら鬱陶しく思う仕草が、この時だけは平常心を取り戻すためのいい薬になった。

「おう。サンキューな」

一色に別れを告げて、忙しい戦場と化した仕事場へと戻った。

肉体的にも精神的にも長い戦いに備えて今日三本目のマツカンを飲もうと思ったが、そういえば手持ちは二本だけだったな。

仕方なく途中にある自動販売機でエメマンを購入した。

その後、芦間に「お？ついにマツカン卒業か？」と重箱の隅をつつかれた事は言うまでもない。

続く

第五話

—Side Ironha—

嘘だろうなあ…。

先輩が持ち場に戻った直後、漏れ出たつぶやきはそれだった。先輩が嘘ついた時にじつと目を見ると目を逸らすから直ぐに分かるんだよね…。

おまけに私があざとい可愛いポーズしたら「おう」だって。いつもの先輩なら「はいはい、あざとい」とか毒の一つや二つ返すはずなのに。

「比企谷君って隠し事出来ないタイプよね」

「え？」

「大人の男ならもう少し女性に心配かけさせない配慮ができないとなあ〜」

玉木さんがいたずらっぽく笑う。彼女なりに気遣ってくれているのだろうか。

「別に私は先輩の彼女でも奥さんでもないので配慮は大丈夫ですよ」

自分で言ってる心がズキンと痛んだ。

「…強がらなくてもいいのに」

玉木さんは今度は優しい笑顔を見せた。その後「あなた達、似た者同士だから」と付け加えられた際には流石に狼狽した。

「あの人が、直接話したことはないけど大学の時から目立っていたわね」

「え？玉木さん、陽乃さんの事知ってるんですか？」

陽乃さんとか言ってるけど別に私も親しいわけじゃない。

「学部は違うけど、あの見た目の通り、すっごく綺麗な人だから結構有名だったよ。ちーちゃんは大学どころか、学科まで同じだったからもっと色々知ってるかもね」

ちーちゃんとは智佐吹さんの事だ。彼女と玉木さんは昔からの友人でかなり付き合いが長いらしい。ただ、お互い二人で会社で仲良く話している姿を見たことがないのでその事を知っている人間は会社の中でも少ない。

「というか本人から聞かされた私ですら都市伝説ではないのかと疑っているくらいだし。」

「玉木さんはあの人のことどう思いますか?」

率直な疑問を投げかけてみる。

「え? うーんと… そうだねえ」

玉木さんはしばらく考え込むように押し黙ると静かに口を開いた。

「私は好きじゃないかな」

かけた時間の割には幼稚園児並みの感想が返ってきた。それでも、その一言に内包された真意があることは容易に想像できた。この人、話の肝の部分をおブライトで五重くらいに包むから、その度に頭をフル回転させないといけないんだけど。

少しは気を回すこっちの身にもなつて欲しい。

「それ、どうしてかって聞いてもいいですか?」

陽乃さんの一件で心身共に憔悴しきっていたので、私は考えるのをやめて降参の意を伝えてみた。

「理由かあ。同族嫌悪かも」

意外にも即答だった。聞けば答えてくれる… いや、これ以上は詮索するなと言う警告だろう。

「同族嫌悪… ですか。なんだか闇が深そうですね」

「深くないわよ。寧ろ、浅いよ。それがバレたくないから思わせぶりなこと言ってるだけね。それよりも寧ろ、いろはちゃんの方が闇が深そうだけどなく」

うわ。興味本位でカマをかけたなら、笑いながら首元に出刃包丁添え返されたよ。

素直に手を引いた。この人に牙をむかれたらたまつたものじゃない。

両手を上げてわざとらしく観念した様子を見せておく。

「それだと私が後輩いじめてるみたいじゃない?」

「いえいえ☒ 玉木さんは朴訥で真面目な方だなと尊敬しています

☆

「私結構喋るタイプだと思うけど…」

玉木さんが白い目でこちらを見る。案外…いや、やっぱり純粹(笑)な他のOLの子たちより、こういう人の方が私は仲良く出来るのかもしれない。

—Side Hachiman—

「明日から君には会社から出ていってもらおう」

呼び出されて早々、智佐吹さんから言い渡されたのは解雇通告だった。どうやらここで働くのは今日で最後になってしまったらしい。

「なるほど、お世話になりました」

頭を深々と下げて感謝の意を述べると、頭を叩かれた。

「アホか君は。出向だよ出向」

要点を二回言うのが彼女の癖だ。まあリストラとは最初から思っ
てなかったけど。

ん？出向？

「やっぱり全然聞いてなかったな・・・」

あ、やべ。バレた。

「すみません。全然聞いていませんでした…って痛！」

今度はデコピンを食らった。

「出向のことは今初めて言った。君がないさっきの10分で決まったことだよ」

くそう、嵌められたのか。

「不満？」

智佐吹さんが目の奥を覗くような視線を向ける。

「いえ…。そういうわけでは」

「じゃあどうしたの？えらく思い詰めたような顔して」

智佐吹さんが修羅の顔から女神の表情に戻った。食堂で小耳に挟んだ話だが、このギャップで大抵の男が籠絡されるらしい。

「その、出向か・・・と。普段はデスクワークばかりだったもので、新鮮です」

「あら皮肉？じゃあ、昇進したら今の仕事の方が良かったって死ぬほど言わせてあげる。というより、私にとっては、寧ろ君が色恋沙汰で取り乱すような人間だったことの方が余程新鮮かな」

さっきの会話で掘り下げるのを諦めたわけじゃなかったのか。恋バナが好きなんて、やっぱりこの人も女性なんだな。って痛い！またデコピンされた。

「私も女の子なんだからとか思ったでしょ？」

エスパーか己は。もう、テレビでやってる超能力スペシャルにでも出たらどうだろうか。

「別に恋バナだったら誰のでも気になるってわけじゃないよ。正直、芸能人の熱愛報道とか時間の無駄とか思ってるし。それよか、全国のド根性大根の紹介とかやってほしいくらいだわ。その、あんなに冷や汗かいてた比企谷君、珍しかったからさ」

そんなに顔に出ていたのだろうか。あと、ド根性大根とかジエネレーションギャップが半端ない・・・って痛!!

「えーっと、普段であれば、あんなに取り乱すことは無かったですよ。想像以上の珍客だったものですから」

「それって陽乃が意外だったってこと？」

「仕事中だが、智佐吹さんもかなりプライベート寄りの口調になっていた。」

「まあ、そうですね」

「そっか。。。でも、その割には彼女を意識しているわけではなさそうだったけど」

この人は本当に人をよく見ている。

「ええ。彼女の妹さんのことを考えていましたから」

「あれ？意外と正直に答えてくれるんだね」

「嘘かもしれませんよ」

「君が嘘ついたら分かるよ。じっと目を見ると直ぐに逸らすから」

そんな癖があったのか。もしかすると、結衣もその事を知っている可能性が高いな。これまでに何度かあつという間に隠し事がバレた時があつた時、何故分かるのか理由を聞くと「八幡には癖があるからね」と言われた。次回から、気をつけるようにしよう。

「あ、でも次回から逸らさないようにしようとか考えないほうがいいよ。特に奥さん相手なら、絶対にバレるから」

よし、やめておこう。って俺もう、結衣に嘘つけないってこと？

「って話を戻すけど、明日、千葉の方に行ってもらってもいい？」

「大丈夫です。現地に直接向かえば良いでしょうか？」

千葉なら俺にとって庭と言っても差し支えない。

「現地と言えば現地になるのかな。どうやら最寄り駅までは迎えに来てくれるそうだから」

そう言うとき智佐吹さんは駅名と集合時刻の書かれたメモを手渡した。

集合場所は・・・てN駅？ここ、東京駅だから京葉線とかじゃないと行けない駅ではないか。しかも京葉線のホームまで長いこと歩かないといけないし。総武快速である駅まで行ってからローカルでという方法もある。いや、家から直接向かうのであれば東西線が使えるのか。

「期間はとりあえず一ヶ月程度で見て。まあ、もしかしたらそれよりも長くなるかもしれないし、短くなるかもしれないかな」

「定期買いづらいですね」

「心配しなくても経費で落ちるよ」

「助かります」

その一言が聞ければ十分だ。存分にSuicaを使い倒してやろう。ちゃんと領収書も貰っておかねば。

「会計の方に見積もり、出しといってもらってもいい？ 経費も事後報告だと面ど：いや、失礼だから忘れる前に先に言っておいてよ。まあ当然の話なんだけどね」

さらつと本音出たぞこの人。

「承知しました。あと領収書は券売機でもらえるやつでも大丈夫です

か？」

「二応確認した方がいいと思うけど多分問題ないはず。きちんと指示を仰いどいて。あ、もしかしたら節約のために回数券で通えって言うってくるかもね？」

そう言う智佐吹さんは意地悪そうだった。

「確かに、ありえますね」

S u i c a 使えないな（泣）まさかこのご時世に切符通勤になろうとは。因みに回数券で券を購入すると10回分の乗車賃で切符が1枚貰える。そういえば、切符という概念そのものが来年あたりにJ Rで無くなってしまいうらしい。

「じゃあよろしくね。まあずっと向こうってわけでもないし、この手の仕事なら日帰りで行ってくるごとの方が殆どだよ。他の仕事もやってもらわないといけないし。ただ、とりあえず明日は一日、先方さんの様子見てきてね。報告も忘れずに」

「承知しました」

「それで、陽乃の妹と何があったの？」

またその話かよ！

ものすごい少女のように目をキラキラと輝かせているし。

「飲み会の時にでも話してあげますよ」

それだけ言うと踵を返した。これ以上話につき合おうと二次災害が出かねない。

「君は飲み会来ないじゃないか！」と非難の声が後ろから聞こえた気がしたが気のせいだろう。

続く

第六話

「あれ？飲みに行かないのか、比企谷」

席に戻ると、早速芦間にいじられた。

「聴いてたのか」

「聴いてたっつーか、あれだけ智佐吹さんが大きな声出してりゃあ、嫌でも耳に入るわ」

「ということはこのオフィスに居る多くの人間に聴かれていた事になる。また、面倒なこと…。」

「良いんじゃないの？上司と飲みに行くことぐらいは流石に浮気にならねえって。あの人と一杯行きたいって人はこの会社にはごまんといるのに、勿体無いなあ」

「嫁がいるから良いんだよ俺は」

なにせ、この会社では愛妻家として通っているのだ。智佐吹さんと飲みに行ったことが広まれば、直ぐさま噂になる。女たらしの比企谷なんて悪名がついた暁にはお終いだ。

『こいつ既に一色という核弾頭を抱えながら生活しているのに』って思った人、先生怒らないから正直に手を上げなさい。

「ほんと奥さんの事、大好きだなあ、お前。感心するよ」

「お前も結婚したら分かる」

結婚生活は良いぞ。そりゃあ家の中じゃ実家と同じく、あんまし人権無いけど。

「俺はいいや。一人の人とずっと一緒ってのは性に合わねーし。あ、別に女遊びずつとしてたいとかじゃないぞ」

「お前、その言い方だと今、女遊びしてるみたいない方になるが」

「そうじゃないけどさ…」

芦間は会話しながらキーボードでメールを打ち続けている。

「それ取引先か？」

「ん？メールの相手ってことか？まあ取引先と言えば取引先かな」

芦間がタイピングを止めてこちらを見る。

「なんか煮え切らない言い方だな…」

「あー、悪い悪い。企業ってわけじゃないのよ、お相手さんが」

「個人か？」

「その言い方の方が正解に近いか。今、俺がメールしてる人、女子大生なんだよ」

「なんだ、通報してくれって事か？」

携帯を手にとって110番通報の準備をする。善良な市民として治安維持に努めなければ。

「違うわ！歴としたビジネスだわ！でも、まあ、そりゃあ…ちよつと期待もあつたりなかつたり？」

「それでなんでまた、学生と商談することになってんだ？」

乗ってやったのに急に冷めるなよと芦間に冷ややかな目で見られた。

「…学生団体だよ」

「ん、サークルみたいなものか？」

サークル、学生団体。はい、言わずもがな俺が嫌いなものツートツプ。

「まあ、そんな感じだな。ただし、日本のじゃなくて海外の学生団体の」

「海外？」

「こそ。俺今、海外の大学にある日本人学生団体と連絡取ってるのよ、俺」

海外の大学？どうしてまたそんなことに。

予想だにしなかつた回答に狸に化かされたような表情になった。

「そういえば、比企谷は日本の大学からのインターン入社組か。…ならまあ知らなくて無理ないわな。俺が今やってるのは海外採用の準備だよ」

「海外採用って要はアメリカやイギリスみたいな海外の国の大学に通っている学生を雇用するってことか？」

「その認識で合ってる。俺、アメリカの大学からの入社だったろ？それで事情を知っている人間として諸々のパイプ役を任されたってわけ」

そういえば芦間はアメリカの大学を卒業した留学経験者だったな。春入社が主流のこの企業では珍しく、秋入社の人だったので、気になつて芦間に訪ねたことがあるのを思い出した。

「それでパイプ役つてうちとその団体つてことか？ 諸々つて他にも繋げる所がありそうない方だった気もするが」

素朴な疑問をぶつけてみる。

「あー…。うーんと…それを説明するにはもつと根本的な所から説明した方がいいのかもな」

「根本的な所?」

芦間は顎に手をあてて、ひとしきり考え込んだ。

「比企谷はボスキャリアって知ってるか？」

「それくらいなら一応。毎年、秋頃にボストンで開かれるキャリアフォーラムで、全世界の日本人留学生が一同に介する就活イベントのことだろ?」

ボストンキャリアフォーラム。11月中旬頃に数日かけて、有名企業が一堂に会する海外大生一括採用の一大イベントだ。通称ボスキャリア。

「そうそう。まあ他にもさ、ロスキャリアとか仲介企業が個別に自分たちで開くキャリアイベントとかあつて、まあそういう場所で留学生とかは就活するのが基本なわけ。でもな、そういうところだと面接希望者一人一人にかける時間が全然足りないんだよ。履歴書読んで選別してから一気に集団面接みたいな流れでさ。勿論個別にやるときもあるけど。そこでさ、個人的に大学に行つて時間取ってもらえないかなあ〜つて」

なるほどな。少し話が見えてきた気がする。

「つまり、ボスキャリアとは別の時間を作つて、大学に直接行つて、企業が個人で採用面接イベントを開いてしまおうつてわけか。話は分かるが、飛行機代や宿泊費を考えると相当金や時間のかかる事じゃないか?それに現地での準備や宣伝を考えると日本にいる人間だけではどうしようもない仕事もある。普通考えついたとしても実行出来るものでもない気はするが」

「さすが比企谷くん、理解が早い。現地の大学でやるにしても告知や現地での会場の準備が必須だろ？そこで、その大学にいる日本人学生に協力を仰ぐって寸法よ。そうやって幾つかの大学にアプローチをかけた後、ボスキャリアの前に早めに現地入りして、ツアーみたいに毎日別々の学校を回るんだよ」

「そうすることで、一回の渡航でより多くの大学の日本人学生の採用面接をいち早く行えるって事か。そうして一通りの大学をまわった後に、ボストンに入ってキャリアフォーラムに臨めば良い」

「優秀な人材をボスキャリア前におさえて困っちまいつつ、ボストンでもいい人材が見つければ一石二鳥ってな」

加えて、大学にいる日本人学生に直接働きかけることで会社の印象もあげることが出来る。そのためには出来るだけ多くの学生の目に止まってもらう必要がある。

「そういうことか。それで日本人学生団体か」

「ご明察。海外の大学で日本でも名が知れ渡っているところであればJSAは必ずあるからな」

「JSA？」

「Japanese Student Association. まあ日本人学生団体の英訳。そんで、大体大学名入れてその後ろにJSAって打って検索かけたら高確率で引っかかる」

芦間がGoogle先生を立ち上げて、キーボードで大学の名前を入れ、その後ろにJSAを付けてエンターキーを押すと確かにその大学にある日本人学生団体のページが検索トップに現れた。

「そうやってグループアカウントに直接メッセージを送るのか。大体、顔本使うのか？」

「海外は結構ビジネスでも大学のグループ実習でも顔本使うこと多いから大体、皆アカウント持っているぞ。そんで日本人団体にはいくつか部署というか運営部門が個別にあって、その中のキャリア部門の人間とやり取りするって感じよ。まあ今回連絡取った団体は専用のメールアドレス持ってたからそこにメール送ってる」

「キャリア部門？」

「要は日本企業や外資系の日本支社の人事担当と連絡を取って実際に採用面接のセッティングを行う部門のことだな。俺はそのキャリア担当の人と面接の日程調整や、場所の相談、報酬金の設定もやる。俺も昔、在学中はキャリア担当やってたから、事情も知ってるし、話を通しやすいつてことで連絡役になったわけ」

芦間が鼻高々に教鞭をとっている。なんとなく鼻についたが、気にせず続きを聴くことにした。

「なるほどな。それを何校も相手にやるとなると相当な時間かかるんじゃないか？」

昔の記憶を思い出したのか、芦間は決まりが悪そうな顔をした。

「そうそう。それが結構面倒くさくてさ。大学の連絡を仲介企業に頼む会社もあるんだけどな」

「仲介企業つてそういうえばさつきも言ってたけど何なんだ？」

「ああそれか。えーと。まあ今はあんまし、この話の本筋とは関係ないから今度休憩の時にでも教えてあげよう」

何故か次の講習勝手に受講することになっているんだが。まあ気が向いたら時間つぶしにもるしまあいいか。材木座の相手よりは有益だ。

「分かった。サンキューな」

「My Pleasure!」

急に外人かぶれになった芦間は学生から来たであろうメールの返信に意識を戻した。

よくよく考えてみたら俺は、明日から一時的とは言え新しい職場になるのか…。

智佐吹さんに渡されたメモ用紙を確認してみると、

『10時。改札近く。コンビニの前』

もう口頭でいいだろこれ。あと何口の改札だ…。

く千葉県某所、とあるオフィスにてく

「雪ノ下さん、今夜、食事でもいかがですか？会社の皆で行こうって話になってるのですがよろしければ…」

「すみません。今日は他に予定が入っておりますので」

「…そうですか。ではまた別の機会に」

男性は残念そうに席を後にした。長い黒髪の女性は何事も無かったかのように淡々と仕事を続けている。デスク横の紅茶を飲みながら、午後の一息を堪能しようかと思っていたところに食事の誘いが入ってしまった。

「はあ…」

どうして男というものはこうも毎日しつこくアプローチすることが出来るのだろうか？そう思わずにはいられないという表情であった。

先程、言い寄ってきた男性は一週間前、彼女に交際を申し込んできた人物だった。ところがその際、はつきりと交際を断った上に、コレ以上無いほどに、こてんぱんに希望を打ち砕いたはずの男が、尚も明光見つけたりと言わんばかりに現れたではないか。

根拠のない絶対的な自信の根源が一体何なのか。その女性には到底理解できる事象ではなかった。

「雪乃ちや〜〜くん！いる〜〜？」

もう一人の黒髪美女がオフィスに姿を表したのはそんな時だった。その人物は女性と親しい間柄にある人物と言って良いものなのかは分からないが、ともかく付き合いの長さに関して言えば間違いなく腐れ縁と言っても良いだろう。

呼び出された女性・・・雪ノ下雪乃は右手で頭を抱えると、わざとらしく空気を全く読まない愚姉に目をやった。

「雪ノ下さん、私語は謹んで頂けると嬉しいのですが」

「あれ〜？せっかくのお姉ちゃんなのに全然嬉しそうじゃないね？」

「…当たり前でしょう。あんな浅薄で愚盲な事を部下の目の前でされ

て喜ぶ人間が居たら教えて欲しいものだわ」

当初は毅然とした態度で社会人同士の会話で接しようと思論みたものの、自身の感情のコントロールが効かず、瞬く間にメッキが剥がれてしまった。相手が姉である雪ノ下陽乃である以上、そう上手くはいかない事は雪乃も百も承知だったが。

「まあまあ。今日はお仕事頑張ってる雪乃ちゃんにスペシャルプレゼントです！」

そういうと陽乃は手に持っていたクリアファイルを雪乃に渡した。「どうせ碌でもないものだとは思いうから受け取りたくないのだけだ」と

「ひど〜い！でも、ちゃんと雪乃ちゃんが受け取ってくれるまで帰れないよ？仕事の資料なんだし」

「はあ…。分かったわ」

肩をすくめながら雪乃の中には言っている資料を取り出した。流石要領の良い雪乃と言うべきか、直ぐ様仕事の顔に戻る。

しばらく熟読してから、ようやく雪乃は口を開いた。

「つまり、この職場の環境改善の依頼を他の企業に依頼したということかしら？」

「そゆこと☒ 雪乃ちゃん、毎日大変そうだったからね。流石に業務と同時進行で現場を回すのは大変だと思っただけだからさ。気を効かせて手を打つていたの」

「余計なお世話をしてくれたわね。私は頼んでなんかいないでしょう？」

雪乃は苛立ちを隠さなかった。憤怒の形相で姉を睨んでいる。

だが、当の陽乃はというと歯牙にもかけない様子であった。それどころか、その様子を楽しんでいる節すらある事が余計に雪乃の神経を逆撫でした。

「良いの〜？そんなこと言っちゃって？」

「どういふことかしら？」

こうして聴き入っている時点で陽乃の術中に嵌っていると理解しながらも雪乃は攻勢を崩さなかった。

「それ、最後まで読んだ？」

「渡された資料に関しては読んだわ。特に至って不思議な事は書かれていなかったと思うのだけれど」

「まあ、依頼内容としては私や雪乃ちゃんだけでも充分に解決できるものなんだよねえ。それでね、その中には二つ資料があるよ。多分、雪乃ちゃん一つ目しか見てないでしょ？」

凶星だった。雪乃は一つ目の資料にしか目を通していなかった。ただ一つ目の資料の内容を読む限り、どう見ても雪乃が通常業務と並行して一ヶ月弱もかければ一人でも解決できる程度のもだった。

おとなしく雪乃は二つ目の資料を取り出してみた。

二つ目は私の自作だよーっと言う姉からのどうでも良い情報は早急に切り捨てた。

そして二つ目の資料を読むことなく、危うく資料をその場に落としそうになってしまった。

二つ目の資料には集合場所と担当企業の名前や相手の詳細が書かれたデータが記入されていた。右上にはその担当者の名刺まで丁寧に添付されてある。

雪乃は目を丸くしたまま、まるで雷に打たれたかのように動けなくなっていた。そして同時に止まっていた自分の中の時間を強制的に動かされるような感覚に陥る。

思わず口元を手で覆った。

手に持った資料から目が離れない。

そこには雪乃がよく知る人物の名が記されていたのだった。

比企谷八幡。

何度も確認したが間違いない。

資料に書かれている情報を見ても記憶と相違無い。

彼だった。

雪ノ下雪乃が初めて興味を持った男。

雪ノ下雪乃が初めて心を開いた男。

雪ノ下雪乃が初めて好きになって告白した男。

雪ノ下雪乃が初めて失恋した男。

雪ノ下雪乃が自分から距離を取り疎遠になった男。

雪ノ下雪乃が記憶の中から消してしまいたかった男。

雪ノ下雪乃が毎日のように想っていた男。

雪ノ下雪乃が会いたくてたまらなかつた男。

雪ノ下雪乃が唯一、心の底から愛していた男。

そんな男が数年ぶりに自分の前に現れようとしている。

そして、陽乃から渡された資料が正しければ、明日の10時N駅にて自分が直接迎えに行く事になっていた。

資料を持つ手が小刻みに振動している。

明日、比企谷八幡に会えるのか？

あまりにも突然の展開に流石の雪乃も思考が追いついていなかった。

震える肩を抱き、その場に崩れ落ちそうになる体を何とかして支えている。

しかし、今にも限界が訪れそうな彼女のよろめきに、周りの社員達

もどうして良いのかわからないと言った表情であった。なにせ、氷の女王と謳われている雪ノ下雪乃がにわかには信じがたい感情の揺れを見せているのだから。

比企谷君：比企谷君…。

雪乃の眩くような魂からの叫びが木霊した。

陽乃は声をかけること無く、静かに妹を見守った。

やがて雪乃はその場に膝をついた。

そして、顔を両手で覆うと静かに嗚咽を漏らし始めた。

焼けるような夕日が窓から差し込み、儂げな少女を照らしている。

彼女の細い影がオフィスの床を這うように伸びていた。

続く

第七話☆

家に着いたのは午後10時を回ろうとしていた時だった。

——雪ノ下さんの一件の後、通常業務に戻った俺はデータの処理や会議資料の作成に追われていた。やつのことでそれを終わらせた時には、周りの同僚の席が空席になりつつある頃だった。

中には確実に深夜まで食い込みそうな雰囲気を纏った社員も見受けられた。見るからに身体中から陰鬱なオーラを湯気のように発している。芦間もそのうちの一人であった。

「比企谷…もう終わりか？」

あわよくば残業の道連れにしてやると眼が語っている。

「まあな。明日は出向だしな。早めに上がらせてもらおうわ」

明日は朝から別の仕事場での作業になる。内容よりも環境になれるために精神的消耗が予想された。

「あああ!?!明日、会社に来ないのか!?!じゃあいろはちゃんと一緒に飯食えないじゃん!」

「別に俺がいなくても誘えばいいだろ」

「無理言うなよ…。いろはちゃんが一緒に食べてくれるのはお前が居るからじゃねーか」

芦間は魔剤をやけ酒の様に飲んでた。そんなに一気に飲んだら良くないものだろ…。

先程、一色には出向の旨は伝えたのだが、あからさまに不機嫌な顔をしていた。何とは言わなかったが、何を言わんとしているかは察しがついた。『じゃあ、今度仕事終わったら、ご飯一緒に行きましょう』と交換条件のように言われたがどう考えても仕事なのだから仕方がないではないのか。それで承諾してしまう自分もどうかとは思わが…。

「そんじゃあ、帰るわ」

このまま、ダラダラと話していてもお互いの時間が勿体無いと感じ

たので、こちらから話を切り上げて退社することにした。

「あいよ、出向先で女作るなよ〜」

何を藪から棒に。

「妙なフラグ立てるのやめてくれませんかね…」

「安心しろ。そうなったとしても男として秘密は守ってやる」

「痛み入る」

後ろでこいつ本気か!?と言うような目で芦間が見ているが、こちらもツツコミを入れられない程に疲弊していたので、何も言わずにそそくさと退散したのだった。

そうして、現在。

俺は今朝早くに見た自宅の重厚な扉の前に居る。部屋の電気はまだ点灯しており、結衣が起きている事がわかる。キーチエーンから自宅の鍵を探すのに苦労した。妻に会いたい気持ちで大慌てになる。結婚してそこそこになるのにもかかわらず未だに熱い夫婦関係なのが自慢だ。そう言ったら芦間にドン引きされ、一色には冷ややかな目で見られつつ思いつきり脚を踏まれた。

家の鍵を開けて思いドアをゆっくりと手前に引く。

「ただいま」

玄関の電気が自動で点灯されると、今朝にも増して生気を失ったサラリーマンの姿が鏡に映し出された。我ながらアメリカのFPSゲームの敵キャラとしてノーメイクで出演できそうな見てくれた。因みに俺はその類のゲームは苦手なので全くと言っていいほどやらない。

「あ、おかえり〜〜!」

エプロン姿の結衣が嬉しそうに駆け寄ってくる。間近になっても速度を緩めることはなくそのまま胸に飛び込んできた。

「おっと」

愛妻のタツクルをがっしりと受け止める。『一色のは避けただろ』って？

何を言う。嫁のタツクルは避けてはいけない。いや、タツクルでは

ない。これは愛だ。

「えへへ〜。八幡お疲れ様！」

「おう、サンキューな」

顔を埋める結衣の頭を優しく撫で続ける。その度に結衣の頭が可愛らしく揺れ、柔らかい感触と甘い香りが広がった。今日一日に蓄積されたであろう疲労が霧散していく。

「ご飯にする？お風呂にする？それとm…」

「結衣にする」

「ああん！」

言わせねえよ！結衣を食べるに決まってるだろ。

新婚ホヤホヤの夫婦のお決まりの台詞、最早現実で使う人間がいないであろう言葉を結衣が言うのは毎日のことだった。

「ちゅ、ちゅる・・・あむ・・・れろ」

今朝とは違って、今回はこちらから舌を入れた。

結衣も離さないと言わんばかりに執拗に舌を絡める。口内を支配する快感の温もりに酔いしれつつ、着込んでいたスーツやズボン、シャツを脱ぎ捨てていった。

器用に脱衣をして下着姿になった頃には、お互いの唾液の交換が充分に行われている程に熱い接吻を交わしていた。仕事から帰ってきてパンツ一枚にいきなりなるのもどうかとは思いますが、結衣の綺麗な体を、汚れたスーツで汚す訳にはいかない。盛りきった類人猿のような行為を敢えて行うことで本来の自分が目を覚ましたかのような新鮮な感情が湧き上がる。奇行を意図的に行うことで、比企谷八幡という人間に全く別の人格が入りこんだように、性欲に囚われたもう一人の人格がインストールされた。

「八幡、もう固くなってるよ…」

「ああ、あんだけキスしたら流石にな」

ゆっくりと言葉を紡ぎながらも、既に肉体の方はというと煩惱に逆らえず、両手は結衣の胸を包んでいた。豊満な乳房を何度もゆっくりとこね回すように揉みしだく。

「んん…んくっ…。はあ………」

そのまま下半身を結衣の身体に擦り付けるように押し付ける。じんわりとした刺激が肉棒から伝わってきて、自然と恍惚とした表情になってしまう。

結衣はもたれかかるように身を預け淡い快感を反芻するように味わっていた。

そんな姿が愛らしくなって、乳首を服の上からつまみ上げた。

「ひゃうんー」

ビクビクと均斉の取れた肉体が弓なりの曲線を描く。おとがいを上げて、甘い喘ぎ声が漏れた。

たった今産み落とされた嗜虐心の小火に油が滝のように注がれていくようだ。結衣をもっと虐めたくて堪らなくなる。

一刻も早くこの女を犯したい。

募る情欲の業火を、かつて理性の化け物と呼ばれた精神で強引に律した。

なんと皮肉なことか。

今ここにいるのはタガが外れた、ただの欲望の化け物だった。

手を変えつつ、彼女の自制心を緩やかに奪っていく。

双丘を稜線に沿って撫で上げ、つまみ、耳元に息を吹きかけた。

「ああ…はあ…、ふう…」

結衣の息が徐々に荒くなっていく。両手で肩を強く掴み、紅潮した顔で更なる愛撫を乞う。

そうだ。これでいい。

毒蛇は急がない。

直ぐに絶頂させてしまつては面白くない。

キャベツの葉を一枚一枚丁寧に剥ぎ取り、芯をむき出しにしていくように、互いの内に潜む肉欲の芽を徐々に露わにしていく。終わりが見えるようで見えない作業。

彼女が自らオルガスムスを求めるまで、少しずつ積み上げよう。ドミノ倒しやトランプタワーと同じだ。最後の一瞬に向けて綿密な計画を組み立てる。それなのに、いつしかその最後のためのプロセスこ

そが快感の本分へと変わっていつてしまう。

エロの探求において、少なくとも俺にとっては完成された人間に興味も意義も無い。

人間が何かを求めて、変わっていく姿に惹かれている自分がいた。それは自分が見つけられることのない何かを求めているからなのか、求めることを諦めたからなのか。自分の深層に潜む心理は理解できなかったが、少なくとも親しい人物が欲しいものを懸命に求める姿こそが人間が最も魅力的になる瞬間ではないかと考えた。

目の前で比企谷結衣という一人の女性を淫欲の象徴へと昇華させる。

芸術家にでもなった気分だ。

真つ白なキャンバスを黒のペンで一気に塗りつぶすのではなく、油絵のように何度も塗り重ねていくように染めていく。

結衣は理想の女性として仕上がっていった。

しかし、それは逆もまた然りだ。比企谷八幡という人間は比企谷結衣という女性の手によつて、男として形成されていき、今の自分があ。互いが互いに最高のオーガズムを求めて愛し合う。理想的な追求の形がここにあった。

ひとしきり愛撫した後は、逆に触れるか触れないかのギリギリの力でそつと結衣の身体を刺激し続けた。

「ふぁ……くう……んん」

我慢できなくなったのか、足をもぞもぞとさせ始めている。

包皮に包まれた欲望の塊の先が顔を出してきたようだ。

「はちまぁん……。もつと……」

「いや、まだ、風呂に入っていないだろ」

「いいから、触つて……。あああああああぁあぁんー！」

結衣は俺の手を強引に掴み自身の下半身に持つていった。そして、そのまま道具を使うかのように乱暴に恥丘に擦り付けると、淫猥な嬌声をあげた。元々は軽くペッティングを行うだけだったのだが、結衣はもう完全にその気になっているようだ。

結衣の下半身はすでに過剰と言えるほどに潤っていた。透き通る

ような体液が擦り付けられた右腕から雫となって垂れている。

突如抑制されていたはずの性欲の奔流が活動を再開し始めた。

彼女の愛液が放つ強烈なフェロモンが鼻孔を突き抜けて本能を打ち鳴らしているからであった。

「ねえ……八幡……。お願い」

タイミングをはかったかのように結衣が哀願の表情で次なる奉仕を求めた。

また一段階、彼女が歩みを進めようとしている瞬間に立ち会えた事に興奮を禁じ得ない。

「結衣……イきたいのか？」

「……はい」

恒例の合図だ。こうして本人に確認を促し、承諾させることで自分が望んだ絶頂であることを自覚させる。

さもしい支配欲の器に一滴の水が落ちる音がした。

少々早い気もするがここで焦らすのは得策ではないと判断し、右手の運動を激しくさせた。

「ああああああ!!んんんんん!!」

下着の上から陰核を摩擦する。優しく左右にこすり続けると、下着が段々と精液が漏れ出ている。既に下着は水分を許容できないほどにビショビショになっており、本来の役割をまるで果たしていなかった。

もうすぐだろうか。

結衣の抱擁に力がこもっていく。体中が緊張し頂点へ至るための準備が滞りなく行われているのを確認すると仕上げにかかった。

「ああーひゃう!!いや……いああん!あ、あ、あ、うう!!」

崩れ落ちそうになる結衣の身体をしっかりと支えつつ秘所への愛撫の速度を限界まで上げる。程なくして結衣は喜悅の頂点へと上り詰めた。

「ああ……。はあ……。ううう、はちまんの、えっち」

腰の碎けた彼女の身体がのしかかってきた。夜の冷ややかな空気に反して、彼女の髪は自身の汗で綺羅びやかな光を放っている。

しばらく呼吸を整えた後、結衣が後ろに周り脇の下から腕を差し入れると、乳突を撫でるように抱きしめた。

聖母のような温かな温もりが情欲の牙を鈍らせた。

「えへへ。今度は八幡の番だよ」

「え、ちよ」

返答の是非は問わないようだ。結衣はトランクスของゴムに手をかけた。

あれよあれよと玄関先で生まれたままの姿になる。この歳にもなって明るい空間の中、身ぐるみ剥がされるのは羞恥を越えて陵辱に近いものがあるんですが。

「あの…結衣さん。寒いんですけど」

「じゃあ、温めてあげるね」

そう言うと、結衣は付けていたエプロンを俺にかけ始めた。え、何やってんの。男の裸エプロンなんて変態以外の何物でもないんですけど。

「いや、ちよっと待ってくれ。俺の自尊心や男としての諸々が崩壊するの…」

「大丈夫。私は八幡の事かっこいいって思ってるよ」

「いや、そういうことでは…うぐっ！」

突如、結衣に屹立した男根を握られた。結衣の最後まで言わせてすらもらえないのか。

「ちよ…結衣!!」

「えへへ。とりあえず一回出したほうが良いでしょ？」

くちゆくちゆと口の中を動かした後、たっぷりの唾液を右手に落とす。ハンドクリームを塗るように粘液を付着させると愚息を静かに扱き始めた。

「うう。ふう…」

思わず吐息が漏れる。

いたずらを覚えた子供のような純粋な笑顔とは裏腹にやっている

所業は小悪魔そのものだった。的確に竿の急所を責めつつ、鉾先への優しい摩擦が交互に押し寄せてくる。一分と経過しない内に腰が砕けそうになる。

結衣は右手で奉仕をしつつ、左手で身体を逃さないように抱き込んだ。顔を腰のあたりまで落とし、脇腹から顔を覗かせるようにその艶美な微笑を顔に浮かべている。

「はちまん、これ好きだよね?」

独特の粘着音を奏でつつ、徐々に手の運動が早くなる。結衣の手淫はこちらの性感のツボを知り尽くしているためか動きに一切の淀みが無かった。

厭らしい手の動きは前にかけられたエプロンによって隠されてしまっている。布の下で行われている激しい手の動きを窺知するには肉棒から伝わる快感から手繰るように想像する事でしか方法が無い。

玄関の両壁を突っ張るようにして快樂の波に必死に抗った。既に体勢は中腰になり、両足は生まれたばかりの子鹿よりもおぼつかない。

顔の直ぐ後ろに気配を感じる。シャンプーの淡い臭いが媚薬のように意識を色欲の海へと誘う。

「おちんちん、ぴくぴくしてる……。イきたいの?」

悪魔の囁きが聴こえる。

結衣は屈辱感を煽るために、幼稚な言葉遣いで男の尊厳を激しく揺さぶった。

先程の意趣返しなのか、結衣は動きを止め、両手で睾丸を揉むようにして、言葉を待っている。射精をしたい欲望もあるのだが、結衣の言葉責めをもう少し愉しみたい気持ちもあって中々、口が動かない。

結衣の手が揉みからソフトタッチになった。さわさわと触れるか触れないかのような指の感触が龟头を漂っている。もう片方の手で乳首の先を指の腹で撫でるように動かした。

「ねえ……して欲しい?」

結衣の舌が耳の中に侵入してきた。顔を持って鏡の方に向けさせ、見せつけるようにした。鏡には己のあられもない醜態が晒されている。

る。我ながら自分とエプロンの相性はお世辞にも良いと言えるものではなかった。こんな格好をさせて結衣は何がしたいのだろう。いつにも増して、結衣は楽しそうだった。

後ろでは結衣が長い舌を厭らしく動かし、耳殻に添えるように舐めていた。

何か別の生き物が耳元でうごめくようなおぞましさと柔らかな心地よさに強制的に下半身をそそり勃たされる。

もう一度右手で肉棒を掴むと今度は絶頂へ導くように激しく扱いた。抵抗は許さない。そんな強い意志すら感じさせる止めどない奉仕だった。

結衣は左手で頭を動かさないように顎を持ち、固定すると鏡の前で誘惑的な表情を浮かべている。

「このまま、ぴゅっぴゅしよっか♡」

玄関先で情けなく全てをさらけ出せというのか。好き勝手に股間を弄ばれ、鏡の前で辱めを受け、耳の中を蹂躪される。言葉を紡ぐにも、身体は完全に彼女の支配下に置かれている。

スイッチの入った結衣は俺が絶頂しない限り手を緩めることはないだろう。

鏡の前で愚息を犯すだけで飽き足らず、視覚や聴覚、果てには嗅覚すら犯された。

もうすぐ出そうだ・・・。

それを察したのか結衣が俺の顔を解放し、右手に意識を戻した。

結衣が俺の身体を、発射させやすいように起こし弓なりに逸らさせる。彼女のマシユマロのような両胸が背中に押し付けられた。

「ゆ、い。この、ままだと、エプロンに・・・」

「いいよ、かけても♡」

結衣は本気だ。その証拠に右手が忙しなくなる。

抵抗する力は残っていなかった。

身体を結衣に預けるようにして、もたれかかった。目を閉じて快感に身を沈める。

観念した様子を認めたのか、結衣の口から笑みが溢れる。
上り詰める射精感を拒絶する理由は無かった。

「たくさんだして♡」

その言葉がとどめの一言になった。

刹那、白濁した欲望が一瞬にして吹き出した。

「ぜんぶーぜんぶだして、はちまんー」

結衣は射精中も手を扱き、さらなる絶頂を促した。

痙攣した肉棒からドクドクと精液が溢れ、純白のエプロンを汚していく。裏側から付着したシミは射精を繰り返す度に大きさを増していき、最後には行き場を失った体液が滴るようになっていた。

陵辱の果てにもたらされる絶頂感は中毒症状を発生させるような強烈なものだった。女性に玩具のように弄ばれ、射精をさせられる。新たな境地へと至った気分だ。知識欲と性欲を驚掴みにされるような奉仕に籠絡されきっていた。

玉袋の中まで全ての子種を放出したような喪失感に襲われる。

身体は既に力が抜けて崩れ落ち、息も絶え絶えに快樂の余韻を貪っていた。

「はあ・・・はあ・・・。いっぱい出たね♡」

精子と唾液が混ざった厭らしい右手をかざしてこちらに向けている。今にも体液が滴り落ちそうだ。

結衣は屈託ない笑顔を見せている。

情事が終わると結衣はいつもの優しい妻へと戻るのが常だ。

「ふう、はあ、はあ。結衣」

虚ろな目でなんとかして彼女の方を見た。因みに裸エプロンのままだ。

「うん？何？」

結衣は大きな瞳をこちらに向けて可愛げに首をかしげる。

「風呂、先に入ってから飯でいいか？」

続く

第八話☆

歯磨きを終わると、間もなくして結衣が激しく舌を絡めてきた。せつかく着た寝間着も今はベッドのそでに乱雑に放置されている。手をつけて座ると脚を開放的に伸ばした。

唾液で濡れそぼった自分の一物が間接照明に照らされて淫靡な妖光を放っている。股座を見ると結衣が口を窄めて頭を激しく前後させていた。

「じゅ、じゅ、じゅぼ。れろ…ちゅぼ」

結衣は口奉仕が好きだった。

お互いの愛撫を行う中でこの時間が最も長い。

最初はゆっくりと肉棒の先にキスの雨を降らせると根本から丁寧に舐めあげていく。そして子種を貯める袋を口に含むと柔らかく口内でもみほぐすように吸い尽くした。

独特の粘着音が下半身から伝わる快感を高めてくれている。

「じゅぼ…じゅる。。ひつきい…」

ベッドの上では結衣は俺のことを昔の呼び方で呼ぶ。

それがまた普段とは違う特別な時間であることを強く意識させた。寝室を淫猥な臭気が包み込む。お互いの理性が徐々に溶け合って無くなっていくようだ。

結衣が小さな口で砲身を丸ごと飲み込む姿が好きだった。むせ返りそうになりつつも懸命に舐める様子がいじらしくて堪らない。頭を押さえつけて無理矢理に動かしてみたくなる。

このまま射精したらどうなるのだろうか。

一生懸命に舐めている結衣の努力を裏切るような乱暴を犯してみたくない衝動に駆られていく。

試しに片手で頭を強引に股間に引きつけてみた。

「んぐうー…。。ふう…んむ。。」

結衣は少々戸惑ったような表情になったが、直ぐにまた喉の奥をしっかりと締め直した。

今度は結衣の胸を激しく揉んでみた。

「んん…ん…じゅっ…」

一つの配慮もなく欲望のままに指を食い込ませていく。マシユマ口よりも遥かに柔らかく、温かい感触が掌全体にじんわりと広がっていく感触を賞翫した。

乳首を指の腹でなぞり円を描くように丹精込めてもみほぐす。新しいおもちゃを貰った子供のようにな結衣の胸で遊ぶのが夜の日課だった。

結衣は嫌がる素振りを見せること無く、奉仕に従事していた。舌を肉棒に絡めつつ、頭の運動に合わせて精管を強く刺激した。夫を知り尽くした妻の口淫に酔いしれつつ、絶え間ない律動を感じていた。

何と献身的な女だろう。男の身勝手があるがままに受け入れるその姿勢に拍手を送りたくなってしまふ。

我ながら自分の行いを最低だと認めつつも、止めることが出来ない邪な感情を持った自分が渾然としている。罪悪感と背徳感が下半身でせめぎ合う感覚が至極の興奮を生み出していた。

早くこの女の口を汚したい。

彼女の頭を掴んでいる右手に自ずと力が入ってしまふ。

結衣の運動が激しくなった。上り詰める射精の兆候を彼女も察知したのでろうか。申し訳ないという気持ちで頭をよぎったが、刹那、身体の全神経が煩惱に流れた。

もつと啜えて欲しい。

もつと苦しむ妻が見たい。

結衣が深く啜え込むのに合わせて腰を振り、同時に頭を強く引きつけた。僅かに彼女の息苦しんだような声が聴こえる。その声が自分の中にいる欲望の化身に余計に拍車をかけさせた。

「もつと舐めろ、結衣」

「んんんんん…ふあい…」

一度もたげてしまった鎌首は欲望を開放しない限り、元に戻ることはない。

愛する妻の苦悶の肉声が静寂と淫臭に包まれた空間に響き渡った。

柔らかい舌が雁首をねつとりと回し舐める。的確に敏感な場所を責める技術は長年の夫婦生活の賜物と言えよう。

「結衣・・・出そうだ」

彼女を安心させるために絶頂に近いことを伝える。苦しいのはあと少しだから我慢して欲しいというのが本当の意味だった。

結衣は「んん」と頷くと吸い上げる口に力を込めた。

「じゅっーじゅぼー・・・ズズズズズズ。ひっひいー。ふあくさん：らし
てね」

結衣は俺の腰に腕を回し、動かないように固定すると前後に素早く頭を動かし陰茎を摩擦した。

嗜虐心を受け入れるかのように目の端に涙を溜めながらも献身に尽くしていた。

「ああ。ううっ!!」

十秒も立たない内に激しい射精感に襲われた。これまで手を抜いていたのかと思わせるほどの激しい快樂の波が押し寄せる。

たまらず両手で結衣の頭を鷲掴みにした。既に下半身の言うことが効かず彼女にされるがままになっている。

両足をだらしなく伸ばし、ベッドの背もたれに銃弾を受けた傷兵のようにもたれかかった。

腰を突き出して発射に備える。

程なくして精液が上昇して来るのを感じた。結衣が、腰に回していた手を肉棒に添えると一心不乱に吸い上げた。

「出・・・」

「んんんんむ!!」

言い終わらぬ内に砲身から白濁した体液が解き放たれた。

流れ出た精子が結衣の口内に一斉に侵攻し余すところなく放出され、領域を侵していく。

「ごぼっ・・・けほっけほっ・・・」

結衣は精液を全て口の中で受け止めてしまったせいかわせてしまっているようだ。その姿をみて心配ではなく興奮している自分は幾分、人としての道徳が欠如してしまっているらしい。

得も言えぬ征服感が性欲の快感を遥かに凌駕した。絶世の美女とも言っても誰もが疑わない女性の口を身勝手に犯しているのだから。「えへへ・・・。きもち、よかった?」

顔についた精液を拭き取りながら愛らしい笑顔を見せた。それがまたいじらしくて直ぐにでも下半身が熱くなってしまう。

「結衣」

「どうしたの、ひつきー・・・んん!」

結衣をそつと抱き寄せると強引に口の中に舌をねじ込んだ。逃さないように背中をしつかりと両手で包み、脚を絡めあつた。舌に己の精液が付着した。自分の精子を口に含むのは少々気持ち悪いが、結衣の口内を賞翫するためには致し方ない。

全身に伝わる彼女の柔らかな身体が少しだけ緊張からか、強張っている。

「ぷは…。ひつきい、今日はすつごくはげしいんだね」

「その、、今日ちよつと色々あつたからな」

「そうなんだ…。それって、聞いても良い?」

そう言うとき結衣は首元に顔をうずめるとねつとりとした舌で舐め上げ始めた。この状態のまま話せということだろうか。気持ち良すぎて会話どころじゃないんですけど・・・。やば、超気持ち良い。

「あの、結衣さ…。それ…よすぎて」

「れる…。ちゅ。あむ…。なくに、ひつきい?」

結衣はわざとらしく厭らしい粘着音をたてながらやめようとしな。おまけに左手を後ろから回し俺の顔に絡みつかせ、反対の手で、果てたばかりの愚息を扱き始めた。艶かしく腕を這わせつつ亀頭を指の腹で痛みを生じないギリギリの力加減でさわさわと刺激した。

「んぐ・・・、うあ、、ゆい…」

思わず情けない声が漏れ出てしまう。

「ぺろ、ちゅっちゅっ。じゅる。んく?どうひたのく?」

あやすような伸びた声で理性が奪われていく。あれ、俺何話そうとしたんだっけか?

「…なんでも、、ない。うあ…」

「ふふふ。ちゅ、れろお、ぺろ。後で聞いてあげる」

そう言うと結衣は逆に強引に押し倒してきた。両手を掴んで頭の上に持つてくると左手でこちらの両手を押さえつける。縛り上げられた様な体勢にされ、どうなるのだろうか。表情を見ると怪しげな笑顔で見下ろしているようだ。

結衣の顔が近づいてきた。キスをされるのだろうか。期待をして目を閉じてみたのだが中々唇に柔らかい感触が伝わってこなかった。

恐る恐る目を開けてみると、彼女の大きな眼が目の前にあった。先程の妖艶な誘い顔のまま観察するようにその場を動かない。

「…どうしたんだ？ゆ…いっつむぐう!!!」

このまま見つめ合って興奮を高め合うのだろうかと気を抜いた瞬間だった。一気に口を奪われ、隙間を縫うように先程まで肉棒を舐めていた熱い舌が侵入してきた。歯茎を何周も舐め回し舌の付け根を何度も突つかれる。ねぶり回すような獰猛な侵略がしばらく続いたかと思うと、今度はなめらかな舌触りを堪能させるかのように口蓋を這わせた。

あまりの快感に脚をバタつかせて悶えてしまう。しかし、結衣はそれを許さないと云わんばかりに自慢の御脚を間に滑り込ませ、もう片方の脚をこちらの脚に絡ませた。豊満さとしなやかさが共在した魅惑の極致とも言える軀を押し当てつつ、全身を揉みほぐすように滑らせる。暴力的な両胸の果実が織りなす快樂の境地によって己の硬直が限界を越えて膨張しきっていた。

健全な男子であれば、一度は憧憬したであろう悦楽が今まさに、自分の眼前に繰り広げられている。男にとってコレ以上無い充足感が身体中に染み渡った。

弾けるようなみずみずしい豊胸を自在に摩擦させ肉体を愛撫し続けていた。同時に肉棒を強めの力で握り激しく上下に動かして攻め立てている。

「結衣、…こんなの一体どこで覚えたんだ？」

疑問に思ったことを正直に口にしてみた。勿論、こんなにも様々な方法で悦ばせてくれる彼女の利他的とも言える癒しに対してはい

ちやもんすらつける余地が無いことは明白なのだが。

「さあ、どこでしよう？」

別に変なところで覚えたとかじゃないからねと付け加える。答える気は無いようだ。意地悪そうに微笑むと結衣は自身が我慢できなくなったのか、腰の上に跨り挿入の体勢に入った。

「ヒツキーは動かないでね」

「え、なん d 「動かないでね？」・・・アツ、ハイ」

彼女にしては珍しく専断的な態度だ。先程の強引な口奉仕を根に持っているのだろうか。当然、大人しく従うしか残された道は無い。

結衣は手淫を止めるとそのまま陰茎をしっかりと掴み自らの秘所にあてがうと緩やかに腰を落とした。

「んんう・・・」

尖先が割目をかき分けて侵入していく。間もなくして全体が温かくぬらぬらとした感触に包まれた。じんわりと広がっていく快感に身体をよじらせてしまう。

しかし、またもや結衣はそれを許してはくれなかった。俺が動きそうなことに気がつくと目を見開くほどの反射神経で腕を張り、肢体を押さえつけた。

「だめだよ。。。んん！ふう！ああ・・・」

結衣が器用に前後に腰をグラインドさせると、肉棒を根本から持つていかれそうな快感が襲ってきた。腰が動く度に目の前で、たわわに実った彼女の巨乳が見境なく暴れている。

膣奥に伝わる刺激を堪能した後、結衣は脚をベッドについてしゃがむような体勢になった。下の口で肉棒を飲み込んだまま蠱惑的な表情でこちらに顔を覗かせる。

「ねえ、ひつきい・・・わたしね、さつき凄く苦しかったんだよ？」

そういうと乳首をつねりあげた。乱暴に男の乳突をこね回される。どうやら相当おかんむりのようだ。

「その、、悪かった」

「だめ、ゆるして、あげない」

結衣は耳元に口をやり、わざとらしくクチャクチャとした粘着音を

鼓膜に流れ込ませた。

「くちゅ．．．れるお、ぴちや、ちゅちゅ、ちゅ：ひつきい、すき」
結衣の腰が早くなった。テンポよく打ち付けられる上下の摩擦に早くも限界を迎えそうになってしまう。耳穴と乳首と愚息を抵抗も許可されず、なすがままに犯される。

夜の結衣は普段とは打って変わって非常に積極的だった。恥じらいを持ちつつも性に貪欲で底が見えない。

結衣は両手を俺の顔に添えて唇を合わせた。彼女に合わせて舌を出す、口を大きく開けて彼女の口に迎え入れられた。フェラのように頭を動かし、舌の裏側を重点的に責められた。同時に舌の付け根に結衣の舌が侵攻し這わせるように蠢いている。

「んちゅ．．．ちゅ、じゅ、じゅ、じゅぼ」

休む暇もなく口内を蹂躪された。
息が苦しい。

酸素を求めて彼女から口を放そうとした。ところが、結衣の両手が頬を挟み込み、逃すまいと捕らえられてしまった。

「くちゅ、べろ、じゅ、じゅ、じゅ、じゅ。ちゅぱ、じゅるるるー！」
結衣はこちらの様子などお構いなしに口内を自由に弄んでいる。このまま自分が満足するまで放してはくれないのだろうか。結衣の腰は段々と速くなっている。

上下の動きに加えて亀頭の部分を舐るようにグラインドさせ、精液をねだっている。

意識が朦朧として視界がぼやけてきた。酸欠になると快感が増幅するのか．．．。苦しいはずなのに、気持ち良すぎて今にも達してしまいそうになる。でも、このままだと、いく前に逝ってしまいそうなんですけど．．．。

「うあ、ひよ。ゆ．．．い。く、るひい」

「ジュルルルル！んふふふ、らくめ！ちゅ、ちゅぱ、ちゅぱ」

もう身体から力が抜けてきた。焦点も定まらず意識が闇の中にまどろんでいく。視界が暗黒に飲み込まれるすんでのところであろうやく結衣が口を解放した。

「ぶはっ…はあ、はあ」

まるで海の底から生還したかのように必死に空気を大きく吸い込んだ。当たり前前にやっていたことがこんなにも有り難いことだったとは。呼吸ができることに感謝をする時が来ようとは夢にも思わなかった。

その様子を見て、結衣は満足そうにこちらを見下ろしている。口の周りにはお互いの唾液がまとわりつき、てらてらと怪しい光を放っていた。

「じゆる、、ねえ、反省した？」

「…はい、すみ、ません、で、した」

「もう限界？」

「その。休ませて、もらえると…嬉しい」

「そっか。でもこっちはカチカチだよ？」

結衣の言うとおり、憔悴しきったはずの精神に反して、下半身の硬直は類を見ないほどに頑強だった。キスの嵐の最中も結衣は腰の動きを緩めること無く、振り続けていた。気を抜けば今直ぐにでも果ててしまいそうだった。

「じゃあ、動くね？」

こちらが承諾の合図を目で送ると、結衣は下半身に意識を落とし、後ろに仰け反って、引き締まった尻を上下させやすい体勢にする。そして、待ちに待っていた仕上げの奉仕が始まった。

「んんん！ああ！はあ!!あう…！ひつきーの、びくびくしてる…」

絶え間ない快樂の波が打ち寄せる度に玉袋から子種が送り込まれ、今にも精液が噴き出しそうになる。膣肉のヒダがそれぞれ独立して肉棒を愛撫し、中の精子を一つ残らず絞り出そうとしていた。同時に結衣は下半身に力を入れる。入り口をきつく締め上げて砲身に射精を促した。目を閉じてペニスに伝わる極上の奉仕を味わう。

早く全てを開放して楽になりたい。

いや、我慢してもっと、この快感を味わっていたい…。

相反する欲望がせめぎ合い、煩惱が全身を埋め尽くした。

薄っすらと目を開けて彼女を見た。

目が合う。

結衣は悶える夫の姿を見て愉快なようだった。

腰を振る速度が上がる。それに合わせて肉壁が列をなして愚息を刺激し、陥落させようとしている。男がプライドも何もかもを捨て、あるがままをさらけ出した情けない姿を愛玩される感覚。当初は抵抗があつたものの、毎晩のように結衣に犯し、犯されるようになってからは、より深い男女の快楽への媚薬として昇華されていた。

必死に身体に力を込めて蓋をしようにも、絶え間ない抽送もあつて、限界はそう遠くない所まで来ていた。

「ひつきー、イキそうだね。出したい？」

結衣が誘惑するように口元を上げて艶かしく囁いた。なんという愚問だろうか。

「ああ、もうイキそうだ」

「うん、わたしも…」

そう言うときまた結衣の顔が近づいてきた。今度はお互いが欲望をぶつけ合うような暴力的な接吻ではなく互いの愛を確かめるように舌を絡めあつた。

「ちゅう、れる、くちゅ、ちゅ、ちゅば、…」

唇が離れると唾液の糸が細く伸びた。高校の時よりも長くなった結衣の綺麗な髪が降りてきて、頬を撫でる。結衣はその髪をかき上げると艶かしく微笑んだ。

「動いて、ヒツキー」

「ああ」

もう一度結衣を抱き寄せた。既にお互いの汗でびしょ濡れになった身体が触れ合うと、小さく弾けるような音が響き渡った。彼女の大きな乳房が収まりきらずにはみ出てしまっている。我慢できなくなり、手を添えると乳腺をなぞるように愛撫した。

「あう…。気持ち良い…」

彼女の意識が胸に移ったことを確認すると、すかさず大きくも締まった形の良い臀部をしつかりと掴み肉棒を打ち付けた。

「あああああ！ひつきい！！やめ…！んんんんん！！」

彼女の嘆願は耳に入ったが受け入れられる状態ではなかった。

ここまでのセックスで、自分もかなり限界間際だった。その前に結衣を絶頂させなければ。

御居処を掴んだ腕に合わせて腰を浮かせる。膣奥に強い衝撃を加え続け、彼女の堤防を徹底的に崩した。

精管から何かが上り詰めてくる。

「結衣、、、出る!!」

「あああああああーひっつきー!!中に!!お願い!!」

結衣が中出しを乞う。

「、、、良いんだな?」

「ああん!はあ!あああ!だして!赤ちゃん、、、ほしいの!」

これまで、避妊や膣外射精で終えていたので思わず真意を疑ってしまっただが、そういうことなのだろう。結婚してしばらくになる。頃合いだ。

こちらとて外に出すという気遣いは出来そうにもない。

「ゆ、、、い!!」

「ひっつき!!あああああああああああ!!」

肉欲の権化が硬直から一斉に噴火した。一度に吹き出る液体の量が多すぎて破裂しそうなほど海綿体が膨張し、精管を突き抜けた。

これまでに感じたことのない快感に白目をむいてしまいそうになる。

肉棒の律動が六回、七回、八回ととどまることを知らない。ドクドクと彼女の小さな肉壺に体液が注がれていった。結衣の膣肉が呼応するように収縮を繰り返し、ペニスに残された精子を吸い尽くした。

結衣が自身の人差し指を咥え、必死にそれを受け止めている。

彼女もまた、覚えたことのない強烈なオルガスムスをその身に受け、電撃に打たれたかのように激しい痙攣を繰り返していた。

竿のポンプが落ち着きを取り戻したのはそれからしばらく経ったあとのことだった。長い射精だった。二回目とはとても思えないほどの量の精液が溢れ出た。

結衣は全てを出し尽くしたかのように身体をベッドの上に投げ出している。

か弱いその体を庇うようにして横になり、虚ろな目で先程の性感を想起していた。

今も尚、結衣はその妖艶な肉体をビクビクと跳ね上がらせていた。意志に反して、軀はオーガズムの余韻を享受しているようだ。

結衣を貫いていたペニスを秘所から抜き取ると白濁した子種が鈍い音とともに溢れ出た。

「あう…」

彼女の口から切ない嬌声が漏れる。目が合うと結衣は心から幸せそうな笑顔をを見せてくれた。

「えへへ。いっぱい出たね」

絞り出すような声だった。砂漠よりも乾ききっていた欲望が数ヶ月ぶりの恵みの雨を受けたかのように多幸感と充足感に満たされていく。

「ああ…腰が砕けた」

「うん。すごかった…」

そう言うとき赤子のような這い寄りでこちらに近づく。結衣が腕を首に回してきた。同じように結衣の華奢な軀を抱きしめると得も言えぬ幸福感が押し寄せてきた。

ベッドのシーツは既に互いの体液で、見るも無残な姿になっていた。今日交換したばかりの新品だった気もするが、早くも明朝、洗濯の運びとなりそうだ。

長い射精を終えたあとは当然だが、大きな喪失感と倦怠感に襲われる。先程まで、柵の隅に追いやっていたはずの理性が急ピッチで回帰しようとしていた。

ようやく思考が鮮明になってきた頃には濡れていた身体もすっかり乾いて結衣とのピロートークも終盤に差し掛かっていた時だった。

こんな時に話す話題であるかどうか躊躇したが、仕事場での智佐吹さんの言葉を思い出した。どうやら俺は親しいものに対して嘘を吐

くことが困難らしい。

「結衣」

「うん。どうしたの八幡？」

純真な眼でこちらを見ている。彼女のそんな顔を真正面から見てしまうと固めていたはずの決心が鈍ってしまう。間髪入れずに告げることにした。

「今日仕事場に、雪ノ下さんが現れた」

結衣の時間が一瞬止まってしまったかのように動かなくなってしまう。また。

大きく目を見開いたその顔は、たった今耳にした事実を懸命に嚙下しようとする努力しているようにも見える。

しばらくして、結衣は陰りの見える顔を下に向けると短く「そうなんだ」と呟いた。

続く

第九話

寝覚めは最悪だった。

朝起きて、食事を取り、結衣と挨拶を交わして駅へと向かう。平日毎日行っているはずのルーティンワークすら気怠さを覚えてしまうほどだった。

駅のホームで電車を待っていた。

出向先に向かうため、いつもとは違い東京方面ではなく、生まれ育った千葉方面だ。ホームでは既に多くのスーツ姿の男女や制服を着た学生たちが規則正しく黄色い線の内側で整列している。携帯で友人と連絡を取る者、カバーに包まれた紙の文庫本を取り出して読書をする者。ここにいる人間を区別するには外見でなく行動で判別する他無い。他の人間からしてみれば自分はどう写っているのだろうか。改めて日本人の右へ倣え精神は常軌を逸していることを自覚した。

鬱屈した時は非常に周りの情景に目が行き情緒的になってしまう。故郷に向かうはずの道のりが、ここまで重苦しくゴルゴダの丘へと向かうような心情になるとは自分でも意外だ。

昨晚、これ以上無いほどの深い愛の交わりを結衣と行ったのにも関わらず、心中は陰惨としている。

原因は勿論、その結衣だった。

就寝前、結衣に雪ノ下さんが仕事場に現れた事を伝えると、流石にその晩の結衣の表情は優れなかった。自分も告げるタイミングを間違ってしまったと後悔した。目が冷めたら何かしらのフォローを入れておかねばならないと思いい目を閉じて明日に備えたはずだった。

ところが、翌朝には結衣はその事など知らないかのように明るく振る舞っていたのだ。あまりにも元気なおはようの挨拶に熱いキス。珍しく美味な朝食。不審な点をあげるとしたら枚挙に暇がなかった。目まぐるしく変わる移り変わりに動転し、気がつけばスーツを着て玄関の外に送り出された後だった。

これを果たして切り替えの早さと言っても良いものなのだろうか。

愛する妻の顔が幸福に満ちていることは喜ばしいことであるはずだ。

だが、豹変とも受け取れる彼女の態度に背筋が凍りついてしまったというのが正直な感想だった。今朝の彼女は笑顔の背後に、雨に濡れた儂げな少女のような危うげさが見て取れた。だが、指先で触れると、消えてなくなつてなくなつてしまひそうな存在の希薄さに反比例するかのように彼女の声は強くその在処を主張する。

解せないのは、それほどまでに印象的だった彼女の表情が頭の中では非常に空疎であることだった。俺は今、駅のホームで人々を家畜のように詰め込んだ鉄道を待っている。自宅から出発してまだ一時間とも経過していない。それなのに、比企谷・・・いや、由比ヶ浜結衣という女性の記憶の断片が緩やかに剥がれ落ちていくような感覚に襲われている。そしてその隙間を埋めるように別の女性の記憶と思ひ出が上塗りされ、焼き付かれていくように。

早く電車に乗りたかった。雑踏の中でただ呆然と立ち尽くす毎に自分の中の結衣が別の誰かに入れ替わつてしまうような気持ちになる。

そして、あたかもそれを喜々として待ちわびている自分が最も理解できない。頭の中で響く声は、明るく光を照らすような少女のものではなかった。もつとお淑やかで風に吹かれると消えて無くなつてしまひそうな、果敢無い少女のものに思える。

ほどなくして頭のなかに響いたのは幅のない男性の声だった。それが駅の場内アナウンスであることに気づいたのは、電車が停まり目の前の扉の中から乗客の塊が解き放たれた時だった。

群衆は扉の前に棒立ちとしていた自分を瞥見しながら降りていった。慌てて袖に逃げるように立ち退く。降りた数よりも遥かに多い数の乗客が一斉に電車の中へとなだれ込む。自分の力で歩かなくとも、自然と追いやられるように押し込まれた。雑踏の中から上を見て、余っていた吊革を藁にもすがる思いで掴んだ。何度も脚を踏まれたが気にならなかつた。こんなものは社会人の日常の一部として享受すべき事だ。

間もなくして、ドアが閉まつた。想定以上の人間を詰め込んだせい

か中々発車しない。普段なら、苛立ちをおぼえるだろうが、気持ちの整理が落ち着かないまま駅にたどり着くことは避けたかったので寧ろ感謝の意を述べたい。

そんな願いも束の間、慣性で身体が右に流れた。また脚を踏まれた。

走行中、景色に目をやる心の余裕は無かった。結局、目的地に到着するまで、車内の天井から吊るされた、最近流行りの若手女優がイメージキャラクターとなっていている転職サイトの広告を虚ろな目で見ながら、今朝の結衣と頭の中に住む輪郭の見えない少女の事を交互に思い浮かべるだけだった。

駅に到着するとこれまた夥しい数の乗客がバケツを引っくり返した水のように一斉に流れ出た。急流の流木の如く身体をぶつけながら流れに乗って下りの階段の元へと向かっていく。

降り口は複数あるものの幸い改札口は一箇所だけだった。思いの外、つづがなく目的地にたどり着くことが出来た。智佐吹さんの不明瞭なメモ書きに躍らされることも無かったな。メモ書きに書かれていた改札口近くのコンビニは確かに改札を出てから直ぐにあった。仕事の待ち合わせ場所としてどうかとも思われるが、意外にも場所が広く駅の中では最もわかり易い場所であることは頷けるから文句のつけようがない。

智佐吹さんからの説明によると迎えには雪ノ下さんが来るということだった。昨日の夜の時点で、ショートメッセージで自分の携帯電話にも『明日のデートよろしくね☆』と連絡が入っていた。プライベートであれば返信を躊躇ってしまうような内容ではあるものの、仕事の連絡だからそうもいかない。少しだけ間を置いてから返信しておいた。

携帯電話を取り出して通知の有無を確認した。まだ雪ノ下さんからの連絡は入っていなかった。時刻を確認してみると9時30分か。約束の時刻は10時なので、かなり早めに到着している。連絡が来るはずもない。

本来はもう少し家でゆっくりしてから家を出る予定だった。しか

し、結衣のこともあって、どうにも一緒に居ることに居心地の悪さを感じてしまったので早めに出ることにしていた。

住み慣れた場所から離れ、一人静かに人海の中で浮いたように待っていた。無人島に流れ着いた漂流者のようだ。そのおかげもあって一人の時間が作られ、徐々にはあるが冷静さを取り戻すことが出来た。もう、昨日のように雪ノ下さんの登場や会話で動揺をすることは無いだろう。会ってから直ぐにでも仕事のスイッチを入れることが可能に思えた。

ふと、携帯の着信音が鳴った。着信名は『雪ノ下陽乃』と表示されている。応答のボタンをタップし、携帯を耳に当てると澆刺として、耳障りな女性の声が聴こえてきた。

『ひゃっはろー！比企谷君』

「おはようございます。私は集合場所に到着いたしましたですが、雪ノ下様はあとのくらいでいらっしやいますか？勿論、お急ぎにならずとも問題ありませんが」

『えー!?早すぎない!?なんかゴメンね…。想像以上に現地入りがあったよ』

「いえ…。こちらの事情もあり、早めに出発した事もあったので」

『そっかそっか。あと、ゴメンついでなんだけどさ…。今日行けなくなっちゃった!』

「え、それは本当ですか？」

やったZE☆でも、それはそれで困るなあ。初対面の人が迎えに来るということなんじゃ…。

『…なんか、比企谷君嬉しそうじゃない?』

「とんでもない。誠に残念です」

声色でバレたのだろうか。一応形だけでも取り繕っておく。

『…。まあ、いいけど。それでね、代わりの人なんだけど、既に決めてあって、もうそっちに向かわせてあるからさ。5分もすれば現れると思う!』

用意があまりにも良いな。この人、元から来る気なかつたんじゃないかと懷疑的になってしまう。

「そうですか。因みに代役の方の名前や外見の特徴とかを教えてくださいとありがたいのですが」

『あーそれね。比企谷君、その人と初対面じゃないと思うから別に言わなくてもわかると思うんだよね。誰だと思う？』

「なんでスペシャルゲストみたいな風になってるんですか…」

この人のあまりのマイペースさにこちらも思わず、総武高校時代の口調に戻ってしまった。あと、スペシャルゲストクイズに乗るつもりは毛頭ない。

『とくにくかく！そういうことだから。じゃ、後はよろしく！期待してるよ、比企谷君』

通話が切れた。

言いたいことだけ言って切っちゃったよ。え、どうすんの？俺仕事で来てるんですけど。ここまで、放任なのなかなか無いよ？

とはいえ、ぶーたれてもどうにもならないので、仕方なく切り替える事にした。資料は人目もあることから堂々と読むわけにもいかなかったもので、文庫本を取り出して読みながら待った。しかし、開いてみたもののどうにも落ち着かない…。せっかく開いたライトノベルも1ページ読んだだけで閉じた。

因みに読んでいたのは死んだ魚の目をしたぼっち高校生が美少女二人と共に悩みを解決していく物語だ。そんな現実がもし自分に起こるものなら一度くらいは体験したいものだ。

本を鞆にしまった後は、行き交う人々を観察してみることにした。なんだかんだで人間観察の趣味は学生時代の頃からの趣味の一つと言っても良いのかもしれない。暇さえあれば道行く人の背景を勝手に想像してみるなんて事をやってみたくなる。

というわけで混雑を注視してみた。老若男女、私服であったり、ビジネススーツだったり。因みに夜にスーツの男女が夜の駅前で盛り上がりつついたら多分新入社員。

その中でふと背の高い女性が目に入った。服装は黒一色で長ズボンを穿いている。足が長く、モデルと見間違えほどの圧倒的存在感を放っていた。当然のことだが道行く男たちが軒並み振り返っている。

中には話しかけようと後戻りする者もいたが、女性が早歩きで移動している為、断念したようだった。いや、そこは頑張って追いかけるよ！と言いたい所だったが、ナンパ師の芦間（勿論嘘だが）曰く、歩くのが早い女性は成功率が低いらしい。

一体どんな女性なのだろうか。気になって顔を見ようにも上手いこと顔が隠れてしまっていて、よく見えないな。髪は黒くて長い。毛先まできちんと手入れされている。その姿は段々と大きく、鮮明になっていく。

…てなんかこつちの方に近づいてないか？

…。

……………。

……………。

俺は夢でも見ているのだろうか。

彼女の顔を見たその時、自分の世界が止まった。

その女性は俺が良く知る人物だった。

俺は彼女と数年間会っていないかった。

逃げるように別れを告げたあの日から。

彼女はあの時と何も変わらなかった。

俺はその長くてきれいな黒髪が好きだった。

その凛々しくも澄み切った眼が好きだった。

表では強い生きる女性であるところを見せながらも、本当は少女のような不安定な弱さを内に秘めた彼女が好きだった。

彼女は今朝、自分の記憶の中にいた儂げな女性によく似ていた。

いや、その女性そのものだった。

心の中にかかっていた靄が晴れていく。

馬鹿馬鹿しい。

靄をかけていたのは自分自身ではないのか。

会えなくなつてから、何度彼女の事を思い出しただろう。
会えなくなつてから、何度彼女の事を忘れようとしただろう。

会えなくなつてから、何度彼女との未来を考えただろう。

パンプスの靴音が大きくなる。

彼女の影がこちらに緩やかに伸びてくる。

何かに取り憑かれたかのように身体が動かなかつた。

彼女は目の前で立ち止まつた。

目が合うと、その美麗な口元を僅かに上げた。

雑踏の騒音をかき消すほどの心の鼓動が聴こえてくる。

「比企谷君」

「雪ノ下……」

その女性……雪ノ下雪乃はあの時、憧れたままの可憐さであつた。

人並みの中に二人だけが取り残されたような孤独と、長く忘れていた高揚が湧き上がってきた。

撫でるような風が雪ノ下の髪をなびかせる。

美しい黒髪が光をまばらにちらつかせその姿を輝かせた。

その顔を見つめる度に、彼女を想う度に、考えてしまうのだ。

あの時、俺は間違えてしまったのでないかと。

（第一部完）

第二部 第十話

曇り空だった。上を見ると、一面が雲海で埋め尽くされている。朝のニュースでの天気予報では日中は雨は降らず、夜遅くから雨脚が強くなるらしい。自分が帰るまで持ちこたえてくれるかどうか怪しい雲行きなのは否めなかった。

残業があるとしたらびしょ濡れで帰宅する羽目になりそうだ。

雪ノ下と劇的な再会をしてからというもの、その後は、出向先の会社の所在地に向かうまでのタクシーの中では思いの外、全く話が無かった。お互いが後部座席の左右に座り扉にもたれ掛かるようにして窓の外を眺めている。

途中、雪ノ下のことをちらと見てみるが彼女は凜とした表情のまま、こちらの様子を窺うといった素振りも皆無だ。まるで一人旅の中、窓外の景色を嗜むかのように彼女の世界に自分という存在が介入できる余地が無かった。運転手という第三者が居るからか、話すのが憚られる事を抜きにしても雪ノ下がこちらとの会話を拒んでいるのは明らかに見える。

タクシーは法規定の速度を一律に保ったまま走行を続けていた。車内にラジオや音楽は流れていない。普段なら煩わしく感じる運転手の趣味も今ばかりはこの沈黙を和らげるためにも欲しい。

雪ノ下の横顔をずっと眺めていた。

美しく均斉の取れた顔立ちをじっと見つめていると総武高校時代を思い起こさせる。しかし、大人になったからか、長く艶のある黒髪から覗かせる真っ白な耳が妖艶さを醸し出すようになっていた。

自分と彼女の距離は初めてあの奉仕部の教室であった時よりも更に遠くなってしまうのではないだろうか。

再会した時の微笑を浮かべた雪ノ下はあたかも幻影だったと思わされるほどに、全く別の女性がそこに存在しているような感覚に陥った。

未練がましい男だ。

お互いが自ずから距離を取った。それなのに今更、彼女に近づけないことに懊悩する権利があるものか。

深い溝がそう簡単に埋まると思い上がっていた自分が恥ずかしくなった。

当たり前だ。一生かけても埋まるかどうかすら分からない。

仕方なく、窓外の景色の移り変わりに目をやった。等間隔に並んだ街路樹が秒ごとに目の前を過ぎていく。信号の前で止まると、眼前のスーパーマーケットではタイムセールが始まっていた。店頭で野菜のたたき売りが行われており、多くの主婦が葉物類や根菜類の野菜を籠の中にこれでもかと詰め込んでいる。果たして、それほど食べるのか甚だ疑問に思えた。どの主婦も子沢山大家族の取材が来るほどの食材を買いこんでいるようだ。結局支払いの時に、通常の買い物よりも遥かに高額な買い出しになること間違いない。

また、タクシーが走り出すと先程すれ違ったような街路樹がメトロノームのように一定のリズムで瞳に映り始めた。駅からそう遠くはない場所に雪ノ下の会社があるはずだが、どうにも長いこと、この動く牢屋の中に勾留されているような気分になる。実際には手枷もなく自由に乗降も出来る空間の中で耐え難い窮屈さを感じていた。手もとの腕時計の長針は6を指していた。タクシーに乗った時は5を指していたことを考えると、たった五分しか経過していない。どっかの誰かさんが時間圧縮とか使っていないか疑惑を抱いてしまう。

雪ノ下は変わらずじつと窓の外を見ていた。その視線は景色に移ろうこともなく一点を見つめているように窺えた。気になって、彼女の視線を追ってみてもそこには何も無い。雪ノ下はただ虚空を見つめているとでも言うのか。

バックミラー越しに運転手の顔を一瞥したが、男は無表情で真摯に職務を全うしている。非常に手慣れたハンドル捌きと少々くすみがかかった手袋が経歴の長さを物語っていた。見た目は50歳半ばで男の若い頃の写真と愛娘であろう少女の写真が運転席の脇に飾られていた。少女は、現在は大学生か独り立ちして社会人になった年代だろ

う。

そんなことを考えていると程なくして、まわりつくような無形の違和感が肩についていた。

周りを見渡してみるが特に変わったところはない。雪ノ下も先程の姿勢のままだ。

静謐を破る携帯の受信音が鳴った。端末をポケットから取り出すと画面には芦間敏生と書かれている。どうせ碌でもない内容だろうとは思いつつも時間つぶしにはなるので開いてみた。

『どうしよう、比企谷。昼飯、いろはちゃんと食べる気がしない(；ω；) (ブワツ)』

想像以上に下らなかつた。Twitterにでも『会社で憧れのあの子と飯が食いたい』とかでも書き込めよと、にべもない考えが頭をよぎったが、とりあえず『まあ、自分から積極的に話しかけていけ』と返信しておいた。返信を終えてスマホをしまおうとした時にまた携帯がけたたましく鳴き声を上げた。芦間の返信が異常に早いのかと思っただがそれにしても早すぎる。

送り主は一色いろはだった。

『先輩がいないと芦間さんと何を話して良いか分からないので上手いこと回避するためのアドバイスください！——？——〇』

見事に噛み合っていない。

二者択一。取り敢えず返信を考えるか。

『早めに飯を食うか、今日は弁当があるから休憩室の方で食べるとか言い訳作れ』

はい、送信つと。

ダブルスタンダードは常日頃から導入済みだ。こういうのは、バレなきやOK。卑怯？ 怜悧と評してくれたまえ。

送信してから直ぐ、何件かのメッセージを受信したがこれ以上の返信は夜にまわすことにした。後はお二人さんに任せるとしよう。情けない政治家のような逃げ方のそれと似ているような感じもするが気にしない気にしない。元より、彼らの方が卑怯に思える。自分の力で人間関係は切り開くものだ。

携帯をしまったところでまた妙な気配を感じた。

思わず雪ノ下の方を見たが特に変わったところはない。

運転手からだろうか。バックミラーからは運転手の死角になっており、こちらが後部座席真ん中に寄らない限りは確認できなかった。

もう一度雪ノ下を見ると彼女と目が合った。

「……」

雪ノ下は咄嗟にふいと目を逸らした。やはり、今は距離を詰める気は無いらしい。

結衣という妻がいるとはいえ、その彼女と昵懇の間柄とも言える雪ノ下とは良好な人間関係でいたいと思うのは当然の心理……だよな。

結衣と付き合うようになってから、結衣も雪ノ下とは連絡が取れていない。

結衣が何度もメッセージを送ってみたのだが、一度の返信も無かった。因みに、俺は雪ノ下の連絡先すら持っていなかったので連絡のやりようがない。彼女に会えなくなったと気づいてからの結衣の落ち込み様は、まさに長年の片思いからの失恋を経験した高校生のもようだった。立ち直るのに相当の時間を要した。それ以来、彼女の話題を出すことは半ば禁則事項のようになっていた。茶化すつもりはないのだが、名前を言っただけいけないあの人状態だった。

自分も雪ノ下雪乃のことはそれ以来敢えて思い出さないように心に鍵をかけていたのかもしれない。

雪ノ下雪乃が目の前に現れたのはそんな時だった。

結衣が雪ノ下への連絡を諦めてから幾年と経過してからの突然の再会である。何から話せば良いものか、何の話題を振れば良いのかすら見当もつかない。

いや、それどころかどんな顔をすれば良いのかすらも分からない。

学生時代には沈黙が苦にならない距離感だった二人の関係も時間という要素が加わればいとも簡単に崩れてしまう。俺と雪ノ下雪乃が築いてきた絆とやらは存外脆いものだったのだろうか。在りし日の彼女の残滓にすぎるような自分の虚しさが抉られるようだ。

いや、そもそも彼女は どうして俺の前に現れる決心をしたんだ？だ

が、いくら考えても思い当たる節が見つからなかった。

車が止まった。運転手がサイドブレーキを引いて決算のボタンを押した。どうやら目的地に到着したらしい。

先に降りて雪ノ下を待った。

雪ノ下が料金を支払い、領収書を素早く貰うと流れるような動きで車を降りた。

「お待たせいたしました。こちらへどうぞ」

儀礼的な言葉遣いで雪ノ下はオフィスビルの中へ案内をする。俺たち二人が、まさか高校時代に部活を共にし、蜜月に近いほどの関係を深めかけた間柄であったと言ったとしても周りの人間は信じないだろう。

こぢんまりとしたエントランスをくぐり、エレベーターへと向かう。灰色のコンクリートで包まれた重厚な空間だった。その雰囲気と反してビルの一階では整体マッサージ店の陽気な音楽と温暖色のライトが彩りを飾る。

沈黙の中でパンプスの歯切れのよい音が響き渡った。

ボタンを押して、機体が降りてくるまで横に並んで待つ。雪ノ下の横顔を窺うが彼女は毅然とした表情のままじつと階数を見ていた。

俺はというところから目が離せなかった。

雪ノ下が付けているリボンが、かつて俺がプレゼントした物であると気がついたのはその時だった。

そのリボンは高校卒業をした後のいつかの年、新年を迎えて雪ノ下の誕生日に俺がプレゼントしたものだ。小町に頭を下げて頼んで一緒に買いに行つてアドバイスを貰いながら選んだりボンだったのでよく覚えている。あの時の小町の要らぬ気の回し様といったら八幡史あぶつちぎり之余計なお世話だった。

プレゼントを渡した時の雪ノ下の顔を思い起こされる。あまり表情を表に出さない雪ノ下がプレゼントを渡された時、珍しく破顔したのが印象的だった。

惚れたかと聞かれたら、あの顔見て惚れない男いないと思う。結衣

には言えないけども。

あれから女性に貢ぐ男性の気持ち痛いほど分かったのは内緒の話だ。

因みにそれ以来女性を喜ばせるためのサプライズを自分なりに本気で考えるようになり、小町に精神科への通院を勧められた。初診半額のパンフレットを持って現れた時にはどうコイツを料理してくれようかと我が妹ながら本気で悪の顔になったものだ。

話が逸れてしまったが、雪ノ下のリボンは俺が買ってプレゼントしたものだ。フラれた男に貰ったプレゼントを雪ノ下が後生大事に身に付けているのが正直意外だった。今時のCMなら『男からのいらなくなつたプレゼントはメル●リで転売しよう』とか言われているご時世だ。彼女がどんな気持ちでそれを付けているのか分からないが、話しかけずにはいられなかった。

「それ…」

「…何ででしょうか？比企谷様」

雪ノ下が振り返つて、淡白な変事を返す。彼女に様付けされるのは歯がゆい気分がした。それなら、ヒキガエル君と罵倒される方が幾分かマシに思える。その視線は冷たいと言うよりは無関心に近いようだった。

「いや、その」

その目に思わず、怯んでしまう。総武高校の頃とは違った緊張感だ。

それでも、この距離感が嫌だった。もつと彼女の近くに居たい。

胸の疼痛に耐えられるほど自分は屈強でもなかった。

気がつけば抑えていた欲望が少しずつ芽生えようとしていた。

「リボン…付けてくれてるんだなって」

「っ…」

雪ノ下は目を大きく見開いて咄嗟にそっぽを向いてしまった。泡を食ったような狼狽ぶりだ。こちらからは彼女の表情を窺い知る事が出来なかった。ここから見えるのは紅潮して真っ赤になった耳だけだった。

雪ノ下はリボンに手を当てて動かなくなっている。

既にエレベーターは到着しており、扉は待ち人が来ず開いたままだ。

「…。雪ノ下さん、エレベーターが来たので乗りませんか？」

こちらが気まずさに耐えられずこの場を取り繕うように言葉が早足になった。

「…。そ、そうですね。申し訳ございません・・・きゃ！」

周りが全く見えていないのか大急ぎで機内に入り込もうとしたせいで、自分とぶつかってしまった。軽い衝撃が肩に、内なる衝撃が心臓に走った。

「ご…ごめんなさい…」

「お、おう」

お互い素が出てしまっている。お互い成人もとつくの昔に終えたはずだが、初々しい思春期の男女に戻っていた。

雪ノ下がたどたどしく階数のボタンを押すと扉がゆつくりと止まった。小さな機体の中、俺は左奥を、雪ノ下は対角線上に階数のボタンの前を陣取っている。そういえば人間の心理で人間が乗る度にエレベーターの中の間人はサイコロの目と同じような位置取りを自然と行うと聞いたことがある。

雪ノ下の耳は未だに赤かった。その姿を見ると、こちらまで顔から火が出そうになってしまう。狭い空間の中で互いの荒くなった吐息が響いた。

いかん。目のやり場に困る…。

エレベーターの階数表示を見て気分を紛らわそうとした。同じように雪ノ下も上を見るものだから、また恥ずかしくなった。

『8階です』

アナウンスが流れた。一人そつと胸を撫で下ろす。あのまま一緒に居たらどうにかなってしまいそうだった。

先に降りた雪ノ下が続いて、降りると横に長く続いた廊下が広がった。灰色と黒色の正方形が交互に敷き詰められたようなカーペットに白い壁。とその奥へ誘われるように足を進めた。部屋の側にある

看板には応接室と書いてあった。

「いちぢらへんどうぞ」

ようやく冷静さを取り戻した雪ノ下に案内されて部屋の中へ入ると6人用程の大きさの机と椅子が置かれていた。

彼女の浅薄な抑揚のない声が自分を仕事の顔に引き戻してくれた。

改めて切り替えるとうしよう。

襟を正すと土台のしつかりした椅子を引いて、席に着いた。

久しぶりに正面で雪ノ下雪乃と向き合った。

高校の空き教室に置かれた長机を思い出す。

心の荒野に広がったそれは平塚先生に連れられて初めてあの場所へ脚を踏み入れた時のような新鮮さと気怠さ、そして高揚だった。

続く

第十．五話

——都内とあるオフィスにて……。

芦間敏生は退屈だった。いつも仲良くしている同僚が不在、意中の女性とは食事に行けず、仕方なく食堂で誘われた他部署の女性と味気ない時間を過ごした。今日食事をした女性の話題は終始、フアツションの話からの自分自慢であった。何かと付けて最後には自分を近くに置けばステータスが高くなるという宣伝文句の押し売りというワンプターン戦法で辟易した。おまけに首元から漂う香水の臭いが鼻を刺すものだからせつかくの栄養補給すらまともにさせてもらえない。

そんなわけで、味気ない時間を済ませると、そそくさと席に戻ってだらけていた。

幸い両隣の席には誰も居ない。一人は出向、もう一人は昼食の休憩を取っているようだ。それをいいことに芦間はわざとらしく大きな溜息を漏らした。

八幡が居ないことを残念がっているのは芦間や一色だけではない。休憩時、芦間が一人で食堂に向かった時、すれ違う女性たちが驚いた目で見つつ、溜息をこぼす姿が見受けられた。

「あの。芦間さん」

「ん？はい、なんででしょうか？」

気がつけば、一人の女性が側に居た。いつも八幡話しながら歩いている時にとすれ違おうと、こちらを見ながら話している女性の内の一人である気がする。他の男性社員からの人気も高い、可愛らしいタイプだった。休憩室で独身の社員たちが彼女をものにできないかと作戦を練っていたのを芦間はちらと見たことがあった。その話題に既婚の男性も参加しているのがまたなんともアホらしい。愛人にでもする気だろうか。

芦間は彼女をじっと見た。他の社員がいる中で、男性社員に話しかける事に気後れしているのか、動揺が見られる。

「なにか気になることでもあったら、聞いてくださっても大丈夫です

よ」

芦間は彼女の口が開くのを暫く待っていたが、埒が明かない気がしたので、軽く次を促した。

「あ、ありがとうございますしゅ…」

女性は八幡と似たようなかみ方をした。

先程のパスが功を奏したのか、未だ緊張はしているものの、彼女の肩から力が抜けていき、落ち着いたように見える。女性は呼吸を少しだけ整えると芦間の目を見た。

「その、きよ、今日って比企谷さんは…」

「え、比企谷？」

驚いたような口ぶりを見せるものの、芦間はおそらく八幡についての話題だろうと予想をしていた。それ故に、その答えも直ぐに用意できるように頭の中の出荷棚に置いてある。

「あいつ出向で今日は居ないんですよ」

「え、出向ですか…。そうだったんですね、いつも芦間さんと一緒にいらっしやるから変だなくって」

女性は下を向きながら後ろで腕を組んでいじらしそうにしている。

別段この女性が珍しいというわけではない。

それに気づいていないのは本人だけだった。まさに知らぬが仏とも言える。

八幡は女性人気が高い。当初は、悪人のような細い目をした猫背の男に良い印象を持つ人間は少なかった。芦間も多分にもれずその内の一人だった。当初は出勤場所を間違えた営業マンではないかと揶揄されていたことも記憶に新しい。しかし、問題解決における手腕、驚くほどのお人好しさ、優しさに考えを改めた。ちなみに、女性人気が上がったのは八幡が眼鏡をかけ始めた頃からである。風采が上がらない男という第一印象は今やどこ吹く風だ。

芦間も女性からの好意の対象となることが少なくないが、女性との交流が多い方ではなかった。それどころか同姓と軽口をたたき合うといったことも滅多にない。狭い人間関係の中で一人生きてきたタイプの人間だろう。

彼にとって一人の時間は慣れていたし、割と好きな時間でもあった。休みの日は何もせず、呆けている時間も多し。勤務中にそんな風になってしまうのは御法度だが。

昼食を済ませると、恒例の眠気が襲ってくる。普段の彼ならありえないことだが、この日は珍しく睡魔に負けてもいいのかと睡眠欲に抗えなかった。

「いてー」

智佐吹千紗に起こされたのは今まさに眠りこける寸前のところだった。

「トシ、比企谷が居なくなつて一人寂しくなつちやつたの？」

芦間を下の名前のアダ名で呼ぶのは彼女くらいだ。芦間の性格を把握した上で、彼女なりの親しみを込めて接してくれているからこそ芦間はそう呼ばれることを許していた。

「千紗吹さん、俺ストレートですよ…、そんな、一部界限が好物の恋みたいなこと無いですつて。ま、自分は女性同士ってのは嫌いじゃないんですけどね」

オフィスにはあまり社員が居なかった。数人だけがパソコンに向かって黙々と作業を続けている。周りの社員はこちらの会話に全く興味が無さそうだ。

「あら、そうなの。じゃあ、いろはちゃんとご飯食べられなかったとか？」

「そうそうー。そうなんですよ。見事にかわされました…」

芦間は勘弁してくれと思いつつもおどけてみせた。眠気覚ましにはちようどいい一発だが、致命傷に近い。

完璧に近い芦間の外見設計の僅かな急所を的確に貫いてくる。中々に、陰險な上司だ。芦間は、自分が嫌われるような事をしたか記憶を辿るも思い当たる節はなかった。

「それで、メール来た？」

千紗吹は勤務中にだけかけている眼鏡をかけ直した。黒縁の眼鏡も彼女がかけるとファッションの一つとして映えるのが憎らしい。仕事中に八幡がかけている眼鏡と似ているのは気のせいだろう。

「いいえ、まだ来ていないですね。今朝送ったばかりですし、向こうはもう深夜ですからね。おそらく翌朝には来るかと」

芦間は素早く、心を切り替えた。

「そっか。予定の方は？」

「今朝のメールの内容って契約書の送付だったので、予定に関して言えばもう確定ですよ。現地時刻10月X日16時にC大学正門にあるクマの銅像の前集合。17時から企業説明会一時間、18時から2時間半で一次の面接で予約取れました！」

芦間は敬礼をして大げさに振る舞った。一部、空元気も含んでい。先日の残業のダメージが殆ど抜けていない。昨晩は終電を逃し、近くのビジネスホテルに泊まる羽目になった。そのホテルのベッドの硬さたるや、安眠を妨げる害悪でしかなかった。労災でも降りてくれないものかと悪態をつきたくなるような寝起きだった。

「了解、ありがとう」

千紗吹は献身的な部下を労った。彼女にそう言われるだけで疲れが吹き飛ぶという男性社員も少なくないが、芦間がそれを理解出来るまでには一生かけても足りないのかもしれない。

とりあえず一校の予定が決まった。海外の大学と面接の予定を決める際には一ヶ月近く交渉と連絡が必要になるのでそれなりに、根気がいる作業だった。芦間は学生時代に企業相手に採用面接の準備をしていた経験から慣れたものだ。

「そういえば9月のロスキャリだけど、私と、トシ、人事の島田さんで行く予定だったんだけどさ、もう一人必要になったのよ。それで比企谷君連れて行くこうと思っっているんだけど、どう？」

「比企谷ですか？自分は別に構いませんが、こっちが勝手にメンバー決めても良いんですかね？」

ロスキャリはボスキャリの二ヶ月弱ほど前にロサンゼルスで行われるキャリアフォーラムのことだ。例年コンサルティング会社や、会計監査法人等が多く参加している。ボスキャリに比べると小規模だが、それでも有名企業の多くが参加する大きなイベントの一つだ。

「島田さんから私の方で選んできてくれって言ってきたのよ。まあそ

の一言でお察しよね。私、他に連携取りやすい子あんまり居ないし」千紗吹は首をゆっくりと回しながら虚ろな目で自分の足元を見ながら言った。

芦間は八幡に渡すはずだったマツカンを口につけながら千紗吹の視線の先を辿った。芦間は甘い物が苦手だったので正直なところ、マツカンは飲むに耐えられない代物だった。それを逆に利用して、自分の眠気を覚まさせた。芦間は眼を千紗吹の方に戻すと、表情を柔らかくした。

「じゃあ比企谷連れて行きましょう。嫁に暫く会えなくなるからつてゴネそうではあります」

上司が欲しがるとの答えを勿体つけて返す。こうした方が彼女には効く事を経験から知っていたからだ。

芦間としても他の社員と行くよりかは八幡と行くほうが余程楽であったし異論は全く無かった。

「そうね、仕事なんだから我慢してもらわないとね」

そう言つて持ち場に戻った千紗吹の足取りは非常に軽そうであった。芦間にはその後ろ姿が浮かれているようにすら見えた。それにしてもいろはちゃんとはねくつと芦間にだけ聴こえるように独り言を漏らしていたが、触れないことにした。芦間とて露骨な釣り糸にかかるほど判断力を失っていたわけではない。

窓外は曇天だ。雨に降られそうな雲行きが怪しきだった。芦間は傘を持ってきていなかったもので、出来れば自分が帰るまではなんとか持ちこたえてほしいものだと思っただけ天に願ってみた。とはいえ、彼は神秘やオカルトの類など微塵も信じてはいない。

芦間はパソコンの画面に目を戻すとメールの受信BOXを開いてみた。画面には新規の受信メールが一件あると表示されている。差出人は先程話していたC大学の日本人会からだった。向こうの時刻は深夜を回っているはずだが、夜遅くまで課題をやっている合間に返信をしてくれたのだろう。芦間は自分の大学時代を思い出した。

メールを開封するとメールの入力者は彼がいつも連絡を取っている日本人会（JSA）キャリアの担当の女子生徒からだった。年齢に

反して落ち着いた性格であることが伺える文章で芦間の方が背筋を伸ばさねばならない時も多い。

芦間は内容を確認すると数分で返答を入力して送信した。

丁度その時、会議の呼び出しが入った。

芦間は席を立つと、持っていたマツカンを一気に飲み干す。喉の奥にまとわりつくような甘ったるさに眉をしかめながら会議室へ向かった。

会議が終わったら、緑茶でも飲もう。

芦間はそう決心した。

From: University of CXXXXX JSA
CAREER

To: 株式会社XXXX 人事部

件名: RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:
RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:RE:

本文:

芦間様

契約書の送付、ありがとうございます。それでは10月XX日、C大学にてお待ちしております。イベント近日になりましたら、また私の方から当日の予定表及び、詳細を記載したメールを送信いたしますのでご参照頂ければ幸いです。改めまして、弊団体でのイベント開催をご検討頂き誠に申し上げます。また、私事ではございますが、9月に開催されるロサンゼルスでのキャリアフォーラムに参加する予定でございます。なのでその時にでも芦間様及び貴社人事担当の皆様にご個人的にでもご挨拶に伺うことが出来ればと存じます。お会いできることを大変楽しみにしております。

University of CXXXXXX JSA
CAREER Office

鶴見

続く

第十一話

あつという間の一日なんて言葉を使うのはいつ以来になるだろうか。

気がつけばもう雪ノ下がいる会社での初日が終わりを迎えようとしている。会議室を出た後はオフィス内を簡単に案内された。いろいろな事業を扱っているだけあつて、中々に大人数の会社だった。最初はビルの入口が狭いので小規模な企業を予想したのだが、社員の数はそれなりに多いように窺える。九階建て程のビルでこの会社のオフィスは九階から三階まで伸びていた。男女比は丁度1：1くらいか。

雪ノ下は中間管理職に近いポジションらしく上と下の人間の関係を取り持つているらしい。果たして、彼女にそんな事ができるのかどうか疑問ではあるものの、彼女なりに上手くこなしているのだろうか。少しだけ彼女の人付き合いの仕方が気になった。

挨拶回りや案内が終わってからはオフィスの一席を借りて、資料を読んでいた。外から来た人間が珍しいのか多くの社員がちらほらと自分を見に来ている。動物園に新しく来たパンダか俺は。彼らは遠くから自分を見ているだけで一人も話しかけて来ない。こちらとしてもどうして良いものか。何かしらのアプローチがあつたほうがまだ気まずさが紛れる。

一番困るのは女性が束になって扉かひよっこり顔を出してひそひそと話をしていることだった。本来自分が働いている会社のオフィスでもよくそういった現象が発生している。被害妄想と言われればそれまでだが。

まあ、日が経てば物珍しさも薄れていくだろう。かけていた眼鏡をケースに戻すと帰りの支度の準備を進めた。オフィスの窓から望める景色はいつも通っているオフィスビルのそれに比べると中々に庶民的と言える。10階建て以上の建物はなく道路の両脇はコンビニエンスストアや牛丼屋などの低所得者の味方が立ち並んでいる。眼の前では余った税金の後処理なのか整然とした道路の改善工事が行

われていた。片方の車線が通行止めになりながらも、現場の作業員達が見事な連携で車両の往来を巧みにさばっていた。今自分が居る階は五階なのだが、これくらいの高さだと地上の町並みや往来を鮮明に俯瞰することが出来た。雪ノ下の会社がある場所はそんな平々凡々とした街中の一角だった。

「あの……比企谷さん！」

荷物を纏めて雪ノ下に一言声をかけて帰ろうとした時だった。一人の女性社員が後ろにいた。よく見ると流石に雪ノ下一家の会社だけあって女性社員のレベルが高い！可愛い。思わず顔が緩んでしまっただけだった。本当に、一色が近くに居なくてよかった。俺の今晚のおかずが過去最悪の海苔一枚になるところだった。

とりあえず、だんまりも相手に悪いので返事をしておこう。

「ひゃ、ひゃい！なんでしようか？」

終わった。

せつかく話しかけてくれたチャンスを完全に棒に振りました。いいもん、結衣がいるもん。

……いや、そんな邪な気持ちがあるわけではない。今後の事を考えても会社の人間と仲良くしておくのは大事なことですから、うん。

誰に対して言っているんだ俺は……

眼の前の女性を見てみる。眼鏡を掛けていて、少しだけ茶色が入ったおさげの髪を下げている。そして、人前に出るのが苦手そうな控えめな化粧とは裏腹に暴力的とも言える体のラインを備えていた。良い。草食系男子の心を揺さぶるような話しかけやすさに、少しだけのぞかせる華やかさを兼ね備えた女性は尊い。まるで戸塚のようだ。鼻元に見える淡いそばかすを敢えてファンデーション等で隠していないところもポイントが高い。人によって評価が分かれるところだろうが、自分にはハマった。

話が逸れたが、彼女は何故話しかけてきたんだ？

「そ、その。どうかされましたか？」

若干、どもつてしまったがそれでもさっきのよりはマシだろう。

「あ、そ、そうでした！すみません！」

女性はそう言うのと頭を下げた。そんなにかしこまらなくても別にいいのだが。

出入り口を見ると何人かの女性が心配そうにこちらを見ていた。そもそもオフィスがガラス張りなので隠れていたところで丸見えだ。

「あ、あの良かったらこの後、私達の部で食事会があるのですが、比企谷さんも良かったらどうかなくて」

目を合わせたり逸したりしつつ、こちらの様子を窺うように女性は告げた。

初日から食事に誘われるとは思ってもみなかった。つまり、向こうにいる女性たちは食事会のメンバーということだろう。話を聞くに男性社員も少なくないということだった。この会社の事情を把握するためにも社内の人間とのコネクションを築けるいい機会だ。正味な話、現地の人間の声を聞く以上に有効的な改善手段の模索への第一歩は存在しない。初対面の相手が大勢いる中に投入されるのは精神的に疲労がかかるものだが、参加することにした。この女性と仲良くなりたいたいからだろというのは邪推だ。俺には結衣がいるからな。というか、そういつた集まりに参加する意志を見せるようになっただけでも学生時代の俺の成長から考えれば賞賛の嵐でも起こってほしいくらいだ。八幡褒められたら伸びる子。

「そうですね。よろしければ是非ともごいつs・・・」

「比企谷さん」

「え」

「ひ・・・！」

振り返ると雪ノ下が背後霊のように立っていた。

さっきまで遠くの自分の机に居たはずでは。いつの間にか、井戸やテレビの中から出てくるあの白衣装のホラー女性みたいなオーラで立っている。男、比企谷八幡、いい歳こいて肝を潰しました。お恥ずかしながらチビってしまいそうでしたよ。眼の前のおさげ髪の子に

いたってはあまりの恐怖で見事なまでに竦み上がっている。俺の冗談が冗談ではなくなってしまうそうなくらいに顔面蒼白な彼女を見て気の毒になった。相変わらずユキペディアさんの冷ややかな目線は相手を氷殺するのね。昔そんな名前の対ゴキブリ用品があったなあ。芦間が言っていたが、アレ使って放置していると解凍されてGがまた動き出すらしい。というか、あいつはGに氷殺ジェ●トを吹きかけといて放置したのか。どういう神経をしているんだ野郎は…。

とはいえ、我ながら言い得て妙で、今まさに自分がスプレーを吹きかけられた状態なのかもしれない。そんなこと言ったら、まるで俺がGみたいじゃないか。俺がヤツと似ているのはしぶとさくらいだぞ。
……。

アホみたいなの自問自答から我に返った。

オフィス全体の空気がざわついているのが肌で感じとられる。

「どうかなさいましたか、雪ノ下さん」

全然解凍できていない身体をなんとか奮い立たせ、後ろにいる彼女を庇うように間に立って話を聞いた。それを見て、どういうわけか、雪ノ下の目つきが更に放送不可能の領域に達しようとしていた。蛇に睨まれた蛙・・・いや、そんな比喻すら可愛く思える。今の雪ノ下ならどんな屈強な生物も視線だけで殺せる覇気を纏っていた。すまない結衣、俺は今夜無事に帰られそうにもない。

雪ノ下は暫くこちらを観察するように、しかし、軽蔑するような目でじつと見るとようやく口を開いた。

「誠に申し訳ございませんが少しだけお時間よろしいでしょうか？先程お見せすることが出来ず、お目通して頂きたい資料がございますので」

雪ノ下の語気は静かではあったものの、異常な程に言葉に棘があった。発せられた単語の一つ一つが鋭い刃となつて足元から囲うように突き立てられる。気がつけば後ろに居たはずの女性がいたずらぐらバレた子供の如く、目にも留まらぬ早さで逃げ出していた。

雪ノ下と近い距離でつば迫り合いをするように立つ。剣を持ってるのは彼女だけだが。まったく蹲踞(そんきよ)くらいさせてくれ。

「…構いませんよ」

頬を伝わる冷や汗を拭いながら、見繕うように返事を絞り出した。出入り口の影から申し訳なきそうに覗いている彼女に少しだけ会釈をすると、強張っていた顔から弾けるような笑みがこぼれ出た。もういちど挨拶を返してあげたいところだが、前方から液体窒素の方がマシと思える程の冷酷な視線を感じたので、平静を装いつつ雪ノ下の後に続いた。床を叩く靴音が嫌に響き渡る。

雪ノ下の机までの道のりが果てしなく長く思えた。未だ作業を行っている社員の奇異の目が千枚通しのように突き刺さる。生憎だがこの程度のアウェイで精神を滅ぼされる俺ではない。学生時代に嫌というほど、晒され続けてきた自負がある。何の自慢にもならないですね、はい。

雪ノ下はまた高校の時のように芯に残る言葉のボディブローを重ねてくるのだろうか。既に医者 Doktor と審判から試合続行不能の言い渡しを受けているのにもかかわらずリングの上にいる比企谷八幡である。

それよりも、どこまで歩けばいいんだ？既に雪ノ下の机は過ぎていた。行き先も何も教えられないまま淡々と雪ノ下の後ろを歩いている。

雪ノ下はオフィスを出て細長い廊下を進んでいった。死刑台に向かう囚人の気持ちってこういう気分なのだろうか。やばい、走馬灯が浮かんできたし、廊下の奥にお花畑が見えてきた。走馬灯で浮かぶ思い出が何一つ良い記憶がない。

結衣、小町、戸塚。俺はここまでのようだ。後、お別れ言ったほうがいいやつ居ないよな？

そんな事を考えていると、ようやく雪ノ下はある部屋の前で立ち止まった。

見覚えのない部屋だ。今朝使った会議室と入り口は似ていたが、会議室は別の階にあったので間違いなく違う部屋だ。

「ここで何かあるのでしょうか？」

雪ノ下の言葉を待たずにこちらから話題を振ってみた。

しかし、雪ノ下は返事を返すわけでもなく部屋の扉の前で右往左往するように身体をふらつかせ、なんとも落ち着きがない。

10秒ほどしてようやく雪ノ下がこちらを振り返った。
その顔は焦りと緊張が混然とした不安定なものだった。

「その…貴方は、ああいった女性が好みなのかしら？」

……。

……。

え？

「はいっ。」

呆氣にとられた。

こいつは何を言っているのだろうか。俺に見てもらいたい資料があるから、会話に横槍を入れてまで呼んだのではないのか。目を瞬いて雪ノ下を見つめる。雪ノ下は目が合うと直ぐに下を向いて合わせないようにした。ほんの少しばかり、彼女の頬が紅潮しているのが分かった。

「…雪ノ下さん」

「はっ……ひゃいー！」

なんでさっきの俺と同じような反応をしているんだ…。自分までさっきの失態を思い出して顔から火が出そうになる。

「その、先程仰っていました資料の方は？」

「え、あ、その」

雪ノ下は失念していたと言わんばかりに狼狽している。俺の考えが正しければ最初からそんな資料なんてものは無かったのではないか。ただ、それは雪ノ下が俺のことをどう思っているからの行動というところからの推理ではなく、雪ノ下雪乃という女性が説明不足や資料の渡し忘れといったミスがありえない人間である事からの考

察だ。

「その、ごめんなさい。そんな資料は無いの」

観念したのか雪ノ下は正直に自分の嘘を告白した。理由を深掘りしたいところだがそれは憚られる。

さつきから、雪ノ下は素が出ていた。口調が昔の頃に戻っているのだ。それがなんとなくだが、嬉しかった。そのことの方に気を取られてしまっていて、どうして自分が呼び出されたかということはどうでもよくなってしまっていた。

「コホン…」

わざとらしく雪ノ下は咳払いをした。場の空気を整えるというよりは混沌とした自分の心中を落ち着けるためのものだろう。

「とにかく、うちの会社の女性に下衆な下心を向けないように」

おい、待て。何がとにかくだ。さつきの会話から何の脈絡も無しに釘を刺されたが、自分のことは棚上げか！

しかもそれだけ言って、気づけば雪ノ下どっか行っちゃったし。弁解の余地も無しですかい…。

今や、自分一人誰もいない会議室の前にポツンと取り残されたような状態になっていた。え、なんで置いて行くの？このまま帰れってか？いや、あの、荷物まだオフィスに置いたままなんですけど。

仕方なく元のオフィスに戻った。途中、雪ノ下の机の前をどうしても通る必要がある、その際なんとも気まずい空気が流れた。雪ノ下を見ると、こちらには目もくれず自分の顧客から来たメールの返信をしているようだった。少し前まであれ程までに取り乱していたのに、えらい変わりようだ。

雪ノ下はブルーライトカットの眼鏡を掛けている。高校時代からずっと使っているのだろうか。デザインは昔と同じだと思う。

よく見ると耳が紅を超えて紅蓮になっていた。やはり、気にしていないフリをしているだけか。

その様子を見てこっちまで恥ずかしさでどうにかなくなってしまいうだ。唯一の救いは自分と雪ノ下以外に他の社員が居なかったことぐらいか。

コーヒーマシンから滴る水滴の音が遠くから聴こえた。

新幹線の清掃員並みの手際で身支度を済ませると逃げるようにオフィスを後にした。仕事場を出る際に、さようななら、と雪ノ下が言ったような気がした。思わず彼女を見たが、既に冷静さを取り戻したのか、雪のような白い肌に戻っていた。幻聴に思えた挨拶にお疲れ様ですと小さく返し、エレベーターへと足を進めた。

続く

第十二話☆

重苦しいドアを引きつけると自動で玄関の電気が灯される。LEDの白い蛍光灯がまこと皮肉な程に足元を照らしていた。家の思いドアが閉まる音を聴いてようやく緊張の糸が解け、自分の中のプライベートのスイッチを入れることが出来た。

「おかえり〜!」

結衣の熱い抱擁で出迎えられた。

しかし、心に出来た虚無感のクレーターに水が満ちるような感覚は無かった。鏡を見ると、昨日ほど、自分の顔はやつれていないようだ。やつれていないはずなのに生気は伴っていないように見える。

彼女の後頭部を優しく撫でると、気持ちよさそうに胸元に顔を擦り寄せた。

今自分の瞳には屈託の無い満面の笑みを見せる最高の女性が写っている。

旦那思いの良き妻だ。そのはずだ。

鞆を結衣に預けるとスーツを脱ぎ捨てるように乱暴に放した。いつもとは違う職場での作業からだろうか、勤務時間の長さにしては疲労感が大きかった。仕事そのものよりは環境に神経を使った影響で今にも睡眠欲に流されてしまいそうだった。下着姿になった時、着ていたスーツが古代欧州兵が付けていた甲冑に思えた。虚脱感を纏った鎧をクローゼットに押し込むようにしまうと、そのまま結衣の居るリビングへと向かった。静けさの中、暖色の蛍光灯が廊下を照らしている。それが逆に人の気配のなさを象徴しているように見えた。脚を進めるために踏まれた床が僅かに沈むのが伝わった。その蠕動がゆっくりと這い上がり、ざわつく心の臓を鷲掴みにする。

軋む音が耳元にまわりついている。

お前は本当に、ただ愛の巢へ帰るだけで良いのか、呪われているよ。うだ。

後ろを振り向いたが、誰も居なかった。

玄関の電球が切れかかっていた。早く上がった日に、道すがら電気屋にでもよつて替えを買つて帰るか。

リビングに入ると結衣がキッチンで料理の準備をしていた。匂いから察するに焼き魚だろうか。疲れて胃があまり食べ物を受け付けない状態になっていたので丁度良かった。肉を出されると流石にきつかったかもしれない。匂いで身体が食事を殆ど受け付けない状態でもあったが、愛する妻の食事を目の前にして食欲が無いなどは言語道断の至極以外の何物でもない。

「先に風呂に入るわ。身体汚いし」

「うん、分かった!!じゃあその間に準備しておくね!」

机の上には既に煮物やおひたしなどの小鉢が秩序を保つて陳列されていた。鮮度の落ちない内に食べないと勿体無いのでそそくさと風呂場へ向かった。

シャワーから出てきた水は冷たかった。そして徐々に熱を帯びていく。

中々、温かさが伝わってこない。結局、ぬるま湯のまま頭から水がかぶった。

浴槽に腰を沈める気がしなかった。ただ、せっかく結衣が追い焚きをしてくれていたので入ることにした。

浴槽に浸かると溜まっていた疲労が一気に吹き出した。塩水に付けられた貝が砂を吐くように倦怠の粒が行き場を失って身体から溢れている。立ち上る湯気を眺めながら、今日の一日を振り返った。

いや、振り返るべきは昨日今日の二日なのかもしれない。

まさに怒涛の日々と評するにふさわしい期間だった。数年間に及ぶ平穏の変化は突然に訪れた。昨日は取引先の相手として雪ノ下さんが突然現れた。そして、いきなり翌日に出向を命じられると、今度は彼女の妹が目の前に姿を見せる。一体、何年間連絡を取っていないのだらうか、お互い違う道を歩みすぎたのかもしれない。テレビや小説で主人公と恋の相手の立場が違いすぎて中々成就しないという展開がよくあるものだが、寧ろそういった二人の方が近い距離感の中にあるのではないかと思わされる。

仕事場では業務が重なっていたこともあって、雪ノ下と最初の会議室以外で会話することは無かった。途中、気になって何度か彼女の方をちらと見てみたが、彼女も多忙故、机と資料に縛られっぱなしだった。紅茶を入りにサーバーのところに向かう度に、わざわざ迂回してこちらの机の前を通るように移動していたのは気になったが。その後に戻る時もわざと自分の視界に入るように帰り道を歩いていた。

いかん、自意識過剰だ。そんなわけがないだろう。こちらの進捗を確認したり、自席近くの社員になにか言うことがあったからに違いない。いや、誰にも話しかけてる様子は無かったな。というか振り返ってみると、どんだけ雪ノ下のこと見てるんだ俺は。

…。

自分は何を考えているのだろうか…。

家に帰ってくるなり他の女が頭から離れないのは流石にどうかしている。

浴槽から立ち上がると、強烈な立ちくらみに襲われた。どうやら湯船に浸かりすぎたのぼせたようだ。風呂場の操作盤にある時計を見ると、40分近く経過していた。自分にしては随分と長風呂してしまったようだ。ある意味、貧血気味な自分に注意しながら風呂を上げると、夜のひんやりとした風に包まれた。結衣がペランダに洗濯物でも干しているのだろうか。帰り道の空模様を見るに明らかに雨が降りそうだったのだが、とりあえず火照りきった身体を冷まさせるにはお誂えだ。

夜風を愉しみながら寝巻きに着替えた。キッチンの方に耳を澄ませるとまだ、結衣が鼻歌を歌いながら料理を続けている。彼女の料理姿を勝手に想像しながら妄想を膨らませていた。

リビングに戻り、テレビの電源を点けた。早めの帰宅だった事もあって久しぶりにゴールデンタイムの番組を見た気がする。最近のテレビは知識享受のお得番組や、クイズ番組ばかりで全く代わり映えない。過激なことをすれば直ぐに文句を言われるご時世だから結局の所そのくらいしか放送出来ないのだろう。「特別な許可を得て撮影しています」や「専門家の指導の下に撮影を行っています」などの

注釈や断りを右下に表示しなければいけないのもその影響からだろうか。言わなくても分かることでは？と思ってしまうが、やはり言わなければ揚げ足を取られるに違いない。そういった事に突っ込む人間に限って日常的に何気ない一言で周りの人間を傷つけて…いや、これは撤回しておこう。自分もそちら側に行ってしまうような気がする。というか、元より俺はそちら側の重鎮か。

「おまたせー！出来たよー!!」

結衣が手料理を持ってきた。見た目は上々、さて味やいかに…。

着席しようとした時、ベランダから強い風が入ってきた。外を見るとやはり、雨脚が強くなりつつある。

「結衣、雨が降りそうだぞ、先に洗濯物入れるか？」

「え？あああ！ホントだ！いいよ、八幡がやらなくても！私がやっておくから冷めない内に食べちゃってね」

結衣は慌ただしくエプロンを台所に戻すと、小走りに干したての洗濯物に駆けていった。結衣に全部任せるのも気が引けたのでベランダの前に立って結衣が取ってきた洗濯物をソファに重ねておく程度の手伝いはしておいた。ありがとうと言った結衣の髪は少しだけ雨に濡れていた。その姿が艶美で心の奥底に眠る欲望がまた沸々と湧き上がってしまった。昨日あれだけ交わったのにも関わらず、節操のない男だ。すいません、でも嫁が可愛いから仕方ないですよ。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

俺が夜遅くに帰ってきて一人で食事をする時、大抵結衣は隣りに座ってまじまじと俺が食べ終わるまで顔を見るのが日課だ。

しかし、偶に結衣は隣ではなく正面に座る時がある。

まあ正面と言っても高さが同じというわけではなく。。。

「んちゅ…じゅぼ…ずずずず」

下半身から快感が伝わる。

結衣は時折、何故か俺の股の間に腰を下ろして、肉棒を啜るのだった。

別に俺がやってほしいと頼んだわけではない。いつからか自ずから進んで俺のズボンを下ろし、下半身丸出しで夕食を取らざるを得なくなっていた。我ながら何とも拙劣な状況説明で申し訳ないがこれ以上の解説の仕様が無い。

おひたしにポン酢を掛けて食べると小松菜の緑の香りが口の中に広がった。自分には丁度よい茹で加減だ。

「じゅるるる…ひっきい…おいひい？」

結衣が啜えながら聞いてきた。話すときくらいは口に含まなくとも良い気がするが、どんな時でも奉仕を続けるというのが結衣のこだわりのように感じられたので言うだけ野暮だろう。

「ああ、美味いぞ。他のおかずも悪くない」

「しよつか。良かった。わたひもおいひいよ、ひっひいのおひんひん♪」

前代未聞の会話だ。会話が噛み合っているのに噛み合っていない。早く食べ終わらないと意識を全て愚息に持っていかれそうになる。今夜は珍しく結衣の食事が美味しいのだ。個人的にはゆつくりと食事を楽しみたい気分だが、そうもいかないな。右手に持った箸をしっかりと握り直すとかきこむように夕食をたいらげていく。途中何度か喉に詰まりそうになったが、それよりも、愚息が頂点に上り詰めようとしていたのでその前になんとかして晚餐を済ませたい所存だった。そして最後に白飯を食べようとした時だった。

「じゅーじゅぼ!!ジュルルルル!!」

「ぐうっ！」

結衣がこちらの食事ペースを把握しきっているのか、合わせるかのようにラストスパートを始めていた。食卓に突っ伏してしまいそうになる軀を奮い立たせるように背筋を伸ばすと一気に白米を口に含んだ。

と、同時に限界も訪れてしまった。

「んんんんんんんむ!!」

白米を食べながら白濁を出した。昨日枯れるまで出したはずだが、今日もまた生きのいい精液がふんだんに射出されていた。なにも毎

度口内で受け止める必要は無いと思うのだが、結衣はいつも精液を外に出さず全て飲みこんでいた。同じタイミングで茶碗が空になり、見事お互いに完食(?)だった。

「ごちそうさまでした」

二人して席を立った。勿論、俺はズボンは穿いていない。そのまま積み重ねた皿を持ってキッチンの流しに持って行った。シンクのレバーを上げると冷たい水が流れ出る。スポンジに洗剤を付け、少量できめ細やかな泡を作った。手際よく食器を洗っていく。自分でも出来る家事は結衣に任せることなく自らすすんで行う習慣がついていたのは比企谷家で人権がない生活をしていた賜物かもしれない。

ところで洗うのは良いのだが、何も皿洗いに合わせて、ベトベトになった砲身を拭かなくてもいいと思うんですが…。

結衣は俺の背後で屈むと、リビングのテーブルに置いてあったアルコールのウェットティッシュを何枚か手に持って、丁寧に精液を拭いていった。なんか如何わしい店の手順みたいだ。勿論、俺は行ったこと無いぞ、うん。伝聞や本で知った知識だ。

アルコール独特の揮発性物質の清涼感が敏感な先凸に伝わり悶えてしまう。それがクセになっている自分も幾分変態であると言わざるを得ない。皿洗いが終わる頃には結衣の奉仕も終了していた。食洗機を干し場代わりにして皿を並べ、タオルで手に付いた水を拭き取っていると結衣がテーブルからズボンとパンツを持ってきた。そのまま、足を広げて履かせてあげると言わんばかりに笑みを浮かべている。

「いや、あの。自分で出来るから置いてもらえると…。」

「足上げて♪」

「…はい」

大人しく右足を上げた。こういう時は何も考えないほうが良い。虚心で受け入れる方が人生は楽だよな、うん。日本社会が生み出した社畜精神、無形文化遺産(負)として登録でもしたらどうだろうか。パンツやズボンを履かされたのは何年ぶりだろう。遠くない将来、毎日介助士にやつてもらおう日々になるのだろうか、まだまだ自分はそ

んな年齢ではない。

全てを終えると、今度こそ抗えない眠気に見舞われた。

今日は疲れたな。

ベッドに倒れ込むように突っ伏した。ああ、オフトウン最高。いや、布団じゃないけど。

「八幡、今日の仕事はどうだったの？」

顔を上げると、結衣が寝室の入り口から控えめに覗くようにして立っていた。今日の仕事の調子や総括を聴いてくるのは彼女の日課だった。そういえば出向で今日はいつもと違うオフィスに向かったことは言っていなかった。昨日は雪ノ下さんがオフィスに現れたことしか触れていない。

さて、どうやって説明しようか。

素直に雪ノ下に会ったことを伝えて良いものなのだろうか。

これから、しばらくは彼女と顔を合わせる日々になることを伝えて良いものなのだろうか。

彼女と再会できたことに喜びを感じてしまったことを伝えて良いものなのだろうか。

正直そこまで頭が回っていなかった。とはいえ、今日一日でそこまで考えるというのが土台無理な話でもあるが。

しかし考えてもみる。昨日、彼女が俺との宝を作ると決意した大切な日でもあるのだ。出来る限り彼女に不安を与えたくない。これから二人でもっと愛を育もうというこの大切な時期に水を差そうとしている。

おもむろに起き上がり、彼女の眼をじっと見た。そして、

「今日も面倒な一日だった」

それだけ伝えると彼女の返事を待たずして、気を失ったように眠りについてしまった。

続く

第十三話

「おはようさん。はいこれ」

一日空いて、出勤したオフィスで珍しく早めに会社に出勤していた芦間にマツカンを渡された。そういえば一昨日、マツカンを奢ってもらう云々の話をしていた気がする。もう随分と前の記憶に思われる。

「おう、サンキュー」

渡されたマツカンは程良く冷えていた。丁度飲み頃なのでそのまま頂くことにした。相変わらずの甘さと喉越し。この中毒性の虜になって何年にもなる。ドク●ーペツパーのように賛否両論分かれる代名詞とも言えるこの商品だが、最近また販売範囲を縮小したらしい。関東以外では三県くらいでしか購入できないようだ。何と悲しきことか。マツカンは一刻も早く文化遺産として保護すべき最優先対象だろ。まったく、何を考えているのだこの世界は。甘ったるさの中に口の中で広がるコーヒーの味わい深い香りg・・・

「ほれ、そろそろ戻ってこいよ。比企谷」

芦間に脇腹を小突かれた。せつかく良い精神状態でトリップしていたというのに。

「昨日はどうだった？」

芦間が話題の転換を促すように質問をした。

「…まあ最初だからな。かなり疲れたわ」

仕事というよりは人間関係で。

「そつか。まあそういうのは一番最初がキツイものだから後は楽になっっていくと思えよ。」

「そうだな」

オープニングトークとして軽めの話題を提供したのであるが、俺からしてみれば中々にキラークラスだった。昨日はどうだったって？生憎だが、一晩明けた今でもなんと形容して良いものなのか全く分からない。動揺、不安、高揚、奮起、静謐……。どれも適さないだろう。昨日からずっと自分の心臓の裏に自転車のサビのようにこびり付いた黒い靄を拭えずにいた。この靄の存在を知った時、初めてそれ

が自分の中に現れた気がしなかった。もつと前から俺はこの霽と付き合いが長いのではないか。そう思えてならなかった。

お前の正体は何なのだ。俺は知りたい。しかし、それが分かった時、自分の周りの世界が崩れてしまうようなこの予感はどういうわけなのか。しがらみも無く、好奇心に従うことが出来たらどれほど楽しいことだろう。

答えに手を伸ばそうとすると手首に後悔の残滓がつきまとう。

結衣に昨日の夜に同じような質問をされた時、施錠した心の鍵を強引にボールで外されたような不快感を感じていた。

自分でも驚きだ。

俺は妻にさえ、この感情を覗かれることを拒んでいるのか。

どうにも気持ちの整理がつきそうにない。

心情はともかく、荷物は整理して、自分の席の椅子に座ると朝から大きな虚脱感に襲われた。働きたくないでござる。さて、この倦怠に飲み込まれる前に昨日の報告を纏めないとな。

「あ、そういえばさ。比企谷」

早速仕事に取り掛かろうという瞬間に芦間に水を差された。せつかくスイッチ入れたのに。エンジンを止められた気分だ。

「ん？なんだ？」

首だけ芦間に向けて答える。

「大したことじゃないんだけどさ。お前もアメリカの出張に行くことになったみたいだぞ」

「え」

「うん」

いや、うんじゃなくて。

「なにゆえ、俺はアメリカ合衆国に行かねばならんのだ？」

そもそも海外にあまり行きたくないんだが。

「それがさ、俺らが行く予定の海外採用の出張の件んだけどさ、追加でもう一人必要になったんだよ。そしたら人事の人がさ、こつちで好きなメンバー決めてもいいってさ。それで智佐吹さんがお前を連れ

てきたいって向こうにお願いをしまい、受理されちゃいました！わくパチパチ☆☆」

…。

どこからツッコめば良いのだろう。そもそも俺が海外採用のメンバーに選抜されたことか？事前承諾も無しに海外出張を勝手に決められたことか？それとも人事採用なんてものに連れて行かれることか？

枚挙に暇がないな。そして、俺の人生経験から言わせてもらおうと、文句を言ったところで覆らないという諦念も持っていた。

「それで、何日間だ？」

とりあえず、どれだけ結衣に会えないのが最優先確認事項だ。

「切り替え早いな。多分、大きく分けて二回行くことになると思う。最初がまあ一週間もかからない。けど二回目がこの前も言ったように各大学を周って行くから20日間は軽くかかると思う」

「げ、マジか」

「さようでございます」

急に無駄に畏まった芦間をよそに頭を抱えた。そんなにも長い期間結衣に会えなくなってしまうことになるとは夢にも思っていなかった。まさに青天の霹靂と言わざるを得ない。結婚して以来、10日以上も離れ離れになってしまうことなど一度も無かった。学生時代はインターンや授業の兼ね合いで一月も会えなくなってしまうということは珍しくはなかった。だが、それも今の俺からしてみればだいぶ昔の話だ。現在、見事なまでに嫁離れが困難な体質になってしまっている。

「二回目の内容は分かったが、一回目はどこに何をしに行くんだ？」

「ああ、一回目ね。前にちよこつとだけ触れた話題になるんだけど。二回目がボスキャリアっていう超大きなイベントじゃない？一回目はそれよりも小さな就活イベントになるんだけど、ロスキャリアってのがあるのよ。それにいくことになってる」

結局、太平洋を超えて向こう岸まで行かなくてはならんのか。長旅になるな。これも嫁離れを治すための荒療治と考えて乗り切るしか

無さそうだ。ホームシックに拍車が掛かるだけになりそうだけど。

「ロスってことはロサンゼルスか」

「ピンポーン！俺が大学時代に居た場所だな」

「それは初耳だ」

「あれ？言ってなかった？」

「お前の大学時代の話はそこまで聞いたことがないぞ」

「そうだったか。俺ハリウッドの近くにいたのよ。まあ別に隠しているわけでもないから、気になることあったら全然質問してくれても問題ないよくん」

と言われてもお前の大学時代の話なんてものにはそこまで大した興味は無いのだが。もし聞いたとしても、内容ちんぷんかんぷんだろうし。だが、仕事の関係上ある程度は聞かなければ話が進まない。今回の仕事内容はただ単純に別の地に出向いて人事採用を行うというそう単純な話でもないのは、断片的とはいえ、一昨日聞かされていたしな。

「つーわけで、一回目も二回目も結局俺は何をしたら良いんだ？俺だと、面接官も務まらないし」

まずそれを知らないと準備のしようがない。

「基本的に事務作業とかだな。面接中は智佐吹さんも身動き取れないから。あと、こっちの本社との連絡係とかもやってもらおうかも」

芦間が滔々と答える。

「あいよ。大学生の話相手にもなってくれなんて言われたら、流石に二の足を踏んだわ」

今時の大学生と会話が合わせられる自信が誠に申し訳ないが全く無い。自分が大学生だった頃。前に触れたことがあるが、それなりに交流はするようになったものの、当然人は選んでいた。流石に、無作為に選ばれた人間と一定時間、会話をもちせてくれなんて事を言われてそつなくこなすことが出来る者は稀有だろう。そんな役回りをこちらに持つてこようものならそれは人選ミスと言わざるを得ない。最悪の采配だ。

「あ、大学に行く時に企業説明会もやるから話相手もやってもらうことになるぞ」

おい。

「面接はもちろんのことだけど、こういうイベントって企業説明会だけ聴きに来る生徒も多くてさ。その後に会場で会社の雰囲気や社員の様子を観察しようって考えで先を見据えて就活の年の前から若い子たちの姿が結構見られんだよ。智佐吹さんたちが面接やってる間は俺やお前が面接受けてない生徒との会話をもたせる役目な」

「さいですか…」

芦間はご愁傷様ですと言わんばかりの表情をこちらに見せている。こいつ、明らかに俺の反応を見て楽しんでるだろ。

「まああと、智佐吹さんや人事の島田さんだけじゃなくて、おそらくは比企谷も面接やるかもしれない。お前、結構人を見る目あるからな」
俺が面接官？それこそ、寝耳に水だ。人事の手腕を疑うぞ。

「俺が面接をやるものなら、相当に偏った奴を採用することになると思うが」

ニヒルで現実的。それでいて、大勢とつるまない日陰のような生活を送ってきた人物。俺が欲しいのはそういう人材だ。それか戸塚。

「別にそれでも良いんじゃないか？まあ、最終面接のパートナー面接とかは流石に上のお偉いさんがやるだろうし、比企谷の好みが完全が反映されるなんてことはないと思うけどな」

芦間はケタケタと笑いながら、タイピングを続けていた。当初予想していた反応とは違ったが、乗っけられても面倒なのでそれでよしとする。

「また、件の女子大生か？」

芦間は指の動きを止めると、こちらに顔を向ける。相変わらず憎らしいほどに均斉の取れた顔だ。総武高校時代にいた、みんなの人気者を思い出させる。俺の最も苦手なタイプの一人だろう。それなのにもかかわらず、事ある毎にこいつとつるんでいるのは自分でも不思議だった。

「そうやで。今時の学生って感じは全く無いくらいしつかりした子だ

よ。俺の方が畏まっちゃっているし」

「へえ、そんなやつがいるのか」

こいつが人を褒めるところをあまり見たことがないので鼻屑目なしにその女子生徒は優秀なのだろう。興味本位だが、一度お目にかかりたいものだ。何度も言うが別に他意は無い。

「その子、今度ロスキャリで内のブースに挨拶来るみたいだぞ。俺も会うのが楽しみだよ」

「そうか」

留意しておこうと思ったが、一週間もすれば記憶の隅に追いやられてしまうのだろうな。いつだって人に興味を持つのは一瞬だ。超過した自意識は身を滅ぼすだけという結末が待つ。それ以外は無い。

「つて、面白いや俺の好みってなんだよ・・・」

「なんか話が遡ったなあ」

芦間が目を細めていた。が、直ぐに顔をもとに戻すとキーボードを叩きながらものぐさに口を開いた。

「比企谷好みの女性社員」

「ほう、お前に俺のタイプが分かるか?」

珍しく挑戦的だな、お前。と芦間に怪訝な顔をされた。昨日の件もあってちよつと気が立っているのかもしれない。

「そうだなあ・・・。多分、お淑やかな見た目に反して、毒を比企谷に對してよく吐くんだけけど心の底ではお前に依存しているみたいな綺麗系の黒髪ロング」

用意していたのかどうか分からないが、驚くほど流麗な回答だった。

「というか結構詳細だな」

「ふふふ。俺は意外とこういう事に関しては類稀なる慧眼を持っているのだよ」

「いや、一個も当てはまっていないぞ」

「あれ?お前の奥さんのイメージって黒髪美人の静かな人だったんだ

けど」

芦間はシンジラレナイといった表情だった。言うならばリンゴが大好きな雷の神が自分の電撃が効かない人間が居ると知った時のように。あそこまで目を大きく見開いているといえれば大袈裟か。

芦間がどうしてそのような女性像を思い浮かべたのかは深く掘り下げてみたく感じた。しかし、それは自分に刃が返ってきそうである出来なかった。こいつがたつた今、口にした女性のイメージに思い当たる女性が一人俺の頭の中に鮮明に浮かんでしまったからだ。

「俺の嫁は物静かと称するよりかは、明らかに天真爛漫を地で行くタイプの人間だ。それに、髪の色が黒じゃないしな。どちらかといえば見た目は完全にギャルっぽいかもしれない」

自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ。嫌な汗が頬に伝わるのが分かる。

「ほえ、そりゃあ意外……ってわけでもないなあ。正味、さっき言った黒髪美人じゃなければ、今比企谷が教えてくれた女性のイメージだったから」

本当かよと思いたくなるような口ぶりだが、先程の恐ろしいまでの洞察力や感性を目の当たりにした今は、仄暗く現実味を帯びて首元に押し寄せてくる。

「芦間からして、俺に合う女性は最初に言っていた人みたいな印象だったのか」

「ん？まあそうだなあ。比企谷は元気女子とか毛嫌いするって勝手に思ってたわ」

それに関しては当たらずとも遠からずではある。結局の所、こういった話ケースバイケースという結論に落ち着く。別に、割と早い頃から一色や結衣のことは好意的に見ていたこともあるし。まあ戸部みたいなのは無理。

「ちえ。予想外したの初めてだわ。俺も勘が鈍ったのかなあ」

芦間はふてくされたように乱暴にキーボードに打ち込んだ。まあ、予想なんてそんなものだろう。最近の天気予報は物凄い精度で当た

るけれども。

「おはようございます。比企谷さん」

「おーそうそう。まさに、こんな感じの黒髪美女がお前の好みだろ？・・・って。うん??？」

「なんだ、どうした芦・・・」
は？

見覚えのある艶味のかかった長い髪。モデルのような容姿から醸し出される知性。

すごく馴染みのある女性だ。

いや、そういうことじゃなくて…

「あら、挨拶も出来ないのですか。社会人になって随分と結構なご身分（ゴミ分）になったのね。比企谷さん」

彼女は誰もが見とれてしまうような笑顔で王水を傷口に塗り込んだ。

開いた口が塞がらない。

普段であれば、彼女のささやかな挨拶代わりの一撃をいなして、返すことなど容易いものだ。ところが、予期していないものだから無防備に顎に一発喰らったに等しい。

寝覚めの一杯としてはあまりにも苛烈を極める。

眼の前には、お淑やかで、時に毒を吐く黒髪美女・・・雪ノ下雪乃が居た。

続く

第十三・五話

(彼と彼女が会社で顔を合わせる数分前の話・・・)

— Side Ironha —

——最初は大学に入つてすぐのことだった。

一年遅れて先輩に追いついた私が目にしたのは同級生たちと卒なく会話をこなす先輩の成長した姿だった。

我が目を疑う光景だった。

社交的な先輩？

へそが茶を沸かすとはこのことだ。

だが現実にそれが起こっている。

私の中の先輩？

一人で学校の端でひっそりと路傍の石のように食事を摂り、誰にも気づかれること無く講堂を去る。

男女皆に嫌われている。

ぶつきらぼうで愛想がない。

女性が苦手だからかうとちよつと気持ち悪い。

其のくせお人好しで皆に自分の努力を理解されない自己犠牲の塊。

そんな感じ。

じゃあ今の先輩は？

学食の中心で昼食を食べ、仲間たちと放課後を楽しむ。

男女共にかから好かれている。

人当たりがよくて愛想が良い。

あ、でも女性がちよつと苦手なのと、お人好しなのは同じかも。

とはいえ、そんな一面はほとんどの人が知る由も無く、限られた人しか知らなかった一面のはずなのに。

その時から、私の中に黒い靄のかかった何かが生まれた。何物にも溶けることのない不純物が心臓の奥深くに住み着いたような深い憎悪の欠片がゆつくりと時間をかけて沈殿していく。

程なくして、大学のミスコンに出ていた(私は推薦枠でぶつちぎりの一位だったけど、出場を拒否した)女性が先輩に近づいてきた。

私の中の心臓に詰まった溶液。

その静かな水面に大きな石を投げ入れられる。

弾けるような水しぶきと共に容器の底に腰を下ろしていた欠片達が一斉にうねりを上げて私の心を黒く染め上げた。

『比企谷くんって皆が見ていないところですよごく頑張ってるよね』

知ったような口をきくな。自分には慧眼があるとでも言いたいのだろうか。

そういうの先輩一番キライだよ。

『ちよつとうぶなところも可愛いな』

そんなことはずっと前から私が知ってる。

それに先輩を下に見ているのがあからさまに分かる発言を自分がしている事に気が付かないのだろうかこの女は。

値踏みしているんだこいつは。

自分のステータスに見合う男かどうかを。

アホらしい、何年か前まで自分がやっていたことではあるが、この年にもなつて、未だにそんな見栄の塗り固めに拘っているなんて。

乱されていく。私の世界が。

えーと、この人の名前なんだっけ？

『比企谷君って誰からも一歩引いているイメージあるなあ。だから私が最初になんか入りたいなああって思うんだ』

お前には無理だよ。最初のオープンニングトークで不採用、お祈りメール直通だわ。

何より、お前よりも先に中に入った人がいるよ。二人も。

…はいそうですよ。入っていない私が言うのもなんですけど…。

他にも機を見て空席のままである先輩の隣を狙う輩を数えるとしたら、指が足りなくなるほどに見受けられた。

さて、どうやってこいつらを叩き落としてやろうか。

彼女たちにとって一番のショック…。それは既に狙っていたその

席が埋まっているという事実を知ってしまうことだ。

だから私は、皆の前で先輩の中に入ったフリをしてやった。

そんな付け焼き刃の信頼なんて私に比べれば天と地の差だ、と思いき知らせてやるために大袈裟に先輩の女面をしてやった。

先輩は結衣さんのことを公表していなかった。大学も違うところに通っていたし、先輩自身も彼女持ちであるとひた隠しにしていた。

結衣さんと先輩は高校以外でのコミュニティに二人で一緒に飛び込むことを極端に拒んでいた。まあ私も全くその理由が理解できないというわけではない。何でもかんでも相手の世界を知りすぎないのも、円満の秘訣の一つだと思う。

私には無理だけど。

私は好きな相手の全部を知らないと気がすまない。全部が欲しくて仕方なくなる。欠点だと分かっているも治す気はないですよ。そういう性格で生まれたときからやってきてるんですから。お陰様で束縛の極致です。こんな重い女だけどいつかは貴方の隣を……。

さて、話を戻すと、つまるところ、先輩は結衣さんの存在を大学の人間に知られたくはなかったようだった。

私はそこにつけこんだ。

私は大学当時、先輩以外の人間とはほぼ関わりを持たなかったものの、それなりにには大学全体に認知され、立場を得ていた。だからこそ、私を無碍に扱えば、少なからず先輩にとっては信用を落とすリスクが生じる。かといって、真実を明かし、結衣さんという本当の恋人がいることを知られてしまえばそれまで、自分が隠し続けてきた嘘がバレてしまう。

先輩は私が彼女であるということ私を私が大学で言ったとしてもそれを咎めることが出来ない。黙認し、ほとぼりが収まるまでは自分が背負うことで最悪の事態を回避するはず。実行に移す前から私にはその構図を完璧に描くことが出来た。

状況が私に味方した。

上手いこと先輩を二律背反に迫らせることが出来たのだ。

結果は言うまでもない。

虫たちは己の敗北を知り、去った。

こうして、私の世界は守られた。

その後毎日、私は先輩と恋人のように過ごした。

朝、一緒に授業を隣で受ける。その後は学食でご飯を食べたり、キャンパスの外で食事。図書館で一緒に勉強して、夜は少しだけ大人の付き合い。(ただの飲み会)

幸せな時間だった。

客観的に考えればそれは虚構の幸福だ。いつかは覚めると分かっている夢のひとつにすぎない。

それでも……。偽物だと分かっている、私にとってはそれが本物だった。

あの時間は私にとって間違いなく人生で最も幸せな時期でした。乾いた砂漠に雨が降るように、私の人生は潤沢をおびて輝いた。手を伸ばせば届くところに愛する人がいる。

ただ現実の間借りでもなく、強引に居座っているだけ。だけど、隣りにいる貴方が私の全てでした。

しかし、貴方の隣を歩く度に思うことがあるんです。

先輩、貴方は誰ですか？

今の大学で楽しそうにしたり、職場で卒なく人間関係をこなす貴方を見る度に先輩が、私の大好きな先輩が記憶の中だけの存在になっていくような気になります。

高校の不遇な時代しか知らない私からすれば、外見だけは同じ、別人にすり替わってしまったのではないか。

そんな気がしてならなかった。

ねえ、先輩。

貴方は自分に嘘を付きながら、今を過ごしているんじゃないですか？

そうなってしまった原因……。

先輩、結衣さん、そして……あの人。

三人の間で何があったのか。

結衣さんとは仲良くしているけど、真相を聞き出すことは出来なかった。

勿論、聞こうとした。

結衣さんは答えてくれなかった。いつもアレだけ優しい結衣さんが昭和の父親かって言うくらいに頑なだった。

私だって、少なからずあの場所にいたじゃないですか。

知りたいんです。

でも、分かってます。

『それを知ってどうするんだ？』

貴方はこう言うはずです。

だから私はこう返します。

『取り戻すために必要なんです、私と貴方の本物を』

……。

——脈打つ鼓動が内側から血管を強烈に圧迫し、今にも体の外へと押しつけようとしていた。

頬に伝わる汗が丁度良い冷却材となり、心身の熱量を逃している。とはいえ、私の肩に入る力が抜けることは無かった。

朝早くから心臓に悪すぎる。

一昨日、陽乃さんが現れた時のほうが幾分、健康には優しいくらいだ。

私が生きてきた中で、眼の前で繰り広げられた現実を受け入れるのにこれほどまでに時間がかかったことはないと思う。先輩にフラれた時と同じくらいか。

そして、それは目の前にいる彼女もまた、同じなのかもしれない。

「……………」

「……………」

時刻は朝の九時半。ようやく仕事場全体が動き始めようとしている忙しない時のことだった。

既に社員の殆どは出社を完了している。

私もその他大勢と同じく、淡々と顧客対応をして昼に先輩とご飯を食べる日常を思い描いていたくらいで仕事のスイッチが入りきっていないかった。

そんな頃に脳天に鉄槌をお見舞いされた。

私の目の前にいる女性・・雪ノ下雪乃さんは私がいることに動揺を隠せないのか、目を見開いたままじつと動かない。その後、物憂げな目で下を見ると黙り込んでしまった。

他に来客はおらず彼女一人、単身でこの会社にやって来たということか。

本人がそう望んだのだろうか。会社の意向なのかは私が預かり知るはずもないが、仕事だけが目的では無いだろ？と邪推してしまう。

そしてその推理は皮肉にも見当違いには思えない。

今日の服装を見れば分かる。

勿論、ビジネス上の取引ということでマナーに背くような垢抜けた格好ではない。しかし、化粧は同性にしか分からないが、明らかに入念に行っている。異性を意識したやり方だ。髪型も綺麗に纏めつつ

も、色気を醸し出している。ネイルや靴も隅々まで手入れが行き届いている。これは私の勘ですけど、普段は勿論身だしなみには注意を払っているにしても、貴方いつもそこまではやっていないでしょ。不慣れな感じが隠しきれないですよ？

…。

だからといって、似合っていないとは私は微塵も思っていない。満点ですよ。

いちやもん付けるしか出来ないくらいにぐうの音も出ない。やっぱり、とても綺麗な人だなあ。

この会社には智佐吹さんや、玉木さん。他にも私を含め、容姿の整った女性が沢山いる。その中でも雪ノ下先輩は鼻目無しに、群を抜いている。

そう、誰よりも…。私よりも。そして、結衣さ…。

「こんにちは、一色さん」

唐突に雪ノ下先輩の口が開かれた。取り留めのない挨拶だった。物思いに耽っていた自分の意識が一瞬にして引き戻された。それなのに心を驚掴みにされたような気分になる。

抑揚の無い、独特の透き通った声。

それでいて、心地よい声色。

同性の私ですらその容姿や声、所作の全てに心を奪われてしまっている。

この人は歳を重ねる毎に女性としての魅力を重ねていったのだろう。

暫く顔を合わせなくとも分かってしまう。

私？

私は16の時がピークでしたよ。それから緩やかに醜くなっていくだけ。ただ、見た目は周りの人にすごく褒められるだけあって、ちやほやさされて、手前味噌だけどそこらへんのモデルや女優にも引けを取らなくなったと思う。

成績で例えるなら、AマイナスからAには上昇しましたよ。まあ、Aプラスプラスプラスの雪ノ下先輩さんや、結衣さんにはまだまだほ

ど遠いですけど。

そもそも歩んできた道が違う。

言うなれば養殖と天然物の差といったところか。

羨ましい。

そうやって、存在しているだけで先輩の心を奪ったんですか？

私はこんなにも死に物狂いで隣にしようと頑張っているのに。

それでもその場所に立てなかったのに。

貴方は何年も先輩のことを放っておいて、今更ぬけぬけと奪いにやってきましたんですか？

抑えていたはずの憎しみがこみ上げてくる。

「ご無沙汰しています。雪ノ下先輩♪」

そうだ。悟られてはいけない。

私の奥底に眠る厭忌と嫉妬の結晶は私だけのものでなければならぬ。

何のためにここまで苦汁を舐め続けて今の居場所に辿り着いたと思っている？

いつだってそう自戒しながら溶解寸前の原子炉のような感情の渦を鎮めてきた。

今回も同じだ。

先輩の周りに邪魔な虫が付きまとうのは今に始まった話じゃない訳だし。

私にとって貴方はこれまでの女性と同じ有象無象の一つ。

私の本物に貴方は必要無い。

………。

でも、

貴方だけは、そうは思えないって自分もいるんです。

「雪ノ下先輩・・・いえ、雪乃さん」

「え……？」

これまでの私がやって来たことはただの子供の駄々だ。そんな子供だましが通用するような相手でもないし、私だってそこまで馬鹿じゃない。

この人は敵に回しては絶対にならない人だ。

それよりも、私の中にあるのは燃えるような敵意よりももっと、温かくて、それと同時に冷たくて包み込んであげたくなるような、慈愛の心だ。

ねえ、雪乃さん。

貴方も苦しかったんですよね？

先輩に会えなくてずっと自分が自分でないような気持ちだったんじゃないですか？

なんで先輩の隣りにいるのが自分じゃないんだろう……って毎日のように悔しさでどうにかなくなってしまっただけで済んだよね？

何度も忘れようとする度に深くあの人が心の中に入り込んでくる。

そして想像してしまうでしょ？

先輩とデートしたり、休日二人でソファに隣同士で座って映画を見たり、時には情熱的な時間を過ごしたり。

身体が熱くなって、毎晩何度もあの人の腕の中で抱かれる夢を見られます。

そうして深夜に灰色の霞がかった寂寥感が塗り重ねられていく。

そんな夜を私は数え切れないほど乗り越えてきた。

今では薄い灰色の寂寥が何年も油絵のように重なって漆黒になっている。

私でさえそんな感情になっているんです。

眼の前で大好きな人を一番の親友に盗られた。

雪乃さんの中には私なんかとは比べ物にならない位に、ドロドロとした、暗黒すら足元にも及ばないような闇が巣食っているんじゃないですか？

もう何年も前にその闇に貴方の心の芯は飲み込まれたはずです。

そして貴方はその闇の中に身も心も沈めてしまった。

貴方は体裁や、理性、常識、周りからの圧力、あらゆるものを言い訳にして自分を無理矢理動かしているんですよ。抜け殻になった自分の身体を。そして己の感情や人生すらも傀儡にして今を生きている。

そしてそれは先輩もだ。

私も同じだから分かる。

だからこそ、一緒に壊しませんか？

この日常を。

生きる意味を失った時間を。

過去と他人は変えられないとはよく言ったものだ。

私がつうとしていることはまさにそれだ。

過去も他人も強引に自分の都合に置き換えて、偽物を本物に変える所業。

不可能？

いや、出来る。

全員がそれを本物と思えばそれが本物だ。

たとえ世間の常識がそれを偽物と定義したとしてもだ。

私はそつと手を伸ばす。

雪乃さんの視線が私の手の平に吸い込まれ、離れない。

いや、私が逃さない。

そう。

私の本物には貴方がいなければならぬ。

先輩。

雪乃さん。

貴方達は私が救ってあげます。

私のために……ね♪

続く

第十四話

— Side Hachiman —

さて、比企谷八幡君。ここで一つクエスチョンだ。スーパーひ〇し君人形は賭けなくてもいいぞ。

落ち着いて考えてみよう。

何故、こんなところに雪ノ下雪乃がいるのだろうか？（出題音♪）

それではシンキングタイム。

場所は？

ここは俺の仕事場で東京に位置している。

雪ノ下の仕事場は？

千葉県にある。こことは真反対の方向だ。

電車の乗り間違いか？

そんな凡ミスと呼べぬほどの失態はありえない。俺の嫁じゃあるまいし。

では何故？

おそらく、依頼客ということであちらに来たのだろう。

いやはや、まさか昨日今日で再会してから、いきなり仕事場という別のスイッチが入っている現場に乗り込まれるとは想定外だったが。

学校の友達と塾で会いたくない、仕事場の人間とプライベートでスーパーやデパートで出くわしたくない。そんな感じだ。自分は会う人間によつて自分の中の顔を切り替えるタイプなので、雪ノ下に自分の仕事場での風景を見られるのはなんとなく嫌な気がした。別に出向先は予め自分の中で営業用の八幡に切り替わっているのだから良いのだ。しかし、仕事場の八幡は家庭ともプライベートとも異なる顔の一つとして確立されている。人に見せる顔は一人につき一つで十分だ。それが俺なりの人間関係を良好に保つための秘訣の一つであるというのが持論でもある。

雪ノ下の顔をちらと窺ってみた。

「？」

雪ノ下は眼を丸くして不思議そうにこちらを見ている。お前、いつ

からそんな無邪気な可愛い顔が出来るようになったんだ。

そして、なんか今日すごく綺麗だし。俺じゃなくても誰もが一瞬で心を奪われてしまいそうになる。くそ、目をそらそうとしてもまたあの目に捕らわれてしまう。

事実、既にこの場にいた男性社員全員が雪ノ下に釘付けだった。他の女性社員たちの恨めしそうな表情から心情が面白いように窺える。まあ、とどのつまり、社内の様子は完全に混沌と化している。

芦間はというと怪訝な顔で俺と雪ノ下の表情を交互に見比べていた。しばらくすると僅かだが、雪ノ下を見つつ口端を上げたように見えた。相変わらず腹の底で何を考えているのかよく分からないやつだ。

「比企谷君、おはよう！」

振り返ると智佐吹さんが今日も空元気じゃないのかと言わんばかりの快活な声で挨拶をしていた。こちらとしてはそんなテンションじゃないんですけどね。

「ああ、智佐吹さんおはようございます。どうして、俺の倍は働いているのにそこまでの快調を保っているのか、不思議でならないですよ」
本気でそのエンジンを分けてもらいたい。色々な意味で今日は心労が多くなりそうだ。

「そりゃあ、毎朝、青汁とヨーグルトを摂取しているからね」

「食生活でどうにかなかったら、この世から過労死やストレスによる精神病なんて問題が出てくるとは思えないんですが」

英語で過労死って言葉がそのまま使われているくらいだからな。

Karoshi って。

「さては君は人も食事も好き嫌いいっぱいなんだろう？」

なんとまあ、あけすけな物言いだ。周りからそんな感じで見られているのだろうか。まあ、聞くまでもないか。

「それなりに克服はしていますよ。家内のおかげでね」

同棲を始めた当初は、好き嫌いとかそんな贅沢を言うどころの騒ぎではなかったからな…。昨今の日本人たちは、「食べ物」が食卓に並ぶ喜びを知らないだろう。

「なんで急に遠い目をするんだ」

「嫁の飯が○○○、ってやつですよ。智佐吹さん」

おい、そこ。余計なことは言わなくても良い。

「まあ嫁さんの良さはもつと別のところにあるんだろ？耳にタコが出来るほど聞かされているからフォローしなくてもいいぞ」

「そんなに説明したか？」

「自覚がお有りでない!？」

こいつは重症だ…。芦間が頭を抱えていた。おかしい。やつには結衣の良さを氷山の一角しか教鞭を振るっていないはずだが。

「随分と円満な結婚生活を送られているそうで」

雪ノ下がナイフを懐に刺し入れる。

笑顔なのに顔が笑っていない。冷や汗が顔に伝わるが、笑みがこぼれそうになる。雪ノ下も楽しんでいるのか後ろを向きながら肩を震わせている。

「やっぱり、比企谷つてどの環境でもそういうキャラなのな」

芦間が納得したように頷いていた。

「勝手に解決しないでもらえるか…。どうせお前のことだから碌でもない方向に勘違いしていそうだ」

「俺か？」

「お前以外に誰が居ると思ったのか」

「まあまあ。ふふふ。俺はお前の味方だぜ、比企谷」

芦間は肩をポンと軽く叩くとそのままコーヒーを取りに席を外した。いや、何だったんだ今のは。

「さて、私と雪ノ下さんも少し話があるので外すよ。比企谷と雪ノ下さんは旧知の仲なんですよ？積もる話もあるだろうから昼食でも一緒に取ったらどう？」

なんとという要らぬ世話。こんな人目につきまくる場所で俺が雪ノ下と飯なんて食ったらどんな結果になるかなんて、考えるまでもないだろ。

「え!?!飯行くの比企谷!?!」

芦間がオフィス端のコーヒーマシンから声を上げた。お前は

どっから反応してんだ…。

いや、待てよ。二人きりで食うよりかはあいつに居てもらったほうが会食という面で騒ぎを収束させ易いのではないか？

うん、それが良い。そんなでもって無理やり智佐吹さんも呼んでしまえばもう疑いの余地がない。完璧。

「因みに、いろはちゃんも多分飯に来るだろうけど、そこんところどうすんの？」

いつの間に後ろに。

というかさとり妖怪か己は。なんで毎度毎度、俺が考えていることがわかるんだ。

芦間は何事もなかったかのように飄々とした顔で自身の席に着いた。おい、この状況少しでもなんとかするとか無いのか。

しかしながら、こいつの言うこともご尤もだ。

雪ノ下がこのオフィスの中に居るということは既に一色と顔を合わせているだろう。下手に彼女の存在を隠すことは逆効果と言わざるを得ない。10年弱ぶりの再会だろうか。俺や結衣が居る上で話をしたことはあるだろうが、二人きりで言葉を交わすといったことは殆ど無いはずだ。好奇心もあるが、俺としては、今後の自分の立場のあり方を決めるためにもどんな雰囲気だったのか非常に気になる。

ただ、一色と雪ノ下が居る状況下で飯なんて食事が喉を通らないなんてレベルじゃない。胃が蜂の巣にされるような修羅場にしかない気がする。

雪ノ下は先程の芦間と同じく俺と芦間を見比べるようにじっと見ている。俺が軽口をたたき会える人間が居ることに心底驚いている、といったところか。そりゃあまあ高校時代を知る人間からしてみれば考えられないことは理解できるが、何もそこまで肝を抜かさなくてもいいではないか。

ふと、雪ノ下と目が合った。

雪ノ下は仕事の場故に髪を纏めて前髪だけ少し下ろしたような髪型をしている。

本当に綺麗だ。

いやいや、何を考えているのだ俺は。

雪ノ下は恥ずかしそうに下を向きながら髪をかきあげると妖艶な笑みを浮かべた。

その瞬間に全身が熱くなるような感覚に襲われた。血管の中の血液という血液が滾り、心臓が縄で締め付けられるような苦しきに見舞われる。

ああ、くそ。鏡を見なくても今の自分が笑えるくらいに顔が紅潮しているのが分かる。玉木さんが笑った時にこんなにも照れた事はなかった。智佐吹さんのときも一色が笑った時だって、こんなに自分の理性が一瞬で崩れ落ちそうになったことは無い。

雪ノ下が物欲しそうに少しだけ口を開いた。

その仕草が自分を求めてくれているような気がして、心がかき乱される。

これ以上は自分がどうにかなってしまいたいそうだったので顔を逸らした。

横目で雪ノ下を見ると彼女は残念そうな、いや、意気地なしと避難するような目でこちらを見ていた。

お前ここ職場だぞ。しかも、俺の今の周りの環境だって知らないわけじゃないだろ。勘弁してくれよ。

いや、待て。その言い方だと、職場じゃなければ良いみたいじゃないか。

というか何だこの異常なまでの自意識過剰は。

本当に最近の俺はどうしたんだ。

まるでそうあってほしいと期待しているようではないか。

「それでは雪ノ下さん、こちらに」

智佐吹さんが雪ノ下に移動を促すと、雪ノ下はこちらを一瞬見る。そういえば、商談で来ているんだったな。完全に失念していた。

再度、雪ノ下と目が合う。

なんて声をかけたら良いのだろう。

昨日のやり取りを思い出してみた。うん、殆どロクな会話をしてい

ない。全く参考にならなかった。

周りの社員たちの視線がまた突き刺さる。

とにかく沈黙はまずい。なにか言葉をひねり出さなければ…。

よーしここは、とりあえず、会社の場らしく粹な一言を。

「じゃあ、また後でな」

……………。

はい終わった。

本来であればビジネス上の会話が求められる場面なのだろうが、口から出た言葉は旧知の間柄を彷彿とさせるような砕けたものだった。比企谷八幡選手、完全に空気を読み間違えております。ハチマン終了のお知らせ。

というか、何俺は智佐吹さんが言ってたことを雪ノ下の反応も見ずに鵜呑みにしているのだ…。完全な早とちりではないか？

雪ノ下は狐につままれたような顔をしていた。俺が距離を詰めてくるような言動に心底驚いたに違いない。

そりやそうでしょうね。私自身もそんなクツサイ台詞が自分の引き出しの中に眠っていたかと思うと、自分のことながら寝耳に水ですよ。

中学時代の痛い自分を思い出しちゃいましたよ。いや、あの時の勘違いのほうか今と比べたら可愛い方じゃないですか。なーに、やらかしちやっつてんの自分。馬鹿じゃないの馬鹿じゃないの!!?

あんたバカア!!? うん、馬鹿です。紛うことなきアホンダラです。

……………。

何故、あんな言い方をしてしまったのだろうか。

話しかける前の状況を思い出してみた。

昼食の話が出てきた時に周りの男性社員がチャレンジしてみようという魂胆が見え見えの表情をこちらに見せていた。

その瞬間、雪ノ下が周りの男達と話しているところを想像した。男が質問をして雪ノ下がそれに答える。

吐き気がした。

そうか、そういうことだったのか。

よもや自分にも嫉妬心とかいう女々しい感情があるうとは。

つまり、俺は雪ノ下は自分と親しいのだと主張したかったのかもしれない。会社の男たちの羨望の眼差し。隙あらば話しかけようという狩人の目になった同僚たちの目線に無意識に気色ばんでいたか。

全く、社会人を何年も経験しておきながら、未ださもしい男の矜持に取り憑かれているのか俺は。我ながらなんとも情けない。

お前はもう既に彼女とのつながりを諦めた愚かな男として生きていくことを何年も前に選んだのではないのか。

それを再会しただけで断ち切ったはずの自分にも機会があると何を今更、期待している？

「比企谷君」

雪ノ下が俺を呼ぶ声がする。

彼女は一体どんな表情をしているのだろう。

直視できそうにもない。

自分の中の嫉妬心を自覚してしまった今、どんな顔を彼女に向けたら良い？

迷い。後悔。呵責。連なった負の感情が全身を緩やかに支配した。

それでも見たい。

彼女ともう一度分かれたい。

雪ノ下雪乃との関係をこのままにしたくない。

俺は顔を上げた。

雪ノ下は名残惜しそうな、憂いているような切ない表情をわずかに浮かべていた。

その顔から心情を読むことは出来なかった。

考える間も与えずに直ぐにその場を離れるように雪ノ下は智佐吹さんの後ろに続いた。

は、なんとまあおめでたい男だ俺は。

結局、こんなものだろう。

切り替えるように、パソコンの画面を起動し、メールのサーバーに接続する。

もう気持ちを引きずることはなかった。これまで幾度となく別れと失敗を繰り返してきた人生だ。

なのに、俺は彼女の後ろ姿を目で追い続けている。

そう思った時、雪ノ下が立ち止まった。

そしてふいに振り返ると、こちらに俺だけに分かるように微笑んだ。

「また後で」

そう言うと、智佐吹さんや後に続いて会議室の中へと入った。その姿を追うように見つめていた。呆けていた自分の意識が返ってくるのに幾ばくかの時間を要した。他の男性社員たちも同じくして雪ノ下の後ろ姿を思い返しているようだ。

年甲斐もなく高揚している。

一体、いつからあいつは落としてから上げるなんて技を覚えたのだろうか。

今、鏡を見たらとんでもないくらい情けない表情をしているに違いない。

俺は慌てて視線を自身の机に戻すと、溜まっているメールの返信から取り掛かることにした。

キーボードを叩く音が心なしか弾んでいる。

自分にもまだ可能性があるのだろうか？

そう思うと、昼が待ち遠しくて仕方がなかった。

だが、少年のような若々しい興奮は長続きせず、程なくして冷静さを取り戻さざるを得なくなっていた。

メールの返事を淡々とキーボードで入力しながら今後の相関図を頭の中で整理する。

当然、先の一件がもたらすものは何も良いことだけではない。

寧ろ、俺はこれから激しく困難な道程を歩まなければならなくなつたと評する他無いのかもしれない。

何年も先延ばしにしていた課題が大きな津波となつて、容赦無く押し寄せてきたのだ。

雪ノ下が会社に来た。

その時、あいつは会社の入り口で相当驚いたことだろう。

既に一色との再会イベントは発生しているはず。

あの二人の接触はそれ即ち、結衣と雪ノ下の邂逅もそう遠くはない話になったということだ。

加えて、雪ノ下姉もこの件に間違いなく絡んでいる。

現状は俺と雪ノ下を引き合わせただけでこれといった介入行為はされていない。

しばらくは静観するつもりなのだろうか。とはいえ、必ず時間が来れば次なる爆弾投下も辞さない構えだろう。彼女に取つて俺たちは格好の玩具なのだから。その玩具の一つに自身の大切な妹が入っていると、いう点に関しては雪ノ下さん本人も、キャストである俺も立ち回りには細心の注意を払う必要がある。

その上で最も重要になるのが一色だ。

おそらくあいつは俺の周りの人間関係を結衣以上に把握することになる。

そしてあいつは俺のことが好きだ（自分で言うのもあれだが）

この三角関係をおとなく様子見るなんていう魂胆はまず無い。間違ひなくこの混乱に乗じてなにかしらのアプローチがあつて然るべきだ。大学時代の一色を思い返せば想像に難くない。

本来であれば彼女をこの騒動には関わらせるべきではないのだ。これは俺と雪ノ下、そして結衣の問題なのだから。

だが、一色を外に追いやり、敵に回すというのは愚にもつかない蛮行と言わざるを得ない。一色も、いきなりの雪ノ下の登場に少なからず困惑をしているはずなのだ。あいつの現在の状況は雪ノ下の処遇

を検討している最中だろう。心の整理がつくまでは目立った動きはないと俺は考えている。その前からこちら側が一色に働きかけるのはどうにも愚策に思える。受け身思考にも思えてしまうが、一色の様子を見て対応を考える方が余程賢い。

何より、目下、一番の問題は一色がどんな結論を出すかということよりも、あいつが結衣に雪ノ下のことを話すかどうかだ。

そう、今更だが、俺は結衣に雪ノ下と再会したこと未だに話していない。

そして一色はその事を知らないのだ。

仮に現在の状況で一色が結衣に雪ノ下のことを話してもみる。なぜ俺が雪ノ下のことを黙っていたのだという話になることは目に見えている。

それに対する弁解の余地も無いことは勿論だが、このままだと俺の頭の中で考えも纏まらない内に事がとんでもない方向に進みかねない。

俺が一番恐れていることはこれだ。取り返しがつかなくなる前に何とかして、この崩壊寸前のダムをせき止めておきたい。

なのでまずは一色に現在の俺の状況を理解してもらいつつ、しばらくはこちらの関係に水を差すことなく見守ってもらうよう取り図らねばならない。

：でそんなことどうやったら出来るんだ？

一色にとって現状維持が最も本意ではない結果であるのにもかかわらずだ。

何も首を突っ込まずにそっとしておいてくれと頼まれて素直に首出来る奴が果たしているのだろうか。否、無理に等しい。

話が長くなったので、少しまとめよう。

俺の今後の立場を考えるためにも現在の俺を取り巻く人間関係について俺の個人的な視点から論述してみる。当然だが、これはあくまで俺の主観であって確実性は不明という前提の元というのは言わず

もがなだ。

さて・・・まずは、...

「ふふふ。私の出番かね？比企谷君」

気がつけば芦間が隣の席から覗き込むように珈琲の入ったカップを差し出していた。いつの間に新しいものを淹れてきたようだ。

本当に空気を読んでいるのか読みすぎてあえて読まないようにしているのか、こいつは絶好のタイミングで水を差ししてくる。今から八幡くんが格好良く解説を決める大事な場面だろう！いや、まあそんな大層なものでもないですけど。

芦間のグレーのスーツに似つかわしくもない真っ青なネクタイがやけに存在感を主張している。それなのに何故か似合っている。イケメンって卑怯。

「何のことだ？」

物凄く鬱陶しそうな視線をくれてやりながら返事を返した。因みにお前の出番なんてものは知り合ってから、ついで期待したこともない。

「あらま。強がっちゃって」

「手を借りる必要は無いぞ」

「お前完全に見惚れてたろ？」

「俺は嫁一筋だ」

「あーらら。こりゃあ随分と拗らせちゃってるなあ」

芦間がぼやく。生憎だが、拗らせているのは生来のものだ。物心ついたときからこの性格と付き合っているから高校の頃ぐらいから随分と好きになってしまっている。

「とりあえずだ。お前さ、あの雪ノ下さんっていう黒髪美人とただならぬ関係だったんだろ？」

「ただならぬとは何だ...」

それだと俺と雪ノ下が何やら爛れた仲みたいじゃないか。

「とはいえ別に男女の仲ってわけではないが、親しい間柄だったとは思ってる」

「アツハイ。お前の中でどう違うのかは聞かないことにしておこう…」

芦間は若干納得がいつていない様子だったが、一定の理解は得られたようだ。

「それで、お前がどう俺を助けると言うんだ？」

「随分と上からだなあ…。比企谷って直ぐに表情に出るからそれなりに親交のある人間からすればお前ほど分かりやすい奴居ないからな」
ケタケタと品のない笑いでなじられた。顔に出るといふのはいつも周りの人間に言われていることだが、本当にそうなのか未だに疑っている。

ともあれ自分の現状と雪ノ下とのなんとも言い難い距離感を他人にどう説明すれば良いものなのだろうか。それよか、芦間は信用に足る人物なのかどうか。後者のほうが熟考すべき議題かもしれない。

とりあえず、芦間には雪ノ下は高校の部活の仲間であり、結衣とも親友とも言える関係にあった人物であること。その部活動の中で一色と知り合ったこと。数年間に渡る音信不通からの突然の再会であること。時間が空きすぎてしまったが故に彼女の事が分からなくなってしまうて話を話した。

芦間は静かに頷き、噛みしめるようにしながら黙り込んでしまった。一体何を考えているのだろうか。周りでは既に会議の準備に向けて資料を整理している社員たちの姿が目立ち始めている。

二分ほどしてようやく芦間が口を開いた。

「話は断片的にだけでも、相分かった」

「それで、これをどう見る？」

「どう見るって言われてもなあ。それは俺よりもお前のほうが絶対に事情分かってるはずだぞ」

「…。それが皆目見当がつかないからこうして恥を忍んで相談していただなあ」

「というか、比企谷の高校時代を聞くに、こうして人に相談しているのも成長したってことなんだろうなあ」

「それは言わんでもいい。もう高校の知り合い達から死ぬほど言われ

た」

「あはは。やっぱりそうか」

芦間は肩の力が抜けきっている様子だった。こちとら、肩に力入りすぎてもう朝っぱらからずっとガチガチで石になりそうだったのに。

「それでさ比企谷。一個質問があるんだけど」

芦間が唐突に真面目な顔に戻る。

「ん？何だ?？」

間の抜けた返事を返すと、芦間はその空気に似つかわしくないと張り詰めた表情でこちらに迫る。

「結局、比企谷ってどうしたいわけ?」

こいつは本当に一番俺が言われたくないことを、一番相談相手が言うべきことを的確に述べてくる。

続く

第十五話

「せんぱーい。そのエビフライ一つ貰えませんか？」

「だったらなんでエビフライ定食にしなかったんだお前…」

相変わらず一色は俺の食い物をやたら欲しがる。あと、俺の返事を待たずして勝手に取るのはデフォルトですかそうですか。

「いいじゃないですか。私は、先輩の、エビフライが食べたいんです！」

「色々と誤解されそうだからやめてくれませんかね…」

一色が俺のエビフライを食べたい。うん、普通。

「もしかして先輩、とてつもなく変なこと考えてませんか？うっわ、セクハラ」

「え、これ俺が悪いの？」

「え、本当に考えてたんですか!? 存外最低ですね、先輩」

「いや、別に考えてはない」

頭よぎったけどちやんと引き返してるからセフセフ。

「比企谷君、今のは君が反省すべきだね」

智佐吹さんが咎める。くすくすと笑いながら。

この人完全に楽しんでいるな…。

「罰としてエビフライもう一本ください」

「あ、おい。それ盗られたらもう只のキャベツ千切り定食になるじゃねーか」

こちらが弁解をする間もなく一色はエビフライを取り上げた。魔女裁判だと思っただけ。

「じゃあ代わりに私のを食べていいですよ♪」

そう言うで一色は自分の味噌汁の器を差し出してきた。完全に飲みかけじゃねーか。

すると一色がおもむろに耳元に顔を寄せて来た。

「間接キスですね…」

やめい。その言葉は俺に効く。あと照れながらやるんじゃない。言った自分まで顔を赤くなっていたら、この空気をどう収束させたら

いいんだ。俺まで顔が爆発しそうになる。

あと、今そんなことやったらどうなるか分からないお前じゃないだろう。

「……………」

ほら見る。眼の前でユキペディアさんが世にも恐ろしい表情になっておられる。こういう時は、智佐吹さんも基本ノータッチで温かく見守ってるし。芦間に至っては爆笑しながら『メシウマ』連呼しながら白米かき込んでいる。隙あらば火に油だ。

お陰様で八幡の寿命は12日ほど縮みました。一色め、分かかってやっっているだろ。

「それなら、比企谷。俺の唐揚げをあげよう」

このタイミングで動けるお前の胆力には感服するわ。あと、唐揚げは有り難く貰っておく。

食堂だと基本的にエビフライ定食を注文しがちになる。この社員食堂って基本的に揚げ物が美味いからな。うん、唐揚げも悪くない。今度頼んでみよう。

さて、現在の状況を説明するか。午前中の業務を終えた俺は今地獄の昼食タイムを迎えている。メンバーは5人。俺、雪ノ下、智佐吹さん、芦間、そして一色。席順は俺を中心に右側に一色、正面に雪ノ下、右前に智佐吹さん、俺の左側に、はみ出る形で芦間が座っている。智佐吹さんの粹な気遣い（大迷惑）もあって正面で俺と一色の寸劇をまざまざと見せつけられる形となった雪ノ下の表情はすこぶる優れない。段々とここだけ気温が下がってきているようだな…。

恐る恐る雪ノ下の顔色を窺ってみると、雪ノ下は未だにムツとしていらっしやる様子。黙々と焼魚を口に運ぶだけだから余計に怖いんですけど。

「あら、比企谷君。欲しがりね、よかつたら、私のサンドイッチも一口いるっ。」

そう言うと、智佐吹さんがサンドイッチを差し出す。

おいちよつと待て。それ食べかけのやつじゃねーか。完全にアウトです。ちよつと欲しくなったりしちゃうけど。痛い！一色、横腹つ

ねらないで。

(。 ㇿ) ハッ！ イカン。雪ノ下、、、

「……………」

あ、死んだ。

えーと、葬儀屋の予算って幾らくらい？墓石もまだ二十代だから購入してないんですけど。今から買ったなら安くなったりするのだろうか。お仏壇の〇〇川にも連絡が必要？あ、あとパソコン内のファイルは不本意だが、材木座に処分してもらわないと。というか死が眼前あつて終活もへつたくれもないような気もするが。

いやいや、何いきなり人生の後始末を考え始めているんだ俺は。

物思いに耽っていると、白い物体が視界の一部を遮っている。どうやら目の前にサンドイッチが伸びていた。

「え、智佐吹さ」

「はい、あーん」

智佐吹さんが顔を右手に預けながら左手に持ったサンドイッチを俺の口に運ぶ。アカン、悪乗りモードに入っている。よりにもよって何でこのタイミングでなんだ。結局食べさせられちゃいました。うん、美味しいよ。美人のあーんだからね。

「まあ、奥さんを持ちながら会社にも沢山の女性に囲まれているようで。本当に幸せ者の女房泣かせですね、比企谷さん」

ああ、もうこの丁寧語が完全に殺しに来ている。高校の時よりも刃がより鋭くなっているようだ。

「この期に及んで、よくもまあそんな事を…」

朝もそうだったが、雪ノ下もなんだか楽しんでいるように見える。それがまるで憑き物が落ちたような軽やかな笑顔であることが特に印象的だった。

「それで、雪ノ下さんって比企谷やいろはちゃんと同じ高校の出身でしたっけ？」

芦間が早速、雪ノ下に質問していた。クラスに新しい転校生がやってきたかのように目を輝かせている。

「そうですね、彼とはクラスは違いましたが部活の方で一緒に活動を

しておりました」

「部活っていうのは何部なんです?」

「奉仕部という名前です」

「ん???奉仕部??」

「要は悩める学生のお手伝いをするとかいう何でもボランティア団体みたいなもんだ」

「何じゃそりゃ。ボランティアっていうんだから見返りもなにもないんだろうけど、何も学生時代からそんな社畜みたいなことやらなくても良いんじゃない?」

それを言われるとなんとも心が痛む。奉仕部の活動内容を言ったところで絶対に理解されないのは予想していたが。

「トシ、それだと私が比企谷君を馬車馬みたいに働かせているみたいじゃないの」

「そりゃあ、深読みつてもんですよ。智佐吹さん☆俺はこの部署に配属されて本当に幸せ者ですよ」

「ワイー。ウレシイナー」

芦間は合コンの特攻部隊かのように場を盛り上げて空気を和ませる役目を買って出た。こいつの本来のひねくれた性格を知っているのでなんとも嘘くさく感じる。だが、今回は純粹に雪ノ下に興味を持っているからなのか、なんとも流暢な場回しだ。とはいえ、こいつの人前での無駄な陽気さに助けられてきた場面は何度もあった。高校時代といい、そういう変なスイッチが入ったらテンションが爆上がりするやつと仲が良くなりやすいのは一生直らないのだろうか。やれやれ、だとしたらこれから先の人生が思いやられるな。

「それで、私と比企谷君。それから少しして、由比ヶ浜さん…比企谷君の奥様が入部されました」

「ほへー、比企谷からは、かいつまんだ話を聞いたことはあつたけど、改めて聞くことで話が一つにつながっていくような感覚になるな」

「比企谷君ってあんまり自分のこと、話さないようにしてるもんねえ」「それはまあお互い様でしょうに」

智佐吹さんと玉木さんはシークレットだらけすぎて一般公開され

ている情報を上げるほうが難しい。ねらーが考察スレを立ててもおかしくはない。

「女は良いの。秘密がないと色気を保てないでしょ?」

「だとよ、比企谷」

「俺には分からない世界だな」

「ほんとこれだから先輩は…」

「比企谷くんって本当に夢がないなあ…」

女性陣から一斉にブーイングを食らう。何もそこまで言わなくてもいいのに。

「なあ雪ノ下さん。比企谷ってやっぱり高校のときから現在に至るまでこんな感じ?」

「そうですね。微分しても0です」

俺が苦手な数学でわざと追い詰めようとしているのか。つくづく随所に毒を混ぜることに余念が無い。てか、大分、雪ノ下も溶け込んでいるなあ。

その後は、雪ノ下の生い立ち、帰国子女である話、学生時代は学年トップの優秀な成績であったことなど導入としては悪くない当たり障りのない会話が恙無く進行している。結衣の話に路線が変わるかもと危惧していたが、初対面でそこまで探るべきではないと芦間や智佐吹さんがはからつてくれたおかげか、奉仕部三人の人間模様については誰も触れなかった。このまま昼の休憩時間を芦間に持たせてもらうというのが、俺にとっても最も有り難く労力の少ないやり過ぎ仕方なのではあるが。

まあそうもいかないだろう。なにせ、芦間の前で俺はあんなことを言ってしまったのだから。

もう少しの間、一歩引いて様子を見てみることにした。

この場における司会進行、つまりMCは芦間が務め本日のゲストポジションが雪ノ下。番組のレギュラーでもあるパネラーたちが智佐吹さんや一色といったところか。因みに俺はスタジオを見守るADのような立ち位置にいる。6割型、芦間が得意の会話術で巧みにこの場を取り仕切った。それでいて、相手に嫌味を感じさせないのが、こ

いつの凄いところだと思う。

「それです、私、無理やり生徒会長候補に推されたのにもかかわらず、先輩ったら本当に私のことを生徒会長にしちやっただんですよ！それも裏工作滅茶苦茶やって」

おい、どうして急に一色が生徒会長になった話にすり替わっているんだ。さっきまでの雪ノ下の身の上話の展開はどこに行っただ。それとも何？俺が考えている内にまた、話が何章か進んだりしていたの？

「比企谷がそんな手段をねえ……。中々、高校生が思いつくような方法じゃないなあ。全く……。お前、高校生の時から一際やべえ奴だったのな」

「やべえとかお前に一番言われたくない言葉だな」

「ねえ、その時雪ノ下さんはどう思ったの？」

「こら、そこ。雪ノ下にパス出さな。地雷しか無いから。紛争地帯よりも多いからな。主に被害者俺。」

「そうね、あの時の彼はもの凄く強引だったわね」

「そう言うとき地悪く、雪ノ下はこちらに流し目を送るようにしながらこちらを見た。」

やめてくれ。お前が言うとき凄くグサツとくる……。

あと、目線が色っぽくてホントに照れるからやめて。男、比企谷八幡。三十路を近くに迎えてデレデレするとか黒歴史過ぎる。何？お前はいつも結衣にデレデレしているだろって？あれは夫婦間のスキンシップとしては普通の範疇ではないのか？あと、いつの間にか雪ノ下さん、肩の力抜けて結構、素の口調に戻ってるのね。

「それでその後、ある事件をきっかけに雪乃さんと結衣さんにこっ酷く怒られることになるんですよね、先輩♪」

「……………つ。お前はまた余計なことを」

あーもう滅茶苦茶だよ。それ、奉仕部がやばかった時だし。それで、その後ももう一度やり直そうとした時に俺が放課後の奉仕部の部屋で、二人の前で、くあwse d r f t g y ふじこ i p .」

ああ、死にたい。

トラウマだよ。今でも恥ずかしい思い出No.1だよ。

「ほう、それは初耳だなあ」

「え、私もそれ凄く気になるんだけど」

「えーと…。雪乃さん、この話って」

どうやら一色さん、自分から話の導入を切り出しておきながら、巻き込みの安全確認はしていなかった模様。俺はというと事故に巻き込まれたくないので、素知らぬ顔をしている。

「別に構わないわ。そこにいるヒキガエル君に丁度、お灸を据えられるいい機会でもあるから」

くすくすと笑いながら、こちらをちらと見る。

ちよつと、小学生の頃のトラウマを息を吐くようにドリルで抉ってくるのやめてくれませんか？もう八幡のライフはとつくに0よ！

「ヒキガエルってお前…。中々、思った以上に大変な学生生活送ってたんだな比企谷」

いや、あの、確かに大変ではあったけど、ヒキガエルで同情されたなんてのはこちらとしても誠に不本意なんですけど。

「私は、今のは愛情のこもったヒキガエル君だと思うけどなあ」

愛情のこもったヒキガエル君って何…!?待って、智佐吹さん。貴方完全に雪ノ下のことを誤解している。今のうちに間違いを正しておかないと取り返しの付かないことになりそう。イカン、脳内のツッコミすら追いつかない。

「さて、話が逸れたけど」

「比企谷君が奥さんと雪ノ下さんを怒らせてしまったその事件。気になりますね」

ほら、高校時代をあまり知らない同僚や上司がキラキラと目を輝かせて、はしたなく身を乗り出しているじゃありませんか。もう俺知らない、ハチマンは何もシリマセーン。

「それは…って実はこれ、結衣さんや先輩からの伝聞で私はその場所に居たわけじゃないんですけど…。というか、先輩これ本当に話しても良いんですか？」

一色が不安そうな目でこちらを見ている。こいつには大学の時に

何があったのか一応話したしな。

「好きにしろ。どうせ止めたって知られることにはなるだろうからな。遅かれ早かれの問題だ」

「じゃあ遠慮なく♪」

これいろはさんや。少しは自重心とか見せてほしかったなあ。しかしながら、比企谷八幡、最初からそんなものは期待していなかった。とはいえ、雪ノ下も別に問題ないと言ったのは少し意外だった。時間が経ったから過去の笑い話になるような代物でも無い気がする。こいつは一体、何を考えているんだ？

隣では一色が事の始まりから丁寧に語り始めていた。これは相当時間がかかりそうだが、果たして昼食の休憩時間中に終わるのだろうか。

「それですね…。私が当時好きだった葉山先輩のグループで：こんな問題が起こりました……………」

「ふむふむ。あー、青春してやがるねえ……………クソが」

「え、チョットマッテ。いろはちゃん、ハマセンパイについて詳しく説明してほしいんですケド……………」

ほら、早速脱線しそうになってるし。一人は修羅の相になりかけていて、もう一人はメンブレ寸前の状態に。もうこの二人、まともに話を聞くだけの状態に戻りそうにもないが一色は飄々と語り続けている。

雪ノ下はというと、昔を懐かしむかのように一色の話に耳を傾けていた。

その時からだろうか。

俺は雪ノ下から目が離せなくなっていた。

馬鹿らしくなるほどの凝視だ。

一色が話をする程に、かつての記憶が呼び起こされる。そして、憂いてしまうのだ。

奉仕部のときのように話す事ができたらどんなに救われることだろうか。恥ずかしい話だが、自分の中にある感情は雪ノ下と再会してからこれだけだ。

『結局、比企谷ってどうしたいわけ？』

『っどうしたいって…。そりゃあ』

『なんだ？言うのは奥さんに気を遣っちゃまうか？』

『…まあな』

『ははは。それ、答え言ってるようなもんだろ』

『うるせー』

『別に昔ギクシヤクしちゃったから仲直りして仲良く出来たら良いなあってくらいは浮気にならねーよ。しかも、その人が奥さんの親友でお前にとつても大切な人ときたら尚更だ。まあ、お前が個人的にも親しい関係になれたらって考えているのならまた話は別になるのかもしれないけど』

『別にそんな感情はねーよ』

『でも、見惚れてたろ？』

『……おう』

『うひひ。お前…おもしろ』

『…っ覚えとけよ』

『おいおい落ち着けて。あの美貌ならしやーない。それに建前ってのは大事だ。建前があれば嘘にはならないでござるよ、比企谷殿』

『それ、暴君か独裁者の受け売りか？』

『全然乗ってこないなお前…。俺が言いたいのは本音の一割でも自分が言ったことの中に入れてりゃ、相手を騙したことにはならないって話だよ』

『詭弁にしか聞こえないが社会じゃそれが割とまかり通っているのがまたなんとも世知辛いものだな』

『人間って卑怯で器用だろ？』

『だからといって俺のそれが通るのは別な問題だろ』

『通るか通らないかじゃないぞ。もしかして、当の本人でありながら、お前は問題の本質を理解していないんじゃない？』

『は？』

『通ろうが通らなからうが、バレるもんはバレるのよ』

『おい、何が言いたい？』

『要はお前の中の罪悪感をどうするかってのが一番の問題なの。他のことなんざ、奥さんちゃんと抱いてやれば万事、オーケーってもんよ』

『何という身勝手な極論』

『さて、冗談はさておきだ』

『結構なブラックジョークだったぞ』

『3割本気だ』

『3割マジだったのか』

『上手に嘘をつくには3割の本音を混ぜることだけ、比企谷』

『土壇場になった時にでも参考にさせてもらおうわ』

『お？それなら近い内に、使うことになるだろうな』

『不吉なこと言うもんじゃないと思うぞ』

『ははは。そんで、どうすんの？』

『……。とりあえず、雪ノ下と仲直りがしたい。力を貸して欲しい』

『はいよ了解。………。とりあえず、今はそれでもいいか』

『ん？なにか言ったか??』

『いーんや、なんでもないぞ』

………。

「……というわけで、先輩は二人に頭を下げて、再度協力をお願いすることで一件落着には一応なるんですよ。まあ、その後も向こうの高校とも一悶着どころか、二十悶着くらいあったんですけど」

「ほう、そこらへんの話も面白そうだなあ」

「比企谷も言う時は言うんだな。俺ちよつと見直したよ」

「そうですね〜先輩〜♪」

「お前、余計なこと言うなよ……」

「え〜何のことですか〜?」

はい、いつもの。もういい歳なんだから、いい加減こういうやり取りもどうかとは思っているのだがこれが一色の良さでもあるのかもしれないとここ数年はそう思うようにしている。

ふと一色が耳元に顔を寄せた。

「あの時の先輩。凄くドキドキしました」

俺だけに聞こえるような小さな声で呟く。

…あれ以来、何回後悔したことか。やめて、雪ノ下！そんな優しい笑顔でこっち見ないで。とどめを刺しに来ないで。

「…相変わらずね、本当に」

雪ノ下が、柔らかな表情を崩して、ジト目でこちらを見る。その言葉は俺だけでなく、一色にも向けられているようだ。

「はい♪楽しくやらさせて頂いてます♪」

こいつはまた。

「というか、そんな濃い学生時代を送ることが出来たの素直に羨ましい…」

「ですよね。俺なんか何も変わったイベントもない平々凡々な高校時代だったわ。うち男子校だったし」

「私は共学だったけど、浮ついたことは何も…。クソ」

さつきから智佐吹さんが嫉妬の渦を巻き起こしていて、万人を引きずり込もうと言わんばかりの狂気を発している。純粋な人には教育上全くよろしくない。あ、この場に純粋な人居なかったわ。

…て気づけばもう昼の休憩時間終わりじゃねーか。結局何にも雪ノ下と会話しないで終わったぞ!?

「おい、芦間」

周りにばれないようにそつと耳打ちする。

「ん？どうした比企谷？すまないが、俺はしばらく立ち直れそうにな…」

「お前…今朝の俺の依頼は覚えているよな？」

「依頼？ああ。勿論それは忘れていないけどさあ。てかさ、いろはちゃんって高校の時からお前のこと好きだったんじゃないの？」

芦間は顔だけこちらに顔を向けながら疑問を口にした。たった数分で10歳以上も老けたように見える。

「なんか、お前からその言葉を聞くのは少々意外だ。そこらへんも話せば長くなるが、俺が話しても良いものなのか分からないから、本人に聞いてみたらどうだ？」

「比企谷…お前って結構陰険なんじゃ…」

意趣返しではない。俺はただ、本心を述べているのだ。俺は悪くねえ。

「とはいえ、お前が会話を回してくれたおかげで場も気まずくならずにすんだ、ありがとうな」

「最早、清々しくなっているお前を見るたびに、こっちの心臓に鉛を吊るしていくような気分になるわ…。まあ、雪ノ下さんとは二人で話せるタイミングがあれば、その時に踏み込んだほうが良いんじゃない？少なくとも今のこの空気じゃ無理だろ」

「良くも悪くもお前さんのおかげでな」

何故か自然と笑みがこぼれた。今度、珈琲くらいは奢り返してやるか。

「さて、そろそろ時間だね」

智佐吹さんがトレイを持って立ち上がった。時計を見ると確かに五分後には午後の業務を始めなければならない時刻になっていた。

「あーあ。今日は流石に日付が変わる前に上がりたものですねえ」

うんと伸びをしながら芦間が悪態をつく。この業界の業務事情など悟っているだろうに。

「そうだな。願わくば今日は早めに帰ってゆつくり休めたら良いが」

とは思いつつも俺もそれに続いた。ここ最近では業務外で思われる心労を要する機会が多すぎる。一日ぐらい、何も考えず本だけ読んで終わる休日があっても良いんじゃないか。

「心配しなくても、向こう二ヶ月はこんな感じだからよろしくね」

笑顔で殺しかかかってきた。もうやだ、この業界。

智佐吹さんはそのまま返却口へと足早に向かっていった。

「そういえば先輩、ご飯奢る約束忘れてないですよね？」

一色がそれに乗っかるように釘を差す。

「え？アレって有効なの？」

そういえばこの前、雪ノ下の会社に向かう時にそんな話になったような気がする。痛い！一色ほっぺ抓らないで！

「奢ってくださいすよね？」

「…はい」

「やった〜！じゃあ楽しみにしてますね♪食事の後はバーにも連れて行ってください！」

おい。追加注文すな。

あーもう、芦間やら雪ノ下やらにめっちゃ睨まれてるし。

しかもバーってなんだ。俺はそんなオシャンテイなどところに行くようなやつでもないから全くレパートリーが無いんですけど。

「比企谷君、奥さんが居ながら随分と女性との時間を大切にしているのね」

「お前絶対、察していてそれ言ってるだろ」

「何のことかしら？」

雪ノ下の足取りは早かった。まるで俺から距離を取るかのように。地味にシヨックだ。

「あ、比企谷君！」

反対側から智佐吹さんが駆け寄って来た。何か言い忘れたことでもあるのだろうか。

「雪ノ下さんを下までお見送りしてきなさい。彼女このまま会社に戻ることにしたみたいだから」

「え」

この雰囲気のままですか？一色を一瞥すると、『じゃあまた今度予定教えてくださいね〜！』と流れるように離脱していた。芦間にいたってはいつの間にかいなくなっている。もしかすると、ミスディレクションの使い手なのかもしれない。

智佐吹さんは雪ノ下に追いつき、少しばかり言葉を交わすところらに『じゃ、あとはよろしくね』と伝え、そのままオフィスに戻った。いやいや、さつきまでのやり取り見ていませんでした!?俺と雪ノ下二人残したらどうなるかが、わからない貴方ではないでしょう!?

本当に、あの人は俺に気を遣っているのか、面白がっているのか全然分からない。

結果、なんとも言えない気まずい空気の中、食堂の前、二人きりで取り残されてしまったわけである。

全く。お誂えとはいえ、面倒な展開を持つてきてくれたものだ。俺にとつて、不機嫌な女性の扱いほど不調法と言えるものはない。

雪ノ下は背中を向けたまま立ち止まり、顔だけ振り返るようにして、こちらの様子を窺っている。

「えーと、その。じゃあ、送ります」

「私は宅配物ではないのだけれど」

手持ち無沙汰になって宙に浮いた言葉を雪ノ下が、呆れ顔で咎める。俺は少しだけ歩みを早めると雪ノ下に並んだ。雪ノ下は案内は要らないとばかりに先を行くように移動するが、間もなくして、迷ったのか左右の分かれ道の真ん中できよろきよろとあたりを見渡して俺の顔をじつと見つめた。

「……………こちらです」

右にあるエレベーターを指差すと雪ノ下はさも分かっていたと言わんばかりに、その前に向かうと降りるボタンを押した。分からないのであれば聞いてくれればいいのに。

二人が並んでエレベーターが下から上がってくるのを待つ。

お互いの顔色を伺うこともなくただ呆然と階数の電光表示が返歌していく様子を観察していた。

「…貴方、一色さんと仲が良いのね」

「は？」

唐突に雪ノ下が重い口を開いたかと思えば、何を言い出すんだ？

俺と一色？

仲が良いのだろうか？

横並びというよりは完全な上下関係のようにも思えてしまう。

「ただ付き合いが長いだけだろ」

そう言うと、雪ノ下はうつろな目で下を向く。

「そうね。でもそんなことって中々、人生で起こり得ない貴重なことですよ？……………一緒に居たくても居られない人だっていると思うわ」

「ん？途中で聞こえなかったがなにか言ったのか？」

「別に。なんでもないわ」

その時、機体の到着を告げるベルの音がホールの前に響いた。そこからは会社の入り口まで特にこれといった会話は無かった。雪ノ下はこちらに深くお辞儀をすると、駅へと向かった。少しづつ小さくなりゆく背中を見つめると、どうしようもない寂寥感と焦燥感が押し寄せてくる。

果たして彼女をこのまま見送るだけで良いのだろうか？

数年前の記憶が呼び起こされる。

俺はかつて見たことがあるはずだ。あの背中を見放し、記憶から消し去ろうとした。

そしてその後どうなった？

後悔と自責の念に駆られ、癒えることのない喪失感が身体を覆い尽くした。

何年も呆然と人形のような毎日を送った。

さて、比企谷八幡よ。お前はまた、同じ過ちを繰り返すのか？

今しかない。

そんな気がする。

どういうわけか、今ここで雪ノ下を呼び止めなければ次は無いように思えた。冷静に考えてみれば、しばらくは幾らでもチャンスがある。明日は出向で雪ノ下にも会える。これから依頼が終わるまでは毎日とは言わずとも、何回かは雪ノ下は今回のように会社にやってくるだろう。

自問した。

お前は気づかないふりをいつまでしている？

彼女からのサインは数え切れないほどあった。

俺は今に至るまでそれを無視した。

気づいていたのに。

手を伸ばそうとまでしたのに。

最後にその手を掴まなかった。

あいつが明日も手を伸ばしてくれる保証がどこにある？

お前はいつまで、甘えているのだ？

何日、いや。お前は何年待たせたんだ？

あの時、俺たちは答えを委ねてしまった。

だからこそ、間違えた。

いや、間違えたのだろうか？

やり直せることだってあるのではないか？

たとえそれが、世間一般の常識では間違っていたとしても。

誰が、それを間違っていると決めることが出来るのだろうか？

間違いだと思っていたことが何十年も先に正しかった事がわかるなんてザラなのだから。

死ぬ前に大抵分かるもんだ。そういうのは。

気がつけば自然と走り出していた。

「雪ノ下ー」

人目もはばからず大声で彼女を呼び止める。自分でもどこからそんな声が出たのだろうかと思議だ。

雪ノ下は驚いた目でこちらを振り返った。なにせ、こんな公道で自分が呼ばれるとも思ってもみなかっただろう。

流れ出る汗がシャツにベタついて気持ちが悪い。

でもそんなことはどうでもよかった。

車道の車の喧騒も耳に入らないほどに自分の意識が一つに集まっている。

雪ノ下は胸に手を当てながらひどく狼狽しているようだ。

しかし、直ぐに冷静さを取り戻すと、いつものように冷たい視線をこちらに向けた。

「何かしら比企谷君？こんな公の場で脇目も振らず大声で、私を追いかけてきて。危うく通報しようかと思つたのだけれど」

「携帯の110番の入力画面見せながら言うなよ。もう通報する気満々だったんじゃないか」

雪ノ下は相変わらず容赦がない。冗談ではなく本気で俺を警察に突き出す気だったなこいつ。

「当たり前でしょう。貴方にも多少なりともモラルやマナーといったものが少しでも残っていると思っていた私が馬鹿だったわ」

「残っているとは何だ。俺は生まれたときから道徳心の塊だ」

「笑えない冗談ね」

つつけんどんな返事だった。だが、こちらとしても、もうここまで来たら退くわけにはいかない。

俺はポケットからケースを取り出すと彼女の前に中身を突き出した。

「ほら、これ」

「え?」

雪ノ下は俺の渡したそれをじっと見て動かずにいる。

「俺の名刺だ。これがないと、いざって時に仕事の連絡ができなくて困るだろ?」

雪ノ下はまるで反応がない。というよりは肝をつぶしたのか、動かなくなってしまうている。

「貴方、たかだかそのためだけにあんなことをしたの?」

「あんなこととはなんだ。こつちにとつては滅茶苦茶重要なことなんだよ」

その言葉を聞いて少しだけ雪ノ下の顔が赤くなったのが分かった。いじらしそうに下を向きながら、こちらをそつと見上げる。何度も言うが、自然体で男を墮としにかかるのやめて欲しい。

「…貴方、その発言は色々と誤解を招くわよ」

「え」

いや、まあ。そう言われたらそうかもしれないが…今は考えないようにしよう。今、冷静さを取り戻して恥ずかしさがこみ上げてこようものなら八幡死んでしまう。

「はあ。とにかく。貴方の言うことも一理あるから受け取っておくわ」

そう言うつぶつきらぼうに雪ノ下は名刺を手を取った。雪ノ下にはばれないように俺はそつと胸を撫で下ろした。

いかん。徐々に頭に登った血が降りてきている。そうなる前にこ

こを離れねば。

「じゃあ。また」

「ええ。また明日」

雪ノ下も同じ気持ちだったのか、それだけ言うと、お互い踵を返して足早にその場を離れた。会社のビルの入口に入った時に雪ノ下の名刺を貰い忘れたことに今更気がついたが、そんなことはどうでも良かった。自分の連絡先を渡したただけなのに雪ノ下とつながったような気がしたからだ。

何の根拠も無い幸福感がじんわりと胸の中に広がった。俺は小学生か。

そのまま仕事場に戻ると、いつものように資料作成とメールの返信に追われる日常に戻った。受信ボックスを開いてみると目を覆いたくなるような夥しい数の未読メッセージの山にお出迎えされる。中には午前3時に届いたものもある。先方さん、一体何時に寝てるの。

ふと携帯のメッセージの着信音が鳴った。ロックを解除して、内容を確認すると、差出人は一色だった。

『相談したいことがあるので、仕事終わりに少しだけ話に付き合ってください』

どうやら、拒否権はないらしい。

『分かった』と返事を返した。

スマホをポケットに突っ込むと早速パソコンに大量に届いた、メールの返信に取り掛かる。

キーボードを淡々と叩く音を耳に入れながら、これからのことをぼんやりと考えた。

続く

第十六話

帰宅した時には深夜の12時を回っていた。

玄関の出迎えはなく、家の中は人の気配を感じさせないような静寂だ。結衣からは帰宅途中に『ごめん、今日は先に寝るね』とLINEが来ていた。そういえば、今朝、彼女が久しぶりに三浦や海老名さんといった総武高校時代の友人達に会うと言っていたような。その疲れからか今日は寝てしまったのだろう。まああのメンツならこうなるのも無理はないな。

結衣は随分と幸せそうに眠りについていて。子供が出来たらこんな感じに眠り顔を見守ることが出来るのだろうか。それも悪くない。

冷蔵庫の中に今日の夕食がラップを掛けて置かれていた。それをそのまま電子レンジの中に入れると『あたためスタート』のボタンを押した。昨今の電子レンジであればレシピごとに加熱方式をボタンで設定できる程に技術が発達しているが、疲れからかわざわざ時間を弄してまでその作業をする気力が無かった。

携帯の画面を確認したが、着信や、ショートメッセージの類の受信の通知は来ていなかった。今日渡したばかりでいきなり連絡が来るはずもないのに何を期待しているのだろうか俺は。

自分が逆の立場だったらと仮定して考えてもみる。うん、絶対送らないわ。はい完。

最近是这样い一人の時にやたら今日の一日を振り返ることが多くなってきた。それも当然か。まるで漫画の超展開のように毎日がハプニング続きだ。寝る前に事前整理でもしていなければ脳のキヤパシテイを余裕で超えてしまう。

正直、昨日今日再会したばかりで雪ノ下がいきなり会社にやって来たことは本当に想定外だった。この数日間で一体、どれだけの寿命が縮んだことだろうか。健康に良くない。医者が休養を勧めるに違いない。そう、俺は休みたい。あわよくば労災で生活したい。

馬鹿につける気付け薬のようなレンジの完了音が鳴った。鍋つかみもつけずに皿を取り出すと、結衣が寝ているので机の上に静かに置

く。

静謐の中で食事を取りながら、一色との会話を思い出していた。当然だが、雪ノ下の登場によって一言物申したい気分であることは昼食の前からとつくに予想はついていた。

仕事終わりに会った彼女の様子は予想していたものよりも、遥かに冷静にして狂気だった。

いや、言葉で表現することすら、彼女の感情に限界を創造してしまうことのように思える。

…。

仕事が終わって、一色との待ち合わせ場所にすぐに向かった。智佐吹さんが仕事のヘルプをお願いしてきたような声が後ろからしたが、今日はこれ以上残業する気分にもならなかったので捕まる前にそそくさと退散した。オフィスを出る直前に彼女の恨めしい声が伸びてきたが、それは気のせいだ。とはいえ、無視は今後の人間関係に関わるので、『今度何か、別の形で返すので許してください』とだけ、返しておいた。その言葉を聞いて驚くほど、溜飲を下げた上司の顔が今でも忘れられない。それになんだか、気味の悪いゲス笑いをしていたよ。うな。というか、サービス残業一ヶ月40時間ノルマで各々が自由に消化すればいいって決まりじゃなかったか？俺はもうその条件はクリアしているのだから、今月に関しては何の問題も無いはずだ。

『あ、先輩。お疲れ様です!!』

『おつかれ。悪い、待たせた』

『今日もお仕事長かったですね。二時間以上も待つちやいました』

『へいへい。悪かったな』

『別に大丈夫ですよ。このあと特に予定も無いですし』

一色は会社のビルから一駅離れたカフェで待っていた。流石に、ビルの入口で待つのは色々とお互いに支障をきたすという配慮からだ。待っていたと言うわりには机の上には本や紅茶が置いてあり、周りの雰囲気も静かなので、有意義に過ごしていたんじゃないかとも思う。急ぎ気味で来る必要も無かったんじゃない。

『それで、話つてのは何だ?』

『もう。先輩つて本当に要件人間ですよ。少しぐらい、ムードとか女の子の気持ちとか意識して欲しいです』

『相談つて聞いて来たのにそんなことまで配慮しないといけないのか…』

『むう。それはご尤もなんですけど。なんか、こう。ね。…まあ良いです。先輩ですし』

『え、もう呆れられてんの?俺』

『え、今更ですか?』

『よし、帰る』

『あああああ!ちよつと待つてくださいいよ!!本当に大事な話があるんですから!』

『おいおい、やめんか。分かった!分かったから!!』

一色はしがみついていた。もう大人なんだからそんなみつともない姿を公然に晒すのはハチマンどうかと思うんですよ!?それよか、同じグループに括られるこつちの身にもなつて欲しい。仕事も終わつて、日もすつかり落ちたというのに嫌な汗をかいてしまった。

落ち着くためにもまずは着席しよう。

俺と一色は向かい合うようにして席に着いた。一色は机の上に肘を乗せながら顔をこちら側に乗り出している。お前は女子高生か。

店員がドリンクのメニューを持ってきた。とりあえず最初に目に入ったカフェオレを注文する。

しばらくは一色の会社での愚痴や、最近の流行り物の話など、取り留めのない会話をしていた。こうして一色と二人で話すのは久しぶりなのかもしれない。大学に居た頃は二人でよく話していたはずなのに、覚えたのは懐かしさではなく新鮮さだった。

だが、一色と間に広がる沈黙は決して不快感を感じさせるものではなかった。深層心理では大分俺は一色に心を許しているのだろうと思う。こういう時に得てして、本当の人間関係の距離というものが分かったりするものだ。初めて一色に会った時の俺であればこいつと気の置けない仲になっているなんて夢にも思わないことだろう。現

在の俺ですら、半信半疑なのだから。

『それにしても…』

一色が口を開く。先程の女の子らしい姿勢とは真逆とも言える、完全に机に身体を預けた状態で話を続けていた。俺が高校の先生であれば寝ていると思つて注意したな。

『雪ノ下先輩に朝から会うなんて心臓に悪すぎですよ』

『俺もだ。まさか、会社に来るとは思わなかったわ』

『“会社”…ですか。その口ぶりからして、やっぱり先輩は今日以前にも雪ノ下先輩に会つたことがあるんですね？』

一色が咎めるような口調になる。自分に伝えていなかったことに腹を立てているのだろうか。カップの呑口を指で何度もなぞりながらこちらを見ていた。

『言うタイミングが無かつただけだ。俺だつて雪ノ下に久しぶりに会つたのは昨日のことだからな』

『それって、出向先が雪ノ下先輩の会社だつたつてことですよね？』

『ああ。待ち合わせ場所で待つていたら、いきなり雪ノ下が現れて固まつた』

『なんか運命の再会みたいでちよつと癪です…』

『実際に雪ノ下と再会した時は運命というよりは、何か自分が誰かの筋書きの上で操られているような感覚に襲われたんだけどな』

いじける一色をフォローするように付け加えておいた。とはいえこれは真つ赤な嘘というわけでもなく雪ノ下の会社から家に戻つてきた時に思つたことだつた。

『それは、なんとなく分かりますね。うーん、陽乃さんの差金…かなあ？』

一色は不安そうな表情でこちらを見る。

『まああの人は間違いなくこの件に絡んでいるだろ。雪ノ下さんが会社に来て来たすぐ翌日の出来事だからな。そう考えないほうが不自然なくらいだ。ただ…』

『ただ？』

『……………いや、なんでもない』

頭の中をよぎった考えを今一度反芻し、口に出さずにおく。

一色に雪ノ下さんの話題を出された時、俺は一連の流れを最初から振り返っていた。

雪ノ下さんが会社に来る。そしてそこから、あまりにも整然とセツティングされた俺と雪ノ下の再会。勿論、雪ノ下さんであればこの程度の裏工作は造作も無いだろう。どうやったかというのは話の肝でもないし、考えてもどうしようもないか。

俺が一番、疑問に思ったのはそこではなくそもそもの話だ。

何故、雪ノ下さんは今、このタイミングで現れたのだろうか？

それを紐解くために、別の切り口から考えてみる。彼女の目的は十中八九、俺と雪ノ下をもう一度引き合わせることだ。俺と雪ノ下が直接関わりを持つようになってから、露骨にこちらに連絡を取らなくなったことが証拠だろう。そこでさらなる疑問だ。

そして何故俺と雪ノ下が会うことにならなければならなかったのか。

雪ノ下の会社がなにかトラブルに見舞われたわけでもない。彼女の様子を見る限り、極限まで切羽詰った状況というわけでもなさそうだった。

とどのつまり、仕事やプライベートでの不満や溝があれば、今このタイミングで俺と雪ノ下を引き合わせるほどのきっかけが今の雪ノ下にあるとはとても思えなかった。

言わずもがな、かつての奉仕部の溝という根本的な問題は前提としてあったとしても、どうして今なのだろうか。雪ノ下さんの気まぐれというのは稚拙な推理に感じる。

だとしたら？

俺は黒幕は「雪ノ下さんではない別の誰かなのではないか」、そう考えている。そして、その人物の正体は間違いなく、雪ノ下さんや俺たち総武高校の面々、いや少なくとも俺と雪ノ下の両方と縁がある。

つまり、この条件に一色は当てはまるのだ。

俺が口に出すのを躊躇したのはこの一連の流れを作った人物の正体が誰か分かるまでは下手に情報をもらすことは得策でないと考え

たからだった。言い方は悪いが、一色は容疑者の一人である。まあ、こいつの表情を見る限り、限りなくシロに近い反応ではあるが。念には念をだ。

『まあ、いいですよ。先輩が隠し事をするのは今に始まったことじゃないですよ』

『ふん。人間、歳重ねれば隠し事も重ねるものだ。お前だって俺に知られたくないことの二つや三つあるだろ?』

『屁理屈ですね』

一色の一顰一笑が見て取れる。それはお互い様か。それを楽しんでいるのか一色は、足をぱたぱたとさせて、こちらをじっと見ている。

『ああ全くもってその通りだ。詭弁を弄するのが大人だ』

『じゃあ先輩は高校の時から大人だったんですね』

『当たり前だろ? あんなに世の中の真理を鋭く見抜いた洞察力の持ち主が大人でないとどうして言えようか』

『うわ。そこまで強情だと流石に引きますよ』

『…悪かったって』

バツが悪くなったのでカフェオレを飲もうとしたが、カップの中身が既に空だった。仕方なく、入店して時に、店員が持ってきた水を少々口に含んだ。随分とぬるい。元々このくらいの温度なのか、店についてから随分と経ったからなのか、分からない。落ち着いて周りを見渡すと客は俺たち意外にはノマドワーカーか、社畜のサラリーマンのオフィス外労働か分からないがスーツを来た30代らしき男性が、喫煙室の奥に座っているだけだった。気がつけばかなりの時間が経過していたらしい。腕時計を見ると既に二時間以上経っている。

『一色、お前終電大丈夫なのか?』

『そうですね。あと10分以内にここを出たほうが良いかもしれません』

その割には随分と呑気に見える。携帯や、腕時計を見る素振りすら今の今まで一度もない。こいつ、帰る気ないな…。荷物をよく見たら、オフィスレディにしては大荷物だし、泊まる気満々といったところか。

『ほれ、行くぞ』

こいつのペースに巻き込まれる前に伝票を持って退散しようとした時だった。

不意に一色が俺のスーツの胸元を掴むと一気に自分の顔に引き寄せた。

そのまま俺の唇は抵抗の余地も与えられぬままに彼女に奪われてしまった。

一色は接吻をしたまま手を俺の両頬に添えるようにして、俺が離そうとすれば逃さないように固定した。

体中の血液が沸騰するような感覚と急激に凍りつくような感覚が同時に攻め上げてきた。

彼女の舌が口の中に侵入してきた。ねっとりとした唾液に覆われたその舌は俺の舌を逃すまいと執拗に絡みつき、快楽を貪る。

結衣だけが許された俺にとっての聖域の一つが一色いろはという一人の女性によって侵されている。甘美な享樂が喉の奥まで突き抜けている。

こいつは一体何を考えているんだ。

人前だとか、公然の店の中でなんというモラルの話なんてことではない。

口内が彼女の柔らかい舌に尽く蹂躪され思考を奪われていく。

快感に囚われそうになる瞬間に一色は焦らすかのように顔を離し、伝票を持ってレジへと足を向けた。

そして、途中でこちらをチラと見て、妖艶な微笑みを見せつける。てらてらと怪しく光った唇が視覚までも犯した。

『今日ありがとうございます。ここは、私が払いますから』

紅潮した一色の表情は10年程の付き合いがある俺が初めて見るような可憐で扇状的なものだった。

気がつけば、バイトであろう女性店員がこれは良いものを見たと言わんばかりに興味津々な目でこちらを見ている。その視線で我に返った俺は乱暴に荷物を掴むと、その場から逃げるように退出し

た。
続く

第十七話☆

走った。

何もかもから逃げるように、いい歳こいた大人が誰もいない夜道で全力の疾走を見せる。

だが、元々運動が不調法な自分なのであつという間に限界が訪れた。

肩で息をしながら手を膝に付けて、全身を使って平静を求めた。

夜風が吹き抜ける歩道で改めて俺は自分の唇に手を当て、彼女の感触を思い出す。

息が苦しい。

全速力で駆け抜けたからか？

いや、違う。

心臓が苦しくなっている。

大学の時も、会社で一緒になつてからもここまで彼女があからさまなアプローチをしてきたことは無かった。勿論、好意を全面に押し出すことをあいつが怠ったことはない。だが、あくまでそれは俺達の会話のリズムを作る一環としての役割が大きかったはずなのだ。

いつだつて一色は、食事に誘つてきたり、一緒に帰ろうと着いてきたり、とその程度だ。

だからこそ、このままの距離でいいと思っていた。

馬鹿か俺は。

雪ノ下、結衣。それよりも俺がもつと向き合っていかなければならない人物がもう一人居るではないか。

あのキスは警告なのだ。

自分を蔑ろにして、数年ぶりに現れた想い人にうつつを抜かすおおうつけに対しての。

いや、俺はそう思うことでまた彼女から、逃げようとしている。

そんな理由ではないことぐらい分かつてる。

もつと単純で純粹なもの。

そして何よりも悪意に満ちた純情だ。

『ねえ、先輩』

耳元で彼女の声がする。

幻聴だろうか。

違った。

彼女が真後ろに居た。自分の背後から伸びる大きな影が見える。いつの間に追いつかれていたのか。

だが、振り向くことができない。

今の俺に彼女と真正面から向き合う事が出来る覚悟も度量もない。それを分かかってか、一色は両腕を首の後ろから回して俺を抱くようにもたれかかった。

彼女の柔らかい体が背中に伝わった。緩やかに心を溶かしていくような、同時に凍りつかせるような。積み上げてきた理性と虚構の自我が中心から大きな渦を描いてかき乱されていく。

『そんなに怖がらなくても良いですよ？私が悪い子になるのは今だけです。明日から、また私は先輩にとって都合の良い女の子に戻ります。でもね、先輩…。二人きりの時だけは、偶にはこうして深く堕ちていきたいな♡』

一色が頬から流れ落ちる緊張の雫を丁寧に舐め取った。ねっとりとした生暖かい舌がいつまでも頬に深く刻みつけられていく。

『ふふふ。先輩の汗、舐めちゃいました♡いくら好きな人のだからといって、美味しいわけではないですね。でも私のためにかいてくれた汗だから、全部舐めてあげます』

『お前、何を言ってる…。』

『れる…。その割にはきちんと興奮してくれているんですね。ズボンの上からでも大きくなっているのが分かりますよ？…』

『…!?!』

『冗談です♡』

趣味が悪すぎる。今はそんな冗談を言う状況じゃないだろ。

『そうですね。今はそんな事言う場面じゃないです』

だから、何で俺が考えていることを…。

『じゃあそろそろ本題です☆』

今度こそ、お前は本当に何を言っているんだ。

これまでの事はすべて前座だったというのか。冗談じゃない。

一色は俺の耳を啜えると、ストローで飲み物を飲むかのように柔らかい力で耳殻を吸い上げた。

『くちゅ…ちゅ…れる。じゅ、じゅ、しえんぱい…』

『う…う…』

じんわりとした、心地よい快感と嫌悪感が全身を駆け巡る。

一色に心の底まで掌握されたような屈服感を与えられ続けた。

自然と腰が砕けていく。その度に一色は俺の身体に四肢を絡みつけるように体の密着を強めていき、段々とお互いが一つになっていくような、感覚に陥った。

そして最後に俺が完全に膝をつく程に蹂躪された頃には一色は全身を撫で回しながら耳を弄んでいた。

一色は内腿をその柔らかな手で愛撫した。愚息には触れないよう細心の注意を払いながら男の理性と自我を略奪していく。ジエンガのように自らの砦を崩壊に導かれ上り詰めていく快感は結衣との交わりでは味わうことの出来なかつた境地だった。

その後も10分ほど一色は何も言わず、ひたすら俺の耳を舐り続けた。艶めかしい粘着音が際限無く鼓膜を埋め尽くす。本題を話す前に陵辱から入る交渉術を弄したのは一色が初めてだろう。

『くちゅ…ちゅ、じゅ、じゅ。しえんふあい。あん…』

舌を動かしつつも一色は艶めかしい小さな嬌声と俺を呼ぶ声を混ぜることを忘れない。男は情事の最中に名前を呼ばれることに一種の快感を感じてしまうことをこいつはよく知っている。

舐めている間、一色はしきりに俺と手を絡めることを求めた。俺は頑なに拳を作り、それを拒んだのだが、拒もうとするたびに一色が耳を噛み、強く吸い上げた。快感と痛みに怯んだ隙に、両手とも一色の白く透き通った手に絡め取られた。俺の手の感触を確かめるように、一色は手を開いては強く握る。握る毎に、上半身を背中に擦り付けられた。一色の小さくもなく女性の魅力としては十分すぎる大きさの果実が背中で弾けた。何も考えずにこの快楽に身を任せることがで

きたらどれほど最高の気分になるのだろう。だが、現実はそのような悦楽に身を沈めることは許されない。つくづく、俺の知らない間にこいつは別人になってしまったのではないかと錯覚させられる。

いや、一色は何も昔から変わってはいないのかもしれない。変わったとしたら、俺の方なのか。

俺は諦めて、躰を一色に預けた。

肩の力を抜いた俺に気づいた一色は、待っていたかのように愛撫を激しくした。

ようやく一色から解放された頃には、脳内の辞書から“抵抗”という文字が消去されていた。

後ろで一色の荒くなった一色の吐息が聴こえる。彼女の終電の間はとつくに過ぎているだろう。昔一色から聞いた話ではこの場所から一色の家までは距離がある。

それでも構わないといったところか。

一色は手を絡めたまま、もう一度俺の耳元に顔を寄せた。

横目で恐る恐る彼女を見ると、一色は実に怪しげな表情を浮かべていた。

そして彼女はおもむろに俺が最も恐れていた言葉を口にする。

『ねえ、先輩。雪乃さんのこと結衣さんに隠してますよね？』

『お前…何でそれを!』

こんな言い方をしてしまえば、正解だと相手に教えてしまっているようなものだ。

『あれでバレないとも思ったんですか？先輩ってば、雪乃さんのこと見すぎです。小学生の片思いじゃないんですから、あんなの私じやなくても誰でも分かりますよ』

『…悪かったな』

『あれ？まだ、そんなこと言える余裕があるんですね。でも、必死で主導権取り戻そうとしているのは分かってるんで、気にしてないです』

『お前、そこまで分かっている、とんだ陰険だな』

『それ、先輩が言いますか？私のことさんざん弄んでおいて』

ぐうの音も出ない。

傍から見れば俺は彼女の思いをしつかりと受け止めずに他の答えに縋ってしまつた情けない男なのだろう。

『先輩にはその罪を償つてもらいます』

『…何が目的だ?』

『まあ償うといつても、別に私先輩のことは恨んでいないんですよ。寧ろ、この状況のほうが私にとっては好都合です☆』

『どういう意味だ?』

『ただ、単純に先輩と仲良くなつてイチャイチャしたところで人の関係っていうのは思つた以上にすぐ、冷めるんですよ。ほら、先輩と結衣さんの関係みたいにな♪』

『お前…言つて良いことと悪いことが…!』

『何怒つちやつてるんですか?雪乃さんに惚れちやつて、流されそうになつてるくせに』

『…っ!』

こんなに楽しそうに話す一色は見たことがない。これが彼女の本性なのか?それとも、俺が彼女を変えてしまつたのか。

『まあ、別に雪乃さんと一線を越えたわけでもないですし、今のところは一瞬の気の迷いつて形なので、私が今言つたことは誇張ではあるんですけどね。今のところは“♪”』

『…これから俺がそうなるんでも?』

『ならないほうがおかしいと思いますよ。雪乃さんも先輩のこと好きでしようから』

『な…!?』

『もう好きすぎて先輩のために化粧やオシャレ、仕草まで先輩の好みに合わせようと頑張っちゃつて。本当、可愛いですよね…。あれは、勝てないです』

唐突に一色は敗北宣言をする。一貫性のない彼女の言動に俺は彼女が何が目的なのか皆目見当がつかなくなつてしまう。

『じゃあお前は一体何がしたいんだ…?』

そう言つと、一色は黙つた。後ろに居るので俺の視点からでは彼女の表情は窺い知れない。

『先輩。結衣さんとのことはどうするつもりですか?』

ようやく口を開いた一色から出た言葉は、意外な質問だった。

『何故、そんな事を聞くんだった?』

『先輩。正直に話して下さい。もう、逃げられないように聞きますね』
逃げられないように聞くとはい体どういことなのだろうか。だが、今の俺に出来ることは次の一色の言葉を粛々と待つことだけだ。

一色は小さく深呼吸をしてようやくその口を開いた。

『先輩、結衣さんより雪乃さんのことの方が好きですよね?』

『…?!?』

『たった一日。それもお昼のちよつとの間だけですけど。分かりますよ。どんなに言葉を弄したって仕草や言動は誤魔化せません』

『だったらなんだ?』

『私の本題はここからです』

反論する隙も与えない気か。

一色はそう言うと、俺から離れてこちらに向き直るように促した。ようやく俺は立ち上がって一色と正面で顔を合わせることが出来る。

『先輩、どちらかを選ぶなんて選択は捨ててほしいんです』

『それは…。どちらも選べということか?』

現在の社会の不文律を知らない一色ではないだろう。結婚をしている身でありながら、他の女性と深い関係を持つことのリスク。それが表に出してしまえば、一瞬で社会的信用が地に落ちるのだ。そんな危険な橋を今から俺に渡れとでも言うのか?

しかし、一色の表情は異議を唱えるかのような主張をしていた。

『いいえ、少し違います』

『じゃあ何だって言うんだ?』

そう問いかけると一色はその言葉を待っていたと言うような満面の笑みを見せた。

『全員を選んでほしいんですよ。結衣さんや雪乃さんだけじゃなく、先輩を愛してしまった人全員です』

『はっ!』

『……………』

……………そういうことか。

『つまりはお前も選べと?』

『まだ、理解していないんですね、先輩は…』

一色は呆れたといった様子だ。

『先輩は選ばざるを得ないんですよ』

『何故そう言い切れる?』

『私が、結衣さんに雪乃さんのことチクつたらどうするんですか?』

『…!』

『やっと分かりました?つまり、黙って置いておいてあげるからそのかわり、貴方の時間を少しだけでも私に下さいってというのが本題です。かなり遠回りな言い方しちゃいましたけどね。…まあ、あと結衣さんに雪乃さんのことを言ったとしても先輩は断れないと思いますけど』

『そこまでして、俺と居たいのか…』

一色の言葉に一切の淀みが無かった。そんなにも真つ直ぐに言われると流石にどんな男でも揺れてしまう。しかも、一色は並の美人ではない。

しかし、だとすると…

『雪ノ下さんが会社に来たのも、俺が雪ノ下と再会したのもお前の仕業か?』

そう疑わざるを得なくなってしまう。信じてはいるのだが、どうしても猜疑心に苛まれる。

『いいえ、それは私ではないですよ。この機を利用しようと考えたのは確かにそうですが。まあ、信用出来ないですよね』

『いや、その言葉には嘘はなさそうだ』

率直な感想だった。今の一色は嘘はついていないだろう。

一色が違うと言ってくれたことに安堵の吐息を漏らしている自分がいることに気づいたのはその時だった。

何故は俺は安心しているんだ?

『本当、人のことを疑ってかかるくせにお人好しの優しい人ですね。』

……そんなところが大好きです』

『真正面から言うな…』

『えへへ』

一色は何故か憑き物が取れたような様子だった。何年も心の中に巣食っていた闇が少しだけとはいえ晴れたのだろう。勿論、全てを吐き出したとは到底、言い難いだろうが。おまけにその原因が俺ときたもんだ。心配できる立場にしようとしていることすら烏滸がましい。

一色は俺から少し離れると頭を下げた。

『先輩。さつきはごめんなさい。ちよつとやりすぎちゃいました』

どうしてお前が謝るんだ。謝るべきは俺の方だろ？

『やりすぎを超えて狂気だったぞ』

俺は冗談を返すので精一杯だというのに。本当にこいつには敵わない。いつまで一色に甘えるつもりなんだ俺は。

『まあ七割位は本気でやってますから』

『チョットマツテ。ハチマン思考が追いつかない』

もうやだ。おんなのここわい。

確かに、あの時の一色は演技では表現できないほどのリアリティを持っていた。本当のところは九割五分本気なのだろうな。

『えへへ。でも、先輩もまんざらではなさそうでしたよっ…』

『…ほつといてくれ』

『別に結衣さんに悪いとかそんなこと思わなくても大丈夫です。悪いのは私ですから』

『なんで、浮気した男みたいな言い方してるの…!?!』

こいつ、またやる気だ。絶対。間違いない。

『前から分かっていたことではあるが、お前と付き合うとなると心底大変そうだな』

『そうですね、今から覚悟しておいて下さい』

『いや、お前。まだそうなると決まったわけじゃ』

『ふーん。まだそんな事言うんですね』

『……お前、俺が反論するたびにそれ言うつもりじゃないだろうな?』

『あ、バレました?』

『やっぱり、お前は信用ならん』

『もう、すぐ拗ねる』

先程の極度の緊張から大きく緩んだような空気になる。とはいえ、何も解決していないことに変わりはない。自分の弱さに嫌気が差す。『ねえ先輩、これは私の勘ですけど、陽乃さんや雪乃さんの一件はそう単純じゃないように思えます』

一色は先程までの明るげな声色とはまるで無かったかのような口調で話を切り出した。

『どういうことだ？』

『あの会社で誰が味方なのか分かったものじゃないですよって意味です』

『……』

『その顔からして、やっぱり可能性の一つとして考えてはいたんですね』

『まあ、な』

そうでなければ雪ノ下さんが会社にすんなりと来るはずがない。依頼の内容も雪ノ下のスペックからしても全くうちに頼る必要性も感じなかったしな。

『会社が息苦しくなるな』

『芦間さんは多分大丈夫ですよ。あの人、企むというよりは観察するタイプですから』

その通りだと思った。芦間は姦計を巡らせるような人物ではない。それどころか極端に人との関わりを嫌うタイプであるし、何よりあいつにとってメリットが何一つ無い。今日の反応を見ても雪ノ下とは全く面識がない様子であったことも根拠だ。

『とにかく、先輩は今まで以上に周りや自分の言動に細心の注意を払う必要がありますよ』

『それを味方なのかどうか分からないお前に言われてもなあ…』

『先輩…私もいい加減怒りますよ？』

『…悪い』

『良いです。からかっただけですから♪』

一色は元の調子を取り戻していた。少しだけ夜風が強くなっていく。並木の枝が擦れる音が大きく聴こえた。

『さて、そろそろ終電もヤバイので帰りますね』

そう言うのと、一色はうんと一つ大きく伸びをした。いやいや、何一仕事終えましたみたいな顔してるの!?

『は？お前もう終電無いんじゃない？』

『え？別に大丈夫ですよ♪私の家ここから近いですし』

『やはり、侮れん…』

『ふふん。本気になった女の子は嘘でも何でも使います。じゃあ、先輩まで一緒に行きましょう』

一色は腕を絡めてきた。離そうにも両腕でしっかりと抱いているので、駅まではこのままか。

俺は黙って歩みを進めた。一色は驚いた表情をした後、これ以上無いほどの笑顔になった。幸い周りには人は居ない。二人きりの夜道デートだな。いやいや、俺、嫁居るだろ。

『先輩とデート…。初めてだ』

『は？大学の時に何回も二人で遊びに行っただろ？』

『あれはちよつとまた形が違うじゃないですか。それに、腕を組んだのは高校の時以来です』

『そうだったか？』

『先輩が結衣さんと付き合うようになってからは、ボディタッチは自重していましたよ』

『言われてみれば確かに』

高校の時は事ある毎に一色は俺にさり気なく俺に触れていた気がする。思えば俺も一色の体温とやらを感じたのは久方ぶりか。こいつなりに俺と結衣に気を遣い続けていたのか。そんなことにも気づかない自分の鈍感さを呪った。

しばらくすると一色が立ち止まる。

『ん？どうしたんだ？』

一色は物欲しそうな目でこちらを見上げる。夜道の街頭に照らされた彼女の目は一面の星空を映すかのように少女の輝きを放っている。

る。

『先輩。キスしたいです』

『おい、どうしたんだ急に？』

『いえ、ただ。その』

『ん？』

『先輩がもつと欲しくなっちゃいました…』

想像以上の破壊力だった。

今日の一色はかなり積極的だ。夜の街灯に照らされた彼女は色気も帯びている。こんなにも切なそうな表情を見せる一色は初めてだ。何年も一緒に居ながら見たことのない彼女の顔が幾つも見られた。先程のアプローチも分類で言えば積極的と言えるのだが、今のほうが幾分と理性に来る。

『…流石にそれはダメだろ』

『じゃあ腕は組んで良いんですね？』

『その聞き方は卑怯だ』

『そうですね。私はズルい女ですから』

『自分でそういう事言うのな…』

その後は、只黙って二人で駅まで歩き続けた。何も言わずにお互いが時々目を合わせるだけで言葉は何も交わさない。時折、一色が腕を引き寄せてキスを求めてきたが、必死に堪えた。加えて徐々に自分の前に身体を寄せ、胸元に寄り掛かるように密着させて来るので、心臓に悪すぎる。

駅に着いた時には心臓が限界寸前のところだった。

夜遅くとはいえ、流石に駅の周辺ともなれば人影が目立つ。残業を終えたサラリーマンや飲み会終わりの大学生たちが、駅のネオンに照らされて様々な陰影を作り出している。やや、視線を感じる。大方、一色に対する男達の邪な目線だろう。これ以上、彼女と親密なところを見せてしまえば、後々、厄介なことになりかねない。それを察したのか、一色は名残惜しそうに静かに腕を離れた。駅前に立つ大きな広葉樹の前でお互い顔を見合わせる。

『じゃあここでお別れですね』

『ああ、そうだな』

先程までの余韻を全く感じさせないほどに一色の別れはあっさりとしたものだった。と思いきや、駅の入口に入る前でこちらに振り返ると、

『今日は人生で一番良い日でした。また、デートしましょ、先輩♡』
一言だけ言い残し、そのまま流れるように改札口をくぐっていった。その足取りは軽く、跳ねるようだ。

狐につままれたまま木の下に取り残される。携帯からメッセージの受信音が鳴ったところでようやく、自我を取り戻した。

端末のロックを解除し、内容を確認すると、案の定送り主は一色だった。

『今日は色々ごめんさい。明日からは、またお互い、仕事仲間ってことで。……でも、偶には、お願いします、ね？』

……………。

夕食を取り終えてリビングの机でぼんやりと天井を眺めていた。

結局の所、一色と俺の距離は現状どのくらいのものだろうか。最後に送られたメッセージを見る限り、一色はこれまで通りの距離感で行こうという内容にも思えるが同時に、俺の中に深く入り込む口実を得たとも言えるだろう。

『先輩、結衣さんより雪乃さんのことの方が好きですよね？』

一色に言われた言葉が何度も蘇る。

そんなはずはない。

数え切れないくらいにそう言い聞かせてきた。

雪ノ下とは本来であれば、随分と前に切れた縁なのだ。わだかまりはあれど、未練はないはずだった。

にもかかわらず、彼女と再会してすぐに感情を昂ぶらせている自分がいる。

…やめよう。

今は考えたところでどうしようもない。

答えは近い内に俺自身が出すのだろう。我ながら、そういった確信が芽生えているのは不思議な話だ。

明日から、また大変だなこりゃ。

雪ノ下だけではない。今日を境に俺は一色のことも完全に一人の女性として意識してしまった。

一色、お前は本当に卑怯な女だ。

これまで通りに接しようなんてことが男に出来るわけがないだろう。

それを分かっているあいつはそんな文章を送ってきたのだ。俺に意識させるために。急所に当たって、効果は抜群だ。

時刻は既に深夜一時になろうとしている。明日、いや今日もまた仕事なのだから早く寝て備えなければならぬ。

今日はまた、出向なのだから、雪ノ下の会社に行く必要がある。

そんな時だった。

俺のスマホが細かい振動を繰り返し、着信を告げた。

こんな夜遅くに、誰だろうか。マナーを弁えないにも程がある。

画面を見ると、知らない番号だ。よもやこんな時刻にセールスや不動産の勧誘な訳がない。仕事先の誰かのプライベートナンバーかもしれないので、とりあえず、通話のボタンを押下し、電話に出る。結衣が寝室で寝ているので迷惑がかからないように一番離れた、リビングの端に移動した。

「はい、比企谷です」

いきなり、名乗るのもどうかと思ったが、会社の人間からだと思っていたので自分の名前を言うことにした。

『あ…あの』

聞いたことのある声だが、会社の人間ではなさそうだ。しかも、電話の相手は極度の緊張をしている。とりあえず、威圧しすぎないように静かな声で次の相手の言葉を待つ。

「どちら様でしょうか？」

返事はしばらく時間を置いてから返ってきた。

『え。その、こちらの番号は比企谷様のものでお間違いないでしょうか?』

「え」

いや、最初にそう名乗ったではないか。随分とテンパっているなこの人。

…て、うん?この声は……………。

「もしかして雪ノ下か?」

『…!あら、随分と電話先でも気さくで遠慮を知らない言葉遣いなことで、比企谷様』

「どっちがだよ…」

なんとというタイミングだろうか。

電話の主はあろうことか、雪ノ下雪乃だった。

続く

第十八話

かかってきた電話の相手がまさか雪ノ下とは全く予想だにできなかった。こんな夜遅くだ。何かしらの理由があるのだろう。

先程とは全く違った緊張だ。どうしてこうも心臓に悪いことばかり立て続けに起こるんだ…。

「それで、こんな夜遅くに何の用だ？」

深夜だが、気温は高めなので窓を開けてある。ベランダから入り込む夜風にうたれながら、明日というか今日の仕事に支障をきたすので手短かに話を済ませようと本題を尋ねることにした。

『その、夜分遅くにゴメンなさい』

「…どうしたんだ？」

端末越しに聴こえる雪ノ下の声はどことなく、浮遊しているような感じがした。再会してからというもの、雪ノ下は二人で話す時、落ち着かない様子をよく見せている気がする。

雪ノ下はしばらく答えなかった。

『め、名刺よ』

「ん？ああ、今日渡したやつか？」

どこか変なところでもあったか？別段ひねりを加えた要素は無いはずだが。

『ええ、名刺交換するべきだったのに、私は渡すことができなかったから』

なんだ、そんなことだったのか。律儀だな。そんなこと気にしなくても良いのに。

「別に俺は気にしてないぞ」

『私の気がすまないのよ』

「だからってお前、こんな夜遅くに電話しなくてもいいだろ…」

『そ、それは。ごめんなさい。貴方の職業上、10時とかでも仕事だろうと思うから』

雪ノ下なりに電話をするか否か悩んだのかもしれない。俺だって、口ではこんな事を言いつつも、内心では踊り狂ってしまいそうなくら

い舞い上がっている。

「その、ありがとな。確かにさつきまで用事があったから、ちょうどいい時間だったわ」

『…そう』

雪ノ下の声は温かかった。安堵の吐息が携帯から伝わる。その声を聴いて俺も全身の緊張が解けた。

『…用事だったのね』

何か含みのある言い方だった。俺の用事が一体どのようなものだったのか気になっていようだが、俺があえて濁したようにも取れたのだろう。

「別に隠すことでもないから聞いてくれても良い」

『聞かないで欲しいと言うようにも聴こえたけど?』

「…正直半々くらいかもしれない」

『なら聞かないわ』

「一色の相談に乗ってた」

『結局言うのね』

煽りよる。お前が言わせるように誘導したんだろうが。

『一色さん、比企谷君と同じ会社なのね。驚いたわ』

「ああ。因みに、大学も同じだった」

そう伝えると雪ノ下はしばらく押し黙った。まさか大学まで一緒とは思わなかったのだろう。

『そうなのね。それで。まさか、一色さんが貴方と同じ場所を選び続ける理由がわからない貴方ではないでしょう?』

「…まあな」

もう何度も告白されているとは言えなかった。一色の真意なんて、火を見るよりも明らかではあるが、雪ノ下にそのことを告げられない自分がいる。

「流石に驚いたか?」

『ええ、最初彼女だと分からなかったわね』

「そんなに見た目が変わってたか?」

『久しぶりに会った身としては、劇的なものだったわ。一色さん、あどけなさが抜けて、大人っぽくなっていったから』

「そっか。俺は殆ど毎日のように会ってたから、分からなかった」

『でしようね。人間、緩やかな変化には中々気づかないものだから』

雪ノ下は変わらず不機嫌そうだ。

「確かに。昨日雪ノ下に会った時、俺も最初認識できなかったな」

『そう。私も変わったかしら?』

「ああ」

『どう変わったとは言わないのね』

さつき、自分は一色に対して言ったのにつてか?

言えるわけないだろ。口に来ないから言わなかった。それくらいお前なら分かるだろう?」

「:もしかして期待してたのか?」

『ええ。それなりに』

「正直だな。そして黒いな、お前」

『それ、答えを言ったようなものだと思うのだけれど』

「答えを言っていないからセーフなんだよ」

『ふふ。そういうことにしておくわ』

「なんで勝ち誇ったような雰囲気出してるんだ:」

『そんなことはないわよ』

雪ノ下は満足げだった。別に勝負をしていたわけでもないが、なんとも言えない敗北感を味わされる。寝付きが悪くなりそうだ。

「明日、つーか今日か。またお前の仕事場に行くから宜しくな」

自身に切り替えるよう言い聞かせるために話題を変えた。こんな調子で、雪ノ下に会うとなると心労が絶えなさそうだ。

『ええ、こちらこそ』

なんだ。変わったなと思うところもあったが、根っここのところは何も変わらないな。いつもの調子で会話が出来ている。

その後、少しばかりお互いが何も話さない沈黙の時間が流れた。本来であれば、会話の切り上げどころであるし、夜も遅いので次の仕事のことを考えれば電話を切って眠りに就くべきだろう。

それでも、お互い電話を切ろうとしなかった。俺は雪ノ下が電話を切るのを待った。

…ん？

何も聴こえない。端末の故障か？

思わず画面を見たが、通話時間は1秒1秒と規則正しく時を刻んでいる。

もう一度、携帯を耳に当てた。やはり何も聴こえない。

「…雪ノ下？」

受話器の奥の彼女を探すように問いかけたが、返事がない。

そうしてから、10秒ほどだろうか。

『…比企谷君、まだ聴こえてる？』

ようやく雪ノ下の返事が返ってきた。

「ああ、聴こえてるぞ」

『…そう』

雪ノ下は何か確認をするように問いかけた。そして俺の反応を認めると、また一人で何か納得したように声を漏らす。

『じゃあそろそろ、寝ましよう。由比ヶ浜さ、いえ、もう由比ヶ浜さんではないのね。なんて言えばいいかしら。奥様と言うのもまた違うと思うし』

雪ノ下から結衣の話が出てくるとは。

「別に由比ヶ浜でいいだろ。お前が別の呼び方する方が違和感あるわ」

『そうね、そうするわね。彼女はもう寝ているのよね？』

「ああ、俺が帰ってきた時には“もう寝るね”と連絡が来てた」

『そう。だとすると、余計に彼女に悪いわ』

「お前が気にすることはない。これは仕事上の会話だろ？必要なことだった」

『そうね。そういうことにおきましよう』

ん？そういうこと以外に解釈があったのだろうか。少し引つかかったが、自分もかなりの睡魔に襲われていたので流すことにした。

「そんじや、また明日…っーか今日、よろしくな」

『ええ、おやすみなさい』

「ああ、おやすみ」

俺たちは同時に通話を終了した。

夜風の肌寒い空気が閑散としたリビングになだれ込んでいる。スマホを床に置くと、一気に疲労が吹き出した。肩が重い。

時計を見ると既に一時になろうとしていた。寝よう。

ベランダから、誰かの家の犬だろうか。鳴き声が響く。それに呼応して他の家のペットの犬が吠えている。夜中の犬の大合唱はマンション特有の風物詩かもしれない。結衣を起こしてしまうと悪いので窓を閉めた。カーテンを静かに横に滑らし、音を立てないように努める。

洗面所の鏡で自分の顔をじつと見つめた。ここ数日でかなりやつれたような気がする。今でも唇に一色の感触が残っている。

身体が熱くなった。

寝る前だというのに、冷水を思いっきり顔につけると、タオルで乱暴に拭き取った。

続く

第十八・五話 Part. A

——アメリカ合衆国、とある大学にて……

雲ひとつ無い澄んだ青い空が上空を覆い尽くす。

この地域では雨が降ることは殆ど無い。一年中空気は乾いており、日本のような湿気に満ちた環境とは無縁だろう。雨が降る時はスコールのように一気に降り注ぐ時か、ポツポツと小雨がわずかのどちらかであることが多い。

映画の本拠地がロサンゼルスハリウッドにあるのは、一年中気候が殆ど変わらないからと言われている。映画の撮影のスケジュールが立てやすいからだ。

逆と同じ西海岸地区でも北にあるシアトルでは曇りの日が年間200日以上もある。

そして、天候と同じく大学の特色も地域に依って多種多様だ。

大学の数は多く、主に四年制大学：Universityと呼ばれるものやそこに入るための座学を中心としたコミュニティカレッジ：Community Collegeと呼ばれる二種類の大学形態に分かれている。

その中で彼女が通うのはUniversityに分類されるもので全米の中でも有数とされる超有名大学の一つだった。

文武両道で数多くのプロスポーツ選手を排出する傍ら、世界の大学ランキングにも常に上に名を連ねる。

また、州立大学なので一般にも校内が解放されており、学生ではないことがすぐに分かる幼児達の走り回る姿やツアー客がキャンパスを歩く姿も珍しくない。

彼女の授業は朝の八時からだった。朝の六時半に目が覚めると全ての支度を済ませ、荷物を持って食堂へと向かう。学生寮に住んでいるので、講堂までは、校外に住む生徒に比べればそう遠くない。入り口を出て中央広場を横切れば直ぐに食堂もある。

部屋を出て細長い廊下を抜けた。階層中央に位置するホールでエレベーターを待つ。エレベーターは整備が整ってなく、一階に着く度

に機体全体が激しく振動し命の危険を感じてしまう。それでも修理が一向に入る気配がないのが流石四年制大学といったところか。

寮の入り口には朝の日差しが差し込んでいた。少女は眩しさに目を眩ませつつも重い入り口のドアを押して、食堂へと足早に向かった。キャンパスではスケートボードやキックボードに乗った生徒の姿がちらほらと窺える。

偶にセグウェイに乗った生徒もいるが移動速度は前者二つに比べるとお察しではあった。

程なくして彼女は食堂に到着した。開場は七時からであったが既に十人程が入口の前でスマートフォンを見ながら待っていた。

食堂の開場を待つとは言え、彼女は普段は優雅に食事を摂るわけはなかった。いつも、荷物をロッカーにしまつて朝食で果物を貰つてからそのまま授業に参加するのが彼女の日課だった。

しかしそれは一人で食事をする時の場合のみである。

「オハヨウ・ルミー」

食堂前のロッカーに荷物を入れてみると、後ろから彼女を呼ぶ声がした。

「うん、おはよう。レイチエル」

名前を呼ばれた少女・・・鶴見留美は茶髪の似合うクラスメイトに挨拶を返した。彼女：レイチエルとは初めての授業で隣になって以来の仲だ。一番最初の数学の授業で留美が数学を彼女に教えたことがきっかけだった。出題範囲が留美が高校時代に修了していた範囲に似ていたこともあり、苦勞しなかったのが幸いした。アメリカでは微積は大体、大学から学び始めることが多かった。逆に日本では微積は高校時代から学ぶので、語学はどうしても遅れてしまうものの、数学に置いてはある程度留美にアドバンテージがあった。同時に国史や政治学などの授業では留美はレイチエルに非常に助けられた。流石にそういった科目では自国民であるか否かの差は大きく、これらに留美は勉強時間を多く割かなければならなかった。レイチエルの助けがなければ留美は睡眠時間の多くを削って勉学に励む必要があった。留学を全て一人で行うというのはかなり酷だ。

そうしてお互いが自分の苦手な科目を助けるようになって以来、二人はそれなりに知己と呼び合えるほどの関係になっていった。

レイチェルが日本語を教えてほしいということを手始めに日本語での挨拶を教えてからというもの、いつも練習を重ねるように日本語を使って話しかける。それがまた可愛らしくて、新しい日本語を毎日教えていくのが留美の楽しみでもあった。

「ルミ。今日はどんな予定？」

レイチェルは質問をしながらヨーグルトを頬張っている。彼女も留美と同じく朝はフルーツなどのあつさりとしたものを好んだ。彼女がコーンフレークと混ぜながらヨーグルトを食べる時は、決まってその日の授業で試験や小テストがある時だ。

食堂ではアスリートであろう体格が非常に優れている者や、パソコンを持ち込んで、宿題のレポートを必死に終わらせようとしている者がいた。当然だが、人種も多種多様で留美が座っている長机を一系列だけでも随分と多国籍である。

隣では、理系であろう生徒がフラッシュカードで必死に単語を覚えていた。最後の追い込みというところか。大量の化学式が見えた。

「私…？ 私は今日は八時から統計学の授業やってから午後から心理学」

「それってGE？ 今学期やつてる教授ってペーパーが多いから、ネットの評価でレート凄いい低かったと思うんだけど」

GEはGeneral Education、日本語では一般教養と言われるものだった。リベラルアーツの授業はかなり重要視されており、どんな専攻の生徒であっても最低〇個というような形で明文化されている。学生たちはRate my Professorsなどの生徒たちが投稿する教授評価サイトなどで事前にテストの難しさや採点傾向を下調べするのが通例だ。

「まあでも、ペーパーは多いけど出せばB+以上は確実に貰えるから実際、そうでもないと思う。試験に關してもほぼ教授の授業の範囲から出るし、試験勉強はスライドを読んでおけば大丈夫だよ」

「へー、意外。なんか思ってたのと違うかも。来学期取ってみようか

な」

「レイチエルもうG E取り終わったんじゃないの？」

「終わってはいるけど、副専攻に何か学ぼうと思っていて、心理学興味あるんだよね」

「心理学は理系だし、選考あつたんじやない？」

「げ。確かに…。都市開発みたくG P A 3.5とかないと厳しかったよね」

「うん。あと、面接もあるし、出願用のエッセイも出さないと行けないはず。というより、心理学に副専攻コースがあるのかなあ」

「そうだね、今日午後からは授業なくて暇だし、デパートメント行って聞いてみるよ」

「それが良いと思う」

「まあ副専攻に出来なかつたとしても、G P Aをブーストしたいから楽単はぜひともほしいな。来学期結構ヤバイのがあつてさ」

レイチエルはフォークを器用に回しながらぼやいている。首を回しながら、垣間見えるうなじが彼女の物憂げさを代弁していた。

留美は小切りにされたパイナップルをフォークで丁寧に刺すと口に運びつつ、レイチエルをチラと見る。

「何の授業が大変そうなの？」

「アカウンティング。会計だよ、会計。結構テストが鬼畜らしくてC以下が半分以上でなおかつ途中でクラスを落とす人が半分以上」

「それってパス出来る人すら最初の人数の四分の一にも満たないってことなんじゃ？」

「そーだよ。うちの大学って最初の座学のほうが三年生以降にやるアッパー（三年生以降に行く専門知識に特化した授業）の授業より難しいじゃん？だからその授業がビジネススクールに出席して入って来た生徒の足切りに使われているってよく噂されているよ」

「なるほどね。それを来学期に取るんだ」

「そうそう。もう今から憂鬱…」

レイチエルはやけ酒のように牛乳を一気飲みした。片や留美はもし自分がそんなことをしたら、胃腸が悪くなりそうだと呑気なことを

考えていた。

「あ、もう時間だよレイチエル」

「え、やばい。もうこんな時間!?ごめんね、ルミ！私先に行って教授に話しておかないといけないことあるんだった！」

留美に時間を聞いたレイチエルはヨーグルトを男性のように乱暴に口の中にかきこむと慌てて席を立った。その際、丁度後ろを通りかかっていたメキシコ系の女性にぶつかりそうになり、流暢な英語で謝罪していた。

彼女を流し目で見送った後、留美はパイナップルを口に入れるとゆっくりと席を立った。食器を返却し、入口前のかごに積んであるバナナを一本取る。授業の後に講堂前の机で栄養補給がてら食べる為だった。

食堂を出て授業の教室に向かった。教室に向かうとは言え、大学の規模も非常に大きな為、移動にも相応の時間を要する。因みにマンモス校となると校内を行き交うバスが運行している。

坂道を下り、市民も自由に使うことのできる巨大なジムを左手に歩いていく。途中、この大学の象徴である銅像が鎮座するメインストリートをまっすぐ抜け、草原の斜面を分断する並木通りを登った。

留美が教室に到着したのは食堂を出て15分経過した後のことだった。

授業の席に着くと留美は携帯を取り出して、メールを確認した。受信BOXには新着メールが五件あることが確認できた。大学からのキャリアフェアや予定表が書かれたものやメアド登録しているオンラインショップピングサイトなどからの広告だった。なれた手付きでメールを開封せずに削除すると、別のアカウントに切り替えた。

アカウント名には『JSA CAREER』と書かれていた。このアカウントは彼女が所属する日本人会理事のキャリア部門・・・日本人留学生と彼らを採用したいと考える日本企業たちの就活を斡旋する日本人会の理事達が、共有しているフォルダだった。仕事の依頼や、日程の調整等は基本的にこのメールアカウントを使って行われている。そして、複数の会社と連絡を取るため、自分が担当している会

社のメール以外は開封しないというルールが設けられていた。

新着メールは三件。この内、留美宛に送られてきていたの是一件だった。

留美は今年是三社と連絡を取り合っている。そして、今年の採用面接のイベント運営を依頼された企業の中でもかなりの目玉とされている企業を留美が担当していた。今回のメールはその企業からのものだった。

From : 株式会社XXXX 人事部
To : University of CXXXXX JSA C
A R E E R

件名：当日の予定につきまして

本文：

鶴見さん

当日の予定表の送付を送っていただけるとのこと、誠にありがとうございます！ロサンゼルスにいらっしやるのですね（*^^*）その時はお会いできること、楽しみにしております。

イベント当日の弊社からの参加人数は四人を予定しております。その内、面接官は2〜3人です。募集人数に応じて臨機応変に対応するという形ですね。因みに、面接時間は全部で4時間を予定しております。

イベントページは鶴見さんに作っていただけるということですが、今回の内容の詳細や弊社紹介文まで任せるとなると、鶴見さんの負担が半端じゃなさそうなので、こちらで作成いたしますね。

新卒採用の募集ページも後ほど、私の方からリンクを貼ります。その際、イベントで共同開催者に私を入れていただけると非常に助かります！そうしていただければこっちでもページの編集できるので。

（これ僕の顔本プロフです！適当に使ってやって下さい）

XXXXX社

芦間

留美はパソコンを取り出して、J S A C A R E E R のメールアカウントを開くと、先程届いたメールに慣れた手付きで素早く返信した。携帯でも返信は可能ではあるが、P Cで行った方が、同時に別のタブでF a c e b o o kを開き、イベントページの作成に取り掛かる。授業が終わり、夜になってしまえば宿題に追われることになるのでそうなる前に早めに片付けておきたかった。

メールに添付されていたリンクを開くと、留美と連絡を取っている芦間と思わしき男性のプロフィール写真が出てきた。どうやら均整の取れた顔つきの好青年と見える。それ以上の感想は留美には出てこなかった。留美はイベントページに彼を追加し、友達申請をしながら作業のように押し、タブを閉じた。

授業のグループワークの一環でF a c e b o o kを利用することはよくあるので留美の本来の友人の数とは違い、アカウントの友達の数が膨大になっていた。よく知らない男からのメッセージが来ることが多いので、基本的に留美はS N Sを利用していないがこういった場合にのみ開いている。

丁度、イベントページの下書きが終わったところで前の入口から教授がやってきた。後は芦間という男に任せるとしよう。

留美はパソコンをしまうと、カバンの中からノートを取り出した。他の生徒はパソコンのW o r dやメモ帳、ノート用のソフトウェアなどを使って、授業のノートを取ることが多いが、留美はやはり使い慣れた手書きのほうに記憶に残るといふこともあり、今でもシャーペンと大学ノートを愛用している。

教授が自身のパソコンをケーブルに接続すると、今日の授業のスライドが講堂前方にある大きなスクリーンに投写された。今回は二時間弱の授業でスライドが100ページ超らしい。留美は自分の手が腱鞘炎になるのではないかという危機感を抱きながら、今日の日付をノートの一番上に書いた。

続く

第十八・五話 Part. B

授業が終わると留美は足早に図書館に向かった。図書館は学内に複数点在しているが、一番大きなものはキャンパスの中央に位置しており、見た目は聖堂や美術館を彷彿とさせる荘厳な佇まいだ。作りはレンガで地上三階、地下一階の四階建てで建築されている。この大学は学部ごとに細かく棟が別れているため授業ごとの移動が基本的に激しい。留美は学内への他の建物へのアクセスがしやすいことからいつもここで勉強をしている。

出る寸前のところで、クラスメイトらしき男性から一緒に勉強しないかと誘われたが、相手に食い下がる余地も与えず、無慈悲に断った。こういったことが頻繁に起こるので留美は辟易していた。勿論、一人だけで膨大な量の宿題と、難解なテストを乗り切ることが不可能に近いので、レイチエルや他の中の良い友人たちに協力を依頼することはままあるが、これ以上の助けは必要なかった。

「あ、留美先輩、お疲れ様です！」

「うん。お疲れ様、クロ」

図書館でばったり会ったのは、同じ日本人会で理事をやっている後輩だった。後輩とはいえ、彼は幼少期に両親の都合で渡米し、そのままアメリカで育った日本人なので、アメリカ生活においては留美にとってはかなり上の先輩になる。にもかかわらず非常に流暢な日本語を話すので、正直、初見ではアメリカ育ちであることを留美が疑ったほどだった。

「XXXXX社からメール来たよ」

「早いっすね。それで、なんて言っていました？」

クロは耳に付けていた大きな黒いヘッドホンを外した。ヘッドホンからはかすかに日本のアニメ主題歌らしき音楽が漏れ出ている。留美はそのジャンルには疎かったが、かつて留美が仲良くしていた男が好きだった曲に似ているような気がした。

留美は携帯電話のメモに残しておいた情報を開き、そのままクロに伝えた。

髪をかきあげながら画面を見る彼女の姿に道行く学生たちが見惚れていた。留美本人は知らないが、彼女はかなりの有名人である。

「当初の予定通りで構わない」

「了解です。因みに面接の方はどうでしたっけ？」

「面接官は最大で三人。図書館の勉強個室を三部屋用意してほしいって」

「なるほど。それなら、三人で一部屋ずつ部屋を予約すればいいですか？」

「ううん。面接は全部で四時間って言ってたから六人必要」

「げ、マジですか。あの部屋って一人最大三時間までの予約でしたよね？三時間プラス一時間だからあと三人必要じゃ…」

「うん、だから他の人に協力してもらわないといけない。面倒」

「その協力してくれる人を集めるの、俺なんですけどね」

クロがメモを取る。一応、彼がキャリア部門の情報をまとめる役を担っていた。留美などの直接連絡を取る実行部隊は契約先の企業との連絡の内容を纏めてクロに伝達するようにしている。

「あとは、私がイベントページを作って、先方さんからリンクや、企業説明文をもらうだけかな。私が担当している他の二社に関してはもう全部準備が終わってる」

「流石留美さん。準備が滅茶苦茶早いですね。他のメンバーはまだやっとメールのやり取り始めた段階だっていうのに」

クロが感心したように頷いた。彼に時間をくれてやればすぐにでも他の理事の愚痴を際限無くこぼしそうな面持ちだ。

「連絡のタイミングも企業に依るだから仕方ない。偶然、私が担当した企業のアポイントが早かっただけ」

留美は後輩のヨイシヨにも相変わらず塩対応だった。対して、クロも彼女の反応の薄さに鼻白むといった様子も無い。留美であればこう返すだろうと予想がついていたからかもしれない。そう思ったからか、逆に留美のほうが拗ねている表情だ。

「それもあるけどやっぱり、先輩は本当に仕事早いですよ。どうやったそんなに上手くマネジメント出来るのか疑問でならないっす」

「褒めても何も出ないよ」

「もし自分が期待しているならもつと露骨に媚び売りますし、それが通用する相手にしかやらないですよ」

クロは悪巧みをするように含み笑いをしながら、携帯のメモに進捗のログを取っていた。その様子を見て、留美は先程までの自分の苛立ちっぷりに我ながら呆れてしまっていた。

「あとで、自分の方でスプレッドシートにも書いておきますね」

「うん、ありがとう」

「いえいえ。それで、今日のミーティングには来ます?」

「ミーティング…そっか。今日だったね」

クロに言われてようやく留美は今日ミーティングがあることを思い出した。本来であれば、理事であれば絶対参加の会議ではあるのだが、留美は正直乗り気ではなかった。

「…でどうします?別にキャリアのメンバーはそこまで、出なくてもいいとは思いますが」

「うん。今日はやめとく。会長に会いたくないから」

留美の含みがありそうな物言いにクロは怪訝な顔をした。

「会長となんかあったんすか?」

留美はしばらく押し黙ってから返答した。

「……口説かれた」

「うわ、なんて怖いもの知らずな」

「何か言った?」

留美の顔から一瞬で表情が消えた。クロは眉間に拳銃を突きつけられたかのような恐怖に両手を上げて降参の姿勢を見せた。

「いいえ。何でもないっすよ。というか、会長ってこの前、うちの団体の子と別れたばかりでしたよね?もう次を探し始めてるんすか?」

クロの言う通り、日本人会の会長はつい先日三ヶ月付き合っていた日本人の彼女と破局したばかりだった。噂とは本当に足が速い。ましてや、海外の大学の日本人学生コミュニティともなれば規模もそれなりにたかが知れているので色恋沙汰のタレコミなど一瞬で広まってしまうのだった。

「ううん。その子と別れる前から口説かれてた」

「クズじゃねーか・・・」

「うん。付き合ってた子と私、よく話す仲だから、彼女に会長が浮気しているかもって相談受けながら、彼に口説かれてた。なんか会長曰く私と付き合うために周りの女の子から近づくと戦略を取ったらしい」

留美は淡々と事実を述べた。その様子は逆に狂気とも言えるほどに冷静に見える。

「え、何その昼ドラ」

「私が彼のこと嫌いなんだからドロドロにはなってる」

「まあ、そうっすね。クソツタレの会長サマは勝率ゼロじゃないですか。うーわ、めんどくせー・・・」

クロはおそらく自分に火の粉が大量に飛んでくることを案じているのだろう。流石の留美もそこには同情していた。

「クロに相談来るかもね。私とデートするにはどうしたらいい？って」

「俺は別にそこまで会長と親しくもないですよ。多分、会計やってるキタさんにその案件が行くと思います」

「ううん、クロに相談が来るのはクロが私とよく話しているから。あと、会計はそんな話が来ても絶対に取り合わない」

「自分も容易に想像が付きましますね。その後、飄々とした顔でジムに向かってそうだ。おそらく今日は背中鍛えていますね。というか、今日はそっちの方に俺誘われるかも」

「それを口実に逃げるといいよ」

「そうっすね。そうしますわ」

クロは大きくため息を付いた。留美は彼の服装をまじまじと見つめた。黒いTシャツに半パンというかなりラフなスタイルだった。寝癖を直していないままで校内を歩く姿はとても大学生には見えない。しかし、非常に頭の切れる男で留美が一定の信頼を置く数少ない異性の一人だった。

「とりあえず、ほとぼり冷めるまでは留美さん来ないほうが良いかもですね。留美さんモテるから、表面化していないだけで会長以外にも

結構な人数、留美さんのこと狙ってると思いますよ」

「興味無い」

留美はまるで歯牙にもかけないといった面持ちだった。普段からどんな人に対しても基本的に最初はこの話し方なので、彼女の人となりを知らない者からしてみれば非常に取っ掛かりが見つかりづらい女性という第一印象だろう。それ故に、彼女の性格を理解しているクロのような周りの人間は留美のフォローに振り回されることが多い。「興味無いっすか。まあ、そうでしょうね。というか、留美さんって心に決めた人がいるって感じしますし」

「…っ！そんなことはない」

不意の爆弾発言だったので留美はひどく取り乱してしまった。これではいくら人の機微が全く分からない素人相手でもバレバレである。言った張本人のクロですらも呆れ顔だった。

「留美さん、嘘下手なんですから無理にクールぶらなくても……」

「クロ、うるさい」

「なんで急に小学生の反論みたいになってるの!?!って俺もう授業あるんで行きますよ。ミーティングの内容結果は俺がまた纏めて、夜にグルチャに上げときます。会長の件は先輩の方で何とかしといてくださいよろ!」

「うん、宜しく。その件は私がなんとかする」

クロは足早に次の授業場所へと向かった。背中に背負っている大きなバツクパツクが上下に激しく揺れていた。

クロを見送った留美は自習用の机がある場所へ向かい、空席を探した。程なくして窓隣の一人席を確保することに成功した。大きなガラスを右手に、留美は机にノートや教科書などの自習用具を広げていった。

留美は窓の外に目をやった。

「…日本か」

留美は高校を卒業してからそのまま海外の大学へ進学した。長い休みに入れば帰国はしていたものの、もうかれこれ三年近くはアメリカを拠点に生活していることになる。

留美は思い出したかのように携帯を取り出して、先程までメールのやり取りをしていた企業のホームページを開いてみた。業種は会計とコンサルディング。留美の専攻にはそれなりに合致している。

彼女の記憶にはふと思い出す影があった。

小学校の時に誰からも受け入れてもらえなかった自分を悪役を演じながら助けてくれた、冴えない高校生。

別段多く言葉を交わしたわけではない。これといって二人で何か特別なイベントが有ったわけでもない。それなのに、不意に彼の影が彼女の人生に絡みつくような気分になる時がある。

「……………」

窓の外では木枯しのような強い風が吹いていた。なびく木々の擦れる音と雲一つ無い茫漠とした青空が彼女の虚ろな心を映し出しているようだった。留美の居る地域は年中乾燥しているためこういった風が吹くのは珍しくもない。ただ、日本人の感覚からしてみれば、今はようやく夏の終わりだというのに随分と季節外れな風だった。

留美はパソコンを取り出すと、慣れた手付きで大学のサーバーに接続した。そこから午前中に自分が受けた教授のアカウントに移動し、今日の授業のスライドをダウンロードした。

画面に100ページを超える超大作のスライドが現れる。スライドが配布されるのであればノートを取らなくても良かったのではない。留美はひどく後悔した。

留美は自分の意識を戻した。

いつものことだった。

彼を想ったところで連絡の方法も無ければその宛も無かった。

恋というものでもなければ友情というわけでもない。

だが、彼女の中に確かに存在した大切な繋がりだった。

彼が自分の事をどう思っているかわからないが、どうにも思っていないが、この繋がりには留美にとってかけがえのない特別な絆だ。

そして、もうまもなく彼と彼女が再び相見えることになろうとは彼女には知る由もない。

続く

第十九話

— Side Hachiman —

会社と出向先とを行き来する生活をするようになってから既に一ヶ月が経過していた。

一月も経過すれば流石に出向先でも多少なりともスムーズにやり取りを行うことが出来るようになっていた。

とは言うものの、俺と雪ノ下はここ最近の仕事上での会話しかなく、それ以外には特にこれと言った会話も無かった。雪ノ下は新しいプロジェクトを抱えたらしく、俺の方にまで手が回っていないのが見て取れた。元より、彼女の手助けも必要では無いわけで俺が一人でなんとか出来る仕事ではあるのだが。

そんなわけで、俺は雪ノ下と同じ職場に居ながら全くと言っていいほどに赤の他人状態となっている。

しかしながら、会社に居るのは雪ノ下だけではない。

「比企谷さん、今日仕事終わったら、皆で飲みに行くんですけど良かったら一緒に行きませんか？」

「今日の夜ですか？」

雪ノ下とは疎遠なもの、こうして出向先の社員からも割と気軽に誘ってもらえるほどには仲良くなっていた。既に何回かはこういった集会に参加している。雪ノ下は当然居ないが、それでも出向先の間とのコミュニケーションは大事だ。仕事の九割は人間関係だと思え。ある本で読んだ言葉だ。

とはいえ、今日はまっすぐ帰ろうかと思っていたのだが。なんとも断りづらい。

「実は雪ノ下さんも来るんですよ」

あまり乗り気でないことを言いづらそうにしている俺を見てか、ここだというタイミングで相手の女性はジョーカーを切り出してきた。何という策士。俺からしてみれば、諸葛孔明が『今です！』って言ってるのが幻聴で聴こえたくらいだ。幹事であろう女性はそこまでの効果は無いだろうという前提で言っただろうが、お見事だ。俺には効

果観面。これ以上無い甘言だ。

「お、おう。ま、まあ今日の夜は特に予定も無いから行きます」

さつきまでまつすぐ帰ろうとか言ってたじゃないかって？馬鹿野郎。俺は言っていない。ちよつと頭をよぎっただけだ。だからセーフ。「ホントですか?!良かったあ〜!OLの子たちから比企谷さん絶対に誘ってねって言われてたから断られたらどうしようかと…」

なんというか、うん。幹事さん、ご愁傷様です。

女性コミュニケーションも大変だなと思った。男にはわからないギブ&テイクと権力や数の暴力による搾取が行われているのだろう。後半は俺の勝手な想像なのであしからず。

「それよりも、そんな皆、一気にあがってしまったって大丈夫なのでしょうか?」

「はい!大丈夫ですよ。先週で繁忙期は終了したので寧ろ、行くなら今!って雰囲気なんですよね」

そうだったのか。言われてみれば先週の稼働量に比べれば、今日のオフィスは幾分か落ち着いているように思える。

「よし、比企谷先輩のOKは貰えたからあと一人かな」

メモ帳を開きながら幹事さんが確認を行っている。どうやら俺は最後の方に誘われたっぽいな。

「それじゃ、今から雪ノ下さんを誘ってきますね!」

そう言うとき意気揚々と幹事さんは席を立った。

……。

え?

おいちよつと待てえええい!!さつき雪ノ下来るって言ったよね!?!どゆこと!?!さつきのは俺を釣るための餌だったの!?!

「え、ちよつと。さつき雪ノ下来るって…」

「雪ノ下さんが来ると言ったな。アレは嘘だ」

「いや、何キメ顔で嘘を認めてるんですか!?!」

「大丈夫ですって。今から嘘から出た真にするんですから」

びつくりするくらい信用ならねえ。幹事さんは今にもスキップで

もしそんな足取りで雪ノ下の元へと向かっていった。いや、今勤務中だし、雪ノ下に怒られると思うんだけど。

幹事よ、図つたな。今更、撤回しようものなら完全に俺が雪ノ下目当てみたいではないか。

嫌な予感がしたが、自分にはどうしようもない。業務に戻るとしよう。

三分ほどして幹事さんが帰ってきた。案の定、足取りが重くトボトボと甲子園敗北を喫した野球部のような意気消沈ぶりだ。

「どうしたんですか？」

「仕事なんだからそういった話はタイミングを考えなさいって怒られた……」

やっぱりな。まあそんなことだろうとは思いましたよ。しかも、その言い方だと雪ノ下は多分来ないな。

困った。別に行っても良いのだが、ちよつとだけ行く気が失せてしまった。さつきも言ったが、雪ノ下が来ないから行くのやめますとか、そんな露骨なドタキャンはどう考えても邪推される。いやいやその言い方だと俺が雪ノ下を再優先事項に考えているのを認めているみたいではないか。

そうか。雪ノ下行かないのか。うーん。

「それですね。雪ノ下さん来るみたいですよ」

あ？

「え、雪ノ下来るの??」

思わずタメ口になってしまった。謝るタイミングがなさそうなので、とりあえず心の中で謝罪しておく。

「そうなんだよ！なんかまたいつものか……って不機嫌オーラ出たのに、比企谷くん来ますよって言ったらそれはもう途端に『今日は仕事も早めに終わりそうだから、行こうかしら』って可憐な表情に！これはなんとというか、大改造！劇的ビフォー・ア○ターだよ！比企谷くん！」

幹事さんもつられてカジュアルな話し方になっている。というか、ここ数分間での貴方のキャラ崩壊の方が劇的ビ○オー・アフターなん

ですけど。

「というわけで難攻不落の雪ノ下さんが比企谷くんというONE WORLDだけであっさりだよ。魔法の言葉過ぎて日常的にも使いたくなっちゃうくらいだよ！いやもう、次回からこれ使うわ！乱用必至ですわ！」

幹事さんが暴走し始めたので放置して仕事に戻ることにした。どうしてこう、俺の周りにはこんなタイプの人が多くなるのだろうか。才能の一つだとしたら早急に手放したい能力だ。

「さて、話が盛大に脱線したような気がするけど…」

脱線していたのは貴方だけなんです。喉元まで出かかっていたが、言うだけ野暮だな。

「これはお手柄だよ。比企谷くん！なぜなら雪ノ下さんは一度もこういった集会に参加したことが無いからね。男達の血湧き肉躍る表情が目に見えかぶよ」

「それは何よりです」

一々、幹事さんの発言が若干古臭いのが気になる。雪ノ下も雪ノ下で会社の集会に一度も参加したことがないってどれだけ頑固なんだよお前…。かく言う俺も会社の集まりに参加したことあったっけ？あれ？記憶に無い。

一人考え込んでいると気づけば目の前には幹事さんの人懐っこさがにじみ出た可愛い顔があった。吸い込まれそうな茶色の目から逃れようと思わず顔を逸らした。

「ん？何比企谷くん？もしかして私のこともイケる口？」

「ノーコメントでお願いします」

「そっかそっか。じゃあイケるということで口説かれるの楽しみにしておくね。またあとで仕事終わったら私がまた連絡するから！」

幹事さんはノリノリで去っていった。雪ノ下に注意されていた時の彼女は今や何処にと言わんばかりで一喜一憂の激しい人だという印象だ。

ふと気になって、雪ノ下の方を見たが、彼女はこちらの様子には目もくれずただ黙々と業務を続けていた。

時計は十一時を指していた。昼食の休憩にはまだ早すぎるのでもう少し、業務を終わらせてから取ることにしよう。

…と、思ったのだが、結局キリの良いところで休憩に上がった時には既に、午後の2時になっていた。

休憩室は流石にこの時間帯であればそこまで混雑はしていないな。一番奥の席に座るとしよう。

着席して携帯を確認すると、芦間から連絡が来ていた。おそらく、海外出張の話だろう。何か進展があつたのかもかもしれない。

『最初のロスの日程決まったぞ〜♪ とりあえず再来週から一週間とりあえず、キャリアアフォーラムな。荷物とか必要な資料とかはこっちに出社した時にまた細かく伝えておく』

げ、再来週には俺は海外に行かないといけないのか。なんとめんどくさい。しかもアメリカだろ？飛行機何時間乗らないといけないんだ？俺はあんなエコノミーのパーソナルスペース侵害しまくり旅客機に長いこと拘束されるなんてのは御免だ。どうにかして、経費でビジネスクラスに出来ないかなあ。いや、下っ端は無理ですよねはい。いや、中々に大きな企業なんだから流石に部下三、四人の旅費くらいちよつと頑張れば豪華な感じで捻出できそうなものだけだ。（会計会社もやつてる企業に所属している社員にあるまじき言動だなこりゃ）「あら、さつきから、何放送出来ない程の気難しい顔をしているのかしら？」

「え？」

驚いて後ろを振り返ると、雪ノ下が立っていた。何かと背後に立てられることが多いような気がする。こいつ、俺の後ろを取るのが趣味なのか？それにしても、俺今日滅茶苦茶『え？』って言ってるな…。難聴系主人公か俺は。まあ、『え』の後に『何だっ？』を付けていないからセーフだろ。

「何やら見当違いも甚だしい不愉快な意見を持たれていそうだからとりあえず、『違いわ』ということだけ先に言っておこうかしら」

「邪推だな。俺は別にそんなことは考えていない。再来週の出張につ

いて思案していただけた」

言い当てられたことに内心冷や汗をかいたが、雪ノ下にはバレていないようだった。

「出張？左遷の間違いではないのかしら？」

「見当違いも甚だしい不愉快な意見だな」

「そう、それは残念」

雪ノ下はそのまま横を通り過ぎると、俺の正面に座った。さも当然と言わんばかりの着席だった。

これまでは俺が座っている長机の反対側にさり気なく座っていたことが多かったが、眼の前に座られたのは初めてだ。

雪ノ下は自分で弁当を作っているらしく可愛らしいパンさんの弁当箱を取り出した。お前その歳になっても相変わらずパンさん好きなのな。

彼女の弁当の中身を見ると、豪勢な出来栄えかと思いきや、かなり家庭的な手料理が丁寧に並んでいた。10種類近い品目があるのもかわらず、どれも手作りらしい。冷食の一つでも弁当に入れる主婦らしきがあれば人間味が感じられるというのも変な話だが、ここまで手料理を徹底している雪ノ下の方が逆に人外ぶりを発揮している。「残念なのは、俺が左遷じゃなくてってことか？」

俺はビル一階のコンビニで買った焼きそばパンを齧りながら雪ノ下に尋ねた。

「いいえ。再来週から貴方が居ないってことが、よ」

「え」

「……！」

こいつ、今自分が言ったことの意味を理解しているのだろうか？いや、変に突っ込んだら絶対に『そうやって自分にとって都合の良い解釈ばかりするのはどうかと思うのだけれど』とか言われそうだから聴かなかったことにしておこう。

変に期待しない。俺は思春期にそれを死ぬほど学んできたじゃないか。

と思いきや雪ノ下の表情を見るに案外全く考えもなしに言ったら

しいことが一目でわかった。

「そ、その、きよ、今日みたいに会食に出なければならなくなった時とかに話し慣れている人がその場所に居ない、のは大変になりそうだと思うたからという理由で、べ、別に貴方が居ないということに対する落胆の言葉というわけではないわ。やましい希望を持っていたとしたら今すぐ捨てることね」

やけにあたふたしていたが、まあそういう事にしておいてやろう。別に話すわけじゃないけど居てくれたら心理的負担が軽くなる場合もあるよな。逆に気を使われすぎて速攻で帰りたくなるって場合のほうが多いけど。

…というか。

「…いやお前、出なければならなくなった時って言ったってなあ。お前、飲み会とか打ち上げの類に全く参加したことが無いって幹事さんが言ってたぞ」

「っ！……偶々、予定が、合わなかったからよ。私が貴方が行くからという理由で今回参加を決めたわけではないわ」

「へいへい、そうですかい」

「貴方、絶対納得していないでしょ？」

「していないことはない。というか別に、納得とかそういう話でもないだろ」

「…そういう言葉が聞きたかったわけではないわ」

雪ノ下は真っ赤になってそっぽを向いてしまった。うーん。これは俺が悪いのか？ 独り相撲しながら勇み足で自滅しただけにしか見えなないんだが、俺が謝ったほうが良いのだろうか。いや、この状況での謝罪は雪ノ下のプライドを傷つけるだけだろう。

俺は黙って手に持っていたパンを口にすると、自動販売機で購入したマツカンを開封した。

正面の雪ノ下を見ると何やら物を言いたげな顔をしているが、何を言わんとしているか、手に取るように分かる。

高校時代の知り合いにいつも言われる言葉だ。

どうせ『未だにマツカン飲んでるの？』だろ。川崎や戸塚に会った

ら毎回言われるわ。実は三ヶ月に一回くらい集会がある。結衣と一緒に参加しているのだが、何故か材木座や平塚先生まで来る。最近平塚先生が俺を寝取ろうと本気で迫ってくるのが悩みの種だ。

ソウルドリンクってのは禁酒以上に難しいものだと思う。この魔力をどう回避できようか。いや、出来まい。甘ったるくて飲めないと言っている奴らの言葉が信じられん。こんなにも美味しいのになんでだろう。

あ、雪ノ下ほったらかしだった。

にしても、どうやって話を振ろうか。先程、後味の悪い話の途切れ方をしてしまった手前、どうにも切り出しづらいものがある。

「…貴方はどうして今日は参加することにしたの？」

「ん？」

と、思っていたら、意外にも雪ノ下の方から話を振ってきた。相変わらず機嫌は全く直ってはいない。

「別に、偶々だ。そういう気分なだけだ」

「納得いかないわね」

「お前、意固地になりすぎだろ…」

「何かしら？ 私は貴方の言うことが解せないというだけなのだけだ」

「こつちにも言えない理由があるんだよ。それに気分つてのは本当のことだから嘘は言っていない、うん。というか、芹間のアドバイスが早々に役に立つとは思わなかった。

「何故黙っているのかしら？」

「どうやら火に油を注いってしまったらしい。氷の女王様は南極の氷を全て溶かしてしまいそうな勢いだ。

「雪ノ下はどうして俺が行くと思った？」

「貴方、逆に質問で返すのね。大方、会社に気になる女性でも居るのではないかしら？」

「……………」

「あら、凶星？ 貴方、由比ヶ浜さんが居ながら、そこまでクズに成り下がったの？」

いやいやいや。そうじゃない!どうしてそうなる!?いや、必然的に
そうなってしまうのか。

困ったことになった。大正解ではあるが、お前が思うような目的
じゃないからなんて言おうか迷ったんだって言ってもダメだろうし、
そもそもそれを言ってしまったら折角、秘匿にしていた事情がまるで
台無しになるとかいう本末転倒。どうしろと?

イカン。あらぬ方向に会話が進んでいる。しかも弁解に非常に困
るベクトルに。しかし、今後を考えれば雪ノ下との関係が悪化するの
は本意ではない。

「…お前が来るって聞いたからだよ」

「……………」

「おい、なんでだんまりなんだ」

「…そ、そう」

雪ノ下はそのまま平然と食事を続けた。その表情は何事も無かつ
たかのように涼しげだった。先程まで剥き出しにしていた鋭い刃が
嘘のようにすっぽりと鞘に収まっている。

しかし、何故こうも無反応なのだろうか。何かしらのリアクション
が無ければこちらとしても対応に困るのだが。

「……………」

雪ノ下はチラチラとこちらを見ながら箸を進めていた。

しかし、よく見ると耳が真っ赤だった。

いかん。俺も反応できなくなっていた。

結局、それ以降は俺も雪ノ下と同じく、ただ黙って食事を進めるし
かなかった。今ほど、最高に気まずいのに食が進んだ食事は金輪際起
こらないだろう。

続く

第二十話

オフィスビルからそそぐLED、マンションの部屋から漏れ出る暖色の照明が合わさって、居酒屋街から少し離れた夜道を怪しく照らしていた。

公園を右手に歩道を牛歩で進んでいく。歩みを進める度に肩のしかかる重量が緩やかに増えていった。人一人支えるのってやっぱりしんどい。

「ひ、、、ひきがやくん」

「おい、雪ノ下、ちゃんと前を見て歩け」

「う、うるさいわね。わたし、はちゃんと、あるいて、いるでしよう?」「どこがだ。今この手を離せばまともに歩けもしないだろ」

「ちよ、ちよつと、て、てを、はなさないで、ほしいのだけれど」

「お、おい。暴れるな、溺れたカナヅチ助けてるみたいなの状態になってるから」

「あ、あなたが、勝手に、私から、、、離れるか、らでしよ」

現在、俺は完全に酒が回ってしまった雪ノ下に肩を貸している。顔は赤みを帯びており、アルコールが回っているのが視認出来た。

もし俺が彼女から距離を取れば、彼女は今にでも生まれたての子鹿という勝負をしそうなレベルで千鳥足でおぼつかない。

まさか、雪ノ下がここまで酒に弱いとは思わなかった。因みに俺は外で飲む時は殆どの場合一杯か二杯で済ますように心がけている、なので多少なりとも酒が残って入るものの、横にいるこいつ程に歩行が困難になるというわけではない。

そもそもどうして俺がこいつの世話をしなければならないのか。

——飲み会の時の話だ。

結論から言うと、俺と雪ノ下は案外盛り上がった。

仕事終わりに会社近くの居酒屋での飲み会というよりは繁忙期お疲れ様会。そこに俺も雪ノ下も参加する運びとなった。

場所は出向先の会社から三駅ほど移動したところだった。宴会にも使える程の大きな居酒屋だ。

席は自由。それ即ち、戦争の始まりである。

幹事さんの着席の合図の元、各社員たちが一斉に陣取り合戦を始めた。

そして、俺は若手の社員に質問攻めに遭い、雪ノ下は男性社員が我先にと隣を取り合う展開になった。

男性社員たちの殆どが、雪ノ下が座るまで彼女の周りを円形に囲むようにして待機するという異様な陣形を組んでいたのが今でも記憶に残っている。

雪ノ下の隣が彼女の席を見る度が変わっていた。どうやら争いを生まないように10分毎に交代しているらしい。というか回転式で。お前ら何かの風俗か街コンのシステムでも導入しているのか。なんで知ってるかって？ 僕と同僚のA君からの授業で学びましたよ。僕は行ったことはいません。

『雪ノ下さん、気に入った人がいたら交代を止めてもいいですからね』
ダメだこいつら。雪ノ下は自分のなりふりを勝手に決められることが一番嫌いなのに。念願叶って意中の女性が飲み会にやってきたからか、男達が目に見えて舞い上がっている。飢えた獣共が舌なめずりをしていた。

雪ノ下が偶にこちらをチラチラと見て助けを求めるような視線を向けてきた。あいつ、普段は気丈に振る舞うくせに、こういう時は似つかわしくなくらいに女の子になるな。しかし、俺にどう助けろとのか。格好良く連れ出せと？ 俺妻帯者なんですけど。俺がもしそんな事したらどうなっちゃうか分かりますよね？ いや、別にそのぐらいは許容とは思いますが。

というかこれは雪ノ下が抗議すればパワハラかセクハラと罰せられても仕方がない気がする。まあ、雪ノ下には触れていないという

ルールが有るのか、雪ノ下の座席の後ろに手を回して擬似的に彼女を抱くような仕草をしている。流石にこれはアウトだろう。

因みに俺は雪ノ下からは一番遠い反対の席に座っていた。周りには男性社員が雪ノ下の周りに集中しているせいかな、女性社員が必然的に多くなっていた。後は、新米の男性社員だ。彼らがここにいる理由は、先輩方が雪ノ下の近くを占拠したために席を勝手に決められてしまったからだろう。俺もそうだった立場になることが多かったからその気持ちはよく分かる。安心しろ。その先輩方は今見事に続々と散っている最中だ。

若手の男性社員がアドバイスを俺に求めてくるとかいう高校時代では考えもしない光景に俺自身ですらそれを疑ってしまう。話してみるに穢れを全く知らない対局の人生を歩んできたような後輩達だ。俺が余計なことを話せば雪ノ下に啓蒙活動だと疑われてしまうのも必至だろう。当たり障りがなく、尚且、噛めば深みが出るような言葉を慎重に選んでいった。

新米社会人たちは食い入るような目つきで俺の革命的な演説を聴いている。なんて素晴らしいオーディエンスだ。君たちは先輩に好かれる才能を有している。いかん、自制は忘れてはいないものの、つい悦に浸ってしまいそうだ。

『あまり、私の大切な社員達に余計なことを吹き込まないでほしいのだけれど』

後ろを振り返ると男性の集団から抜け出してきた雪ノ下がいた。案の定、俺の行いを政治活動か宗教活動の一種かと勘違いして釘を差しにやってきたらしい。手にはほんの少しだけ口につけたであろうカクテルの器が握られている。そういえば、グラスの種類によってアルコールの度数が分かると聞いたことがある。雪ノ下が持っているのは細長いグラスなので・度数が低めのものだな。

『人間が悪いことを言うもんじゃないぞ。俺は人生の先輩として、後輩たちに有意義な人生を生きるためのアドバイスを伝えているだけだ』

因みにハチマン教授の授業は一コマ20円という激安公演だぞ☆

毎回講習に強制参加させられている生徒（結衣）からは、
『驚くほど人生に無駄』との評価で一刀両断されてはいるが。

『貴方がもしメンターなんて務めようものなら、教え子たちの将来が心配でならないわね。そもそも貴方が有意義の本当の意味を理解した時間が存在したのかしら？』

雪ノ下は頭を抱えている。何だ？もう飲みすぎて頭が痛くなったのか？

『俺はお前よりは人に教えるということに向いていると自負している。有意義という言葉も俺の辞書の355ページ辺りに記載されている』

『私も教鞭をとるということに関してはカエル君には負けないと自負しているわ。あと、その辞書は今すぐにでも検閲されるべきよ』

『すいません、せめて“ヒキ”は付けて下さい』

居酒屋の机で頭を付けて嘆願する三十路前のおっさんの図が出来上がった。

周りの社員達は雪ノ下のこういった姿をあまり見たことがないのか、目を丸くして俺たちの会話を見守っている。雪ノ下は普段他の人とはこんな顔を見せないのだろう。俺からすればこの雪ノ下しか知らないんだが。因みに見守ると言っても、頭を突っ伏しているおっさんには見向きもしていない。泣いてませんよ？

『それで、教祖谷君は何の布教活動をしていたのかしら？』

『だから俺は別に新しい人生の発見を促したりはしてねーよ…』

『どうかしらね。合間を縫って壺でも売りそうな顔をしているのだけれど』

『どんな顔だよ…』

『あら、手鏡でも貸してあげましょうか？』

『丁重にお断りさせて頂く』

『そう、それは残念ね』

意地悪く笑う雪ノ下は新人の社員達の間をかき分けるようにして俺の隣に座った。人数が多いせいか、かなり近い。ちよ、肩が。肩が当たってます。しかも、ちよと酔っているから顔がほんのりと赤く

なっていて色気が半端じゃない。頭が沸騰しそうだ。

『じゃあ何を話していたの？』

雪ノ下が詰め寄って来た。そ、袖を引つ張るな。誰にも見えない角度でそういう仕草をやってくるのはルール違反だ。一色かお前は。

『し、新社会人になった時に心がけていたことは何？とかそういう話だよ』

『そう。それで比企谷君はなんて答えたの？』

雪ノ下はそつと詰め寄るような形から元の姿勢に戻った。それでも相変わらず俺の隣を陣取っており、距離感はずと変わらない。

『プライドを削ぎ落とすことって答えた』

『え』

『おい。今の『え』はどうせ俺が捻くれた回答でもしたとか思ったんだろ』

『……そんなことはないわ』

『おや凶星か？』

この前、雪ノ下に言われたような言い方をしてやった。少しでも晴れ晴れとした気持ちになりました。我ながらなんて器の小さい野郎なことだ。

『…貴方、根に持つタイプなのは昔から変わらないのね』

『つ別にそんなことはねーよ。こうやって教育しているんだ。言われて嫌なことは人に言っただけじゃないよ』

やっぱり雪ノ下になじられた。先程から雪ノ下の飲酒のスピードが徐々に上がりつつある。そういえば雪ノ下は飲み会にほぼ参加したことがないと言っていたが、ペース配分は大丈夫なのだろうか。いや、俺の予想が正しければこいつは絶対に慣れていない。

カクテルを飲んで落ち着いたのか、雪ノ下は大きく息を吐いてこちらを睨みつけた。

『まったく。よくまあ、毎度毎度そんな屁理屈をゴネられるものだわ』

『お互い様だろ』

『私のは理論よ』

『…お前、今しがた言った言葉、鏡の前でもう一度言おうな』

俺がそう返すと、雪ノ下は楽しそうにくすくすと笑っていた。一ヶ月くらい前に彼女のこの表情を見たはずだが、随分と久しぶりにその顔を拝めた気がした。

雪ノ下は先程男性社員に囲まれていた時とは見違えるほどに明るい笑顔を振りまいていた。その姿を見たからか、玉砕した男性社員たちは路線を変えて他の女性社員たちに混ざろうと画策した。まあ言わずもがな、遅きに失した。後の祭りとはこのことだ。

俺と雪ノ下は、他愛もない世間話や、仕事場の愚痴などをお互いに語り合った。

語らい、詰り合い、笑い合い、時に静かな時間を過ごす。

これが会社の打ち上げであることも忘れて二人の空間を作り上げていた。

周りの人間など目に入らなかった。お互いが自分ともう一人しか存在していないかのような認識を共有していた。

一ヶ月、いや数年ぶりに雪ノ下と二人で会話をした。

ようやく俺と雪ノ下は本当の意味での再会を果たす事が出来たのだ。そんな気がする。

その後は周りの社員さん達も気を回してくれたのか俺たちをそつとしておいてくれた。いや、それは逆に俺たち変に意識してしまうから周りに居て一緒に会話してもらった方が助かるんですけど。向この席で幹事さんが親指立てているがものすごい余計なお世話だ。それでも彼女たちが機転を利かせてセットアップして貰った機会なのに変わりはない。ありがたく厚意を享受するでしょう。

『なあ、雪ノ下』

『何かしら?』

『その、良かったら、乾杯でもしないか?』

『ものすごく貴方らしくもない発言ね。でも私もそうしたい気分だわ』

俺たちはそつとグラスを合わせた。

飲んでいた酒は俺が清酒で雪ノ下はカシスオレンジだった。飲み慣れていない者同士のちぐはぐな乾杯だった。

男性社員たちの嫉妬の目をよそに、俺と雪ノ下は時間も忘れて語り続けた。

手前味噌になるが、それは実にいい雰囲気だったと評しても差し支えない。

……………なのに、だ。

「う……ひき、がや君……。ちよつと気分が悪いわ」

「お前、完全にキャパオーバーじゃねえか。なんで飲むペース落とさなかつたんだ」

「し、仕方が、ないでしょう。普段、殆ど、お……お酒なんて、飲まないのだから」

「いや、だつて。あんなに元気そうに飲んでいたら、俺はてつきりお前が酒に強いのかと思つたぞ」

「……私は、どちらかと言えば、……下戸よ」
「今更すぎてなんも言えねー……」

どうしてこうなつた。先程のまでのロマンはフィクションですと注釈がデカデカと出てきそうな勢いで雰囲気をぶち壊していた。

飲み会が終わつた後、二次会の誘いがあったのだが、俺は終電の間も考えて早めに上がることにしていた。最近は遅く帰っていたし、結衣に心配をかけさせる事が多かつたからもある。俺が幹事さんに断りの話をつけて、店を出ると、何故か雪ノ下が店の入口で待っていた。

『遅いわ』

『なんでいるんだ？』

『何かしら？』

『……………いや、何でもない』

一人だつたら締めのカツツリのラーメンでも食いに行こうかと

思っていたが、雪ノ下は苦手だよな…二郎系とか家系とか。…と思っていたのも束の間、雪ノ下の顔色が悪くなっているのが目に見えて分かったので、予定は全てキャンセルで雪ノ下の介抱をすることになった。

「雪ノ下、もしかしてお前一人で帰る自信が無かったのか」

「そ、そんな、わけ、な、いでしょ？あと、比企谷君。お水が飲みたいわ」

「…分かった。あと、○キャベミみたいな胃腸に効く飲み物も買ってくるから大人しくここ座つとけよ」

公園に入り、雪ノ下をベンチに座らせた。道路向かい側にあるコンビニエンスストアに入る。終電一時間以上前の時刻ではあったものの既に店内は深夜かの様に物静かだった。水の入ったペットボトルを取り、レジ前のドリンク棚から胃腸薬を見つけるとそれも手にした。

会計を済ませてベンチに戻ると雪ノ下は肩を抱えて不安そうにしていた。今にも横になってしまいそうな程に弱々しげな後ろ姿だった。

「ほれ、雪ノ下買ってきたぞ」

「……………」

あれ？ついに気分が悪くなりすぎて声も出せない状態にまでなつてんのか？ちよつと流石に、心配になってきた。雪ノ下の前に回り込むと腰を下ろして顔色をうかがってみた。

「おい、雪ノ下。大丈夫か？…つてうん？」

「…すー…すーすー…」

……………

こいつ。もしかして俺が買ってくる間に寝ちまったのか。なんて無防備な。いくら日本とはいえ、お前みたいな美女がこんな公演のベンチで寝ていたらただでは済まないと思うんだが。こいつ絶対に外で酒を飲んじやいけないタイプの人間だ…。隙が有り過ぎて、俺がもし親なら気が気じゃない。

「…起きろ雪ノ下。こんなところで寝たら風引くぞ」

「ん…。ひ、比企谷君…」

「お前、酒を飲んだら眠くなるタイプか？」

それは突然だった。

刹那、雪ノ下がしがみ付くように胸元を強く掴んだ。酔っ払っているのか分からないが想像以上に力がこもっていた。

「比企谷君、比企谷君！」

「雪ノ下。お前、滅茶苦茶酔ってるだろ」

俺は落ち着けようとして、彼女の腕を掴み離そうとするも雪ノ下は頑なだった。

「う、うるさいわ。私は…正常よ」

「そんな子供みたいなこと言うなし…」

「なんで急に、、、三浦さんみたいな言い方に…！」

「そ、そりゃあ。まあ、偶に会うからな。結衣の繋がりで」

「結衣…。そうね…。結婚しているのだから、名前で呼ぶわよね」

「…っ！当たり前だろ…。本当にどうしたんだよ…お前」

「お前」じゃないわ！私にもきちんと名前があるのよ…」

雪ノ下はいつにも増して声を荒げた。彼女のあまりの急な変化についていけない。一体どうしたのだろうか。

「ねえ、比企谷君…。今日はとても楽しかったわ。こんな気持ちはとても久しぶりというくらい」

「…そうか。俺も、こんなに楽しかったのは久しぶりだ」

「由比ヶ浜さんが居るじゃない。彼女といえるのは楽しくないのかしら」

「そういうわけじゃない。…ただ、お前と、いや。雪ノ下と居る時間は、やっぱり自分にとって特別なんだと思う」

「……………そう。なら、、、」

「…なんだよ」

雪ノ下はようやく手を離れた。そのまま、おもむろに立ち上がるとコンビニの袋をもった手に自分の手を添える。下を向いているために、彼女の表情は窺い知れない。

雪ノ下は小刻みに肩を震わせていた。そして、静寂の中、深く顔を

隠した彼女の口から悲痛に歪んだ嗚咽が漏れている。

ようやく彼女が顔を上げた。

その顔を見た刹那、どうしようもないほどの混沌とした感情がこみ上げてきた。

「どうして私を選んでくれなかったの・・・？」

透き通るような白い頬から大粒の涙が切なさを帯びた目からこぼれ落ちる。公園の街灯に照らされたその雫は真珠をも嫉妬させる輝きを放っていた。

雪ノ下はそのまま俺の横を通ると去って行った。震える肩を抱きながらおぼつかない足取りで。

その隣には誰もいない。誰も彼女の側にいない。

そこにいたのは震える肩を一人寂しく抱く儂い少女だった。

何も言うことが出来なかった。

身体が動かなかった。

どうしてだ。

どうして俺はあんなにも彼女を悲しませてしまったのだろう。

どうして俺は彼女の後ろを追うことが出来ないのだろう。

どうして俺は今更、こんなにも彼女を選ばなかったことを後悔しているのだろう。

右手からビニール袋が滑り落ちた。

街灯の電球があざ笑うかのように点滅している。

ようやく振り返った時には彼女の姿はもう見えなくなっていた。

今になって、彼女との思い出が連鎖のように想起する。楽しみや苦しみに、あらゆる記憶が俺にとってかけがえのない財産のように甦った。

その度に言葉にならない想いが心を握りつぶす。今のお前にその財産を掴む資格も筋合いも無いのだと何度も突きつけられる。お前

は結衣を選んだのだから。

「……そ」

やり場のない怒りがこみ上げてきた。一体俺は誰に対して怒っているんだ。雪ノ下か？結衣か？それとも自分か？

いや違う。誰でもない。

この全身を支配する駆り立てるような衝動を制御する手段を俺は持ち合わせていなかった。

俺は袋に入っていた水を取り出すとそれを一気に飲み干した。

一生の財産をドブに鎮めるほうが余程マシだと思えるほどに最悪の気分だ。

公園のゴミ捨て場になったペットボトルを乱暴に投げ込むと無心で駅へと歩みを進めた。

帰宅すると何も言わずにベッドに飛び込んだ。

結衣はひどく狼狽していたが、何かを察したのか、何も言わずに俺の隣に寄り添うようにして寝てくれた。

それが酷く俺の心を蝕んでいるとはなんとも皮肉な話だ。

いつになっても眠れる気がしなかった。

気がつけば朝になっていた。どうやら疲労には勝てないらしい。

いつの間にか俺は眠りについていた。

多少の冷静さを取り戻した俺は結衣に謝罪をして、元の会社に出かけた。

会社に到着した。

果たして自分は、どうやって仕事場に向かったのだろうか。何も覚えていない。だが、入り口で一色に会った。今は隣に芦間が居る。ここが会社であることは間違いない。

智佐吹さんに呼び出された。何の話だろうか。

「……………」比企谷君

それだけはこれから先、どんな時でも、鮮明に思い出すことが出来るだろう。

その時俺は会社から出向の終了を告げられたのだ。

続く

第二十一話

雪ノ下の会社への出向を終えてから、偶に彼女が会社に赴くものの、言葉を交わすことも、顔を合わせることも一切しなくなっていた。周りの親しい人間は険悪な状態になっているのかと心配になつて俺に声をかけて気遣つてくれたのだが、俺はお茶を濁していた。当然だ。俺だって今のこの気持ちも状況も一切説明できないほどに混沌としているのだから。

特に一色は困惑の表情を隠せないでいた。共通の知人としての何かしてあげられればと思つているのだろうが、その答えが見つからないと言つたところか。本当に優しい奴だ。今はその優しさが俺たちにとって諸刃の剣であることも彼女は理解していた。

雪ノ下の会社からの依頼は予定通り、完遂した。俺たちのチームは会社の中でも1, 2を争うレベルの実力者揃いだ。もうあの会社に働きに向かうことも無い。それはつまり、俺と雪ノ下の別れの合図でもある。

抜け殻のような生活故に、今日が何日で何曜日なのかすらもおぼろげだった。

応接室から雪ノ下が出てきた。これがラストだ。俺は智佐吹さんに最後の見送りをしよう、命ぜられた。強情張つて行きたくないと言つたが上司命令を建前に押し切られた。

「悪いが、今の君ではビジネスに於いて何の役にも立たない。きちんとして折り合いをつけない限りは君の嫌いな書類業務を山程押し付けるよ」と智佐吹さんはその一点張りだった。

彼女はいつだつて冷静で部下にとつて最も必要な課題を用意する。それが今の部下にとつて死ぬほどやりたくないものであったとしてもだ。

俺は首肯する他なかった。

俺は雪ノ下をエレベーターに案内した。久しぶりに顔を合わせた彼女はまるで別人のように感じられた。生気が伴っていないのだ。

雪ノ下は黙って何も言わずに俺の後ろを離れずピッタリと付いて来た。失礼なのは百も承知だが、顔色と相まって最早背後霊のそれにか思えない。しかも、いつもよりも30センチ程遠目に距離を開けている。これが今の俺と彼女の精神的な距離なのかもしれない。

「ここでいいわ、比企谷君」

エレベーターに入ろうとした時、雪ノ下が俺を呼び止めた。少なくとも、これ以上一緒に居ることはお互いにとって得策ではないという彼女なりの提案だった。少なくともというのは俺の願望だ。俺は反対の声もあげずただ彼女の言葉に従った。

「承知いたしました」

何も告げず雪ノ下から離れる。雪ノ下の顔を見ることが出来なかった。

「…ねえ、比企谷君」

雪ノ下が口を開く。俺を呼んでいるのか？話しかけられることも無いだろうとうっかり気を抜いていた。

彼女は中々エレベーターに乗り込もうとはしなかった。既にエレベーターの前には長蛇の列が出来上がっている。俺は後ろに並んでいた社員に先に行くよう促した。彼らが機内に乗り込み扉が閉まったのを確認してから雪ノ下に向き直った。

雪ノ下の表情を一言で表現するなら“虚無”だった。虚ろな目に異常に白い肌。お世辞にも健康体と言えるような顔をしていなかった。

「ゆ、雪ノ下…。この前は、…その」

「あの時は本当にごめんなさい」

俺が話を切り出す前に雪ノ下は先手を打つがごとく、深々と頭を下げた。それは俺が雪ノ下雪乃という女性にあって以来、初めて見たと言つてよい程の深い一礼だった。

「え、いや。お、おい。人前だぞ」

俺も俺で動転しているので訳の分からない言葉を雪ノ下に投げかけている。あの雪ノ下が俺に謝罪だと。今日は何だ？隕石でも降ってくるのか？

「お酒が入っていたとはいえ、身勝手極まりない行為だったことに変わりはないわ」

雪ノ下はしおらしげに自らの行為を詫びた。何もお前が悪いなんてことは決してないから余計にこちらもどう返したら良いものか分からない。

「…やっぱり全部覚えているのか」

「全部ではないわ。実はところどころ、記憶がないの。でも貴方にとっても酷いことを言ってしまったって、心が締め付けられるくらい痛かったことは朝になっても、今になってもずっと覚えていたから」

「そ、そうか」

「ええ」

雪ノ下が胸に手を当てる。何か気を利かせた一言で彼女をフォローしようにもアドリブ能力の無さが出てしまい何も言葉が浮かばなかった。

「ねえ、比企谷君」

「…なんだ？」

雪ノ下は何かを躊躇っているようだった。それを口にするのを禁忌としているのかと言うほどにだ。

だが、彼女は意を決したのか。恐る恐る、その口を開いた。

「あの時、私は一体何を貴方に言ってしまったの？」
「…」

そうか、覚えていなかったか。

雪ノ下はその言葉を知りたがっている。

彼女が告げた言葉を俺に言わせるのは、酷なんてもものじゃない。言えるわけがないだろう。

それは俺たちが積み上げてきた、無かったことにしてきたもの全てを否定してしまうのだから。

決して許されることではなかった。

閉口した。

静寂が辺りを包んだ。通路奥の扉の開かれる音が聴こえる。雪ノ

下は辛抱強く待っていた。

だが、彼女が待ち望んでいた結果は訪れなかった。俺は彼女に告げないという選択をしてしまった。

「……そう。分かったわ。なら、私は二度と貴方の前に現れるべきではないのかもしれないわね」

雪ノ下から諦念が滲んでいた。彼女は俺が口を噤んだだけで全てを察してしまったのか。

雪ノ下は虚ろな目を下に向けながら肩を抱いていた。その目は何も語ってはいなかった。空虚だった。

心が離れていく。

彼女の存在がまた希薄なものになったような気がした。両の手から水が抜け落ちていくような寂寥がこみ上げてきた。

雪ノ下は俺の返事を待たずして帰ってきたエレベーターに乗り込んだ。今度は一切の躊躇が無かった。

その時自分の中で鳴りを潜めていた欲望の獣が顔を出したような感覚に襲われた。

獣が俺の心臓を掴んだ。その声は耳元で地鳴りのようにうるさく怨念のように纏わり付いた。

あの時と昨日の夜。俺は同じ過ちを二度繰り返した。二度も選択を間違えた、否、選択をすることが出来なかった。

比企谷八幡よ。お前はもう分かっているだろう？
お前が今どうするべきか。

答えなど分かりきっている。
このままで良いはずがない。

「……比企谷君？」

固く作った握り拳を見て雪ノ下が動揺している。俺はまっすぐに彼女の目を見つめた。

雪ノ下雪乃の目に宿るものをなんと形容したら適切なのだろうか。
憂慮、憤怒、虚無、渴望。そんな混沌とした感情がこの小さな瞳の

中に天災の如く渦巻いていた。

その目を一身に受け止め、鉛のように重いその唇の枷を解く。

「俺は…」

「待って」

雪ノ下が機先を制するが如く言葉を遮った。それはまるでその先の言葉を聞きたくないと言うよりは聞くわけにはいかないという強い意志を感じせるものだった。

「雪ノ下……?」

「比企谷君。少しだけ時間をくれないかしら?」

「……どういうことだ?」

理解が追いつかない。雪ノ下に噛み砕いてもらうよう問いかける。同時に深く息を吐き呼吸を整えた。

「貴方が今言おうとしていること。今一度、反芻して。そして時間をおいて。そして、整理が出来てから聴きたいの。たとえそれがどんな言葉だったとしてもよ。その。今は、、お互いに答えを急ぎすぎているのだと思うの。だから。。。」

雪ノ下は胸の前で右手で左手を抱くようにして俺を拒むような仕草を見せた。視線は俺から逸したままでも可憐な少女は話を続けた。た。

「…分かった。実は出張に来週から行くことになってる。それを終えて戻ってきてからでもいいか?」

雪ノ下の提案に乗ることにした。

「…ええ。あと…」

「ん?どうした?」

「さ、さっきのは忘れて欲しいとまでは言えないけれど……その。わ、私の心からの言葉ではなかったとだけ伝えておきたくて」

「お、おう。そうか」

その言葉を聴いて、俺は思わず安堵の溜息を漏らした。だが、それだけではないけないことも同時に分かっていた。先程、俺の言葉を止めたのは雪ノ下も同じ気持ちだったからだろう。いや、そう思いたい。

「あと、比企谷君。これを渡しておくわね」

雪ノ下がきつと近づいて来て差し出したのは彼女の名刺だった。そう言えばタイミングが悪く、受け取る機会が全く無かったな。俺もすっかり失念していた。間が悪いのはお互い百も承知だが、ようやく俺たちは名刺交換を行うことが出来た。いや、ホント何週間越しにやってるんだ俺ら…。

「なんだずっと根に持ってたのか？」

「そんなわけではないでしょう。どこかのヒキガエル君じゃあるまいし」

それは本当に久しぶりに見る雪ノ下の笑顔だった。

「帰ってきたら連絡して。それまでは連絡を取らないようにしておきましょう」

「ああ…」

その方が良い。それは頭の中で理解しつつも、しばらく雪ノ下がない時間を過ごすことに既に違和感を感じ始めていた。これまではそれが当たり前であったはずなのに、人間の慣れとは本当に怖いものだ。

「…どうかしたの？比企谷君」

空返事で上の空だった俺を見て雪ノ下が怪訝な顔をした。

「いや、俺たちも歳をとったなあと思っただけだ」

「当たり前でしょう。もう結婚して子供が生まれてもおかしくない年齢よ」

「ああ、そうだな」

「…ねえ比企谷君。私が高校の時のままであれば、さっきの場面で私は貴方の言葉も聴かずにその場を去ったと思うわ」

雪ノ下は懺悔するように言葉を紡いだ。確かにあの時の俺達であればすれ違ったまま、その状況を享受していたかもしれない。

「ああ、俺がもし総武高の時の俺のままなら、お前に何も言い返すことが出来ずにこうして見送ることも出来なかっただろうな」

「なら、私達は少しは成長したのかしら？」

「さあな。案外変わっていないのかもしれない」

人間そうそう根っこは変わらない。余程のことがない限りは。

「ふふ。でも、貴方の見た目は全く変わらないわね」

「うるせ、ほっとけ。そういう雪ノ下も大して変わってねーよ」

「私は見違えるほど美人になったでしょう？可愛いのは昔からだけれど」

「謙遜しないのところは流石、雪ノ下雪乃だな。そこは全く変わっていない」

「…そんなところだけ感心されるのはとても癪なのだけれど」

「でも、綺麗になったとは。。。思う」

「そ、そう…。ありがとう」

これは束の間の安寧だ。お互いがそう理解している。だが、その安らぎに一生の身を預けても良いのではないか。そう思えてしまう自分が居ることを否定できなくなっていた。

「じゃあ、また」

「おう」

俺が挨拶を返すと雪ノ下は小さく手を降ってそれに応えた。

「出張、気をつけてね」

「お、おう」

歯切れの悪い返事を両断するようにエレベーターの扉が閉まった。優しく儂げな彼女の笑顔がこびり付いて離れなかった。

大きく息を吐いた。

オフィスに大きな足取りで戻る。久方ぶりに地に足がついたような感覚だった。ようやく俺は全てに答えを出す覚悟を持たなければならぬ時が来たようだ。

右手に持った彼女の名刺をじっと見つめた。

名刺には彼女の名前と所属、電話番号などの情報が書かれていた。

本当なら今すぐにも連絡を入れたいところだったが、ぐつと堪えた。

残された時間は決して長くはない。

あと、二十日ほど。

雪ノ下だけじゃない。一色に対しても、当然結衣に対しても答えを出さなければならぬ。

とはいえ、仕事の問題も待ってこれているわけでもないのだ。まずはこの出張を乗り切らなければならぬ。

自席に着くと手元にあった出張の書類を取り出した。

日程の確認を行う。海外出張とはいえ、予定としては一つの開場で採用のイベントの運営を行うという内容のみだった。

この時の俺は出張など、大した問題でもないと考えていた。

そして、俺は思い知ることになる。

その旅路で後の人生と運命を左右する大きな再会が待ち受けることを。

第二部 完

第三部 第二十二話

「どうしたの？あまり食が進んでいないみたいだけど？」

結衣は心配そうに俺の顔を覗き込んだ。朝食にあまり口をつけていない夫の姿を見て、何かあったのではないかという気遣いだった。眼の前には目玉焼きと白ごはん、昨日の味噌汁といった一般的な家庭の食事が並んでいる。

何かあったかと聞かれれば同じことの繰り返しになるが、色々な出来事がありすぎてとつくの昔に脳がパンクしていた。

雪ノ下と最後に会ってから一週間が経過した。出向が終了し、彼女も会社に訪れなくなった。なので以来雪ノ下とは連絡は取っていなかった。不思議と一色からあの一件から目立ったアプローチは来ていない。昼食を芦間と一緒に食べて午後の業務に戻る。それだけだ。長らく続いていた俺の日常がようやくやく返ってきたのだ。だが、それは長くは続かない平穩であることは百も承知だった。

海外への出張は明後日に控えている。俺は未だに自分の中の答えを見出すことが出来ていない。

停滞した環境に不安が募る。何も起こらずただ、平和に暮らすこと（そんなでもってヒモになること）が目標だった俺がこんな感情を抱くようになるとは…。我ながら槍や隕石でも降ってくるのではないだろうかと思わされる。

こうして、一人の時間を持った時、いつも考えていたのは結衣のことだった。しかし、今はどうだろうか？

結衣のことは勿論大事に思っている。俺にとっての一番であることに嘘偽りは無い。

なのに、今、俺の頭の中に浮かんでくるのは雪ノ下や一色のことばかりだった。雪ノ下の儂げな後ろ姿、一色の艶めかしい横顔。それらが脳裏に焼き付いて離れない。

「ヒツキー、本当にどうしたの？」

結衣の俺に対する呼称が高校時代の呼び方に戻っていた。また、いつもの様に物思いに耽りすぎて眼の前の家内を蔑ろにしまっただけだ。また、いたらしい。

「…何でも無いぞ。朝食だって今日は美味しい」

「〃今日は〃ってダメな日があるの!？」

いかん。口が滑った。偶に地雷があることがバレてしまった。いや、今更か。

「…それも個性の内だ」

「全然フオローになってないんだけど!？」

結衣は口を膨らませた。どうやら拗ねてしまったらしい。経験上、こうなると暫くは口を聞いてもらえない。

「悪かったって結衣」

その言葉を聴いて結衣の表情が極端に怒気を含んだのが分かった。

「ねえ。それ、何に対して謝ってるの?」

「え? あ、いや、その…」

「あのさ。ヒツキー何か隠してない?」

「え?」

それは突然のことだった。結衣がおもむろに俺へ質問を切り出したのだ。

「もしかしてヒツキー。私が、今日のことだけで怒ってるって思ってるの?」

「どういう意味だ…?」

それが引き金となった。

結衣は興ざめたような顔を見ると、食器を持ち上げた。

「ううん、何でも無い。ごめん、今のは忘れて。」

そう告げると、結衣は静かに自分の食器だけを洗い始めた。

その背中は何も語ってはいなかった。

何も告げることは無い。そう突きつけられたようだった。

俺は黙って彼女の後ろ姿を眺めるだけだった。

どうしてこうなった。

本来であれば、伝えるべきなのだろう。彼女の存在を。

だが、言えなかった。

いや俺は言いたくなかったのだろうか。

自分の中の整理がつかないまま彼女に雪ノ下のことを言うべきでないという咄嗟の判断は果たして正しかったのだろうか。

それとも彼女は俺が雪ノ下と会ったことを既に把握しているのだろうか。

分からない。

考えたくもなかった。

何度も逃げたしくなるような衝動に駆られる。

しかし、その答えは遠からず出るのだ。

俺がその答えを出さなければならぬ。

だが、今の俺に出来ることは自身の食器を洗い、速やかに仕事場へ向かうことだけだった。スーツを来て出勤の準備を済ませる。返事が帰るはずもないリビングに向かって行ってきますの挨拶が木霊した。ドアを開けると、吹き抜ける風を肌寒く感じた。

「明後日は外国だな」

「…そうだな」

俺と芦間は二人並んで昼食を取っていた。俺はこの前芦間に貰ったからあげが美味しかったので唐揚げ定食を。芦間はトルコライスを食べていた。

「それ美味しいのか？」

「お？これか？結構イケるぞ。日本人好みの味付けだし、品目のラインナップも馴染み深い」

芦間はそう言うと、スプーンでデミグラスソースがたっぷりついたピラフを俺の定食のプレートに置いた。ハンバーグにかかっていたソースだ。箸でピラフを拾うのは午前中の激務を終えた身体にとって中々に骨だったが、なんとか食することが出来た。結構美味しい。

「比企谷、お前今日はいつにもまして元気が無いなあ」

「そう見えるか？」

「そう見えるなあっていうかそうにしか見えないぞ」

芦間の頬にはソースがベツタリと付いている。テーブルに束になつて置かれていた紙ナプキンを何枚か抜き取つて芦間に渡した。

「そんでえ。なにぐああつふあん？」

「拭きながら喋るなよ…」

「…よし、飲み込んだから大丈夫だ」

「しかも食いながらだったのか」

「じゃあ比企谷。先生に話してみなさい」

そう言うのと芦間は自分の前に置いてあつた食器を袖にどけた。ついでに何故か俺の食器まで反対側にやろうとしていた。いや、俺まだ、食べてるんですけど。

俺は観念して芦間に話すことにした。

「その、結衣に隠し事してるだろって今朝言われてな」

「大正解じゃないですか。奥様お見事。そして、貴方が悪いです。完」

「あ？」

「おいおい、冗談だって。本気になるなよ。隠し事してるのは本当なんだから」

芦間は両手を上げながら悪びれもなく飄々とした表情でこちらを見た。

「そりゃあそうだが。隠し事つたって誰にでもあるものだろう？」

自分が屁理屈を行っているのは重々承知しながらも芦間に同意を求めた。誰かに認めてもらえていないとどうにかなりそうだった。

「そりゃあ、そうだ。俺だって墓場に持つていく秘密の1つや2つ。現時点で12個もある」

「どんだけ、やらかしてんだお前…」

「失礼だな君は!?!別にやらかし関連の秘密だけじゃないぞ。まあやらかし伝説は全体の八割くらいだな」

「それはまた別に機会に聞くこととして…」

「え、話すの確定ですか？」

「ん？」

「え…？アツハイ。なんか話が逸れたから路線を戻すか」

芦間はもう一度紙ナプキンを取って口周りを拭きなおした。

「起きてしまったことはどうしようもないからなあ。それで、やらかしちゃった比企谷君は今後どうするつもりなのだい？」

「…まだ結衣には雪ノ下に会ったことを話していない。そろそろ話そうとは思ってる」

「話すって言ってもなあ。話したところで『で？』ってなるのが目に見える希ガス…」

「確かに…」

切り出し方や話す目的をきちんと説明出来なければ、寧ろ火に油を注ぐ結果にしかならない。

「そもそもなんで黙ってたんやつけ？」

「結衣と雪ノ下が昔は仲良かったのに最近折り返いが悪かったからだな。だからまずは俺と雪ノ下で話を纏めてから結衣と会うようにするつもりだった」

「もうくそういう建前の話は良いのよ。比企谷自身も雪ノ下さんと折り返い悪くてもう一回仲良くなりたいたって言ったからでしょ！雪ノ下さんが比企谷夫婦二人にとっても深い縁のある方だから慎重に事を進めましょうってことでしょ？」

「お前、そこまで分かっててなんで俺に言わせたんだ…」

「比企谷自身に口に出してもらわないといけないことだからだろ？」

「ぐ…。そ、それはそのとおりではあるが」

脳天気なふりしてしつかりと本質は突いてくるがまたやらしい。

「それだけじゃないだろ？奥さんと雪ノ下さんにもまたヨリを戻してもらいたいわって思っているから、こうしてまずは自分から雪ノ下さんにアプローチをかけているんじゃないか…って設定」

「おい、『設定』とは何だ。そこに関しては本心だわ」

「さて、それはさておき、話を続けよう」

「おい、それを置いておいたら完全に本末転倒じゃねーか」

芦間はどこ吹く風でトルコライスを豪快に食べ続けている。俺も

口ばかりが動いていて食器の上の料理が片付いていなかったの、前に習って一気に平らげた。

「それで、雪ノ下さんとお前の方はどうなってるの？」

こいつ、、、本当に俺が一番聞かれたくないことをズバズバ聞いてくる。どうもこうもそちらとも現在は疎遠な状態ですよ、はい。

「...まあ、それなりに連絡は取り合う関係にはなっている」

本当は全くそんなことはなかったが、雪ノ下とは全く縁がないという状態でもなかったのとお茶を濁した。順調ということにしておかないと話が拗れ過ぎて収集がつかなくなる。

「...そっか」

芦間は俺の中身の無い返答に妙に納得したらしい。それ以上は何も聞いてはこなかった。

「比企谷、お前完全に少年の顔になってるぞ」

「...どういう意味だ？」

「まあじきに分かりますよ。とりあえず今は出向の準備とかそっちの事に頭使つとけ。奥さんとの件は...うん、知らん」

「おい」

「家庭の事情に首を突っ込んでいけませんってお母さんに教えられたので僕ちゃんは答えられません」

芦間はそれ以上は何も答えず、そのままトレーを持って返却口へと向かって行った。

「...まあ俺の問題だよな」

トレーを持って立ち上がった。

時計を見ると休憩時間も残りあと僅かだったので急ぎ足で返却口へとトレーを返すと、オフィスへと戻った。

「あ、いたいた！おーい！比企谷君!!」

オフィスに戻る途中、俺は智佐吹さんに呼び止められた。いつもと変わらずオフィススーツを男よりも着こなした美麗な容姿で凜として立っている。

「どうしたんですか？」

「ねえねえ。明後日から出張じゃない？」

「出張…ですね。ってそれは智佐吹さんもじゃないですか」

「そうそうー…なので今夜は決起集会をやります！はい、決定！」

「それだけ言うとな彼女は意気揚々と退散した。俺の返事も待たずして、だ。」

「…はっ。」

俺は廊下のだ真ん中で呆然と立ち尽くしていた。

「どうやら今日という日はまだ俺をゆっくり休ませてはくれないらしい。」

続く

第二十三話

「それでは、北米大陸での出張の安全と成功を祈願しまして…：かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「…」

眼の前で智佐吹さんと一色が今日の疲れを一気に吹き飛ばすが如くジョッキを合わせると景気の良い音が響き渡った。二人して良い飲みっぷりだ。男性も顔負けの豪快さ。

…うん、どうしてこうなった。

俺達は、会社のある駅から三駅ほど離れた場所にあるバーにいた。智佐吹さんが仕事終わりに一人で飲む時によく使う店とのことでマスターともよく知った仲らしい。店内の雰囲気は暗い空間を暖色のライトがぼんやりと照らしている。席はカウンターが8席ほどでテーブルが3つの程よい面積だった。

智佐吹さんが用意していた席はカウンターの端だった。マスターの後ろに並ぶ瓶のラベルを見るにかなりの高級品やマニアが好むブランドもある…：らしいが俺はあまり酒を飲まないのでそこら辺の話題になつてしまうと全く分からない。

…いや、それはともかく決起集会だというのに何故このメンツなんだ…？

「あの、智佐吹さん。決起集会なのに、人事の島田さんと芦間は何処行つたんですか？」

状況だけ見れば半数欠席なんですけどそれは…：。というか、なんで一色が居るんだ。こいつアメリカ行かねーだろ！ビルの一階集合って言われて場所に向かったら普通に一色が居た。というか、この前の一件以来、実はロクに会話もしていなかったもので、非常に気まずい。正直顔も合わせられない。

智佐吹さんを待っている間、一色は普段と変わらぬ様子だった。俺は他愛のない会話で一色との場を繋いでいた。彼女は時に俺をからかい時にあざとく振る舞う。それは俺がよく知る一色いろはだった。

だが、その存在が嫌に不気味に感じた。

智佐吹さんが現れたのはその時だった。正直救われたという気持ちが大きかった。

そして現在に至るわけだ。席順は俺が女性二人にサンドイツチされるという本来であれば男にとつて喜ばしいシチュエーションではあるのだが、素直に喜べない。何だこの名状し難い圧迫感は…。

「ん？島田さんは当然のように残業なので誘ってないよ。トシは断られた」

あの野郎…。こうなることを分かかって、わざと来なかったな。あいつのほくそ笑む顔が鮮明に目に浮かぶわ。恨めしい。

「それで、どうして一色が…」

「あれ？先輩もしかして忘れちゃったんですか？」

一色が俺を咎めるように睨みつけた。

「何のことだよ？」

「だいぶ前の話ですけど、私言いましたよね？先輩が出向に行く時に『埋め合わせして下さい』って」

「そんなこと言ってたか？…って痛い！」

「先輩…女の子との約束を覚えていないなんてゴミを通り越してクズ以下ですよ？」

有無を言わせない後輩の剣幕に圧倒された俺は素直に首肯するか道は残されていなかった。一色は自分が持っているジョッキをグリグリと俺の頬に押し付けている。冷たいんですけど…。

「それがなんでこのタイミングなんだ？」

「先輩出張から帰ってきたら絶対忘れているだろうなあって思ったからです。なので、智佐吹さんに事情を話してセッティングしてもらいました。まあどつかの誰かさんは、とっくの昔にその約束を記憶の彼方に追いやってしまったらしいですけどね、ふん！」

脇腹を抓られた。彼女の毒が先程からいつにも増して異様に濃い。智佐吹さんに助けを求めるように反対側を見るがどういうわけか彼女の表情も優れなかった。…というよりは彼女の視線からも敵意を感じる。え、なんで？

「まさか、比企谷君。私との約束も忘れたわけじゃないでしょうね?」
「え?」

「ほう…?」

そう言えばあの夜一色に会った時、仕事場で残業をお願いされて『今度別の形で返すので許して下さい』とかそんな事言った気がする。
「残業の埋め合わせってことですか?」

「お?きちんと覚えていてくれたんだ!嬉しいなあ。いろはちゃんの
は覚えていなくて、わ・た・しのは覚えていてくれたんだね!」

上司の機嫌がすこぶる良くなった。それ自体は喜ばしいことなの
かもしれないが、片や、いろは嬢は今にも刀を抜こうとしていらっ
しやる程に殺気が湯水のごとく溢れていらっしやる。飛●御剣流奥
義とか平気で繰り出しそう。抜刀斎の頃の。逆刃刀じゃないやつ。

「ねえ、先輩。やっぱり先輩って年上のお姉さんみたいな人が好きな
んですか?」

一色が抑揚のない平淡な声で問いかける。全身から血の気が引い
ていった。死神の声かな。もし今、健康診断されたら緊急入院必至
だ。

「比企谷君…君って人は、奥さんが居ながら私にも手を出そうとい
うの…?」

言葉とは裏腹に智佐吹さんはやけに嬉しそうだ。短めのタイトな
スカートから覗かせる肉付きの良い太腿が扇状的な魅力を放ってい
る。

「先輩、よくよく考えたら平塚先生のこと好きでしたよね?そう考え
たら昔から年上好きの気はあつたのかも…」

「その名前を出さないでもらえませんかね…」

「ん?いろはちゃん、その先生って誰?」

この時点で俺は面倒な方向に話が流れることを覚悟した。

どういった話になったかと言うのは言うまでもないだろう。平塚
先生と智佐吹さんが似ているということ。俺が平塚先生の性格や容
姿がもの凄く好みだったということ。(十年早く生まれていて、十年
早く会えていたら心底惚れていたという話はしていない。その話は

墓場まで持つていくつもりだ）それらの話が事細やかに一色の口から上司に伝わってしまった。その間、智佐吹さんというと終始破顔した状態で一色の話に耳を傾けていた。自分が平塚先生と似ているということに喜びを感じる人が存在するとは……。だつてアレだよ？平塚先生に似ているということは、独しn…急に謎の寒気に襲われたのでこれ以上言及することは止めておこう。俺の命の安全のためにも。「…というわけなんですよ☆」

「うふふ。それはとてもいいことを聞いたわね…。ぐへへ…ざまあみろ、真紀の奴…」

智佐吹さんが魔女のようなドスの利いた声を漏らしていた。その口調があまりにも不気味だったので知らないふりをしていた方が身のためではないのかと思えるほどだった。

「あ、あの大丈夫ですか？」

若干どころか相当引いている一色に変わって俺が智佐吹さんの様子を探ることにした。

「え…？どうしたの比企谷君？別に私は何も問題ないよ」

彼女はいつもと変わらない爛漫な声で答えた。杞憂だったのだろうか。というか、この人平塚先生と同じでいきなり変なスイッチが入ることがあるから、正直俺からしてみれば別段珍しくもないんだけどな。一色はこの人のこういう一面はあまり見ることがなかったから困惑したのかもしれない。

二人の女性に挟まれていることに落ち着きを隠せなかったこともあつてそちらの処理に脳のプロセスを割いていたが、ようやく周りを見渡せるほどには平静を取り戻した。

入店した当初とは打って変わって客層が男女二人組ばかりになっている。彼ら、彼女らの中でどういった駆け引きが行われているのかということには心底興味が無いのだが、その逆はあるのだろう。先程から他の客たちの視線をかなり感じる。当然だろう。冴えない男が女性二人を両脇に引き連れてこんなバーに入ってるのだから。加えて両脇の二人が飛んだ美人とくれば尚更か。しかし、俺がどうしてこうなったのかと一番嘆きたいのだから彼らの疑問を解消できるほど

の答えなど用意できるはずもない。

「一週間か」

「うーん、一週間も先輩に会えないとなると流石に寂しいですね。渡航先で女性作っちゃダメですよ先輩？」

「一週間で出来るわけ無いだろ…。ましてや向こうに行ったとしても仕事してるだけだわ」

「心配ないよ、いろはちゃん。比企谷くんには私がしっかり付いているから」

智佐吹さんがえへんと背筋を伸ばして胸を張った。大きな女性の象徴に目が行くのはニユートン先生のせいだとそれ何百年も昔に言われていることだからな。未だに帰宅した時に結衣の胸に目が行ってしまうし。

「それが、心配なんですよねえ…」

一色の表情は曇っていた。そういえば、この二人って初めて会った時からあまり馬が合わないように見える。俺がどうしてこの二人と一緒に飲んでいるのだろうかと疑問に思った原因の一つがそれだった。智佐吹さんが苦手という人は多くはないのだが、珍しく一色はそのうちの一人だった。

「しっかり付いているって言ったってそんなに四六時中一緒ってわけでもないでしょうに」

「そうね。でもホテルの部屋は私と比企谷くんです一つの部屋を使うことになっているし、業務中は勿論面接の時以外は一緒だと思うから結構な時間を私と過ごすことになると思うけど？」

「ぶぼツ？」

俺と一色が同時に吹き出した。今飲んでいる環境が環境なだけに非常にマナーの悪い行為だ。取り繕うように場を整えながら上司を見た。

「ちよちよちよちよつと!? 本当に何言っちゃってるんですか正気ですかもしかして先輩に脅迫されているんですか今すぐ通報しましょうそして然るべきところに先輩を突き出して先輩に裁きの鉄槌が下されて贖罪の獄中生活を終えて出所した暁には私が一生面倒見ますか

ら！」

「おい待て一色。途中から色々とおかしい。あと長い」

「まあ、冗談なんだけどね」

「で、デスヨネー…」

一瞬本気で考えてしまった。でも、悪くはなかった。

「もー！体に良くない冗談はダメですよ！智佐吹さん…」

「ふふふ…」

智佐吹さんはさっぱりとしたとした表情だった。俺や一色の狼狽っぷりに満足したのかマティーニを飲みながら一人、優雅に過ごしている。同じ机で酒を飲んでいるはずが、片や、俺達はあっけらかんとした表情をしている。

それにしても智佐吹さんもう三杯目じゃないか？こんな大人のバーで一杯目がまさかの生でその次が、マルガリータだった気がする。一色はレッドアイを飲み終えてカシスオレンジをゆっくり飲んでいる。因みに俺は一杯目のカルーアミルクだ。しかもまだ半分も飲んでいない。いい加減氷が溶けそうだが、大体飲みとなるとこうなるから、元より全く気にしていない。

「どうしたの、比企谷君？あまりグラスが進んでいないようだけど？」
そう言うと智佐吹さんは俺の腕に自分の腕を絡めてきた。そして身体を俺に預けるようにしてもたれ掛かる。甘い香りが鼻孔を貫いた。一色や雪ノ下、結衣とも異なる妖艶な色香に抵抗が無かった俺は一瞬にして陥落しそうになる。というか結衣と同等、否それ以上に豊かな彼女の胸が俺の腕に当たって形が変わっている。というか俺の腕が埋没している。

「顔が赤いよ。もしかして一杯目で酔っちゃったの？」

「…いつも自分はこれくらいのペースですよ。そんなに酒は強くない方なんで」

智佐吹さんはわざと胸の感触を伝えるように身体をよじらせてきた。その度に俺だけに聴こえるように甘い声出すの止めてもらえませんかねえ…。

この人酒が入ってからキャラが変わり過ぎじゃないか？それとも

こつちが本性か。

ものすごく酒癖が悪いと言うか人が変わるなあ。

ネットで見た言葉を借りるのであれば「酒が人を駄目にするのではない。酒が駄目な人間であることを暴くのだ」というべきか。まあ俺は今の智佐吹さんの方が普段の時よりも百倍好きなんですけどね。エロいから。

「先輩、飲んだとしても毎回一杯か二杯くらいですよね。もうちよつと飲んでもらって酔っ払った先輩の動画でも撮って脅迫材料を確保出来たら良いのに」

「さらつとんでもないこと言うもんじゃないぞ」

「あ、でも今の様子でも撮影して結衣さんに送っちゃおうかなあ〜…」
「殺す気か」

「今の先輩はいっぺん地獄見てくるべきだと思います」

一色が鬼のような形相をしていた。直ぐに離れろと言いたげな表情だが、今の俺にそんな理性も決断力も無かった。酒とフェロモンに思考を完全に奪われている。さつきからずつと腕を抓られていた。いや、仰らなくとも分かるんですけどね、そろそろ痣になりそうだから勘弁してください。あと、智佐吹さんの胸超柔らかい。

「あら？脅迫出来る情報が欲しいのであれば私に言ってくれば幾らでも売ってあげるよ、いろはちゃん」

「ホントですか!?!しょうがない…ここは敵だけど、一つ手を組むとしましよう」

当の本人の目の前で黒い契約が堂々と交わされていた。二人は昨日の敵は今日の友と言わんばかりの力強い握手をしている。何処から突っ込めば良いものか開いた口が塞がらなかつた。それよりもまず、俺の秘密を業者の様に抱えているように言っていた上司を問い詰める必要があるそうさ。出張の合間に聞き出して情報源を潰しておかねばならない。

「あ、そうさ先輩」

「何だ？」

一色に話しかけられると未だに心臓が跳ね上がってしまう。この

前の出来事を思い出して、顔が熱くなる。

横目で一色に目をやった。

それに合わせて一色が腕を組んできた。そのまま頭を肩に預けるようにして寄りかかった。

「この前の続き、ここでもしませんか？」

耳元で悪魔のような甘い囁きが聴こえた。俺の身体は節操もなく一色の誘惑に流され始めている。

「な…!? いろはちゃん!？」

俺以上に動揺していたのは智佐吹さんだった。一色も見せつけられたことに対する意趣返しなのか、他の人がいる前でここまで積極的になったのは見たことがない。とはいえ、効果は抜群。いつもは凜としている上司がオロオロしていた。

「い、い、い、いろはちゃん? こ、こ、こ、この前の続きって何かな?」

「さうて、何でしょう? ☆」

「くっ… 貴方も意外に根に持つタイプなのね…」

「陰湿さなら智佐吹さんとタメ張れそうですね♪」

ちよつと。言い争う度に腕を締めないで。うっ血して腕の間隔が無くなりそうだから。

「まあ、いいけど。明後日から比企谷くんは私が独り占めできるのでから」

智佐吹さんが勝ち誇ったような表情で一色を下に見ている。一色も周りからは分からないように奥歯をギリツと噛み締めながら笑顔を作るので精一杯だった。正面のマスターは素知らぬ顔でグラスを拭いている。その優しき、逆に刺さります。助けて。

「チツ…。先輩、出張中は毎晩私に電話して下さい」

え、ちよつと一色さん。舌打ちしませんでした? 気のせいだよね? なんかこいつもこいつで酒が入って人が変わってない?

「いや、結衣に電話するならまだしも、なんでお前に電話しないといけないんだ…?」

その一言が引き金になった。一色の目からハイライトが消えたよ

うに目に光を失った。その時だった。

「ふーん、そういう事言うんですね。私とキスしたの結衣さんにバラスますよ?..」

耳元で一色が囁く。デビルいろはすが降臨なすった。

「そ、それだけは勘弁してください!..」

「!..:もう。冗談ですよ」

この場で土下座をしようとしたその時に一色に止められた。

「本当、毎回それを材料に脅してくるの止めてもらえませんかね!..」

「それは先輩のこれからのあり方次第です!..」

「難しいこと言ってくれる」

「二人つて本当に仲がいいよね。学生時代の時からずっとそうだったの?..」

「いいえ、第一印象はお互い最悪でしたよ」

「私もこの人だけは絶対にありえないって思っていましたね」

「え、俺そのレベルまで最悪の印象だったの?..」

「そりゃあ、ね。目が腐ってるし、捻くれてるし、そんなに顔もカッコ良くないし」

「ぐ!..悪かったな」

「でも今は先輩に心底惚れてますよ!..」

そう言うで一色はウインクをしながら得意のあざといポーズを決める。

「そ、そうか!..」

「いろはちゃんって凄いいね!..。そうやって本気で既婚者の男の人を堂々と奪いに行く表明しちゃってるんだもん」

その言葉を聴いた一色が怪訝な顔をした。

「智佐吹さんも言っちゃえばいいのに。その方が楽になりますよ?..」

「な!..?」

「え、智佐吹さんも既婚者ねら!..。ぐふ」

「先輩はお口チャックしてくださいね!..☆」

一色に横腹を突かれた。痛い。もう少し年上を敬って欲しい。

「そ、そんな事言われても!..。私、仕事で距離が近すぎるから逆に無理

だよお〜…」

この人酒が入ると幼児化するタイプなのか、すっかり口調が俺や一色よりも随分と年下のように見えてしまう。

「ふふふ。私もそう思っていた時期がありました。ですが、今はこうして先輩が私のことを徐々に女性として意識するまでに籠絡させつつあります。私なんて実は最初はマイナスから攻略が始まってますからね。ネバーギブアップですよ！」

「そ、そうかなあ」

この二人は何を話しているんだ？

「い、いろはちゃん。否、いろは師匠！その極意、教えていただいてもよろしいでしょうか!？」

智佐吹さんが突如立ち上がった一色に向き直った。

「良いでしょう！同じ志を持つ者同士、語り合いましょう！」

一色も同じく立ち上がり俺の頭上で固い握手が交わされた。何だこれ。

「そうと決まれば二次会だね！ごめんね比企谷君。今しがたのつぴきならぬ事情が出来てしまったよ。これからいろはちゃんと重大な会議をおこなうことになっちゃったから。そしてこの会議は君が居ると始まらない」

「え」

「そういうわけです！この会議は先輩が居たら駄目ですからね。今日は先輩は早く帰って出張の準備もして下さい」

それだけ言い残すと智佐吹さんが目にも留まらぬ手付きで会計を済ませると、二人は次なる目的地を目指し、夜の街へと消えて行った。

…いや、この後どうすんのよ。

「…マスター。これ（カルーアミルク）にあうおつまみってありますか？」

翌朝、会社のビルの入口で玉木さんに会った。まだ一色は来ていないらしい。相変わらず玉木さんは会社の人気者たる所以をいかな

く見せつけている。眩しいくらいに美しい艶姿だった。オフィススーツ着てるだけで艶姿と形容するのもどうかとは思うがそれ程までに妖艶という表現意外に適切な言葉を自分の脳内の辞書を隈なく引いたところで見つからなかった。貧相なボキャブラリーで表現するのであればもうただエロいの一言に尽きる。

「おはよう、比企谷くん。何だか君と話すのも久しぶりだね」

「そうですね。ほとんど毎日挨拶をしているはずですが、あまりこうして落ち着いて話すことも最近は無かったからかもしれないです」

「そうかも。私としては比企谷くんと話せるのは嬉しいんだけど、比企谷くんは何だか機嫌が良くなさそうだね…」

「…そう見えますか？」

「うん。それに君が私と話す時つてね、良くないことが起こって他の人には話しづらい雰囲気の時が多いから」

「…ほんと敵わないですね」

正直寒気がした。この人の観察眼は人を恐怖に陥れる凄みがある。それもその通りで、相変わらず俺は結衣とまともに話せていない。

「今度、話聞こつか？私で良ければだけど」

「玉木さんが男を誘うなんて今年一番のニュースかもしれませんね」

「そうかも…私いっつも誘われる側だからね」

憎たらしいまでの自信に満ちた発言も彼女であれば許される。しかし、俺はその誘い乗る気分にはなれなかった。

「魅力的なお誘いではありませんが、今回は遠慮しておきます。でも気持ちが悪くなりました。ありがとうございます」

「そっか、うん。分かった」

頭を深々と下げて丁重に断った。玉木さんは予想していたのか、気にしていないような様子に見える。「これでも結構シヨックなんだからね」と付け加えていた。智佐吹さんや結衣を遥かに凌駕するほどの豊満な身体にまとまった茶髪が幼さと妖艶さを混在させた色香を放っていた。俺だって、こんな時じゃなければ間違いない彼女の誘惑に流されていたに違いない。だって、ダントツにエロいもんこの人。「でも、昨日はちーちゃんのお食事のお誘いには付き合っただよね？」

不意に毒を吐かれた。どうやら素直に通してはくれないらしい。

「ど…どうしてそれを」

「昨日はすごい機嫌良さそうに会社を出たから、あー比企谷くんを誘って成功したんだな〜って」

「…そうですか」

この人の洞察力は一体何なのだろうか。というか、会社の噂話を一色が何処で仕入れて来るのかが今分かった気がする。絶対この人だ。女の勘で全部悟り妖怪のように把握していたに違いない。

「というか、ちーちゃんって智佐吹さんのことですか？昔からの仲って噂は本当だったんですね」

「え!?!疑われていたの!?!同じ大学だし、結構遊ぶ仲だったんだよ。二人で大学の高嶺の花を務めていたんだからね。まあ私もちーちゃんも全く男と遊ばなすぎで百合説が流れてただけだよ」

玉木さんは即座に肯定した。それにしても百合説か。その二人の百合ならそれはそれでとても見たいと思うのは俺だけではないだろう。

「別に私で妄想するのは比企谷くんだったら大歓迎なんだけど、ちーちゃんとは友達だからね?」

「わ、分かってますよ…?」

もう脳内に直接とかそういう次元の洞察力ではなかった。マイ●ドスキャンだこれは。

「比企谷くん、ちーちゃんのことよろしく頼むね。出張って聞いてびっくりしたよ。あの子方向音痴なのよ。だから心配で…。それに、」

「はい、分かりました」

「ううん、君は分かってないよ」

玉木さんが言下に否定した。

「どういうことですか…?」

そう聞くと、玉木さんがこちらに来るように手を招いていた。オフィスに入りかけていたが、もう一度受付カウンターに戻った。

玉木さんが顔を近づけてきた。あ、すごくいい匂い。いやいや、そ

うではない。

「ねえ、比企谷くん」

「…はい、何でしょうか」

「私は、君のことも心配してるんだよ？それを分かってない」

「…すみません」

「いいよ。でも今は違う言葉が欲しいかな」

「…ありがとうございます」

「よろしい。じゃあちーちゃんをよろしくね」

玉木さんは俺の鼻の先を小突くとオフィスに戻るようにそつと肩を押した。オフィスに入る時もう一度彼女の方を振り返ると、彼女もこちらを見ていた。手を振っていたので一度だけ返した。やばい。すぐく気持ち悪いニヤケ顔をしているだろうから早く忘れて中に入ろう。

中に入ると、丁度目の前に人が立っていた。下を向いていたため、顔は見えていなかった。「すみません」と挨拶をかけると相手の女性はひどく狼狽した様子だ。

不思議に思い、顔を上げた。相手は件の女性だった。

「お、おはよう。比企谷君」

「お、おはようございます。智佐吹さん。昨日は、ご馳走様でした」

「うん。先輩として当然だよ、あと昨日はごめんね。滅茶苦茶お酒が回ってたよ」

「結構昨日の酒が残ってますか？顔色が優れないようですが」

「そうだね…羽目外して飲みすぎちゃった…」

「一色に連れ回されたんですか？あいつ結構強いから」

「うん、、、いろはちゃん凄にお酒強いなだね。ありゃあ男が酒に頼って連れ込もうとしても無理だわ。男が潰れるよ」

「笑えない冗談ですネ…」

酒豪いろはす。普段は好き好んで飲むわけではないらしいが。

「それで、昨日は一色と話は纏まったんですか？」

「あ、そのことなんだけどね…比企谷君ってさ。私のことどう思ってる？」

「突然ですね。とてもいい上司だと思っています。部下のこともよく見ているし、仕事も正確で早いですし」

「なんか言わせてる感が半端ないんだけど、私が欲しい言葉はそれじゃないんだよなあ…」

智佐吹さんはやっぱりかと言うような面持ちだった。

「ねえ、比企谷くん。昨日さ、いろはちゃんが言ったこと覚えてる？」

「ま、まあそうですね」

この人が既婚者狙いだって話か。正直意外だったな。この人がまさかと思った。

「その人って誰だと思う？」

「え、ここでクイズですか？皆目検討がつかないんですけど自分が知っている人ですか？」

「えく…これ超サービス問題にしたつもりなんだけど。まあいいや。じゃあヒント教えてあげるから耳貸して」

「あ、はい。分かりました…」

俺は耳をすませて彼女の言葉を待った。

「……………」

…………え？

「ふふふ。さて、今日も仕事が溜まってるとよ。出張前とはいえ、残業も覚悟しておいてね、比企谷君！」

そう元気な声で告げると、彼女は持ち場へと足取り軽く戻っていった。

続く

第二十四話☆

「これで全部か…」

スーツケースに着替えと資料。お土産を入れるためのポストンバッグ。常備薬。必要なものを詰め込んでいった。海外なんて経験ないからどうしたら良いものか…。初めての海外旅行という感じで内心高揚しているのは否めないが、流石に行楽一辺倒というのは叶わぬ願いだ。和室には取捨選択の残骸が散乱していた。準備よりこの部屋の片付けの方に時間が取られそうだな…。

海外渡航における手続きは完全に上司任せになっていた。右も左も分からない状態を見かねて芦間が丁寧に教えてくれたので助かった。

ふと視線を感じたので後ろを振り返ると襖の端から結衣が顔をのぞかせていた。さながら片思いの女子だった。

「……………」

結衣は何も言わずただじっとこちらを見ていた。ここ二日間は目も合わせようとせずこちらを避けていたので、この反応を見るに多少は関係は回復していると捉えても良いのだろうか。しかしながら、こうも人の視線に晒され続けるのはいくら妻と言えども息苦しさを感じてしまう。

「…あの、な、結衣」

「うえ?! な、なに?! べ、別に見てないし!」

いや、すごい見てただろお前…。何を今更と思ったが、あくまで俺が自発的に話しかけてきたという形を取りたいのだろう。彼女の機嫌を損ねないためにもそれに乗るしかない。

「お土産、なにか欲しいものとかあるか?」

「え?」

「ほ、ほら。あんまり海外って行かないだろ?何か記念にどうかな?」

そう言うと結衣は目を丸くした。

「う、うん！じゃあ、キーホルダーとか…がいいかな。八幡とおそろいとか、ペアのが良い」

もじもじと手を弄びながら返事を返してくれた。まだぎこちないが、それでも俺にとつては嬉しかった。

荷物の最終確認も済んだ。明日も早いのでそろそろ寝ないとやばい。

「ねえ、八幡」

ふと結衣が後ろから抱きしめた。久しぶりに感じる愛妻の温もりにもだえる。が、それよりも驚きのほうが大きかった。

「どうしたんだ？」

彼女は震えていた。嗚咽が漏れる音も聴こえている。もしかして、泣いているのか？

「結衣…？」

「…抱いて」

結衣は俺から離れるとそのままパジャマのボタンを外し始めた。間もなくして、彼女の豊かな胸が露わになる。ズボンを下ろし、眼前に恥丘が広がった。彼女の性器は既に洪水のように濡れていた。クロツチの色が変色し、淫猥なフェロモンを拡散している。

どうしてこんなにも彼女の言葉は俺の理性をたつた一言で崩壊させることが出来るのだろうか。気がついた時には生まれたままの姿で俺に跨がり、淫らにより狂う彼女の腰を掴んでいた。

彼女の重さ、感触、声。その全てが愛おしく、欲望の糧となる。硬直した愚息をしきりに打ち付けた。結衣はこれ以上ない程にたまらない声で啼いた。それがまた聴きたくて、もつと腰を振る。また結衣は啼いた。永遠と繰り返しても飽きない遊戯だ。嬌声と柔壁の律動が伝わると、たちまち精液を噴出しそうになる。

俺は出来る限り果ててしまうのを堪えた。彼女が満足した後も犯すつもりだったからだ。

結衣が6回目の絶頂を迎えた。俺の経験上、大体これくらいになると結衣が意識を失い始める。それを見計らって体勢を入れ替えると、後ろから覆いかぶさるようにして彼女の肢体を固定した。そのまま、

一定のリズムを保ちつつ深奥部を突き上げていった。結衣は獣のよ
うな声を上げてけたたましく喘いでいる。おそらく、自我は五分ほど
前に喪失しているだろう。快楽を享受し、男を迎え入れることにのみ
脳の処理がなされているはずだ。おとがいを上げて女性の象徴を揺
らす妻を陵辱し続ける悦びをゆつくりと賞翫していった。

思えば一ヶ月以上ぶりの逢瀬だった。肉棒が肉癖を押し分けて侵
攻する度に柔らかな感触が肉棒を優しく包み込み、射精を促してい
る。我慢しながら、適度に空打ちを繰り返していたが、既に4回は出
していた。しかし、一向に俺の硬直は収まるところを知らないらし
い。駅弁や、対面座位、他にも少々アブノーマルな体位も試した。分
かったことはどんな体位でも結衣の膣内は最高だということだった。

彼女の10回目の絶頂で、結衣がペニスを抜き取った。そして、こ
ちらに向き直って激しい接吻を交わした。

『ヒツキーがないと嫌だよ…』微かにそう聴こえた。俺は結衣の胸
にむしゃぶりついた。結衣は後頭部を撫でながら足を腰に回してし
がみついた。結衣の上へのしかかりながら俺もクライマックスへと
上り詰めていった。

愛する妻の泣き叫ぶような嬌声と最高の身体を記憶に焼き付ける。
互いの肉体の感触を刻むように腰を動かした。

行為を終えた時、結衣は体液にまみれたあられもない肉体へと変貌
していた。濃厚な精液が節操もなく彼女の身体をくまなく汚してい
る。膣内に放った精液が濃厚な粘性を帯びて漏れ出ている。俺もま
た彼女の愛液でべっとりだった。

波打ち際に打ち上げられた二頭の動物が一体となって虚無と快楽
を飽食した。

無心になった心で考えた。彼女の言葉を今一度反芻する。

結衣は寂しかったのだろうか。傍らで眠る彼女の寝顔はとても安
心しきったようだった。ようやく気がついたが、ここ最近の俺は彼女
に全く構ってあげられていなかった。仕事や人間関係にかまけて彼

女を気遣う時間も無かった。本来であれば最も優先すべき女性を蔑ろにしてしまったことをひどく後悔した。夫としてこれほど失格なことはない。眠る彼女の身体を抱きしめた。「放ってしまつてすまない」と囁くと彼女はか弱い力でそつと抱き返してくれた。

朝になつてシャワーを浴びた後、ようやく荷物を詰め込んだ。俺は一糸まとわぬ妻にキスを落とすとした。結衣はまだ気持ちよさそうに眠っている。起こすのも申しわけない。そつと出ていこうと玄関で靴を履いている途中、リビングの奥から小さな声で『行つてらっしやい』と聞こえた気がした。

彼女にも聴こえるように『行つてくる』と返し、ドアを開けて空港へと向かった。

続く

第二十五話

空港は多くの利用客で賑わっていた。数百メートルもの長さがあるチェックインカウンターに数多の航空会社が整列し、乗客の荷物を預かっている。チェックインカウンターの後ろに鎮座する長いベルトコンベアに乗客の荷物が次々と乗せられていた。流石、海外への玄関口といったところか。場内アナウンスがひっきりなしに流れていた。待合椅子には両親のチェックインの手続きの終わりを待っている子どもたちがゲームをしながら待っている。そういえば、運の悪いことに日本の旅行シーズンと今回の出張が被っていた。場内にある電光掲示板にはまだ俺達が乗る航空便は表示されていなかった。大事を取って早めに集合場所に入ったが、どうやら早く着きすぎってしまったようだ。最近では飛行機には搭乗しないが、空港内部の売店やイルミネーションを鑑賞する目的で空港を楽しむ人も多いと聞いた。空港探検もしてみたかったが、まずは集合場所の確認を優先した。

「おう、来たか」

既に芦間が居た。一番最初かと思っていたが違ったか。

格好を見て芦間は渡航慣れしているのがすぐ分かった。背負えるタイプの黒いビジネスバッグに、一週間の宿泊分にはちょうどよいサイズの灰色のスーツケースに旅行先で購入したであろうステッカーがびっしりと張り付いていた。こいつはこういった趣味が無いと思っていたので少々意外だった。

「お前って結構旅行するのな」

「いんや、シール集めが好きなだけで旅行行ってないぞ。コレは面白いと思ったシールをただヴィレヴァンで買い集めるって趣味の名残だな。そもそも留学していて海外にずっと居たからさ、あんまりそれ以上どっかに渡航する気分になれなかったわ」

「そ、そうか」

なんて紛らわしい。てか、こいつが留学経験あったの忘れそうになる。未だに芦間が流暢な英語を話す姿を想像できないわ。

「ヴィレヴァンはいいぞ。面白いものがいっぱいあるから」

「俺もよく行くから分かる。基本的には本しか見ないが」

「結構変わった本があるよな、あそこって。旅行記だけの棚とか、古典だけの棚とか」

芦間はスーツを脇に抱えながら、あたりを見渡していた。ちょうど視線の先に人事の島田さんと智佐吹さんの姿が目に入った。二人共、ビジネスレベルのドレスコードをしっかりと遵守した正装でやって来た。まあ、このイベントにドレスコードもへったくれもないのだが。

「おはよう！早いねえ〜トシも比企谷君も」

「お二方も随分とお早いですね。まだ30分もありますよ」

芦間が陽気な声で二人を迎えた。

「いや、流石に上司が一番遅いのもどうかと思ったからさ。でも、君らど真面目だからそんな気遣いも水泡に帰したところってわけ」

智佐吹さんがむくれたような顔をした。

「そりゃあ申し訳ないことを」

「まあそこにまで気を払われるのもどうかとは思ってから全然構わないよ。じゃあ、先にひとまずチェックインしちゃいますか」

「早く着きすぎたので受付にもう少し待ってってくれて言われるかもしれないですね」

「とりあえず聞いてきましょう。私が行ってきますよ」

そういうと人事の島田さんがチェックインカウンターに向かった。こういうのは下っ端である俺や芦間がやるべきなのだろうが、島田さんが割と何でも自分でやりたがるタイプだったので、静観した。最近ではカウンター前にある機械でチェックインと航空券の発行を行って荷物預かりだけカウンターで行う航空会社も少なくない。俺たちが搭乗する航空機の会社も多分に漏れずその一例の一つだった。

「昨日は良く眠れたかな？」

ふと隣に智佐吹さんが居た。他愛のない会話にもなにか含みがあるのではないかと警戒してしまう。思わず身を引きそうになったが、芦間に妙な勘ぐりをされたくなかったので、そのまま聴いていた。

「生憎とよく眠れませんでしたね。いかんせん、妻が激しかったもの

ですから」

本来であれば避けるべき話題だが、あえて牽制の意も込めてそのまま事実を伝えた。智佐吹さんは一瞬目を丸くするも直ぐに元の調子に戻った。

「そっか、なら飛行機の中でぐっすり眠ると良いよ。因みに隣、私だけどね♡」

そう言うと、智佐吹さんは俺の胸を人差し指で小突いた。くりくりと乳首の先を狙ってこね回すように指をなぞらせている。彼女は全然堪えてなかった。寧ろ、闘争心に火を点けてしまったようだ。もし俺が寝ようものなら何かしでかす気満々だ。寝首を搔かれるかもしれない。一瞬たりとも気を休める時が無さそう。早くもお先真っ暗である。

搭乗口の椅子で待っていると一色から電話があった。そう言えば智佐吹さんと三人で飲んで以来、あいつに何も連絡せずただ黙って空港まで来てしまっていた。うーん、出たくない。絶対あいつ怒ってる。いろはす激おこぷんぷん丸。

しかし、放置なんてのは言語道断の極み。事を荒立てる結果にしかならない。なので仕方なく場所を離れて、彼女の着信に対応した。

「おう、どうした?」

『どうしたじゃないでしょう!?!なんで電話してくれないんですか!』

もう既に世紀末でした。いろはす最終形態なう。

「いや、あの。ほんとすいません。色々立て込んでまして…」

『もう!それはこつちだつて分かってるんですよ!だけど電話して欲しかったんです!』

なんと身勝手な。今に始まった話でもないが。

『向こう一週間くらい会えなくなっちゃうんですから、その前に一回くらい連絡下さいよ…。私だつて、寂しいんですよ…。』

一転、一色は泣きそうな声色になっていた。もう、女の子って難しい。というよりは卑怯だろ…。

「…悪かった」

『そ、そんなに謝らなくても…。そりゃあ、私だつて、すぐくわがまま

な事言っている自覚はあるんですよ？でも、先輩が心配なんです』

「そのことだが、この前、智佐吹さんと何話したんだ？」

率直な疑問を一色に伝えてみた。

『え、あの人から聞いてないんですか？智佐吹さん、先輩に告白したって言っていましたよ。昨日LINE来ましたから私に』

貴方達、いつの間に連絡先交換していたのね。仲良くなったから交換しましたって感じでは全く無さそうだけでも。というかそんなことまで連絡し合っているのか。

「いや、まあ。そうだな。それはそうなんだが、他に何か話したのかと思っただな…」

『と言われても、他には特に何も話してないんですよ。ただ、二人同じ目的同士、協力して先輩を陥落させてやろうって結託しただけです』

それは大事なんですけど。何か話がやばい方向に…。

『先輩、智佐吹さんには気をつけてくださいね。あの人この出張中に先輩の事寝取る気ですよ』

「それ聞いて、どうしろっていうんだ!？」

『理性を強く保って下さい！雪乃さんならともかく、あの人に先越されるのは絶対に嫌です!!』

「そこで何故雪ノ下が出てくる…」

　　どうか雪ノ下ならともかくとは何だ。俺がどれだけ節操無く色んな女に手を出すと思っっているんだこいつは。

『だって、先輩智佐吹さんすごくタイプでしょ？見た目とか性格とか。ああいうエロい大人の魅力出してる人にとことん弱いじゃないですか。何年私先輩の追っかけやってると思っってます？後から出てきた女に負けたくないですよ！しかも年上の女に!』

「そこ重要なのか？」

『重要ですよ！なんせそれで先輩が堕ちちゃったら先輩が年上好きってことじゃないですか！先輩は年下好きじゃないといけないんです!』

「意味が分からん…」

『とーにーかーく！毎晩きちんと私に電話すること！安全確認怠ったらペナルティですからね！あの時は勢いで手を組んじやいましたけど、実際はあの人敵ですからね敵！』

「勝手にルール強制しておいて、ペナルティって独裁者かよ…。あと敵つてもうちよつと言い方なんとかしなさい…」

『じゃあ先輩、気を付けてくださいね！お土産は私と玉木さんの分ちゃんとお願いします！』

「相変わらずそこはちゃっかりしてるのな」

『待ってますからね！ではでは！』

「おう、土産はきちんと買っとく」

そこで俺は電話を切った。一色と電話すると毎回精神的にすごく疲れる…。

「いろはちゃんから？」

「うお!？」

隣に智佐吹さんがいた。いつの間に。電話の内容聴かれてないだろうなあ…。

「変なこと吹き込まれたんでしょ？」

「そうですね、邪推もいいとこでしたよ」

「どうせ、私が比企谷君を寝取るとかそんなこと言ってたんじやない？」

「凄いですね。まさにそのまんまです」

「失礼な！いろはちゃんには義理があるからね。つまみ食いぐらいしかしないよー」

「それもうアウトです」

「もう、いけずだなあ比企谷君は」

周りには芦間も島田さんもいなかった。二人になると凄い甘えてくるなこの人。出来るだけ、芦間と一緒に居るようにしよう。

飛行機の中では智佐吹さんは意外にもおとなしかった。というか本当に隣の席だった。俺よりも先に眠りについてた。出張前まで激務に追われていたようだったので致し方ないだろう。俺の肩に頭

をあずけて静かに寝息を立てていた。彼女の赤茶色の艶のある長い髪からシャンプーのいい匂いがするので俺は変な気分になって全く眠れないんですけどね。

既に機内は消灯され、暗くなっていた。俺はそっと彼女の寝顔を盗み見た。

年上の上司には全く見えない。均整の取れた顔つきだが幼さを感じさせる。胸には暴力的な大人の魅力を蓄えていた。本当に綺麗な人だよな…。俺この人に告白されたのか。未だに信じられない。

それにしてもどうしようかこの状況。俺は今窓際の席に座っており、智佐吹さんが通路側だ。彼女は俺を窓際に押しやるように体を寄せている。ついでに腕も絡められていた。トイレに行きたくなったらどうしよう…。

ほらな。そういう事考えだしたら尿意を催してきた。

「すみません。ちよつと腕離しますよ…」

寝ている智佐吹さんに独り言のように語りかけながら、腕を離れた。その後、もたれ掛かる彼女の身体を真っ直ぐに戻して、後方にあるトイレへと向かった。

ラバトリーの中で自分の顔を見た。昨日は結衣と激しく交わったせいか寝不足だ。ただ、目の下に隈は出来ていない。流石に飛行機の中で何時間かは寝ないと空港についた後もしばらくは移動で身体を休めることが出来ないのも体力的な問題が生じる。それにしても昨日頑張りすぎてしまった。今でも鮮明に彼女との一夜が蘇る。間違いなく一番興奮した夜だった。いかん、鏡にとってもなく気持ち悪い男が写っている。放送できないようなニヤケ顔。悲しいことにそれは俺なんだよなあ。

ドアを開けると大きな金髪の男性が立って待っていた。どうやら待たせてしまったらしい。"I'm sorry"とぎこちない英語で挨拶を返した。男性は笑顔で問題ないと表情で答えてくれた。气流で揺れる機体の中、暗くなった足元に注意しながら自分の座席へと戻った。

席では智佐吹さんが先程のまま気持ち良さそうに眠っていた。す

やすやとあまりにも無邪気に寝ているものだから、彼女を起こさないよう慎重に前を跨いだ。

前足を自席のフットレスト付近に置いて、もう片方を引き寄せようとした時だった。智佐吹さんの胸元が無防備になっっているのが目に入ってしまった。長旅の中、ボタンを上まで締めておくのが辛かったのだろう。谷間の上端がはつきりと見えてしまう。臀部が当たらないよう気遣って正面を向き合って通ろうとしたのが間違いだった。気にしまいと思えば思うほど下半身が熱くなる。

細心の注意を払ってもう通路においた足を持ち上げた。そのまま軽くジャンプし、窓際に降り立つことに成功した。

なんとか、自分の席に戻ることが出来た。なんだかもの凄いいらないうところでエネルギーを消費してしまった気がする。

着席し息を整えてシートベルトを締め直したその時だった。丁度、智佐吹さんがまた俺に寄りかかり、シャツがはだけてしまった。ちらと首元を見ると、思った以上に素肌が露出してしまっている。上空一万メートルでは機内の気温も下がり、時期によっては夏でも暖房が必要になる。彼女の足にはレストランのナプキンのようにブラケットが置いてあった。ブラケットを上までかけなおそうと彼女のシートベルトを外した。シャツも乱れてしまっているため位置を整えるか迷ったが、流石にこのままもなあ。今は周りも暗いし、本人も寝ている。そう思い、そつと胸元に手を伸ばした時だった。

突然、伸ばした右手を掴まれた。心臓が跳ね上がり、驚いて声を漏らしてしまうすんで口元を手で塞がれた。

「寝込みに手を出すのは駄目だよ〜？」

いじらしく笑う智佐吹さんがこちらを見ていた。

「もしかして、暗闇の中、隣に座る無防備な女性を見て欲情しちゃった？」

旅路の始まり早々に暴漢の嫌疑をかけられるとは想定外だ。ところが、襲われかけた(?)本人は事実とは裏腹に何やら嬉しそうだ。「そんなつもりはないですよ。ただ、服がはだけていましたし、寒くなりそうだったので毛布を肩までかけてあげようかと思っただけです」

「だと思ったよ。比企谷君紳士だからね」

「分かっていたならからかわないでほしいですね。寿命縮みました」

「それは困るなあ。君には長生きしてもらわないと」

「長生きの為には智佐吹さんとは距離を取らないといけないですよ」

「もう、人を疫病神みたいに」

小さな声でお互いが囁き合うようにして言葉を交わした。話しているのは俺達だけのようだ。機内に伝わる轟音が静寂を語るのは奇妙な話だが、実際そうだった。

「もう周りの人は皆寝ちゃったかな？」

智佐吹さんは隣の通路に座っている乗客を横目で見るように誘導した。確かに通路に座る乗客たちは全員寝ている。前の乗客は映画を見ていた。後ろの乗客も既に夢の中だった。芦間と島田さんは離れた席に座っている。

「そうですね。日本からの便ですけどよく見たら殆ど周り外国の人ばかりですね」

「うん、皆旅行帰りだったり、出張帰りなのかもしれないね」

智佐吹さんがぼんと肩に頭を乗せてきた。いかんせんエコノミーの狭い座席なのでズレることも出来ない。俺が動けないのを良いことに。

「ねえ、私のおっぱい見て興奮した？」

彼女は耳元で艶めかしい声を浴びせた。

「どうしたんですか急に？」

「だからあ…私のおっぱい見て、おちんちん大きくなったの？」

「な!?!」

彼女の手がいやらしく身体を這い始めた。胸元を撫で、耳たぶを優しく甘噛んでいる。いつの間にか座席の間の肘掛けが後方に追いやられていた。今俺と彼女の間を隔てるものが何も無い。同時に後ろに座る乗客が間から覗き見るリスクも無くなった。

暗い雰囲気と誰かが聞いているかもしれないという緊迫した状況が下半身を意識させる。

「えいっ♡」

「うっ…」

突如智佐吹さんが股座に手を伸ばし砲身を手に掛けた。そのまま上下にズボンの上から優しく肉棒を摩擦した。

「ぐっ、うう…」

悶えるような淡い快感に身を振らせた。

「ああ、八幡君。大きくなってくよ♡」

智佐吹さんが更に身を寄せた。右半身が柔らかい感触に包まれる。甘い吐息が耳をくすぐった。機内だぞ…。まさかこの人、本気なのか。

隣に寄り添う彼女の目を見た。まずい。完全に目が座っている。

「いろはちゃんに言われたんでしょ？ 私には気を付けてって。じゃあ駄目じゃない。私が隣に座るって言った時点で君は芦間くんや島田さんと席を交換しなきゃ…」

彼女の声が呪詛のように鼓膜にこびり付いて離れなかった。

続く

第二十六話☆

耳を優しく舐られつつ、ズボンのベルトを緩められる。紡がれた言葉が呪詛のように脳内を浸食した。

意識が遠くなる。虚ろになり、心に虚無が生まれる度に彼女の存在が埋められていく。

それでも彼女が手を緩めることはなかった。俺の抵抗や、悶える表情もお構いなし。タガの外れた彼女は陵辱を止めるということを知らない。

智佐吹さんの手が徐々に下半身に降りて来ている。そして、ついに股間に伸びた手を咄嗟に掴んだ。それが俺の最後の堤防だった。

彼女は鼻白んでいる。俺の抵抗が予想だにしなかったようだ。

「抵抗したら、痴漢で君のこと突き出すよ?」

「貴方にそんなことが出来るとは思いませんけどね」

「可愛くないなあ。まあその通りなんだけどね。君にいなくなられちゃったら困るのは私だし。でも、君は私がそうしないって可能性を100%切ることが出来る?」

「……」

「冗談。まあ、しないよ。でも、君は拒否できない。そういう人だから」

彼女の言葉が果たして、洗脳か事実か。俺は既にその境界線を見失いつつあった。

俺の許可も返答も無しに、彼女は下着の中に手をねじ込んだ。既に硬くなりつつある男根を優しく包み込む。じんわりとした母性と温もりが与えられ、否応なしに愚息は硬直を帯びていった。

智佐吹さんは自分にかけていたブランケットを俺の足に乗せて周りから見えないように環境を整えた。

「腰上げてズボン下げて」

今更、自分の甘さを呪っても後の祭りだ。

気がつくのと、隣で智佐吹さんが、顔を寄せてきていた。

唇に柔らかな感触がある。

粘液に満ちた生物のような舌が口内に侵入してきた。

「ん……くちゅ……じゅ……」

機内のシートベルト着用サインが点灯した。フライトアテンダントの『気流の悪い場所を通過中のため、機体の揺れに気を付けて下さい』という無機質な場内アナウンスが果てしなく遠くから聴こえたような気がした。

自分は今、航空機という逃げられない空の檻の中で下半身を露出させている。もし彼女が毛布を剥ぎ取ろうものなら俺の社会的立場は完全に地に落ちてしまう。

どうすれば良いか？ 簡単だ。彼女を突き放してズボンを履けばいい。

難易度はそう高くない。力は間違いなく自分の方が強いのだ。

だが、抵抗出来なかった。

ブランケットの下では肉棒と手の擦れる音が微かに聞こえる。智佐吹さんの手が規則正しく運動していた。密着した豊満な彼女の身体が怒張を鎮めることを許さない。右半身に感じる彼女の身体を形容するしたら男の欲望を完璧に具現化したとしか言いようがない。

手コキも絶妙な力加減だった。男のツボを良く心得ている。一体何人の男を弄べばこれほどの技術を身につけられるのだろうか。

もうかれこれ一時間以上も悶えるような快感を与え続けられていた。性欲にどっぷりと浸かっていた。

不定期で他の乗客が通路を通り横目で俺達を一瞥した。その度に訝しまれないか気が気でない。その度に背筋が凍りつくほどのおぞましい感覚が押し寄せてきた。

既に俺の頭の中はこの妖艶な上司のことしか考えられなくなってしまうている。手による奉仕だけじゃない。手淫に集中しながらも、ずっと耳元で『すごく可愛い』、『やっぱり好き♡』、『ねえ、こうすると出ちやうの？』と言葉責めを受け続けていた。甘く艶めかしい声が耳奥を突き抜けて脳内を麻痺させる。彼女の荒く激しい息がかかる度に一物が呼応した。

「気持ちいい?」

「…どうでしょうね」

「うふふ。身体固くなってるし、ピクピクしてる。すっごく硬いね…挿れちゃったらおかしくなりそう♡」

虚勢は全くの無意味だった。既に窓際の肘掛けを強く握って必死に堪えているのも彼女にはバレているのだろう。

「…もしかして、八幡くん私のことビッチとか思ってたらしない?」

「そんなことはないですよ」

「嘘だね…。でも、私、今までで二人だけだよ?」

「滅茶苦茶リアルな数字ですね」

「うん。本当のことだもん。しかも、殆どやってないし」

「なんで急に清らかアピールしだしてるんですか?」

「あはは。やっぱ、手遅れか」

智佐吹さんは、軽やかな笑いをこぼしながら男根を手で回して弄んでいる。結衣にベッドの上で好き勝手に犯されることもあって、女性に陵辱されることに快感を覚えるように調教されていた。徐々に砲身が発射の準備に取り掛かっていくのが分かる。

「ふふ、イキそうですよ。だんだん登ってきてるね♡」

「はあ、ふう、ぐっ…」

一瞬で悟られた。完全に手玉に取られている。

余裕を見せるのも限界だった。この人相手に毅然とした表情でいるのは至難の業だ。出来ることなら今ここで何も考えずに快楽に流されて精液を噴出したい。どれだけ気持ちがいいだろうか。会社の上司との不貞行為に於ける背徳感と艶美な大人の女性の手淫。公共の場で恥辱を晒しながら悦楽にふける自堕落さが生む得も言えぬ快感。これまでに経験してきた何よりも至高だった。こんなにも気持ちが良いのは初めてだ。

…何を言っているんだ俺は。それでは彼女の思う壺ではないのか。智佐吹さんの、否、一色の描いた構図になってしまっているではないか。

もう限界寸前だった。後数秒も経たない内に直属の上司にこの上

ない醜態を晒すことになる。

「智佐吹さん…もう、出そ、うです」

少しでも下半身の力を抜けば矛先が爆発してしまいそうだ。もがくように言葉を絞り出した。

「いつちやうの八幡くん？ぴゅっぴゅしちやう？」

智佐吹さんはとても楽しそうだった。厭らしく微笑むその顔はこの状況を心底望んでいたのだろう。俺の言葉を聴いて口端が大きく上がり、それを待っていたと言わんとしている表情だった。手元の運動が激しくなった。間もなく俺ははちきれそうな肉棒を解き放つことが出来る。

あまりの快感に腰を浮かせて発射の体勢を整えてしまった。舌をだらしなくだして情欲を貪り尽くす。

智佐吹さんが唇を重ねてきた。行儀の悪い舌を啜え込むと程よい力で吸引しつつ手の速さを最大まで高めた。

「ん…ちゅ…ふは。そっか。じゃあ我慢して」

重ねた唇をそつと離すと、智佐吹さんが手を止めた。この期に及んでまだ焦らすというのか。

「な、なん、で」

自分から漏れ出た言葉に我が耳を疑った。

だが、手を緩めてもらえたのは僥倖だ。下半身の力を抜いたまさにその時だった。

「はい♪気抜いたね♡」

「あ、ぐ。う！あああああああああああ！」

ほんの三秒だった。彼女が突如、手の運動を急激に早めた。摩擦された肉棒が再び息を吹き返し、いとも容易く絶頂に導かれた。

「んぐー」

口を反対の手で塞がれる。もう片方の智佐吹さんの温かく柔らかい手の中で節操もなく肉棒が暴れている。ポンプの自制も効かず、さすがに性を吐き出した。長い時間射精を焦らされていたこともあり、全身が悦んでいるのが分かる。その証拠に肩まで大きく痙攣して快感に身を震わせていた。

痙攣のように体全体を使って精液の放出にエネルギーを消費する。ドクドクと流れ出る体液が恍惚さを物語っていた。

「う……あ……はあ……」

「あははははは！ 凄い！ たくさん出たね！ 八幡くん♡」

首元を舐められながら胸を押し付けられる。

もう人間の言葉が出てこない。押し寄せる絶頂の波に飲み込まれ、藻掻くことすら許されなかった。

精液は漏れなく全て彼女の手の中に放たれた。限界までせき止められていたダムがついに決壊したかのように子種の氾濫が起こっている。彼女が俺にだけ聴こえるようにブランケットの中で手を握っては開きを繰り返し、艶めかしい粘着音を響かせていた。砲身も我慢汁を垂らし続けたせいで、粘液が男根全体に付着している。

全身が脱力した。座席に身体を放り投げる。息が荒い。上空で気温が下がっているはずなのに大粒の汗をかいていた。

一度の射精でここまで体力を消耗したのは初めてだった。意識が朦朧としている。焦点の合わない目で隣の彼女の顔を窺うと、智佐吹さんは今までに見たことがない艶美な笑顔で優しく片方の手で頭を抱き寄せた。彼女の大きな胸の感触が母性を強く意識させる。

「ゴメンね。片手だけど。もう片方は今、八幡くんの触っちゃったから、拭かないと」

智佐吹さんが近くににいるCAさんを手を上げて呼んだ。CAさんは直ぐにこちらに駆けつけると要件を伺った。顔がこちらに近づいた。先程の大粒の汗とは違い脂汗が出た。もしブランケットを捲られてしまえば自分の人生が終わってしまう。どうしてこの人は何事も無いような振る舞いが出るのだろうか。智佐吹さんはお手拭きを複数と水を頼んだ。CAさんは要望を聞くと柔らかな笑顔で返事を返し、直ちにそれらを取りに戻っていった。

「ふう、ヒヤヒヤしたね」

「冷や汗どころじゃないですよ」

お互いが、緊張が解けたように肩の力を抜いた。俺は勿論の事だが、彼女も内心は焦燥感に見舞われていたのだろうか。大きなため息

をついていた。

その顔はとても幸福に満ちている。怒張が収まった俺の愚息は今も尚彼女の手にも包まれたままだ。

丁度その時、CAさんが頼まれたものを持ってきた。智佐吹さんが笑顔で受け取るとブランケットの下から精液でベタベタになった手を抜き出した。

「うわあ！想像以上にえっちだね」

彼女の言う通り、手のひら一面が俺の精子まみれになっていた。本当にこれ全部俺の股間から出たものなのか。結衣とした時もこんなに出たことがなかった。智佐吹さんは目の前でおしぼりの入った袋を歯で噛むと持っている手を下ろし、包装を裂いた。そして器用におしぼりを取り出すと、丁寧に拭き取った。彼女の挙動の全てが相手をお誘惑し色欲の沼に引きずり込もうとする。最後の一箇所だけ智佐吹さんは桃色の舌を使っていやらしく舐め取った。

「…やっぱりあんまり美味しくない、」

「そりゃあ、そうでしょう」

「でも、エッチな本だと凄い美味しそうに飲んでたよ」

「そんな本読むんですか？」

「ネットに落ちてるよ」

「そういうことは言わないほうが良いです」

「君は読まないの？」

「ノーコメントで」

「人妻浮気系とか好きじゃない？」

「それは読まないですよ…」

「ふふふ。じゃあ他のジャンルで読むものがあるんだね」

「……………」

「ほんと、可愛いなあ君は」

智佐吹さんが胸元に飛び込んできた。自分の頭を擦り合わせて甘えている。

芦間が近くに居なくて本当に良かった。こんなところを見られた暁にはこの先の出張が地獄になるところだった。

「これ以上は流石にいろはちゃんに悪いかな」

「…どういうことですか？」

「ううん、なんでもないよ。私は三番目でも四番目でも何番でもいいっていうどうでもいい話。ごめん、眠くなってきちゃった。ちよつとだけ休むね」

「え、いきなりですか」

驚いて彼女の顔を見た。途中よく聴こえなかったが何を言っていたのだろうか。

「すう…すう…」

もう寝ているのか。本当に自由な人だ。かくいう自分も相当の疲労が一気に吹き出した。同じくして、瞼を閉じて束の間の休息を頂こう。

…。

「て…。きて…起きて、比企谷君」

「う…眠い」

肩をそつと揺さぶられている。もう朝なのか？機内モードにしている携帯電話の待受画面を確認すると午前二時だった。まだ丑三つ刻近くではないか。それなのに妙に空が明るい。仮眠前の気怠さが未だに体の芯に残っていた。

俺はこの人に…。いや、今は考えるのは止めておこう。

「ほら、もう着くよ？外見て。日本じゃ見られないくらいの広い大地が広がってる」

目をこすつて身体を伸ばす。エコノミー故に如何せん足をしつかりと伸ばすことが出来ない。頭に中々血が回らん。

窓からは陽の光が差し込んでいた。深夜とは何だったのか。

当たり前か。太平洋を渡ったのだ。大きな時差が存在知って然るべきだ。

彼女に勧められて小さな窓から眼下を見渡すと、彼女の言う通り広大な大地に迎えられた。地平線の彼方まで伸びる山脈が見える。少し進むと、今度は荒野が広がった。そして、ついに高層ビルに、乗用

車が行き交う何本の車線が目に入った。次々にその姿を変える大陸の顔にその広大さ、己の小ささをまざまざと見せつけられた。結構な挨拶じゃないか。

というか正直、海外への渡航なんてものは俺が出たがりではないために初めてだ。仕事ではあるものの楽しみでもあった。

「さて、気合入れるか」

独り言を呟いて隣りにいる彼女をそっと見た。

彼女もこちらを見ていた。目が合うと、にこやかな笑みを浮かべた。

「これからがまた大変だよ比企谷君。……………色々な意味でね♪」

怪しく笑う彼女の声と共に、機体の翼から着陸用の補助翼がせり上がる。眼下に大陸を見下ろしながら、ふと雪ノ下の事を考えていた。

『——皆様、当機は只今、着陸の体勢に入りました。シートベルトをしっかり締め直し、座席、フットレストを元の位置に戻して下さい。パソコンなどの電子機器類をお使いのお客様は電源を切り、カバンの中にしきまうようお願い申し上げます…………』

第二十七話

ロザンゼルスの日差しは思ったよりも強く、気温は思ったよりも高くなかった。

「…そんなには暑くないですね」

「そう？島田さん、冷え性だからじゃない？」

「乾燥してるから、蒸し暑さは思ったほどじゃないのかもしれないですわね」

「あー、久しぶりに来たけど、ここは相変わらずだなあ…」

俺達一行は長い入国審査を終えてようやく空港の外に出ることが出来た。海外の入国審査ってあんなにも色んなプロセスがあるものなの？もの凄い待たされたんだけど。入国審査をしてくれたおつちゃん、滅茶苦茶スタンプの押し方雑だったんだが。あと、荷物が全然出てこない。他の三人はスターなんとかという航空会員になってるらしいからすぐ出てきたけど、俺のスーツケースだけ最後の方まで出てこなかった。というか貴方達ちやつかりマイル溜めてるんじゃないよ。俺も銀行のカード作ったときにマイルも一緒に貯まりますよみたいなやつ付けられたからそれに作って作っただけ一回も使ったこと無いし。どんだけのポイントが溜まったのかも確かめたことないぞ…。

さて、ようやく出られたと思ったら、これからまた滞在先まで移動か。体内時計は深夜なのにこっちは昼下がりの時間帯。太平洋を越えた感覚は無い。だが、どこか遠方にやって来たんだと言う実感はあった。

辺りを見渡してみると様々な人種が確認できた。白人は勿論、黒人、アジア系、中東、ヒスパニック、ヨーロッパ…。本当に入り乱れている。そのおかげもあって、俺達がある意味で俺達も人混みの中に溶け込んでいた。

眼の前では車の乗降が流れ作業のように行われていた。友人を迎えに来たものや、バスやタクシーの乗車がひっきりなしだ。歩道も往来が激しく、道の真中で立っているのも邪魔になるほどだった。

「トシ、これから移動はどうするの？」

智佐吹さんが帽子を深くかぶりながら、芦間に今後の移動を尋ねた。道行く人達が早速彼女に目を奪われていた。間違いなくモデルと間違われてもおかしくないスタイルをしている。俺達が居なければ速攻でナンパされただろう。

「移動なんですけど、タクシーよりも安いですしUber使おうかと思ってます。自分アカウント持つてるので、今から頼んじやいますね」

「それ、日本だと高いけどこつちだとどうなんだ？」

「超安い。これのせいでサンフランシスコのイエローキャブとか経営破綻したからな」

芦間は慣れた手付きで行き先を入力し、車を手配した。端末の画面には料金と所要時間が表示されている。便利な時代になったものだ。

「四人での移動だから通常の手配は無理っすね。UberXで頼みました」

「どう違うんだそれ？」

「うーんと、まあ。四人以上ならそれだ。UberXってのは直通で他の客と相乗りも無しのプランみたいな感じ。一番安いのはPoolってやつだな。乗り合いのやつ。学生は基本、皆それ使うかな。そうじゃないやつも居たけど」

芦間は俺達に移動するよう促した。どうやらUberなどの運転サービス専用の乗降場所があるらしい。ロサンゼルス国際空港は一階が到着のロビー、二階が出発のロビーになっている。乗降場所は二階らしい。エスカレーターで上階に移動しながら、俺達は会話を続けた。

「なんか大学でも車持つてる人とか偶にいるよね。それもスポーツカーみたいな結構良いやつ」

「大学だと、そういうの持っていないと女作れないみたいな変な固定観念あったりなかったりですよ。俺のルームメイトだった友達は親の車を無理して借りて自分のものだと言って涙ぐましい努力していましたよ。州立大でもそういうのありましたから、私立だともっとヤバ

そう。偏見だけど」

「州立ってのは日本の国立みたいなものか？」

「そそ。あと、例外あるかもだけど私立は生徒じゃない人間が校内に入れない。州立は観光者や地元の人が沢山いる。ジムや食堂とかの施設も一般開放されてるしな」

「食堂って美味しいのか？」

「大学によりけりだな。俺のところはメツチャ不味かった」

「まあそれは日本と同じか」

「日本は普通に店屋が美味しいじゃんか。ふらつとラーメン屋に入っただけで良いやつが食えるし。こっちって安くて美味しいところなんて滅多に無いぞ」

芦間はぶーたれていた。こっちに居た時によほど食生活に不満があつたのだろうか。

「お、そろそろ車が来るみたいだぞ。あの茶色い車だな」

「結構、早いな」

「俺が助手席座るぞ。話しかけられたらお前対応困るやろ？」

「それは助かるな」

「私車酔いするんだよね。車内の臭いってホント苦手」

「さて、じゃあ乗りましょうか」

四人が車に乗り込むと、運転手が陽気な声で挨拶をする。何を言っているかあまり分からなかったが、芦間が全て対応していた。

俺は後部座席の中央に座っていた。窓の外を眺めると、日本では見たこともないような背の高い木々が立っていた。一番驚かされたのは車線の数だ。片方だけで6本程もある。車社会とは聞いていたが、本当に凄いな。

「どうしたの？さっきからキョロキョロして」

辺りを見回していると隣りに座っていた智佐吹さんに話しかけられた。

「あ、いや。目に入る全てが新鮮なものなので」

「あー…。翌々考えてみれば、今乗ってるこのフリーウェイも珍しいよね」

「金取られない日本の高速道路みたいなものだな。まあこっちにも
トルウエイっていう有料道路あるんだけどな」

芦間が前から補足を入れる。芦間も久しぶりのアメリカで少し浮
ついているようだ。

運転手は空いているスペースを見つけながら器用に車線を変更し
ていた。俺一生ここ運転できる気がしない。車間距離がほぼ無い。

「君たちがこっちに來た理由は何だい？」

運転手がアイスブレイク代わりに話しかけてきた。まあ共通点も
無さそうな四人が纏めて車に乗っているのを見ると不思議に思うわ
な。

「仕事ですね、一週間ほどですがロサンゼルスを楽しもうと思います
よ」

芦間が流暢な英語で返答した。こいつが英語話しているところ初
めてみたが、間近で見ると改めて留学経験者なんだなと思わされた。
「へえ、そうなんだな。ここはいい街だけどあまり住むには向いてな
いと思うんだ」

芦間が事情を説明すると運転手が苦い顔でそう返した。

「それはよく分かりますね。物価が非常に高いし、思ったよりも居住
に向いた立地をしていません。自分もここではないですけど近くに
留学していたので身に染みてます」

「お？こっちに住んでいたことがあるんだね。こっちで働こうって気
にはならなかったかい？」

「選択肢にはありましたけど、今は外国人労働者に中々ビザ降りませ
んからね。エンジニアだったなら取りやすいんでしょうけど自分は
経済学でしたから」

「経済学も十分良いとは思うよ。ビジネス専攻とかのほうがこっちだ
ともっと印象いいけどね」

「二応、自分ビジネス専攻なんですよ。自分が居た大学はビジネスス
クールが無かったからビジネス・エコノミクスとかいう混合型の専攻
でした」

「へー…、じゃあエコノミクス単体とかは無いのかい？」

「単体もありましたよ。でも取る授業は結構違いましたね…」

前の座席では二人がよく分からない会話を永遠としていた。日本語でも何言っているのかも理解できないかもしれないのに、英語でそれを話しているものだからもつと混乱する。

「そういえば智佐吹さんは海外出張つてよくあるんですか？」

「ん、私も実はあまりないんだよね。だからこっちのことは殆ど島田さん任せになると思う。彼は毎年海外採用担当してる人だから」「智佐吹さんはそんなこと仰ってますけど自分も大して経験があるわけじゃないんですね。周りには信頼されてはいるものの、毎年、内心ではあたふたしているわけで」

島田さんが頬を掻いて照れくさそうにしていた。とても温厚な人だが、人を見抜く鋭い目は誰よりも持っている。

「二応、こちらでは昼ごはんの時間帯なんですよ。ミーティングはホテルの近くのレストランで取りながらの方が良いと思います」

「あー確かに、そう言われてみればお腹空いてきたかも。機内食も全然口につけなかったし。あの航空会社のご飯大体美味しくないんだよ…」

「智佐吹さん、オレンジジュースしか飲んでなかったですよ。食事も断ってましたし」

「ホントね。でもデザートに出てきたアイスは食べたけど」

「あれ、市販のアイスだったじゃないですか」

「市販のアイスだったから食べたのよ」

「私、機内食で出てくる固いパンとバターの組み合わせ好きですよ。周りで結構残していらつしやる方多いのが不思議です」

「島田さんあれ好きなの!?もしかして何でもイケる人?」

「その言い方は語弊あるでしょ…」

「まあ私は結構何でもイケる人ですよ」

「え」

「さーて、そろそろ着きますよーって比企谷と智佐吹さんはなんでそんな度肝抜かれた表情してるんだ?」

「あ、いや。何でも無い。何でも無いという事にした方が良い」

「そうだね、うん。これ以上彼の深い世界に入り込むとこの車に居る時間だけじゃとても足りないよ」

「別に私はいつでもウエルカムですが」

「その言い方もまた変な方向に勘違いが発生しそうだけど…」

運転手がハンドルを切った。眼の前に8階建ての建築物が現れた。白い壁と窓ガラスで構成されたシンプルな作りとなっている。入り口には道中で見た背の高い木々がそびえ立っていた。

「じゃあ運転手さん、ありがとうございます！」

「おう！アメリカを楽しんでな！」

あつという間に意気投合した前席二人が挨拶を交わす。俺も慣れない英語でサンキューと伝えると降車した。

ロビーに入ると大きな天井に迎え入れられた。こういう客人を圧倒する造りは時として自分が場違いじゃないかと宣告されたような気持ちになる。

「では皆さん、各自荷物を部屋において30分後にロビーに集合ということで」

島田さんの号令の元、俺達は一旦解散した。部屋は一人一部屋きちんと確保されていた。部屋のドアの前でカードキーをかざして入室した。広さはビジネスホテルよりもやや広めの部屋でベッドと小さな机と椅子が用意されていた。スーツケースは部屋に置いてあったテレビの隣に置く。リュックは小さな机の上だ。ひとまずWiFiの接続を行ってメッセージの確認を行った。移動中SIMカードの交換を行っていないために、通信環境が無い限り海外では携帯電話を使うことが困難だった。ホテルにはインターネット環境が完備されていたのでパスワードを入力すれば誰でも使うことが出来た。

端末の待受画面に電波が書かれたマークが出現したことを確認すると早速SNSのメッセージの確認を行った。思った通り、結衣から連絡が届いていた。あと、一色からも連絡が来ていた。こいつは後にしよう。返信してしまうと長引いて話の流れを切るのに苦労する。

『無事に着いたら、連絡してね！☆ 心配だからさ〜』

結衣らしい文章だな。直ぐに『ホテルに着いた。問題は無い』と返

しておいた。その後を送られてきたメッセージで『もう！簡潔でつまらない！（#。∩。∩）でも無事で良かった☑（*・^・^*）』と返信が返ってきた。向こうって何時だ？深夜か早朝じゃないのか？もしかして俺の連絡を待っていたのかもしれない。それは申し訳ないことをしたな。日本が昼時になったらもう一度連絡を取っておこう。とりあえず、一応、一色のメッセージも確認しておくか。

『着いたら連絡下さい！（・ω・）』

何故この顔文字なんだ。よく分らんが、とりあえず返信しておくか。

『着いたぞ。今はホテルに居る』よしこれでOK。これ以上の返信はあとにしてそろそろ集合場所のロビーに向かわないと時間が無い。

早速携帯がメッセージを受信した。おそらく一色からだろうが返信は後回しだ。というか、あいつもこんな時間まで起きていたのか。夜遅くまで何やってるのやら。

とりあえずスーツケースを置いて簡単に荷物整理だけ済ませるとまたロビーに戻った。

ホテルのロビーの中央には大きな木が立っている。天井にはこれまた豪華なシャンデリアが吊り下げられていた。

「お、来たか比企谷」

集合場所にはまたもや芦間がいた。待合場のソファに深く腰掛けながら携帯電話をいじっていた。こいつ、集合場所にいつも一番に居る気がする。

「他の二人は？」

「島田さんはもう来てるよ。今トイレ行ってる。部屋でしなかったんかな？」

「どっちでもいいだろうに」

「ま、そやね。お、全員揃ったぞ」

芦間が目をやった先では、丁度智佐吹さんがエレベーターから現れたところだった。移動のときよりも更にラフな格好になっている。Tシャツにジーパンって。脚がエロい。仕事の服とは思えないがよく似合っている。あと、胸が強調されていてエロい。

「随分とバカンス気分な格好ですね」

「いいじゃない。トシもそんな暑苦しい格好なんかしていないで、着替えちゃったら良かったのに」

「自分はこの格好のが一番着慣れているので、このままで大丈夫ですよ」

「なんかもう堅苦しいなあ。せつかくの出張なんだから少しぐらい羽を伸ばしたってバチは当たらないよ。ね、比企谷君☆」

智佐吹さんに腕を絡められた。彼女の柔らかい感触がダイレクトに伝わる。服の生地が薄いから体温まで伝わってくる。これは色々とマズイ…。

「おい、比企谷。お前鼻の下滅茶苦茶伸びているぞ」

「そうならない方がおかしいだろ」

「こいつ、開き直りやがった。奥さんに言いつけてやろつと」

「お前、結衣の連絡先知らないだろうが……」

「いろはちゃん経由で連絡という方法があつてだな」

「すみません、それだけは勘弁してください。二重で最悪です」

少々強引だが、無理やり智佐吹さんから離れた。彼女はかなり不機嫌になっていたが仕方ない。

「もうあんなに愛し合ったのに……」

智佐吹さんが、俺にだけ聴こえる声でそつと囁いた。聴こえない。俺は何も聴こえない。

「あらま、全員揃っていたんですね。まだ集合まで5分もあるのに」

島田さんがハンカチで手を拭きながら戻ってきた。

「さて、比企谷君。何が食べたいですか？」

「え、私でしょうか？」

「ええ。君が決めていいですよ。芦間くんがそのリクエストを聞いておすすめのお店に案内して下さい」

「げ、俺そんなにお店知らないですよ」

芦間は突然の無茶振りに困惑している。だが、そんな知人に変化球を出して追い打ちをかけるほど、俺は人が悪くない。

「そうだな、じゃあ。 Grill系の店で」

「なんだ、意外に親切」
そう言うと芦間はマップのアプリを開いて近くのレストランを検
索し始めた。

続く

第二十八話

『そつかく、じゃあ明日から仕事が始まるんだね』

「まあそうなるな。でも俺は会社に履歴書出しに来たり、イベント参加にやってきた人の話相手役になるみたいだけどな」

『え、じゃあ結構重要じゃないの？八幡の印象で会社の印象が決まっちゃうじゃん。責任重大だね！』

「そ、そういうプレッシャーかけるの止めてもらえませんかね〜」

電話越しに聴こえる愛妻の声から察するに彼女の機嫌は非常に良かった。俺の土産話を楽しみにしているようだ。現に結衣は道中の風景や立ち並ぶ店、道行く人の服装など細かく聞いてきた。

ミーティングと昼食を終えた後はそれ以上の予定はなく各自で自由行動ということになった。智佐吹さんは買い物に出かけた。芦間は久しぶりにこちらの友人に会うらしい。島田さんと俺が部屋でゆつくりとした時間を過ごすという選択をした。落ち着いたので早速結衣に電話をかけたのだった。

現地の日本時刻は朝九時頃、対してこちらは夕方の五時頃だった。

『今日はこれからどんな予定なの？』

「ん？これから明日までは何も無いな。飯食った後は明日の資料見て寝るだけだ」

『そつかく、えへへ』

「どうかしたのか？」

『ううん。なんかこうして話せるのが嬉しいなあって』

「…ああ、そうだな」

『うん！』

こんなにも元気な妻の声を聞いたのはいつ以来だろうか。俺は安堵の息を漏らした。

携帯電話を右手に持ちながら、ボールペンを回す。

その先をずっと見つめていた。

五時だというのに日が長く、未だに太陽はオレンジ色に染まってい

ない。よく考えてみればこっちの地域はサマータイムだった。11月くらいまではたしか、時計を一時間進めることによって日が出ている時間を長くするとかいう政策。まだ空は明るいが帰宅ラッシュの時間故に、既に眼下の道路は渋滞を起こしていた。芦間曰く日本ならお盆の高速道路で起こりそうなレベルの渋滞が毎日のように発生しているらしい。

渋滞を眺めながら結衣と話していた。島田さんがフライト中の機内食の乾燥パンが好きだという話に結衣が何故か興味津々だった。

『…じゃあそろそろ切るね。明日の仕事頑張つて!』

「おう、ありがとな」

『うんーおやすみ』

元気な挨拶と共に、結衣との通話を終了した。

バルコニーに出て手すりに腕を乗せた。地平線遠くの山の稜線を目でなぞる。木々が生い茂つておらず、茶色の山肌が居住区を囲むように延びていた。

渋滞の列は一向に動く気配が無さそうだった。日本の倍以上もある数の車線の全ての列が車両で埋め尽くされているのは圧巻だ。こちら一帯は高い建物が少ない。ロサンゼルスを中心地の方は高層ビルが何軒か立ち並んでいるのが見えるが、それ以外には背の高いビルは確認出来なかった。

強い海風が吹いている。考え事をするには丁度良いのかもしれない。揺れていた。自身の心が風鈴に付けられた舌のように休まることなく吹き荒れていた。

結衣は紛れもなく最高の女性だ。こんなにも優しく美しい人は俺の人生の中で二度と現れない。毎日のように夫の帰りを待ち、献身的に支えてくれる。今の自分があるのは彼女のおかげでしかない。これまでだって自分のが折れそうになった時何度も助けてくれた。

だが、結衣と話す度に、彼女が、雪ノ下雪乃の顔が頭に浮かぶ。彼女の透き通る声、儂げな横顔が脳裏に焼き付いていた。結衣の笑顔、

明るい声を認めるといつもだ。自分の中の雪ノ下が私を見捨てるのかと泣きそうな顔で俺の袖を引つ張る。そんな彼女を見て、哀れに思う。そして同時にどうしようもなく彼女が欲しくなる。こんな俺を求めらもう一人の最高の女性。誰よりも優れた容姿で尚且自分が話している最も楽しい女性。

あの日雪ノ下が涙ながらに口にしたらあの言葉が目を開ける度に耳の奥から聴こえてきた。

もしあの時、彼女の肩を抱くことが出来たらどうなっていただろうか。そんな事ばかり考えていた。おそらく自分を抑えきれなかっただろう。雪ノ下の涙を見てこみ上げてきたのは、自分に対する怒りや彼女に対する憐憫の情。

それだけではなかった。

俺はあの時どうしようもなく雪ノ下雪乃が愛おしくてたまらなくなった。同時に邪な欲望も渦巻いていた。悪魔の囁きに身を任せて雪ノ下を離さないという選択肢もあった。それが選択肢にあると思ってしまうていた。

そして、彼女に会えなくなったら今、心臓の奥底深くに潜む抗いがたい欲望の芽が著しくその茎を伸ばしていた。

…欲しい。

雪ノ下雪乃が欲しい。

もし許されるのであればあの女を心ゆくまで犯したいとさえ思う。初めての感情だった。浮ついた感情などという生易しい一瞬の気の迷いなど比較にもならない。本能が強く揺さぶられる強烈な衝動が全身を支配する感覚。

出張前日に結衣を抱いた。あれは雪ノ下を犯すことが出来なかったあの日の猛りを鎮めるための行為だったのかもしれない。自分は結衣を雪乃の代替として使ってしまったのだろうか。あんなにも精液を放出し続けた夜は一度とて無かった。自分は彼女の中を突く毎に雪ノ下の艶姿を重ねていたのだろうか。

聴いてみたい。

雪ノ下雪乃は一体どんな声で啼くのだろうか。

抑えようもない爆発しそうな欲望に押しつぶされる。

日に日にその欲望は大きくなった。

出張の前日に我慢できなくなって結衣を犯した。あまりにも暴力的で身勝手に自己満足の交わりだった。

果たしてそれを愛の交配と称して良いものなのだろうか。

それを俺は人生最高の行為だと認識していたのだ。

深く呼吸をして考えを整える。

一色に耳を舐られ、智佐吹さんに機内で陵辱された時、俺はどういう反応だったのだろうか。あのときは必死に逃れようと藻掻いていた。

だが、思い出してみろ。結果どうなった？

結局、一色のときは快樂に身を任せ身体を彼女に預けた。そして智佐吹さんの時に至っては預けたどころか絶頂を与えられた。

結果だけを見れば、そこにいたのは享樂に耽溺する自堕落な男ではないか。一色に舐められていた時、破裂する程に愚息が膨張していた。智佐吹さんに慰められていた時、呼応するようにして子種袋から大量の精液が汲み上げられた。

あの時味わった感覚を強烈に覚えている。

敗北や屈服。それらは最高の快樂のカンフル剤にはなりえない。

刻みつけられたのは結衣に対する罪悪感だ。

最愛の妻を裏切って他の女性に身体を晒し、蜜月の時間を与えようとしてしまったこと。何よりもそれに締め付けられた。

だが、それだけではない。

あの時、罪悪感と同時に抱いていたのは得も言えぬ快感だ。

一色や智佐吹さんとキスをした時、そして、精液を放った時。絶頂はそれまで抑制されていた自分への解放の啓示へと昇華された。その感覚を俺は覚え始めている。

一度その沼に身を沈めてしまえば二度と戻ることは出来ない。

既に俺はその沼に脚を入れてしまっていた。

その重大さを自覚しなければならぬ。

もし、誘惑に負けて沈んでしまったらどうなる？

決まっている。人生の終わりだ。

結衣という最愛の女性を失い社会的信用も地のそこまで失墜する。一色も智佐吹さんもその沼に俺を引きずり込もうとしているのだ。抜け出すなら今しかない。

これ以上彼女達に調教されようものなら俺は二度と結衣の元に帰れなくなってしまう。

だが、雪ノ下はどうなる。

今の俺に彼女を諦めるなどという選択肢が果たしてあるのだろうか。

分からない。だが、答えは直ぐそこまで見えているような気がする。

…逡巡しすぎて頭が痛くなってきた。

外はもう暗くなっていた。

長旅の疲労もあるだろう。携帯を机の上に置き、ベッドの上に自分の身体を放り投げた。

明日は6時にロビー前に集合だった。朝が早いので早めに寝よう。携帯が着信を告げていた。おそらく一色だろう。だが、今の俺に出るだけの気力がなかった。端末の電源を落とし、消灯した。少々早い気もするが、目を閉じて明日に備えた。

これ以上の衝撃もドラマもそうそう起こらないだろう。

…：…そう思っていた。

このときの比企谷八幡は何も知らないのだ。

明日のイベントに現れた来訪者が俺の人生を加速させ混沌へと導く存在になろうとは思ってもよらなかったのだ。

続く

第二十九話

会場は既に幾つかの企業の人事達で賑わっていた。参加した企業の数には30弱といったところか。11月頃のメインの就活イベントに比べると規模は大きくないようだ。

今回の企画はイベントホールを一つ丸々借りて行われる。芦間が言っていたが、参加する企業の多くはコンサルや会計関連の企業が多いらしい。つまり俺達からすればライバル企業ということになる。競合企業だからといって別にいがみ合うわけでもないが仁義なき人材の取り合いはあるのかもしれない。

「んで、俺はどうすればいいんだ？」

隣で携帯を見ている芦間に問いかけた。俺達は今自社のブースのセッティングをしている。

「ん？まあ参加する学生さんたちが履歴書持ってここに来るからそれを受け取って質問に答えてあげればいい」

「そんなんでいいの？」

「何を言ってるのだよ比企谷氏。これはとても大事なミッションだぞ」

「昔のオタクみたいな話し方になってるが、急に誰になったんだ…」

「気分ですはい。モデルは居ません。要は比企谷は看板社員というわけだ。君の立ち振舞で会社の印象が決まると言っても過言ではない」

「はあ、そういうえば昨日、結衣もそんなこと言ってたな」

「お、奥さんと電話したのか。関係は良好に戻ったみたいで安心したぞ」

「おかげさまでな」

ホテル近くのスーパーで購入しておいたキットカットのファミリーパックを開封しながらそれに答える。こっちのチョコレートつてもものすごい量だな。ファミリーサイズがもう業者が仕入れるそれに近い。

「このキットカット、ビター味とホワイトチョコレート味も入ってるんだな」

「そうやで。むちゃんこ入っていてそれで\$10だから大学で勉強していた時はよくそれにお世話になった」

「ホワイトチョコレートは本当に激甘だな。最高」

「宇治抹茶味も意外に甘さが強いよな」

「羽田空港で買えるやつか？」

「そうそう。あれ。京都土産に買おうと思ったらあるやんけ！つてなるやつ」

「俺は結構好きだけどなアレ」

「実はアレこつちでも売ってるんだぜ」

「マジか。最早レアリティ無いんだな」

「こそ。日本の食品を売ってるスーパーとかで。抹茶味つてもう通常販売のフレーバーになってる。あ、ビター味くれ」

芦間にビター味を幾つか渡すと美味しそうに頬張っていた。

「というか日本の食品売ってるスーパーって何だ？」

「文字通り日本のレトルト食品とか調味料、お菓子とか売ってる店ぞ。有名なのはミツワつてとことかかな。大体そういう店とかにはフードコートとかもあつて日本料理も食べられる。ラーメンや牛タン丼とかありますな。まあ味は保証しないけど」

「こつちでもラーメンとか人気なのか？」

「結構人気よ。二郎インスパイアとか魚介豚骨のつけ麺とか独自の進化してよりかは日本の食文化を踏襲している店が多い。そういう店って基本日本人が経営してるからって理由だけでも。味はそれゆえに美味しい所もあるぞ」

「ほう」

いいことを聞いた。こつちのラーメンの味を確かめてやりたい。

「まあ比企谷はラーメンにうるさいからお前の舌を満足させられるかどうかは分からんよ」

「別にそこまでうるさくはないぞ。俺がうるさいのはマツ缶に関してだけだ」

世の中にコーヒーとは二種類存在する。マツ缶とそうでないものだ。

「そっか。てか、こここの近くに俺がよく行つてたラーメン屋あるから空いてる時間にでも一緒に食べに行くか？」

「ここに来てまで日本食つてのもどうかとは思うが、まあ一日くらいであればいいか」

「そう言いながらも結局毎日、日本食のレストランにいそいそと向かう比企谷であった」

「勝手にモノローグを入れなくていい」

「一日二日白飯食わないと本当恋しくなるからな。その感覚を味わうがいい」

「急に復讐心みたいなのに燃えてるが俺何かした？」

「準備は出来たの？」

丁度二人で話していたところに運営側との話が終了した智佐吹さんが戻ってきた。

「一応、形にはなっているとは思うんですけどどうでしょうか？」

「うん、まあこんなもんでしょ。島田さんには後は細かい指示仰いでみて」

智佐吹さんの承諾を得た。周りの企業も同じくして万端のようだ。

「それでこれからどうします？」

「トシはここに居て。三十分もすれば学生さん達来ると思うから。比企谷君はちよつと買い出しを頼みたい」

「いいですよ。英語が不調法なもので正しいものを買って来られるかどうかは分かりませんが」

「はじめてのおつかいみたいな感覚でそれはそれで面白い」

「まあ、大丈夫。これを買ってきてほしい物のリストね！トシ、一応これ全部英訳してあげて」

「了解しました〜」

芦間 は内ポケットに忍ばせていたボールペンを取り出すと丁寧な文字でリストに書かれた日本語を英訳していった。なるほど、その日本語って英語だとそう言うのか。

「ほい」

「サンキュー。そんじゃあ、ぱぱつと行ってくるわ」

「おう。頼んだ」

「比企谷君。ついでに何か炭酸系のお水買ってきてもらってもいい？」

「分かりました」

自社ブースを離れて会場を出た。外の天気は相変わらず雲ひとつ無い晴天だった。水色のペンキを全面に塗ってあるかのように一色だ。湿気も少なく、過ごしやすいだろう。芦間はここら辺は住むには物価が高かったり諸々向いてないとか言ってたけど。

手頃なスタバに入ってフリーのネット環境に接続した。一番近くのスーパーの位置を確認するとスクリーンショットを撮って買い出しへと向かった。

スタバの出口で丁度入店してきた女性とぶつかりそうになった。

「つと、すみません…ってここアメリカだったか。あ、アイム、そ…」
「あ、日本語で大丈夫です。こちらこそすみません」

眼の前に居たのは黒髪の似合う大学生くらいの女性だった。身長は平均よりもやや高めだが、雪ノ下程ではないといったところか。髪の毛の長さも相まって一瞬雪ノ下がアメリカにまで現れたのかと錯覚したが身体のある部分を見てそうではないと直ぐに分かった。どことは言いません。そうですよねニュートン先生？

「あれ？え、えーと。に、日本人？」

「…そうです、留学生で…。あそこのホールでのイベントに参加します」

モデルか女優と見間違うほどの美人だった。雪ノ下とはまた違ったクールビューティを醸し出している。

「そ、そうなのか。実は自分も参加することになっていて…。その、運営側だけど」

「いかん、挙動不審になってる。日本語まで片言になってるのだから世話ないな。」

「……………」

ドン引きされたのかと思いきや、その少女は俺が首からぶら下げているネームカードに釘付けだった。自分の名前は書いていないもの

の、企業の名前は記載されている。彼女が興味を持っている企業だったのだろうか。その後、彼女は俺の顔とネームカードを代わる代わる見ている。照れちゃうから止めてね。うん。嬉しいけど。

「げ、もう三十分後に始まるから。行くわ、すまん。あと、良かったらうちの企業見に来てくれ。入って右側らへんにブースあるから」

翌々考えたらイベント前に戻らないとやばかった。そもそも出張で人手が足りていないのだから急がなければ。彼女には申し訳ないが。一応、弊社の宣伝だけ軽くやっておいた。言い方がキャッチっぽいけどナンパじゃないです。

「あ、待って……」

少女が呼び止めたような気がしたが、スーパーマーケットに群がる企業の人間や学生達の集団が見えたので早くしないと間に合わんぞこれ。

メモをもう一度手に取って買うものを記憶した。

店内に入ると大きな空間が出迎えた。本当なら海外のスーパーでどんな感じなんだろうと散策したかったのだが、それはまた別の機会にしよう。赤い買い物かごを手に取って目的の品物がある場所を探し始めた。

——少女は困惑していた。

会場に入る前に一息つこうと入店したカフェ。そこであった男性がとても彼女が想っていた者にまるで瓜二つだったからだ。

そんなわけはない。何度も心にそう言い聞かせてみても彼のが頭から離れなかった。

顔だけではない、声や口調までそっくりだった。彼女が知る彼は高校の時で止まっている。顔つきは凛々しくなっていた。あの彼が成長したらあのような顔立ちになるのだろうか。

ここは太平洋を越えたアメリカ大陸だ。彼は日本に居るはず。常識で考えてみる。彼がこんな場所にやってくるというのは絵に描いた餅もいいところではないか。

それでも、一縷の望みを捨てることが出来ない自分がいる。こんなにも高揚したのはいつ以来だろうか。

少女はブラックコーヒーを手にとった。空いているカウンターに腰掛けると、もう一度彼の顔を思い浮かべた。

心臓の動悸が激しくなる。カフェインのせいだろうか。

コーヒーを口につけた。鞆に入れてある英文の履歴書を意味も無くもう一度確認した。

彼が首から下げていたのは彼女が面接をしようかと考えていた企業だった。何もかもが運命の様に感じてしまう。

少女は胸に手を当てると想い人の名を口にした。

「……………八幡」

続く

第三十話

開場と共に学生の波が押し寄せてきた。入場した参加者は一切に蜘蛛の子を散らすように目的の企業へと足を運んだ。具体的な流れとしてまずは目当ての企業に履歴書を提出していった。その際、日本語でも英文履歴書でも構わない。企業の人事担当がその履歴書を閲覧し、気になった学生を集めて集団面接をする。その後個人面接やグループプレイスカッションなどの関門を経て、最終面接とも言える夜の食事会へと繋がるのが一般的な流れになる。

ブースでは芦間や智佐吹が待機していた。彼らのところにも何人かの参加者が自分の履歴書を提出しにやって来ていた。

芦間は履歴書を受け取るとやって来た学生たちの質問に丁寧に応対した。本来であればそれは八幡の役目であったのだが、彼が帰ってくる気配は一向に無かった。他の企業や学生たちが向かっているのを見たため、おそらくは遅れるだろうと踏んでいたので芦間はさほど驚きはしなかった。

芦間も智佐吹も間違いなく美男美女の部類に入る。それ故なのか、男性の参加者は智佐吹に女性の参加者は芦間に自然と履歴書を提出していった。

受け取った履歴書は参加者の波が途切れる度に後ろで待つ人事担当の島田に渡した。彼がそれを受け取ると早速履歴書を吟味し始めた。

渡された履歴書はほとんどが英文のものだった。留学生が就活をする際には履歴書も英文であることが多い。海外企業に同時に提出することも出来るし、外資系の日本支部であれば英文履歴書でも勿論大丈夫というところが多い。

また、英文履歴書は手書きでなくタイピングで印刷したもので問題無く、写真が必要ない。これは容姿などで差別をしないため、純粹に履歴書の文言で判断を下すという理由からだった。

「日本もいい加減さ、手書き文化とかなくなればいいのになんで手書きなんだろう」

「字が読めない人とかいるから困るんですよね…」

芦間が溜息をついた。

「あれでしょ？手書きで本気度が分かるってやつ」

「あんまり参考にしていない感じですか？」

「私は、ね」

智佐吹はうんと伸びをした。

芦間は機械的に履歴書を受け取り続けた。気づけばそれなりの高さの書類の山が築き上げられていた。

「とりあえず、一通り受け取ったかな」

智佐吹の言う通り参加者の学生たちは一通りの履歴書を提出し終えて集団面接の連絡を待っていた。企業のブースの人だかりは最初の喧騒とは様変わりしている。

「そうみたいっすね。って比企谷はまだ帰ってこないのか…」

「どうやら滅茶苦茶お店が混んでるみたいだね。この雰囲気にも慣れさせてあげたかったからちよつと申し訳ないことしちゃったなあ。もしくは迷子か」

「それはもしかしたらの可能性で捨てきれないのが怖い」

「いやまあ、お店ここの外から見えるしそれで迷うってことはないでしょ」

智佐吹が大きく伸びをした。ぴつちりとしたスーツを着ているためか、胸元が強調されている。

「確かに、智佐吹さんが行ったら迷子を心配しますけど比企谷なら大丈夫でしょ」

「……なんでトシは私が方向音痴なの知ってるの？」

「ある筋からの情報でね」

「それどう考えても真紀しかいないんですけど…」

智佐吹はむくれていた。

「あの、すみません」

ようやく落ち着いて履歴書を見つつ選考をする段階に入ることが出来ると二人が安堵したところでの追加の来客だった。

現れたのは長い黒髪を纏めている女性だった。手元には英文の履

歴書が握られている。

「ん？おお、志望者かな」

芦間が応対する。少女はどこか人と話すことを苦手としているように感じた。

「は、はい。あの、もしかして芦間さんですか？」

「え、そうだね。自己紹介したっけ…って、あ！もしかして鶴見さん!？」

「そ、そうです。お世話になっております」

眼の前の女性、鶴見留美は深々と頭を下げた。芦間は合点がいったと大きな声を上げて納得していた。智佐吹が何事かと怪訝な顔で二人を見ている。

「智佐吹さんこの方ですよ。C大学の日本人会の担当」

興奮を隠しきれないといった口調で上司に金の卵を紹介した。部下の普段見慣れていない光景に少しばかり面食らった智佐吹も直ぐに冷静さを取り戻した。

「あ、そゆことね！トシが対応が丁寧だってすごく褒めてたよ」

「あ、ありがとうございます」

留美は恐縮していた。メールの文面からフランクな男性だと予想はしていたが、予想外に明るい相手だったからだ。

「よく来てくれたね。こんな歓迎しか出来なくて申し訳ないけど」

「いえ、はるばる来たと言えば私なんかよりも芦間さん達の方が…」

「ははは、まあそうさね」

「本当にごめんね、挨拶だけで。これからお世話になります。大学側の協力を得られるのとそうでないのではこっちの労力も違うからさ。面接や説明会の場所を確保するのだけでも一苦労だよ」

「こちらこそお世話になります。御社は今年お呼びする企業の中では目玉として紹介する予定なので」

「出来ている…！この子既に社会人としての心得が備わっている…！」

「すごく可愛いこと言ってくれるね。その時はよろしく願いますよ」

芦間のスイッチが入ったので智佐吹は無視して話を続けた。

「はくしつかし、こんな美人さんとは思わなかったよ。入社した暁には私が育てる！他の男性社員だと男共が色目使っちゃうからね」

面接もしていないのに智佐吹は育成の方針を立て始めていた。皮算用になりかねないと芦間は肩をすくめたが、智佐吹と同じようなことを考えていたので何も言わなかった。

二人の言う通り、留美はこれまで会ってきた女性の中でも凶抜けて容姿に恵まれていた。体型もモデルのようであるところは智佐吹と比べると控えめだが、しっかりと出ている。どことなく雰囲気は八幡が岡惚れしている雪乃と似ているというのが芦間の第一印象だった。

芦間は留美から履歴書を受け取ると速やかに島田の元へと持っていった。耳打ちで「彼女、多分超優秀です」と一言付け加えておいた。

「ほう、総武高校の出身ですか。比企谷君と同じですね」

島田が小さく呟いた。芦間は目を丸くした。

「ホントですか。でもまあ、歳が大分違いますから繋がりは無いとは思いますが」

「そうですね。ですが、こういったところに何かしらの縁と因果を感じてしまうものです。遠目で見ただけですが、入社したての比企谷君の雰囲気こそつくりですから」

「確かに。それは言えます」

芦間と島田は声を合わせて笑っていた。

「じゃあ鶴見さん、これからの予定になるんだけど昼の一時半に集団面接やるから時間になったらまたここに来てもらえるかな？他の会社と時間被つてたりしてない？」

「分かりました。これから予定が決まるかとは思いますが、御社が第一希望なのでそちらの時間に合わせるつもりです」

芦間が、席に戻ると智佐吹と留美が今後の予定の話をしていた。断片的に聴こえた話だが留美の弊社に対する印象も悪くはないならしいと芦間は胸をなでおろした。

「嬉しいことを言ってくれますね。でも面接はきちんとやるからそこんところはよろしくー」

「善処します」

「智佐吹さん、美人さん好きだから大丈夫だよ」

「そ、そうですか」

留美は照れていた。あまりこういう言葉には慣れていないのだろうか。言われ慣れているものだと思っていた芦間は不思議がった。

「トシ、そんなチャラそうなこと言っちゃって良いの？君はいろはちゃん一筋じゃなかった？」

「智佐吹さん、そういうこと言わんといってもらえますかね…。てか、そういう貴方だつて既婚者の後輩一筋で、ぐえツ…」

「何か言った？」

「いえ何も……」

留美の目の前で芦間が急に悶え出した。机の下で一悶着あつたのだろうが、彼女の位置からでは机が邪魔で見えなかった。芦間が言わんとしていたことも途切れ途切れで留美には全く流れが理解出来ていなかった。

(いろは…どこかで聞いたことあるような名前…かな…)

「そ、そういうえは鶴見さん。イベントページの文言んですけど、昨日の夜下書きで作っておいたから今日の夜にでもメールで送っておくね」「分かりました。ありがとうございます」

「場所の確定っていつ頃になりそう？」

「説明会会場は基本、学期末のくじで決めることになってます。面接会場の予約も日時3日前から出ないとできない規約なので直前になりそうです。説明会会場の方は秋学期にでもなれば直ぐにお伝えします」

「りよーかい！上にもそう伝えておくね。早く予算と日程表出せって経理がうるさくてね。留美ちゃん盾にしとくわ」

「え、そ。そんな」

「何普通にパワハラまがいのことしてるんですか」

芦間が呆れ返っていた。

「じよ、冗談だよ。ごめんね。まさか、ここまでピュアだったとは…」

「そりゃあ貴方の汚れ具合に比べたら…ごぶツ」

「あらーこんなところに粗大ゴミがく」

「じゃあ申請しないと駄目じゃないですか。市の条例で決まってるよ」

「ならばどこかに寄付しよう」

「あんたDonationをなんだと思ってるんだ」

芦間がそこで机に力尽きた。頭だけ留美の方に向けている。留美は本能的に彼から距離を取った。

「そういえばさつき、君の履歴書を見たんだけども鶴見さんって総武高校出身だったんだね。うちにもそこ出身だったやつが居るよ」

芦間が器用にその体勢のまま留美に話しかけた。

「え…？」

留美は激しく動揺した。また一つパズルのピースがハマったような音がした。鼓動が大きくなる。自分の中にあつた一縷の望みが確信に変わったような気がした。しかし、用心深い彼女は未だ半信半疑の状態だった。

「そ、それってどんな方ですか？」

「どんなって…ってあ、丁度そいつ来たね。おい、比企谷。お前にお客さん」

「え、ひきが…」

芦間が大きく手を振った。留美は彼の視線の先を追った。

「なんだ、お客さんって…。俺こっちに知り合いなんていないぞ…ってうん？」

「…ああ、」

留美は大きく息を呑んだ。

芦間が口にした名前。

それは少女がよく知る名前だった。

健気な彼女が何年も思い焦がれていた男。ずっと遭いたいと恋慕していた男。

そこで少女はようやく確信した。

入り口から風が吹き抜ける。

彼女の髪を結んでいたゴムが解け、流麗な髪が下ろされた。

長く延びた髪は彼女の美しさを際限なく彩った。

男女問わず彼女の姿に目を奪われる。

顔が熱い。火照る身体の衝動を抑えきれそうにもない。

本当なら今すぐにでも抱きしめて愛を伝えたい。そんな衝迫を心に留めるのに彼女の身体は小さすぎた。

胸が苦しくなった。痛みにも近い心臓の高鳴りに両手を添えた。

瞳孔が大きくなる。彼の全身を隈なく捉え逃さないために。

その玉のような目で彼を一点に見つめた。

それはまるで聖女の祈りのように清らかで趣があるとさえ言える。

少女はゆつくりと一歩ずつ歩みを進める。

辺りは彼女を見守っているかのように時が止まっていた。今この時だけは少女のために世界が存在していた。

足を踏み出す度に胸の痛みが鋭くなり、身体が沸騰する。

歩みを止めた。今、目の前に何年も恋慕していた男が立っている。

その嬉しさをどう表現すればいいのか。少女にはそれを完璧に表す一言をもちあわせていなかった。

少女は顔を上げた。

目が合う。

あの時のまま腐ったような目を、それでいて強い意志と強さを持つ目していた少年がそこにいた。

それは間違いなく、少女が何年も憧れていた目だった。

一筋の涙がこぼれ落ちる。ほんの一筋、抑える隙もなく自然と溢れていた。

「お、お前。まさか……！」

男：いや、少年は気づいたのだろうか。ほんの少しの繋がりしかなかった、あの時齢10と少々だった子供のことを覚えているのだろうか。

だとしたらどんなに幸せなことだろう。自分が今でも彼の心の中に居た事を彼自身が証明してくれる。こんなに幸福なことは無い。

「お前」じゃない。留美」

あの時と同じ言葉でそれに答えた。

おそらく今自分はこれ以上ないほどに幸せな笑顔を見せているの
だろう。鏡の前で見れたものじゃないが。

少女は二度と彼を離すまいという決意と共にその名前を口にした。

「久しぶり、八幡」

続く

第三十一話

—Side Hachiman—

この世界に「運命」という言葉が存在すると言われれば俺はそれを鼻で笑ってきた。何故なら「運命」とは存在しないからだ。結果とは皆全て過去の自分の行いと努力の果てにもたらされるものであり、因果応報である。

ネットでもてはやされる運命の赤い糸など馬鹿げている。彼らが最後まで永く続くなんてことはそうそう無い。一瞬の気の迷いや、早とちりがもたらした迷信に過ぎない。もし仮に赤い糸で結ばれていたなどと言っていた人間がめでたくその相手と結ばれたとしても単なる偶然の産物に過ぎないというだけのことだ。

そんな事をつらつらと述べて生きてきた人生だった。

しかし、今のこの状況を形容する言葉だが、「運命」という言葉以外に適当な表現が見つからない。

眼の前に居る女性：カフエでバッタリ出会った女性がまさか昔会った鶴見留美だったとは思ってもみなかった。

確かによく見てみると面影がある。長い黒髪に大きな吊目。身長は勿論あの時よりもかなり伸びている。身体もすっかり大人になっていた。

成長した姪っ子とかを久しぶりに見た時ってこんな気持ちになるのだろうか。もし小町に子供が出来たとしたら：いや、小町を誑かす男は万死なので一生甥っ子姪っ子はできないか。それはそれで残念な気にもなるがいた仕方ない。

留美の顔立ちは雪ノ下に似ているような気もするが彼女とはまた違った魅力を出していた。勿論、雪ノ下と同様に留美も寄せ付けないような高嶺の花、気高さを感じさせる気品を持っている。体つきと言い、顔立ちといい正直…。

どストライクだ。

「…何か言つてよ、八幡」

留美が不機嫌そうに呟く。突然の思いもよらぬ再会にこちとら言

葉を失っているのだからそれくらいは容赦して欲しい。

「あ、いや。その…。驚きが強すぎてだな。というかなんでお前が海外に居るんだ？」

「だから『お前』じゃない。留美」

「わ、悪い。その、る、留美がどうしてこんなところに居るんだ？」

「留学してるから。私、こっちの大学に通ってるの」

「そうなのか。にしても、あの留美が留学か」

「何か変？」

「あんまりそういう印象無かった」

「高校の時、国際教養科に居たからそういう進路も選択肢にあった」

「ん？もしかして留美。総武高校に行ったのか？」

「うん、そう」

留美も総武高校だったのか。黒髪ロングという点も同じなのでさながら雪ノ下二世だ。

「なら俺は先輩になるわけだな」

「一緒に通ってないじゃん」

「そういう事言うなし…」

「私、その言い方嫌い」

「お、おう。すまん」

久しぶりだというのに、あいも変わらず留美に圧倒された。そういうところは昔と同じなのね。

「…比企谷。お前、鶴見さんと知り合いだったのか？」

芦間が目を丸くしてやり取りを見ていた。智佐吹さんはさつきから呆然としている。

「ああ。まあ話せば長いけど、十年くらい前にな」

「そりやまた、随分と昔の話だな。さつき、彼女の履歴書を見て同じ高校出身だったからまさかなって話をしてたら、それが本当なんだからびっくりだわ」

「まさかの伏兵…」

智佐吹さんは何言ってるんだ…。とりあえず頼まれていた物が入った袋を差し出す。

「おう、お使いご苦労さん。なんとというか、盛り上がっているところ非常に申し訳ないんだが、とりあえずこつちも選考やらがあるから積もる話は夜の食事にでもどうだ？」

芦間に言われてから気づいたが、もう少しすれば面接の時刻というところまで時間が迫っていた。俺どんだけ店に居ただよ。確かに見て回るの楽しくなっちゃってちよい寄り道してしまったけど。

「え、でも私食事に誘われると決まったわけでは…」

「そんなこと言っても良いのか？食事に呼ばれるのは個人面接に合格した人だけだし、食事会のこともそもそもシークレットじゃないのか？」

八百長のようにも見えてしまうと危惧したが、周りには誰もいなかったのでひとまず安心した。

「これくらいは前情報でバレてるから大丈夫大丈夫」

咄嗟に島田さんを見ると、やや肩をすくめていたが、問題ないといった表情だった。

「まあ、彼女なら受かるでしょ。私は全く心配してないよ」

どこかへ旅行していた魂がようやく帰ってきた智佐吹さんが留美を励ました。

「今回の集団面接の選考は島田さんに一任してるのよね。あの人の好みに依るところは少なからずある……ってこれ以上は依怙臆員になっちゃうから内容は言えないけど、後は頑張ってね！うまくいけばそのまま今日にも内定が出るから」

「ありがとうございます」

「一日で内定が決まるってのが海外の就活の違いなあ」

「確かに二次や三次も一日で終わらせるのは日本だとあまり考えられないな」

「まあ、そうでもしないと日本に帰国してからもう一度会社に来てくださいってのもこういう場所でイベントやる意味も薄れちゃうしね。それに面接と面接の間にこつちの学生さんの熱も冷めちゃうでしょっ。」

「それは確かに」

もしそれで将来性の高い人材を取り逃してしまつたら元も子もない。このイベントに参加する費用も決して安くはない。ここに参加した全ての企業が海外人材の獲得に大金をはたいてやって来ている。何の成果も得られませんでした！じゃ洒落にならない。

「つて留美。うち志望なのか？」

留美がどうしてこのブースに来てるのか。そもその話に戻つてしまふが、紆余曲折あつてようやくその話題に焦点を合わせることが出来た。

「そうだけど」

「げ」

「何？」

「いや、何でもない…」

留美が弊社志望とは。コンサルか会計か。一応今回俺達はコンサル部門としてやって来たが、一応会計部門の採用も兼ねていた。会計部門は流石に俺達だけでは裁量が困難なので人間性と社風に人格が合っているかのみ島田さんや智佐吹さんが判断して、会計部門の人事で日本での二次選考がある。

「八幡」

「どうした？」

「……私が居ると嫌？」

留美が切なさそうな表情でこちらを見た。手を後ろで組んでいじらしそうに見上げてきた。小悪魔か己は。タイプすぎて直視出来ない。

「い、いや。そんなことはない」

我ながら見事なまでにキョドっている。

俺絶対今鼻の下伸びきつてるだろうな。鏡を見なくても分かる。自分でもびつくりするくらいルミルミにデレデレだ。

「そっか。良かった」

留美は屈託のない年相応な可愛らしい笑顔で感情を表現した。

何この可愛い子。もう電話番号聞きたい。いやいや、何考えてんだ俺は。結衣に殺される。

「ねえ、八幡」

「何だ？」

「夜は…居るの…？」

だからその聞き方はなんかこう変な気持ちになるから止めて！八幡心臓バツクバクだから！

「お、おう。い、居るぞ」

「分かった。じゃあ、待ってて」

それだけ言うと言美は踵を返した。これまでになく強い言葉だった。

殺人的な笑顔だった。留美が居なくなったのを確認してからトイレに駆け込んで顔を洗った。

御手洗から帰ってきた後に、智佐吹さんにすごい剣幕で留美との関係を問い詰められた。苜間には二の句が告げないといった表情で冷ややかに見られたことは言うまでもない。

その後、留美は集団面接や個人面接を余裕で突破し、食事会に参加する運びとなった。

続く

第三十二話

食事は選考を含むとはいえ、形式としてはアイスブレイクに近かった。食事会に呼ばれたのは六人。かなりの数の履歴書を受け取ってはいたのだが、思った以上に足切りしたらしい。

2つのテーブル席を使って出来る限り参加者たちが圧迫感を感じないようにはからった。

採用担当の島田さんと智佐吹さんはそれぞれ別のテーブルに座った。そしてそれぞれの机に俺と芦間が座るようにした。俺は島田さんの机の席に座ろうとしたら智佐吹さんに腕を引っ張られ、強引に席を決められた。食事会に呼ばれた学生たちはどこに座ろうかと悩んでいるようだ。男子達は留美の様子を窺っている。彼女の隣をキープしたいと思っているのだろう。他の女性達は単純にこの雰囲気には恐縮していた。

その中で留美が一切の迷いなく俺の隣を確保した。しかも端の席で前が智佐吹さんというポジションだった。あれ、集団行動の時、この子ってこんなに意志が強かったっけ？

留美の着席を皮切りに各々が場所を決めたようだった。男子達も一旦は自分の就活に集中しようとして切り替えたのか反対側の島田さんの近くに座っていた。そりゃあ今回の採用担当の責任者でもあるし、アピールするには絶好のポジションだろう。

食事会に選んだレストランはメキシコやスペイン料理がウリだった。野菜も肉も魚も揃っていてメニューの幅が広いので食事の好みやアレルギーなどの心配も無いだろうという理由からだった。

雰囲気はちよつとお高く、落ち着いたものだった。入り口に入っただけの場所にバーカウンターも設置されている。飲みに来るだけの客数も少ない。

少し暗い店内が良い演出をしている。男共が勝負所で使いそうな店だった。

「じゃあ皆さん、今日は好きに召し上がって下さい。ただし、自力で帰られる程度にはきちんとお酒は自制してくださいよ」

島田さんの一声とともに学生たちは目を輝かせながらメニューを見た。配られたメニューの冊子が人数分無いため隣同士で共用となっている。合コンか何かの儀式みたいだった。俺の隣は留美なので当然彼女と一緒に見ることになるわけで。

「……………」

困ったことに、さつきから留美が一言も喋っていない。留美の目の前にドリンクのページを開いたメニューを置いて待っていたのだが、一向に彼女の反応が貰えない。

「鶴見さん、飲み物はどうしますか？」

流石に、人前であったし一応仕事のスイッチを入れていたので下の名前と呼ばないよう徹していた。よく考えてみたら、名字呼びをするようになってから留美が口を効かなくなっただけかもしれない。目も合わせようとしてもしないんですけど。てか、コミュニケーション取る気ないのになんで君は俺の隣に座ったの？天の邪鬼なの？そういうお年頃？

「つでー」

足を蹴られた。右側に座っているのは一人しか居ない。当の本人はこちらをにらみつけている。防御力がぐつと下がりそうなくらい怜悯な目をしていらっしやる。氷の女王二世が早くも誕生しようとは思わなんだ。

「Are you guys ready to order？」

（ご注文は決まりましたか？）

店員さんが様子を見にこちらへ来た。こちらから頼まずとも注文を聞きにやってくるその精神嫌いじゃない。芦間曰くせつがちなだけらしいけど。店員から聞きに来るのが普通なのだろう。

「これにします」

いつの間にか留美が智佐吹さんの方を見てメニューを指差した。頼んだのはモヒートか。意外とオーソドックス。

「うん、分かった。それで、八幡君はどうするの？」

「あ」

「！」

え、この人何普通に下の名前で呼んじやってるの？ちよつと。芦間とか島田さんまで今までに見たことないような顔でこつちを見ている。あと、留美の顔から表情が更に消えたんですけど。

「え、えーつと…。じゃあ、か」

「Can we have one Kahlua and milk? (カルーアミルクを一つ頂けますか?)」

おい、さっきの問答は何だったんだ。いや、正解なんだけども。

「…子供だね」

留美が俺の飲み物に対してやけに辛辣だ。それよか全国のカルーアミルクファンに謝りたまへ。

「なんだと。カルーアミルクなめんなよ？アレはマツ缶と同じくらい評価されるべき人類の叡智だぞ」

「あんな甘ったるいのは無理」

「お前くらいの歳の女の子はスイーツ(笑)にハマってるんじゃないのか？」

「お前じゃない、留美」。あと、それ偏見。そんなこと言ったら八幡くらいの年齢はワインや日本酒にハマるものじゃないの？」

「八幡」じゃない、こういう場所では「比企谷さん」だ。あと、それは偏見だな。それに俺は一般大衆から外れることを人生の基軸としている。マイノリティ万歳だ」

「そういうところで自分を特別化しようとしてるところが子供。オコチャマン」

留美がくすくすと笑いながらこちらを見る。あとなんだオコチャマンつて。全然語呂合ってねーじゃねーか…。

「ぐ…。良いんだよ、もうアイデンティティ・クライシスなんぞ幾度となく経験してきたわ」

手元にあった水のグラスを手にとつて中身を飲んだ。こつちはコップまでLLサイズなのか。おかわりを頼まなくて済むから寧ろ良いけども。

「ねえ、八幡つてなんでそんな分かりづらい説明の仕方するの？」

結局「八幡」呼びに戻している留美が怪訝な顔をしてこちらを見

た。

「ふん、それが日本語の奥深さというものだ。どうやら単刀直入に言う文化に染まりすぎたようだな」

水の入ったグラスをかざして天井を透かして見る。我ながら超ダサイ。

「ふふふ。何それ」

何故か留美が笑った。ドン引きされるかと思ってたのに。

「全然カッコよくないよ」

「知ってる。てか、素でやったら本当にやばいやつじゃねーか」

「八幡ならやりかねないじゃん」

「ちよつと、俺のことどんな人間として認識してるんですか。名誉毀損ですよ?」

「変わってる人。他人は他人って割り切るくせに真正のお人好し」

「……」

なんでこういう時に限って真正面から来るかねえ…。八幡思わず黙ってしまいましたよ。

「ふふ。八幡もしかして照れてるの?」

留美が意地悪そうに覗き込んできた。だから、本当に可愛いから止めて。心臓がおかしくなる。

「……まあな」

そう返すのが精一杯だった。

「うん、そっか」

留美は一言だけそう言った。彼女の表情は窺い知れなかった。その顔を見てみたい。そう思った。

気まづくなつたところで丁度店員さんが凶つたかのようにドリンクを持ってきた。とりあえず一口含んでリセットしたい。あ、でも乾杯しないと…。

「それではこの度は弊社を志望して頂き誠にありがとうございます…つてまだ内定出した訳じゃないけど今日は楽しんで下さいの乾杯!」

『かんぱーい!』

何故か芦間が乾杯の音頭を取っていた。しかし、学生側も会社側も

それに乗って声を揃えて、グラスを合わせた。

俺も目の前の学生や智佐吹さんと乾杯した。

「…なあ、留美」

留美の方にグラスを差し出した。留美は一瞬驚いたような表情を見せたが直ぐに自分のグラスを手にとった。

「うん、乾杯」

心臓が跳ねるように高い接触音を奏でた。カルーアミルクが甘く感じた。留美は涼しい表情でモヒートを飲んでいる。こっちは内心滅茶苦茶になってるのになんだか癪だ。

周りの様子を見てみた。学生たちは各々が職場の雰囲気や業務内容について質問していた。彼らにとって会社選びは今後の人生を左右する重要なイベントなのでいつにも増して真剣な顔が見られた。正直自分が就活をした時はかなり軽い気持ちで望んでいたんだよなあ。嫌になったらさっさと辞めて専業主夫になろうと思っていたから。それが今、こんな事になっていきますよ。残業がむちゃんこ多い業界に身を置いているのだから人生分らないものだ。

「ねえ八幡」

留美が話しかけてきた。最初の景気づけの一口でモヒートが全く減っていなかった。彼女もそこまで酒には強くないのかもしれない。

「どうした？」

「総武高校卒業してからどんなことあったの？」

「ああ。ここに至るまでのことか。そりゃ気になるわな。反対に俺も気になるわ。留美がどうしてここにいるのかって経緯」

「別に私はどこにでもありそうな学生時代過ごしたただけだけど…」

「それがまた何で留学になったんだ？」

「昼にちよつと話したとは思うけど、総武高校の国際教養科に居たからかな。それで普通に日本の大学に向かうのもどうかあつて。日本の大学行っても飲み会って感じになりそうで雰囲気合わない気がしたから」

「なるほどな。中学高校は友達できたのか？」

「八幡、親みたいなこと言わないで。そんなに多くはなかったけど一

応居たよ。今はもう殆ど連絡取ってないけど」

「そうか、でもまあ俺もそんな感じだわ。結婚してから特にそうなたかもしれない。何ヶ月に一回かの総武高校メンバーの集会ぐらいだな」

「え……？」

留美の顔から血の気が引いていた。何か驚くようなことでもあったか。

手元にグラスを持っていたら床に落としてしまうんじゃないかという程に雷に打たれていた。

「八幡……結婚、したの……？」

「あ、ああ。そうだな」

「………そう、なんだ」

蚊の鳴くような声で留美は答えた。

留美は暫く俯いていた。肩が震えているようにも見えたがここからはどんな顔をしているのかが分からない。モヒートの入ったグラスの氷の山が崩れる音が聴こえた。周りは騒がしい。だが、彼女の周りだけ世界が切り取られたかのように時の流れが緩やかになっていた。

「…あの時居た黒い髪の人？」

留美が下を向いたまま口を開く。あの時居た黒い髪の人？

「もしかして雪ノ下のことか？」

「名前言われても分からない。物静かで毒舌で髪にリボンをつけてた人」

留美は自分の髪を使って雪ノ下がリボンを付けていた位置を示した。

「ああ、それで合ってる。あ、でも俺の結婚相手ってそいつじゃないぞ。もう一人のお団子ヘアの明るい性格の方だ」

「え、そっちな？」

留美の頭の上に5つほどクエスチョンマークが浮かんでいた。何か似たような会話を前にもした気がする。そんなに俺と結衣が一緒になったことが意外なのか。

「なんというか昔、他のやつにも俺の結婚相手が雪ノ下だと思われていたんだよなあ」

「うん、私も意外。てっきり八幡はあの黒い髪の人が好きだと思ってた」

「な、何でそう考えたんだ？」

あまりにも予期せぬ一言に危うく心臓が飛び出そうになった。思わずカルーアミルクを飲んでから、水を口に含んだ。背筋に何かが蠢いているような気味の悪さを感じた。

「何でって…その人と話してる時が一番八幡が楽しそうだったから、かなあ」

「……そうか。やっぱりそう見えるのか」

「うん」

もう一度水を飲んだ。留美はホットコーヒーを飲むように眼の前でグラスを両手で持っている。俺の所作を一つも逃さない。それくらいじっと見つめていた。そこまでされると八幡照れちゃうぞ。いや、もう顔真っ赤だけど。

「どうしてその人を選んだの？」

留美は遠慮もなく俺の心の中に入り込もうとしている。いつもであれば不快な言動も留美に言われると、自然と自分の感情奥深くに落とし込むことが出来た。

「どうして、か」

グラスを置いてひとしきり考えた。あの時、何故俺は雪ノ下ではなく結衣を選んだのだろうか。

「…あの時は、それが俺達にとって一番と考えたからかもしれない」

「二人にとって…ってこと？」

「いや、あの時は雪ノ下と俺と結衣の三人にとってそれが一番と考えてた…」

「どういうこと？」

留美は解せないという面持ちだった。

「それは。まだ言えない…。でもそうするしかなかったって思ったなあ」

「分かった。ごめんね、言いたくないことまで聞いちゃって…」
「いや、気にするな。留美は悪くない」

口を噤んだ。この期に及んでまだ踏み出す勇氣を持たない自分が居た。周りの喧騒が遠くに聞こえる。眼の前に注文した料理が並べられた。炒めた野菜の上に一塊の大きな牛肉が載ったプレートや海老のアヒージョだった。学生たちが前菜で食べたワカモレとトルティーヤチップスの大皿を店員に渡した。同時に二杯目の注文を行っている。自分のカルーアミルクは半分も減っていなかった。

「悪い、暗い話になったな。何かうちの会社で気になることとかあれば、聞いてくれ」

氣を持ち直して留美に向き直った。今は仕事であり、昔懐かしい再会を楽しむ時間であるべきだ。

「…いいの？」

留美は俺の事を心配している。それだけでも嬉しかった。

「俺だって大人だ。自分のことぐらい自分でなんとかする。学生時代の頃からずっとやってきてたことだ」

親指を自身に向けてドヤ顔を作った。キマってないけどキマったことに強引にした。それくらいやらないと気持ちを切り替えられなかったからだ。

「ふふ。だからそれ、全然カッコ良くないって」

留美の顔に笑顔が戻った。背中や顔に嫌な脂汗を大量にかいた甲斐があったというものだ。グラスに入っていたカルーアミルクを一気に飲み干した。うん、美味しい。でも、俺にしてはペース早いからしばらくは水を飲もう。

「八幡って大学でも一人だったの？」

「ん？まあそうだな。って辛辣なこと言うなよ…。結衣…今のカミさんとは大学違ってたからそんなには交流は無かった。一応、最低限の人付き合いはしてたけども今でも会うって人はいないな」

「そうなんだ。じゃあどうしてこの会社に入ったの？」

「成り行きみたいなものだ。俺、奉仕部って部活に所属してただろ？その延長で問題解決の道に進むのが一番自分の強みを活かせるって

思って面接したら受かったからそこにしただけだ。まあ、一番の志望は専業主夫だったけどな」

「それ、本気だったんだ…」

留美がドン引きしていた。正直、今でも専業主夫の道は諦めてないんですけど。

「まあな。その後、就職してしばらくして仕事に慣れて、周りが見えるようになってから結衣と結婚したって感じだ」

「ふーん。じゃあ、あの黒髪の人とはもう連絡しなくなっちゃったの？」

もう連絡しなくなった、か。まあ、現状はそんな感じではあるけどな。

「ああ、大学在学中で疎遠になってただけでも、この前仕事の取引先がそいつの居る会社でバツタリ再会した」

「そんな事あるんだね」

「俺も驚いた。まさか、こんなところで会うなんて思ってもみなかったからな。…つてまた俺の身の上話になってるけど良いのか？ここには就活に来てるんだろ？こんな話じゃ退屈じゃないか？」

「別に大丈夫。八幡ともっと話したいから」

「ど直球に照れること言わないでくれませんかね…」

「八幡、顔赤い」

口端を上げながら留美が顔を覗き込んでくる。紅潮が増してしまふ。その時改めて留美の顔を見た。ほんの数年で彼女は本当に見違えるほどの美人になっていた。芸術とも言える均整の取れた顔つきに白い肌。艶味のかかった黒髪。どれをみても心を奪われる。

「さつき酒を一气飲みましたからな。そのせいで赤いかもな」

「ふーん。本当に？」

「・・・察してくれ」

「そっか。でも私もすごく顔赤いと思う」

「なんでだ？」

「お酒のせい」

「本当にそうか？」

「秘密」

「おい、そこは言わないのかよ…」

「八幡なら分かるでしょ？」

「買いかぶり過ぎだ。俺は人の心を読むことには鈍感だと高校の担任に注意されたことがある」

「心理を読んだ上で行動するのは得意なのに…。八幡って不器用だね」

留美は一瞬がっかりしたような表情を見せた。

「我ながら器用に不器用かもしれん。だがそれも個性だ。長所として評価してもらいたいな」

「屁理屈こねるところも長所？」

「…きつい一言を言つてとどめを刺すのが留美の長所だな」

「よく言われる」

留美は悪気もなく笑っている。そういえば昔と比べると随分と垢抜けて話すようになった。

「八幡つてさ。会社で何してるの？」

「唐突に真面目な話に戻ったな…。俺はコンサルの部署に居るぞ。やることつて言ったら会議の資料作ったり、クライアントの会社に出向行ったりして業務やったり。コンサルつて言つても保険会社に派遣されて保険売ったりとかもやったから業務の幅はかなり広いと思う。留美はどこに入ろうと思ってるんだ？」

「私の専攻が一応ビジネスだから会計かコンサルどっちかにしようかになって。だから応募もそんな感じにするつもり。会計なら税務にしようと思ってる」

「留美つて数字強いのか？」

「苦手じゃない。八幡は数学駄目なの？」

「数式を見るのも嫌なくらいだ」

「ふふ。じゃあ学年最下位とかだった？」

「ドベではない。下から数えたほうが早いだけだ」

「本当に？」

「…下位一桁とかだった」

「それ、もう殆どビリじゃん」

「ビリじゃねーわ！ビリは一番出来ないやつの事だ」

「分かったよ。ビリ幡」

「こいつ……」

腹いせに眼の前に置いてあつた鶏肉を食べた。本当は俺や留美で分けて食べる物だったが、少しだけ俺が多めに食ってやった。我ながらさもない復讐心。

「ねえ八幡。この後の滞在ってどんな予定なの？」

「明日は今日あつた選考の会議。その後、2日3日かけてこつちにある仲介企業の担当との食事会の予定が入ってる」

「そうなんだ。空いている日とかないの？」

「食事会が基本的に夜だから厳しいかもしれん。でも逆に言えば日中とかは空いてるかもな。自由時間貰えている。もしかしたら今後また予定が変わるかもしれないけどな」

「じゃ、じゃあさ、、空いている時間に会えない？」
「え」

留美の方からその話が出てくるとは思わなかつたので正直驚いた。なんですか、八幡誤解しちゃうじゃないですか。期待はしていませんよ、うん。本当に。

「ま、まあ大丈夫だ。…て会うにしても、留美の住んでいる場所から俺が泊まっているところの距離次第になりそうだけだな」

「うん、そうだね。八幡は今どこのホテルに泊まっているの？」

「どこって言われても俺土地勘がないからホテルの名前をマップに入れてその住所検索した方が早いかもしれん」

携帯を取り出して滞在先の名前を入力すると地図上に住所が表示された。その画面をそのまま留美に見せる。

留美は身体をこちらに寄せて携帯を覗き込んだ。あの、当たつてる。色々なところがそりやあもう、こう、理性に歯止めが効かないくらいに…。

こうして間近で見ると留美は本当に色気を帯びたなあと思う。今は髪を纏めているが、下ろしたらもっと美人なんだろうなあ。初対面

で会ったとしたら間違いないくこつちが童貞丸出しの態度になる。まあ俺童貞じゃないんですけどね。

「ここだったら車で15分位で行けるから近い」

「そうか、でもそつちはテストの予定とか大丈夫なのか？」

「今週で中間試験が終わった。だから来週は割と余裕ある」

この時期に中間試験か。どうやら、日本とテスト週間の時期が全然違うらしい。

「そうか。なら会えそうだな」

「うん」

会社の食事会で堂々と参加者の女の子と会う約束を取り付ける男、比企谷八幡。ん？よく考えてみたら、これってただの危ないやつじゃないか？眼の前で智佐吹さんが殺意の波動に目覚めてるし。芦間は呆れた目でこつち見てるし。でも俺にしか見えない角度で親指立ててる。あ、違った、中指だったわ。

「ねえ、待ち合わせとかに困るから八幡の連絡先教えて」

留美が自身のスマホを取り出していた。彼女の歳であれば少し明るめの物かキャラクターなどのポップな見た目のケースを装着しているものだろうが、案の定留美のスマホは透明なハードカバーが取り付けられているだけでシンプルな構成となっていた。

「おう、それもそうだな。というか留美は普段何のツールで連絡取ってるんだ？芦間にこつちだとFacebookが多いって聞いたが」
「Facebookは学生活動や授業の時に使うだけ。普通にLINEでいい」

「そうか。ならはい。QR開いておいたからそれで登録しといてくれ」

「え」と俺は留美に携帯を渡した。

「え」

端末を受け取った留美はどうしたら良いのかわからないといった様子だ。

しかしながら、何故携帯を渡しただけで相手はこれ以上無いほどの動揺するのだろうか。別に俺は見られたくない情報も無い。会社の

情報も会社支給のパソコンと携帯電話に全て避難してあるので機密漏洩の心配も無用だ。

「八幡ってさ。プライバシーの心配とか無いの？」

「よく聞かれるが、別に無いぞ。見られて困ることも無いしな」

「ふーん。昨日八幡は奥さんらしき人と三時間も電話したんだね」

「な!?!おい、見たのか!?!」

「見てないよ。当てずっぽうで言っただけ。というか本当にそんなに電話してたの？」

留美は二の句が継げないといった様子だった。モヒートを飲み直して口を整えている。

「別に普通じゃないのか？俺が出張に行ったら大体結衣とはこれくらい電話するぞ。因みに、正確には昨日の電話時間は三時間四十八分十七秒だ」

「それ、もう四時間じゃん」

ただのノロケ話に付き合わされた留美が気の毒だ、と正面の智佐吹さんが大きなため息をついた。留美は「いつものことなので大丈夫です」とフォローしてくれた。

「もう、何かその彼のことなら分かってますよかんちよつと鼻についてちゃうなあ…」

「ええ。彼のことなら何年も前に理解しているつもりですから」

「くっ…!この子。手強い……」

さつきからこの二人は何を話しているのだろうか。途中から声小さくなつてたから全く分からん。

その後も他愛のない話を二人で永遠としていた。そうして話すうちに自然と留美の魅力に惹かれていく自分がいた。本当に綺麗になった。留美を見てただそう思った。

「さて、今日はこれでお開きにしましょうか。芦間君、お店のスタッフさんを呼んでもらえますか？」

「承知しました」

芦間が手を挙げると直ぐにスタッフがこちらに気がついて駆け

寄ってきた。流石にちよつとお高い店なので店員の気配りもそれなりのものだった。

「こっちの店ってメニューに書かれている金額の合計だけじゃなくてチップの代金もかかるからどうしても出費がかさむよなあ…」

「そういえばこっちにはそういう文化があったな。それって大体どのくらい払うものなんだ？」

「大体合計金額の15〜20%くらい。別に払う義務はないんだけど、サービスが良ければそのお礼として払うのが暗黙の了解みたいになつてる」

芦間の代わりに留美が答えた。この人数で結構食べたからチップだけでもかなりの値段になつていそうだ。まあ経費で落ちるだろう。島田さんがいるし。身銭を切る羽目になつたとしても最年少の俺にまでその火の粉がかかることはない。タダ飯最高。これほど美味しい食事は無いZE☆

「八幡、またくだらないこと考えてたでしょ」

荷物を持って出る準備を整えていると既に支度を終えた留美がジト目でこちらを見ている。

「俺ってそんなに顔に出るの？」

「うん」

「そ、そうか…」

「まあそれも八幡の良さだよ」

「それ褒めてるんだよな？」

「八幡の受け止め方次第かな」

留美は軽い足取りで店の外へと先に歩いていった。他の参加者たちが全員退出したことを確認してからもう一度机の周りを確認し、忘れ物がないかの確認をしてから俺達も外へと出た。

「皆さん、本日は弊社の食事会に参加いただき誠に有難うございました」

島田さんが今日参加してくれた学生たちに対して深々と頭を下げた。そのあまりの平身低頭さに主催側の俺まで圧倒されてしまい思わず自分も頭を深々と下げた。顔を上げた時に留美が少しだけ笑い

をこらえていたのが目に入った。それを見て急に恥ずかしくなってきたぞ。一刻も早くこの場から離れて落ち着きたい。

「選考の結果ですが、それぞれ履歴書に掻いて下さった連絡先に後日、個別にメールを送ります。3日後には結果がわかると思いますが、各自確認をお願いします」

「別に今回が駄目だったとしてもボストンの方でまた応募することは出来るからね。こんな事を言ったらアレかも分かんないけど、それにボストンで初めてうちに面接に来た人よりは人事の目は好印象に映るかもだね」

ガチャの意欲を起こさせるソシヤゲの広告のような言い回しだな。まあ俺みたいな野郎でも拾う物好きな会社だから是非とも応募して欲しい。後輩は多い方が良い。俺の仕事をやってもらって定時で帰られるようにしたい。これほんと切実。

「お前どうせワークシェアリングでもして自分の仕事減らしたる!…とか考えてんだろ?」

芦間に釘を刺された。

「え、また顔に出てたか?」

「いっぺん鏡見てこい」

「ほら、学生さんたちを見送るからシヤキツとしなさい」

智佐吹さんに尻を叩かれた。ネクタイを締め直してもう一度参加者たちに向き直る。

「じゃあこんなところに居続けたら夜は危険だしおひらきにしましょ。皆ここからの帰り方は分かる?」

「UberやLycft使うので問題ないですよ。皆で乗り合いにすれば安くつきますし」

「こつちならVenmo使えば割り勘も簡単だしなあ。てか智佐吹さん、帰り道と言え、この子達よりも貴方のほうが」

芦間がそう付け加えた。余計なことは言わなくてもいいと智佐吹さんが目で制していた。

「べんも…?何だそれ?」

「今度教えてあげる」と留美が言う。あの、全員の前でそうやって、会

いますよアピールされるとこつちも色々と恥ずかしいんですがそれは…。解散した後の同僚たちからの冷たい視線に耐えられる自信も皆無だ。

「彼らを見送ってから私達も車呼ぼっか」

「法律破りまくりの超便利サービス様万歳」

芦間が両手を上げながらわけの分からぬことを言う。

「そうなのか？」

「Uberはフランスだと罰金物でUberは罰金払いながらサービスやってる。ドイツならそもそもこの手のサービスが禁止。この国内ですら州に依っては業務停止命令出されているのぜ」

「それでも皆便利だから使う。政府は消費者という巨大なグループを敵に回すことが難しいから対処に困っている。そうしている間にユーザーは増えていき、そのサービスと組織は絶対のものになっていくわけですね。シリコンバレーの企業にはよくあることです」「なるほど」

「お、向こうさんの車は来たみたいやね」

芦間が言った方に目をやると確かに黒いバンがこちらに向かってきていた。あの大きさであれば彼らが全員乗ることが出来そうだ。

「すげえ早いな」

「近くにいるドライバーを自動で検索してくれるからこんなもんだぞ」

「八幡」

留美が隣りにいた。

「おう。どした？」

「後で私の方から連絡するね。その時に予定決めよ」

「分かった。でも、この後またちよつと会社で話あるからそれ終わってからの返信になるかもしれないぞ。それでも良いか？」

「うん。今日は宿題やってるから夜遅くまで大丈夫」

「健康に悪いぞ。てかテスト終わったんじゃないのか？」

「ちゃんと寝てるよ。テストが終わったとしても宿題は毎週のように出てる。私の大学四学期制だから」

「日本の大学は大体二学期制な」と芦間が補足した。あまりよくは理解していないが俺らよりもペースが早いつて認識で間違つてないだろうか。

「まあ忙しくなると思うから今日は早めに寝てくれ。12時回ったら俺も流石に気を遣うからな」

「分かった」

「鶴見さん、そろそろ…」

学生側のまとめ役の男性が留美を呼んでいた。どうやら他の学生達は既に車に乗り込んでいるらしい。留美が最後だった。

「八幡。またね」

「おう。気を付けてな」

「家の前に車つけるから大丈夫だよ。でもありがとう」

留美が助手席に座ると間もなくして車が発進した。助手席の中からも彼女が手を振っているのが見えた。いかんいかん、ここで手を振ったら完全に彼女の印象が良かったとしても八百長や裏口を疑われる。

俺は車に深々とお辞儀をして彼女たちを見送った。

「比企谷、お前つてば凄い彼女に気に入られてたな」

芦間が感心したように呟く。島田さんも「比企谷君も隅に置けないですね」とそれに続いた。残り一名は他の二人とは違い鬼の形相だが。

「いろはちゃんに報告だね〜これは…」

脇腹を抓られながら身体を密着させられる。

「すみません、それだけのご容赦を」

俺これで頭下げるの何回目だっけ？

続く

第三十二・五話 Part. A

—Side Ironha—

先輩が出張に出かけてから3日が経過した。先輩たちの班が居なくなつて初めて思う彼らの存在感。オフィス全体に虚無が広がり、静かな空間を作り出しているのがカウンターにまで伝わっていた。

かくいう私もこの数日間は自己評価でも気分が沈んでいるのが明らかだった。

「はあ…」

これで何度目の溜息になるだろう。こんなにも自分が分かりやすい人間だとは思わなかった。

「比企谷君がいなくて寂しい？」

隣りに座っている玉木さんに声をかけられる。そんなこと言わずもがなじゃないですか。この人分かつて聞いてくるからいやらしい。

「…そうです、ね。自分の先輩依存症っぷりが大学時代よりもすこぶる悪化していました。最近は週末と出向以外の日は会えていましたから」

「たしかにそうだね。・いろはちゃん程じゃないけど私も比企谷君口スが出てるかも…」

玉木さんも同じく大きな溜息をついた。最近、この人の先輩に対する好意がますます露骨になってきている気がする。

「今頃、先輩はアメリカかあ」

「ちーちゃんに先を越されないか心配？」

「そりゃあ、そうですね。だってあの人も先輩狙ってますよね…」

「そうだね。ちーちゃん絶対さ、出張で独り占め出来て『ざまあみろ真紀』とか言ってると思う」

「え、二人ってそんな仲なんですか？」

「別に普段は仲いいよ。男の趣味が結構被って取り合いになるんだけだよ。結局お互いに奥手で何の発展も無しのまま他の女に盗られて終わるのがオチだよ。でも比企谷君に対してはさ、私もちーちゃ

んも今までに無いくらい本気だから今回はどうなるかわからないかもね」

露骨に宣戦布告された。この人がここまで感情を表に出すのって珍しいなあ。

「なんかそういう玉木さんの方が私好きです」

「え、そ、そう言ってもらえるとなんか嬉しいけど…。じゃあそれついでにちよつと話聞いてもらっても良い？」

急に子供っぽくなったなあ。普段この人も大人の雰囲気絶やさない努力をしているんだと感じた。

「良いですよ・同志ですからね♪どうしました？」

このいろは先生がズバツと解決しちゃいましたよ☆…なんちゃつて。

「この前比企谷君を食事に誘ったら断られちゃつて…。どうやったら彼を呼べるかなつて。ほら、いろはちゃんつて毎比比企谷君捕まえられてるから」

「…なん…ですと？」

ちよつと聞いてないんですけど!?!もうこの人動いてるの!?!これは私もうかうかしていられない気がする。この前の飲み会で分かったことだけど先輩つてば年上の女性にかなり弱い。しかも智佐吹さんと玉木さんとなれば籠絡させられるのは最早時間の問題ではないか。あの身体で誘惑でもされたら先輩は絶対に落ちる。ボケつとしていたら間違いなく寝取られる。いや、私の男じゃないけど。

「別に誘えているというよりはかなり強引に連行してるんですけどね…。第一、先輩の方から私のことを誘ってきてくれたことなんて付き合い長いですけど一度も無いですし」

「それだと私の性格を加味されて比企谷君に裏があると思われそうなんだよねえ〜」

「なるほど…。というか驚きました。玉木さんも先輩狙いだなんて。世間的に見たら私達が考えていることつて絶対アウトだから…」

「ん?まあしょうがないでしょ。好きになつちやつたんだから。好きになつた人に偶々奥さんが居ただけのことじゃない?」

揺さぶったつもりが何枚も上手な返しをされた。でも今の玉木さんの言葉には私も救われた。そういう言い訳で先輩を攻めるのもアリかもしれない。

私の予想が正しければ先輩の砦は順調に崩れていて、あともう一押し大きな要因があれば落とせる。そういう段階にまで来ていた。長かった先輩攻略もようやく悲願達成の目処が立ってきた。それもこれも皮肉なことに最大の好敵手の出現によってなんだけども。

雪乃さんとの再会は先輩にとっても相当の打撃だったようだった。あの日以来、先輩の様子が見るからに浮ついているのが分かる。先輩は上手に隠しているつもりらしいけど先輩のことを好きな女性軍は全員彼の機微の変化に敏感なので全く隠し通せていない。おそらく先輩は雪乃さんと近い内に関係を持つ。そうなったら私達が一齐に誘惑して先輩を墮とせばいい。正直私が一番になりたいという欲望は未だに捨てきれないけど、ここは背に腹は代えられない。智佐吹さんや玉木さん達と協力してでも先輩を沼に引きずり込まねばこんなチャンスは二度と訪れない。

とはいえ、しばらくは先輩も雪乃さんとの関係に溺れて他の女性に目が入らなくなる時期が続くだろう。しかし、浮気が結衣さんにバレてもう絶対にはしないと先輩が決心してからでは遅い。雪乃さんとの関係を持ちつつ、それが冷めて先輩が他の女性へと目が移りし始めるその瞬間に私が口説く。これが理想だ。

タイミングを見誤ってはならない。此処から先は事を慎重に進めていく段階だ。玉木さんや智佐吹さんがいつ動くのかだろう。自己評価で現状私は雪乃さんに次いで二番手の位置についているはず。この位置をキープしつつ彼女たちとも手を組んで先輩を籠絡する。

玉木さんをチラと見る。爽やかな笑顔を見せる彼女の目の奥にはどんな野望を秘めているのか私には分からない。彼女も間違いなく先輩の様子の変化には気づいている。智佐吹さんと先輩が出張から帰ってきてからが勝負だな。あの二人の関係の発展次第で玉木さんの出方が変わるはず。後手に回るのは癪だけど二人次第といったところか。

「どうしたのいろはちゃん？表情が固いよ」

「いえ、ちよつと先輩の事をまた考えちゃつて」

この人には下手な隠し方は通用しない。だから敢えて隠さない。

「そっか。はあく…それだけ毎日彼の事を考えてやつと二番手なのかあ…」

「二番手じゃなくて三番手ですね…。本当割に合わないですよ、あの人」

「え、いろはちゃんよりも上が居るの!？」

「そうですね…。玉木さん会ったことありますよ。ほら、最近良く来てた黒髪の…」

「あー、あのすつごい美人さん？やっぱり彼の昔からの知り合いとか？」

「そうですね。先輩夫婦と同じ部活の方です」

「それって、いろはちゃんにとっては最大のライバルじゃない？」

「その通りですね。ただ、現状だと私なんかは相手にならないですよ。自分で言うのは悔しいけど、先輩は今雪乃さんのことしか目に入っていない。あれだけ何年も時間をかけて、少しは埋まったかと思つていた差。それが私の幻想だったとたった一日で思い知らされた。最近は悔しさに夜も寝付けない。」

「そっか。それでいろはちゃんとしてはその人とはどう付き合うつもりなの？」

「どうもこうも敵に回したら絶対に駄目な人ですよ雪乃さんは。それに私、あの人には昔お世話になつてるんです。そりゃあ恋敵ですけど寧ろ応援したいと思つてますよ」

「あれ、そうなの？なんだか意外だなあ」

玉木さんは私の答えに目を丸くしていた。確かに、私の性格上相手を蹴落とすような動きを見せると思われていてもおかしくない。

「私だって敵味方の取捨選択は間違えませんよ」

笑顔でそう返した。貴方も敵ではなく味方として受け入れるという意味も込めてだ。

「そう、ありがとう。私も同じ気持ちだよ」

どうか。私の推察が正しければこの人ほど野心を胸に秘めている人は見たことがない。自分の大望のためなら閻魔大王や邪神にだって笑顔で酌するような女性だ。

「そう邪険にしないで。私はいろはちゃんのこと友達として好きなんだから。なんだか自分を見ているようで嫌いになれないの」

「むう、どういう意味ですかそれ？」

「いいの、別に大したことじゃないから。いろはちゃんのこととは絶対に裏切らない。だから安心して？」

いつものように煙に巻かれた。こうなるとこの人絶対に口を割らないから今は大人しく引くしかない。食い下がるだけ不毛だ。

「…分かりました。そういう事にしておきます」

「よろしい。じゃあ前金代わりに一つだけいろはちゃんに私の見解を教えてあげる」

「見解？」

何のことかさっぱり分からなかったが、彼女に耳を傾けることにした。

「多分だけどね……。比企谷君、アメリカで女の人作ると思うよ」

——C 大学にて……

「今日はいつにも増して機嫌が良さそうっすね留美さん」

クロが小さな声でそう言う。彼らがいる場所が図書館の勉強スペースなので大きな声を出すことが出来ない。

「え、そう見える？」

留美はきよとんとした表情で返した。こいつ自覚無しなのかとクロが頭を抱える。

「それで、何かあったんすか？」

「ロスキャリに行ってきた」

「あ、うん。それは分かるんだけど……」

珍しく要領を得ない彼女の説明にこれはかなり大きな出来事が起

こっつているとクロは直感した。

「私が担当している企業の人事に会ってきた。そしたらそこに昔の知り合いが働いてることが分かっただけ」

「それでその人が留美さんの想い人だったということですね、把握」
「っそ、そうじゃ………ない」

こっつても凶星だと分かりやすく助かる。留美は元より隠し事が下手だった。

「うわあ音量がすごく竜頭蛇尾……。というか本当に正解なんですか？冗談半分で言ったのに当たるとは思ってもみなかったわ」

「で、でもその人。もう結婚してる……」

「Oh……。まさかの既婚者狙い……」

クロが分かりやすく頭を抱えた。

「なるほど。じゃあ何事もなく終わりっすか？……いや、でもそんな感じじゃなさそうだ。もしそうなら留美さんの表情は死んでるはずだし。ひよっとして連絡先の交換とか成功しました？」

クロが下品な笑みを浮かべた。

「今度二人で会う」

「展開が早いわ！」

クロが場所もわきまえず大声でツッコんだ。反り返るほどの大きなりアクションをとったために椅子から転げ落ちそうになっていた。周りからの避難の視線が彼に突き刺さり針のむしろとなっていた。

クロは周りの生徒達に謝るような仕草をしながら席を正した。

「いきなりデートとは恐れ入った。留美さん結構やるんすね」

クロが感心している。留美がここまで盲目になるとは思ってもみなかったらしい。

「で、デート……。になるのかなあ……」

「とういか留美さんの中では二人で会うってのはどういう認識になってるんですか？」

「え、久しぶりに話そうよってくらいに思ってたんだけど……」

「貴方がそんな事を言う時点でこっちは晴天の霹靂なんですすがそれは

…」

留美はとにかく男っ気が無い。クロが図書館に呼び出しを食らうのは勿論日本人会の会議のためでもあるが、男避けも理由の一つだった。留美が一人で居ると事ある毎に男性が話しかけてきて勉強にならなかつたからだ。だからこそ留美の今回の行動そのものにクロは大きな衝撃を受けていた。

「場所とかは決めたんですか？」

「ううん、まだ。その日の夜にLINE送っただけけどまだ返信来ない。もしかしたら仕事が忙しいのかも」

「乙女かあんた」

「クロ、それどういう意味？」

「何でもございませぬ」

「クロぐらいだよ。私のこと女性として見てないの」

「自分は二次元命なもんで」

クロが主張をするように今自分が着ているアニメキャラが描かれたTシャツを見せた。生地には白い髪の毛の少女がプリントされていた。

「それ、有名なの？」

「ごち○さをご存じない!?神アニメですよ」

「アニメ見ないから」

「まあ、そうですね。自分は難民なもんで毎クールの日常系アニメのキャンプを転々としてますよ」

「クロが何言ってるのか分からない」

「いつものことじゃないですか」

「そうだね」

「納得されたらされたでなんかちよつと…、うん。まあいいや。ってキタさんから連絡来ましたね。ジム行く。ベンプレやるから付き合え」だと」

「いいよ、こっちは大丈夫。私もそろそろ部屋に戻るから」

「了解つす。とりあえず人事の人とも話せたのならOKです。あと一応、応援してますよ」

「…！余計なお世話」

クロは手早く荷物を纏めると寮へと駆け足で向かった。残された留美は音をたてぬよう後から静かに退出した。携帯を見ると新着メッセージが一件来ていた。留美は逸る気持ちを抑えながら徐に携帯のロックを解除した。

分かりやすいほどに留美の口端が釣り上がっているのを、後ろを振り返ったクロは見逃さなかった。

続く

第三十二・五話 Part. B

—Side Hachiman—

会議を終えてようやく部屋で落ち着く時間を得ると時刻は既に夜の10時だった。時差ボケも相まってかなりの気怠さが身体に降りかかる。このラグが抜ける頃にはまた日本に帰国になるのだから面倒なことこの上ない。

「ふう、流石に身体に堪えるな…」

俺ももうすぐ三十路になる。総武高校時代の平塚先生と同じ年齢になってしまっていた。流石に身体の衰えを節々に覚える歳になってきたがそう考えるとあの人のこの歳でよくあんなにもエネルギーに動けたよなあ…。片や俺はというと、学生時代からあまり身体を動かすことをしてきていないが故に生活習慣病も心配される。

ん？通知がある。

スマホの新着メッセージを確認した。

『仕事大丈夫？もしかして、会えない？』

留美からだった。食事会で解散した後、会議もあつて留美に返信出来ていなかった。そして今日も仲介企業との脈づくりに奔走していた。留美を随分と待たせてしまっている。部屋に着いて、服を着替える前にLINEを立ち上げて留美に返信した。

『すまん、ようやく仕事が落ち着いた。明日なら午後から時間が作れるがそっちの予定は？』

同じくして一色や結衣からのメッセージに返信をしようとしたその時スマホのバイブレーションが手に伝わる。

『うん大丈夫』

留美からだった。見るの早いな。

『そうか。どこで会うのが都合が良い？』

『八幡の泊まっているホテルの近くでいい』

『いいのか？』

『逆に私の大学の近くだと知り合いとかに会いそうだから』

『そうか』

確かに、あまり俺たちが公で会うのは好ましくないだろう。俺も一応既婚者ではあるのだし。

『ホテルの近くにカフェとかある？』

『直ぐそこにスタバがあった』

『じゃあそこにしよ』

『分かった。昼飯はどうする？』

『今日の夜の残りがあつた。こつちで食べてから行くから八幡も先に食べておいて』

『了解した。てか、留美は料理するのか？』

『外食だとお金がかかるから一人で食べる時はいつも作つてた。今は寮に住んでいるから作らないけど』

『偉いな』

『そうでもない。サラダだけで終わらせちゃうことが殆どだったよ。だからそんなにしつかりと主婦みたいな感じで料理するわけじゃない』

『そうか。それでも今時の女子は料理の“り”の字も知らないのが少なくないから勉強と両立させながらやっているのは中々出来ることじゃないぞ』

『うん、ありがとう』

褒めると素直に受け入れるあたり留美らしくもないと感じてしまふ俺は捻くれているのだろうか。

『俺なんか一人で生活してた時は毎回コンビニ弁当だったわ』

『八幡不健康じゃん。奥さんは料理する人なの？』

『まあ料理はするが、味は、うん、そうだな、最初は食べたものじゃなかった』

『今は大丈夫なの？今度何か作つてあげよつか？』

『機会があれば食つてみたい』

『なら明日は無理だけど、今度食べさせてあげる』

あれ？なんか二回目の約束もされた気がする。気のせいだよな？うん、きつとそうだ。

『話がそれてしまったから戻すけど、纏めるとスタバに二時とかでい

いのか?』

『うん。それで私も大丈夫』

『おk、じゃあその予定で』

『ねえ八幡』

『なんだ?』

『明日は長く一緒に居られる?』

え、何この可愛い女の子。思わずグツと来ちゃいましたよ。

『ああ、明日は夜も空いているぞ』

『そっか』

翌々考えたらこの言い方もまずかった気がする。

『まあ積もる話もお互いあるだろうから丁度良いんじゃないか?』

『うん。明日楽しみにしてる』

『おう、俺も楽しみだ』

『じゃあそろそろ寝るね。昨日遅くまで起きてたから』

『分かった。ゆっくり休め。あと、明日よろしくな』

『ありがと、おやすみ。あと、こちらこそ明日よろしく』

留美とのチャットを終えた俺は携帯を充電器に接続した。疲弊した身体をベッドの上に投げ出す。暖色の間接照明の光が目に入る。ベッド横の小机に置いてあるパッド端末を手を取った。最近はこちらでカーテンの開閉や電気の明るさの調節を行えるらしい。もはや動かずして寝る準備が出来るとは驚きだ。ゆくゆくは働かなくても済むような便利な世の中になればいい。流石に現代科学でも着替えやシャワーは自分でやらなければならないのでベッドの上を転がるようにして床に降り立った。

流石それなりに良いホテルだけあってベッドの感触も非常に良い。ただ一つ申したいことがあるとすれば枕が柔らかすぎ。そば殻とか固い方が俺にとっては寝やすい。このホテルに置かれていた物は最早枕というよりはクッションだった。

その時だった。スマートフォンが着信を告げる声をあげる。

画面には一色いろはと表示されていた。そういえば、毎晩電話するようにと半ば強引に約束させられていた気がする。

「はい、比企谷です」

一応、形式的な言葉で電話に応じた。

『…先輩、私の名前ちゃんと画面に表示されてましたよね？』

「まあな。もしかしたら電話の相手が一色じゃない可能性もある」

『私は別に自分の携帯を人に渡したりしませんよ…』

そんなに他人行儀だったのが悪かったのだろうか。今になってこれくらいで起こられるような関係でもない気がするが。

『先輩は今一人ですか？』

「おう、今はホテルの部屋にいるからな」

『良かったです。智佐吹さんが部屋に押しかけてきてないか心配でしたが』

「まあ、あの人もそこまではやらないだろ」

『そこまでは…？』

「あ、いや。別にそれ以外に何かあったわけじゃないぞ」

『ふーん。そうですか。本当に？』

しまった。こんな早々に墓穴を掘るとは思わなかった。

『せんぱーい？返事が聞こえないんですけど、もしかしてマイクとか切っちゃってます？』

端末越しに聴こえる一色の声は疑惑を含んでいた。間違いない。胡乱うるんな眼で受話器越しに俺を見ているに違いない。

「お、おう。悪い、流石に海外だからな。どうにも通信環境が良くないらしい」

『そういえば国際電話でしたもんねこれ。まあ通話無料のアプリからの電話なんでお金かからないですけどね☆』

「まあそうだな」

どうやら一色は納得したらしい。

『ふむふむ。まあいいでしょう。それで、今日もまた忙しかったんですか？』

一色の声が大きく聴こえた。

「ま、まあな。今日は会食だったからな。人に気を遣うってのはどうにも落ち着く時間がなくてしんどい」

『私も生徒会長やってた時はそんなことばかりで正直うんざりでしたね。大学に入ってからはそのうちのきっぱり止めたから今やれて言われると絶対顔に出ちゃいそうで…』

「お前は高校の時から顔に出てたぞ」

『え!? 本当ですか!? 自分では出来ているつもりだったのに…』

「いや、お前あれ隠す気なかつただろ」

『あ、やっぱりバレちゃいました? ☆』

「何故ばれないと思った…」

『えへへ。そんなのバレると分かかってやるネタじゃないですか。先輩だつてそれ分かかって言ってるでしょ?』

「まあな」

『話ちよつと変わるんですけど、昨日の就活のイベントつて要は採用面接ですよね? 私とも同僚になるかもつて人になるわけで、誰か良さそうな人つていました?』

急に真面目な話になったな。

「良さそうつてのはどういう意味だ?」

『うーんと、まあ先輩や私と仲良く出来そうな人…かなあ』

「そりゃあ稀有なやつを探さないとイケないぞ。でも、良さそうな奴はいたな…」

『へえ、それつてどんな人ですか? 仕事が出来る人つて感じですか? それとも先輩の好みの女性つて意味ですか』

後半一色の語気が強くなっていたのは気にしないようにしよう。

「凄く仕事ができそうつて意味だな。というかお前も実は会ったことあるやつだぞ」

『え、そんな今就活やってるぐらいの年齢の子とわたし知り合いじゃないですよ?』

「まあ知り合いつつーかちよつとだけ関わりがあるつて言った方が良いかもしれん。ほら、覚えてるか? 俺たちがクリスマスイベントを合同でやった時に小学生達と協力しただろ。その時に俺と一緒に折り紙折つてた奴」

『……………。づえ!?!』

「おい、今女性ならざる声を上げてたが大丈夫か？」

『う………おとおお。あゝあゝくく。だまぎさんのいゝうゝどおり』にいいいゝいゝ…』

通信環境が悪いのか一色が壊れたのか分からないが、とにかくいろはすがヤバイことになっている。

「ちよ、ちよつと、一色さん？」

『歳下属性で被った…しかも、絶対美人…。私より歳下…』

ぶつぶつと一色が電話越しに呟く。

『因みにですけど、先輩。その子は先輩の事を覚えていたんですか!?!』
一色の剣幕の凄みが声だけでも分かった。

「お、おう。覚えてたぞ」

『そう…ですか。はい。了解です』

今度は逆に機械的な回答だった。いろはすの情緒が著しく不安定なう。

『ち、因みにですけど、連絡先の交換とかしちやった系ですか?』

因みにですけどが多いなお前…。

最終確認のように一色が問いかける。

「ま、まあしたな。留美の方から聞いてきたから」

『“留美”…!ふむふむ。とりあえず一回処刑と…』

「ちよつと、何不審なメモを取り始めてるんですか、一色さん？」

『先輩。もう一個だけ聞きます。その子と会う予定はありますか?』

「あ、明日。スタバで久しぶりに二人で話さないかと言われ…」

『よし。もう十分です』

「え、何が？」

『先輩』

「はい」

しばしの沈黙が流れる。気味の悪い静寂が部屋全体を包み込んでいた。

『日本帰ってきたら覚悟しといて下さいね♪ではまた明日です☆』
通話が切れた。

表示される通話時間の表示がまるで死刑宣告書のように思えてし

まう。

どうしよう、嫌な予感しかしない。ちよつと延長でこつちに滞在できる方法とか探したほうが良い気がする。

・・・。

——千葉県、とある会社のオフィスにて…

「なあ、最近雪ノ下さん、元気くないか？」

「ですよね…。比企谷さんが出向に来なくなってからあからさまに魂が抜けたような顔つきになってますよ」

昼の休憩時間に入って一息ついている社員達は顔を合わせて上司の様子を案じていた。二人は軽食をオフィスの机で取りながら雪乃を観察している。

雪乃の仕事に身が入っていないのは火を見るよりも明らかだった。彼女らしくもない凡ミスを連発し、業務中の溜息は倍近く増えていた。

雪乃は時折、小さな紙を財布から取り出してずっと眺めていた。それが何なのかは社員達からは見えなかったが、恐らく誰かの名刺であることは容易に予想がついた。

「雪乃ちやくん！いる〜？」

澆刺とした声と共に雪ノ下陽乃がオフィスにやって来た。ただでさえ顔色がすぐれない雪乃の表情に更に陰りが増した。

「…何かしら、姉さん」

雪乃は諦念のこもった声で答えた。避難するような雪乃の視線にもどこ吹く風の姉は陽気な表情を崩さない。

「う〜んちよつとね。可愛い妹の様子を見に來ただけだよ？」

「どうぞお引取り下さい、雪ノ下さん」

「もう、いけずう〜！今日もちゃんと話があつて來たんだから」

「用も無いのに來る日が殆どじゃないの」

押し返そうとする雪乃を遮るようにして陽乃が制止した。

「…それで、何の用かしら？」

「そのことなんだけどね。ちよつと場所を変えない？」

陽乃は雪乃に移動するように促した。

「分かったわ」

雪乃は大人しく応じることにした。

雪乃が自動販売機の椅子の前に腰掛けると、陽乃が口火を切った。

「最近調子はどう？」

缶コーヒーを飲みながら雪乃の隣に座る。脚を組みながらリラックスした様子を見せていた。同じスーツ姿の姉妹の表情は全く逆のものだった。

「どうと言われても、別に私はいつもと変わらないのだけれど」

「本当に？」

陽乃が厭味つたらしく雪乃に詰め寄る。いつもよりも気が立っているのもあって雪乃は不快感を露にした。

「どういう意味よ？」

「そのまんまの意味」

陽乃は至って真面目に答えた。彼女がわざとらしく足を組み替える。それがまた、雪乃の神経を荒立てた。

「聞いたよ」。比企谷くんが会社に来なくなってから、雪乃ちゃんの様子がおかしいって。社員の皆が噂しているみたいだけど」

「…っ！根も葉もない噂ね…」

雪乃は自分が激しく動揺しているのが分かった。言われたくない事実を突きつけられた。雪乃はその心の揺らぎを隠すことが出来るほど器用ではない。

「そっか。なら良いんだけどね」

コーヒーを伸びながらこの張り詰めた空気に相応しくないような明るい声で話す。

「そうだ！比企谷くん、今度ご飯にでも誘ってみよっかな♪」

「…どうしてかしら？」

「別に。もう仕事の関係も終わったことだし、久しぶりにプライベートで会ってみるのもいいかなあって。私さ、比企谷くん好きだし

さく」

陽乃は雪乃を見ながら言う。

「か、彼と今更何を話すことがあるのかしら？ましてや彼には奥さんがいるのだから、女性と二人でむやみに食事を取るとは思えないのだけれど。それに、姉さんは比企谷くんにあまり好かれていないのだから、彼が承諾する可能性はそもそもゼロに等しいのではないかと思うの。そういう事は冗談でも止めてもらえないかしら」

息継ぎも無く一度で言い終えた愛妹に長女は賛美の拍手を送った。

「ふふふ。比企谷くんの事となるとやけに饒舌になるね、雪乃ちゃんは♪」

「……」

完全に弄ばれていた。陽乃は雪乃の反応を分かかっていて言葉を選んでい。果たしてそれは雪乃を焚きつける為なのか、はたまた本心なのかは雪乃には分からなかった。

「姉さんが変なことを言い出すからでしょう？」

「ごめんごめん。そっか、私に盗られるのは駄目なんだ？」

「……………っ！」

雪乃は自分の姉が何を言わんとしているのかを察した。
やめろ。

その言葉を口にするな。

目を背けていた事実を今更えぐり出そうとするな。

雪乃はそう告げる眼で姉を見た。

しかし彼女が止まるはずもない。分かっているはずがどうしてもそれが認められなかった。

「ガハマちゃんは良かったの？」

「何が言いたいのか！」

雪乃は声を激しく荒立てた。誰もいない休憩所に悲痛の声が木霊した。

対して、陽乃は冷ややかに彼女を見つめる。

陽乃はまだ脚を組みかえるとコーヒーを一口含んだ。

「それが今の雪乃ちゃんじゃない。ガハマちゃんに大人しく比企谷くんを渡して、都合良く利用されただけ。それなのに義理堅く彼女のためだと身を引いて、自分は何の得もしない。ようやく取り返しがつかなくなったことに気づいて、後悔に押しつぶされている。このアルミ缶みたいに空っぽで簡単に潰れちゃいそうな女の子☒」

中身のなくなった缶を揺らしながら雪乃を見上げていた。雪乃はその揺らぎをじっと見つめている。

「か…彼女は…由比ヶ浜さんは…。友達よ…！」

「そっか。それで、そのお友達は雪乃ちゃんに何をしてくれたの？」
「……………それは」

陽乃はじりじりと雪乃ににじり寄る。

「結局、何か連絡でも取ったり、その後のケアでもしてあげてた？無かったよね。そりゃあそうだよ。雪乃ちゃんが一緒に居られなくなるのを分かってやってるんだからさ」

「彼女は、そんなことする人じゃない……」

雪乃の声がか細くなる。陽乃に言われた一言は雪乃とて頭によぎったことが全く無いわけではなかったからだ。

「じゃあなんで雪乃ちゃんは今そんなに苦しそうなの？それは誰のせい？」

「……………別に、私は。苦しく、ない、わ」

「じゃあ比企谷君の名刺を毎日のように眺めているのはなんで？」

「……………ど、どうして、それを……」

陽乃は知っていたわけではなかった。だが、オフィスに入る前、雪乃が熱心に名刺サイズの紙をじっと見つめていたのを見て、そうだろうと予測しただけだった。

「今にも泣きそうだったんだよ雪乃ちゃん。自分で分かってないのかな？」

「そ、…、そんなことは……」

そんなはずはない。雪乃の最後の投げ所だった堤防に亀裂が入る。

「じゃあさ。今のままでいいの？」

「…………っ。私は」

分かっている。今のままでは心が潰れてしまうことくらい。

「ガハマちゃんと比企谷くんの幸せそうな生活を遠くから眺める人生を一生送るつもり？」

「やめて…、姉さん……………。お願いだから…」

雪乃は今にも崩れ落ちそうだった。首の皮一枚で繋ぎ止めていた自我が音を立てて崩れ落ちようとしている。

「ねえ、雪乃ちゃん」

陽乃は立ち上がると震える妹を支えるように手を添えた。そして、用意していたカードを切るように雪乃の耳元で深奥に潜む闇をえぐり出す。

「…嫌なんですよ？ガハマちゃんに比企谷くんを盗られたことが「！」」

耳元で陽乃の声がまとわりつくように離れない。捨てたはずの感情がまたこみ上げてきた。愛憎に満ちた彼への想い。断ち切る事ができず未だに雪乃の心の奥底深くにゆっくりと根を伸ばしていたようだ。欲望と恋慕の本流が血液となって全身を駆け巡り雪乃の身体を熱くさせた。

「……………私は」

苦しい。

手が届く場所にいたはずの彼の残像を、届かなくなった今も追い続けている自分が情けない。

———— あたしが勝ったら全部貰う。

それでも構わないと想っていた。それが一番だと思っていた。

現実とは違った。

比企谷八幡の隣で笑う親友の顔。

徐々に作られていく二人の空間。

そこに自分の居場所などはじめから存在していない。

三人で一緒になどと虫の良い話があるはずがない。

結果はやり直しの効かない大きな溝が自分の前に刻まれただけ

だった。

雪乃はただその溝が深くなるのを目の前でじつと眺めることしか許されなかった。

二人は自分のことを振り返ったか。

八幡は見てくれた。

でも彼女は一度とて振り向きもしなかった。

そして二人は溝を深くしたまま永遠の花園へとその姿を消していった。

ひどく後悔した。

やり直そうと花園に無断で踏み入り、高校の卒業式に彼に思いを告げた。

彼はそれを拒んだ。

分かっていたはずなのにひどく落ち込んだ夜だった。
どうして駄目だったのだろうか。

理由は明白だ。

雪乃が先に彼を拒んだからだ。

あの時、彼は手を差し伸べていた。

雪乃はその手を取らなかった。

変わらないという選択肢があると思っていた。

このままでいられるはずがない。

どうしてそんな簡単なことに気づかなかったのか。

どうして前へ進むことを躊躇ってしまったのか。

どうして彼女の方の手を取ってしまったのか。

雪ノ下雪乃はいつも遅すぎた。

雪ノ下雪乃はいつも誰かに答えを委ねすぎた。

「……………私は、」

雪ノ下雪乃が今一番欲しいものは何か。

それは明白だ。

そのためには何をすべきか。

そのためには何が必要か。

そのために何を捨てるべきか。

「……………私は、、、、、」

雪ノ下雪乃は思案する。

由比ヶ浜結衣がどうして彼の隣に居るのだろうか。

どうして隣に居るのが自分ではないのだろうか。

制御のきかないエゴイズムが顔を出し始める。

果たして彼女は彼にふさわしいだろうか。

彼は彼女が隣に居ることで心の底から笑えているのだろうか。

決まっている。

それは否だ。

そうだ。

自分こそがふさわしい。

「……………私は、、、、、」

由比ヶ浜結衣は彼の伴侶として不適當だ。

ならば誰が相応しい？

愚問だ。

自分以外に誰が居るといふのか？

彼を一番幸せにできるのは自分しか居ない。

欲しい。

彼が欲しい。

どうしようもなく比企谷八幡が欲しい。

彼を手に入れそして自分を彼のものにしてほしい。

雪ノ下雪乃の中に答えが生まれた。

全てを捨てても欲しい本物。

偽物だろうと関係無い。

もう自分の気持ちに嘘はつかない。

「私は……………比企谷くんの隣に居たい……」

「私は……………比企谷くんの隣に居たい……」

「私は……………比企谷くんの隣に居たい……」

続く

第三十三話

眠りから覚めるとカーテンの隙間からLEDのようなまばゆい太陽光が差し込んでいた。どうやらもう一日の始まりを迎えたようだ。気怠い朝だ。

肌寒い。こっちの朝は妙に冷え込む。気候でいうと地中海性気候に近い。一年通して極端な気温の変化というものは無く、殆ど衣替えをせずに過ごすことが出来るらしい。実際、芦間は一年中パーカーと長袖、シャツを組み合わせるだけで過ごしていたという。

「う……ん。起きるか……」

ベッドの端に座り携帯を見る。時計は朝の九時を指していた。留美との待ち合わせまでには多少余裕があった。それでも一度外に出て気分を入れ替えなければ彼女に合わせる顔がないような気分だった。

一先ずうがいをした。口の中がさっぱりしていないとどうにも気持ち悪くて仕方がない。冷蔵庫の中に入れてあったオレンジジュースを手にとった。外国の飲み物は得体の知れない色の物が多くお味の方は全くもって信用ならないがオレンジジュースだけは裏切らない。さっぱりと舌味わいと口の中を浄化する柑橘系の香りがスイツチを入れる燃料になった。

歯磨きや着替えなどを終えてロビーへ降りてみた。イベントの買出しで一人になったことはあったものの、こうして海外の土地を一人落ち着いて歩くというのはこれが初めてだった。

何処か歩いてみようと思いついて外に出てみたが、徒歩で行ける範囲など限られている。ましてやこの国は広大な国土故の車社会だ。ホテルの外に出た瞬間に出迎えられた大きなロータリーの存在を見て、既に部屋に帰ってゆつくりでもしていた方が良いんじゃないかという気持ちに傾きつつあった。

外出したの理由は集合場所の下見だ。実際に集まるとなると場所が分からないとなつてあたふたしたくなかったのでとりあえず、身体を慣らすためにも歩いてみたかった。

高い建物が少ないな。道路沿いに構える店は軒並み一階建てだった。ピザ屋、靴屋、ガソリンスタンド。それらの間にふらつとガンシヨップがあるのが日本との大きな違いだろう。佇まいはコンクリートの大きな小屋のよう。何の違和感もなく普通に鎮座しているのがまた当たり前にあるような雰囲気を出している。流石に鉄格子は店の窓ガラスにもしつかりと整備されてはいるが。上の看板がなければ一目で分からない。2ブロックほど歩いた先に件の待ち合わせ場所があった。席は15席程のこちらにしてはやや小さめの広さ。とはいえ、アメリカは日本のコンビニと同じくらいスタバが点在しているので、混雑はないのだろう。苜間に聞いた話だが、一日中コーヒーたった一杯で粘っても問題ないらしい。

留美が来るまであと2時間程あるな。それまで一度帰って部屋でゆっくりでもするか。

「あれ…」

後ろで聞き覚えのある声がする。日本語か？こんな場所で聞ける言語じゃないはずだが。

後ろを振り返って声の主を確かめる。

「な、なんでもう居るの…？」

留美だった。

何度確かめても留美だった。まごうことなきルミルミだった。

「は、早いな」

「八幡こそ。もしかして、私、待ち合わせ時間、間違えて教えた？」

「いや、二時に集合って話だったぞ」

「そう…」

留美は予想外だったのか咄嗟に髪を直している。先日会った時は違い、髪を下ろしている。服装は白いブラウスに、紺色のワンピース。昔のようにピンクのベレー帽をかぶっていた。

「もう。まだ全然セットしてないんだけど…」

「…すまん」

「いいよ。それで、何でこんな時間に来てるの？」

店の前で二人立って会話をする。入り口の前でバッタリ会ったの

で、邪魔にならないように袖に移動しながら留美は問いただした。

「その、集合場所を下見でもしとこうかなと思っただな。てか、留美はどうしてこんなに早く来てるんだ？」

「午前中に勉強しておきたかったの。早めに来て課題とか終わらせようと思ったから。そしたら八幡がいた」

殊勝だな。こんな時も勉強とは。それだけこっちは大変というところか。

「そうか。なら俺は改めて来たほうが良さそうだな」

「待つて」

踵を返そうとしたが、留美に袖を引っ張られた。留美はうつむきながら切なそうに声を漏らす。

「どうした留美？」

「……入ろ？」

その誤解を生むような可愛い発言なんかありませんかね。

店内にはパソコンを開いて資料を熱心に眺めている白人の男性が一人、本を読みながらまつたりとしている黒人の女性が座っているだけだった。列に並びながらカウンター後ろのメニューを見る。

「サイズの表記はほぼ同じか」

こっちにはshortサイズの表記がないのか。ボードを見ると一番小さいのがtallサイズ、次いでgrande、venti。最後のはあんまり見たことはないが日本にもあるサイズだった気がする。どうやらshortもあることにはあるらしい。

「ventiよりも大きいtrentaっていうのもあるよ。1リットルぐらいの量の」

「マジか、そんなに飲むやつもいるんだな。…というか本当に良かったのか？課題やらなくても」

「再来週までのものだから問題ないよ。来週の方は全部終わってるから」

「優秀だな。こっちの勉強量は半端じゃないって聞いてたが」

「うん、結構多い。でもなんとか今は調整出来る」

留美は満更でもなさそうだった。案外、素直に褒められると弱いのか。

かもしれない。

そうこうしているうちに俺たちが会計の番になった。

若い男性の澁刺とした挨拶に

「八幡は何頼むの？」

「そうだな。苦いのはあんまり好きじゃないから出来れば甘いのが飲みたい」

「キャラメルマキアートとか？」

「それも良いかもしれん。因みにこっちだけで売ってる特別なメニューとかあったりするの？」

「そんなのないと思う。日本にあるのと変わらないかな」

「じゃあ、留美と同じので」

「私、ブラックコーヒーだよ？」

「……キャラメルマキアートで」

「サイズは？」

「grandeで」

「じゃあ私もそうする」

ちよつとカッコつけて言ってみたらエライことになった。流石にブラックは未だに苦手意識がある。留美は流暢な英語で店員さんに注文していた。まるで目の前にいる女性が留美の人間に入った別の人格のように思えてしまうほどだった。

「やっぱ、こっちにいるとそれぐらいは喋れるようになるのか？」

「まあ、ね。でも話せるようになるには、日本人と一緒に居すぎないようにするのが大事」

会計を終えて受け取り口の方へ移動しながら留美が首肯した。

「なるほどな」

「日本人と一緒に居すぎて結局遊んでるだけの人のことを遊学生って呼ぶの」

「留学生って言葉を文字って揶揄してるのな」

「うん。そうみたい」

「とはいえそれを避けるために、日本人とは誰とも話さないってのは違うよなあ。留美はこっちで日本人の知り合いとかは居るのか？」

「何人かは話す仲だよ。親友って呼べる程じゃないけど。でも知らない日本人に話しかけられることは最近多いかな」

「あー…それ、めんどくさいな」

「うん。しかも男の人からとかだと何でいきなり馴れ馴れしくしてるんだらうってなる」

「留美目当てなんだらうな」

「興味無いって周りに言ってるんだけどね。ばっかみたい」

丁度、店員さんが俺たちが注文した飲み物が準備できたらしい。大きな声で「ルミー！」と呼ばれていた。こつちでは注文した物ではなく、名前で呼ばれるようだ。よく見たらもらったカップに名前と商品のコードがマジックで書かれていた。

カップは3つあった。どうやら一つは水のようだ。留美が頼んでいたのだろうか。

「はい、八幡の分」

俺のらしい。気が利く女性だ。というか水が入っているカップの大きさがよく見たら *venti* だった。店員さん、どんだけ豪快に渡すんだよ…。無料サービスのスケールが想像を越えてきた。

「あっちの奥空いてる」

「留美が指差した先に高めの机と椅子2つがあった。人通りの少なさそうな道がガラス越しにある。あまり人通りがなく落ち着いて静かに話すにはうってつけな席だった。俺たちはそこに腰掛けると、高さはあるが面積は小さな机の上に飲み物を置いて一息ついた。

「八幡の会社、受かったよ」

留美からの報告にそれ程驚きはしなかった。前日に聞いていたからということもあったが、何よりも面接を担当した二人の上司の彼女に対する評価が非情に高かったからだ。色眼鏡で見なかったとしても順当に合格すると踏んでいた。

「そうか。でも、他に受けてみるんだろ？ 11月にも大きなイベントあるみたいだが」

「うん。一応行くよ。でも今のところ八幡の会社が第一希望」

「うちに入るとしたら何処の部署になりそうなんだ？」

「会計とコンサル両方行けるから考え中。もしかしたら八幡の後輩になるかもね」

「げ、マジでそしたら本当に俺の班になるかもしれないな。智佐吹さん、留美のことを相当気にってたし」

「あの髪の毛長い美人さんが？私、そんなに人に好かれるタイプじゃないと思うんだけど」

留美は照れくさそうに前髪をいじっている。時折、こちらの様子を見るようにちらと目があうのが心臓に悪い。私服の留美は本当に可愛かった。ビジネススーツからカジュアルな格好になった瞬間、見違えるほどに色香が増していた。肩の滑らかな曲線から腕にかけて伸びる細く白い腕。主張しすぎず、しかし、男を捕らえて逃さない抜群のプロポーション。長いまつげと吸い込まれるような澄んだ目。雪ノ下を彷彿とさせるような長く美しい黒髪に、添えられた可愛らしい帽子がギャップを見事に生み出している。カフェでコーヒーを待つ男たちが羨ましそうに俺の席を睨んでいる。その様子に否定できない優越感を感じる自分がいる。それ程の魔性の魅力を兼ね備えている女性が鶴見留美という女性だった。

「留美も相当な美人だと思うけどな」
「え」

「いかん。思わず声に出してしまった。露骨に褒めすぎたかもしれない。」

留美はというと顔を赤く染めてそっぽを向いていた。そのまま徐に口をひらくと「ありがと…」呟く彼女にこちらも赤面した。水の入った大きなカップを持ってストローを啜える。口に広がる水の冷たさが食堂を通過して胃に到達するのが分かった。

「八幡ってさ、いつもそうやって女の人を口説いてるの？」

唐突に留美が人聞きの悪いことを言い出した。

「失礼だな急に…。俺は別に口説いたりしてない。大体、俺が口説いたところでその気になる女性がいるとは思えん」

「そんなこともないと思うけど…」

「ああ、まああれだ。少なくとも結衣はそうだったかもしれん」

「八幡の奥さんって八幡が口説いたの？」

「その言い方だと語弊があるか。正確には、嫁からの猛アタックだった」

「でも最初は八幡が奥さんに気を引かせるようなことしたんじゃない？」

「身に覚えがない：といえば嘘になるな。入学前にあいつの飼っていた犬を助けたことがあった。当時はその義理もあって、話すようになったと思う」

今思い出せば懐かしい出来事だ。あの一件で、俺の高校生活のぼちが確定したし、その流れで奉仕部にはいることになったんだからな。それが結果として結衣と結婚するまでになるのだから本当に人生は分からないものだ。

「へえ。八幡にもそうやって男らしいことする時期があったんだ」

「こら、今はもうそんな根性が無いみたいない方するんじゃないやありません」

「根性もなければ甲斐性もなさそう。私のこと口説いてたし」

「ぐ：そ、それは。ほ、褒め言葉くらい、嫁相手じゃなくても言うだろう？」

「ふーん。じゃあ他の女の人もあんなこといっぱい言ってるんだ？」

途端に留美の表情から笑顔が消えた。コーヒーの入ったカップを口元に当てながら覗き見るようにこちらを睨んでいる。

「こ、言葉の綾だろ：。別に誰彼構わず言ってるわけじゃない。ちやんと相手を選んでいるつもりだ」

「じゃあ今まで奥さん以外に誰に言ったことあるの？」

「こういうことをか？」

「うん、面と向かって言うなんて八幡の性格考えたらそうそう無いと思うんだけど」

「そうだなあ：」

一色に言ったことは：。無いな。あいつが調子に乗ってしまうからそういう事は絶対に言わないようにしてたし。玉木さんは恥ずか

しくて言えない。そもそも普通に話すのでも精一杯なのに言えるわけがない。智佐吹さんは最近まで、仕事上の会話しかしたことがない。雪ノ下……。う、うん。あ、あるな……。あと戸塚には会う度に言うてる。

というか…。

「なんで、そんな事言わなきゃならんのだ？」

いかんいかん。危うく答えそうになったぞ。別に言う必要は無いではないか。留美のペースにいつの間にか乗せられていた。

「……なんだ。八幡つまんない」

「ぶーたれても言わないからな…」

「じゃあ言ったことはあるんだ？」

「舌の根も乾かぬうちに誘導尋問始めないでくれませんかね…」

留美は意外と色恋沙汰に興味があるのだろうか。そういった話は毛嫌いしていそうなイメージがあるんだが。

「別に私、普段はこういう話しないよ？」

なんでお前も読心術が使えるんだ。芦間と玉木さんだけで十分だ。いや、玉木さんののはマインドスキヤンだけだ。

「あの黒髪の人でしょ？」

「……ノーコメントだ」

絶対アタリでしょとドヤ顔でいう留美の追及をゴリ押しで突破した。それはとてもデリケートな問題なので言及出来ません。

その後は留美のこちらでの生活の話を聞きながらゆったりとした時間が過ぎていった。

「八幡はいつ日本に帰るの？」

「三日後だな。明日は仕事で、明後日は自由時間になってる」

それを聴いて留美が身を乗り出してきた。

「そうなんだ。じゃ、じゃあさ。明後日私たちのイベントに来てみなよ？」

「イベント？」

そういえば留美は日本人会に所属していると言っていた。それ関連のものだろうか。

「なんかね。私が所属してる日本人会でクラブイベントやるみたいなんだけどさ。人はそこそこ集まってるんだけど…。わ、私、運営で暇になるから来て欲しい」

留美は控えめな声で言う。

「クラブってあのクラブか？」

「あのって、八幡がゴルフの道具を言ってるのか、カニを英語で言っているのか、部活関連の事を言っているのかよく分からないけど踊ったりするやつクラブだよ」

「それだそれ。パリピのやつ」

「別にそれだけじゃないけどね」

まあそんな感じと留美が同意した。

「運営って暇になるものなのか？」

「こ、こういうイベントって準備の方が大変で当日はそこまでやること無い、から」

「なるほど。要は留美の暇つぶしに付き合えと…？まあ、特に他に予定も無いから構わんが」

「あ、あと。男の人が多分言い寄ってきて、嫌だから…」

後者が本当の理由か。

「日本人会の人間関係で嫌なことでもあったのか？」

「う、うん。会長に口説かれてるんだけど…。断れそうになくて。強引に一緒にシフトに組まれちゃった。それに、他にもいっぱい会うのが嫌な人が居て…」

「権力の悪用も甚だしいな」

留美の容姿ならモテない方がおかしい。盛っている大学生なのだから余計にだろう。

「じ、自由時間まで一緒に居ようとしてるから本当は休みたいんだけど、立場もあるし…。は、八幡が来るなら、大丈夫な気がする…」

「事情はなんとなく分かったが良いのか？俺と居るとそれはそれで悪目立ちしそうだが…」

「い、良いよ。八幡なら…」

留美は真っ赤になった顔で完璧な笑顔を見せた。何この可愛い子。

守ってあげたくなる。

「そ、、そうか。留美が良いなら俺は、大丈夫だ」

「うん、ありがと…」

え、何。この空気。恥ずかしい。

「八幡」

「何だ?」

「そ、その…。その時だけ…。恋人っぽくしてもいい?別に大胆にやる必要はない…。から。その、手を握ったり、とか」

「あ、ああ。分かった。男避けのため、だろ?」

「うん…」

やばい。俺の心臓が持ちそうにない。

「そ、そうだ留美。さっきの飲み物の代金、教えてくれ。渡してなかったろ?」

切り替えるように言ったせい、言葉が相当駆け足になっていた。

「う、うん。いいよ。私が払いたかったから」

「そういうわけにもいかないだろ。ほれ、レシート見せてみる」

手を出してレシートを見せるように留美を急かした。

「あ、ありがと…」

案外留美は大人しくレシートを手渡した。

「そういえば、何かこつちには割り勘とかが簡単に出来るアプリみたいなものがあるって言ってたな」

「Venmoのこと?」

「それだ。それどういうものなんだ?」

「カードを登録して自分のアカウントを作るんだけど、そのアカウント同士でお金のやり取りが出来るってアプリ。要は銀行口座の送金をネット上で銀行関係なく出来るっていう機能。自分のアカウントにお金が入ったりした時は口座に落とすっていうボタンがあってそれ一つで口座に移転出来るから便利」

「PayPalと似てるか」

「あれは会社への支払いとか買い物メインかな。こつちは個人間の送金を目的としてる。まあVenmoってPayPalの子会社だから」

ら似てるのは当然なんだけど…」

「日本でもそういうのあった気がする」

「Paymoじゃない？」

「ああそれだ」

「でもあれサービス終わるみたいだよ」

「そうなのか。他に似たようなサービスあるしなあ。LINEとかも最近そんなん始めてたっけか」

「うん。あれは銀行支払や購入も出来るからPayPalに近いと思う」

「なるほど。でも日本は個人間は現金で終わらせる文化が根強いしなあ」

「うん。そうだと思う」

「因みにVenmoってアカウント俺でも作れるのか？」

「出来なくもないけど、携帯の電話番号が必要だったかな。そのせいで昔、私や日本人会の会計の人とで団体のアカウントを作ろうかと思っただけど、携帯の番号がなくて結局出来なかった。今はそれも作れるようになって番号も代表者の番号で代用出来るけどね」

「俺、こっちでは番号持ってないな…」

「アクセスコードの送信だけだから、一ヶ月のSimカードみたいな一時的なものでも作ろうと思えば出来るかも。でも、八幡ちよつとかこっち居ないから要らないんじゃない？」

「確かにそこまでして作る必要もないな…」

俺は財布から10ドル札を取り出しながら留美に手渡した。

「これコーヒー代な、お釣りは要らない。そのまま貰ってくれ」

「え、でも…」

「学生だろ？こういう時はおとなしく奢られとけ」

「あ、ありがとう…」

留美は受け取った10ドル札を財布にしまうとウエットティッシュを取り出した。

「はい、八幡」

「サンキュ」

何も言わずとも留美は一枚くれた。気が利く。

「なんか八幡って昔と変わってないね」

「そう言われると成長してないみたいに聴こえるんですがそれは…」

「良い意味でだよ。なんだろう。実は高校の友達とか皆大学入ってから反りが合わなくなつて、年齢重ねたら変わるものなのかなって…」

「本かテレビかで言ってた言葉だけど、『付き合う友達つても衣服と同じで衣替えしていくのが当たり前』だと。だから、それだけ留美が成長したつてことじゃないのか？」

「ふふ何それ。じゃあ私だけ成長の仕方間違えたのかな」

「別にそういうことじゃないと思うぞ」

「凄く美人に成長してるし。身体つきも…て俺は変態か。何で直ぐそういう方向に話が逸れるのか俺は。」

「八幡つてき、こういう服好き？」

ふと留美が今日のコーディネートについて聞いてきた。

「ああ、良いと思うぞ」

「ロングスカートとかのほうが良い？」

「それも好きだが、ジーパンとかカツコ良く決めているのも嫌いじゃない」

「シヨートパンツで脚出てるほうが良い？」

「ま、まあ。脚は好きだ…。てこれ何の話だ？」

「八幡の好みの話」

「あ、いや。まあそれはそうなんだろうけども」

「だって、クラブイベントつてそれなりに着飾ったほうが良いのになつて…。行ったことないから…」

「俺も行ったことがないから分かんがそういうものなのか？」

「多分…」

「じゃあ俺もちゃんと正装で行くか」

「別にビジネスレベルのドレスコードじゃないとおもう。寧ろカジユアルで全然問題ないよ。でも靴は結構見られる印象ある。流石にスニーカーとかは控えたほうが良いかな」

「ああ、なんとなく察しがついた。要は合コン用衣装つてことか」

「その例えじゃ、私分からないよ。行ったことないし」

「いや、実は俺もない」

「え、八幡行ったことあるみたいなの霧囲気出してたのに行ったことないの？」

「だってほら。俺、彼女持ちだったし行く意味がないだろ」

「それはそうだけど、なんか鼻につく」

「なんでだよ……」

「ふふ。なんでもない」

留美が笑う。思わず目をそらしてしまった。

「なんだか俺の方は全然腑に落ちないんですが」

「いいの、八幡はそれで。ねえ、ちよつと移動しよ」

「そうだな。結構長居しちまったな」

そう言うとお互い立って荷物を纏める。俺はトレイを持って飲みきったカップを捨てた。

「留美、それ飲んだのか？」

「うん、もう空だよ」

「じゃあ捨てとく」

「私もう子供じゃないんだけど」

「俺のほうが近いからってだけだよ。もう留美のことはちゃんと一人の大人として見ているぞ」

「変態」

「何故そうなる……」

結局留美は自分でカップをゴミ箱に入れていた。

外に出ると辺りはもうすっかり夕暮れになっていた。そんなに話し込んでいたのだろうか。時間も忘れて話し続けていたのは雪ノ下と飲んだ時以来だ。シヨツピングモール向こうにある荒野が焼けたように赤く染まっていた。

「もうこんな時間だったんだ」

留美も時間を忘れて話していたらしい。それだけ楽しんでもらえたのなら良かった。

「どうする？明日もあるし、今日は一旦お開きにするか？」

「ねえ、八幡つて今日の夜はどうするの？」

確かにもう夕飯の時間だ。翌々考えてみれば、昼飯も全く食べずに留美と会話していたのか。

「今夜か？別に会社のメンバーで食べるような予定も入っていないからどっかで一人で済まそうかと」

「ごめん。昼ごはんも食べてないでしょ？」

「気にしないでいい。昼飯抜くなんざザラにある」

「慣れているとかそういうことじゃないでしょ？お腹空いてない？」

「まあ、確かに腹は減ったな」

「何かこつちの食べ物を食べたいとかある？」

「いや、特に。それよか出来れば日本食の方が良いな。流石に米が恋しい」

海外に旅行してまで日本食のレストランに行っている旅行客をテレビで見た時に何をやっているんだと思っていたが、いざ自分がそうになると彼らの気持ちが良く分かった。ご飯食べたいわ。

「じゃ、じゃあ、さ、、、、」

そつと留美に袖を掴まれる。

留美はもじもじとさせながらこちらを見上げた。

「一緒に、何処か食べに行かない？」

彼女の顔は赤く染まっていた。それが紅潮に依るものなのか、夕日のせいなのかどちらにせよ。俺を惹きつけて離さないだけの魅力を十分過ぎる程に備えていた。

「お、おう…。じゃ、じゃあ行くか…？」

「うん」

留美がそつと横に寄り添う様に立つと同じ歩幅で近くの日本食のレストランへと歩みを進めた。

歩行者の居ない道をただ二人で進む。入り組んだ道路というのはほとんど無く京都の格子状の城下町に居ているのかもしれない。建物やちらほらと見かけるホームレスが居たりと全然風景は違うけれども。夜は危険なので日が沈む前に入りたい。

途中、留美がこちらを見ては手を伸ばしているのが見えた。

俺は知らぬふりをして黙って前に歩みを進めるだけだった。

続く

第三十四話

「イベント会場ってここで合ってるよな？」

昨日の帰り際に留美に渡されたチケットを持って会場の前に立つ。智佐吹さんに食事に誘われたが、それとなく理由を付けて断った。激しい追及にあったがなんとか強引に突破し、ここに至ったわけだ。

一文で割愛したけど凄いい攻防だったんだぞ？おそろくこつちにきて一番頑張った大賞を受賞出来るほどだ。

その後何故か芦間にはLINEで『GOOD LUCK☆||b』とメッセージが来ていたが気にしないことにした。

会場はレストランのようだった。俺たちの会社が会食を行ったような場所と店内の構成が似ている。この会場は手前が食事用のテーブル席で、奥側がバーカウンターと踊るスペースがありそうな広めの空間が広がっていた。

入り口の方はまだ良い。問題は奥だ。

見慣れないネオンが降り注ぎ暗闇を照らす中、参加者達が何かスイツチが入ったように踊っていたり、男女の距離感が通常では考えられないような密接になっている。

ジャングルかここは。俺にはそれくらい未知のエリアに見える。

受付より中に入りたくない。というか受付近くの椅子に既に出来上がった生徒らしき者が数名グロッキー状態なんですけど。

「あ、参加者の方ですか？」

受付の男性に話しかけられた。ちよつと髪の毛に寝癖が付いているのが似た雰囲気を感じる。恐らく、背後の空気に馴染めずずっと運営を引き受けた口だろ。分かる。分かるなあ。俺がもし君なら俺もそうする。

「チケット持ってますか？もし飛び入りの参加であれば\$30になんですけど」

クラブイベントと聞いていたのでてつきり英語必須かと思っていたが、意外にも日本語対応だった。

「あー…えーつと…。チケットはここに…」

俺はチケットを受付の男性に見せた。

「ありがとうございます。あ、招待券ですね。誰からの、、、つて...え？は？」

男性はチケットを確認すると凍りついたまま動かなくなった。

「どうしたんですか？」

「あ、いや。ちよ、、、ちよつとすいません」

そう言うと言付の男性は一目散に走り出した。

そして後ろの方で「キタさん！キタさん！マルタイが来ました!!!」と叫んでいる。

「なんなんだ、一体...」

しばらく一人で突っ立っていると、

「八幡！」

奥から聞き覚えのある声がした。

留美が駆け寄ってくる。

「お、おう、留美。すまん、ちよつと遅れた」

「ううん。その、、、嬉しい」

留美の格好は昨日とはまた違って短めの黒いタイトワンピースを着ていた。そのあまりの可憐さに心臓が飛び跳ねて挙動不審になってしまう。

「き、来てくれると思わなかったから」

「い、いや、流石にチケットまで渡されたら来るだろ。それよか俺の方がビツクリしたわ。そんな格好するんだな」

「に、似合っていないかな...?」

留美は後ろで手を組んでいじらしそうに言葉を待っている。

「ど、どストライクだ」

「え」

「あ」

いかん。言葉に出してしまった。

「あ、ありがと...。ばか」

なんで罵倒されなきゃならんだ。褒めたのに。

「思ったより人が居て驚いた」

「多かった？」

「バングラデシユもびつくりな人口密度だ」

まだ入り口に居るのだが、奥を見るとまともに歩くことが出来るスペースが少ない。更に奥を見るとアメリカらしく踊りに夢中な男女が見受けられた。果たして俺のような三十路前の男が参加して良い場所なのか。年齢層としては俺よりも5歳以上は下だろう。

「おい、留美ちゃんの隣にいるの誰だ？」

「え、留美ちゃんの彼氏？」

「嘘!? いか格好良い!!」

あつという間に注目の的になっていた。こんなんじやとてもじゃないが二人でゆつくり出来るような状況じゃない。あと、最後のはちよつと嬉しい。

「八幡こつち来て」

留美に手を引かれるがまま後ろに続いた。人混みをかき分けて奥に進むのかと思いきや、留美に案内されたのはバーカウンターではなく、入口横の食事用のレストランテーブルだった。

「こつちの方が落ち着く」

「この店貸し切ってるのか？」

「うん。だからこつち側に居ても問題ない。本当は潰れた人の介抱とか、運営側の休憩室みたいな感じで使ってる場所なんだけどね」

「丁度後ろ見たら席の方見えるのな」

座席の後ろが窓ガラスになっていた。振り返ったらチラチラと俺たちの様子を窺う群衆が見えて非情に居心地悪く感じてしまうが。

「ごめんね。なんかこんな場所に呼んじゃって…」

「大丈夫だ。こういうのは最初だけだろ？それに俺たちが何話していでどんな顔しているのかは向こうには分からない」

「うん、そうだね」

留美は広い席を敢えて詰めて座った。身体のいろいろな箇所が密着している。

「ど、どうしたんだ急に？」

いきなり大胆な行動を取るようになった留美に呆気にとられた。

予め恋人のように接するとは打ち合わせしていたものの、予想以上に最初から飛ばしてくる。

「これくらい普通でしょ?……恋人なんだから……」

最後の方音量が凄く低かったんですけど。留美も留美で緊張しているようだ。

「眼鏡かけてるんだね」

「普段も仕事の時はかけているぞ。裸眼の方が良かったか?」

「ううん。どっちの八幡も悪くない」

「そうか。なら良かった」

「でも八幡が眼鏡をかけていると他の人の視線が集まるから今度から外してほしい」

「なんだそりや?別に俺が眼鏡かけようがかけまいが大した差は無いと思うんだが」

「……結構違うよ。死んだ魚の眼じゃなくなるから」

「そりや大きな差だな」

えく……まだ俺死んだ魚の眼してるの……。確かに、さつきからチラチラと女性の視線が刺さる。大方留美と一緒にいるよく分からない馬の骨の顔でも拌みに来たのだろう。期待に応えられず申し訳ない。

「あれ、ルミ。その人は誰?」

眼の前に紺色のジャケット着たアメリカ人が立っていた。なんともまあ、米国版葉山のような爽やかさと戸部のようなチャラさが共生している風貌だ。こいつが留美が言っていた件の会長だろうか。

「あ、うん。この人は……。む、昔からお世話になっている人だよ」

留美は俺の顔を見ながらそう答えた。打ち合わせしていたものの、流石に人前で彼氏と公言するのは留美でも恥ずかしかったのか、当たり障りのない回答をしていた。いや、俺でもそういう答え方に落ち着きそうだけど。

「そうなんだ。始めまして!この団体の会長をやっています!どうぞ宜しくお願い〜!」

そう言うとき会長は流暢な日本語と共に握手を求めてきた。あー、うん。留美が苦手そうだなあ。

「あ、ど、どうも…」

「来てくれてありがとう！まさか、ルミが集客に協力してくれるとは思わなかったよ」

そう言うのと会長は流れるように留美の隣に座った。遠慮の無さというよりはそれが当然と思っている表現するべきか。こりや、留美が手を焼くわけだな…。自覚が無いタイプ。

「DJやってたんじゃないの?」

留美が会長に問いかけた。ん?DJ?

「DJは他の人にな変わってもらったよ。流石に俺にも自由時間がほしいからね」

「会長はダンスホールの方でDJをやってたの。Remixとか自分で編集してる」

横から留美が補足した。

「そいつはまた凄いな」

「またしばらくしたら戻らないといけないけどね。その間にルミと一緒に居られたらと思っただけけど、どうやら先客がいたようだ」

挨拶代わりに毒を吐かれた。まともになり合うのは性じゃないし、こいつにはあまり有効じゃなさそうだ。自尊心を上げておだてる方が御しやすい。

「それにしても滅茶苦茶日本語上手いけど何処かで勉強したのか?」

「あく。実は一年くらい日本に留学していたことがあってそれかな。違和感なかった?」

「マジか。殆ど違和感無いわ。一年でそんなに上達するのな」

これは本心だった。多少なりともネイティブと差があるにしても十分過ぎるほどに聴き取れる日本語だった。

しばらく話してみると会長はまあ普通に男からしてみれば話しやすい人物だった。

加えてカリスマ性もある。まさに会長って感じの人だな。だが、何処と無く本当にこいつがリーダーで大丈夫なのか心配になる一面も感じ取れた。

「玉縄に似ているかもな」

「誰その人？」

「ほら、あれだ。クリスマスイベントの時に指揮を取ってたくせつ毛の奴」

「あー、あの計画ばかりで身がない事しか言わない人？うん、そんな感じ。そのせいで私とか後始末に追われちゃうし」

留美も雪ノ下並みに辛辣なことを言うようになったな。まあ実際その通りだなと思ってしまった自分がいる。いや、この会長さんの事は本当に玉縄みたいなやつなのかどうかは知らんが。

それよりも問題なのはこの会長が来てから全く口を開かなくなった留美の方だ。

会長が話す度に留美の表情が死んでいつている。これ以上マイナスが無いだろうという地点から現在進行系で人間の感情というものが消滅した。冷ややかさはもうすぐで絶対零度に届きそうな勢いだが、本当に大丈夫なのだろうか。

「なあルミ。この後良かったら二人で飲ま…」

「ごめん。私今日は八幡と一緒に過ごすから」

おい、会長これまでの会話の一体どこで手応えを得たんだ。時期尚早とかそんな問題じゃない。HP満タンで伝説のポケモンにモンスターボール投げてるようなもんだぞ。案の定、留美に最後まで言う間もなく断られてるし。

留美も留美で慣れていたような感じだった。こうやっていつも何か理由をつけて断っているんだろう。

「あー。いやいや、このイベントの後の話だよ。その後にも打ち上げを運営のメンバーでやるからさ」

めげない会長ここにあり。なんとという不屈の精神。二人で飲まないかって言いかけていたのに、直ぐに全員での打ち上げに路線変更するあたり、慣れているこの男は。確かに、俺は打ち上げに参加できるわけがないからな。うん、考えている。むしろここまで来ると感心すらしてしまう。

留美が誘いを躲すために誰か呼ぶことも折り込み済だったのだろうか。そんな邪推すら正解に思えた。

さて、全くもって失礼な発想ではあるが、留美がどう返すのか見ものだな。

「ううん、さっきのはイベントの後も八幡と二人きりで過ごすって意味だけど」

「え」

会長と合わせて俺まで声を漏らしてしまった。え、本当に何言ってるの？俺明日予定あるんだよ？いや、予定があったとしても今の発言は色々イヤバイ…。

「る、ルミ…？君は自分が何を言っているのか分かってる？」

驚いた顔で俺の顔を見る会長。まあ年の差がそこそこあるしな。左手の薬指を盗み見ていたのが分かった。危ない。念のために結婚指輪を外しておいて正解だった。なんか本格的に浮気している人間のやることのような気がするけど。

留美は毅然とした表情で真っ直ぐに会長を見つめていた。ただ、会長とは反対側、つまり俺側の方の手で俺の手を握っている。よく見たら耳が真っ赤になっていた。彼女もようやく自分が口にした言葉の重大さを把握したのだろう。

「…だ、だいじょうぶ。わ、わたしも覚悟してるから…」
「……………」

おい火に油を注ぐなアアア！

何やってんのこの子!?それ言っちゃったら完全に言い訳のしようが無いんですよ!?!二人きりで過ごすとしても、こう飲んで過ごしますとか、勉強教えたりしますとか逃げ道いくらでもあったのに。

「ね、ね？八幡？」

留美が同意を求めるように身体を寄せる。脳内変換で誘惑されているようにしか思えない。露出の多い服を着ているのを始めて見たのもあって、これ以上無いほどに艶美な肉体を意識させられた。

「お、おう…。そう、だ、な」

逡巡する間も与えられずただ俺は首肯した。もたげた鎌首が欲望に逆らえず傀儡のように首を立てに振るまでの時間はほんの一瞬だった。周りの視線など既にどうでも良かった。

「そういうことだから。私を誘うの、もう止めてね」

留美がトドメの一撃を放った。流石に鈍感を貫き通した会長もここまでではつきりと拒絶されてしまえばぐうの音も出ない。観念した会長はトボトボと会場へ戻っていった。敗戦の将とはこうも惨めなものか。

「…ねえ八幡」

俺に寄り添ったまま留美が俺に顔を埋める。

「どうした留美？」

「…どうしよう。私、明日からこの団体の人に会えなくなっちゃうくらい恥ずかしい」

デスヨネー…。いや、ホント。俺もどうしよう。

結局、イベント終了の最後まで二人で手をつなぎながら座ったままだった。途中、あまりにも気まずくなつたが、留美が普段仲良くしているという会計担当とクロと呼ばれている参謀が来て、会話を回してくれたおかげでなんとか乗り切ることが出来た。

運営の後片付けが終わるまで俺は店の外で立って待っていた。夜風が火照った顔を冷やすのに丁度良い。会長との会話での留美の爆弾発言も会長のアタックを避けるための口実と説明すれば留美への噂もそこまで広がることは無いだろう。

時計の針は既に深夜1時を指していた。流石にクラブイベントともなると時間帯も夜遅くなる。留美を家まで送ってからホテルに戻ることを考えると寝られるのは3時くらいになりそうだ。

「おまたせ、八幡」

片付けを終えて留美が店から出てくる。店の中から他の理事たちが興味深そうに観察されているのがなんとも息の苦しい状況だ。

「と、とりあえず。一緒の車に乗って家に送る形で大丈夫か？」

「そ…そのことなんだけど…」

留美に手を握られる。蠱惑的な視線で上を見上げると妖艶な少女はその整った口を開いた。

「もうさ…今夜は…一緒に…居よ？」

駄目だ。もう欲望に逆らえる気がしない。

続く

第三十五話☆

「お、お邪魔します…」

「お、おう」

ルームキーでドアを開けて留美と共に入室した。数日間滞在したはずの空間が別の場所のように感じられる。普通のホテルのほずがどうにも淫猥な様相を呈している錯覚に陥っていた。床にある自分のスーツケースすら怪しく見える。

ドアの閉まる音がした。ガチャリという独特の音と共にオートロックがかかる。これでもうマスターキーでもない限り外から部屋の様子を窺うことは出来なくなった。留美と俺のこれからは二人だけの秘密になる。その秘匿が齎す背徳感が既に俺の首元まで迫っている。

部屋の証明を点けると暖色の光が降り注いだ。互いに紅潮した顔がよく見える。留美も何か意識しているのだろう。こちらの様子をチラと窺っては真っ赤になって俯くことを繰り返していた。そんな留美を見る度に身長差で留美の成長した胸元が眼に入って下半身が窮屈になった。触りたい。この清らかな身体を自分のものに出來たらという邪な欲望と罪悪感との葛藤が何時間も繰り返されている。

もしこの場で彼女を押し倒し、肉欲のままに腰を振ってしまえば二度と今の自分には戻れない。しかし、これ以上ない快樂と興奮が得られるのだろう。一色や智佐吹さんとの軽い情事とは比べ物にならない極上の快樂。知りたいという知識欲にも駆られた。この手で彼女の衣を剥がしていき、一つ一つ留美の欲望をえぐり出して貪る。白いキャンパスを漆黒の欲望で染め上げ、穢れを知った彼女を淫蕩の渦へと引きずり込む。どれほどまでに気持ちが良いことか。

それが許されるはずがない。

何を考えているんだ俺は。それを自身で諫めることこそが自制心というものだ。このまま留美と一緒に居続けてしまえばその律する心が崩壊し留美を襲うのは時間の問題だった。

「留美、良かったらその椅子に座っていいぞ」

とりあえずお互い座らずに立っていたままというのはどうにも落ち着かない。留美に座るよう誘導した。

「うん、わ、分かった」

そう言うと留美は覚束ない足取りで歩みを進めると、控えめにベッドに腰掛けた。

そのまま『八幡は座らないの?』と言わんばかりの眼差しで見つめてくる。

……。

いや、椅子つて言っただよね俺。どうして今にも押し倒される準備万端のような感じで構えてるの?

留美は着ていたワンピースの紐を少しだけ緩めると靴を脱いだ。

「八幡、隣」

「はい」

妖艶な色香を放つ彼女の言葉に抗えず素直に隣に腰を下ろした。俺が着席したのを認めると留美が腕を絡めて頭を肩に乗せた。

「お、おい…留美」

「そのまま」

留美は反論を許さなかった。そしてしばらくの時間が経過した。

驚いたことに留美は何もしてこなかった。それどころか果たして意識があるのかどうかすら分からない程に彼女の存在感が希薄になっていった。

感触はある。そこに確かに留美はいる。不気味な静寂が空間を漂っていた。

横目で留美を見た。彼女は先程からピクリともしない。もしかして酒が回って眠気に襲われてしまったのだろうか。しかし、俺が見た限り、留美はクラブでは一滴も酒を飲んでいなかった。自分が来場する前にアルコールを口につけたという話はイベントの準備の段階から一緒に居た同僚の理事のクロや会計担当からも聞いていない。

理性の決壊の萌芽が着々と成長を遂げていく。留美が側にいるというだけで体内の血液から気泡が生じるかのようなように熱い。今にも沸騰しそうだ。

口が開く。荒い息で酸素を求めた。壁にかけられた絵を眺めて心を鎮めようとした。波が収まることはなかった。目をそらせば逸らすほど留美の気配が伸びて身体に纏わりつくのが分かった。

「八幡、こっち見てよ…」

「い、今は無理だ」

「どうして…?」

その時違和感を感じた。留美の声が動揺を含んでいたような気がした。

それは間もなくして確信に変わった。

留美が震えていたのだ。華奢な身体から振動が伝わる。

正面に向き合うように移動した。

「お、おい。どうした留美…」

留美の顔を見て言葉が詰まる。

留美の眼が微かに潤んでいた。

「ねえ、八幡って…もう、結婚してるんだよね…」

「…ああ、そうだ」

「仮の、質問なんだけどさ…」

絞り出すように言葉を紡ぐ。自分を落ち着かせるように言葉を漏らした。

「もう結婚してる人にアプローチするのは駄目なことなのかな?」

その言葉の真意に分からない程鈍感な俺ではない。だがそれを俺に答えさせようとする留美も性格が悪いと言わざるを得ない。

「…俺には分からない」

「…そっか」

留美は一頻り逡巡した後、何か決心を固めたようにうんと頷いた。

「じゃあ確かめてみない?」

留美が首に腕を回す。耳元で留美の熱い吐息がかかると脈拍が結滞した。歯車が噛み合わなくなった機械のように運動を止める。

天井の幾何学的な模様をぼんやりと見つめた。

最高に自分好みの容姿を持った女性に言い寄られる悦楽と、優越感。妻に対する背徳の蜜が目の前に陳列されいつでも食すことが出

来る状態。そんな状況に陥れば誰もがその蜜を口に含み、色欲の海へと足を踏み入れるだろう。

だが、こんな時に浮かぶのは眼の前にいる留美の顔でもなければ結衣の顔でもなかった。

雪ノ下だ。

夜の公園で見たあの切ない表情。

会社のエレベーター前で見送った時の無常さを帯びた表情。

出向先の食堂で眼の前に座って弁当を食べていた時の楽しそうな表情。

雪ノ下との記憶がプラネタリウムのように天井に星星となって散開した。

手を伸ばしても届かない。空虚になった心が彼女を求めて渴望した。どうして、今ここに彼女が居ないのだろうか。

留美を見る。

無意識に雪ノ下と重ねていた。

身体つきは違うが、顔立ちや目元は彼女にそっくりだ。おまけに長い黒髪まで同じと来た。

もし雪ノ下雪乃とこんな関係になることが出来たらどれほど満たされるのだろうか。どんな樂園が待っているのだろうか。

「あ、ひゃうー！」

気がつくとも彼女を押し倒していた。彼女はされるがままに身体を俺に預けると全身の力を抜いた。その美貌を余すこと無く見せつけるように仰臥した彼女の姿はまさに一つの芸術としてそこに存在していた。

肩を掴んで結び目を解いて強引に上から衣服を下げる。彼女の色く美しい肌が露出し艶美な曲線を描いていた。乱れたシーツの擦れる音が肉欲の足音を想起させる。

あの時、お前をこんなふうに犯すことが出来たらどれほど良かったか。

欲しい。今直ぐにでも確かめたい。

俺は彼女のワンピースをたくし上げると汚れのない恥丘の聖域に

手を伸ばした。

肩を掴む手に力がこもる。純白の素肌を指で撫でながらその水々さを帯びた稜線を賞翫した。

「は、八幡、痛いよ……。急にどうしたの……？」

突然の声に意識を引き戻された。

「……っ！」

留美の声で我に返る。

登っていた血液が急激にその流れをなだらかに収めていく。

掴んでいたその手を静かに離した。喉の奥に詰まった鉛のような冷たい塊を嚙下する。鈍重な灰色の靄が胃の中でその重い腰を下ろした。

肩で息をしながらベッドから飛び退く。開放された留美は自身の衣服を整えながら怯えたような目でこちらを見ていた。

「……八幡」

「……俺は。ごめん、留美」

視界が歪む。壁の様子が奇怪に見える。いびつな牢屋に自分が投げ入れられたようだった。

胃の中の鉛は今も尚、そこに鎮座していた。気がつけば自分の身体が震えている。

最低の男だ。

留美を通して別の女性を見るだけに収まらず、人道に反する領域にまで脚を踏み入れた自分に対する怒りとやるせなさがこみ上げてきた。

今日の前に居るのは鶴見留美であつて雪ノ下雪乃ではない。

いつの間にか理性のタガが外れていた。

かつて総武高校時代に「理性の化物」と呼ばれていた自分の片鱗は既に無かった。

この時になってようやく自覚した。

度重なる誘惑と後悔。

この数ヶ月で怒涛の日々が流れていた。

自分の精神がこんなにも摩耗していたことに気づかなかつた。

「八幡、何があったの？」

留美が心配そうな声でベッドの上から問いかける。今しがた犯されかけた相手を気遣うなど真おかしな話だ。それでも留美は胸に手を当てて、自分のことのように痛みを分かち合うような仕草を見せた。

「八幡、苦しそう。私で良かったら話聞くよ？」

「……………」

どうして彼女の言葉はこんなにも心に響くのだろうか。

「ほ、ほら。言葉にして吐き出せば少しは楽になれるかもしれないし」
留美はおずおずと歩み寄るように話す。

無償の愛に思えた。

それは確かに俺の心に確かに響いていた。自分にとって間違いなく霧が晴れていくような天の恵みだった。

その時何か自分の心にかかっていた錠前が壊れたような音がした。
鍵穴が無かった。

錆びて崩れ落ちるように何の前触れもなくそれは地面に落ちていた。

そして気づいてしまった。

ある事実を自覚してしまった。

秘密に出来ないほどにその感情は今にも喉を通り抜けて強引に言葉となって吐き出されようとしていた。

口にしなければ自分がかんなくてしまっそうだった。

伝えるわけでも、決意を表すわけでもなくただ吐露したい。

「留美。その、長くなるけど良いか？」

留美になら全てを話すことが出来る気がした。それは今の俺を取り巻く環境から離れているが故に逆に話しやすかったからだ。

いや、当事者でなければ誰でも良いというわけではない。

留美でなければならぬ。

藁にもすがる思いだった。強がって独りよがりで作り上げてきた自分の殻にヒビが入った瞬間、こんなにも自分が脆い存在だと気付かされる。

「うん、じゃあここに座って」

留美は何もかもを受け入れるような深い慈愛の表情で快諾してくれた。

彼女の隣に導かれると俺は自分をさらけ出すかのようにこれまでの自分の足跡を留美に語り始めた。

続く

第三十六話

「……そっか。そんな事があつたんだね……」

長い独白を終わり、留美は合点がいった様子だった。

俺は全てを彼女に伝えた。

結衣との馴れ初めから、一色との関係、数年ぶりに再会した雪ノ下、上司との背徳の始まり。細部にまで渡る軌跡を言葉にした。

我ながら酒も飲んでいないのにに流暢な語りだった。自分でも不思議に思う。どうして留美になら全てをさらけ出すことが出来るのだろうか。

留美であれば受け入れてくれるかもしれないという淡い期待というよりはもつと確信めいた依存に近い。この数日間で留美の存在は自分の想像を遥かに越えて大きくなっていった。

身体に纏っていた大きな重荷を下ろしたような開放感を全身に受ける。胃の中で長いこと跳梁していた鉛を吐き出したからだろうか。身体が非常に軽い。

留美はひとしきり押し黙ると重い口をようやく開いた。

「八幡は今の奥さんの事は好きなの？」

「ああ。勿論だ」

「そっか」

探偵が手がかりを求めるかのように一つ一つ草木をかき分けて深奥の本質に迫りくる。それは決して迫り来る恐怖ではない。何か全身をゾクゾクと良い意味でざわつかせる背徳の足音だった。

「でもその雪ノ下さんって人のことも好きなんだね」

留美は突きつけるかのように語気を強くして問いかけた。

「……ああ」

口にしてしまった。これまでずっと明言化することを拒んでいた自分がこんなにもあっさりと認めるとは。自白剤でも打たれたのかと錯覚する程に俺は留美に対しては正直だった。

留美が手を握る。そのまま自身の方へ引き寄せると一回り以上も大きな俺の体軀を抱きとめた。

「る、留美…?」

「八幡は一色さんって人のことは好き?」

「その、嫌いじゃない…」

「智佐吹さんは?」

「とてもいい上司だと思ってる」

3秒ほどの沈黙を経て留美は次の言葉を紡ぎ出す。

「じゃあ私は?」

耳元で震えた声で囁かれた。心臓の鼓動が鼓膜を刺激した。留美の身体が強張り、固くなるのが分かる。待っているのだろう。俺の答えを。

今の自分に嘘をつけるだけの理性も自制も無い。

「……好き、だと思おう」

華奢な留美の身体を抱きしめて答えた。留美の身体から力が抜けて安堵の息が漏れる。

「………うん。ありがとう。私も八幡が好き」

合図も無く俺たちはそこで唇を重ねた。貪り食うような荒々しいものではない。お互いの愛を確かめるような柔らかく、芯に広がるような長い接吻だった。

求められたからではない。

ただ自分がしたいと思ったから。

俺は由比ヶ浜結衣を大切に思っている。今だってそうだ。

俺は更に、鶴見留美という女性を深く愛してしまっていた。

「八幡、雪ノ下さんの事が好きなんだよね」

「ああ」

「雪ノ下さんが一番好きな人?」

「…その、だな」

「最低。私とキスしたのに」

「………すまん」

「いいよ。分かっているから、全部。だから、雪ノ下さんとしっかり仲直りしたら私のことも見て」

「卑劣漢なんてレベルじゃない俺は」

「本当だよ。こんなにも私のこと都合のいい女みたいに扱ってさ」

留美は笑っていた。

頬に冷たい感覚が伝わった。

留美の目から滴り落ちた涙だった。

「ほんと…最低…。あんな事言って私が受け入れてくれるとか思ったの…?」

何も言い返すことが出来なかった。俺はただ、留美に甘えてしまったのだから。都合良く彼女を利用しただけの屑だ。

その時、留美がもう一度唇を重ねてきた。今度はお互いの存在を証明し、確認し合うような濃厚な口づけだった。

「くちゅ。。。ん…。八幡…。」

彼女に応えるように強く抱き寄せて唇を求めた。留美もまた背中に回した手に力を込めた。お互いが一つになるように境界線が溶け合い融和していくまで深く唇を重ねた。

何十分とキスをしただろうか。

ようやく唇を離して留美の顔を見上げた。彼女の顔はもう涙で濡れてはいなかった。

「嬉しかった。なんか、奥さんでも雪ノ下さんでも他でもない。私だけが知っている八幡の一面」

後頭部を優しく撫でられた。赤子をあやす母親の母性を感じた。

「留美に溺れそうだ」

「うん、溺れてほしい。でも、雪ノ下さんや奥さんの事、有耶無耶にしたまま私のところに来ちゃ駄目…だよ?」

「ああ。分かっている」

「私のことふるにしても私と深い関係を結ぶとしても、そこが最初だと思う。それまでは私、待つよ」

留美はそこで俺をそっと突き放した。絶妙なタイミングで餌を取り上げられ、おあずけをくらった犬の気持ちになる。歳下の留美に完全に手玉に取られていた。

「雪ノ下さんと仲直りできるといいね」

「どうしてだ？俺がもし雪ノ下と、その。また仲良くなったら留美にとっては不都合じゃないのか？」

「それは勿論そうなんだけど、、、でももし雪ノ下さんにフラれちゃったら多分八幡はもう私のところに来ないと思う。だって私はその人の代わりになれないから」

正鶴を射るがごとく俺の心の底深くを指摘した。同時に自分と雪ノ下を重ねることは止めてほしいという警告にも思えた。

留美はベッドから降りて靴を履き直すと、玄関へと歩いていった。「今日は帰るね。会うのはこれが今回の渡航では最後になっちゃうかな？またこの学期が終わったら一時帰国する予定だからその時にも会おうよ」

外がもう白んでいた。もうそんなに時間が経っていたのだろうか。

「ああ。あと、留美」

「どうしたの？」

「なんつーか。凄く気持ちが悪くなった。話聴いてくれてありがとう。あと、、、ごめん」

「もつと感謝してほしい。普通そんな話聴かされたら絶縁物だよ。反省して」

「す、すいません……」

留美の言うことはあまりにもご尤もだった。自分がこんなにも無責任に引き伸ばしてはつきりとさせなかったツケを留美にも背負わせようとしているのだから愚劣の極みと称する他ない。

「ん、別にいいよ。惚れた弱みだから」

留美はそう言うところらに振り返ってウインクした。所々で好意を明確に示してくる。それがまた、遅効性の毒のように時間差で俺の身体に周り、心を掴んで離さなかった。

「じゃあね、八幡」

「ああ、気をつけてな。家に着いたら連絡をくれ」
「うん」

玄関でお互いに手を振り、留美は足早にホテルを出た。一人になった部屋の中で意識が深く沈んでいくのを感じた。

抗いようのない欲望に染め上げられる。赤い血液が滾り、全身を突き動かす。財布から彼女の名刺を取り出すとじつと見つめた。

ベランダに出て夜風にあたりながら考える。

ようやく分かった。

どうして気づかなかったのだろう。

ずっと探し求めていたそれはあまりにも身近すぎた。

答えははじめからそこにあっただのだ。

自分が目を逸らしていただけだった。

そうだ。

俺は…。

続く

第三十七話

帰りの飛行機の移動時間は12時間もあった。半日もあの狭い空間の中で拘束されるストレスは慣れていないが故に相当なものであった。隣にいる智佐吹さんは一週間の疲れが吹き出したのか眠り姫のように到着まで一度も目を覚まさなかった。逆に彼女への警戒心とざわつくような胸の高鳴りから眠気が一向に来ず、目が冴えてしまった俺はというと映画を見続けるしかなかった。途中、やってきたCAからのサービスドリンクやおつまみも全て食した。映画を見るのに飽きた後は、航空ルートを眺めていた。約30秒毎に高度や速度のページと航路のページが切り替わる。それを飽きずに二時間は呆けて見ていた。周りからしてみれば相当な奇人に見えたことだろう。当の俺はというとアラスカ州からカムチャツカ半島へと段々と描かれる緩やかな弧を見るのを飛行機が着陸するまで延々と楽しんでいった。

着陸した時の日本は昼下がりであった。座席を立って伸びをすると、軋んでいた骨々がうめき声を上げてそれに応えた。

疲労からか、メンバーは皆憔悴しきった表情が見て取れる。かく言う自分も多分に漏れずその一人なわけで、到着ゲートを出るまでひたすら無言だった。

到着口で俺たちは解散した。皆早く家でゆっくりと休みたいからか簡単なあいさつもそこそこに自身の帰路へと足早に向かった。俺は自分が乗車するバスの時間まで時間に余裕があったので空港の売店を散策してから、外へ出た。

一週間ぶりの日本は蒸し暑かった。その前は乾燥していた場所に滞在していたためにその差は顕著だった。ターミナルの外へ出た時のサウナのような纏わりつく熱気が肌に付いて離れない。

ターミナル前のバス乗り場で千葉へと向かうバスに乗車した。人の少ない時間帯だったせいか、隣の座席に誰も座らず一人窓外の景色を満喫することが出来た。とはいえ、目に入るのは山々か高速道路の

灰色の壁だけで変わり映えもあつたものじゃない。ただ規則的に流れる分岐点の看板を見て追うだけの味気ない旅路だ。

移動中に結衣にメッセージを送った。

『とりあえず、日本には帰ってきただがまだやることがあるので遅くなると思う』

『おかえりー！良かった☆無事帰ってこられたんだね！（*・・*）
ちよつと遅くなるんだね（・ω・）でも八幡が帰ってくるまで
起きているよ！』

『分かった。ありがとう。ただ、もし帰られそうにもなかったら連絡を入れるからその時は寝てくれ。一回会社に寄って報告をしないと
いかん』

『分かった〜！（*・▽・*）』

毎日のように連絡を取っていたにもかかわらず久しぶりに会話をしたような気分だ。

もうすぐ停留所に着くようだ。バスが停車したのを確認してから、
座席上の荷物入れから自身のバッグを下ろした。冷房に守られた空
間から一瞬にして呼吸が苦しくなるような熱と湿気に囲まれた日本
の大地へと放り出された。辺りはもう暗くなっているのにも関わら
ず、この季節の気温というものは下がるということを知らないよう
だ。

バスの運転手にスーツケースを下ろしてもらい、バスが発車するの
を見届けてから今度はタクシーを拾った。後部座席に乗り込んで目
的地を伝える。ドライバーはカーナビで目的地の住所を検索すると
車両は直ぐに出発した。

携帯を確認すると留美からメッセージが来ていた。無事に日本に
到着した旨を伝えると直ぐに返事が返ってきた。

『良かった。心配してたから…』

短い文章だったが、留美からの心がこもっていた。俺は留美に『サ
ンキュ。落ち着いたらまた連絡する』とだけ送信すると端末をポケッ
トにしまった。

内心は焦燥感でいっぱいになっていた。空港のトイレで何度も確

認したのにもかかわらず自身の身だしなみが気になってしようがない。風采が上がらない己の容姿に今更氣を使ったところで微細の變化であることは百も承知だったが手を動かしていなければ心が最低限の落ち着きを取り戻すことが出来なかった。

時計は四時半を示している。まだ約束の時間までは一時間以上あった。それまでの間何をして待っていていようか。

ふと携帯が着信を告げた。画面を見ると『一色いろは』と表示されている。今は正直それどころではなかったが、気分転換も兼ねて一色からの電話に応じることにした。

「おう、一色。どうかしたか」

『先輩、もう到着しているはずなのに連絡が一つも無いというのはどういうことでしょうか？』

え、何。この人。ストーカーか何かか？何で俺の飛行機の予定まで把握されているの？少しばかり背筋が凍りついた。背後から思いつきり液体窒素でもかけられたのかわつてくらないだ。あ、それだと超凍ってしまう。

「確かに俺はもう日本に到着しているが、移動があつて心休まらぬ状態なのだから多少の連絡の遅延くらいは大目に見てもらいたいものだな」

『そんなこと言つてどうせ先輩は今日中に連絡もしないでしょ？』

バレテラ。一色なら良いかと何故か思つてしまう。

「そ、それだけ気の置けない相手つてことだからな」

『もう！上手いこと言つたつもりですか？……………でも、先輩が気を許してくれているつて認めてくれた…』

あれ、なんで急にしおらしくなっちゃつてるの。まさかこんな発言が効果てきめんだとは夢にも思つていなかったので困惑している。狡智の限りをつくした言葉というわけでもないのに。

『先輩は次の出社はいつになるんですか？』

「一応、明後日から出ることになってる。明日は休みだな」

『そうなのですね！じゃあ明後日お土産楽しみにしてます☑ あと、近い内におかえり会しましょうね！玉木さんも呼んで三人で』

「あの人飲み会みたいな食事の誘いに全く乗らないことで有名だけど果たして来るのか？」

だからこそ出張前にあの人に食事に誘われた時は度肝を抜かしたのだから。

『それがですね。これ玉木さんからの発案なんですよ』

「うえ。マジですか」

『因みにですが、玉木さんがこの前断られたの今でも根に持ってるからって言っていましたよ』

「何その次断ったら容赦しないぞって脅迫じみたオマケ発言」

『というわけで予定空けといて下さい。仕事終わった後にでも行きましょ☆』

「まあ、事情は分かった」

『まあ後は普通にお土産話とか楽しみですし、先輩には聞かないといけないこともありますからね〜』

「……………」

そういえば留美の事を追求されるんだった。どうしよう、今のうちに上手い誤魔化し方を考えておかないと大変なことになる。

『それでは先輩も今日は疲れているとは思いますので今日はこの辺で失礼しますね！』

「お前にそんな気遣いが出れるとは感涙だ」

『失礼な！私だって鬼じゃないですから！』

鬼ではないが悪魔ではあるんだよなあとは言わないでおいた。その悪女っぷりにハマっているのは内緒にしておかなければならないからだ。

『じゃあ切りますからね〜。今日はゆっくり休んで下さい！』

「おう、サンキュな。早いけどおやすみ」

『はいです！』

終わるタイミングを読んでいたかのように丁度タクシーが目的地に到着した。降りた場所の目の前には閑散とした公園。そこにある遊具は砂場と滑り台しかなくあとは何も無い地面が広がっているだけだ。中央にそびえ立つ時計の針は五時を示している。あま

りにも早く着きすぎてしまった。公園にはまだ遊び盛りの子どもたちが鬼ごっこをしていたり、ママ友達の夫自慢や旅行自慢など、水面下の戦いが繰り広げられていた。

歩き回って時間を潰そうにもスーツケースやボストンバッグなど大きな荷物を抱えているために移動可能範囲は大いに限られていた。とはいえ、五時過ぎということもあり、子供連れの母親たちは夕食の準備もあり、子ども達を連れてその場を後にしていった。流れとは面白いもので一組が帰ると他の親子達もそれに倣っていた。おかげで気がつけば人っ子一人居なくなつた閑地が出来上がった。つい五分ほど前までの喧騒が嘘のようだった。遊び場としての役目を終えた公園のベンチに一人座って息をつく。夕焼けに照らされ遊具が紅く燃えている。こうなると日暮れまであつという間だ。程なくして辺り一面が暗くなり、外周にある街灯が点いた。

夜風が強くなってきた。日差しが目にはささって本が読みづらい。もうすぐ集合時刻になろうとしていた。

その時、視界の橋から誰かが歩いてくるのが見えた。

女性の靴特有の高い音が響き渡る。持っていた本に葉を挟んで鞆の中にしまった。

その影はこちらへ近づいてくる。

俺は荷物を置いて席を立った。

女性は俺の目の前で立ち止まると髪留めを解き、美しい黒髪を靡かせた。思わず見惚れてしまった。相変わらず惚れ惚れする容姿だった。

「時間どおりかしら？」

「ああ、五分前行動。社会人として完璧だな」

「そう、良かった」

彼女はふうと息を吐くと姿勢を正して真っ直ぐに俺と向き合った。あれほどまでに吹き荒れていた風がバツタリと止んだ。

「久しぶり、比企谷くん」

「ああ、わざわざすまない」

雪ノ下雪乃は仕事終わりだった。オフィススーツのまま会社から直接ここに向かつてくれていた。

「もう、随分と雪ノ下に会っていない気がするな」

「そうね。貴方に会えない間、時間がとても長く感じたわね」

「意外だ、雪ノ下もそう思ってくれていたなんて」

「：分かっていくくせに。貴方も黒いわ」

「意趣返しだ」

俺が雪ノ下に名刺を渡した夜に自分が可愛くなったかどうか電話でわざと言わせようとした事を掘り返してやった。

「はつきりと言うのね貴方」

「器が小さいという自覚はある」

「自覚があるなら許されるというわけではないのだけれど」

「安心しろ、別に許しを請うつもりもない」

「比企谷くんに対する印象値がどんどん下がるわね。それにしても、どうして帰国早々に私を呼び出したのかしら？」

話を戻すと、雪ノ下がここに現れたのは俺が呼び出したからだ。出国前にここで落ち合う旨のメールを送信していた。日を改めて会うのが望ましいと思ったが、どうしても早く雪ノ下に会って伝えたかった事がったので無理を言っ来てもらった次第だ。とはいえはそれがまさか帰国して直ぐとは思ってもみなかったのか、雪ノ下は俺の荷物を見て流石に目を丸くしていた。

「ああ、答えが出たからな」

「そう……」

雪ノ下は表情を曇らせた。これから何を言われるのか。恐怖や期待、憂鬱などが一挙に顔に出ていた。

「なら聞かせて」

「ああ」

ここがポイント・オブ・ノーリターンだ。俺はこれから花園という地獄に脚を踏み入れる。一度浸かってしまえばもう戻ることは出来ない。

彼女は腕を抱きながらこちらを見上げている。俺の顔を見てなに

か察したのだろうか。

それでも彼女は待っていた。

俺の言葉を聴き逃すまいと熱い視線を送っていた。

欲しかったものが手を伸ばせば直ぐそこにある。

数え切れないほどの後悔があつた。

二度とあの寂寥に満ちた夜は過ごさない。そう決意した。

二人の間を刹那の風が通り抜ける。間にあつた葉や枝が全てその

風にさらわれていった。

彼女を長く待たせていた。

だからこそ迎えに行く。

俺は……………。

肩に入った力をスツと抜いて、真っ直ぐな目で告げた。〃もし良

かったら……”なんて接頭語なんて要らない。シンプルに、ただ言葉を

紡ぎ出した。

「俺は雪ノ下雪乃を誰よりも愛している」

続く

第三十八話☆

静寂が包み込み唾を飲み込む音すら聞こえてきそうだった。

心臓の鼓動が深く激しくなる。時を刻む毎にその高鳴りは増す。

身体は軽かった。心臓の裏に跋扈していた黒い靄は晴れ、胃の中に鎮座していた鉛はもう居ない。眼に一切の曇は無い。浮遊していたような脚はしつかりと地面を踏みしめていた。

眼の前には一人の女性。

長い黒髪に余計な肉付きのないモデルすら嫉妬させるような美しい体型と寂寥を身に纏った妖艶さ。彼女が道を歩けば誰もが振り返り、何故話しかけなかったのかと後悔の海に沈むような誰もが羨む絶世の美女だった。

そんな女性にたった今俺は親愛の情を伝えた。

否、たった今ではない。

ずっと昔からそうだったのだ。

それに蓋をしていたのは自分だ。

幾重にも積もった後悔と恋慕を一言に込めて彼女に届けた。

これが俺の出した答えだった。

思えば初めからそれはそこにあったはずだ。

自分の過去の選択が間違いであったことを認めるのが怖かった。

それを否定してしまえばこれまで自分が積み上げてきた全てが霧散するように思えてしまったから。

間違えてしまったのならそれを認めて、また積み上げればいい。

今度こそ正しい道へと歩みを進めればいい。

自分にとって何が必要か。何をすべきか。何を捨てるべきか。

余計な思考など不要。

何より俺には彼女がいない人生が考えられなかった。

彼女、雪ノ下雪乃は震える身体を懸命に奮い立たせて俺の目を真っ直ぐに見つめていた。

その目には動揺が映し出されている。

無理も無い。告白された相手には妻がいるのだから。それもその妻とは自分にとってたった一人とも言える親密な友人。裏切れないという気持ちが無いはずがない。

雪ノ下は言葉を失っていた。

やがて動揺は確信へと変わり、眈から大粒の涙が滂沱として流れ落ちた。流れ落ちるそれを覆うように白い両の手で顔を隠した。

俺は雪ノ下に歩み寄った。しかし、目の前にいる彼女は触れてしまえば消えてしまいそうなほどに儂く小さな背中をしていた。身長差はそこまでないのに彼女の存在がとても小さく儂かった

その肩に手を添える。

思えば雪ノ下雪乃に自分から触れたのは初めてだったかもしれない。その身体は今も小刻みに震えて助けを求めているようだった。

思い知らされた。

雪ノ下雪乃はこんなにもか弱い身体ですっと一人で生きてきたのか。

俺はこんなにも健気で美しい女性を忘れようとしていたのか。

雪ノ下は一步だけ前に出ると俺の胸元にすっぽりと収まった。

さめざめと泣いている。俺の衣服を強く掴みこぼれ落ちる雫を拭っていた。

それは初めて見る本当の雪ノ下雪乃だった。

覚束ない手で彼女の背中を抱きしめた。

雪ノ下は驚いたのか大きく息を呑んだ。間もなくして雪ノ下の白い腕が背中を回り俺の体躯が包まれた。温もりが胸の中に広がり、大きく空いていた心の大穴に命の水が注がれていく。

「比企谷くん」

「ああ」

「本当に、、、良いの?」

「ああ」

「私を...選んでくれるの?」

「ああ」

「由比ヶ浜さんよりも私を好きでいてくれるの?」

「ああ。雪ノ下雪乃が俺の一番だ」

「そう、なの、ね………」

雪ノ下は押し黙った。

俺は彼女の言葉を待つ。いくらでも待つてやる。何年も彼女を待たせてしまったのだから。

言いたいことは全て言った。

全てをなげうつ覚悟もした。

手に持っていた携帯をベンチに置いてコートの端を強く握った。

「嬉しい……」

彼女はそれだけ呟いた。

雪ノ下は俺から離れた。その眦からはもう涙は溢れていなかった。最後の一筋が頬に流れ落ちると。最高の笑みを見せてくれた。

「私も、貴方を愛しています。比企谷八幡が私の一番……んん！」

限界だった。

気がつけば俺は雪ノ下の唇を奪っていた。桃色の透き通る唇。誰にもまだ侵されたことのない神域を蹂躪した。

「んちゅ……ふ。んん！あっ……はむ……んん」

背中に手を回し強い力で二度と離れないように誓う。

欲望に任せて雪ノ下を貪った。

最初は勢いに飲まれたただされるがままだった彼女も次第に自分か

ら求めるように舌を絡め合った。

「れる…じゅ、じゅ。んふう…。ちゅ、ちゅ、ひき、がや…くん」

雪ノ下の舌はとても柔らかかった。とろけてしまいそうなほどに甘美でずっと舐っていたくなるような中毒性がある。

夜風が冷たい時間なお互いにお互いに玉のような汗をかいていた。燃えるように熱い身体の境界線がなくなっていく。密着した身体から雪ノ下の鼓動が伝わった。

何年も募った想いを唇に込めて重ねた。

キスをする度に雪ノ下雪乃という女性がいかに自分にとって大きな存在であるかを自覚させられる。もし目の前から彼女が居なくなってしまうえば自分の中のアイデンティティが軒並み全て存在意義を失ってしまうかのように思えた。

自身の脳が演算をした結果、これまでの自身の行動原理が全て雪ノ下雪乃という女性に起因すると導き出す。何度キスを繰り返して演算をやり直そうとも結論は変わらない。雪ノ下雪乃という女性はいつの間にか自分の一部になっていったのだ。

愛おしいなどという一瞬の気の迷いとも言える感情など何かのきっかけがあれば、塵として消えてなくなってしまう。そんな生易しい情などではない。

彼女は存在しなければならぬ。自分という器官がこの世界に存在し機能するために。

雪ノ下雪乃という女性に俺の人生を縛り、昇華させてくれる。虚飾に染められた自分の世界に本物を与えてくれるのだと。

最初激しかった接吻は徐々に優しいものへと変化していった。最後になるとそっと合わせるだけのキスをひたすら繰り返していた。

雪ノ下もそう思ってくれているのだろうか。

彼女もまた、飽きもせず唇を重ね続けた。何度も角度や力加減を変えて確かめるように愛を紡いだ。時に俺が上から蹂躪するように接吻をすれば、次になると雪ノ下が下から襲いかかるようにして吸い付いた。

雪ノ下の口を開けさせた。そして自身の舌を彼女の聖域に侵入さ

せると口蓋を丁寧になぞる。

「はあう!!!んん! ああ…ちゅ、じゅる…」

思った通り、雪ノ下は感じていた。足に力がいらなくなって生まれたの子鹿のようになる。それを嫌って必死に俺の身体にしがみついていた。

「ああ…うう!ん…はあ、はあ…。ひ、きがや、くん。それ、だめ…」

人間、歯の裏側というのは敏感で特に上顎は舐め取られるだけでも強い快感が生じる。散々、結衣とのキスで試していたことだった。

今度は雪ノ下の舌を絡め取ると自身の舌を彼女の舌の付け根に潜り込ませ裏側の血管を刺激する。同時に唇で先を吸い出すと顔を前後に動かして奉仕した。

「ひ、ひきふあや、く、、、ん!じゅ、じゅ、じゅ…。ああああ!」

刹那、雪ノ下の全身から力が抜け、後方に倒れた。俺は両の腕でその軀をしっかりと支えるとそのまま弓なりになった彼女を陵辱した。

雪ノ下は首に回していた腕はだらりと下に垂れ、なすがままに口内を蹂躪される。おとがいをあげる体勢になったことで、雪ノ下の身体は快感を真っ直ぐに享受できる準備が整っていた。

「んん、ふう。はあ。ちゅば、れろお。くちゅ、くちゅ…。じゅぼ、じゅ、じゅ」

愛玩人形となった彼女の口の中を貪る。何年間もお預けにされていた至極の馳走を前に出されて舌なめずりも珍重もしない人間が果たして居るのだろうか。俺は雪ノ下をベンチに座らせると正面に覆いかぶさつてもう一度口蓋を舐り続けた。

雪ノ下は身体をビクビクと痙攣させながら両腕を俺の背中に巻き付ける。両足はだらしなく伸ばしていた。感じる度に付け根からつま先にかけて一直線に伸びる。身体が最大限に快楽を享受できるように人間の身体とはプログラムされているのだろう。雪ノ下は本能で最も気持ちよくなれる体勢を整えていた。今度はこちらからと言わんばかりに彼女の方から積極的に舌を差し入れてきた。それに応えるためにお互いの体勢を入れ替えて自分が下になった。ベンチと

雪ノ下に挟まれた下半身は最早破裂寸前だった。
雪ノ下が妖艶な笑みでこちらを見下ろしている。

これからどうすれば良いか。
決まっている。

俺はただ黙って口を少しばかり開けて彼女の侵入を待つだけだ。

雪ノ下のあまりにも美麗な顔が近づく。

目を閉じて彼女を迎え入れる構えをとった。

口の中にドロツとしたものが流れ込む。とても甘美で永遠と飲み干したくなるような液体。薄っすらと目を開けると雪ノ下は潤った舌を外気に曝け出して、俺の口の中に唾液を流し込んでいた。粘性と艶身を帯びたそれは緩やかな速度で流れ落ちる。むしろぶりつきたくなつて顔を近づけようにも雪ノ下に頭を固定されているために、ただ黙ってそれが口の中に注がれるのを待つしかなかった。口を開けながらゴキユゴキユと喉だけを鳴らして器用に嚥下する。食道を通り過ぎ胃の中に到達すると得も言えぬ多幸感が全身に広がった。広大な快樂の海に全身から浸かり支配されたような屈辱感。最早、この海に溺れてしまうことに何の抵抗も無かった。雪ノ下雪乃という女性とならどこまでも溺れていける。キスだけでそんな気持ちにさせられた。

「雪ノ下、もっと飲ませて欲しい」

そう嘆願すると彼女は驚いたような目でこちらを見た。しかし目をつむって口の中に唾液をひとしきり溜め込むと再び俺に覆いかぶさって、口の中に大量の体液が追加された。

「ひきふあやくん。んくっ…。貴方って思った通り凄く変態なのね」

「ゴクン…。いきなり唾液を飲ませてくるやつに言われたくないんだけどな」

「美味しそうに飲んでいたじゃない」

「それとお前が俺に何の前置きもなしに注ぐのとは別の話だろ」

「し、仕方ないじゃない…。貴方は私の物だって思わせたかったのよ…。身体の中まで…」

少々おぞましくもある考え方を平気で吐露する雪ノ下に多かれ少なかれ面食らったものの、結局は自分も同じような独占欲を有している。人のことは言えない。

俺はまた口を開けて雪ノ下の唾液を待つことにした。俺が力を抜いて身体を背もたれに預けたを見て雪ノ下はまた口を閉じて唾を作り始めた。そんなやり取りを何十分と続けていた。

しばらくしてようやく唾液が枯渇すると待ちに待っていた雪ノ下の蜜蛇が侵攻してきた。柔らかな感触が口内を蠢き、壁を求めて怪しく徘徊した。やがて菌茎にたどり着くとその形を確かめるように丁寧に外枠をなぞっていく。奥菌の生え際をマッサージするように具に圧迫する。同時に背中を細い指で優しくなで上げられた。

結衣の感覚とはまた違ったざわつくような快感に身悶えた。思わず雪ノ下の肉体を乱暴に抱きしめた。今度は雪ノ下の指が段々と首元に移動していき、敏感な襟首を執拗に愛撫された。触れられてもない自分の下半身から体液が漏れる。怒張した肉棒を雪ノ下の身体に擦り付けた。

「っ……ん……ふう……」

流石の彼女も理解したのだろう。雪ノ下は黙ってそれを受け入れてくれた。

そして長い時間をかけて俺はズボンも脱がないままに彼女の柔肌で軽く射精してしまった。

「んちゅ…、ちゅ。ねえ、比企谷くん、もうこんな時間…」

気がつけばもう夜の九時になろうとしていた。人の気配は全く無い。時間を忘れてしまう程に雪ノ下に夢中になっていた。いつの間にか辺りは常闇に包まれ公園のが街灯が怪しく二人を照らし出している。

「お腹、空いてないかしら？」

雪ノ下が俺の上から降りて隣に座ると腹具合を聞いてきた。彼女の温もりが無くなったことを残念に思いながら、自分の腹時計がなっていることに今更気づく。

「そういえば、帰国してから何も食べていなかったからそう言われるとかかなり腹が減ってきているな」

「そ、そう…。あ、あの…、えっと」

雪ノ下は何か言いたげにしていた。昔だったら気づかないふりでもしていたであろう俺達の関係はもうあの時とは違う。俺はその先の言葉が待ちきれなくなつてそわそわと落ち着かない。

「よ、良かったら、、私の家…：きゃー！」

我慢の限界になった俺は雪ノ下の舌を求めた。雪ノ下は桃色の可愛らしい舌を出すと、ぎこちない舌使いで絡めてきた。

「ちよ…と、ふう。んん！くちゅ、れる…。まつ…て。んん！ああ、れる。ちゅ」

雪ノ下は口では抵抗するような発言をしつつも、身体は言葉とは裏腹に手を俺の頬に添えて逃さないようにしていた。こつちが恥ずかしくなつて顔を逸らそうとしても雪ノ下がわざとその視線の先に回り込んで自分の均斉の取れた美しい顔立ちを見せつけてきた。

「もう…話そうとしているのだから邪魔しないでほしいのだけれど…」

ジト目でこちらを睨む。それがあまりにも可愛らしくて反省の意など微塵も湧いてこない。

「…悪い。我慢出来なかった」

「その、嫌とは言っていないでしょう…んん！」

また雪ノ下の唇を奪った。今度はバードキスと呼ばれるソフトなキスを何度も繰り返すキスをした。唇を重ねる度に細かく雪ノ下が「ん…」と、吐息を漏らす。

「はあ…、はあ…。もう一度…」

今度は雪ノ下から求めてきた。雪ノ下が俺の頬を固定すると貪るように唇に食らいついた。上下の唇を順番に吸われる。苦しくなつて俺が酸素を求めようとするすると雪ノ下の口がすぐさま覆い被さつてそれを許さなかった。

朦朧とする中感覚が研ぎ澄まされていき、次第に唇を犯されることに快感を生じるようになってきた。

雪ノ下は舌を侵入させてこなかった。焦らされているのだろうか。俺が口を開けて彼女の口を受け入れる準備をしても彼女の舌は一向に侵入してこなかった。ただ表面を永遠と挟まれてはスライドさせ、マシユマロを摩擦させるように優しく擦り合わせた。

やっとの事で開放されると雪ノ下は肩で息をしながら、熱い視線をこちらに向けた。

「はあ、はあ。。。その、良かったら…、私の家で食事でもどうかしら…？」

雪ノ下雪乃に自分の口に人差し指を当てられながらそんな誘惑をされてみる。こんなことを言われて首を横にふる男が他に居たら教えて欲しい。

「ちよつと待ってくれ」

「どうしたの…？」

雪ノ下は俺に断られるのかと思って途端に切ない表情になった。今日はこれで終わりなのかと悲しそうだった。直ぐに安心させるように俺は理由を話す。

「会社の緊急の会議が延長して今日は遅くなるって結衣に連絡するんだよ」

「きやう…」

俺はまた雪ノ下に覆いかぶさって、またじつくりと彼女を味わった。

雪ノ下の両腕が背中を包む。

俺達が雪ノ下の家へと移動したのはそれからしばらく後のことだった。

続く

第三十九話

人目につかないよう細心の注意を払って雪ノ下のマンションの中へと入った。今更あんな公園で堂々と接吻を繰り返していた手前何を言っているのだろうかと思われるかもしれないが一応周りへの警戒心は怠っていない。

移動中のタクシーやエレベーターの中でもお互いに素知らぬ顔だった。形だけでも知り合いの体を装う。雪ノ下の自宅前に到着して、雪ノ下が鍵を開けるのを待った。雪ノ下が家の鍵が見つからずに焦っていたのが可愛い。自宅に入ってようやく緊張の糸が解けた俺達は靴も脱がないまま激しく唇を求めあった。

「ん…ちゅ…れる。ちゅぱ、ちゅる…ちゅ、ちゅ」

スーツケースやボストンバッグを持っていたため、玄関だと流石に狭苦しい。仕方なく靴を脱いでリビングまで移動する。勿論キスは続けたままだった。途中、雪ノ下を壁に追いやってそのまま愚息を押し付けながら唇を食った。雪ノ下も手に持っていた荷物を玄関に投げ出してお互いに背中に腕を回した。

リビングに移動するまで十分もかかってしまった。何時間もしていたせいで口周りの筋肉が明日傷んでしまいそうだ。

「夕食の準備をするから待っていてもらえる？」

俺はリビングのソファに座らされた。雪ノ下は唇を軽く重ねると、自室へ向かった。しばらくして、部屋着に着替えた彼女が戻ってきた。薄い肌色の長袖に紺色のパンツだった。ジーパンのような色をしながらも衣服と素肌の間には余裕があり、伸縮もある程度融通の効くものようだ。上は熱い日なので肩を露出させているものを着ていた。正直それだけでもお腹いっぱいになるくらいには目の保養だ。「昨日の残り物になってしまっただけれどいいかしら？」

「問題ない。寧ろこうして食わせてもらっただけでもありがたいからな」

雪ノ下は流石の手早さだった。あつという間に数種類のおかずが食卓に並ぶ。品目は煮物におひたし、卵焼きと家庭的なものが多い。

「ご飯は予め予約で炊いていたのだろう。あつという間に炊きたてのものが用意されていた。」

「どうぞ。貴方の口に合えばいいのだけれど」

「安心しろ。こんな事を言うのはあまりにも不謹慎だが、俺の嫁の料理の腕を考えてくれればすぐに分かる話だろ」

「本当に失礼な話過ぎて私もどう反応して良いものか困るわね…」

雪ノ下も頭を抱えていた。しかし、直ぐに気色ばんでこちらに避難の目を向ける。

「今は…由比ヶ浜さんの事は良いでしょう…?」

自分を蔑ろにされたことに対して怒っているのか。どうやら氷の女王様は他の女性の名前を出してしまうのだけでもNGらしい。

「その、悪かった」

「いえ…、その。し、仕方のないことだとは分かっているつもりよ…」

雪ノ下も直ぐに冷静になったのか、心なしか縮こまっていた。

「はあ…意外だわ。私がこんなにもさもしい嫉妬心を持っているなんて」

「ぶつちやけ高校の頃からその気はあったぞ」

「…そうかもしれないわ」

「え、どうした本当に?」

しおらしい彼女を見て、らしくないと思う。

「貴方が由比ヶ浜さんや一色さんと仲良くしているのを見るととても胸の中にもやもやとしたものがあったの。あの時は正直になれなかったけど、貴方だって気づいていたでしょう」

「ああ。でもまさか雪ノ下みたいな美人にヤキモチ焼かれるなんて夢にも思わなかったから」

「そうね、私のような絶世の美女に好意を持たれるなどというイベントは貴方の人生では二度と起きないでしょうね」

雪ノ下は満足げだった。ただ、それが少しだけ鼻についたのでわざと彼女の嫉妬心を煽ってみたくなった。

「残念だったな。今の俺は女性人気が高いぞ」

「……………」

雪ノ下の顔から笑顔が消える。そして一瞬にして切なそうな表情へと変わった。

「分かっているわよ…。私の会社に出向に来た時も貴方と仲良くなりたいたい女性社員が沢山いたもの。私が出た智佐吹さんも貴方のことが好きでしょうし。身体つきだって私のような身体よりもあの人達の大人っぽい色気を持っている方が比企谷くんは好みよね…」

「え、あの。いや、ちよつと…?」

雪ノ下が今にも泣きそうな顔になったので大混乱だ。どうやら、俺の知らない間に随分と彼女は不安定になっていたらしい。

「わ、悪かった。さ、さつきも言っただろ?雪ノ下が一番だって。事実として色んな女性からのアプローチはあったけど、俺が心を動かされたのは一人しかいなかったんだからな」

俺は雪ノ下のもとへ歩み寄ると震える肩をそつと抱いた。雪ノ下は安心したようで直ぐに落ち着きを取り戻した。

「ご、ごめんなさい。まだ実感が湧かなくて…。しばらくは何度も確かめないで安心出来るそうにもないわ…」

「雪ノ下が安心出来るまで何度だって言っても良い」

「ありがとう」

俺はまた雪ノ下と舌を絡めあった。今度は雪ノ下の方から積極的に舌を求めてきた。

しかし、30秒と経たないうちに雪ノ下がそつと俺を突き放した。

「食べましょう、食事が冷めてしまおうわ」

「そうだな、せつかく雪ノ下が作ってくれたしな」

早速席に着くと煮物から口をつけた。出汁の効いた優しい味が口の中いっぱい広がる。出張のせいで長らく食べていなかった家庭の味だった。白出汁が味の深みに一役買っている。

「月並みの感想で申し訳ないが滅茶苦茶美味しい」

「そう、良かった」

雪ノ下から笑みが溢れる。その笑顔だけで心を掴まれた。この笑顔を見るだけでも俺は彼女を選んだ甲斐があったと言えよう。自分一人だけが雪ノ下雪乃のこの笑顔を見ることを許されているという

優越感。どのおかずを食べても美味しいとしか言いようがない程に絶品だった。気づけば空腹も相まってあつという間に全てを平らげていった。

「ごちそうさま。美味かった」

「もう食べたの？」

「ああ、いくらでも食べそうだ」

「それは何よりね」

「なあ、雪ノ下のも食べていいか？」

「ええ。じゃあ、」

そう言うと雪ノ下は自分の焼き魚を器用に一口大に箸で取ると目の前に持ち上げた。

「は、はい…あーん」

なん…だと…？

雪ノ下のあーんなんてこの世に存在するのか。こんな可愛い女性が居て良いのだろうか。俺は流されるがままに口を開けてそれを受け入れた。

しつかりと味わって飲み込む。もう味とかどうでもいい。雪ノ下のあーんだけで人生最高の食事なのは間違いなかった。味も申し分ない。

「雪ノ下」

「な、なにかしら？」

「もう、残っている物全部あーんで食べさせてくれ」

俺があまりにも真つ直ぐな目で彼女を見つめていたために雪ノ下も困惑していたが直ぐに呆れられた。とはいえ、彼女も満更ではなさそうだ。

雪ノ下は次のおかずを箸ですくい上げると箸先の下に手を添えた。

「洗い物はこれで全部か？」

「ええ、ありがとう」

「食べさせてもらったんだから当然だ」

雪ノ下はダイニングテーブルで本を読んでいた。その姿はポス

ターに何の違和感もなく遣うことの出来る文学少女ぶりだった。

「さてと、そろそろ帰るか…」

「ええ…由比ヶ浜さんに怪しまれてしまったらいけないもの」

時刻は夜の十時になっていた。終電にはまだ余裕があるが、流石に家に帰らないと結衣に勘ぐられてしまう。

「まあ、帰国したその日にすぐ家に帰らない時点でおかしい気もするけどな」

「それを言ってしまったらお終いじゃない」

雪ノ下がそっぽを向く。そんな彼女が愛おしくなつて後ろから抱きしめた。

「また近い内に会えるから、心配するな」

「比企谷くん、貴方は卑怯だわ…」

雪ノ下は俺の両手に手を添える。一頻り胸に手を当てるとこちらに振り返って口づけをした。

「一旦、家に着いたら連絡を入れる。恐らく来週には時間が作れると思うからまたその時にでもこうして会えたら…」

「ええ、ならまた来週…になるのね」

雪ノ下は俺から離れると物憂げな表情で下を見た。

「でも連絡は毎日取れるだろ」

彼女を元気づけようと声をかける。焼け石に水なのは百も承知だった。

「そうね。ありがとう、比企谷くん。さあ、もう行って。これ以上居たら私が引き止めてしまうから…」

「分かった。また来週…だよな？」

「ええ、また来週」

俺は荷物を持ってそそくさと玄関へ向かった。かくいう俺もこれ以上雪ノ下と一緒に居てしまったら、未練がましくなつて帰るに帰れなくなつてしまふそうだった。あんな顔見てしまったら誘惑に負けてしまう。ようやくだ。何年ものすれ違いの果にようやく通じ合えたのにもかかわらず、帰らなければならぬ。そのなんとというもどかしさ。あまりにも歯痒くて道中発散しなければやっつけられない程だ。

自分を落ち着けるためにも丁寧に靴紐を結ぶ。アメリカでのイベントなどでは当然革靴だったが、飛行機や空港での移動中はスニーカーを履いていた。

それにしても大荷物だな俺。スーツケースにボストンバッグ。海外出張だったのだから当然か。それら全てを抱え持つて玄関のドアに手をかけようとしたその瞬間背後に温かな感触がぶつかった。

「うお!？」

思わずよろめいてしまう。その正体が何であるかは言うまでもないだろう。

「ど、どうしたんだ、雪ノ下…?」

「ひ、比企谷くん……………」

雪ノ下の声は震えていた。

一時の空白を経て彼女は自らの思いを打ち明ける。

「ごめんなさい。お願い…。今日は帰らないで……。今夜だけでいいから、、一緒に居て」

自分の中の鍵が音をたてて崩れ落ちる音がした。

そうだ、何を考えているんだ俺は…。

もう我慢しなくても良い。

もう彼女を離さない。

雪ノ下雪乃という女性に二度と寂しい思いをさせない。

そう決めたのだから…。

気がついたときには持つていた理性も荷物も全て投げ出して、色情魔のようにそこに居た雪ノ下雪乃の身体を乱暴に抱き寄せた。雪ノ下もまた俺の顔を両の手で捕まえると激しい口づけをした。

「んちゅ、ちゅ。じゅる…くちゅ。れろ、ちゅ、じゅ、じゅ…ん…ひき、、ふぁ、やくん…」

かくして俺は秘密の花園へと脚を踏み入れることになる。

だがここで満足することなかれ。

それは帰り道もなければ道標もない無限に広がる快樂の迷宮への

ほんの入り口でしかないのだから。

第三部 完

第四部 第四十話☆

閑散とした部屋の中、高級ベッドの軋む音が時の止まったマンションの一室で鳴り響く。

ベッドルームは余計なものが配置されておらず、ダブルベッドや照明、ベッドの側にポツンと置かれた小さな机と一脚のソファのみだった。

暖色の間接照明に照らされたそんな一室で俺は雪ノ下雪乃と激しく交わっていた。

「はぁー……んん!!くっ!……ああああ!!」

雪ノ下が俺の上で淫らに腰を振っている。あの氷の魔女すら凍てつかせるほどの妖艶さとクールさを持った彼女がこうも本能に逆らえず快楽を貪る様を俺のような男が特等席で見ている良いものなのか。そう自問しながらも下半身に伝わる極上の刺激に酔いしれていた。

雪ノ下は一定のリズムで硬直した一物を攻め立てている。

「んぐ……う……雪ノ……し……t」

「あぁんーあーはぁーひ……ひきがや……く……ふうーんん!!!」
乱れたシーツに腕をやりおもむろに起き上がると、慎ましやかな胸の先端を口に含んだ。乳飲み子に戻ったかのように一心不乱に吸い上げる。何度も飽きることなく形の整った乳首を舌で転がす。刺激を与える度に雪ノ下の身体が敏感に律動する感触が伝わってくるのが心地よい。

突然の奇行に雪ノ下は最初、一瞬目を見開いたが、まもなく飲み込んだ肉棒に意識を戻すと俺の頭を細長く美しい両の腕で包み込んだ。

「はぁ……うう!……ん……嬉しい……。比企谷くん……」
愛おしそうに後頭部を撫でる。子供をあやす母親のような優しい温もりが全身を支配した。

その間にも雪ノ下は下半身の運動を止めていない。愛撫に合わせるように腰を滑らかに動かしている。

甘美な快樂の浴槽に浸かったかのようだ。

雪ノ下に抱かれているだけで満たされていくのが分かる。
満たされてはいけないのに。

「比企谷くん．．．？」

見上げると雪ノ下が不安げな顔でこちらを見ていた。どうやら物思いにふけっていたせいで、動きが緩慢になっていたようだった。その間にも緩やかな腰の動きで奉仕を続けている。底の見えない母性とも言えるほどの愛情に身体も心も何もかもが彼女に奪われていく。

「あ、いや。なんでもない」

思考を止めると雪ノ下の引き締まった尻を乱暴に掴んだ。そして彼女の身体を持ち上げると勢いよくペニスに引きつけた。

「ああああああああ！ん！！いや．．．！だめ！！」

抜いては突き、また抜いては突く。

楔を打ち込むように強く。

男根を打ち付ける度に雪ノ下の嬌声が鼓膜を通り抜けて脳の中樞を麻痺させていった。

こんな麻薬のような快樂が存在したのか。

俺はたった今知ってしまった。

気づけば二度と抜け出すことの出来ない禁断の果実を口にしてしまっていた。

それは雪ノ下雪乃も同じであった。

脳髓の芯まで痺れさせる交わりに思考を奪われた男女がそこにはいた。

虚ろな目で雪ノ下の目を見ると彼女も既に焦点が定まっていないようだった。

「んん！ああっ！．．．．．はあ、はあう！！」

「雪ノ下．．．そろそろ．．．んぐ！！」

「はあ．．．．．！はあ．．．．．！いいわよ。出して！」

「いやでも、お前．．．．」

「いいから。お願い！」

雪ノ下が腰の動きを早めた。両腕を前に突き出し俺の胸で突っ張

る。止めどない刺激に下半身がまるごと持つていかれてしまいそうな感覚に陥った。

「我慢しないで．．．んん．．．だ．．．して」

そう言うとき雪ノ下は唇を重ねつつ柔らかな舌を唇の隙間にねじ込む。激しい下半身の運動と口内の蹂躪から生じる快感の波に為す術もなく飲み込まれていく。

「ゆひの．．．した、出る!!」

「んんーいやー! あんー! ああああああああああああああああああああああああー!」

限界は突然訪れ、精液が間欠泉のように吹き出した。溢れ出た白濁が雪ノ下の膣内へと注がれていった。

中出しを許した雪ノ下は恍惚とした表情で蜜壺をうねらせ砲身に残された子種の発射を促した。

くぐもったうめき声をあげてそれに応える。

「う…ぐ…はあ、はあ、はあ…」

長い射精を終えてようやく肉欲の鎖から開放されると、雪ノ下は聖母のような微笑みで優しく俺を胸の中に受け入れた。

「ごめんなさい．．．でも、嬉しかった」

そう言うとき雪ノ下は頭にキスを落とす。

「俺は．．．」

「あなたは悪くないわ。私が弱かったから．．．また、あなたに甘えてしまったの」

——結局、結衣には会議が長く続いて帰れなくなったので今日はホテルに泊まる旨を伝えた。雪ノ下との一回目を終えて携帯を確認すると返事が返ってきていた。

『分かった〜（：|；） お仕事頑張っただね! ☆明日には帰ってくるよね?』

心が痛む。たった今俺は愛する妻を裏切ってしまったのだ。なのに不思議と後悔の念が自分が予期していた程湧いて出てこない。雪ノ下雪乃と永遠と交わっていたという邪な感情が身体を支配していた。

「由比ヶ浜さんから？」

雪ノ下が心配そうに俺の顔を覗き込んできた。かくして結ばれた俺達は今までよりも更に距離感が無くなっていった。雪ノ下は一切の遠慮もなく身体をびったりと合わせると首元に吸い付いてきた。右手では乳首をその白い指先で丁寧に愛撫する。

「ああ、分かった」だとき」

「そう…」

「流石にバツが悪いか？」

「ええ。罪悪感が無いと言えば嘘になってしまいうわね。曲がりなりにも彼女は私の数少ない理解者だったのだから」

雪ノ下は手で奉仕しているのとは反対の乳頭を舌で転がしながら呟いた。

「ちゅ…。れろ…。でも、今はこの気持ちに嘘がつけなくなってしまった」

「ああ」

俺たちは無言で両手を絡め合う。そして互いの顔を近づけ合うと唇を合わせた。

「ちゅ…。ちゅく…。ちゆる…。れろ。れろ…。ちゅば。ちゅ、ちゅ…」

あつという間に愚息が硬直を取り戻した。彼女の柔らかな手が触れるとそれに呼応するようにして跳ね上がる。旋律を奏でるような優しい動きで指先が砲身の血管を這っていた。

「また固くなったわね」

艶のある声で鼓膜を愛撫される。雪ノ下雪乃という女性から発せられる言葉の一つ一つが麻薬となって脳内を麻痺させた。彼女の声を聴くたびに下半身が熱くなってしまふのだ。自分の脳内で快樂と彼女の声がリンクするようにプログラムを書き換えられていく。雪ノ下は徹底して、言葉と行為の回路を繋げていった。甘い声で囁く時は肉棒に触れるか触れないかの微弱な快感を与えられる。そう身体に叩き込まれていった。

「雪ノ下の声を聴いただけでこうなった」

「なら、もつと聴かせてあげる…」

雪ノ下の荒い吐息が耳殻を這う。背中にゾクゾクとしたざわつく感触が登り、彼女の慎ましやかな胸が上半身にぴったりと貼り付いた。

雪ノ下の手は砲身に触れるか触れないか、すんでのところで徘徊している。今か今かと待ち望んでいるのに、彼女の手がやってくることはなかった。

「……ここにきて焦らされるのか」

「貴方、何を言ってるの。私は、十年近くも焦らされていたのよ？これくらいお返しだわ」

「わ、悪かったって」

雪ノ下の後頭部を撫でた。絆された猫のように頭を擦り付けて甘えてくる。

「許さない」

「え」

「ふふ…冗談よ。ねえ、いっぱい出して」

「うあ…」

雪ノ下の手が上下に動いて摩擦するたびに腰が跳ねる。媚薬とも言える彼女の言霊が鼓膜から全身に回った今、自身を制御できる器官は何もない。最高の奉仕によって抵抗する間もなくオーガズムへと導かれるだけだった。

精液が飛び出した。止めどない量の体液が溢れ出て雪ノ下の汚れない手を汚した。足先までぴんと伸びた脚が痙攣するようにビクと波打ち、腰を突き上げて射精しやすい体勢を取る。雪ノ下の腕がベッドと腰の間に差し入れられ俺の身体を支えた。

「そのまま」

「おああーぐうーああ!!!」

雪ノ下の手が止むことはなかった。動きを早め、先端を執拗に刺激する。排尿の感覚が上り詰める。亀頭が熱い。爆発しそうだった。

雪ノ下は俺の悶える脚を意も介さず手淫を続ける。怪しく笑う彼女は淫魔と見間違うほどに婀娜やかだった。

「で…出る…」

「そう。じゃあ、可愛い比企谷くんをもっと見せてね…」

「あ…がああ！ああああ！」

雪ノ下の運動が更に早まり、仕上げに入った。

刹那、自分でも膨大な量の透明な液体が吹き出した。さながら間欠泉だった。自分の中にこれ程までに水分があったのかと目を疑うくらいだ。止まらない。

体中に電撃を受けたような強烈な衝撃。

気持ちが良いすぎて白目をむいた。

あらゆる神経を触覚に割いたために他の感覚が鈍くなっていた。

息も絶え絶えだった。

微かに見える視界で雪ノ下の顔を見る。

蠱惑的な笑みを浮かべていた。

雪ノ下の髪から肉棒から放出された体液が滴っている。

「気持ち良かった…？」

そう言っているような気がした。「ああ…」と蚊の鳴くような声で応えると雪ノ下が爛漫とした笑みを見せた。

波打ち際に打ち上げられた身体を雪ノ下のベッドの上に晒す。

雪ノ下は俺の精液の量に驚いているようだった。

「結構出るのね」

「…ふう、はあ…：ほ、他の男と、比べたことがないから分かんらん」

「私も他の男の人と関係を持ったことがないから分からないわ」

「持ったことがないのにどうしてこんなに上手いんだ。」

「あ、でも…」

「何かしら？」

「い、いや。なんでもない」

智佐吹さんに手で絶頂させられた時にとんでもない量だと褒められたのを思い出した。だが、今ここでそんな事を言おうものなら雪ノ下に殺されるのが目に見えていたので言うのを止めた。

「…今他の女の人のこと考えていたのではないかしら？」

バレていた。雪ノ下雪乃も結衣と同じで元より勘の鋭い女性だ。咎めるような目でこちらを睨んでいた。

「わ、悪い…」

咄嗟に謝った。雪ノ下に「そ、そんなに怯えたように言わなくても」と小さな声で言われる。

「べ、別に、気には…するけど、だからといって責めるつもりもないわよ…。その、これから私のことだけ考えてくれるようになっていけば良いのだから」

雪ノ下がのしかかって、キスを求めてきた。少女のような嫉妬心も雪ノ下雪乃であれば一つの魅力として御せるだけの器があった。こんな自分を好いてくれる彼女が愛おしくて仕方がない。

「ん…好き…。ひきがや、くん…」

「くちゅ…ああ、俺もだ。雪ノ下」

身体の間の手を滑り込ませてなだらかな双丘を揉みしだく。確かに大きさは平均よりも小さいかもしれないが、俺にとっては最高の胸だった。

「はあう…。ん…あ…気持ち、良い…」

どうやら雪ノ下は胸が弱いらしい。乳首はとりわけ感度が予想よりも遥かに高かった。乳腺を刺激すると雪ノ下は深い吐息を漏らし静かに広がる快感の余韻を味わっていた。そして、乳頭を刺激すると激しい声をあげてその美しい肉体をよじらせた。

結衣と同じく色々な音を奏でる楽器のようだ。しかし、音色も旋律も全く異なっている。好奇心が膨らむ。ここに触れるとどうなるのだろう。触る度に期待以上の反応を雪ノ下が見せてくれた。調律が楽しくて永遠と触っていられる。

それにしても、〴〵これから私のことだけ考えてくれるように〴〵か。雪ノ下が随分と略奪愛に意気込んでいるが分かる一言だった。

彼女も本気になってくれている。それがたまらなく嬉しい。

「雪ノ下。その、ちよつと良いか…むぐう…！」

「ちゅ、くちゅ。れる…。ごめんなさい、も、もう少しキスしてからじゃ、だめ？」

「…ああ、分かった」

そう言ってから雪ノ下が口を離れたのは30分も後のことだった。

結局俺は、何を言おうとしていたのか。今になってはどうでもいいことだった。

雪ノ下が仰向けになるように体位を入れ替えた。これからどうなるのかと少女のように怯える彼女の股の間に割り入る。そして、数十分前の吐精などとうに忘れた肉棒をあてがった。

動揺と興奮の入り混じった彼女の顔をじっと見つめる。これからお前を犯すのだと目で教える。彼女の膣口から愛液が滴り、受け入れる準備は万全のようだ。嗜虐心が何倍にも増幅していく。このまま雪ノ下を視姦し続けるのも悪くない。

「は、はやく…いれて…」

雪ノ下が嘆願する。腰を動かして自分から繋がろうとしていた。

なんと卑猥な光景なことか。今にもペニスが破裂しそうだ。血管が浮き出して外郭を突き破らんと血流が一同に介していた。

我慢の限界だった。彼女の腰を持って奥まで届くようにしっかりと固定すると、臀部を深く前に突き出して彼女を貫いた。

「ああん、はあ…うう！…はあ！ああん！く…ふう…あ、あ、ああ…！」

甘美な嬌声が部屋中に響き渡る。

そのあまりの官能さにまたたく間に膣内に射精してしまう。入れただけで柔肉が絡みつき子種を絞り出そうとしてきた。信じられない程の名器だ。歯止めが効かない。まるで水漏れした蛇口のように白濁が溢れ出た。

出し足りない。精液が足りないと思ったのは今日が初めてだった。

「雪ノ下、今度は後ろからでも良いか？」

「ちよ、ちよっと私の返事もなしにこ、腰を持たない…で、ん…はう…！」

彼女の答えもままならぬままに俺は雪ノ下の白く無駄な肉のない尻を持ち上げて三回目の交尾を始めた。これまでとは違う角度での挿入に酔いしれながら、未開拓の境地をかき回していく。

打ち付ける度に雪ノ下が美しい肉体を弓なりに逸らした。おとがいをあげる彼女の姿は紛れもなく芸術そのものだった。

体液という体液が互いの身体を汚し合う。ベッドのシーツは余すところなく淫猥な湿り気を帯びて濃厚な情事の残り香を漂わせた。

何年も味わうことのなかった充足感が全身に浸透した。

ずっと味わっていたくなるような快感を貪り続ける。

五回目の交接でとうとう雪ノ下が失神してしまった。

目も虚ろになって快楽を機械的に享受し続けるその軀を俺は嬉々として欲望のままに弄んだ。

「あ……う……あ……く……」

うめき声のような雪ノ下の嬌声。

その度に肉棒が悦び、もつと聴かせろと膣内で暴れていた。そのあまりの快楽に自分もまた、色欲に従順な奴隷へと変貌していた。

体裁など最早しがらみにもならない。今の自分を縛るものはもう何も無かった。

雪ノ下雪乃という女性に腰を打ち付け、肉欲に流されるまま禁断の果実を貪り尽くす。麻薬のように脳髓を侵食される。男根が溶けてしまいそうなほど雪ノ下の膣内は熱く、絡みつくひだで愚息を癒やしてくれた。

一物が萎えることなく俺は雪ノ下雪乃を犯し続けた。

一頻り突いてはその愉悦をじつくりと味わう。ある時は中に出し、またある時は身体中に精液を振りまいた。最後は雪ノ下の口内に肉棒を強引にねじ込んで、性を放った。朦朧としている彼女を見ながら支配欲が満たされていくのを感じた。

口からこぼれ落ちる精子は出しすぎた事もあって既に色を失っている。

口元から滴る精液が間接照明に照らされて怪しい魅力を放っていた。

雪ノ下は肩で息をしながらこちらを見上げた。

「けほ……けほ……。ぜ、絶倫なのね……」

「悪い……。その、嗜虐心を刺激されて思いつき好き勝手に犯ってしまった……」

「いいの。野獣谷くんの性欲の深さを見くびっていた私が悪いのだから」

ら」

「根に持つてるじゃねーか……」

「しょ…初夜なのにあんなに乱暴にされるなんて思うわけないでしょ」

「す、すまん」

「ちよつとそのまま座ってなさい。はむ…」

「うぐうつ…」

絶頂したばかりの愚息をぱっくりと啜えられた。そしてそのまま砲身に残っていた子種を吸い出される。下半身を根こそぎ持つていかれるような吸引だった。

膝立ちが出来なくなつて後ろに倒れ込む。肉棒が雪ノ下の口から離れること無く、生暖かい感触が残つたままだった。

「じゅぼ…じゅ、じゅ。じゅるるるるるるる。ちゅ、ちゅぱ…れろ…じゅ、じゅ」

萎えてしまった硬直を強引に取り戻させる勢いで雪ノ下の頭が上下した。

柔らかな手で袋を揉みほぐされる。心臓マッサージのようにポンプの役割を果たしたそれはつつがなく精液を陰茎へと輸送した。

俺の意識が朦朧とし飛んだ後も雪ノ下はペニスを舐り続けていた。最後に見た雪ノ下の表情は蠱惑的なものだった、怪しく微笑む美女の顔に酔いしれながら体力の限界を迎えた俺はそのまま深い眠りへと落ちていった。

目が覚めた時には太陽がとうに顔を出していた時間だった。

朝の日差しが差し込む部屋の中で眠り姫を肩に抱きながら背筋を伸ばす。眠れる美女を起こさぬよう、そつとベッドから降りて携帯を確かめた。

スマートフォンロック画面は9時30分を示している。自分が一体何時に眠りについたのか記憶が定かではないのだが、恐らくは3

時間以上の睡眠時間は確保できていると思う。とはいえ、体中に残るけだるさは未だ顕在で、半日にも及ぶフライトと昨晚の逢瀬で歩くことさえままならないような状態だった。

洗面所で口を濯ぐ。鏡を見ながら目立つ場所にキスマークが残っていないか入念に確認した。

雪ノ下が起きたらシャワーを借りよう。顔を洗いながら昨日の事を思い出していた。

とうとう、関係を持つてしまったんだよな…。

俺は雪ノ下雪乃を抱いたのだ。理性という人間が持つリミッターを外し、欲望のままにお互いを求めあった夜。あんなにも甘美で恍惚とした時間は人生で一度たりとも無かった。禁忌を犯すとはこれほどまでに人間を溺れさせる力があるのか。

寝室に戻って彼女の寝顔を見た。

美しい顔だった。

こんなにも美しい容姿を持った女性が居るのだろうか。

たまらない。

犯したい。

邪な感情が沸々とこみ上げてきた。

「…あまりジロジロと見られるのは恥ずかしいのだけれど」

「悪い…。起こしたか？」

「いいえ、あなたが起きる少し前に目が覚めていたわ」

「そうか」

雪ノ下は着崩していた寝間着を来直すと徐に起き上がった。

「おはよう、比企谷くん…」

「ああ、おはよう」

掛け布団を肩にかけながら話す彼女の姿は優艶以外の何物でもない。

「その…、今日はよく眠れたかしら？」

「お陰様でな。ぐっすりだ」

「皮肉なの？」

「他意は無い。本当にいい夜だった」

「い、いきなり真つ直ぐに言われると物凄く恥ずかしいのだけれど…」
「なら雪ノ下はどうだった？」

意地悪く雪ノ下にそう聞いてみた。雪ノ下はいじらしそうに顔を伏せた。

「……………とても気持ち良かったわ」

そう応える雪ノ下の顔は紅く染まっていた。布団で口元を隠す仕草がまた可愛くて仕方がない。

「なら良かった」

「私も顔を洗ってきてもいいかしら？」

「分かった」

雪ノ下はベッドから降りると覚束ない足取りで洗面所へと向かった。彼女もまた腰が砕けているのか、まともに歩けないようだった。

ベッドに手をかける。シーツの上に長い黒髪が落ちていた。当然だが、雪ノ下の髪だ。手にとってみると本当に毛先まで艶やかで乱れない髪だった。俺はそつとそれを口につけた。

「お待たせ」

雪ノ下が洗面所から戻ってきた。それにしてもすっぴんでこの美顔か。あまりにも整っている。何の躊躇いもなく「綺麗だ」という褒め言葉が口から出ていた。

「あ、ありがとう…」

雪ノ下はちよこんと俺の隣に座った。合図もなくただ自然と肩を寄せ合う。

乾いた砂漠から湧き出る水のように内側から充足感が広がった。

「ねえ、比企谷くん」

「どうした？」

「その……後悔はしていない？」

「今更じゃないか？」

「確かめたいのよ。何度でも」

「するわけがないだろ。こんなにも幸せなのに」

「そう…」

雪ノ下はその小さな頭を肩に載せる。

「私も幸せよ…」

俺たちはそつと唇を合わせた。

ベッドの上に静かに倒れ込むと、上下を入れ替えながら唇を激しく貪りあった。

この時間が永遠に続けばいいのに。

今は、そう願うだけだった。

続く

第四十一話☆

一週間ぶりに帰宅した我が家は変わり映えするはずもなく出発前とは変わらない姿で主を出迎えてくれた。妻も同じだ。変わらぬ美しさと可愛さで駆け寄ってきた。

「おかえりー……!!!」

「ただいまっ」と

結衣が胸の中に飛び込んでくる。いい歳にもなつて子供らしさが抜けないのも彼女の魅力の一つだ。

「疲れたでしょ? とりあえずお風呂入って休む?」

「ああ、そうさせてもらう」

雪ノ下の家で一度シャワーは浴びているのだが、流石に疲労も溜まっているので浴槽には浸かりたい。

スーツケースや荷物を一旦支度部屋に置くと直ぐに洗面所に向かった。

一週間ぶりに入る風呂は格別だった。思えばアメリカに居る時は風呂という文化もなくシャワーで済ませるのが当然なので、肩までじつくりと浸かるなどということをしていなかったな。体の芯から疲れが抜けていく。やはり日本人には温泉が必要。はつきりわかんかね。

風呂からあがると結衣がまた抱きついてきた。後頭部を撫でてやりながら愛を伝える。同時に湧き水のように罪悪感の本流が顔を出す。

彼女ではない女性を抱いたという事実。それが遅効性の毒のように後から後から襲いかかってきた。

だが不思議な感覚だ。あれ程までに恐れ抱いていた罪の意識が今では背徳への燃料としてしか機能していない。

結衣を抱きしめながら既に雪ノ下のことを考え始めていた。

「ねえ…ヒツキー。しよっ?」

結衣が甘い声で身体を求めてくる。

「ああ、分かった」

この猛りを鎮めるには女を抱くしかない。結衣の衣服を慣れた手

付きで取り去るとお姫様抱っこで寝室へと連れて行った。

「あああーうん…んむう…はあ、はう…！」

結衣が馬乗りになって腰を振る。

扇状的な胸の躍動。雪ノ下にはないものだ。だが、それでも雪ノ下に乗られる方が気持ちがいいし、絶景だった。

射精は問題なく出来る。間もなく結衣の中に精子が放たれるだろう。

なのに全く気持ちが悪くない。

肉棒はこれ以上なく熱り立っているのに感情がついてこない。

結衣の腰を掴んで乱暴に振ってみる。男根が摩擦され強烈な射精感を催す。

結衣と唇を合わせてみる。舌を絡め合う度に幸福感が増す。

そのまま精液を放出してみた。精管を通り抜ける快感が下半身から伝わって激しい快感をもたらした。

どうしたことだろうか。

何もかもが機械的に感じてしまう。人体のメカニズムとして様々な感覚を享受しただけという結果がもたらされただけでそれ以上の感情が何も湧いてこない。

結衣は恍惚とした表情で肉棒に酔いしれている。一週間ぶりの夫婦の営みだ。溜まっているものがあつたに違いない。

彼女の顔と膣内からドロドロと流れ出る体液とを呆けた面で交互に眺める。

昨日枯れるまで出したはずがもうこんなにも蓄えていたのか。己の節操の無さに呆れてものも言えない。

「ヒッキー、どうかしたの？」

結衣が心配そうにこちらを見た。

「いや、相変わらず激しいなと思ってな」

他の女の事を考えていたと正直に言えるはずもなくお茶を濁して答えた。

「ご、ごめんね。帰っていきなりすぎたかな…?」

「大丈夫だ。俺もしたかったから」

「そ、そっか。良かった」

結衣は俺の上から降りると、ティッシュで丁寧に拭き取った。

「また、お風呂入り直しだね」

「一緒に入るか」

「うん」

軽くキスをして、絶頂したばかりで足取りの重い結衣を支えながら風呂場に向かった。

「アメリカの話これからいっぱい聞かなきゃ」

「そういえばその話全く出来てないんじゃないか?」

「えへへ。すぐエッチになっちゃったもんね」

結衣は風呂場でもベツタリだった。俺の身体を洗うと白薦したので怪しいと思いつつも任せてみると案の定陰茎をいじくり回された。お陰様で二回戦の準備は万端だ。

「結衣、お前話聞く気無いだろ…」

「いいじゃん」 エッチしながらでも。しこしこしてるから、そのまま話して♡」

「…。分かった」

仕方なく俺はことのあらましを結衣に愚息を扱かれながら頭から話し始めた。留美と再会したことは伏せておいた。それがこの出張での一番のイベントではあるのだが、流石にそのことまで話してしまふと雪ノ下との浮気をうっかり漏らしてしまいそうだったからだ。留美を押し倒して挙げ句、キスまでした話などもっての外だ。よくよく考えてみればこの短い間に四人もの女性とキスをしてしまい、そのうちの一人とは最後まで関係を持ったという女癖の悪さを露呈した状態となっている。

一色と智佐吹さんは相手からされたのでまだしも、留美と雪ノ下の場合は最早自分からしているので弁解のしようもない。

就活イベントの日に買い出しから戻った場面に差し掛かったところで精液が飛び出た。シャワーで付着したところを自分で洗い流し

ながら、結衣に扱かれ続ける。

そして、最終日直前に芦間とラーメンを食べに行った話で二回目の射精を迎えた。

今度は結衣に砲身を啜えこまれた。最後までしつかりと吸い出される時、ようやく結衣は満足したのか口を離した。

「じゃあ続きしよっか」

時刻はまだ午前だというのに夜遅くまで彼女の性欲は尽きることを知らないだろう。

俺は絞り尽くされる未来を覚悟した。

四つん這いになった結衣を後ろから突きながらこれからのことを考えていた。雪ノ下とついに結ばれたから終わりというわけでもない。彼女と不倫関係になった以上他の女性との関係にも答えを出さなければならぬのだ。一色や留美は勿論、そして結衣に対しても…。

まだ課題は山積みだった。

だが、今は雪ノ下との蜜月の日々に没することしか考えられそうにもない。

来週まで雪ノ下とは会えそうにもない。

こんなにも次の週が待ち遠しいと感じたことはなかった。

早く雪ノ下雪乃に会いたい。思春期の若者が恋い焦がれるかのように胸が締め付けられる思いを抱きながら結衣の中をかき回した。

そしてとうとう俺は、虚ろな目で天井を眺めながら結衣の中で絶頂に至った。

頭の中の雪ノ下が幸せそうな顔を浮かべてこちらを見る。

「好きだ…」

雪ノ下。

「うん、ヒツキー。私もだよ…」

唇を合わせる。舌をねじ込んで口蓋を丁寧に舐め取った後はゆっくりと回して隅々まで愛撫した。

「ふあ…、くう…ふう。ひっひい…」

腰にしつかりと手を回して離さないように抱きしめる。

「ちゅ、ちゅる……。愛してるぞ……」
「うん……。ちゅ、ちゅ、ちゅ……。ちゅぱ……」
愛してるぞ。

雪ノ下。

続く

第四十二話☆

「あ！せんぱーい！おひさです!!」

出社早々に一色に絡まれる。いつもの日常が帰ってきたような気がした。

「おう、一色。久しぶりだな」

「ホントですよ、一週間って思ったら先輩その次の日も休みじゃないですか。嘘つきです。罰として今夜奢ってください!」

なんとという強引な理論。というより最早理論ですらない。

「最近こじつけがかなり酷いな。ちゃんとお土産は買ってきているぞ。ほれ」

俺は鞆から一色用の手土産を取り出すとカウンター越しに一色に渡した。

「それ、玉木さんの分も入っているから渡してあげてくれ」

「おお！ありがとうございます☒ あ、でも玉木さんの分は先輩の手からきちんと本人に渡してあげたほうが良いと思いますよ」

「そうか、なら袋は一つだけだからそれ回収しても大丈夫か?」

「OKです!」

一色は嬉しそうに渡したお土産を眺めていた。キーホルダーや菓子を包んだもので色々とアメリカっぽい物を複数詰め合わせた。一つに絞るよりかはその方が無難と感じたからだ。

「出張の方はどうでした?」

「まあ、悪くはなかったな。しばらくは海外は勘弁とは思ったけどな。何より疲れるし」

「そうですね。でも、若い女の子とお楽しみつぽかったですけどね」

一色が咎めるようにこちらを睨む。そういえば、弊社の入社志望者に留美が居ることを言ってしまったんだ。着いて早々に心労が絶えない。

「留美とは別に何も無かったけどな」

思いつきり嘘です。滅茶苦茶ありました。

「…先輩、何年の付き合いだと思ってるんですか?嘘ついてるのバ

レバレです」

「なんで分かるんだよ…」

「先輩には嘘ついてる時に独特のクセが出ますから☆」

「目逸らすってやつか？ 智佐吹さんにもそれ言われたなあ」

分かっていても男は嘘をついて女にすぐバレる生き物です。中国4000年の歴史も年季の入っている真理。

「まあそれもありますけど、他にも結構あるんですよ。先輩って本当に分かりやすいんで死ぬほど浮気に向いていないですよね〜」

ケラケラと笑いながら一色はこちらを見る。死ぬほど浮気に向いていないと言われてしまうと、流石にムツと来るものがある。

「ほう、ならお前はおれのが浮気をしたら直ぐに分かるとでも？」

「え、だって先輩、雪乃さんと不倫始めたでしょ？」

「ブホッ!!!」

不意打ちが直撃した。こんな反応をしてみれば大正解だと言っ
てしまっているようなものだった。

「あんなにも憑き物が取れたみたいに清々しい表情して入社されたら誰でも分かりますって…」

「そ、そんなに？」

「はい、思いつきりニヤけてましたね。というか、ここ最近わたしが挨拶したところでどこか浮遊したような雰囲気だったのに出張から戻ってみたら『おう、一色』って元気そうに挨拶するんですから。わたしじゃなくても何かあったんだって感づかれても不思議じゃないですよ」

懇切丁寧に解説された。もう八幡のライフは0です。

「先輩、隠す気無いでしょ？もうそういう方向で開き直すことにでもしたんですか？」

「別にそんなつもりはねーよ…」

「結衣さんのことはどうするつもりなんですか？」

「き…機を見てきちんと話すつもりだ」

「どうやって？」

「それは…、その…、」

「はあく…どうせそんなことだろうとは思ってましたよ」

一色がこれまでで一番大きなため息を吐いた。

「だから先輩は可愛くて好きです」

一色があざといポーズを見せながら告白する。久しぶりに見る彼女の笑顔に不覚にも籠絡されそうになった。

「でも意外でした。まさか本当に雪乃さんと関係を持つちゃうくらい先輩に節操が無くなってるとるなんて」

「その言い方なんかならないのか？」

「えー？でも先輩って結構性欲強そうですよ…？それこそ一晩中寝かせない勢いで女の子の事食べてそうだし」

「ぐ……」

否めない。実際、結衣や雪ノ下とする時は時間を忘れて朝までしてしまうことが殆だった。

「へく。本当にそうなんです。それはいざベッドの上で先輩に抱かれる時は楽しみです☆」

「なんで俺がお前を抱く前提で話が進んでいるんだ」

「え？抱かないんですか？」

「俺は雪ノ下しか抱かん」

「うわあ…。だいぶ開き直るようになってますね。アメリカで何かあったんですか？」

一色が怪訝な顔をした。

「まあ、ちよつとな」

「先輩。もしかして、留美ちゃんの事も抱いたんですか？」

「……だ、抱いてはないぞ」

「むく…。一瞬の間が何か妙に怪しいですけど…。今朝のところはこれで許してあげましょう。先輩、そろそろ出社時間ですよ？」

「確かにそうだな。じゃあまた昼でも一緒に食うか？」

「はい☆お待ちしております！あと、先輩…」

「なんだ？」

「あの…ちゃんとわたしのことも見て下さいね…。あと、雪乃さんのこともですけど、結衣さんのことも大事にしてあげてください。あの

人結構、強いように見えて先輩のこと大好き過ぎてヤバイですからね」

「あ、ああ…。分かってる」

「なら良いです。では、また後で☆」

後ろ髪の引かれる思いだ。一色のあんな顔を見て心が揺るがない男がいるはずもないだろう。

一瞬一色の表情に陰りが見えたのは気のせいだろうか。気になったが、時間も時間だったので先に進むことにした。

オフィスに入ると芦間が手をあげて俺を呼んでいた。

「おはよーさん、比企谷。はい、仕事」

「あ、うん。休む暇もないのね」

この業種は休む暇など無いことは百も承知だったがいざそれを目の当たりにすると心身に来るものがあるな。仕方なく芦間に渡された資料に早速目を通し始めた。

—Side Iroha—

…うまくいった。

わたしは心の底からほくそ笑んだ。

見事に先輩はわたしの思った通り、雪乃さんと関係を結んでくれた。

天が我に味方したとはこのことだろう。誰の仕業なのかはよく分からないが、雪乃さんと先輩を引き合わせてくれた事には感謝しなければならぬ。

これでわたしの悲願の成就も大いなる躍進を見せた。

とはいえ、しばらくは先輩は雪乃さんに夢中になることだろう。わたしなんかが入り込む余地など微塵も存在しない。

でも、勝算は当初に比べると格段に上昇した。

なぜなら先輩を攻略するにおいて最も障害となる倫理と理性の壁が崩れ去ったからだ。この難題をクリアするのに10年近くも費やしたわたしからしてみれば、これは歴史的進歩といっても過言ではな

い。日夜一大ニュースとして報道されてもおかしくない程だ。

だからこそ先輩を独り占めすることが出来ない苦渋の時間などかすり傷にもならない。逆に、雪乃さんには存分に先輩を籠絡してもらって背徳の沼の底に引きずり込んでもらわなければ。

しかし、誤算も無いわけではなかった。

留美ちゃん。クリスマスイベントで先輩が仲良くしていた当時小学生の可愛らしい女の子。それが成長してまさか先輩の出張先のアメリカに留学していたとは。

予想だにしなかった伏兵だ。智佐吹さんも相当アメリカではさぞ動揺したことだろう。そして恐らくだけど、先輩は留美ちゃんにも惹かれていた。肉体関係は持っていないにしてもそれに近い接触を済ませているに違いない。一瞬言葉に詰まったのが証拠だ。先輩は何かを隠そうとした時にその癖がよく出る。その癖はわたしは勿論、玉木さんや他先輩をよく知る女性の間では常識のようになっていた。即ち言葉の裏を読めば、先輩が留美ちゃんを受け入れたということになる。

それはわたしにとって耐え難い事実となって襲いかかった。

留美ちゃんは一瞬でわたし以上に心理的距離を縮めることに成功した。揺るがない現実がわたしに死の宣告を緩やかに告げるように心を蝕んだ。

一緒に過ごした時間がながければ長いほど心の融和はしやすくなる。そう思っていたのに。

わたしの積み上げてきたこの数年間をあざ笑うかのように彼女は先輩の中に入り込んでいった。

そう。たった数日で。先輩の事を…。

見えない方向から、嘲罵の刃がわたしの心臓を貫く。

何それ。

超ムカつく…。

雪乃さんならまだ良い。彼女と結衣さんは元よりわたし以上のア

ドバンテージを持っていた人物だ。だからどんなに自分が惨めになろうとも多少の諦めはついた。

だが、留美ちゃんは？

間違いなく、わたしなんかよりも確実に手持ちのカードが少ない状況だったはずだ。オッズで言えば圧倒的にわたしが有利と出る。彼女は出来レースのリングに上げられた噛ませ犬のはずだった。

それなのにわたしは負けた。

こんなにも腹立たしいことはない。会ってもいないし言葉も交わしていないのに、自分という存在を真っ向から否定されたような気持ちだ。否定されただけではない。その上で真っ向から叩き潰された。完敗。

紛れもない彼女の勝利だ。

それが許せなかった。

吐き気がする。

初めての感情だった。

わたしが、こんなにも一人の女性に嫉妬するなんて……。なにせ、自分が一番だと思ってきた人生だ。大きな挫折は総武高校での二人に会った時に散々味わった。どん底から這い上がってみせた。そうして反骨の意志で戦いつつ、今日まで積み上げてきたわたしの自尊心を一瞬にして崩壊させた彼女。

許せない。

彼女のことも。

彼女を受け入れた先輩のことも。

そして何より、あまりにも不甲斐なさ過ぎる自分のことが許せない。

羨ましい。

悔しい。

ずるい。

留美ちゃんへの嫉妬で狂いそうになった。

そして憎悪はやがて欲望へと変わりわたしはまた渴望する。

欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい

い…。

先輩が今すぐ欲しい。

あの腐った眼も、頼りない曲がった腰も何もかもわたしの物にした
い。

ああいつもの悪い癖だ。こうなると歯止めが効かなくなる。

幸い今は誰もいないし、忙しくなるまでは暫く掛かるはずだ。

濡れちゃったらどうしよう。

まあいいか。もう我慢できないし。

流石に手で慰めるのはやめとこう。それをしてしまつたら本当に
我慢出来なくなる。

周りへの注意は継続しながら目を閉じた。

そして妄想に耽る。

先輩とイチヤイチヤするシチュエーション。

時間さえあれば何千何百と繰り返してきた。だから、いつでも先輩
に抱かれる準備はできている。ベッドの上でどう先輩を喜ばせてあ
げようか。どうわたしが先輩を食べようか。わたしほど貴方で妄想
した女の子はいませんか？

時間も限られているから、キスとか部屋に入る前のイチヤイチヤと
か全部割愛。ベッドの上から始めちゃおう。

駄目だ…もう濡れてきちゃつてる…。早く終わらせないと…。

先輩と向かい合って服を脱がしあつて…。下着姿になって身体を
見せ合う。先輩はわたしのおっぱい好きかなあ…。結衣さんほど大
きくはないけど雪乃さんよりは大きいですよ？勝負下着は水色です。
先輩は気に入ってくれるかな？

わたしの身体をみて先輩がおちんちんを大きくしてくれている。

そう、わたしの中の先輩はわたしの身体が大好きなんだから当然で
す☆

大きくなったのを見てわたしもグシヨグシヨになってパンツの色
が…。ああ、挿れたい。けど、我慢☒

そうだ。まずは啞えてみよう。

下着の中に隠されている先輩のおちんちん、…どれくらいの大ささ

なんだろう。どんな形なんだろう。右に曲がってるのかな。それとも左？臭いも嗅いでみたい。

毛は結構生えてる？わたしはそれでも好きですよ。

袋の方は？パンツの上から触ってみる。もう、パンパンですね…。それも全部ぱっくり啜えて包んであげたい。

いよいよ脱がしてみます。とつても淫猥な臭いがして今にも女を犯してしまいそうなほど節操がないおちんぼさんですね…☆

口の中に唾液をしっかりと溜め込んで先っぽを口に含む。生温かい感触で先輩を包んであげます。丁寧に頭を動かして空いた手で乳首を開発して…悶ている先輩をいじめちゃいます。

ああ…やばい…きちやいそう…。

勝手に手が秘所に伸びていた。そのまま敏感なクリを指先で回すようにして転がし始めた。

「あん…く…あう…」

も、妄想を続けないと…。今どこまでしたんだっけ？そうだ。フェラだった。

じゃあ最初の一発目はわたしの口の中にどぴゅどぴゅしてください♡ 貴方の精液の味を知りたいから。ベトベトになったわたしの口をみて先輩がまた乱暴に腰を振っても良いんですよ？

先輩がわたしの頭を掴んで道具みたいに扱ってきた。やっぱり先輩は歳下好きなんですよね？こうやって女の人を虐めるのが大好きな人なんです。

一頻り弄ばれたあとはおっぱいで挟んであげます。結衣さんほど大きくはないですけど気持ち良いって教えてあげるんです。先輩は気に入ってくれるかなあ。もう乳首も勃っちゃってる。でも、ここで触ったら本当におかしくなっちゃう。妄想だけで我慢しないと…。

さて、そろそろ大きくなつたおちんちんをついにわたしの中に挿れちゃいます♡ 体位は騎乗位でわたしが動きますね。先輩は仰向けになって力を抜いてください。勿論、おちんちんは固くしたままですよ？

そしていよいよ、わたしが先輩の上に跨がります。しっかりと手で

持って、腰を落とし……

「おはよう、いろはちゃん」

「ッ！ お、おはようございますです、玉木さん」

咄嗟に笑顔を作って答えた。もう。あとちよつとで気持ちよくなれたのに……。本当タイミング読んで来てるんじゃないかって邪推してしまう。

「比企谷君には会えたの？」

「はい☆何やら清々しい表情になって帰ってきましたよ！あの人恐らく向こうで女性作ってますね」

「えー本当に!?まさかわたしの勘が当たってしまったうなんて……」

逆にわたしはこの人の勘が外れたところを見たことがない。

「本当、先輩って節操がないですよ……。少しは甲斐性を見せてくれたら良いのに」

「甲斐性見せちゃったらわたし達が寝取るの難しくなっちゃうんじゃない?」

「それはそうですけど……。なんか、こう、うーん」

「自分が惚れた男なんだから攻略難易度の高い人であって欲しいって言う欲望かな?」

「そうとも言いますね……。だって、落としやすい人を彼氏にしたって思われたくないじゃないですか」

「それは分からなくもないけど既に比企谷君は最大攻略難易度って会社の女の子達は共通認識を持っていると思うよ」

「だとしてもです……」

なーんか腑に落ちないんだよなあ……。自分のエゴだとは分かっているんだけど。

「それにしても、いろはちゃん」

「どうしたんですか?」

玉木さんが妙に数秒感覚を開けてから話を切り出したので訝しく思ってしまう。

「職場でするのは別に良いんだけど、くれぐれもお客さんにバレないようにね」

全身が凍る思いがした。

「そ、そのもしかして…」

「うん、最初から見えたよ」

彼女はあつけらかなと答えた。本当にこの人は性格が良い意味で悪いなあと思う。

「おかげは比企谷君？」

「…はい」

愛液が滴りそうな下着が触れないように腰を浮かせながら観念して正直に答えた。 玉木さんは一頻り考え込むとようやく口を開いた。

「ねえ、いろはちゃん。ちょっと飲み物買ってきてよ。戻ってくるまではここに一人で見てるからさ」

「え…あ、はい」

おもむろに立ち上がって彼女を見る。

「あ、あの、玉木さん」

「何？」

「あ、ありがとうございます」

「ふふ。お礼言われるとは思ってなかったなあ。いつもの炭酸水よろしくね」

「はいです☆」

玉木さんの言葉の真意を読み取ったわたしは駆け込むようにトイレへと急いだ。

化粧室の鏡に映るわたしの姿。

なんて淫らな顔をしているんだろう。こんな顔を見られたら会社の男達になんて噂されるか分かったものじゃない。

便座に座って下着を下ろした。案の定、秘所が性液まみれになっていた。うわあ…我ながらよくもまあこんなに濡らしたものだ。

息が荒い…走っただけでここまでにはならない。

ああ、もう、無理。

限界だった。

性欲が止まらない。

先輩とエッチしたいよ。

絶頂しやすいように腰を前に出して便座に背中を預ける。

そして、いつものように左手で皮を剥きながら右手で先凸を左右に刺激した。

「ああ、ふう…んん！あ、あ、あ、あ。先輩、そこ、だめ…」

今、頭の中のわたしは先輩に激しく抱かれている。色欲を貪るがごとく先輩はわたしの身体を使って身勝手に腰を振って精液を放つ。

何度も何度も何度も。わたしの膣内で。

「あん、いや…せんぱい。こぼれちゃう…」

便器に愛液が滴り落ちた。蛇口から水滴が落ちるように雫の足音が化粧室に木霊する。声が我慢できそうにない。

左の人差し指を口に当てて必死に噛みしめる。

右手が休まることはない。本当はじっくりと登り詰めたかったが玉木さんが待つている以上、巻きで済ませなければならぬ。

脚が待つすく伸びて快楽を余すことなく受け入れる体勢を整えた。

「ん…んむ…んふう…く…ふ…、あん…」

くる。

きちやう。

先輩。

わたしの先輩。

すき。すき。すき。だいすき。

こんなにも一緒に居るのに。

貴方だけを追ってきたのに。

どうして…。

なんで…なんでわたしを選んでもくれないの…？

留美ちゃんじゃなくて、雪乃さんでもなくて。

わたしじゃだめなの…？

ねえ、せんぱい。わたし、こんなにえっちな身体になったんですよ？おまんこだってキツく締めるトレーニング毎日やって、おっぱいも

毎日揉んで。フェラの練習だったのに。

騎乗位だって先輩を興奮させられるように腰の動かし方も自主練

して、先輩がSだった場合とMだった場合とで、きちんと両方に対応できるように女王様言葉責めから雌奴隷の立ち振舞だって覚えちゃいました。

赤ちゃんプレイだってしてあげられますよ。甘えん坊のせんぱいをよしよししてあげます。

ね？わたしを抱いたら、きつとすつごく気持ちいいですよ？

顔だって自慢じゃないけど、可愛いでしょ？

料理も、家事だって一流になりました。

貴方の為だけに尽くす女性になりました。

だから…。

だから見てよ。

ちゃんと見て。

一度だけでも良いから。

わたしだけの先輩になってよ…。

「せんぱあい…：せんぱあ…いッ…ああ!!!」

そこでおとがいを上げて蜜壺から愛液が吹き出した。ビクビクと痙攣を起こしてつつがなく絶頂を受け入れる。外に誰かいたりもしたらどうしようか。そんな危惧もせずわたしはエクスタシーを迎えてしまった。

「ああ…あ…う…」

こ、これ一分くらい動けなくなるやつだ、…。

「はあ…はあ…」

余韻を楽しむ暇もないままに、トイレトペーパーで見える部分のラブジュースを拭き取ると、慎重にドアを開けた。

幸い誰も居ないようだし、足音も聴こえなかった。

我ながら警戒心の欠片もない獣並みの理性に呆れる。

ほつと胸をなでおろす。同時に仕事場ですりすまうという背徳に興奮を覚えてしまった。いつもよりも断然、気持ち良かった。

ふふ…せんぱい。いつか絶対に貴方のことを食べてあげます☆

わたしは途中にある自動販売機で二人分の飲み物を購入すると足早に持ち場へと戻った。

続く

第四十三話

— Side Hachiman —

東京駅から総武快速に乗って千葉のとある駅で降車した。途中、各駅停車の総武線に乗り換えて目的の駅まで移動する。

15分で到着した。

雑踏に紛れながら自分を殺して肅々と歩を進める。逸る気持ちをなんとか抑えながら目立たないように流れに合わせた。

南口から出て徒歩七分。歩道橋を渡って、コンビニエンスストアを右手に直進。青の銀行で右に曲がってすぐ見える焼き鳥屋の裏の通りを更に右に入る。その通りにある骨董屋の前の看板。そこが俺達の待ち合わせ場所だった。

不審がられないよう店頭で陳列された手芸作品を窓ガラス越しに見て過ごす。

ロシアのマトリョシカだろうか。赤や黄色でカラフルに着色された人形がずらりと並んでいる。家に飾ればインテリアの一つにもなるだろう。

窓ガラスに自分の姿が映った。髪の毛のはね具合やスーツの乱れがないか確認する。こんなところで身だしなみを整えるあたり、自分は年甲斐もなく初デート前の高校生のよう浮足立っていた。

「お待たせ」

五分ほど経過してまもなく相手が到着した。

振り返ってその姿を瞳に映す。

最高の姿だ。美麗という言葉以外に適切な言葉が見つからなかった。

雪ノ下雪乃。

俺の不倫相手だ。妻とも親友の関係にあった人物。そんな女性と蜜月の関係に陥るとは自分も大層、危機管理能力に欠けている。そんな事は重々承知の上だ。それでも俺にとっては雪ノ下雪乃という女性と男女の関係を結ぶことを我慢するなんてことは無理だった。

スーツ姿の彼女はこの通りにも似つかわしくない気品さ

と華やかさを醸し出している。こんな女性がオフィスを歩いてたりしたら目が惹きつけられて仕事にならない。

「ごめんなさい。待ったかしら？」

「いいや。今来たところだ」

他愛のない挨拶のはずなのになぜか心が弾んでしまう。

「なんだか、初々しいカップルのようね」

彼女もまた同じようなことを考えたらしい。些細なシンクロに一喜した。

「まあそんなもんだろ。付き合い始めてまだ一週間だからな」

俺たちはゆつくりと歩き始める。束の間のデートだ。合図もなく自然とお互いに歩幅を合わせていた。

「見方を変えればそうかも知れないけど、そんな年齢でもないでしょう？」

「今だけは高校の頃に戻ってるだろ？」

そう言う俺は雪ノ下の手を握った。

「ひ、人前なのだから今はだめ……。それに高校の頃はこんな関係ではなかったでしょう？」

雪ノ下にそつと手を離される。少しだけ傷ついた。

「…そんな顔しないで。あ、後でいくらでも握れるじゃない…」

俺の残念がる顔を見たのか、雪ノ下がそつぽを向きながら顔を真赤にして答えた。

「お、おう……。悪かった」

「だから、、謝る必要はないのだけれど」

そんな事を言いながら雪ノ下はそつと腕を絡めてきた。あの、さつきよりも目立ちませんかそれ？彼女らしからぬ大胆な行動にどぎまぎしてしまふ。

「ゆ、ゆきの、した、さん？」

「その、は、早く入りましょう…。そ、その、み。密会なわけなのだから、あまり人目につくのもどうかと思うのだけれど」

「そ、そうだな」

そう言いながらも人目につく事してるのお前なんだけどな…。滅

茶苦茶嬉しいから良いけど。裏の通りからもう1ブロック先に行つて左手にある建物。こんな夕暮れ時から怪しい光を放ちながら色欲に目覚めた者たちを誘惑している。俺たちはそこに吸い込まれるように入っていった。

駐車場を抜けながら入り口へと向かう。見ると既にいくつかの車両が停まっていた。こんな時間から車で来るとは一体どんなカップルなのだろうと想像してしまう。いや、果たしてカップルと言えるのだろうか。いかん、今のは完全にブーメラン発言だった。野党もびつくりだ。

エントランスを抜けると、大きなモニターに幾つかの部屋のレイアウトが表示されていた。光っているパネルが今利用できる部屋だ。スタンダードな一室から、ベッドがウォーターベッドになっている部屋。道具がたくさん置かれた少々過激な部屋まで幅広く用意されている。

「何処にする?」

とりあえず隣にいる雪ノ下に聞いてみる。彼女はこの場所の雰囲気になれていないのか非情に動揺していた。周りをキョロキョロとずっと見ながら落ち着かない様子だ。

「そ、その、、、この勝手が分からないのだけれど…」

「そうか。雪ノ下はこういう場所は初めてか」

「あ、当たり前じゃない。一緒に来る人も居ないのだから」

その言葉を聴いてホツとする。俺との空白の数年に男性と関係を持つていたんじゃないかととても不安だったからだ。それが杞憂だと分かって心の底から胸をなでおろしている自分がいる。

「気に入った部屋のパネルをタッチするんだよ。それで部屋に入る」

「お、お金は何処で払うのかしら?」

「基本的に部屋の中で精算するぞ。フリータイムならまだしも、時間で増えていくタイプのホテルもあるからな。受付で精算するタイプもあるけども最近はこちらが主流だ」

「やけに詳しいのね貴方」

雪ノ下がじつと睨む。

「まあ結衣と一緒に来てたからな。断っておくが、別に他の女とは来たことはないぞ」

「どうかしらね」

氷の女王様はまだ俺のことを信用出来ていない御様子。これから行われる行為のためにもこのわだかまりを解いておかなければ。

「そういえばもう一人だけ…結衣以外にも居たな」

「…へえ、そう……んむう！」

そのまま雪ノ下の口を奪った。エントランスでいつ誰に見られるか、否、実は監視カメラにはバッチリと映っているのだがそんな事も気にせずに雪ノ下の肩から力が抜けるまで激しく舌を絡めた。やばい。気持ちいい。誰とも分らないやつに見られながらするキスは快感だ。カメラに見せつけるように雪ノ下と接吻を交わした。どうだ、最高にいい女だろ。そう自慢したかった。

「…ん…ちゅ。あ…ん。いや…」

1分ほどして雪ノ下を開放した。荒い呼吸で息を整えながら雪ノ下はこちらを見る。

「結衣以外にもう一人、これから増える」

「はあ…はあ…。だからといっていつ来るかも分からないのに…」

「悪い。したかった」

「謝って許されるものではないのだけれど」

そう言いながらもまた腕を絡める雪ノ下が可愛くて仕方ない。ここでもっと虐めたくなくなったが、流石にこれ以上は人の目や監視カメラの眼が気になってしまうので俺も真剣に部屋選びを始める。

「最初だし普通の部屋にするか？」

「普通の部屋というと、他には変わったものとかもあるのかしら？」

「ああ、コレとか」

そう言いながら俺は保健室をモチーフにした部屋を指差した。

「これだと保健室であれこれするっていうシチュエーションで楽しめる」

「そんな形式の行為を好む人もいるのね」

「わりとこういうロールプレイでやるのは嫌いじゃないけどな俺は」

「貴方、性癖まで捻くれているの？」

「わ：悪かったな…。こういう性格なんだよ」

「だから別に嫌とは言っていないでしょう？」

雪ノ下は手を握ってきた。

「わ、私だって、そういう欲の一つや二つあるのだから……」

え、何それ。超見たい。雪ノ下の性癖とかそんなもの見られるのか。いや、今から見られるじゃないか、何を言っているんだ俺は。

「それで、変態谷くんはどんな場所で見たいの？」

「そうだなあ…って自分の変態は棚上げか」

「何のことかしら？」

いつもの調子を取り戻した雪ノ下に煽られながらも俺は逡巡する。保健室、和室、電車、色々候補があるから悩んでしまう、正直全部試したい。雪ノ下とこの施設の部屋をローラーしたい。

その時一つ自分の興味を強く惹く一室を見つけた。幸いにも空室で今入ることが出来るらしい。

「なあ、雪ノ下。ここにしてみないか？」

「つえ……？」

俺はその部屋を指差す。予想だにしなかったのだろうか、雪ノ下は言葉を失っていた。

「あ、貴方正気なの？」

「大真面目だ」

「思考回路を疑うわね。は…初めてのデートなのよ？」

初めてのデートがホテルデートな時点で察しだろと喉まで出かかっていたが、流石に飲み込んだ。

「いや、あの。普通の部屋がいいなら俺はそれでも全然構わないんだけどな」

「わかったわ」

「え」

「何貴方が驚いているのよ？」

「いや、まさか受け入れてくれるとは思ってもみなかったのよ」
「受け入れてはいないわ。諦めたのよ」

雪ノ下は大きなため息を漏らした。

「貴方に『普通』を期待した私が馬鹿だったわね…」

雪ノ下がその部屋のパネルをポンとタッチする。そしてそそくさとエレベーターに向かうと上の階に向かうボタンを押下した。

エレベーターは一階にあつたのか扉がすぐ開いた。

「何号室だったかしら？」

「403だな」

「そう、なら四階ね」

雪ノ下は儀礼的な口調で四階のボタンを押す。直ぐに扉が閉まると重厚な音を立てて機体が上昇を始めた。

「な、なあ雪ノ下…」

「何かしら？」

「怒ってない…？」

「怒ってないわよ」

いや、怒ってるじゃねーか。完全に表情と言葉が矛盾しているんですけど。

四階に到着した。

ドアが開いて薄明るい廊下が広がる。

幸いドアの前には誰も居なかった。雪ノ下は俺を置いて足早に部屋の前へと向かった。そして急に部屋の前で立ち止まってこちらを見ている。

俺はわざとゆっくりと歩いてやった。

「は、早く来なさい…」

「良いだろ？別に誰も居ないんだから」

「……お、覚えていなさい」

「というか一回開けたら二度目は金払わないと開かないってなんでお前知ってるんだ？」

「……た、たまたま、打ち上げで会社の人がそういう話をしてたのを小耳に挟んだのよ」

飲み会に参加もしない雪ノ下がそんな話を聴くわけがないんだけどな。それにそんなピンポイントな会話を覚えている方が不自然だ。

「まあわかった。ならここで立っているのもなんだし、さっさと入るぞ」

「あ、貴方全然納得していないでしょ」

「そこ立っていると入れないだろ」

「きや…」

雪ノ下を腕を引きながら背中を抱くような形で入室する。雪ノ下の髪からとてもいい匂いがした。

こういった建物特有の狭苦しい玄関で順番に靴を脱いだ。洗面室を左手にメインルールの扉を開けるとそこには一階のモニターで見た通りの風景がそこには広がっていた。

「流石にそこまで広くはないな」

「当たり前でしょう。その、これからすることにそこまでスペースは要らないのだから…」

胸の中で雪ノ下が顔を赤らめながら声を漏らす。

「ほ、本当にここでするの？」

「そうみたいだな。ベッドはあるのかと思っただが」

「じゃ、じゃあ…」

「机の上でやるしかないな」

二人の前にあつたのは。四組の木製の机と椅子。部屋の奥に窓ガラス。極めつけは一番奥に目立つようにおかれた黒板。それが明るい色の木の床に置かれていた。黒板の隣には丁寧な時間割が書かれた紙が貼られている。

そういうことだ。

とどのつまり、俺達が行為の場を選んだのは教室だった。

続く

第四十四話☆

荷物を置いてまずは落ち着くために二人で椅子に座ってみる。隣の席に座ってぼんやりと時計を見ていた。時計の針は飾りのために正しい時刻を示していない。

「その……。まさかベッドが無いとは思わなかった」

「言いたいことはそれだけかしら？」

「すみませんでした」

俺は入室早々に雪ノ下に深々と頭を下げた。この部屋でベッドでまぐわりながら、教室プレイで奉仕部感を出せたら良いなと思っただらまさか本当に机と椅子しか無いとは想定外だった。

「それに……ここはルームウェアも無いのかしら」

「それについてなんだけどな……」

俺は恐る恐る着替えの入っている収納スペースを指差した。雪ノ下は怪訝な顔でおもむろにその収納扉を開ける。

「え……」

「またもや彼女が言葉を失う。まあ無理もないだろう。」

雪ノ下の目に入ってきたのは学生服だった。

「ま、まさかこれがそうじゃないでしょうね……？」

「生憎だがそのまさかだと思うぞ」

「比企谷くん。貴方、もしかして部活動中ずっと私達の制服姿を見て欲情していたのかしら」

「そんなことはねーよ……。でも、お、俺達がすれ違ったのってあの時からじゃねーか。だから、今からでもそこからやり直してみないかって思っただけだ」

「貴方らしくもないメルヘンチックな思考ね」

雪ノ下は観念したのか女性用の制服を持って洗面所へと向かった。その前で衣服を脱いで一糸まとわぬ姿になる。

「……やっぱり凄く綺麗だな」

「あ、ありがとう」

赤面しながら雪ノ下は下着姿を俺に見せてくれた。

「雪ノ下そのままこっち来てくれないか？」

「こ、この格好のままです？」

雪ノ下はオロオロしながらもレース姿のままこちらに来てくれた。長い黒髪に純白のレースは非常に映える。

「その、大きくはないでしょう？ 貴方の奥さんに比べるとどうしても…」

胸部を腕で隠しながら呟く。下から押し上げて少しでも大きく見せようとしている彼女の努力があまりにも可愛らしくてむしやぶりつきたい欲望を抑えるのに必死だった。

「別に大ききで人の好き嫌いを決めてはねーよ。それに俺は雪ノ下の胸だから好きだ」

「そう。それなら良いのだけれど……ひゃん……。ああ……」

彼女の手に収まってしまうような柔らかな双丘を優しく包みながら揉みほぐした。雪ノ下はその場で立っていられなくなって俺の肩に手を付きながら下半身をむず痒くさせていた。

「はあ…、くう。ひ、ひきがや、くん」

雪ノ下が抱きついてくる。全身に柔らかな感触が伝わった。

「雪ノ下。一緒に入ろう。シャワー」

「……はい」

胸から手を離す。雪ノ下がジャケットに手をかけるとボタンを一つ一つ丁寧に外し始めた。一つ俺が脱ぎ終える度に雪ノ下が俺の衣服を綺麗に折りたたんで籠の中に入れていった。トランクス一枚になった俺はもう一着の制服を持った。

「じゃあ行くか」

「ええ」

流し前の籠に着替えを入れて下着を取り去ると、シャワールームに入った。中でシャワーを出して温かい湯が出るのを待ちながら、雪ノ下を待った。レースの後ろに手を書いてブラを外す彼女の姿に見とれていた。ショーツを脱いで、一糸まとわぬ姿となった彼女が入室する。俺は鏡の前に雪ノ下を立たせて後ろに回り込んだ。

「本当に綺麗だ」

「は、恥ずかしいのだけれど…」

鏡の前に映る彼女は扇状的と言う他ない。今直ぐにでもこの場で挿入したくなるくらい蠱惑的で下半身の勃起が止まらなかった。

「もう固くしているの？」

雪ノ下に怒張した愚息を後ろ手に握られる。白いマシユマロのようなその手に触れられるだけで子種が出そうになってしまう。

「そ、それされると自然と腰が動いちゃうんですけど」

「別に良いわよ。動かしても」

雪ノ下の許可を貰う前から既に振っていた腰の速さが増していく。彼女の透き通るような手に酔いしれながら懸命に下半身を動かして快楽を貪った。雪ノ下はもう片方の手で俺の顎を撫でると唇を重ねてきた。

「ん……」

肉棒に伝わる程よい摩擦が絶頂へと速やかに導いてくれる。俺は雪ノ下の胸を乱暴に掴むと好き勝手に揉みしだいた。

「あ……ん……ひ、ひきが、やく、ん……」

「んむ、く……。ゆきのし、た。もう出そうだ」

「だ、駄目よ」

雪ノ下はにべもなくその手を離れた。肉宿を失った男根が鞘を求めてヒクついている。

「その、出すならちゃんと……」

「ちゃんと？」

分かっているながらもわざとらしく聞いてみる。雪ノ下からその言葉が聴いてみたいからだ。

「陰険谷くんの魂胆なんて見え見えよ」

雪ノ下は冷めてしまったのか黙々とシャワーを浴び始めた。

やせ我慢の様に見える。わざと肉棒を押し付けて彼女の反応を窺ってみた。

「ん……だ、だか、ら。駄目……」

思った通りだ。雪ノ下も同じ気持ちだったらしい。すると、彼女がこちらに振り返って激しく唇を求めてきた。

「んちゅ、れる…ちゅぱ、ちゅる。ちゅ、ちゅ。くちゅ…」

今度は雪ノ下の尻に擦り付けながらキスをした。なめらかな肌だ。それでいて張りがある。

「ぷは…だ、だから…」

雪ノ下は俺のペニスを両手で包むと互いのおでこをくつつけた。

「ちや、ちゃんと…。わ、…、私の中で出しなさい…」

やばい。もう出そうになる。

「ゆ、雪ノ下。今日は大丈夫な日なのか？」

「痛みも来てないわ。それに…、由比ヶ浜さんが直に触れ合っているのに私がそうじゃないのはとても気に食わないわ…」

「お前妙に結衣に対抗心燃やしてるよな…」

「当たり前でしょう。貴方を盗られたんだから」

雪ノ下がボディソープを泡立てながら俺の身体を洗い始める。貴方、いつそんな技覚えたの？と聞きたくなったがまた怒られそうだったし、せっかくだからいい雰囲気なので言わないことにした。

生殖器を入念に洗われる。石鹸特有のぬめりがローション代わりになって強烈な快感をもたらした。代わりに俺も雪ノ下の身体を洗って敏感な場所を入念に撫でるようにソープを擦り付けた。

「あう…、だめ…。腰、落ちちやうから…」

雪ノ下が俺にしがみつきなながら背中を撫でて洗ってくれる。何だこの可愛い女の子。今直ぐにでも抱きたい。しかし、我慢だ。これから起こるであろう最高の時間を前に射精などしてしまえば楽しみが減ってしまう。

「じゃあ、流すか」

「ええ…」

シャワーをもう一度出して互いの身体に付いた泡を洗い流した。全て終わってから雪ノ下ともう一度キスをして話しかける。

「じゃあ、順番に出て服を着るか」

「ええ、そうしましょう」

「じゃあ俺が先に着て出ておくから、雪ノ下は後から入ってきてもらえるか？」

「わかったわ…。それにしても制服なんて何年ぶりかしら」

「俺も俺で結構恥ずかしいからな。いい歳したおっさんだぞもう」

「ふふ。それはそれでとても楽しみな」

「俺も久しぶりの雪ノ下の制服、楽しみだ」

雪ノ下は顔を赤らめながら自嘲気味に笑顔を見せる。

「あまり期待しないでね…。あの時ほどの若々しさはないのだから…」

「それ、本気で言ってるのか？」

「え…？」

俺は雪ノ下を後ろから抱きしめながら確かめる。

「俺は今の雪ノ下の方がずっと好きだ」

「あ、ありがとう…」

雪ノ下は肩に回された手を握りながらそう答えた。

「じゃあ先出るわ」

「ええ、準備できたら教えてね」

浴室の扉を開けて直ちに服を着る。今だけは早着替え選手権の優勝者になれそうな気がする。途中、雪ノ下がこれから着る制服を見る。デザインは多少の差異はあれども総武高校のものを非情に酷似している。

「着たから部屋で待ってるぞ」

「わかったわ」

部屋に入って鏡を見してみる。流石に、あの頃に比べると歳もとったわけで若干どころか相当見るに堪えない格好になっている。なにせ、おっさんが学生服来ているのだからお察し物だ。ただ、我ながらスーツを着慣れているせいか様にはなっているんじゃないかとも思ったりもするわけで。雪ノ下の評価が気になるところだ。

その時、部屋のドアノブがゆっくりと回される音がした。雪ノ下が制服を着終わったということだ。

「お、お待たせ…」

入室した雪ノ下の制服姿があまりにも美しさと可愛らしさが共存し合っていて言葉を失った。全く違和感がない。寧ろ、現役の女子高

生よりも女子高生だった。何を言っているんだと思われるかもしれないがそれくらい似合っていた。

「な、何か言いなさいよ」

「あ、悪い。一目惚れしてしまった」

「あ、う…。ありがと…」

雪ノ下は覚束ない足取りで俺の隣にやって来た。あまり顔を見られたくないのか頭を肩に乗せて密着している。

「なんで最初からこう出来なかったんだろうな」

そう呟くと雪ノ下は手を握りながら身体を預けてきた。

「いいじゃない。これから始めれば…」

「そうだな」

「もう戻れないのだから…。一緒に堕ちましょう…」

瞬間、雪ノ下が首に腕を回して激しく舌をねじ込んできた。それに応えるように俺も彼女の細い腰に腕を巻き付けて情欲を喰らう。

「ん…ちゅ…ジュルル、じゅ。くちゅ、くちゅ。ジュルルル、ヂュ…はあ。ああ、んむー！」

雪ノ下が呼吸の隙も与えぬまま、空気を求める俺の口を塞いだ。俺は雪ノ下を机の上に寝かせるとその上に跨がり、両腕を押さえつけた。

「きや…、あむ…！んんんん！んちゅ…ちゅ、ちゆる。ん…」

くつつけた机から落ちないように雪ノ下を支えながら身体を起こして机の端に座らせる。俺はその下に屈んで雪ノ下のスカートをたくし上げた。

「いや…は、恥ず…ひ、ひきがや、くん？」

「今日は白か…黒い髪の毛の雪ノ下にはよく似合ってる」

スカートの中を覗きながら見る雪ノ下の下着はシャワーを浴びる前に見た物と同じはずなのに幾分扇状的に映った。

「へ、変態…」

「なんだ。変態谷くんとかっついていいじゃないのか？」

「そ、そんな余裕も無いことくらい分かるでしょう…！」

雪ノ下は口元に手を当てながら顔を真赤にしていた。両足をばた

ばたとさせながらもどかしい表情をしている。

「ちよつと腰を上げてくれ」

「…もう…、はい」

強めの口調でそう言うとき雪ノ下はなぜか従順に腰を上げてくれた。そして俺は雪ノ下のショーツを掴むとゆっくりと下動きで足元にそれを下ろした。

「し…下着だけ脱がされるの?」

「その方が興奮しないか?」

「わ、分からないわ…。でも、恥ずかしくしておかしくなりそう…」

言い合う内に雪ノ下の足から下着を取り去る。途中から彼女も足を伸ばして脱がしやすくしてくれていた。ショーツを椅子の上に置いて雪ノ下をもう一度机の上に押し倒す。

「今度は上を着せたままブラでも取るの?」

「俺は下着好きだからブラを付けている雪ノ下をずっと見るのも悪くない」

「視姦癖があるなんてますます変態に磨きがかかるわね」

雪ノ下は俺のブレザーのボタンを外しながら横目でそう呟いた。その後、興味深そうにシャツ一枚になった俺の姿をじっと見つめている。

「もしかして、シャツの方が好きなのか?」

「今日はそういう気分。でも、す、する時はまた着て欲しいのだけけれど」

「どうしてだ?」

「服を着たままでするほうが、その、教室でする感じが出るでしょう…?」

「一応、そういう設定守ってくれるんだな」

服の上から胸を揉みながら雪ノ下に問いかけた。

「わ、私だって…。その、比企谷くんどこまでではなくとも少しくらい恋人のような事をしてみたいとあの頃思っていたのだから…」

両手で頬を挟まれる。なんて快感だろう。雪ノ下が俺とそうなりたいと思ってくれていたとは。というか当時の雪ノ下にもそういっ

た色欲があつたのかと驚いた。なんかさらつと言ってたけど相当な爆弾発言だよな。

「わかった。じゃあそのまま寝ていてくれ」

俺は雪ノ下の上から降りて彼女の股座に顔を近づける。愛液で濡れた蜜壺をそつと舐めた。

「ひゃん！な、何をしているの：!？」

「何って。クンニくらい知ってるだろ？」

「そういうことではなくて…。その、うう…ああ！」

肉壺から香るフェロモンが劣情を駆り立てる。雪ノ下の肉感的な脚の感触を手の平一面で楽しみながら陰唇の上部にそそり立つ先突を舌でねつとりと転がした。

「あう…んんんん！ああああ！いや…だめ…」

雪ノ下の両腕が頭を突き放すように押し返す。その度にクリトリスを吸い上げると彼女の腕から風船の空気が抜けるように力がしおらしくなった。何度かそのやり取りを繰り返した後、雪ノ下は大人しくなつて喘ぎ声を我慢しなくなっていた。

淫猥な粘着音が教室に響き渡る。時折彼女の表情を窺って反応を確かめた。

可憐な少女は人差し指を噛みながら下半身から登り来る快樂の波に飲まれないようじつと耐えている。その我慢も限界になつて時折、ダムが決壊したように身体ごとおとがいを上げて嬌声を漏らした。

「はう…んん…んく…、ふう、うう、あん、ふう、ふう。ふう…ああ！」

とうとう雪ノ下は大きな声を上げて色欲に溺れ始めた。かれこれ30分は口淫を続けただろうか。舌が若干疲れてきたがもう少し彼女に奉仕しよう。

「ああ！ひ、ひきが、や、く。ああああん！そこ…もつと…ひゃうん！」

口元に強く握った拳を添えつつ、もう片方の手で自身の胸を愛撫する。自分から快樂の極致を目指し始めた雪ノ下を最高のエクスタ

シーへと導くのが俺に課せられた使命のように感じた。

自己暗示をかけるように俺は雪ノ下雪乃を女性にすると繰り返す。そうだ。今彼女は自分の中に未だ眠る女の本能を呼び覚まし、新たな自分へと昇華しようとする迫りくる快楽をその身に宿し続けている。肉欲の萌芽に水をやり、ようやく大輪の花が咲き誇らんとしているのだ。

その瞬間にこんな自分が立ち会うことが出来る。

なんと光栄なことだろうか。

俺は一心不乱に雪ノ下の秘所を舐り続けた。

太ももを持ち上げ、彼女が脚を伸ばしやすいうようにしておく。

「ああ、あん！あああう！ふっ！くっ！あああ！いや！なにか…きちやう…」

そろそろか。俺は雪ノ下の下半身を持ち上げて肩を支点に90度近く秘所が垂直になるように軀を支えた。所謂まんぐり返しに近い状態だ。

「あああ！いや！やだ…ちよ、ちよつと、ひ、き、が…んんん！なに、す…るの…ああ！んん！」

これで雪ノ下がいく瞬間が見えるようになった。彼女の恥辱に悶える姿が丸見えだった。あられもない恥ずかしい格好に雪ノ下は心まで陵辱されていた。俺の下半身は既にはちきれそうだ。早く、早く挿れて気持ち良くなりたい。この奉仕は言わば前菜だ。これから食すメインディッシュの先付でしかないのだから。

しかしその前菜ですら俺にとっては今までにない至高の美味をもたらす存在であり、至福の一時だった。

スカートが反り返り下半身を晒す雪ノ下の姿は艶麗そのもので情欲を掻き立てるのに十分過ぎる。膣内から大量の愛液が溢れ出て今か今かと肉棒を待ちわびているのが分かる。肉壁の一つ一つのヒダが蠕動していた。舌を入れてそのヒダの味を確かめる。

「うう…だめ…それ…」

雪ノ下の可愛い声が聴こえた。ここまで何度も焦らしたせいで彼女も限界だろう。これ以上は逆効果か。

「雪ノ下……」

「ひ、ひきがや、くん……。私は、どう、なる、の……怖いわ……」

「心配するな」

手を握りながら陰唇に口をつける。」

「これから気持ち良くなるだけだ……。ジュルルルルルル」

「あああああああああああああああ！いや……。だ、め！き、ちやう……」

陰核を徹底的に責めた。雪ノ下は最もここが感じるとこの一時間でわかった。人に寄っては痛がる人もいるらしいが彼女は弱点だったようだ。包皮の上から優しく吸いつつ、ほぐしていったおかげで皮を剥いて直接舌で刺激をしても雪ノ下は痛がる素振りを見せてはいなかった。寧ろ、とても気持ちよさそうに自分から腰を左右に動かしている。

「ひきがや、くん……。ああん。あああああああああああああああああああああ！」

刹那、雪ノ下の軀が跳ね上がった。

脚が足の甲まで付け根からまっすぐに伸びて腹部が激しく痙攣していた。雪ノ下の嬌声が教室に木霊して鼓膜に到達した。

淫蕩の権化に囚われた彼女の艶姿はまさしく世の男たちが求める色欲の現れだ。

ゆっくりと彼女の身体を机の上に寝かせる。

雪ノ下は全身から大量の汗をかいてその身を投げ出している。俺は雪ノ下の上に四つん這いになって見下ろした。

「凄く、綺麗だった」

「はあ……はあ……。ん……。だめ、まだ、身体が収まらない……。のだけれど……」

「どうしたらいい？」

「キス……して……」

雪ノ下の細く長い腕が巻き付けられる。俺はそのままのしかかるように雪ノ下に覆いかぶさって唇を合わせた。

「……雪ノ下」

制服のボタンを外していく。全て外し終えてジャケットを開くと純白のブラが現れた。そのまま彼女の胸を形が若干変わる程度に上

から揉みほぐした。

ジャケツトは着せたままだ。どうしてか、今の雪ノ下の服装。まるで俺が彼女を強姦している最中に見えてしまう。

「ひ、ひきがやくんに犯されているわ…」

雪ノ下も同じようなことを思ったらしい。というか、

「お前にもそういう知識あるんだな」

「小説でそういうシーンがあったのよ。暴漢谷くんみたいな人が私のように綺麗で可愛い女子高生をレイプする場面ね」

「俺に犯されるのは嫌か？」

ブラの間に手を差し入れて乳突をこね回した。

「あん…そ、そんなことは言っていないでしよう？」

「じゃあ言ってみてもらえないか」

「ん…て、既に両手を動かしながら言う言葉ではないと思うのだけれど…」

雪ノ下の言う通り、俺は片方の手で胸を弄り、もう片方の手で蜜壺に指を入れてかき回していた。

「い…言っただけなの？」

雪ノ下がガチガチになった肉棒を摩る。

「ああ、言っただけなの？」

椅子にかけてあったブレザーを着直して雪ノ下を熱い視線でじつと見つめ返す。

「わ…わかったわよ…」

雪ノ下は両腕を首に回し直した。

仰々しく咳払いをする。そこまで整えて言うものでもないとは思
うのだが…。

「き、緊張するわね…」

「いやそこまで心の準備が必要ななら別に言わなくても大丈夫だぞ」

「嫌よ。言うから貴方はそれまで黙っていなさい」

「なんで俺怒られてんの…？」

雪ノ下は何故か機嫌を損ねていた。

「……………もしかして俺がいつも結衣に言わせているとか思ってたのか

？」

「……………別にそんなことではないわよ」

あ、これ凶星だな。

「…………嘘。彼女に負けたくないの」

雪ノ下がキスしてきた。素直になった彼女はやっぱり世界中の誰よりも可愛い。

「ああ、なら頼めるか？」

「ええ」

そして雪ノ下は女神すら嫉妬するような笑みを浮かべた。

「私を、たくさん犯してね」

雪ノ下が言い終えたのと同時に俺は怒張しきった肉槍を秘所にあてがって一気に貫いた。

愛液で潤っていた彼女の肉壺は想像を絶する快感の海を持って肉棒を迎え入れた。

「ああああああああああああああああああああ！」

彼女の嬌声が瞬く間に響き渡る。

一心不乱に腰を振った。ペースなんて何も無い。ただ純粹に従順に乱暴に肉欲の赴くまま雪ノ下の膣内を犯した。

「雪ノ下……ずっと、こうしたかった……」

「あああああ！んん！あ！わ、私も……。んんん！ずっと、貴方と会えなくなつてから、ああん！ずっと……！」

机の上で寝る雪ノ下の側で俺は立ちながら下半身を打ち付ける。床に脚を付けながら机の上につ伏せになるように倒れ込んだ。

「んんん！むうううう！んん。んん、む！」

雪ノ下と激しい口づけを交わす。秘所から愛液が漏れ落ちて机に滴り落ちていた。

お互いの身体が弾けるような音を奏でる度に教室の机の鈍い音がアクセントとなつて追奏した。

「なあ、はあはあ…ゆきの、した…。こんな、ところで…したら。平塚先生に…なんて言われるだろうな…」

「ああ…んん…ぶ、部活動中になって、こと、かしら、ああああん！」
雪ノ下も意図を理解したのかこちらの会話に合わせてくれた。そうだ、俺達は今奉仕部の活動中に誰も居ないことを良いことにまぐわっている。いつ他の誰かが来てもおかしくない。

「ああ、良い…ひ、きがやくん。だめ、気持ち…良すぎて…」

俺たちには広すぎる部室。いつも紅茶を飲んだり本を読んだりして好きに過ごしていた場所。そこを思い出しながら抽送を繰り返す。

「ゆ、由比ヶ浜さんに見られたら、んん！…私、…」

「心配するなよ。今日はあいつは三浦達とカラオケに行くって言うたぞ」

「そ、そう…はあん！ああ！な、…なら。んん！良いの、…だけれど」

雪ノ下が脚まで巻き付けてきた。俺は彼女をそのまま抱きかかえて立ったまま上下に身体を揺さぶった。

「ちよ、…ちよつと。何を…」

「駅弁って知ってるか？」

上下に雪ノ下を振りながら重力を利用して雪ノ下の腔内に肉棒を叩きつけた。勢いよく彼女の子宮にぶつかる感触が亀頭に伝わった。

「ああ！んんんんん！いやあ！ああん！」

規則正しい嬌声が響く。激しい接合がなされる度に雪ノ下の身体は悦びの痙攣を見せた。

雪ノ下がスカートを着ているせいで丁度繋がっている部分が隠れている。それがまた興奮を高める材料の一つとして活躍してくれていた。そしてなりよりも誰も居ない放課後の教室で絶世の美女を犯すという疑似体験が男根をこれ以上ないほどに悦ばせていた。

腰が疲れてきたので彼女を抱いたまま椅子に腰掛ける。声を掛ける間もなく、雪ノ下が自分から上下に腰を動かして砲身を摩擦した。

対面座位は結構好きだ。何故なら女性の胸が顔一面に広がるから。そこに顔を埋めるのが性行為中の楽しみの一つになっていた。

ブラジャーを上にはずらして可愛らしい胸部を露出させる。純白の

双丘に実った桃色の肉芽を甘噛みして適度に吸い上げた。

「んん！ああ、はあ！うあ！ああああ！それ、すごく、すき」

雪ノ下が後頭部を両腕で包んだ。慎ましやかな彼女の胸に思いつきり顔を沈めた。

今まで口にしたことのない程の甘露な禁断の果实。一口口にしてしまえば二度とその味を忘れることは出来ない。

俺も雪ノ下も既に堕ちるところまで堕ちるしかない。その事実を知っても尚、俺達はそれを喰らうことを止められなかった。

「雪ノ下…もう、出そうだ」

「ええ。ああ！んむ…。ちゆ、ちゆる…んん!!」

雪ノ下が腰の動きを早めた。この前の逢瀬で思ったことだが俺たちは身体の相性が頗る良い。ただでさえ良い体の相性に加えて不倫の背徳感が加わってしまえばもたらされる快樂の強大さは語るに及ばないだろう。

「ゆ…雪乃、出すぞ…」

「え…?」

突然名前を呼ばれたことに困惑したのか雪ノ下は狐につままれたような顔をしていた。

もう一度雪ノ下を繋がったまま机の上に押し倒す。

「雪乃、ここから、これからまた二人でやり直すぞ。今から俺達は間違ってしまったあの時からもう一度歩み直す」

これが言いたかった。

俺が教室を選んだ理由。制服を選んだ理由。

それは総武高校での間違いをこれから正していこうという決意の表明の為でもあった。

比企谷八幡と雪ノ下雪乃がすれ違うようになってしまった場所で、もう一度ここから始めたかった。

「…はい」

雪ノ下は温かい返事と抱擁で答えてくれた。

安心感と高揚感が胸の中に広がってこの女を誰よりも大切にしたいと心の底から思った。

腰の動きを限界まで早めた。射精に向かって雪乃の肉壺を余すことなくかき回した。

「あん…。つく！あああ！あああう！ふっ！んん！あああああああ
あああああああああああ!!」

彼女の腰が跳ね上がるのと同時に肉棒を包み込んでいた柔壁が急激な収縮を繰り返した。

「ぐ…で、出る…い…」

俺は遠慮なく雪ノ下の膣内に再び性を放った。何度も睾丸からポンプのように汲み出される精液。10回も精液を汲み上げたのは初めてかもしれない。

「はあ…はあ…ひ、ひきが…いいえ。八幡…」

「雪乃」

俺たちは乱れた服装のまま激しい接吻を交わす。そして雪乃が俺を床の上に押し倒して、その上に跨った。

「まだ…足りないわ…。もっと、もっと繋がりが欲しい」

「安心できないのか？」

「ええ…。だからもっと抱いて。もっと私に出して…。もっと名前を呼んで…」

硬直を取り戻した砲身を秘所にあてがってもう一度雪乃が腰を下ろした。

「八幡…、八幡…」

恍惚とした表情で雪乃が息を切らせながら俺の名前を呼ぶ。

俺もまた彼女の名前をしきりに呼びながら腰を打ち付けた。

二人で一緒に淫蕩の螺旋に飲み込まれていく。

これは始まりだ。

ここからは背徳も恥辱も非常識も全てが快樂のスパイスとなってこの楽園に花を添えていく。

身体を合わせる度に彩られていくこの花園に囚われた俺達はこのままその身をより深く沈めていくだけだ。

さて、次はどんな事をしようか。

腹上で踊り狂う雪乃の姿をじっくりと眼で賞翫しながらこれから

のプレイを模索していると、何の前触れもなく俺はまた彼女の膣内に射精してしまった。

「あん…。もう、出たの？」

雪乃がスカートをたくし上げて厭らしい接合部を見せつける。

「うふふ。そんなに良かったのかしら…。え？つひやう！」

その後は余裕のある顔を崩したくなって、時間になるまで窓に彼女を立たせて後ろから腰を振りつづけていた。肉壺からマグマのように流れる子種が教室の床に数多のシミを作っていた。

続く

第四十五話☆

『来月、日本に帰るよ』

『おう。もうすぐで学期が終わるのか？』

『うん、あと半月で期末試験になるからその後すぐに帰国する予定』

『そっか。じゃあ残り気を抜くんじゃねーぞ』

『八幡、親みたいなこと言わないでよ笑』

『あんまりお気に召さなかったか』

『私は八幡とは親子じゃなくて恋人になりたいのに…』

……………。

『ちよつと！何か反応してよ…』

『悪い。素で照れてた』

『それはそれで嬉しいけど』

『日本にはどれくらい滞在予定なんだ？』

『一ヶ月くらい。特に日本の友達に会う予定とかはないんだけど家族

とも過ごすから空いている時間がわかったら八幡に連絡するね』

『おう。俺は基本平日は仕事終わりでなければキツイから出来れば週

末とかの方が調整はしやすい』

『わかった。週末で予定組むね』

『あいよ』

『八幡さ。もしかして、雪ノ下さんと何かあった？』

『なんでそう思うんだ？』

……………。

『なんとなくだけどここれまでのLINEよりもメッセージの文章が明る
いから』

『あ、ハイ……』

『その辺は会った時にでも話すわ』

『うん、わかった。ちよつとまた外すね。勉強終わったらまた話そ？』

『おう、いいぞ』

『ありがとう。じゃあまた後で』

『勉強頑張つてな』

『うん!』

…。

スマートフォン画面を閉じて大きく息を吐く。

職場の椅子にもたれ掛かりながらいつものように物思いに耽っていた。

エスパ―かあいつは。というかそんなに俺って分かりやすいの？
周りの人に隠し通せるのか心配になってきた。現時点で既に一色と留美にバレている。

ただ、結衣との夫婦生活も今の所支障は無いし、結衣が俺の浮気を怪しむ素振りもない。一応、俺が結衣が近くにいる間は雪ノ下との連絡はしないように決めてあったし、彼女とのLINEも定期的に履歴を削除して残さないようにしていた。加えてLINEのアカウントは携帯を使用せず、もう一つスペアのアカウントを用意して、i P O d t o u c hの方で連絡を取るようになっていた。因みに留美ともそちらのアカウントで取るようにした。スペアのアカウントの友達リストには女性の連絡先二つだけでなく、ダミー用の友人アカウントや、無料スタンプが貰える企業アカウントを大量に入れた。

そして、彼女たちのアカウント名も会社でお世話になっている方のような感じの名字に変更してある。やりすぎかと思われるかもしれないが、世の男性たちは恐らくもつとやってる。余談だが、CIA長官が不倫相手と連絡を取っていた時に使っていた手段を紹介すると、あるメールアカウントを不倫相手と共有して、メールの下書きで連絡を取るというものだった。下書きに連絡事項を書くことでサーバーに送信履歴が残らないという寸法だ。確かに頭いいなと思ってしまった。いずれLINEを怪しまれるようになってしまったら、雪ノ下との連絡を取る際にはこの方法が良いのかもしれない。

仕事の経過も順調だ。このまま行けば後一時間で仕事が終わって上がることが出来るだろう。今日は二週間ぶりの雪乃とのデートだった。中々連絡を取ることも出来ず悶々とした日々を送っていた。

今日は雪乃がデートコースもとい、エロのシチュエーションを考えたということなのでこれからどうなるのか楽しみで仕方なかった。

「最近気分が良さそうだね」

「え」

後ろに智佐吹さんがいた。急に現れたものだから結構心臓が飛び出しそうだった。

「そう見えますか?」

「どうだろう。あまり顔には出さないようにしてるみたいけど……。まあ女の勘かな」

さざりと言い当てられた。というか俺の周り鋭い人多くないですか? 鈍い人が一人も居ない気がする。

「他に女の人でも作ったの?」

肩に重く柔らかい感触が乗った。智佐吹さんが腕を回して甘えてくる。仕事中的なのに大胆な人だ。

「どうでしょうか。自分のような男を好いてくれるのは家内くらいのものだと思いますよ」

「あ、本当に他に女の人作ったんだね」

「え」

「うん? まあ君が嘘つくと分かるからさ」

智佐吹さんが悪意に満ちた笑みを見せる。

「それにしても、ふーん…: そうなんだ」

冷や汗が伝わる。心臓を直接掴まれているような気分だ。

「あ、そういうえば要件を伝え忘れるところだったよ」

張り詰めた空気を切り替えるように底抜けに明るい声で言う。

「比企谷君、予め言っていたとは思いますが、次のアメリカの出張もまた一緒に行ってもらう事になったからね」

「ああ、ボストンの方ですか?」

前回の出張は前座のようなものであるとは聞かされていたけれども。たしか、一ヶ月くらいの長期出張になるんだっけか。

「そうそう、長くなるからしばらく奥さんとも会えなくなっちゃうかもね。あと、愛人さんとも♡」

最後だけ他の人に聴こえないように耳元で囁かれた。こんな時なのに智佐吹さんに優しくささやかれるだけで下半身が熱くなる。

「ねえ、比企谷君…愛人は何人まで？」

「え？はい？」

唐突にゾツとするようなことを言われて思考が停止してしまった。着々と大きくなる深淵からの足音に背筋を伸ばさずにはいらられなかった。

「うふふ。冗談だよ。本気にしないでね。はいじゃあラスト一時間頑張って！」

そう言う彼女が足取り軽く自分の机へと戻っていった。

狐につままれたような表情になる。一体、一色といい、智佐吹さんといい、周りの女性は一体何を考えているのだろうか。さっぱり分からなかった。

仕事を終えてオフィスビルの外に出るとLINEが一件来ていた。差出人は智佐吹さんだった。恐る恐る中身を開いて確認する。

『不倫って意外と人目につくから気をつけてね。あと私とも今度デートしてよ♡』

ご忠告どうも。あと後半は保留で。

こっちは冷たい汗が滝のように流れてますよ本当。

携帯を閉じてネクタイをもう一度締め直すと、雪乃との待ち合わせ場所に逃げるように向かった。

雪乃に指定された集合場所は思った以上に意外な場所だった。

実際に雪乃が送ってきたメッセージには住所だけが書かれており、俺はそれを地図アプリに貼り付けてガイドに従ってその場所にたどり着いたわけだが、果たして本当に雪乃が正しい場所を送ったのかどうか疑わしかった。

一先ず携帯を取り出して彼女に到着した旨を伝える。直ぐに雪乃からの返信が返ってきた。

『二階に居るから来て』

本当にそうなのだろうか。未だに疑心暗鬼が収まらない。

ここで突っ立っていても仕方がないので、とりあえず中に入ってみ

る。

入店とともに外とはまるで違う雰囲気的空間に出迎えられた。今季放送中のアニメのオープニングが流れている。これ面白いんだよなあ。次の話が待ち遠しい。

店内を埋め尽くすような本棚。そこに並ぶ大量の漫画。そして、一人が居るのに十分な広さの個室。ファミレスにあるようなドリンクバー。

雪ノ下雪乃と言う女性から最もかけ離れた存在の一つといっても差し支えない場所。

正真正銘ネットカフェだった。

「つらっしやいませ。何時間のご利用ですか？」

BGMとは真逆ののっぺりとした音程の気怠げな挨拶。漫喫の店員のテンプレートかと言いたくなるような風貌だった。

「えっと、じゃあ三時間で」

「かしこまりました。1237円になります」

中途半端な数字だなど思いつつも大人しくその金額を払った。小銭に余裕があったので釣り銭が無いようにピッタリ出す。レシートを貰い部屋に向かう。偶然だが部屋の番号的に2階だな。

部屋に入って伝票だけ置いた。携帯を取り出してもう一度雪乃に連絡を入れる。

『部屋に入ったがどうしたらいい？』

『207にいるわ』

その部屋は俺の今いるところから3つほど隣の個室だった。正直俺はこの時点でも雪乃のことを信用しきれていない。あまりにも似つかわしくなからだ。

個室をでて細長い廊下を歩きながら207号室の扉を恐る恐る開ける。

「あら、遅かったじゃない」

本当に雪乃がいた。

「悪かった。雪乃がマジでこんな場所に居るとは夢にも思わなかったからな」

「だからここを集合場所に選んだんじゃないの」

雪乃が借りた個室はカップルシートと呼ばれる場所だった。俺がおさえた一人用の個室よりもやや広く、多少窮屈だが二人が寝転がるだけのスペースは確保されていた。左手には掘りごたつのように座るスペースが有り、机の上にはデスクトップ型のパソコンが置かれている。

雪乃はオフィススーツのままだった。髪は修学旅行の夜と一緒に平塚先生とラーメン屋にいった時の髪型だ。あまり最近は見られない彼女のヘアスタイルだ。俺はこの髪型が結構好きだったりするの
で、出向中はチラチラと雪乃を見ていた。

「それにしてもネカフエか」

「そうね、勝手がわからなかったものだから受付でかなり焦ったわね
…」

「雪乃がネカフエの受付にいる姿が想像できない」

「一人でカップルシートを頼むのも本当に恥ずかしかったのよ」
「だろうな」

「本当にそう思ってる？」

「嘘はない。慰労がほしいか？」

「ええ。たくさん」

そう言うのと雪乃は俺の唇にむしゃぶりついた。荷物を部屋の端に
投げ出して彼女の細い身体をしつかりと受け止める。

「ん…ちゅ、じゅるう。れろお…はちまん、ちゅ。ちゅ」

流石に雪乃とのキスも何回も重ねた甲斐があつて息継ぎや舌を絡
めるタイミングを掴み始めていた。それに今回は雪乃が仕事着の
スーツ姿であるが故にオフィスラブの背徳も相まって興奮が前回よ
りも増していた。

「ん…、ゆ、雪乃のこの髪型すごく好きだ…」

「う、嬉しいけど…。このタイミングで言われると恥ずかしくて貴方
の顔を見られないのだけけど」

「普通に言っても顔逸らすだろ」

「そ、それは…そう、ね」

恥ずかしさを隠すように唇を押し付けてくる。そのまま壁に挟まれる形で股座に跨った雪乃が蠱惑的な表情でこちらを見下ろした。

「脱がすわね」

雪乃がズボンのベルトを外す。その光景だけで精液が漏れてしまいうようなほどに艶めかしい。

「いきなりか？」

シャワーも浴びていないのに本当に大丈夫なのか。雪乃はそれでも構わないと頷いた。

「この前は貴方がたくさん舐めてくれたから…。今日は、その。私がしたいの」

雪乃がパンツを脱がすと最高潮にそそり勃った男根が彼女を出迎えた。

「もうこんなに興奮してくれたのかしら？」

「雪ノ下雪乃に奉仕されると分かっている興奮しない男がいると思うか」

「居ないわね」

「すごい自信だな」

「でも、私が奉仕するのは貴方だけよ…」

最高の言葉だ。ずっと聴いていたい。

「なら今日はお願ひしてもいいか」

「ええ、ただ経験が全く無いから。教えてもらえる？」

「勿論だ。多分最初は口が疲れると思うから無理するな。無理に啜える必要もない」

「わかったわ…。ありがとう」

そう言うとき雪ノ下は股の間に頭をつけてちろちろとソフトクリムを舐めるように舌を転がし始めた。

男の最も不浄な部分を愛おしそうに舐めあげる。時折キスの雨を振らせながらまるで誘惑するかのようには腰を左右に振る雪乃の姿。タイトなスカート故に肉感的な臀部の稜線が浮き彫りになっていた。筆舌に尽くしがたいほど官能的な光景を目に焼き付けようとする度に快楽に神経を奪われた。

部屋の外で足音が聴こえた。扉一枚向こうには、暇な時間を潰しているモラトリアムの空間が広がっている。そんな場所で俺たちは我を忘れて怠惰な淫蕩に耽っていた。

くちゅ。ぴちや。れろ……。ちゅ、ちゅ……

雪乃の純潔の口から淫靡な音が漏れる。目をつむって俺を気持ちよくさせようと一生懸命に自分なりの奉仕を続けていた。なんて可愛くて愛しい女なのだろう。

結衣への罪悪感が消えたわけではない。それでも何か結衣との結婚は雪乃との不倫の為の一つの通過儀礼だったのではないだろうか。そうとしか思えなかった。

俺は雪乃の頬を慈しむように優しく撫でた。肉棒を横から舌で舐める時ちらと見えるうなじが外気にさらされて縮みそうになったそれに硬さを取り戻させた。

「ん……ちゅ……。ちゅぱ、ちゅ、れろ、ん……ん……あむ……」

いよいよ雪乃がペニスを口に含んだ。生暖かいに包まれる。雪乃の頭が緩やかに上下に動き始めた。

「ん……！じゅるる……。じゅる、じゅ。ちゅる……。ぷは……。ケホツケホツ……」

「お、おい無理するなって……」

「いいの……。教えて。何処を舐められるのが好き？」

「わかった。その、手を握っても良いか？」

「ええ」

「気持ち良かったら手を握って教える」

「わかったわ……。んむ」

「ぐっ……！」

ぱっくりと啞えこんだ雪乃の口が偶々俺の弱点を愛撫した。雪乃は意地悪く蠱惑的な笑みを浮かべると重点的に責めぬいた。

「んん！じゅっじゅっじゅっ……。ジュルルルルルル！ん！んむう。あむう、じゅん！」

「おおっ……。ぐ……。そ、それは……。だめだ……」

下半身から抗いような不快の波が押し寄せてくる。それに飲

まれないように必死に下半身に力をこめた。雪乃の手をぎゅっと握る。気持ち良いと伝えるためでもあったし、同時に絶頂を堪えるためでもあった。

「はあ、はあ。ゆきの…気持ち良い…」

「ん…じゅ、じゅぼじゅぼじゅぼ…。んむ…ちゅちゅじゅるるる」

雪ノ下雪乃といえれば清楚で可憐な少女のはずだった。それが今淫らな音を口から遠慮もなしに立てるような女性になっている。思わず両腕をマツトに突き立てて腰を浮かした。

股の間には雪乃の美しい顔がある。丁度黒髪をまとめた部分が見えた。ああ、この髪に精液をかけたらどんなに制服感があって気持ち良いのだろうか。

「雪乃…そろそろ、イキそうだ…」

「うん…」

そう言うとき雪乃は口を離した。

「どうするの？口に出したい？それともこっち？」

手で扱きながら、掴んだ肉槍を自身の秘所に服の上からあてがう。

「雪乃の中がいい」

「ええ。私もそうしたい…」

雪乃がタイトスカートを脱ぎ捨てる。そして、俺の上に跨るとその扇状的な腰を徐に下ろした。

「ん…はあ…」

甘い吐息が漏れる。カップルシートは他の個室よりは防音性があるものの完全に喧騒をシャットアウトするだけの性能は持ち合わせていなかった。ここでは出来るだけ静かに事を済ませなければならぬ。

「雪乃、今日は…」

「いいの。私が動くから…。八幡はそのまま置いて…」

雪乃の肢体が眼前で緩やかに上下し始める。口淫で最大まで硬直した砲身が彼女の蜜壺に包まれると一気に射精感がこみ上げてきた。

互いの唇を貪り合う。これだけは何度やっても飽きが来なかった。その時だった。

俺の携帯電話が着信音を告げる。

ポケットから取り出すと、相手は結衣からだった。

何というタイミングだろう。今まさに雪乃と不倫をしている最中だというのに。とはいえ一応出ておかないと彼女を不安にさせてしまう。

「わ、悪い。雪乃。ちよつと結衣からでん…」

雪乃は俺の手から携帯を奪い取ると部屋の端に投げ捨てた。

彼女の思いがけない行動に目を見開く。

俺は雪乃の表情を見た途端言葉を失ってしまった。

「いや…」

一言だけだった。雪乃は涙目になってこちらを見る。

悲痛の表情。悲恋の表情。情愛の表情。そんな言葉で形容できたらどれほど良いだろうか。雪乃の俺に対する混沌とした愛憎がこの小さな一つの顔に凝縮されていた。

「お願い…。今は私のことだけを考えて…」

冷たい唇が押し付けられる。その間から熱い舌が容赦なく伸びてきて、口内をまさぐった。

雪乃が自分のシャツのボタンを外して胸を露出させる。今日は紫色のレースだった。

唾液を流し込まれる。いつにも増して彼女の行為は激しかった。肉棒を犯し、粘膜を犯した。

腰が際限なく上下する。両の腕を俺の後頭部に回して自身の胸に押し付けた。眼の前にパールの世界が広がると彼女の甘い吐息と嬌声が聴こえた。

「ん…んんっ！はあ、ああ…うう…はちまん…はちまん…」

「ゆきの…もう、出る」

「ああ、はあ…だめ…声でちゃう…。はち、まん…き、すし、て」
限界が近かった。俺達は出来る限り身体を密着させて互いの一部を身体の中に取り込むように交わった。

雪乃は体力が多い方ではない。最後は俺も腰を動かして雪乃の運動をサポートした。

「んむううう！うんん…はあ！だ…め…いつちやう…」

「ん…はあ、はあ雪乃。雪乃。雪乃」

「はちま…ん…。ああ！んんんんんんんんんんんんんんんんん！」

雪乃の嬌声を口で塞ぐと膣内が極度に収縮して絶頂を迎えた。

「んんぐう…！」

リビドーが精管を突き抜ける。肉棒のマントルが爆発を起こした。溢れんばかりの射出をもって雪乃の子宮に子種を叩きつける。雪乃の細い腰を抱えてすがるように精液を絞り出した。

「ああ…はあ…うう…」

雪乃の全身から力が抜け落ちる。肩で息をしながら俺の身体に全てを預けていた。

「はあ、はあ、はあ…。八幡…」

堕ちていく。

深く深く深淵へと。

その先には何があるのだろうか。

楽園は果たしてあるのだろうか。

本物は果たしてあるのだろうか。

「ん…ちゅ…」

俺達に残された道はこの先の見えない深淵への畦道を二人で進むだけ。

「雪乃。これからもっと二人で堕ちていくぞ…」

「……はい」

闇へと深く沈んでいく二人を照らすかのように個室のLEDが燦然と輝き室内の空間を彩っていた。

続く

第四十六話☆

「また、出張なの？」

「ああ。そうらしい」

行為を終えてネットカフェにあったシャワーを浴びた俺達はカップルシートで肩を寄せ合っていた。下は下着だけで上はシャツまでしか着ていなかった。

雪乃に会う前に丁度、智佐吹さんに長期の出張があることを聞かされていた俺は雪乃にその旨を伝えた。

「それはどのくらいの期間になるのかしら」

「一ヶ月くらいだと」

「…そう。長いのね」

「延長は無い。それできっかり帰ってこられる」

「長さの問題ではないわ。貴方に会えないことには変わりはないのだから」

雪乃が唇を重ねてくる。舌を入れるような熱いものではなくソフトなものだった。

「そういえば、海外採用…私の会社も参加するみたい」

「お前は行かないのか？」

「私は人事担当ではないもの。もしも人事と変わってもらえるのであれば自ら打診したいのだけれど…」

雪乃が肩に頭を預けて甘えてくる。気高く美しい女性像は微塵も感じられない。しかし、これが本当の彼女だと知っているのは自分だけだと思うと優越感がたまらなかった。

「だが、もし行けたとしても会えないかもしれないぞ？会場は広いだろうし、日程だってお前ほどの立場なら自由な時間も無いかもしれない」

「行かなきゃ絶対会えないじゃない…。でも行けば会えるかもしれないわ」

雪乃は必死だった。少しでも俺と一緒に長く居たい。その気持がひしひしと伝わる程の熱意だった。

最近、彼女からの連絡の間隔が短くなってきているのはなんとなく分かつてはいたのだが、大分俺に依存するようになってきたらしい。連絡にしろ、逢瀬にしろ、終わらせたくないという素振りが絶えないため俺が後ろ髪を引かれる想いが強くなる。

「ご…ごめんなさい…」

私の強さを反省したのか、雪乃がしおらしくなった。

「気にするな…。もう知ってるし、それが魅力だとも思ってる」

「これからもっと重い女になるかもしれないわよ？」

「心配すんな。俺も独占欲は強い方だ」

「性欲もでしょ？」

「そうだな」

「だから心配なのよ」

「何がだ？」

雪乃が俺の股間をさする。

「私の身体だけじゃ満足出来なくなりそうで…」

「心配すんな。俺が言えたことじゃないかもしれないが、雪乃もかなり強い方だと思う。だから満足してる」

「っ…！そ、それは…」

「良いんだよ。そういう雪乃の方が俺は好きだ」

「あ、ありが…とう…なのかしら？」

「さあな」

俺はズボンをまた下ろした。

「舐めてくれるか？」

「ええ。勿論」

雪乃がまた髪をしっかりと結び直した。

「少しだけ、結衣に連絡を取ってもいいか？」

「ええ。そのまま舐めていても平気？」

「電話じゃないから大丈夫だ」

「良かった…んむ…ぢゆる…」

粘着音が響く。俺はポケットからスマートフォンを取り出すと手早く結衣に返信した。

無表情で無感情なスライドで数行程度の報告を行う。

「ねえ、比企谷くん」

「どうした？」

「一緒に舐めましょう」

「ああ。勿論だ」

雪乃が腰を目の前に持つてくる。

ゆっくりと降ろされる美麗な臀部に口をつけて既に蜜で満たされている彼女の膣口をわざとらしく音を立てて吸い上げた。

「んん………それ、すごいすき……」

雪乃も負けじと肉棒を啜る。

結局、俺達は時間が来るまで飽きもせずお互いの口が使い物にならなくなるまで性器を舐め合い続けていた。

……………。

「……………それでですね。また最近会計部署のリーダーさんに言い寄られちゃったんですよ。あの人結婚して奥さんも娘さんも居るのに何考えてるんですかね……」

夜のバーで二人。一色がいつものように会社の同僚の愚痴をこぼしていた。この様子だと、玉木さんや他のOL仲間にも漏らしているのだろう。人の陰口や噂話というのは本当に足が早い。俺は会社の人間関係に関する愚痴は絶対に会社の人間には零さないようにしている。そんなことを心に決めておきながらとんでもない秘密をこの女性に握られているわけだが。

本当は雪乃に会いたかった。しかし、逢瀬の頻度が高すぎるとそれはそれであまりにも怪しい。どの口が言うんだと思ったその君、あとで先生のところに来なさい。

一色を隠れ蓑に使うのは憚られたが彼女の方からそういった提案が来た時には大層驚いた。とはいえそれだけが理由というわけでもなく、出張から戻ってきて以来、一色と話せる時間があまり無かった

為、これがいい機会だと思ったからだ。

結衣には既に連絡してある。『了解！いろはちゃんによろしくね』（*^^*）と返信を貰っている。『了解！いろはちゃんによろしくね』もなく過ぐすことができる。いや、何を言っているんだ俺は。

「そんなこと言ってお前。既婚者の男寝取ろうとしてるのは何処のどいつだよ…」

「むう…。先輩にしては嫌に核心に迫りますね…」

「俺は核心を突かなかつた事が無い男だ」

「それはそれです」

一色がそっぽを向く。偶然通りがかった店員にハイボールを特大サイズで頼んでいた。おい、それは男が飲むレベルのやつだと思うんですがそれは。

「それで、雪乃さんとは最近どうなんですか？」

「おい、なんで俺が雪乃と仲が良いって前提なんだ」

「……………雪乃で。本当、先輩隠す気無いでしょ？」

「あ」

先が思いやられる。これだと結衣に問い詰められでもしたら直ぐにでもボロが出そうだ。

「その様子だと大分熱々の関係を結んでいらつしやるみたいで大変イラツときますね」

一色は手に持っていたカシスオレンジを一気に飲み干した。あの、さっきまでハイボール飲んでませんでした？

「先輩、もし私が会社にバラしたらどうするんですか？警戒心が無すぎです」

「す、すまん…」

「はい、そこ謝らない。今、不倫してるって認めたようなものですよ？今までは疑惑で済んでいたのに」

「オフホワイトか？」

「私からすれば最初からオールブラックです」

「デスヨネ…」

「玉木さんも一瞬で見抜いていましたよ。出張から帰ってきて先輩が

お土産渡した後に私あの人に会ったんですけど開口一番『比企谷君、不倫してるよね』って言ってましたよ。因みに不倫相手まで言い当てていました」

「……………」

「女の人ってそういう匂いに敏感なんですよ。玉木さんは一際勘が鋭すぎてさとり妖怪かよって私ですら思う時はありますけど」

とりあえずカルーアミルクを飲んで一息ついた。一色が当たり前のように俺の飲み物を飲んでいる。

「まあ今の所先輩の事好きな人しかその事実には気づいていないですし、皆同じ目的なので先輩の立場が悪くなるような事はしないから安心してください☆」

「え、何が安心してくださいなの」

己の隠し事の手つぷりを呪う。確かに最近は雪乃の事ばかり考えて周りなど見えたものじゃなかった。これからは細心の注意を払われれば…。

「それで、実際、雪乃さんとは出張から戻ってきてからの関係なんですか？」

一色は空気を切り替えるような声色でこちらを見る。

「ああ。帰ってきてその日に雪乃に告白した」

「こ、告白とは…。先輩が言うとなんとも物珍しさが…」

一色が顔を赤らめてもじもじとしていた。

「因みになんて言って告白したんですか？」

「え、それ言わないといけないの？」

途端に一色が気色ばんだ。

「先輩…言つときますけどね。私がか社の人に雪乃さんと不倫してること言ったら人生詰むって分かってます？」

「ぐ…そ、それは。重々承知しております…」

段々と声に力が無くなっていく。

「まあそれは私の本意では無いんですけどね☆」

一色は飄々とした表情でハイボールを飲んだ。

「別に言いたくないこと言わせるほど私もSじゃないですから」

「の割には結構な要求をされている気もするけどな」

「そんなことないですよ。寧ろ、この程度なら優しすぎていい女だと褒めてもらいたいくらいです」

「納得いかねえ…」

「それを受け入れられるかどうかが男の器量つてものですよ☆」

結衣にもそんな事を言われた気がする。こういうのに慣れてるのは昔から小町の相手をしてきたからだろう。

「…なんですか先輩。その娘を見るような父親の眼は」

「歳下なんだから別に良いだろ」

「もう…。私は娘じゃなくて恋人になりたいんですけど!」

最近の一色は堂々と好意を表現する。ここまでされると会社でも避難の目というよりも周りも温かい目で俺達を見守るようになってきた。毎週ある日常アニメのような当たり前の空気が漂っていた。外野すら味方につけてしまうのだからやはりいろはすは未恐ろしい。「今日はこの辺にしておきましょう。先輩ったら雪乃さんのことばかり考えていて上の空みたいだし」

「…そんなことはねーよ…」

「そんなことありあります。女の子と一緒にいる時は他の人の事考えちゃ駄目ですよ。」

「善処する」

「うわ、これ口だけのやつだ…」

「行けたら行く」

「絶対行かないやつですね」

「安心しろ。俺は相手にそんな希望も持たせずに行かないと伝える」

「前提から間違っていますね。先輩まず誘われることがないでしょ」

「……………」

「ふふん。わたしの勝ちですね☒」

一色が勝ち誇っている最中に会計を済ませる。店の外に出ると秋の夜風が肌を撫でた。

「少しずつだけど寒くなってきたな」

「そうですね。ここ数日は一気に気温下がりましたよね」

「だな。服の選択に困る」

「最近、結衣さんのことは抱いてあげていますか？」

「天気の話から急に変わりすぎだろ」

超展開過ぎる。要領を得ない一色の言動に怪訝な顔になった。

「結衣がしたいと言って来た時には必ず相手をしているぞ」

「いつもそんな感じで夫婦生活してるんですか？」

「俺の方から誘うこともたまにある」

「雪乃さんと付き合い始めてからは？」

「…俺の方から言ったことは無いな」

「それ、怪しません？」

「じゃあ今日、」

「今日誘ったらわたしの入れ知恵がバレるでしょう！もう、何考えてるんですか！…」

「すみません…」

さつきから一色に全く頭が上がらない。どうしたら良いものか…。

「ちゃんと奥さんのこともしっかりしてあげないと浮気出来ないじゃないですか。私が」

「お前がなのか…」

「女性としていちばん大事な20代の大半を先輩一人に使ってるんですよ！これ抱かれもしなかったらどう責任とってくれるんですか！？」

「抱くのが責任の取り方なのかよ！」

一色の剣幕に押されながらもそれは俺の知るところではないのではないかと逡巡した。しかし、一色がこうなってしまったのも俺に全くの原因がないとは到底言い切れないので言葉に詰まる。

「でも良いんです。先輩は近い内にわたしを抱くことになりますから

☒

「ん？」

自信満々にそう言う。どういうわけだろうか。

「そう言ってマインドセットするんです☆」

「眼の前でそういう事を言って俺に同情させるのも作戦の内か？」

「あ、バレました？☆」

「おい」

「まあまあ☒ 先輩だって私の身体、欲しくないですか？」

そう言うとき色は服のボタンを一つ外した。

思わず生唾を飲み込んでしまう。シャツの隙間から覗かせる水色のレースが視線を惹きつけて離さなかった。

「ふふ。獣の眼になってる♡」

「見間違いだ。眼科に行け」

「そういうことにはしておいてあげます☒」

衣服を着整えると一色はさも当たり前のように腕を絡めてきた。

「おい、人前だぞ…」

「人前じゃなければ良いんですか？」

「そういうことではない」

「でも満更でもないでしょ？」

「回答に困る言い方をするな」

「よし…大分落ちてきてる」

「ん？なにか言ったか？」

「いいえ、なんでも☒」

一色はどこか楽しげだった。ネオン街の街灯がやけに目にささる夜だった。

続く

第四十七話

家に到着してサブの携帯電話を確認した。結衣はもう布団の中で近くには居ない。

LINEの通知が一軒来ていた。差出人は留美か雪乃しかない。この時間なら留美と雪乃どちらの可能性もある。メッセージを確認すると雪乃からだった。

『今話せるかしら?』

話せるとはどういうことだろうか。LINEでのやり取りであれば問題なく行うことが出来るが。

『話せるってどういうことだ?』

直ぐに既読がついた。雪乃も携帯画面に釘付けなのだろうか。

『貴方の声が聴きたいのよ』

心臓が飛び跳ねそうになった。雪乃の方から我慢できなくなつて連絡が来るとは思つてもみなかったからだ。

『今家に居る。結衣も寝ているから大声では話せないぞ?』

スーツをクローゼットにかけて、シャツのボタンを外した。すると間もなく雪乃から返事が返ってきた。

『ええ。構わないわ。だからお願い…』

雪乃は遠慮するどころか寧ろ乗り気のようだった。

当初の雪乃からすると考えられないほどに大胆になっていた。

出来るだけ結衣に迷惑がかからないように…:というよりはバレないようにに寝室から最も離れた部屋の端で雪乃に電話をかけた。

『もしもし…?』

雪乃の声が聴こえた。つい先日会ったばかりなのに声を聴くだけで直ぐにでも会つてその身体を抱きたくなる。随分と俺も調教されたものだ。

『どうしたんだこんな夜遅くに?』

『用がなくては電話してはいけないのかしら…』

なんとまあ彼女らしくもない言葉だと驚嘆した。もしかして、本当

に俺の声が聴きたくて電話がしたかっただけだったのか。

確かに最近は雪乃からのLINEの頻度が日に日に高くなっていく。その都度空いている時間を見つけては返信するようにはしているのだが、電話までしたがるようになるとはかなり依存率が高くなっているようだ。とはいえ、かくいう俺も彼女からの連絡を首を長くして待つようになってしまっているので人のことは言えない。

「問題ない。俺も雪乃の声が聴きたかった」

『そ、そう…。でも嬉しい』

あからさまに雪乃は照れていた。こんなことを恥ずかしげも無く言うように言い合える程に俺達の関係は急速に深まっている。

『こんなにも頻繁に連絡しては直ぐにバレてしまうわね…』

「そうだな。本来なら出来るだけ不要な連絡は控えたほうが良いだろうな」

『そうね…』

雪乃はバツが悪そうだった。自分から言ったことなのでこの場をどうまとめようか困惑しているのだろう。

「お前が気にすることはない。そう気に病まないでくれ」

『ええ。ありがとう』

「今はもう家だよな？」

『そうね。今日は定時に上がることが出来たのよ』

他愛の無い話だが、雪乃の声はこころなしか弾んでいた。

「そうか。俺もだが、帰る前に一色に捕まった」

『また一色さん？』

と思ったら一気に低くなった。

「ああ。いつもの愚痴聞き役だ」

『一色さんはもう私と貴方の関係に気づいているのではないかしら？』

エスパーがもう一人いた。俺の周りにいる女性は一体何なんだ…。

「どうしてそう思うんだ？」

『その答え方でもう察したわよ』

「え」

『はあ……流石に距離が近すぎるわよね…』

雪乃は大きくため息をはいた。部屋の蛍光灯が不規則に点滅している。もう買い換ええないといけないのかと思っただが、よく考えてみたらこの前電気が切れたのは廊下の方だったな。

『一色さんはこのことは由比ヶ浜さんには言っていないのかしら?』

「いや、本人は黙っておいてあげるから私とも不倫してくれって言ってきた」

言っておいて今更だが、こんなことまで雪乃に言っただけだろうか。どうにも自分のペースが乱されている。その原因が一体なんなのかわからなかった。

『そ、その……比企谷君。最初から詳しく説明して貰えるかしら…』

雪乃の呆れ声がまたスマホ越しに響いた。

『……最初にその話を聞いた時に予想していた通りの展開ではあるのだけれど、それが現実だとすると受け止め方にやはり困るものね』

「一色は寧ろ俺と雪乃の関係がバレないように取り計らってくれているけどな」

『だからといって絶対に味方と割り切れるわけでもないでしょう? 一色さんのことだから私から貴方を奪うに違いないわ』

もう既に俺が雪乃のものとして話が進んでいることに笑いそうになったが、ここで破顔してしまっただけは雪乃の反感を買ってしまうことになる。

「まあ、寝取る気は満々だな」

『正直浮気をばらすと脅されたら抵抗できるだけの材料が無いわね…』

「そうだな。今俺達は完全に一色の手の上に居る」

最終手段だが、一色もこちら側に引き入れるという選択肢もあるが、依存が強く、独占欲の塊である雪乃が首肯することはまずありえないだろう。

『貴方を盗られたくないわ…』

雪乃が珍しく甘えるような声で囁く。それだけで固くなっ

まった愚息が行き場を求めてしまっていた。

「その言葉だけで勃つちまったんだが」

節操の無さには自信がある。

『それを言うなら、私なんて貴方の声を聴くだけで濡れてしまっているのだけれど』

「な!？」

思わず吹き出しそうになった。そこだけ切り取ったらもうただの淫乱娘だぞ。

『あ、貴方がそうしたんじゃない…』

「そ、そうなのか…?」

『そうよ。それで、そ、その比企谷くん。物は試しなのだけれど…』

雪乃はいじらしそうに逡巡しながらも言葉を漏らす。下の名前で呼ぶのはまだ恥ずかしいのだろうか。

『どうした?』

『ごめんなさい…。その、貴方の声を聴いていると…が、我慢出来そうになくて…』

彼女が何を言わんとしているのかわからなく予想は着いたのでトイレに入って便座に座り込みながら彼女の次の言葉を待った。

『い…今から、電話で、一緒に慰め合えないかしら?』

俺はその言葉を聞く前に既に右手を上下に動かしていた。

続く

第四十八話☆

『ん…くう…はあはあ…あん…もつと声…、聴かせて八幡…』
「う、動かしながら言葉責めつてのは中々、、脳みその配分に困るものがあるな…」

雪乃の喘ぎ声が電話越しに直接鼓膜に届けられる。片手で携帯を持ちながら、もう片方の手で自身の秘所をまさぐっているのだろう。俺も同じく自分を慰めながら、雪乃が自慰行為に勤しむ姿を妄想していた。本当は直ぐにでも出したい気分だが、この背徳と興奮を少しでも長く味わいたいがために手を緩めながら調整した。

『ねえ、八幡。ふう…ああ…今…貴方の頭の中で、んん！私はどうなっているの？』

「お、、俺が雪乃を後ろから、ん…抱きしめてる…ぞぞ」

『はあ…あ。い、意外ね…。貴方のことだから…ん…。もう挿れているのかと…あう…思っただけれど』

「失礼だな…。俺はこういう時はシチュエーションは結構考えるタイプだ」

『なら、今度会う時は…。あ、あう…。期待しても良いのかしら？』

右手の運動が激しくなる…。

少しずつ心が快樂の海に深く沈んでいる。周りの音が何も入らなくなってきた。

結衣にバレるとかそんな心配も蚊帳の外だ。俺はただ今はひたすらに雪乃ともつと溺れたい。

「期待に答えられるか分からんぞ」

『も、もう少しくらいムードとか意識してほしいわね…』

「ネカフエはお前の提案だろ…」

『“お前”は嫌。ちゃんと名前で呼んでほしいわ』

「わ。悪かったよ。雪乃…」

『あう…』

愛する女性の甘い吐息が漏れる。ビキビキと血管の浮き出た砲身

が吐きどころを探して彷徨っている。

「…もしかして名前を、呼ばれるだけでヤバイのか？」

『…ええ。もう何もかもが苦しくて、…貴方が欲しくなってしまおうの』
「これ以上ない言葉だ」

『あ…貴方はなんて言われたら嬉しい？』

「なら俺も“貴方”って呼ばれるのは好きじゃない」

『八幡』

「もうそれだけで出そうだ」

『だめよ…もつと。もつと、こうしていたい』

「俺だつてそうだ」

『ならもつと名前を呼んで。八幡の頭の中で私がどうなっているのか教えて』

「ああ。じゃあ今から雪乃をベッドの上に押し倒す」

『ん…それで…？』

雪乃が生唾を飲み込む音が聴こえる。荒い吐息を隠すこともなかった。側には居ないが、まるでそこにいるようにお互いが身を委ねあっているようだった。

「服をたくし上げて下着姿を楽しむ」

『は、恥ずかしいわね…』

「白のレースを着てる」

『ええ、まさにそれを今着ているの…。ん…く…。前に私の家に来た時に監視カメラでも置いて帰ったのかしら』

「人聞きの悪いことを言うな…。印象に残っていたからってだけだわ」

『八幡はあの下着が、…好きなの？』

「まあな。き、綺麗な黒髪によく…映える」

『そう、ん…なら八幡と会う時はその下着を着るようにしようかしら』
「それは大変ありがたいが、たまには違うのも見てみたい」

『そう。何色が良いとかどんな種類なのを着て欲しいとかはある？』

「じゃあ…千葉村で着ていた水着をまた見たい、な」

露出は少ないがあの水着は雪乃の魅力を最大限に引き出すのに適

していた。

『また白じゃない…ん…あ』

「雪乃には白だと思っている」

『そ、そうなの？』

「でも黒っていう妖艶な感じの下着も見てみたいし、敢えてのビキニも見てみたい」

『ならもう結局何でも良いの？』

「雪乃が着るなら何でもエロいし可愛いから構わない」

『変態…ん…』

「自分がやっていることについて今一度振り返ってみような」

『そ、それは。言わない約束よ…あう』

「そろそろブラを取るけど良いか」

『ま、まだ取っていなかったの？』

唐突に脳内Hの話に戻る。雪乃も柔軟に対応し、それを楽しんでいるかのようだった。

「仕方ないだろ…見るの、好きなんだからな」

『視姦好きなのね』

「雪乃を視姦するのは好きだ。可愛いし、綺麗だから見ていて飽きない」

『んん…！それ、だめ…。凄く濡れてしまうから…』

「愛液が垂れてきたのか？」

『その、大分…ね』

「それ今見てみたいな」

『だ、だめ！それは…恥ずかしい…』

『どうしてもか？』

『いくら貴方でもだめ…。実際にする時なら良いけど…』

「その方が恥ずかしくないか？」

『ど、動画で見せる方が恥ずかしいわよ…』

「そうか、なら。下着姿の写真もだめか？」

『そ、そんなに見たいの？』

「いつまでも見ていられる」

『本当に変態なのね…貴方って』

「雪乃だからだ」

『そんなこと、言ってもだめよ…』

「それは、残念だ…」

『今度会った時に、あん。幾らでも見せてあげるから我慢しなさい…
んん…ああー!』

「お、おい。まだ挿れてないのにいきそうになっていないか?」

『べ、別に大丈夫よ…。何回もすれば良い話なのだから…』

「え」

何この人。複数回オナニーして絶頂しないと満足出来なくなっちゃってるの? 無茶苦茶エロすぎてどうしよう。こっちは何回もイクなんて芸当仕事帰りだから無理なんですけど…。

「ゆ…雪乃さん? 急に性欲が強くなっちゃってどうしたの?」

『わ…分からないわよ…。ん…。は、八幡のせいよ…。ああん! せ、責任を、…、取りなさい』

「ど、どうしてそうなるんだ…。そ、それで責任を取るとは、どうしたらいい?」

『な…なんで今日はそんなにも素直なのかしら…。なら、名前を呼んで…たくさん。はあ、はあ…口が酸っぱくなる、…くらいに言っただけ…』

「雪乃」

『んん! はあ、はあ…もつと』

「雪乃、好きだ」

『嬉しい…私も八幡のことがとても好き』

「雪乃の声をもつと聴きたい」

『私も、ああ…。は、八幡の声をもつと聴きたいの…。囁くように言っ
て。貴方が側にいると思えるから』

「雪乃…」

『はい…』

「雪乃、出そうだ」

『私も、その…、き、来そうだわ』

「出しても良いか？」

『ええ、たくさん出して…私ももしかしたら出ちやいそう』

出ちやいそうとか滅茶苦茶可愛いなおい。雪乃がそんなことを言うようになったことにこれ以上無い制服感と充足感に満たされる。

「じゃあ一緒に…」

『ええ。そうしましょう…』

そこからはもう何も言葉は要らなかった。本能の赴くままに手を動かし声を漏らして相手に快感を伝えた。声だけだったが、耳元で聴こえる互いの声に酔いしれながら手を早く動かすだけだった。

そして同時に絶頂に達した時、見えない何かで二人が繋がったような幸福が身体を包み込んだ。

その後のことはよく覚えていない。丁寧に後始末をして換気扇を回した後、静かに結衣の居る布団の中に入った気がする。

深い眠りにつくまで雪乃との行為の余韻に浸りながら落ちていく感覚だけが朝目覚めた自身の意識の中に残っていただけだった。

続く

第四十九話

とある線のホームで電車を待っていた。人混みを避けるために端の方で待つ。階段側を見るとベンチに腰掛けた女性が目に入った。革物のハンドバッグを膝の上に乗せてスマホを弄っていた。ネイルもすっかりと仕上げている。容姿に余念が無い。とはいえ男性と会うような感じではなさそう。友人と食事会にでも行くのだろうか。

通勤ラッシュの時間ではないおかげで比較的ホームは空いている。昼下がりのこの駅の周辺は閑散としていた。夜になるとその姿を変えて賑やかになる。ただし今はホームの塀の向こう側から除くキャバレーの光も消えており、廃墟のように鳴りを潜めていた。明かりがついているのは学習塾ぐらいだった。

手荷物は財布だけだった。他には何も持っていない。ただ心はずっと朝から浮いたままだった。

予備の携帯を確認すると雪乃からLINEが来ていた。『今日はどういう予定?』という内容のメッセージだった。

『今日はちよつと人に会いに行くぞ』

『誰かしら?』

『会社の付き合いだ』

俺はお茶を濁した。ただ、あながち嘘では無かった。

『…女の人のね』

何故バレる。

『そうですね、はい』

正直に答えることにした。ここで変に嘘をついてしまえばかえって雪乃の反感を買ってしまう。

『一色さん?』

『いや、別の奴だ。雪乃が覚えているかどうかは分からんが、総武高校の時に千葉村で会った小学生分かるか?そいつが今大学生になってうちの会社に就職しようとしてるんだよ』

そう、俺はこれから学期が終わって一時帰国している留美に会いに行くのだった。アメリカで最後に会ってから毎日連絡は取っていた

ものの、会うのは久方ぶりだ。留美の方から予定が空いたら一度二人で会いたいとメッセージが来たので会うことにしたのだった。

『……それって、もしかしなくてもアメリカのことよね。八幡、どうしてそんなことを今まで黙っていたのかしら?』

駄目だった。雪乃との関係が始まってから1ヶ月以上経過している。それなのに彼女に隠し事をしていたような形になってしまったことに対して女王様は非常におかんむりである。

『いや、その。だな』

『……。貴方、まさか彼女とも関係を持ったの?』

『そんなわけあるか。まだ大学生だぞ』

『その言い方だと社会人として独り立ちしたらする予定だと言っているように聞こえるのだけれど』

悲報。比企谷氏、つつがなく墓穴を彫り抜く。

『ちよつと、雪乃さん。こちらの言い分も聞いていただけると嬉しいのですが』

『色情魔谷くんは一度、お灸をすえたほうが良さそうね』

さつきから雪乃にペースを握られているのがなんだか癩だ。ここはちよつと嫌がらせを試してみる。

『そんなに言うなら今から留美に甘えて癒やされてくる』

.....

あれ?返信が来なくなったぞ。

そして直ぐに携帯が鳴った。着信音だ。雪乃からか。こっちの予備の方はネット環境が無いと基本的につながらないので今はメインの携帯電話のデザリングを使っているのだが、通話したら滅茶苦茶通信料金かかるではないか。とはいえ、雪乃からの電話を無視するなどという選択肢は存在しないので直ぐに応答した。

「どうした?」

『は、八幡……』

雪乃は今にも泣きそうな声だった。

「え、ちよ、ちよつと雪乃さん?」

『あ、甘えるなら私がいるじゃない……』

「え」

ちよ、滅茶苦茶効いてるじゃねーか。というか、想像以上に雪乃が堪えてしまっていた。額から別の嫌な汗が流れ落ちた。

「そ、そのだな。別にそんなつもりはないぞ。俺が悪かったから話を聴いてくれ」

罪悪感が半端じゃない。いつの間にかこんなにも雪乃が俺にベツタリになってしまっていたとは思わなかった。

『ええ。わかったわ…』

「その、全部話すけどいいか？」

『それはどういふことかしら？』

「ちよつと、お前にとつてはキツイ話になるかもしれん」

『それでも聞きたいと思うわ』

「わかった…」

俺は雪乃に留美との経緯を始終説明することにした。留美とキャリアイベントで再会したこと、プライベートで一度会っていい雰囲気になったこと、雪乃との関係を相談したこと、その時留美と親密になって男女の関係になりかけたことまで全てだ。

雪乃には隠し事をしないほうがいいように思えた。だからこそ彼女に全てを打ち明けた。

多くの時間を要した。眼の前で何本もの電車が通り過ぎていった。

雪乃が俺が話し終わるまでただ黙ってその話を聴いていた。途中、俺と留美が関係は持っていないにしても口づけを交わしたことを告げた時には、虚しさと悲しきで吐息が漏れていた。だが、自分が俺を突き放した事も一因になっていると分かっていたからなのか俺を責めるようなことは決して言わなかった。雪乃は俺が話し終えるたのを認めるとただ一言、 “そう” と呟いた。

『…：八幡、そんなに苦しんでいたのね…。本当にごめんなさい…』
「どうして雪乃が謝るんだ？」

『そんなに貴方が思いつめているなんて思わなかったから』

雪乃は本当に申し訳なさそうだった。

「それはこっちの台詞だろ。俺なんて何年も雪乃を苦しめてきたんだぞ」

『べ…別にこの数年間ずっと貴方のことで苦しんできたわけではないわ…という言い方は貴方を思っていない時期があるように聞こえてしまうけど決してそういうことではなくて…』

雪乃も混乱していた。まあ急な話でいきなり理解をしろというのも酷な話ではある。

『その、つ、鶴見さんは私達のことを知っているのよね？一色さんとはまた違った立ち位置を保っているみたいだけど、本当に大丈夫なのかしら？』

「留美は個人的には一番信用できると思うぞ」

『そう、基本人間不信の貴方が言うのであれば間違いはないでしょうね』

一言余計なのは相変わらずだが、雪乃は珍しく食い下がらなかった。

「良いのか？」

『私だって、不倫である以上、貴方にも優先されるべき人間関係があることぐらいは承知の上よ』

の割にはかなり独占欲が強いようにも見えるんですけどね。

「そう思ってくれるのは助かる」

『でも偶には私が独り占めしたいわ』

「分かっている。そういう時間は必ず作るようにする」

『ありがとう…、あと鶴見さんによろしく伝えておいてくれるかしら』

「それは別に構わないが急にどうしたんだ？」

『貴方と私が今こうして居られるのは少なからず彼女のおかげなのでしよう？なら一言お礼を言わない理由はないと思うのだけれど』

それはご尤もである。留美が居なければ雪乃とは平行線のままだっただろう。

「わかった。そう言っておく」

『でもまっすぐにありがとうなんて言わないで。彼女からしたら私はただの恋敵になるのだから……』

「おいおい…、ならどう言ったら良いんだ？」

『それを上手く伝えるのが貴方の仕事でしょう』

いいように言い包められた気がする。これから彼女に会うまでになんとかしてプレゼンテーションを完成させなければならぬ。

「…わかった。上手く伝えておく」

『ええ。ならそろそろ切るわね』

「ああ、流石に時間がヤバイ」

思った以上に話しこんでしまった。このままだと遅刻をしてしまつて彼女を待たせてしまうことになりそうだ。予め集合時間にはかなり早く着くように家を出ておいたのが偶々救いになった。

「じゃあ、また来週にでも一度会おう」

『ええ、そうしましょう。今度はまた私の家でご飯でもどう？』

「魅力的なお誘いだ。是非お願いしたい」

『楽しみにしてるわね』

「おう。じゃあな」

『ええ、また』

俺は通話を終わるとちょうど目の前にやってきた電車に乗り込んだ。

「遅い」

遅刻をしたわけではない。それなのに集合場所に到着して早々に留美に叱られた。とはいえ彼女を待たせてしまったことには変わりないので素直に謝罪する。

「…八幡なら早く来ると思ってたのに」

どうやら留美はアメリカで会った時のように集合時刻に相当早く到着するものだと考えていたようだ。俺も当初はそのつもりだったが、雪乃との電話があったこともあって、予定が変わってしまった。俺がアメリカで留美に会った時は待ち合わせ時間の2時間以上前には集合場所に来ていた。それを考えてみて、もしかすると彼女を2時間以上も待たせてしまったことにならないだろうか…。

「本当にすまん。まさかそんなに早く来ているとは思わなくてな…。」
「というかもしかして、留美、滅茶苦茶待ったか？」

「別に、30分位しか待つてないよ」

「そうなのか。それでも申し訳ない」

「…ホントは2時間だけど」

「ん？どうした？」

「…何でもないよ。行こ、八幡」

そう言う留美は俺の手を取って歩き始めた。先ほどとは違った焦燥感が全身を走った。留美の方から積極的に人前で距離を縮めてくるのが想定外だった。

無論、歳下の女性に手を引かれるなど人生で一度も無い（一色にからかわれてというのを含めるとその限りではないが）。だが、俺が彼女に心を奪われてしまった理由はそれだけではなかった。

取引先に向かうサラリーマンや休日を楽しむ女子大生の群衆を掻き分けて、俺の手を引くその女性は誰よりも輝いていた。ビルの窓から覗かせるカフェの風景や銀行、洋服店の看板が囲むスクランブル交差点に出た。その中心で一人の可憐な少女が光芒を放つかのように今という時間を謳歌していた。それなのに周りの群衆は俺たち二人の姿など目にも止めていない。他人の様子など自分が思っている以上に人は気にしないということか。今彼らが気にしているは信号機の色がいつ変わるのか、それだけだろう。

「なあ、留美。これから何処へ行くんだ？このスピードは早くないか？三十路を迎えるおっさんにはちよつとキツイんですけど」

肩で息をしながら小さな背中に話しかける。少女は決して背が低いわけではない。寧ろ、それなりに高い方なのだが。

「今日は私に付き合ってね」

留美はわざとらしく答えなかった。ただ振り返って最高の惚れ惚れする笑顔を見せただけ。何度俺を籠絡させれば気が済むのだろうか。

「いや、その、答えに、なっていないんですがそれは…」

「ふふふ。遅れた罰だよ」

いや、俺は時間通りに来ただろう。そう言い返す気力はデスクワー
クを続けていた俺にはもう残っていなかった。

続く

第五十話

5分が経過した。

留美は楽しそうにまだ俺の手を強く握ったまま走り止めない。雑踏から既に離れ、疎らになった歩道をトレーニングでもしているのかという程に駆け抜けた。

「はい、着いた」

突然留美が足を止めた。刹那、溜まっていた疲労やら乳酸やらが一気に吹き出して俺の身体に押し寄せる。ここ数年こんなに走ったこととはなかった。いい加減俺も歳なのかもしれない。

「ぜえ…ぜえ…。会って早々に、こんな過激なエクササイズを、強要されるとは、おもわなんだ…」

「八幡はおじさんだね」

留美は余裕綽々といった様子だった。若さってすごい。小学生並みの感想しか出なかった。若さってすごいって小学生が言ったらそれはもう世も末だが。

「勉強ばかりで体力無いかと思ってたわ」

「一応、一時期は自転車通学とかしてたからね。空いている時間には大学のジムに行ったりしてるよ」

「ジムにも行くのか。勉強で忙しい中よく時間が作れるな」

「ふふん」

留美は褒められたのが嬉しかったのか得意満面といった様子だ。それにしても…。

「ここは…マンションか？」

眼の前にあったのは20階建て程の高層マンションだった。雪ノ下の家と似ている。

「うん、私の家、ここにあるから」

「へ?」

ハチマン、ワケガワカラナイヨ。

「なんで訳がわからないって顔してるの?」

留美がジト目で睨む。だからエスパーかよ。もう超能力者として

全面的に売り出せばいいのに、…という本当にどうでもいい冗談はどうせ彼女に軽く流されるのが目に見えていたので飲み込んだ。

「前に言ったじゃん。いつか私の手料理食べさせてあげるって」

そういえばアメリカでLINEを交換して初めて連絡を取り合った時にそんな話になったような気がする。彼女はそんなことまで律儀に覚えていたのか。

「ああ、覚えてるぞ。アメリカでLINEやってた時にそんな話になっただけか。それで今日、昼は食わずに來いってことだったのか」

前日に留美に連絡した時に、昼食は取らずに着てほしい旨を伝えられていた。どうやら留美が手料理を振るうらしい。

「ふふふ。そうだよ」

留美はとても嬉しそうだった。結衣との会話でこうしてその話題がいつ出ていたかを記憶して相手に教えることは女性にとって非常に効果的であることを心得ていた。

「そうか、今日は留美にプランを一任するという話になっていたからどうなるかと思っていたが、まさかこういう展開になるとは意外だった」

「そっか。なら驚かせることが出来て良かった」

「ああ、いきなり家に招待される方がもつと驚きだけだな」

「え、そうなの？」

彼女は目を丸くした。

「まあな。あんまり女性の家に赴くことがないし」

「今の奥さんの家とかは？」

「まあ流石に何回かはあるぞ。結婚前の挨拶以外にもな」

あの時の緊張ときたら、今でも冷や汗をかく程だ。お義父さんよりもお義母さんの方が地雷だったが。本気か冗談か距離感が異常に近かったせいか、結衣からの嫉妬を何とかするのに苦労した。

「じゃあ雪ノ下さんは？」

「ぶっ…」

思わず吹き出してしまった。なんて爆弾をいきなり投下するんだ。

「…行ったことあるんだね」

「高校の時にだけだな」

「この期に及んで嘘をつかれるのは流石にちよつと傷つくよ?」

留美がしょんぼりとしていた。

「すまん、帰国した時に雪ノ下の家には行つた」

「え、まさか日本に帰つて早々に会つたの!?!」

留美は仰天していた。そこまで度肝を抜くようなことだつただろうか。

「八幡つて結構大胆だね…」

「初めて留美に感心された気がする」

「私はいつも八幡のことは凄いと思つてるけど」

「なら態度でもつと表してほしいな」

「例えばこんな感じ?」

そう言うのと留美は腕を絡めた。

「ちよ!?!おま」

今俺達がいるところはマンションの入り口だ。人の往来がいつあるか分からないような場所で留美がまた大胆な行動に出た。

「こ、これのどこが敬意になるんだ」

「ふふ。からかつただけ」

留美はさつと離れた。アメリカでの一件から久しぶりの再会というものの、何歳も歳下の留美に翻弄されっぱなしだ。よく見るとエンランスの上に監視カメラがある。このやり取りを画面越しにマンションの管理人に見られているかもしれないと想像してしまうと実際に人に目の前で見られるよりも身の毛がよだつ。カメラの向こう側にいるであろう管理人に名状しがたい恐怖を覚えた。

「入ろうか」

留美が何かを察したかのようにオートロックを解除した。彼女の後を逃げるようにして続いた。エレベーターは1階にあつたのですぐ乗ることが出来た。しかし、またカメラの眼が俺たちをじつと見つめていた。

今日ほど監視社会を真面目に考えた日はないな。そんな下らないことを考えていた。留美がこちらを怪訝な表情で見つめているのに

も気づかずに俺はただ、エレベーターが目的地に到着するのを静かに待った。

留美の家に到着した。家の前には「鶴見」という無機質な看板。鶴見家の敷地と通路とを隔てるフェンスのような敷居。玄関先に折りたたみ傘が干してあることで生活感を漂わせていた。

「どうかしたの、八幡？」

留美が心配そうにこちらを見ている。

「いや、別になんでもない。それにしてもいきなり社会人の男を家に呼んでも良いものなのか？」

「大丈夫だよ。今日家に両親居ないし」

「あ？」

それはつまり、留美の家で二人きりということ？色々大丈夫なのだろうか。主に俺の理性が。この数ヶ月で比企谷八幡の理智というもの是非常に脆弱なものになっている。理性の化物という肩書は今やへそが茶を沸かす代物だ。

「そうか。ご両親は、その、気にかけてたりしていないか？」

「別に大丈夫だよ。寧ろ、応援してくれてる」

「わが耳を疑う発言なんだが」

「まあ既婚者ってところはまだ言っていないんだけどね」

冷や汗が滴り落ちた。留美が直ぐに訂正したおかげで変な誤解を持たずに済んだ。「肝をつぶしたわ」

「そう？私はすぐに分かる冗談かなって思ったけど」

「向こうでブラックジョークも学んだのか？」

「別に。あっちのジョークって私笑えないんだよね。でも、皮肉なら八幡から学んだよ」

「それは良い講師を持った。上出来だ」

「慧眼でしょ？」

くりくりとした眼を指さしながら留美は無邪気に笑う。

それにYESと答えると自分で自分を貶めることになるあたり、留美は中々に悪女何じやないかと思う。

「じゃ、入ろっか」

留美がポケットから鍵を取り出した。流れるように中へと導かれていく。

「お、お邪魔します…」

「うん、いらっしやい」

整然とした廊下の先に生活感がありながらも非常に清潔感のあるリビングが広がっていた。正面には大きなダイニングテーブル。左手に大きなキッチンがあり、1世帯が使うに十分な冷蔵庫が鎮座していた。右手には大きな黒のソファがあり、52インチほどのテレビが対面に置かれてある。テレビの周りに何も置いていないところに鶴見家から留美のような女性が育つ根底をなんとなく見た気がした。勿論良い意味でだ。

「もうお腹空いた？」

「まあな。朝飯もそこそこに今日は来たからな」

「そっか。なら、今から作っちゃうね」

「何か手伝うことあるか？」

「ううん。大丈夫。私が作る場所を見ていてくれれば十分だよ」

留美は長い髪を短くまとめ上げる。エプロンを付けた彼女は新妻そのものだった。

「どうっ？」

留美はわざとらしく一回転してみせた。出来たてのポニーテールが可愛らしくはねているのに目を奪われた。

「どうって言われてもなあ。滅茶苦茶似合ってる」

「八幡のくせにボキャブラリーが貧しい」

「買いかぶりだ。それに男が饒舌だったり、難しい言葉を使っている時は信用しちやいけない時だ」

「なら八幡を信用できる時間帯って殆どないじゃん」

「俺は饒舌な方じゃないだろ」

「でもよくわからない言葉を発してる時多いよ。私は結構流してるけど」

「流してるのかよ。さらっと酷いこと言うのなお前」

「“お前”じゃない。“留美”」

留美はむすつとした顔をしながら熟練の主婦も舌を巻くような手際の良さで野菜を切り分け始めた。

「本当に手慣れているんだな」

「もしかして疑ってたの？」

「別に留美が嘘を言うような人間じゃないとは分かっているつもりだが、正直想像がつかなかったから新鮮な驚きを噛み締めている」

「そんなにまじまじと見つめられると緊張して指を切っちゃいそうになるから」

留美は頬を赤らめながら大根の桂剥きを丁寧に行っている。向かれた皮はとても薄く大根も円形を失っていない。見事な手さばきだ。

「何を作ろうとしてるんだ？」

「味噌汁だよ。もう出しはいりことカツオで取ってある」

「早いな」

「結構時間かかるんだよ。沸騰しないように気を遣いながらやらないといけないし」

留美はボウルに入った味噌汁の出汁を持ち上げて俺に見せた。

「本格的だな」

「お客さんに手料理振る舞うんだからこのくらいは当然」

「味噌汁以外には何か作ってくれるのか？」

「煮物は朝から仕込んであるよ。筑前煮なんだけど好き？」

「ああ、好きだぞ。出汁って基本好きだし、甘い煮物は嫌いじゃない」

「そういうえば八幡って甘党だったからかぼちやの煮物でも作ってあげたほうが良かったかな。でも栄養価が偏るからそれはまた今度だね」

当たり前のように次回の約束を取り付け始める留美に困惑しながらも俺は彼女の料理の様子をじっと観察していた。

まるで注文の多い料理店の厨房に立つシェフのように行動に一切の無駄がない。たちまち風味のある和の香りがリビングまで伸びてきた。

「いい匂いだ」

「良かった。後は普通に納豆とかもずくが冷蔵庫に入ってるからそれ食べよう」

「わかった。なら納豆とか混ぜとくか?」

「うん、今のうちに混ぜておいて。納豆って冷蔵庫から取り出して混ぜてから20〜30分常温に晒した方が美味しくなるから」

「そうなのか?なら今のうちから混ぜておく」

「はい、割り箸。一応、底の深い紙皿も買ってきてあるからそれも使つて。左の棚に入ってると思うから」

「わかった。用意しておく」

留美に言われるがままに直ちに行動に移した。眼の前で繰り広げられる料理の鉄人が如きキッチンでの彼女の姿に感化されて、普段のんびりとしている俺までも作業の効率化を仕事の時ばりに意識してしまった。

「はいお待ちどうさま」

留美の並べた食材は紛れもなく日本の家庭の食卓と言って差し支えない。そして栄養もよく栄養バランスも非常に考えられている献立に仕上がっていた。

「美味そうだ」

「口にあうと良いんだけど…」

「いや、食べなくても分かる。調味料とか結構こだわってたろ」

「なんで分かるの?」

「食器を用意したりしてる時にキッチンの調味料の棚が目に入ったからな。塩や醤油が市販のものではなくてきちんと選んでいるものだったからこの家が料理好きでこだわりのある家庭だってことはすぐわかった」

完全に母親の受け売りだが、調味料の置き方で料理の腕前がある程度分かるらしい。俺はそんな能力は無かったが、先程指摘できた理由は留美の家のコンロ周りの調理器具や調味料の配置が雪ノ下の家のそれと似ていたからだった。

「この塩とかは私のお母さんが買ったものなんだけど凄く美味しいんだよね。だからアメリカで自炊していた時とかはお母さんに宅配で

送ってもらってた」

「調味料はアメリカじゃ中々揃わないわな」

「うん、こっちは出汁って文化殆ど無いし…。焼いたり煮たりして、ソースや缶で味付けってのが多いかも」

「それは日本人からしたらちよつと味気ないかもな」

「味は濃すぎて困りものなだけどね」

お盆に乗せて持ってきたご飯を彼女から受け取った。粒が立っており、俺好みのちよつと硬めのご飯だ。崎○軒のシウマイ弁当のご飯が結構好きだったりすると言つて分かる人が居たらその人とは仲良くなれるかもしれない。

それにしても美味そうな食事だ。こういう物を食べた後はマツカシが飲みたくなる。持参しておけばよかつたとちよつと後悔した。

「…また、自分の世界に入り込んでるよ、八幡」

気がつけば留美が非難の目でこちらをじつと睨んでいた。

「ああ、悪い。また一人の世界に入ってしまった」

「もう。眼の前に女の子がいるんだからちゃんと見てほしいな」

留美は女の子らしい一面を見せてきた。とはいえなんというか俺に見てほしいのに嫉妬の対象が俺というのはなんとも奇妙な物で、矛先の無い妬みを抱えている彼女がもやもやしているのは違いない。橋の先をうろろと空を掴むように彷徨させているのが

「安心しろ、別に留美を見ていないなんてことはない」

「私のことを見ているって言わないところが八幡らしいね」

「恥ずかしくて言えん」

「それ、言ってるのと同じでしょ」

「言っていないから良いんだよ。言わないほうが伝わる場合だってある」

「ちゃんと正直に言つて欲しい場合だってあるんだよ？」

「そんなこと言つたつてなあ…。いきなりさつき俺が『可愛いぞ留美』みたいなこと言つたら嘘くさくてしようがないだろ？」

「それもそうだねつて理解は出来るけど納得はしないかも」

咎めるように言う留美の顔は言葉に反してどこか楽しそうだった。

「じゃあ食べようか」

「ああ、そうだな」

留美の作ってくれた食事は格別に美味かった。その旨を正直に彼女に伝えるとそれはもう美しく微笑んでいた。俺は彼女に心を奪われていた。雪乃や結衣とは違う温かさを持った魅力的な女性がそこにはいた。

続く

第五十一話

「八幡ってさ、奥さんという時は何してるの？」

二人で皿洗いをしながら留美が素朴な疑問を口にした。俺が進んで買って出たのだが、留美は一緒に洗うと頑なだったために俺の方が折れたのだった。俺が軽く水で流してスポンジで汚れを落とすとした食器を留美に渡して、彼女が水を切りながら食洗機に入れていった。

「普段か？ 特段変わったことはしてないけどなあ。一緒にドラマ見たり、お互いが好きなことしたり」

「好きなことって？」

「結衣なら高校や大学の友達と買い物に出かけたり、俺だったら家で本をよんだりゲームをしたりだな」

「八幡、基本家なんだね」

「自宅警備員って副業が忙しいから仕方ない」

「それって収入あるの？」

最後の食器を受け取った留美が怪訝な顔でこちらを見ていた。

「いや、ボランティアだな。収入は無いから2つの収入源があるわけでもないし、確定申告の必要も無い」

流れ出るシンクの水を止めて、タオルで濡れた手を拭きながらドヤ顔で留美を見下ろした。

「八幡って時々変な方向にスイッチが入るよね」

「そういう真面目な表情で言われると一番傷つくんですけどそれは…」

「傷つくように言ってるから」

留美は俺からタオルを奪い取った。

「やっぱり確信犯か」

「八幡だって悪気しかないのに悪戯とかよくやってるじゃん」

「俺は良いんだよ俺は」

「ダブルスタンダードってやつ？ ずるいなあ、八幡は」

「違う。二重規範だ」

「同じ意味じゃんそれ」

留美は呆れ返っていた。

俺たちはリビングに移動した。彼女の実家に置いてある大学の授業の教科書を見せてもらいながら留美の留学生活について色々とも見てもらった。

「これは？」

『Brave New World』：日本語だと『すばらしい新世界』って本」

オルダス・ハクスリーのディストピア小説。人間が「製造」「選別」された現代常識の通用しない世界を描いた作品でSF小説の中でも人気の高い作品だ。

「留美が買って読んだのか？」

「ううん。英語の授業で課題として読まされた。7冊位ある中から選べたんだけどね」

「敢えてこれにしたのか？」

「うん。なんとなく自分が読まないジャンルっぽかったし」

「それって不安でもなかったか？海外の大学だとGPAも高く保つ必要もあるんだろ？」

「まあね。特に日本人は英語はとても不利だから苦労した」

よくやるわ。俺だったら絶対に楽単を目指してる。

「それにAはとれる自信はあったからさ」

「大したもんだわ」

「ふふん」

「この教科書は…っと、よく見たら表紙に思いつきりタイトル書いてあったわ。Psychology…心理学だな」

「うん、一般教養でとった。5つくらい自由に取れるし」

「なんか真ん中のページ開いたら、脳が描いてある。これは部位か？」

「うん、それも全部覚えたりした」

「過去形なのな」

「クウォーター制ってあつという間に学期終わっちゃうから一長一短なんだよね。嫌な授業は早く終わるけど、もっと学びたいって学問もそれで終了になっちゃうから」

「クウォーターって言うのと4学期制か。日本の大学は基本2学期制だ

しな」

「勿論、2学期制の大学もあるよ。偶々、私の通っている大学がそうだったってだけで」

「じゃあこの心理学の授業の内容とかはもうあんまり覚えていないのか？」

「教授が面白かったから結構印象に残ってるよ。授業中に色々な心理テストとかやらされたし」

「実のなる木を描くとかか？」

「それ、『バウムテスト』ってやつでしょ？うん、やったよ。他にも線対称に近いインクの染みを見せて何に見えるか言語化してもらうテストとか」

「ロールシヤツハテストだな」

「知ってるの？」

「古畑のオープニングトークでやってた」

「古畑って？」

「ああ、もう世代じゃないよな」

「というか放送されていた時期的に俺よりも前の年代がハマってるドラマだよなあれ。流石に留美が知っているわけがない。」

「ジエネレーションギャップだから気にしなくても良い」

「そう言われると余計に気になるんだけど」

「俺がおじさんだったってだけのことだ」

「ふふふ。そうだね。八幡はおじさん」

「改めて言うなし」

「私、その言い方嫌い」

留美がそつぽを向いた。この言い回しに何か嫌な思い出でもあるのだろうか。

「ねえ、八幡ってさ…心理テストとかって信じる方？」

「半信半疑ぐらいだな。占いよりは余程信憑性は高いとは思うが」

結衣がそういうのが結構好きで付き合わされたことがよくあった。その御蔭で色々と誤解されて難癖つけられたりもしたけど。

「じゃあさ、面白いテストがあるから今から1個やってみない？」

「授業でやったやつか？」

「そうだね。結構当たってるかもって結果だったから。八幡もどう？」

「まあ、構わないぞ。その、最初にことわりを入れておくがあくまで心理テストだからな？うん」

そう、心理テストであって真理ではないのだ。そう思いたい。ってこんな事考えている時点で俺も結構ハマってるじゃないか。いつの間にか結衣の影響をモロに受けているな。

「うん、大丈夫。でもこういうのって意外に楽しいし、八幡ってあまり自分のうちに秘めた感情とかって出さない人だからやってみたいかも」

「俺は結構わかりやすいって周りに言われるけどな」

非常に癪だけど。

「それはそうだね。私でも八幡が何考えてるかだいたい分かるし」

留美にもバレバレなのか…ってそうじゃない方が今となってはおかしい気もする。

「なら試す必要は無いんじゃないか？」

「でも八幡って肝心な部分は顔に出すどころか絶対に話題に出さない人だから周りの人からしたら結構とっかかりづらいんだと思うよ」

確かに留美の言うとおりかもしれない。というか留美は普段人が隠している内面を的確に言い当てる事が多い。いつもなら気色ばむところだが、留美に言われると不思議とすんなりと心の中に入り込む。それもまた彼女の魅力であり、長所なのだろう。

「そこまで言うならやってやらないこともない」

「さつきまで普通に良いよって感じだったのになんで急に上から目線？」

「ほっとけ。はよ始めてくれ」

「変な八幡」

くすつと笑う留美の顔はこの上なく蠱惑的で溢れんばかりの魅力に満ち足りていた。

「じゃあ……ね」

——貴方は今、美しい森の中に居ます。輝く太陽の下、気持ちの良い風が吹き抜けています。さて、ここからが質問です。

Q1：誰と一緒に歩いていますか？

「誰と？…か。それって必ず誰か名前を挙げないといけないのか？」

「…もしかして、一人で歩いているって感じだった？」

「まあ、最初の導入が俺が一人で森の中に居るような言い方だったからって理由だけだ」

「それは私の言い方が悪かったかも…」

「因みに歩いている相手が居るとしたら最初に浮かんだのは雪乃だな」

「雪乃……。へー。なるほど」

「どうしたんだ？」

「上手くいったみたいだね」

留美は本当に察しが良い。

「おかげさまでな」

「まあ最初に会った時になんとなく分かってたけど」

また顔に出てたのか俺は。いい加減、赤の他人にもバレるんじゃないかと危機感が出てきたぞ。

「なんか話が逸れちゃったけどじやあ次の質問ね」

「え、これ複数答ええないといけないのか？」

「全部で7つくらい」

「中々の量じゃねーか」

——貴方は誰かと一緒に森の中を歩き続けているとある動物に出会います。

「おい、いきなり始めるなよ」

「八幡こうなると長くなるから」

「よく分かってるじゃありませんかー。やだー」

Q2：その動物は一体何ですか？

「聞く耳をお持ちでない」

「八幡のちゃちゃ入れに逐一答えてたら終わらなさそうだったから」

「俺は株主総会でやたら質問する迷惑な株主か」

「もしかしたらその方がまだ可愛げがあるかもね。八幡は時々フオローのしようがないくらい面倒な時あるし」

「やめろ、その一言は俺に効く…」

「それで質問の答えは？」

「にべもない。それもまた留美だ。」

「象だな」

「象…ね。それじゃあ次」

——さらに森の中を深く進むと、空き地に出ました。その中心には一軒家があります。

Q3：見つけた家はどれくらいの大きさですか？また、その家にフェンスはありますか？

「…なんか妙な質問だな」

「心理テストの背景設定にいちやもんつけたら駄目だよ」

「確かに元も子もないな」

心理テストやらにリアリティを求める方がおかしい。それこそ本末転倒だ。

「…家は2階建ての一般的なサイズで、フェンスはしっかりと四方を囲んでる。結構頑丈なやつな」

「オツケー。じゃあ次ね」

——家へ近づいていくと、ドアが少し開いていることに貴方は気づきます。そっと中へ入ると、そこにはテーブルがありました。

Q4：テーブルの上には何がありますか？

「家に勝手に入るとか無いだろうってコメントは無しだよ」

「釘を刺された…」

「絶対八幡なら言いそうだって思ったから」

「もうここまで来ると言う流れになってないか？」

「別に言ってもいいけど私は流すよ？」

「流される前提なこと事前に言われたらもう言えねーじゃねーか」

「でも八幡ってこういう扱いの方が喜ぶかなって」

「俺はMだと思われてるんだな」

「そういうことじゃないけどさ…って八幡の変態」

「え、これ俺が悪いのか？半分くらい留美が言わせようとしたからだろ？」

「じゃあSなの？」

「中間という発想は無いのか…」

「両極どっちかだと思ってるからね」

「テーブルの上には花が生けてある」

「あ、はぐらかした」

「ほれ。次の質問行くぞ」

「もう。調子いいんだから」

—— 貴方は家の中を見て、裏口から外に出ます。そこには芝生が広がっており、中心には庭があります。そこで貴方はマグカップを見つめます。

Q5：マグカップは何で出来ていますか？

「マグカップの材質ってことか？」

「うん。そうだね。硬いとか、柔らかいとかそんな感じ」

「金属製かな。結構丈夫なやつ」

「因みにその中に飲み物ってどれくらい入ってる？」

「半分くらいだな」

「うんうん。じゃああと2つだね」

—— 庭を進み続けると貴方は水の中にいることが分かります。

Q6：それはどのくらいの広さですか？湖ですか？川ですか？池ですか？

「いきなり水の中か」

「うん。そのくらいの水の量というか広さをイメージしたかを答えてくれたらいいよ」

「最初に思い浮かべた水は…海だな。太平洋くらいの」
「え」

「おいなんだ今の『え』は」

「ううん。なんでもない。じゃあ最後の質問ね」

—— 家に帰るためにはその水の中を渡りきらなければなりません

Q7：どのくらい濡れましたか？

「そりゃあ海なんだから全身ずぶ濡れだろ」

「……うん。了解」

「…おい、何だ今の間は。あと、なんで途中から露骨に俺から距離を取るようになったんだ」

「別にそんなことはないよ。じゃあ、とりあえず最初から順番に何を示していたか発表しよっか」

「なんか滅茶苦茶緊張してきたぞ」

何故か背中に冷たいものが走った。これから留美からどんな結果を告げられるのか固唾をのんでいた。

「えーっと…」

留美は持っていた教科書のページを開き直した。

「最初の『森の中を誰と歩いているか?』って質問だけど、この質問で答えた相手っていうのが、、、」

「というのが、、、?」

留美は一呼吸置いてからその可愛らしい口をそつと開いた。

「〃貴方が人生で一番大切だと思う人〃」

「……お、おう……」

思いつきり雪乃って言っちゃったよ。結婚相手違うのに。

初っ端から嫌な予感しかしないんだけど大丈夫かこれ?

「八幡?」

「あ、いや。大丈夫だ。単純にフリーズしていただけだ。まさかいきなり核心をついてくるような展開になるとは思ってもみなかったからな」

「じゃあ最初の質問は八幡的には当たってるの?」

「それを今言うのはちよつと怖いぞ…」

「わかった。じゃあ7つ全部テストの答えを教えてから聞くね」

死の宣告を先延ばしにしたただけな気がする。しかもその命のロウソクは長く持たない。

「2つ目の質問…『森の中で出会った動物は一体何ですか?』って質問の真意はであった動物の大きさが重要で、動物の大きさが貴方が今

抱えている問題の大きさ」です」

「めっちゃデカイ動物の名前を言ったんですけど」

象だよ象。現実世界だともうキリンとかクジラくらいしか居ないよ？象よりも大きい動物なんて。

「そうだね。八幡が抱えている問題はとっても大きいのかも」

「まあ、お察しだよな」

「あと、さつき言った動物が警戒心が強く、近寄りがたいものであれば、積極的な人。逆にのんびりとしている平和的な動物であれば受け身な人だって」

「警戒心が強い動物ってのはだいたい皆そうな気もするが…」

「まあ象だから、どちらかと言えば受け身っぽいよね」

「そうだな」

問題ってのをここまで引き伸ばしてるんだから積極的ってのはないか。

「3つ目の『森のなかで見つけた一軒家の大きさ』は『貴方の野心の強さ』を表しています。そして『フェンスがあるか無いか』は『貴方が開放的な性格かどうか』を示しています」

「この質問、留美もフェンス建てただろ」

「うん、とびつきり頑丈なのを四方に」

「だろうな。フェンス置かない奴居るのか？」

「私も居ないと思う」

俺たちは小さく笑う。

「野心が強いつてのは家がどれくらいだとそうなるんだろうか？」

「結構曖昧だよな」

「一軒家って言ってる時点でそこから通常の想像を越えて巨大化させるって発想に中々ならなさそうなんだよな」

「アメリカだと一軒家って一階建てで横に広いのもあるから国ごとに違いが凄く出てくるかも」

「それでお国柄が分かるって統計も取れそうだな」

「それ、もう目的が変わってきてるよね」

「俺らも3つ目の質問の回答の時点で心理テストの問題の出し方や意

義についてあれこれ言い始めてるから逸れてると思うが」

「八幡って遊びとか新しいゲームの説明を受けた時にルールの矛盾とかグレーゾーンを探すタイプでしょ」

「まあ、勝つためには重要なことだろ」

それで昔反則負けになつたことがあるが。

「だよね。私もそういう考え方をするタイプだけど」

留美は教科書をちらと見ながら次の回答に目を移した。

「4つ目の『テーブルの上に何が置いてあるか』という質問に対して、食べ物や人、または花があると答えた人は、今を幸せと感じている可能性が高いです」だって

「俺なんて答えたっけか？」

「花が生けてあるって言ってたよ。はぐらかすように答えてたけど」

「俺は今幸せなのか」

「なんでちよつと疑問系なの…」

「今の俺の状況考えたらそうならないか？」

「うん…まあ、ね」

「これ留美は当時なんて答えたんだ？」

「何も置いてない」って答えたと思う」

「おおう…」

「でも今ならちよつと違う答え方しかもね」

「それってどういう意味だ??」

「秘密」

「そこ隠すのか」

「八幡には絶対言わなーい」

留美は舌を出しながらいじらしく微笑む。心臓が跳ねる。可愛いな、本当に。

「マグカップの材質が…どれほど丈夫かに依って、森の中を一緒に歩いていく人との関係の強さ」が分かります」

「ほう」

「…なんでそんなに嬉しそうなの？」

「い、いや。別に…」

なんだかんだ俺も心理テストにハマってないか？さつきから滅茶苦茶一喜一憂してるぞ。

「プラスチックとかガラスだったら面白かったのに」

「そう言ったら留美はどうしてたんだ？」

「ほくそ笑んでたかな」

「あまり深くは聞かないほうが良さそうだな」

「自分のためにも？」

「そうだな」

「ヘタレ」

「ほっとけ」

そう言いつつも留美は俺の肩に頭を乗せていた。俺もそれに抵抗せず静かに留美の言葉を待っている。この距離感がとても心地よい。…って俺はクス野郎じゃないか。

「ホント、ヘタレのクスだよ。八幡」

「だから心を読まないでくれ」

「自覚はあるんだ」

「無かったら本当に人でなしだ」

「ある方が人でなしだと思うのは私だけ？」

「いや、俺もそう思う」

「なんで私こんな人に惚れちゃったんだろう…」

留美は大きなため息を吐いた。その言葉を面と向かって言われると、なんて言葉をかけたら良いものなのか非常に困る。

「とりあえず残り2つの質問を先に言っちゃおっか」

「そ、そうだな」

気を紛らわすように俺たちは残された質問の答えにすがりつくように話題を変えた。

『水の中にいる』って質問ってその水がどのくらいの広さなのかが重要でさ、、、 『広さ』性欲』なんだって」
「なっ!？」

「八幡は性欲の化物ってことだね」

「したこともないのに偏見が過ぎるぞ」

「じゃあそうじゃないの?」

「なら試してみるか?」

「うん」

「え?」

「……………」

「つ…、次の質問行くぞ」

「……………へタレ」

留美はふてくされながら最後の質問の答えに目を落とした。

『貴方がどのくらい濡れたか』によって、貴方がセックスをどれほど重要視しているか」が分かります」

「……………トドメを刺されたような気分だ」

「ご愁傷様」

「ほっとけ」

「愛よりも身体の相性?」

「さあな。けどもし俺が体の相性から愛が生まれるって言ったたらどう思う?」

「よく分からない。いきなり毛嫌いするのもまた違うと思うし。でも、それだけを表に全面に出している男の人は流石に仲良く出来ないけど」

「まあ言うて俺もよく分かってないってのが本心だな」

それが分かっていたらこんなことにはなっていない。ほら、これほど説得力のある言葉は無いだろう?…自分で言っていて悲しくなってきた。

「というか、経験が無い私にそれ聞くの?」

「へー留美は経験が無いのか」

「…変態」

「なあこれ俺が悪いのか? いや、俺が悪いな」

「八幡が貰ってくれる?」

「え」

「なーんてね」

「笑えない冗談だな」

「冗談…かもね」

「おい、何だその含みのある言い方は」

「ヘタレ」

「ほっとけ」

くそ、滅茶苦茶グツとききました。正直理性が崩壊しかけました。

その後は留美と大学生活の話やお互いの愚痴を言い合いながら時間が流れていった。気がつけばもう帰る時間になっていた。

「——さて、そろそろ行くわ。次はいつ空いてるんだ？」

「来週の土曜日なら空いてるんだけど八幡は？」

「来週か…。ちよつと予定があるな」

「雪ノ下さん？」

「…：まあ、な」

「そっか。なら仕方ないか」

留美はあつさりと身を引いた。

「ねえ、八幡。雪ノ下さんに私のことは話したの？」

「ここぞというタイミングで彼女は核心を切り出してくる。」

「ああ。ここに来る途中で電話で」

「それで遅かったんだ…：…」

留美はどことなく安堵した様子だった。

「ん？どうした？」

「なんでもない」

留美はおもむろに俺の肩に頭を置くと猫のように頭を擦りつけて甘えてきた。

「あの人…：なんて言ってた？」

「雪乃か？まあ、なんだ…：その」

言い淀む。雪乃に上手く伝えるように言付かって来たのに、結局適切な言葉が見つからなかった。

「…そっか。なら私からも宜しく伝えておいて。私も雪ノ下さんには感謝してるから」

今ので全て察したのか。本当に留美には頭が上がらない。俺なんかにはとてもじゃないがもったいなくて。それでも欲しくてたまら

なくなる。

「留美…」

「まだ駄目だよ」

俺が留美の肩に手をかけようとしたその時、留美がそれを峻拒した。

「まだ、けじめ、ついてないでしょ？」

「…ああ。そうだな」

もう留美の虜だった。頭がどうにかなりそうだ。

「ねえ八幡。1個だけワガママ聞いてもらってもいい？」

「なんだ？」

「その…。さ、最後まではまだ駄目だけど…き、キスしてもいい？今は私はそれだけで待てるから」

「…：…良いのか？」

「うん。お願い」

留美の肩にもう一度手を添えて強く抱き寄せた。そして、彼女の整った顔に付いている薄い桃色の唇をゆっくりと覆った。

「ん…」

彼女が首の後ろに手を回してきた。アメリカで二人きりでホテルに居た時と同じようにお互いの境界線がなくなるまで舌を絡めあつた。彼女を味わうたびに理性の臨海線が徐々にその位置を変えていくのが分かる。気づけばいつの間にか俺は彼女の双丘に手をかけていた。

「あ…だ、だめ…はち、まん…」

留美が咄嗟に俺の手を掴む。しかし、その手に力は籠もっておらず添えるように持っていただけだった。

「…このくらいにしておこう」

「…うん」

留美は名残惜しそうに俺から離れた。

後1秒長く触れていたらどうなっているか分からなかった。脳裏に浮かんだ雪乃と結衣の姿が自我を取り戻させていた。とはいえずにはまだ彼女の柔らかい感触が残っている。結衣ほどではないがか

なり大きな方だった。

留美は立ったまま動かない。

「どうしたんだ留美？」

「そ、その」

胸をかばうようにしてこちらを見る。

「もしかして…感じたのか？」

「う…うるさい。は、恥ずかしすぎるから…」

あまりにもいじらしすぎてもっと触りたかったがこれ以上は留美の機嫌を損ねてしまうので止めておいた。案の定と言うべきか、留美は俺が靴を履いて家を出る直前まで口を利かなかった。

「駅までの道は分かる？」

「まあ、大通りを道なりに進めば着くから迷わないだろ」

「そうだね。あと、来週は無理なんだよね…？」

「ああ。再来週か。まあ平日の仕事終わりも可能っちゃ可能だが」

「そうなんだ。なら、仕事終わったら連絡頂戴。私も空いてたら一緒に飯食べよ」

「おう。いいぞ」

「うん」

留美の機嫌はすっかり戻っていた。だが、未だなにか言いたげな表情をしている。

「ねえ、八幡」

「どうした？」

家の扉を開けたところで留美に呼び止められた。

「さっきの心理テストなんだけど…」

留美が意味ありげな笑みを浮かべる。

「一つだけ答えを教えていない質問があったんだよね」

「ん？そんなのあったっけか？」

「うん。覚えてない？コップにどれくらいの水が入っていたかって質問」

「ああ。そういえばあったな」

確か、5つ目の質問だったか？マグカップの材質に加えて中にどれ

くらいの液体が入っているか聞かれた気がする。それについては留美は答えていなかったな。

「それがどうかしたのか？」

「実はあれも別のことが分かる質問だったんだよ」

「そうなのか」

「それでね…あの質問から分かることってね……」

わざとらしく間をおいてから留美は口を開いた。

「『貴方が一人の人間に対して注ぐことが出来る愛の量』なんだよ」

「……………」

俺はあの時なんて答えた？

「あの時、八幡は『半分』って答えたの」

「…半分だとどうなるんだ？」

「分かってて言うてるでしょ。でもいいよ。説明してあげる」

留美が蠱惑的な笑みでこちらに詰め寄ると白く透き通った手を俺の胸に添えた。

玄関の段差の影響で彼女の女性の象徴が眼前に広がって心をざわつかせる。

「ゴツプいっぱいが全体量。あと、愛情なんてものを数量化するなんてって言うのは野暮だよ」

人差し指で胸の周りをなぞる。その後、釘を指すように指先で2、3回小突かれた。

右頬に冷えた汗が流れ落ちた。

「ねえ、八幡。『あと一人』は誰にするのかな？」

扉が閉まった。

家の内側から鍵のかかる音がしない。覗き穴越しに俺の顔を見て楽しんでいるのだろうか。

まわりつくりのような視線が穴から延びているようだ。一刻も早くこの場から離れなければならぬと分かっているけど、足がしばらく床に貼り付いて動かなかった。

あと一人。

今俺が注いでいる人間が誰で、そして誰に愛情を注いでいないの

か。残酷にそれを告げた彼女の本気を垣間見たような気がした。

続く

第五十二話

「——さて、準備は出来た？」

チエツクインカウンター前で智佐吹さんが朝礼のように周りへ呼びかける。またこれがやって来たのか。憂鬱になりそうだ。いや、もう既になっっている。

「今回は長旅だぞ。寧ろ旅行気分で行かないとな」

「前回のでも結構クタクタだったんですがそれは…」

「逆に2回目となればなれが出てくるかもしれないよ？」

「そうなるといいんですけどね…。島田さんはもう慣れました？」

「渡航初日は下痢します」

「駄目だこりゃ」

何故また俺は空港に居るのか…。

そう。出張である。またもやアメリカである。今度はロスからニューヨークまで。アメリカ横断ウルトラクイズのように西から東。このネタわかるの智佐吹さんと島田さんだけだろうけど。

「なんか私の年齢ネタ想像してない？」

エスパカーかあんた。ってこれ何言えばいいんだ…。

「東海岸ってボスキャリでしか行ったこと無かったから楽しみだ」

「なんだ、芦間。留学中に行かなかったのか？」

「ベガスとかは行ったけどさ。東の方は機会がなくてね」

「なんか色々違うのか？」

「それなりには。日本だって九州と関東でもぜんぜん違うだろ？一番違うのは気候だろうな。ニューヨークはそれなりに北に位置してるから」

「え、防寒とかしつかりしないといけないのか」

「そうやで。まあ、ミネソタやシカゴに寄らないだけマシだけどな。

あそこらへんはもう寒すぎて日本人にはキツツイ」

「もしかしてそこも…」

「うん。行ったこと無い。そこから来た友達からの情報」

芦間はあつけらかなと答えた。伝聞をこうも説得力を持たせて語

るのはこいつの才能かもしれない。

搭乗ゲートまで歩きながらこれまでのことをぼんやりと顧みる。

雪乃との不倫が始まって幾分と時間が経過した。関係は相変わらず良好で今も続いている。あれからいろいろな場所で逢瀬を繰り返した。結衣の様子は恐ろしいほどに変化がなく不気味さは拭えないものの、今の所不穏な足音は身の回りに起こっていない。

留美とも何度か会った。彼女の家に食事を食べに行つて以降留美の方から積極的なアプローチが来ることは無くなった。女友達かのように何処かに一緒に遊びに行つて帰るだけ。これまでとは距離が出来たのにもかかわらず居心地は非常に良かった。それでも留美ともっと親密になりたいという欲望も捨てきれないのだが。

留美は敢えてそういった感情を伏せているようにも見受けられた。あくまで俺の方から距離を詰めない限りは彼女はもうそれ以上は踏み込まない。駆け引きを強いられているのだと理解したのは3回目の時だった。

別れ際の度に挑発的な視線をこちらにやりながら帰る。その様は映画のワンシーンを切り取ったかのように映えていた。

そしてのらりくらりとしたデートを繰り返した後、留美がアメリカに戻る前最後に会った時に彼女に言われた一言がまだ耳に残っていた。

「——私が待てるのは後少しだけだよ？」

その言葉の真意は理解している。次に会うであろうボスキャリで答えを出せということ。なんとも絶妙なタイミングだと思う。俺が答えをはぐらかすことが出来ず、自分という存在を最大限までアピールできるギリギリのラインを心得ている。いつの間に男を手のひらで転がす術を覚えたのか。

「おい、比企谷。行くぞ〜」

ゲート前で芦間に呼ばれた。気がつけばもう搭乗時刻になっていたようだ。慌ててパスポートと搭乗券を取り出す。航空機までの通路を進みながら心の帯を締め直した。

「……集合場所ってここだったよな？」

「おう。鶴見さんのメールだとメインの通りにあるクマの銅像前で待ち合わせて言ってたぞ」

アメリカに到着した俺達はボスキャリアに向けての第一面接として、留美が通っている大学を直接訪れていた。そもそもの話になるのだが、俺達の今回の目的は前回同様新卒採用である。日本人留学生の採用は大体年に一回、秋に行われるボストンキャリアフォーラムと呼ばれるイベントで一気に採用するものだが、一部企業はボストンで行う前にいくつかの有名大学をまわって予め、優秀な生徒たちと面接や交流を行うことで他の企業よりも心象を良くしておくといったことを行う。勿論、その場で採用という場合もあり、彼ら学生にとっても就活を有利に進められるようメリットが相互に存在する形となっている。

そんなわけで最初に俺たちはボストンでのイベントが行われるよりも前に渡米し、各地の名門大学を訪ねているのだった。

アメリカの大学のキャンパスに足を運ぶのは俺にとっては勿論初の試みとなる。日本の大学しか知らない俺からしてみれば何もかもが新鮮だった。多様な人種、美術館のような外観を持った図書館、何のためなのか分からないアンケートや募金の呼びかけをするおっちゃん。キリスト教に関する演説を繰り返す活動家(?)。とにかく何でもだ。

異世界転生でもしたかのような気分だ。

留美が集合場所に指定した場所は大学のマスケットキャラにもなっているクマの銅像がある場所……ネットや雑誌の地図でもこの場所にあると表示されていたのだが……。

「何故か本来あるべき場所の周りに大きな黒板というか板があるぞ……」

そう、身長を大きく越す銅像がさらにそれよりも大きな板で四方をきっちり囲まれていたのである。シンボルともいえる銅像様を拝めずにいた。

「あーこれね……。確かにちようどその季節だな」

芦間が納得したような表情を見せた。

「これはだな、比企谷。ライバル校との対戦が近いってことだ」

「ん？どういうことだ？」

「こつちって大学スポーツの認知度が滅茶苦茶高くてさ。特にアメフトともなるとNBAやメジャーリーグの決勝戦よりも視聴率取るわけね。それで今って大学アメフトのシーズン中でおそらく近いうちに近隣の大学とこの大学のアメフトチームが試合するんだと思う」

「早慶戦みたいなもんか」

「そうそうそれ。お、ここに日本語でAV女優の名前が書いてあるぞ。絶対日本人留学生だな」

「日本語ならバレないか思ったのかね…」

「多分、他の国の言葉でも色々書いてあるんだろうな。何が書いてあるのか調べたら面白そうだ」

「完全に無法地帯だな」

それでお互いの銅像やらに落書きしたり色々起こるから黒板で囲んでいるのか…。よく見ると日本語とか書いてある。文字のサラダボウル。まさに路地裏の壁状態だ。いや、その方が秩序があるかもしれない。

「それで皆血気盛んになってるってのか？ヨーロッパや南米のサッカーファンがたまに事件起こしたりするよな」

「あく…。まあ、負けたら選手に対して殺人未遂が発生するとかいうあそこまで殺伐としたことは基本起こらないけども…」

芦間は黒板を撫でながらボヤいていた。「たまにNFLは見てただけどなく」と、どこか遠い目をしていた。

「なんか大学来てからちよつと元気が無いように見えるけど気のせいかな？」

「ぐえい!? やっぱそう見える?」

「いつも嘘くさい表情してるくせに今日はやけにマジ顔だからな」

「…俺も結構顔に出るのな」

芦間が照れ隠しするように取り繕った。

「ああ。人のことは言えない」

「比企谷に言われると癪だけどな。でもお前に言われるのが一番救われるかもしれない」

「それ褒めてるのか？」

「そりゃあもう。俺にしては最上の賛辞だぞ」

芦間はジャケットの内ポケットからカラーのマジックペンを取り出すと黒板に英語で落書きをし始めた。

「比企谷君、トシに何か言ったの？」

智佐吹さんが隣で訝しげに俺たちを見つめている。

「いや、特に変わったことは言っていないですよ。いつも通りの会話をしただけです」

「そうだとしても、もしうちのオフィスに居る時もトシがああなっいたら比企谷君のせいだからね」

「そんな殺生な」

「ふふ。冗談」

智佐吹さんが背中を軽く叩くと島田さんの方に行って何やら打ち合わせを行っていた。

「何か智佐吹さんと話してたのか？」

丁度そのタイミングで葦間が戻ってきた。

「別になんでもないぞ」

「そつか。それよりも見てみるよ、比企谷。あそこにYahoo知恵袋のリンクのQRコードを手書きしておいた」

「なんでまたそんなものを…。というかQRコードってそんな素早く手書きできるものでもないだろ」

「ほんなら、実際に読み取ってみ？」

「いや、別にいい。因みに何に繋がるんだ？」

「ッさ〇なくんに寄生されている下の人ってもう助からないのではありませんか？」って質問のページに飛ぶようにしておいた」

「なんだそのブラックジョーク…」

「いや、これ別にブラックジョークでもないだろ…」

乗ってやったら何故か逆に葦間にツッコまれた。しばらくして、島田さんが楽しそうな顔で『比企谷君、QRコードを試しに読み取って

みたら日本語のサイトに行きましたよ」とスマホを見せてきたので愛想笑いをしておいた。因みに智佐吹さんは『この人にはスタイルで勝ってるな』と掘り下げるにはおぞましい発言をしていたので悟られぬようにそつと距離を取った。

「お待たせいたしました」

背後から馴染みのある声が聴こえてきた。彼女の声だ。

「お久しぶりで皆さん」

留美は公の場でのルールを遵守して丁寧な対応で俺たちを出迎えた。彼女の後ろには何名かの日本人会の理事が立っていた。その中に俺がかつてこの大学の日本人会のクラブイベントに参加した時に少しの間だけ話したクロという人物の姿が目に入った。確か留美の後輩で彼女が気兼ねなく話すことの出来る数少ない人物だったはずだ。

彼はこちらの姿を認めると改めて俺個人に対して軽く会釈をした。俺もそれに倣って分かる人にだけ分かるような軽い挨拶を返した。

「こんにちは鶴見さん。この度はお世話になります」

島田さんが深々と頭を下げる。気がつけば互いの代表者が挨拶を交わしていた。普段見ない留美の全く違った一面を目の当たりにする。それはいつも俺が見ているあどけなさとか愛らしさを微塵も感じさせない瀟洒な女性という印象だ。おそらく大学や日本人会での彼女の顔はこちらなのだろう。もしかするとこちらの方が彼女の本当の顔ではなからうかと思えてしまうほど自然体で話しているようにも思える。そんなことはありえないということは勿論この俺が一番知っているのではあるが。

今回のイベントの流れはまず始めに企業説明会を一時間、その後個人面接とパートナー面接を段階的に行っていく。所要時間としては3〜4時間を予定している。面接希望者の人数によって時間が大幅にずれ込む可能性だってありうる。

説明会会場へ移動する最中留美は葦間や智佐吹さんと話していた。意図的なのか留美は俺の方に一度も目を合わせようとはしなかつ

た。俺はクロや他の理事のメンバーの質問に答えたり、雑談を交わしながら会場へと足を進めていた。

また、理事の一人に非常に可愛らしい女性がおり運良く自分と話してくれていた。こんなところでぼっちになるところだったので良かった……が、彼女と会話が弾むたびにある一定の方向から非常に背筋の凍る視線が向けられているような感覚がして会話の内容は殆ど覚えていなかった。

説明会会場は教室の一室だった。クロ曰く各団体には週一でミーティング用の教室が割り振られており、その権限を利用して俺たち企業のための説明会会場に充てているらしい。

会場について俺がパソコンや資料の準備をしていると先程話していた理事の女生徒が手を貸してくれた。詳しい話を聞いてみると、どうやら彼女も弊社志望らしい。肩にかかる程度の長さの髪をかきあげながら澆刺と答える。それを聞いた瞬間、内申点稼ぎかこれはと邪推してしまったが、そうだとしたら一番下っ端の俺なんぞに話しかける必要もないよなあと直ぐに考えを改めた。

ではどうして俺に彼女は話しかけてくれているのだろうか？先程からやたらと距離が近いのも気になる。いきなりの質問ではぐらかされるかとは思ったが思い切つて聞いてみた。

「だって留美が自分の恋人のように貴方のことを話すからずっと私も気になってたんですよ。それでちよつと話してみたら直ぐに分かりました。あ、この人凄く良い人なんだって」

笑顔で彼女はそう答えた。どうやらこの人は留美と親しい存在なのだろう。良くも悪くもはつきりと物を言うタイプに見える。こういう人間のほうが案外留美にとっては相性が良いのは俺も納得がいった。

「そうか？人間少し話ただけじゃ中々人間性なんてわからないもんだと思うぞ」

「そんなもんですかね〜？というより、比企谷さんも最初の一言目で自分に合うかどうか決めちゃうタイプじゃないかなあつて思ったんですけど」

「それが出来るのは女性だけだ。女の勘なんてものは男は持つてない」

「それ、褒めてます?」

「そのつもりだが」

「じゃあ素直に受け取ります」

彼女は深く頭を下げた。

「……変わってるって言われないか?」

「結構ど直球に聞いてきますね……。まあよく言われます」

「俺は別に変わってるとは思ってないけどな」

「え、本当ですか? ああ、自分の方が捻くれてるからですか?」

「なあ、もしかしてさっきのちよつと怒らせたか?」

「ふふふ。全然です。寧ろ比企谷さんと話すのすごく楽しいですよ」

「前言撤回だ。やっぱり変わってるわ」

「最大の賛辞ですね」

「お、おう……」

なんとというか俺、この人には頭が上がらない気がする。

「……………比企谷さんって分かりづらい人だけど分かりやすい人なのかも」

何やら彼女がぶつぶつと独り言を呟いている。何を言っているのかまではよく聴こえなかった。と、その時、

「茜……こっち手伝って」

彼女の背後で氷の女王様二世が冷やややかな目で俺達を見ていた。絶対零度の視線で人を睨み殺すだけの眼力を誇っている。普通であればその剣幕に押されてしまうところだが、呼ばれた女性……茜さんとやらはというと、

「はいよ留美。あと、そんな目で睨んじやだめだよ? ——愛しの

比企谷さんに嫌われちゃうぞお……?」

「ふえ!? あ……そ、その。違う……」

たった一言で留美を言いくるめていた。凄いな。あんなにも留美が一方的に言い負けてるの初めて見た。彼女が何を言ったのかはこちらからはギリギリ聞き取れなかった。一体何を吹き込んだのか、あ

の留美が真つ赤になって俯いていた。

「比企谷さん、やりますねえ〜」

パソコンをケーブルでプロジェクターに繋ぎながらクロが意味ありげな視線をこちらに投げかけていた。このプロジェクターは俺たちが準備したのではなく彼らが備品として所持しているものを持ってきてもらっていたのでセッティングは彼らに任せているのである。

「君のポジションはいつもそんな感じなのか？」

「いんや。あんまりこの団体のメンバーとは俺は折り合い悪いですよ。だからこんなセッションで絡んだら間違いなく嫌われますね〜」
「あ、いや。そつちじゃなくて仕事の話だ」

クロのちやちや入れをさらりと流しながら俺は予てからの疑問を口にした。クロは進んで地味な作業や裏方業務を担当していた。クラビングイベントの時も彼はひたすら雑務を一人でこなしていたのが印象に残っていたからだ。

「ああ、そつちのことですね。単純に自分があんまり人前が好きじゃないっていうのと他の理事じゃ仕事に信用がないっていう理由とか……」

ああ、これ後者が本当の理由なんだろうなあ。全ての仕事や責任を自分で抱えようとして自爆しなければ良いのだが、こういうのは一回大きな失敗をしたり溜まりすぎてパンクしないと止まらないから敢えて今のままではマズイとかそういう助言をするのは止めておいた。とはいえ流石に何も言わないのは自分としても嫌だったので差し障りのないように他に頼れる人間は居ないのかと聞いてみたが、留美や茜のように今年就活を控えている理事にこれ以上の仕事は押し付けられないと答えていた。というかさっきの質問の仕方での答え方となると留美や茜以外に本当に頼れる人が居ないんだろうなと心底同情してしまった。

「——さて、それではそろそろ説明会の方を初めたいと思っておりますので皆様ご着席いただくようお願いいたします」

島田さんの一言で葦間や智佐吹さんと話していた生徒たちが速やかに席に着いた。俺も生徒たちの邪魔にならないように会場の後方

に静かに着席した。

弊社の説明会には30人近く集まっていた。これは後にクロから聞いた話だが、普段こういうイベントを開催すると集客は20人行けば良い方らしい。つまり弊社はそれなりに生徒からの興味を集めていたことになる。もしくは留美が集客をFacebookのイベント告知で頑張ってくれていたのだろう。

説明会は智佐吹さんが手動となって行われていた。内容は弊社で行うようなものと特に変化は無い。企業理念から事業紹介といった企業の自己紹介をかいつまんで説明している。

途中生徒からの質問に答えつつ終盤に入ったところで今回の採用面接の方針を生徒たちに話す。今回の採用で取るのは2〜3人かと漠然としたことを考えていた。

因みに留美は既に内定を貰っているので内定をもらった人の代表者として新卒の挨拶兼弊社の簡単な紹介を行っていた。島田さんあたりが頼んだのだろうか。

説明会が予定通り、1時間で終了した。この後は採用面接の時間になる。どうやらこの後は場所を移動するようだ。

「面接会場は図書館のグループ学習室を3部屋予約しておきました」

留美が俺にも聞こえるように少しだけ大きな声で智佐吹さんにそう話していた。勿論、事前に留美のメールで当日の予定表は文書で受け取ってはいたのだが、こういう彼女のちよつとした気遣いが社会では評価になるものだ。

グループ学習室はガラス張りの6畳間ほどの部屋だった。防音はしっかりとしているようで声は外に漏れない仕様になっている。3部屋は連続して隣り合っており、その端には丁度良く待機している生徒が座ることが出来る広めのスペースが確保されていた。次に面接を控える生徒はここで待機してもらおう運びになっている。

「じゃあ奥の二部屋で面接をするから、トシは一番手前の部屋でさっき言った作業をよろしくね」

「承知しました〜」

葦間は飄々とした声で答えた。それで俺は何をすれば良いんだ？

「比企谷君はお話相手ね」

人選ミスとはこの事を言う。そこはどう考えても逆だろ。なんで俺を事務に戻さなかつたんだ。横で小さな声で葦間に「敢えてらしいぞ」と言われる。まあどうせそんなことだろうとは思っていましたよ、はい。

弊社側他の三人が持ち場につく。俺はというと歳下の生徒に囲まれながら放置である。

「八幡はこっち」

留美が俺を椅子に誘導した。あの、ナチュラルに俺のこと名前で呼ぶのはどうかと思うんですよ本当に。恥ずかしいから……。ほら、貴方のお友達がにこやかにこっちを見ていらつしやいますよ。

留美はそそくさと俺の隣に腰を下ろした。

「あの、何かあったのか？」

「ん？何が？」

恐る恐る留美に話しかけるも彼女は特に変わったことは無いと言わんばかりに普段の表情を見せた。それが逆に恐怖心を煽るのだが。

「…というか他に言うことあるんじゃないの？」

顔には出していないがへそは曲げているようだ。そういえば、二度目のアメリカに来てから初めての留美との会話がこれだった。

「悪い。久しぶりだな、留美」

「うん。久しぶり」

留美がようやく笑顔を見せた。こうしてよく話すようになってから彼女は喜怒哀楽を頻繁に見せるようになった。勿論、それはいい意味でだ。

「……留美がこんなにも自然な笑顔を出すところ初めて見たよ……」

「本当ですね。今ここに俺ら以外の人が居なくてセーフでしたよ。これ他の人いたら絶対噂になってましたね」

茜さんが珍しいものを見た后感嘆の声を漏らした。隣にいるクロも今自分の前で繰り広げられている光景が信じられないといった様子だ。

「私そんなにいつもと違う?」

留美が不思議そうに首をかしげた。そこに関しては俺も留美と同じ見だった。いつもの留美はこんな感じだ。逆に他の人と話しているところを見たことがないというのもあるが、クロ達と話すときの留美は感情をそこまで表に出さないのだろうか。

「おう…。なあクロッピ、こりやあ重症と違いますかね?」

「そうですね姐さん。医者が匙を投げるやつです」

二人が頭を抱えていた。留美が「意外に仲良いよね二人って」と声をかけたが正直このタイミングでのその発言は留美のポンコツ具合が更に悪く二人に受け取られてしまうだけだろうと嘆息した。

「ねえ八幡。私変なこと言った?」

「お前らしくもないな」

「:もしかして八幡も二人の方に付くの?」

「そういうことじゃないんだけどなあ……」

「比企谷さん、今の留美に説明しても貴方が自爆する未来しか見えないですよ」

茜さんが半ば呆れたような声色でボヤいた。クロが「自分もそう思います」とそれに続く。

「別にこいつの保護者ってわけでもないんだが、これからも留美をよろしく頼む」

「いえいえ。それはこちらの台詞ですよ」

「3人とも私のこと子供扱いしてる……」

その後しばらく留美が拗ねていたが面接が終わる頃には留美はまた俺の隣に戻ってきて俺達の会話に加わっていたのだった。

第五十三話

『今日はありがとね』

留美からのLINEだった。既に俺は留美の大学での採用面接の日程を全て終えて今はホテルの一室で休んでいる。

『おう、こつちこそありがとな。留美の友達にも会えて良かったわ』

『それどういう意味?』

『そのまんまだ。ちゃんと素で話せる友人が居るみたいで安心したわ』

『八幡、親みたい』

『俺からすれば娘みたいなものだ』

『八幡って娘みたいだと思ってる人とキスするの?』

『それは言わないでくれ……』

『今日はキスできなかつたね』

『当たり前だ』

『私は誰も見ていない時にしたかつたんだけどなあ』

『随分と大胆になったな留美は』

『1回だけチャンスあつたの覚えてる?』

『そんな時あつたか?』

『うん、茜がお手洗いに行つてクロが別件の電話で席を離れた時、他の生徒も居なくて私達二人だったのに、八幡こつち見てくれなかつた』

『そりゃあ仕事中華しなあ』

『うん、葦間さんの方見て何かジエスチャーでやり取りしてた』

『ああ、あの時か』

『そうだよ。私、八幡のことずっと見てたのに』

『恥ずかしいなそれ』

『葦間さんはそれに気づいてさりげなく私に親指立てて合図くれた』

『それであいつ面接の後、変にニタニタしてたのか』

『八幡にもああいう気遣いとかあればいいのに』

『善処します……』

『こつちやって言われて、捻くれたこと言わないようになっただけ成長』

なのかな』

『どういう妥協の仕方だよ……』

『昔の八幡だったら絶対屁理屈こねてたと思うよ』

『我ながらそれは否めない』

『自覚はあるんだね』

『なかったら相当痛いやつだろ』

『あつても相当痛い人だよ……』

『それは言わない約束だ』

『そんな約束は私とはしてないけど？』

『暗黙の了解ってやつだ』

『また屁理屈……』

『これも駄目か？』

『もう慣れてるからいい』

『その言い方だと実に俺の言動に飽き飽きしているように取れる』

『相手にそう受け取られるって思ったことはないの？』

『ちよ、マジの説教止めて汗 本当、気を付けますから』

『別に怒ってないよ（笑）』

『留美に説教されたら暫く立ち直れる気がしない』

『それは私が歳下だから？』

『いや、一番言われて納得する相手だからだ』

『一応、私のことを認めてくれてるって思ってもいいの？』

『なんとというか今更な発言だな』

『あんまり八幡って人のことちゃんと褒めないし』

『もつと言う方が良いのか？』

『その方が私は嬉しいよ』

『そうか』

『でも取ってつけたような言い方したらすぐ分かるからね？』

『それはまあ、うん。留美なら直ぐに気づくだろうからな』

『私じゃなくても分かると思うよ。八幡って嘘下手だから（笑）』

『俺ってそんなに分かりやすいのか……』

『うん。だから正直、奥さんに浮気もバレてると思うんだよね』

『…………マジか』

『多分…………』

『結衣の様子は家だと別に何も変わらないんだけどなあ』

『奥さんが八幡に見せている顔ってそれが全部じゃないと思うけど』

『どういう意味だ』

『今日の私を見れば分かるでしょ？』

『…………そういうことか』

『うん。別にいちばん大切な人に見せる顔が全てってわけじゃないんだし』

『そう言われると急に怖くなってきたな』

『今更って気はするけど』

『ご尤も過ぎてぐうの音も出ない』

『雪ノ下さんとは上手く行ってるの？』

『まあな。それなりに』

『浮気にそれなりとかあるの？（笑）』

『言い方の問題だろ汗 順調ですって他の女に言うほど俺は度量無いわ』

『確かにそうだね…………。逆に自信満々に言ったらドン引きしてたかも』

『それはもう隠す気が無いやつだな』

『それ自虐？』

『勘弁してください』

『はいはい（笑） ねえ、八幡はこの後の予定ってどうなってるの？』

『この後ってのはアメリカから日本に戻るまでの日程ってことか？』

『うん。どういう風にまわるのかなって思ってる』

『この後はこの州の他の大学を一日一校ずつお邪魔して今日みたいなイベントをやる予定だな。あと、ついでに他の州の大学もやって、その後には東海岸の大学もやる』

『結構行く所あるんだね』

『そうだな。留美はポストン来るんだよな？』

『うん、一応行く予定だよ』

『うち以外のところにも行ってみるのか?』

『何社かは受けてみようかなって』

『まあできるだけ多くの選択肢を持つことは重要だな』

『八幡も何社か受かってそこにしたの?』

『いんや。逆に俺はここしか受からなかった』

『え、そうなの?』

『まあ、合う合わないの問題もあるし、多ければ優秀ってことでもないから』

『それはそうだけど』

『留美は結構内定貰ったか?』

『うん、何社かは既に貰ってる。でもなんか下心で採用されたみたいなどころも多かったよ』

『留美の容姿なら仕方ないかもな』

『私は別にモテたいわけではないし……』

『女性が社会に出るなら見た目も武器にしたほうが色々と楽にはなるぞ』

『その分苦労もあるでしょ?』

『そりやそうだな。同性からの嫉妬やら有る事無い事噂されたりな。

実際、大学時代に結衣が根も葉もない事言われてたらしい』

『ばっかみたい。いい歳してまだ子供みたいなことするんだね』

『大人だからこそって考え方もあると思うけどな』

『うーん……。それ言っちゃったら認めちゃうように嫌だなあ』

『俺も認める気はないぞ。大人なんだからそこらへんの感情のコントロールは少なくとも仕事中はしてほしいものだ』

『八幡の職場でも感情のコントロールが出来ない人居るの?』

『まあな。でも、揚げ足を取るつもりはないが人間はそもそも感情のコントロールが出来ない動物だと思う。一瞬だけ抑えるとかは出来るかもしれないが、喜怒哀楽はどんな人間でも出るものだし、抑えようと思っても溢れ出る』

『それ聴くと、私会社勤め嫌になってきたなあ……』

『組織に所属するってのはそういうことだな。俺も毎日めんどくさい

なあと思つて生きてる』

『偉いね、八幡は』

『まあ養う家族がいるからつてのがあある。金ももらえるんなら我慢する。弊社は給料も良いしな』

『やつぱりそこは大事だね』

『最低限は無いと無理だ。でもこれも長くは続かないんじゃないかとも思う』

『じゃあ今のモチベーションは奥さんだけけどそのうち変わるんじゃないか？つてこと？』

『その聞き方はちよつと性格が悪いな』

『えへへ。でも、そういうことでしょ？』

『“YES”とは言えんわ』

『でも“NO”も言えないんだね』

『それ言つたら完全に嘘だろ』

『それ“YES”つて言うのとどう違うんだらう……』

『日本の政治家ならこの違いをよく知つていると思うぞ』

『急に話逸らさないでよ（笑）』

『それにしても留美も小悪魔になつてきたな。先に話逸したのは留美だろ？』

『それは否定出来ないけど』

『どこでこういうことを覚えたのやら……』

『好きな人を落とすために女の人は変わる努力をするんだよ？』

『……………』

『もう。なにか言つてよ八幡』

『最近、留美のストレートなアタックにどう対応していいのかわからない……………』

『照れてるの？』

『まあな』

『じゃあ嬉しいつてこと？』

『そうだな』

『やったー^^』

『淒く素直に喜ぶのな』

『私だつて子供みたいになる時はあるよ(笑)』

『俺が留美が子供みたいにならないとは思ってないからな(汗)』

『怪しい(――)』

『え、そこ疑われるの?』

『冗談だよ^^;』

『留美の冗談は結構冷や汗かくときがある』

『え、そんなに分かりづららかなあ?』

『普段、冗談を言わないからな』

『八幡話している時は結構言ってると思うけど』

『こうやってオンラインで話してる時はだろ?面と向かつての時は

もつとこう、純粋な感じで攻めてくる』

『じゃあ今は?』

『小悪魔系だな』

『ギャップちゃんと出てる?』

『狙ってたのか?』

『ちよつとね』

『なら成功してるぞ』

『えへへ^^ 嬉しい』

『ポストンにはいつ来るんだ?』

『二日目と三日目に行く予定だから一日目は午前中は授業に出てその後以最寄りの空港に向かうよ』

『学期中なのか。なかなか大変だなあ』

『日本人しかボスキャリアに興味ないからね笑 流石にこっちの大学が私達の事情を汲むなんてことはないからね(・。・。』

『そうなんだな汗 じゃあもし、時間があればうちにも寄ってくれ』

『勿論行くよ。寧ろ、八幡の会社が第一希望なんだから』

『それはとても嬉しいが、こっちも仕事如山積みになるだろうから余り時間は取れないかもしれないがよろしく頼むわ』

『大丈夫。ちよつとだけでも話せたら私は嬉しいから』

『……留美って本当素直になつたよな』

『そう？思春期過ぎて丸くなったのかな』

『俺は良い意味で変わったと思うぞ』

『そう？なら良かった^^』

『おう。あと、留美って結構顔文字使うのな』

『意外？』

『だな』

『八幡は顔文字とかスタンプとかも使わないよね（笑）』

『意外でもなんでもないだろ？』

『うん（笑）でもそれが良いと思う』

『安心しろ。俺の性格が変わることはまずないと思う』

『性格は変わらないけど節操はだらしなくなってるよ？』

『それは言わないでくれ（汗）』

『まあ私は八幡のこと拾ってあげるから安心して^^』

『何その、最後の保険みたいな』

『私って結構包容力あるよ？』

『急に自分を売り込んできた。まあでもそれは日々の立ち振舞から十分伝わってる』

『うん。八幡は継続的にアプローチしないとほぐらかしそうだからね』

『よくわかってるじゃないか』

『褒められてもあんまり嬉しくないんだけど……でも届いてるみたいで良かった』

『いや、あの俺既婚者だからね？』

『不倫してるくせに……』

『留美さん、本当勘弁してください』

『これさえ言えば八幡は言うことをきくね（笑）』

『心臓を握られすぎて辛い』

『色々八幡のバレたらマズイ情報持ってるよね』

『留美が1，2を争うくらい持ってる』

『ドラマだと私、殺されちゃう人じゃない？』

『お金よこせとか言って揺すってくる奴な』

『それ、完全な負け犬キャラじゃん』
『別に留美がそういうキャラとは言っていないだろ』
『そうなるかどうかは八幡次第なんだよね〜（チラツ）』
『段々と心苦しくなってきた』
『ちよつといじめ過ぎちゃったかな（汗）』
『いじめられ慣れているから平気だ』
『なんかごめん……』
『そこ同情しないで！余計に悲しくなっちゃうから〜；』
『今度私が慰めてあげるね^^』
『それはありがたい。どんな風に慰めてくれるんだ？』
『それも八幡次第かな♡』
『……お、おう』
『ドキツとした？』
『大分な』
『そっか、良かった^^』
『じゃあそろそろ寝るわ。明日も仕事だからな』
『学生に対して営業かな？』
『まあな。社会人も中々楽なものじゃない』
『人間関係はどんな場所でも悩むんだね。八幡はしばらくそれを拒んでたっぽいからリハビリも大変だったんじゃない？』
『リハビリ言うなし汗 ……ってもうこんな時間か。そろそろ寝るわ』
『うん、遅くまでありがとう。おやすみ』
『ああ、おやすみ。ポストンで会えたら嬉しいな』
『そうだな。ぜひうちの場所にも顔を出してくれ』
『うん、そうするよ。じゃあね！』

続く

第五十四話☆

ボストンの夜景を窓からぼんやりと眺める。他の都市と明確な違いがあるかと聞かれると、そうとは言えないだろう。何しろ俺は夜景を眺めるなどという優雅な過ごし方を知らずに今日に至るのだから。

イベントが終わり、疲れ切った体をホテルの一室で休めていた。

この3日間は自分の時間が取れないほどに仕事が目白押しだった。絶えずやってくる入社志望者の履歴書を受け取りながらそれを眺めたり、会社の雰囲気聞かれればそれに丁寧に答えたり、窓口としての役割を不得手ながらもまっとうする必要があった。

先日の約束通り、留美は会場に来てくれた。短い時間ながらも二人で話す時間が出来た。話の内容は他愛のないものだったが、それでも最後には留美がここに来てよかったと言ってくれた。

別れ際に留美が手を握ってきた。「期待してもいいの？」と問いかける。

俺はただ黙ってそっと彼女の手を握り返した。留美は頬をほんのりと赤く染め上げながら、わずかに微笑んだ。

イベント中、束の間の休憩時間に俺は会場内を見て回った。

色々な企業があるんだなと再認識させられた。どうやら前回のイベントの規模とは桁が違うらしい。

地図を見ながら雪乃の所属する企業を覗いてみた。会ってはいけないと分かっていたのに自然と身体がその方向に向かっていった。仮に彼女を見つけてしまえば欲望に逆らえなくなると分かっているが、なんとも浅ましい。

幸か不幸か、彼女はそこには居なかった。

雪乃もこちらに来ていたという連絡はあったのだがどうやら今は持ち場を離れているらしかった。残念に思いながらも俺は飲み物だけ購入して持ち場に戻った。

そして、結局イベントの終了まで雪乃に会うことは出来なかった。

この3日間は雪乃に連絡を取ることも叶っていない。というよりは企業側はどこもイベント期間中は多忙を極めた為にメッセージを送ることを控えていたという言い方のほうが適切だ。

雪乃は今どうしているのだろうか。自分の頭の中はそれでいっばいになっていた。

自分の携帯が鳴っている。

仕事用でもなければプライベート用のでもない。

雪乃や留美と連絡を取る用の物だった。一応、最悪の事態を避けるためにスペアを用意していた。

ベッドから飛び上がって起きてそれを手に取った。

着信だ。

相手は『秋山さん』と表示されていた。当然、電話の相手の名字は違う。慎重に『応答』のボタンをタッチして端末を耳に当てる。

「雪乃か？」

『は、八幡？』

久しぶりに聴く雪乃の声だった。今まで全身にのしかかっていた疲れが吹き飛ぶかのように体が軽くなる。自分がこんなにも単純だったのかと思うと馬鹿らしい。

「俺の名前がちゃんと表示されてるだろ？。久しぶりだな、雪乃」

『ええ、とても嬉しい…。久しぶりに貴方の声を聴けて。ずっと話したかった…。八幡』

雪乃はもう俺に対する愛情を隠さない。真っ直ぐに親愛な言葉をかけてくれる彼女が愛おしくてたまらなかった。どうして高校の時からこれが出来なかったのか。

「仕事お疲れ様、ようやく終わりか？」

『ええ。貴方もお疲れ様』

こんな他愛のない会話ですら満ち足りた幸福感をもたらしてくれる。言葉を交わすたびに彼女のことと頭が一杯になった。

「そういえば休憩時間に雪乃の会社のところに行ってみただけど会えなかったわ」

『え、そうなの？私も休憩中に貴方の会社のブースに行ってみたのだ』

けれど』

「ん？そうなのか？」

『ええ。最終日の午後12時頃だったかしら』

「え、俺もそれくらいの間になつていたとは思わなかったんだが」

『……………まさか、入れ違いになつていたとは思わなかったわね』

なんとという間の悪さ。あの時素直に自分のブースでゆっくりしておけば良かったとひどく後悔した。とはいえ、もしその場に雪乃が現れようものなら自制が効かない様子を同僚にバツチり見られる可能性が高いのである意味正解だったのかもしれない。

「まったくくだ。こんなことなら休憩時間の前に連絡の一つでも入れてみれば良かったかもな」

『本当にそうね。でも、貴方は仕事で忙しいと思つたから連絡は控えていたのよ…』

「俺もだ。仕事をしている雪乃の姿を一目見られればいいなと思つたから、居たとしてもこつそり覗いて帰るつもりだった」

『こつそり覗くのは無理だと思つたわよ。もしかしたら貴方が来るかもしれないと思つてずつと周りを見ていたから』

「いや、仕事しろよ」

『ご、ごめんなさい』

こんなにも素直な雪乃は初めて会つたときからは考えられないが、今はもう愛おしくてたまらないくらい可愛い。

「いや、その。俺も同じようなことしてたからお互い様だ」

『仕事してないのね』

「ほつとけ。お互い様だろ」

雪乃はくすくすと笑っている。顔を合わせてもいないのに恥ずかしくなつて窓に目をやる。

『今一人？』

「ああ。部屋でゆっくりしてる。もう全部の日程を終えて、後は日本に帰国するだけだな」

『私もさつきようやく溜まっていたタスクが片付いたわ』

「そうか。お疲れ様」

『ありがとう。……ねえ、貴方今どのホテルに泊まっているの?』

「おい、まさか来る気か?」

『駄目……かしら?』

「ここは日本じゃないんだぞ。お前みたいな美人が夜な夜な歩くのはどう考えても危険だ」

『なら貴方が来て欲しい……』

「その方が良いだろうな」

『本当に来てくれるの?』

「俺だつて雪乃に逢いたくて仕方がない」

『は、恥ずかしいのだけれど、……とても嬉しい……』

俺も人のことを言えないな……。自分の感情をむき出しにして誰かと向き合うことに遠慮がない。

「自覚が無いのかわからないが、こつぱずかしいことなら雪乃の方がずっとたくさん言ってるからな。……最近は特に」

『そ、そうなのかしら?』

「全く自覚が無いのな。それも可愛いから良いけど」

『や、やっぱり貴方の方が恥ずかしいことをたくさん言っている気がするのだけれど……?』

「んどののホテルに泊まってるんだ?」

『えっと……住所を送れば良いのかしら?』

「そうだな」

『メッセージで送るわね』

「分かった」

程なくして雪乃からホテル名と住所の書かれたメッセージがLINEに送られてきた。

………つてうん?

「あれ?もしかして、これ同じホテルか?」

『……え?』

もう一度自分が泊まっているホテルを確認した。間違いない。同じホテルだ。

「部屋は何階だ?」

『11階よ』

「俺は7階だ」

『案外ずつと近い場所にお互い居たのね』

翌々考えてみれば同じ会場にいるのだから同じホテルに宿泊する可能性も決して低くはない。

「全くだ。こんなことなら最初から聞けばよかった」

『本当ね……損をした気分』

「どうする？俺の方が行くか？それとも雪乃が来るか？」

同じ建物内の移動であれば流石に問題ないだろう。

『貴方の部屋に行ってもいいかしら？』

「分かった。着いたら部屋をノックしてくれ」

『ええ。3回ノックするからそれが合図ね』

「まるで悪役の密会だな」

『密会なのだから良いでしょう？まあ、秘密組織の暗号にしては単調すぎるとは思うけど』

「確かに、その方が雰囲気出るか」

『今からでも良いかしら？』

「別に構わないが、俺もお前も出来るだけ人目につかないほうが良いのは変わらないんだからな」

『わ……分かってているわ……。べ、別に海外だからって浮足立ってはいないのだけけど？』

「でも期待はしてるんだろ？」

『そ……それは勿論……』

「まあ、バレるって心配は日本にいるときよりかは格段に低いのは間違いない。とはいえ同業者や知り合いに見つかるリスクは高いんだから気をつけてくれ」

『もちろん。それなりに結構周りへの警戒は怠ってはいないわよ。経験上ストーリーカーに付きまとわれたりと面倒なことに巻き込まれたりもしたから……。人の視線には結構敏感だと思う……』

「ざらつと暗い過去を暴露するな……。めっちゃめっちゃ反応に困る」

『心配してくれないの？』

「勿論心配はしているし、ストーカーには殺意が湧いている。とはいえ、雪乃なら相手を返り討ちにしてしまいそうな雰囲気があるな。嫉妬もした」

「これでもか弱い女の子なのだけれど…。嫉妬はしてくれるのね。変質者に嫉妬しても何も良いことは無いと思うけど、貴方は独占欲が強いから仕方ないわね」

「お前のほうが独占欲強いだろ……」

『そ…それは否定できないわね……』

だって、他の女の子と会うっただけで尋常じゃないくらい弱々しくなるからね、雪乃さん。それをなだめるのに軽く2時間はかかるが、幸せな時間だから別に気にしてはいない。

「早く来てくれ。もう我慢できなさそうだ」

『ええ。私も、もう我慢できそうにないの。仕事の疲れでももの凄く八幡不足になっているわ』

八幡不足というパワーワード。男冥利に尽きる。

「ああ、俺も雪乃不足だ」

お互いに羞恥さらしまくりなのだが、そんなことはどこ吹く風だ。はやる気持ちも他の考え事に脳のリソースを割くことを許さなかった。

『なら、お互い充電しないとイケないわね』

「俺のバッテリーかなり昔のだから充電完了するまでしばらく時間かかると思うぞ」

『なら私もそうでしょうね。なにせ10年物とかだから。もう着いたわ、開けてくれる?』

「お前、電話しながら俺の部屋に向かったのか」

早く会いたいのは分かるが、無警戒過ぎませんか…。

『ノック聴こえないかしら?』

「ああ、見事に二重に聴こえるぞ。てか、合図の意味ねーじゃねーか……」

『仕方ないじゃない。部屋につく頃には一旦会話が終了している想定だったのよ』

「全く話の区切りどころ無かったけどな」

『そうね。でもいつものことじゃないかしら』

「雪乃と話している時は高校の時からそうだった気もするな。ほれ、今開けるからもう切るぞ」

『ええ、開けたら抱きついてもいい?』

「お前、本当に本性を隠さなくなったよな。まあでも、ぜひそうしてくれ」

俺達はそこで電話を一度切った。そしてのぞき穴から雪乃の姿をひとしきり視姦した後、ゆつくりと扉を開けた。

互いの姿を認めると雪乃が俺の唇めがけてむしゃぶりついてきた。せめてドアを閉める猶予ぐらいは与えてくれ。

彼女の白くすらつとした美麗な体を受け止めると体勢を崩さないようにしつかりと抱きとめて雪乃を貪った。同時に素早く開けた扉をぐつとこちらに引き寄せてガチャリと音が鳴ったのを確認する。

雪乃は私服に着替えていた。長袖のセーターが彼女の引き締まったボディラインを強調し、艶美な曲線を描いている。まさに男を色情魔に変えるためにあるかのような代物だ。

雪乃が俺をベッドに押しやるように詰めてくる。なすがままに弾力の上に仰向けに放たれると彼女は四つん這いになって俺の四肢を押しえつけた。

「寂しかった……」

それだけ呟くと雪乃の顔が先程とはうってかわってゆつくりと近づいてきた。

優しく唇が重なった。互いの愛を確かめるように何度もその柔らかさを楽しむ。

彼女の軽い体がのしかかってきた。柔らかな手が這うようにして肉体を弄んでいる。既に怒張しきっていた砲身にはまだ触れず乳頭を指先で焦らすようになぞらせた。

温かい快感がじんわりと広がっていくのを感じる。

自分で腰を上げて雪乃の足に肉棒を擦りつけた。しかし、雪乃はそれを拒むかのように両手で腰をベッドに押し付けた。

「まだ我慢して」

雪乃の舌が口の中に侵入してきた。うねるような動きで口内を隅々まで蹂躪される。艶めかしい粘着音に鼓膜を犯される。

「ん……ちゅ。ちゅる…れろ」

ようやく雪乃に開放されると今度は耳を甘噛された。雪乃のマシユマロのような唇の完食が今度は耳殻に伝わった。

「んぐ……うあ……」

「ふふふ……、貴方って耳が弱いよね？」

妖艶な声を囁かれる。もうそれだけで俺の愚息は際限無く硬直しきっていた。

丁寧に耳をねぶられる。なぞるように雪乃の唾液で埋め尽くされた。

「最近よく攻めるようになったよな」

「嫌かしら？」

「大歓迎だ」

「そう。なら、そのまま私に任せて」

雪乃はまた行為に集中し始めた。絶頂までには至らないものの、程よい快感が断続的に続いている。

「シャワー、浴びないと」

「ん……ちゅる……。あむ……」

そう雪乃に促すも彼女は素知らぬ顔だった。既に彼女は俺の下半身に手をかけている。

「ま、まだ洗ってないだろ……」

「良いじゃない。一回ここから出るのを見せて……」

「ぐ……うあ……」

雪乃の手が激しく上下する。俺の急所と力加減の塩梅を知り尽くした彼女の手淫は度重なる逢瀬の成果もあつて著しく卓越したものになっていた。俺にはルームライトの明かりを消すだけで精一杯だった。

「うふふ。貴方もスイッチ入っちゃったの？」

「……悪いかよ」

「そんなわけないでしょう。もつと気持ちよくなつて」

「良いのか？」

「もう何度もビクビク跳ねさせているのに今更遠慮もないでしょう？」

「そうだな……あまりにも気持ちよすぎて理性が飛んでいきそうだ……」

「良いことじゃない？」

「嗜虐心が過ぎるぞ」

上下の運動が激しくなる。爆発しそうな烈情をぐつと抑え込んで快樂の海深くへと沈んでいく。

「私って案外自分からするのも好きなのかもしれないわ」

「普段からDSだからそんなもんかとは思ってしまっけどな」

「あら、そんなつもりはないのだけれど」

「ウソつけ。でも俺に責められて狼狽してる雪乃も満更でもない表情してるぞ」

「それは、否定出来ないわね。貴方に冷たくされるとちよつと感じてしまうようになってしまってるわ」

「マジか」

「元からそういうわけではないわよ」

「俺が調教しちまったのか？」

「調教……ええ、そうね。八幡好みに躡けられたのかも」

そんな言葉を漏らす雪乃の表情はこの上なく扇情的で従属を思わせるような顔だった。支配欲を満たすにはあまりにも十分過ぎる。

「あら、そろそろ出そうなのね？」

「完全に把握されてるのな」

「先っぽが大きくなってきたから分かるのよ」

「このままだと服にかかるぞ」

「そうね。ちよつと脱ぐわね」

そう言うとき雪乃が目の前で服を脱ぎ始めた。乱暴に服をベッドに投げ出すと下着姿のまま奉仕を再開した。何度見ても艶やかだ。こんなにも見飽きない女性が他に居るだろうか。

「もう限界？」

「……出してもいいか？」

「勿論。口の中がいい？」

「汚いからそれはシャワーの後で良い」

「じゃあ体にかける？」

「雪乃の顔を見ながら出したいからこのままが良い」

「そう……。じゃあ、私も貴方の顔を見ながらしてあげる」

そう言うのと雪乃は顔を近づけてきた。こんなにも至近距離で自分の情けない顔を見られるのには抵抗があるが、気持ちよすぎてそんなことも言っていられない。

「絶頂してる時の顔を見られるのは結構恥ずかしいな」

「私はいつも貴方に見られているのだけれど」

「可愛いから別に良いだろ？」

「それを言うなら貴方が気持ち良さそうにしてる時の顔も中々可愛いわよ？」

「男の方が可愛いって言われてもなあ……」

「でも、かっこいいとは言い難いでしょ？」

「それは一番俺が良く分かっている」

「ふふふ。でも、そんなことない……」

雪乃の手が顔に伸びてくる。

「貴方はとてもかっこいいわよ……ん……」

雪乃の唇は今までにないくらいとろけそうで柔らかかった。いつまでも賞翫していたいと思えるほどに美味で胸の中に溜まっていたモヤモヤとした感情が晴れていくようだった。

「……………っきゃー！」

間欠泉のように精液が吹き出した。とめどなく溢れ出た体液は彼女の純白の手をことごとく汚した。ドクドクと流れ出る子種の余韻を雪乃が愛おしそうに眺めている。

「沢山……出たのね……」

「それだけ気持ちよかったからな」

「それはとても嬉しいわ……」

「しばらく動けなさそうだ」

「なら少し待ってからシャワーを浴びる？」

雪乃は手についた精液を丁寧に舐め取りながらベッド脇に置かれていたティッシュを何枚か抜き取った。

「おいおい、別に美味しいものでもないだろ」

「ん……れるっ……。でも、こうすると男の人は喜ぶと聞いたのだけれど」

「誰情報だ……。そういった人間も少なからず居るとは思うが、俺は逆に雪乃が心配になるからしなくても良い」

「そう、それは残念ね」

そう言いながらも雪乃は結局、手についた精液を全部舐め取っていた。「ドロドロね」という感想と共に俺にもたれかかってくる。

「……もう大丈夫だ。一度シャワーを浴びよう」

「立てる？」

「どっちの意味だ？」

「もう、流石にいくら貴方でもこんな早くはないでしょう？」

雪乃の手を掴む。立ち上がる勢いを利用して彼女がぐっと俺の体を引き寄せるとまたたく間に彼女の唇に囚われてしまった。

「ん……ちゅ、じゅる……」

「んっ……、これじゃシャワーに行けないぞ？」

「……ちゅ、ちゅ。このまま歩けばいいじゃない」

「じゅ。ちゅ、、、ちゅる……。ちゅ、ちゅ……。んむ……。れる……。……。お、

お前、中々に器用なことを要求するよな……」

俺は雪乃の体勢が崩れないように体を支えながら牛歩で洗面所へと歩みを進めた。仕事のストレスが爆発しそうなのも影響してか今までで1, 2を争うぐらいに興奮していた。

肉欲の宴が今まさに始まる。

雪乃の舌を嚙りながら俺はゆっくりと浴室のドアを開けた。

続く。

第五十五話☆

『もしもし？あ、八幡！明日帰るんだよね〜？』

「ああ、そっちは今何時だ？」

『こっちはお昼すぎだよ！丁度お昼ご飯食べ終わった感じ〜』

電話越しに聞こえる妻の声は澆刺としていた。シャワーを浴び終えてバスローブを着ながら雪乃のシャワーの終わりを待っていたところに結衣からの着信が入ったのだった。雪乃にはそれとなく着信が入ったことを伝えてから電話を受けている。

『結構長い出張だったよね〜』

「ああ、流石に疲れた。もう二度目は無いと思っていたんだけどな」

『八幡引きこもりだもんね』

「こら、自分の旦那さんを悪く言うもんじゃない」

『えへへ〜。でも私はそういうところも好きだよ〜』

「そう言っていたんだけどこれからも自分が変わる必要がないんだと再確認出来る。いつもありがとう」

『相変わらず向上心ないよね……』

「これでも成長はしているぞ？」

『まあ昔の八幡なら、絶対何かと理由つけて出張とか断ってたよね』

「出張で仕事がサボれるのなら喜んで出張に行くんだけどな」

『性根が腐ってる!?!』

「おい、別に俺そんな行動原理だけで生きているわけじゃないからな……」

『大丈夫だつて〜。それは分かっているから!』

「たまに結衣にすら疑われているんじゃないかと思う時がある」

『まあ、本当に疑っているからね』

「味方は居ないのか俺に……」

『大丈夫！たとえ、八幡がクズでも私は奥さん辞めないから!』

「なんの宣言!?!」

『選手生命ってやつだよ!』

「それを言うなら『選手宣誓』じゃないのか？急に命かけられても困るよ本当」

『うん、それだと思う！』

「いや、それしかないと思う」

『ひどい！ちよつとの間違いくらいいいじゃん！』

「ちよつとの間違いでえらい誤解を生んでしまうのが言葉つてもんなんですよ」

『おお……なんか深い』

「俺が面倒くさいこと言ったらすぐそれを言うようにしてないか？」

『え、バレた？』

「凶星だったことが何よりも悲しい」

『ちよつと〜！落ち込まないでよ〜！』

俺が結衣といつもの調子で話していると洗面室の奥の扉が開かれる音がした。おそらく電話越しの彼女には聴こえないくらいの小さな音だ。どうやら雪乃がシャワーを浴び終えて出てきたらしい。

俺は生睡を飲み込んで彼女の登場を待った。バスローブ姿の雪乃が楽しみで仕方なかったからだ。

結衣との会話のキャッチボールを繋げつつ雪乃を待った。

彼女が姿を現した。想像以上の色気をまとっていた。

雪乃はお待たせと口の動きだけで表現しながらベッドへ乗ってきた。

『……どうしたの八幡？』

電話の向こうでは結衣がおそらく怪訝な表情で俺の応答を待っている。彼女に不審感を持たせないためにも、俺は彼女との会話を続ける他無かった。

「いや、何でもない。ただ、部屋の外で音がしたから何事かと思っがちよつと息を潜めてた……っ!」

雪乃はというとバスローブ姿で俺の股間をまさぐり始めた。そして既に硬直していた男根を手にとると髪をかきあげてゆっくりとねぶり始めた。

気持ち良い。

温かい快感が浸透するように体中に染み渡っていく。俺はたった今最愛の妻と電話をしているというのに目の前ではその妻の親友に肉棒を差し出してしゃぶらせている。なんという背徳感だろうか。罪悪感には勿論苛まれている。それなのに怒張した男根はそれを糧にするかのように限界を超えて肥大化していった。

「ん……ちゅ……。あむ……。ん……」

ねつとりと愛を感じさせるような口淫に酔いしれながら妻との会話を続ける。彼女は今三浦達との休日を楽しそうに話していた。

『それでね、あたしがさ……』

気がつけばもう結衣の話題は別のものに切り替わっていた。俺は雪乃の頭を撫でながら彼女の話が終わるのを待った。

雪乃が上半身に登ってきた。きつく結んでいたバスローブの紐を緩められた。ひとしきり肉棒を舐め終わると手で再び扱き始める。フリーになった舌を使って、露出した右の乳頭を飴玉を舐めるようにちろちろと転がした。

雪乃の舌使いは先程とは違い激しさを増していた。じんわりと広がる優しい快感から痺れるような強烈な快感に支配される。声を漏らさぬよう、苦悶の表情を浮かべながらも携帯だけは離さない。手の速度も段々と早くなっていた。今にも砲身が火を噴きそうな程膨れ上がっていく。快楽に身を任せてしまいたいという欲望をなげなしの理性で懸命に上から押さえつけていた。

『ねえ、八幡は日本に帰ってきたらどこに行ってみたい?』

『そう、だなあ……。最近じゃシャワー生活だったから、ゆつくり温泉にでも浸かりたい気分だ』

『あ、それ良いね!私も久しぶりに旅館に行きたいかも。ってそっか。そっちってあんまりお風呂文化って無いんだっけ?』

『そうだな、基本シャワーだな。それで……。どこの旅館に行きたいとか希望はあるのか?』

『うーん……。じゃあそういうのは特に無いんだけど、でもどこに行くかは八幡と一緒に決めたいかなって』

「……じゃあ、日本に帰ったら……探してみるか」

『うん！明日日本屋さんに行って雑誌でも買ってこようかな！』

弾むような声で話す結衣をBGMにして雪乃の奉仕を受け続ける。雪乃は肉棒を掴んでいた手とは反対の手で乳頭を刺激した。乳首は未だに自分はそのままで開発されてはいないのだが、このペースだと近い将来にでも胸だけで相当感じてしまうような男に調教されてしまいうそだ。

「ん……まだ、終わらないの…？」

雪乃が俺にだけ聴こえるように小さな声で囁いた。雪乃は俺の耳にむしゃぶりつくどと耳殻を丁寧な舌先でなぞった。

『えへへ……八幡とお風呂……』

「くちゅ……ん、れろ……。はちまん、わらしとシャワー、浴びたのに……」

両の耳を美女の声で犯される。しかも右に目をやればバスローブが少しはだけて胸が少し露出している雪乃の淫らな姿があった。目が合うと雪乃は俺の口を啄んだ。

(そ、それだと、話が出来ないじゃねーか……)

(いやっ……。早く私を見て……)

そこから彼女は止まらなくなった。乳首を舐め、耳をしゃぶっては、肉棒を激しく扱いた。

「なあ……結衣。そろそろ……」

『え？あぁごめんね！そっちもう夜遅いんだよね。早く寝て明日起きないとだよね!』

「そうだな明日のフライトは10時だから結構早いな」

おそらく徹夜で向かうことになりそうだけど。眼の前の女王様が嫉妬に狂いそうになっているのでギリギリまで解放してもらえないだろう。横に添い寝するようにして体を密着させて息子を扱っている。携帯を持っていない俺の手を自身のバスローブの間に滑り込ませるように持っていく、胸を揉ませていた。

「ん……好き」

何度も頬にキスをされる。いつかミスして音を立てるようなキス

をしないか冷や汗をかきながら結衣との話を切り上げる方向に持っていきたかった。多少強引に思われるかもしれないが、これ以上はこちらもボロを出しかねない。

『じゃあ、また明日かな？夜に戻ってくるんだよね？』

「そうだな。夕方頃に空港に着いてそれからだから着くのは夜になると思う」

『分かった！楽しみにしてる！』

「ああ、俺もだ」

『それじゃあね！おやすみ！』

「ああおやすみ……」

通話を終えた。マイクが音を拾わなくなったのを確認すると雪乃がいやらしい音を響かせながら愚息を頬張り始めた。

「んじゅ、じゅぶ……じゅ、じゅ。……遅いわよ。ん……じゅるる。じゅぶ……んちゅ……」

「お、おい……。勢いが……。いつもより、ちよ。ペース大丈夫か？」
別段体力の多いタイプでもない雪乃がこの調子で奉仕を続けられれば間違いなくガス欠になることは目に見えている。それでも今日の彼女は何かの強壯剤でも摂取したかのように勢いの衰えを知らなかった。

口内の粘膜にとめどなく摩擦され絶頂への階段を急ピッチで登っていく。結衣との電話中にも愛撫され仕込みをされていたせいかもしれない間もなく射精してもおかしくないほどに腰が浮いてきてしまっていた。

「ん！じゅる！じゅぼじゅぼじゅぼ……じゅるる。じゅ、ちゅ、ちゅ……ちゅる。じゅーんむ……はむ……！んちゅ……じゅぼー」

「ううあ……駄目だ……雪乃……で、出る……！」

欲望に逆らえなくなった俺は雪乃の頭を乱暴に掴むとそれを持って身勝手に上下した。

「んんーむう!!んんー……じゅ、じゅ。ふう!んんんんん!!!」

焦らされ続けて溜まりに溜まった欲望のマグマが溶岩が弾けるかのように絶世の美女の口の中で破裂した。吐精した肉棒は治まるこ

とを知らず何度も子種を放っていた。その度に雪乃の体がビクビクと脈打つように跳ねて懸命に白濁とした濃厚な性液を飲み込んでいた。

「……………くう、ふっ……………う。けほ……………けほ……………」

体液を雪乃の口の中に放った時はいつも決まって雪乃は咳き込む。そうなるのであれば飲まなければよいのにと毎度のごとく言っているのだが、雪乃はそれをやめようとはしなかった。

「はあ……………ま、毎回すごい量が出るな本当に」

「けほ……………それはこっちの台詞よ……………」

「出るのだけじゃなくて毎度お前が吸い出そうとするからこっちも生氣持つてかれるんじゃないかってちよつと恐怖だからな？」

「そ、その前に私の頭を持って乱暴に腰を振ってくるのもかなりの恐怖なのだけれど……………」

「そ……………それに関してはなんの申し訳も立たない……………」

「怖いけど……………貴方が気持ち良いのなら別にいいわよ……………」

「こら、頭を撫でるんじゃない……………」

「ふふふ。絶頂した後の貴方って凄く可愛いから」

「パンさんよりもか？」

「貴方ではパンさんの足元にも及ばないわ。身の程をわきまえなさい」

「そこは絶対に譲らないんですね……………」

「比べる対象がおかしいのよ」

「唯一神みたいになってるみたいだな」

「別にそういうことではないのだけれど。私にだってパンさんと同じくらい、いえ、パンさんよりも大事な……………譲れない物が今はあるのだから」

何この可愛い女の子。思わず、心臓が飛び跳ねそうになった。

「おい、それは何だ？」

「ふふふ。何でしょうね？」

「それはもしかして今お前の目の前に居る人か？」

「今私は窓の方を向いているから目の前には人は居ないわね」

「意地悪を言うなよ……」

本気でしよげてしまう。それを見て楽しそうに微笑む彼女が見られるからトントンだけど。

「うふふ。なら、教えてあげる」

「本当か？」

「寂しくなって今私のことを背中から愛おしそうに抱きしめている人が私の大切な人よ」

「それは良かった」

「ねえ、このまま押し倒して。もう濡れているから早く挿れて……」

「今日はどうする？」

「正常位……がいいわね。顔が見たいから……貴方が動いて」

「分かった……」

「ねえ、八幡」

仰向けになった雪乃の膣口に再度固くなった肉棒をあてがっていると雪乃がそれを優しく撫でてきた。

「どうしたんだ？」

「貴方のことをとても愛しているわ……」

「俺もだ。雪乃のことを愛している」

その言葉の終わりとともに俺は雪乃の体を一気に貫いた。またたく間に上がる嬌声を聴きながら酔いしれるように俺は腰を打ち続けた。これまでの遅れを取り取り戻すかのように、彼女を求めた。空が明るくなる頃には互いの体液で汚しあったシャツだけをそこに残していた。

続く

第五十六話

眠い……。

飛行機にはまだ搭乗出来ないのだろうか。もしものことを考えて早く到着したのは良いものの流石に二回目ともなるとお土産を選ぶにも困ってしまう。アメリカ土産とかいうひとくくりな渡し方をしてしまったせいで中々前回とは異なったユニークな商品を見つけれずにいた。

「比企谷、お前凄く眠そうだな」

「ああ、訳あって徹夜してしまった」

「なるほど、飛行機の中で寝るためか？」

「……そうだな。12時間も何したら良いのか分からん」

帰りのフライトは偏西風が向かい風の為行きよりも時間がかかる。

「映画とか見ればいいのに」

「そこまで見ないんだよなあ…俺」

「そういうええ前にそんなこと言っていた気がするわ」

「まあ暇になったら一本くらいは見てみようかと思う。何かおすすめはあるか？」

手持ち無沙汰にキーホルダーやマグネットが沢山ぶら下がった回転式の商品棚とくるくると回しながら芦間を横目で見る。

「スクールア○ドルムービーは？」

「もう何回も見てる。作中の歌までアカペラで歌える」

「比企谷氏、意外とガチ勢だった件www」

「スレを建てるな…」

「誰推し？」

「お前には言わん」

「まあ予想つくから良いけど」

芦間はケタケタと笑っていた。相変わらず癩に障る。

「じゃあ安価で見る映画決めたら？」

「フライト中ネット使えねえわ」

「お金払えば使えるけど」

「経費で落ちるならそうする」

「多分自費」

「なら我慢だ」

「まあそうなるわな」

葦間は隣でオリジナルが一体なんなのかよく分からないぬいぐるみとご当地のステツカーを購入していた。スイーツケースは既に手荷物検査ゲート前で預けてしまったので買った荷物はカバンの中にしてまっていた。

「また前回と同じ物を買ってしまうことになりそうだ……」

「お、そのチョコレートか。それ結構美味しいよな。言うて俺も留学時代は親が毎回買って帰れって言って俺にラインしてた」

「そうか。これ結衣にもかなり好評だったわ」

「キャラメルだったり、マカダミアナッツだったり色々な種類のがいつペンに入っているから飽きがあんまり来ないのも高評価だな」

「あと、俺も結衣も甘いのが好きだからっていうのもある」

「女の人甘い物好きなのは分かるが、比企谷も甘い物好きなのが俺にとってはそれなりに意外」

「そうか？」

「ブラックコーヒーを好き好んで飲むタイプだろ普通は」

「あれはコーヒーではない」

「ブラックコーヒーがコーヒーじゃなかったら他のコーヒーもコーヒーじゃねえだろ……」

葦間のほうが言っていることは正論な気もするが、俺の中ではマツカンこそがコーヒーの定義なので異論は認めない。

「さて、もうすぐ時間かね……」

「そうだな。ようやくか」

「比企谷もキーホルダー売り場を眺めるだけで30分以上粘ってたからな……」

「本当に見るところがなかったんだよ……。それに今本なんか読んだら絶対に寝てしまう」

「変な意地を見せる比企谷氏」

「なんかせつかく徹夜したのにここまで来て飛行機乗る前に寝たら癪だろ?」

「まあ言ってることはよく分かる。負けた気がするんだよなあ」

「そうだ。俺は俺に勝ったんだって満足して俺は寝たい」

「面倒な男」

「お前にだけは絶対に言われたくないけどな」

「それ言った瞬間に言われると思ったわ…」

何故か飛行機に乗った瞬間に眠気がなくなってしまった。どうしてだろうか。今寝たらヤバイって時に限ってすごく眠くなるのに、いざ眠れるぞって時間になると途端に元気になる。誰かこの現象に名前をつけてくれ。俺はたった今、その名称不明の現象のせいで完全に目が覚めてしてしまっている。先程までの睡魔との戦いの果てに得られるものが至高の睡眠ではなく自我の覚醒だったとは。なんと皮肉なことか。

仕方がないので俺は今累計何回目かもう忘れてしまったが、またもやスクール○イドルの映画を見ているわけで。こっだけ見るようになってしまうと最早、歌どこか次にキャラクターが言う台詞まで暗唱出来るようになっていた。本当に何の得にもならない特技を会得した。

幸い隣の席に誰もおらず、空席を挟んで鞆間が奥に座っている。二本の通路に挟まれた真ん中の三席になるのでトイレに行く際に何の気遣いもいらぬ。おまけに足も伸ばせるので大助かりだ。

通路を挟んだ反対側には智佐吹さんがすうすうと静かな寝息を立てて寝ている。彼女はここ一ヶ月はほとんど睡眠時間が無かった。隣の席にいる島田さんも到着まで夢の中に違いない。

しかし、今更新しい映画を見る気にはならない。CAさんの色っぽい後ろ姿を見ても何も感じない。今朝まで最高の女性を抱いていたのだからそれは当然といえれば当然なのだが。

手持ち無沙汰になって物思いにふけってみる。

雪乃との不倫が始まってからどれほどの月日が経過したのだろうか。少なくとも半年以上はこうして蜜月の関係が続けている。それ

らの逢瀬のそれぞれが自分と彼女にとってかけがえのない時間になっただけだ。

次の不倫場所はどこにしようか。そんな間抜けなことを平然と考えるようになってしまっていた。色々なホテルを試してみた。勿論、お互いの知り合いが少ない場所を選ぶようにしていた。おおつぴらにデートは出来ないのも本当なら雪乃が行きたい場所に連れて行ってあげたいのだが。ここ最近専ら雪乃の家かホテルだ。大きな連休でも取ることが出来たら、二人で旅行にも行ってみたいが机上の空論だろう。でももし行けるとしたら、温泉旅館にでも行って雪乃の浴衣姿を拝みたいものだ。

CAが持っていた水の入った紙コップがたたくさん置かれたトレイを見てそれを一つもらう。

晩酌を飲むかのように水を口に含んだ。

機内のライトが消えた。急にモニターのライトが眩しく見えた。重い腰を前にやって光量を下げる。まだ起きている人はちらほらと見えるが、近い内にアイマスクをつけるのだろうか。

そういえば結衣に会うのは随分と久しぶりだ。帰ったらまずはご飯にでも連れて行こうか。そもそも雪乃とのことよりも結衣との関係を考えないあたり本当に俺の理性というものが完全に崩壊しているような気がする。こんな風になってしまったのは一体いつからなのか全く身に覚えがない。

ふと前に留美に言われたことを思い出した。

「正直、奥さんに浮気もバレてると思うんだよね……」

結衣はもう俺達の間係を知っているのだろうか。だとしたら何故…何も言わないのか。

いや、待て。そもそもその話だ。

どうして俺は雪乃と再会したんだ……？

原因となったのは勿論言うまでもない。陽乃さんだ。彼女が雪乃の会社に俺を派遣したことで今の間係が始まったと言える。だが、どうして陽乃さんは弊社にやって来たのか。勿論、彼女の広い人脈を使えば俺の勤務先を突き止めることなど造作も無いことだ。そんな

ことを言っているわけではない。何故、このタイミングであったのか。どうして俺はまた雪乃に会わなければならなかったのか。そこが分からないのだ。

雪乃に再会することが出来て勿論この上なく嬉しかった。その気持ちに偽りは無い。彼女と逢瀬を重ねるたびに自分の人生に生き甲斐と意義を感じる。

しかしこれまでの日常を振り返ると、会社に通い家に帰れば、美しい妻が出迎えてくれる。それだけでなんと幸せなことか。皆そう思うだろうが、人間とはまこと悲しい生き物で、それが当たり前になると鈍感になる。何も感じなくなってしまうのだ。それがなくなると初めて今の生活が良かったと気付かされるとよく言うだろう。

しかし、結局無くならない程度程度の存在だったということではないのだろうか。人間は得るものよりも失うものの方に存在を大きく感じる。ただそれだけのことではないのか。

……一人になるとどうしようもない考えが堂々巡りしてしまう。

早く結衣に、雪乃に会いたい。人とは誰かに会って話をしないと自我を保つことが出来ない生き物であると最近心底思う。それとも自分という人間が孤独というものに耐性がなくなってしまったのか。分からない。でも人肌が恋しくてたまらない。これは拷問に違いない。

12時間のフライトが永遠のように長く感じた。

……。

……そして俺は今どうしてこのような状況にいるのだろうか。

足の自由は効かず見慣れた天井をただ見上げるだけ。

両手も縛られており、ダブルベッドの上に生まれたままの姿で羞恥を晒している。

あれから、出張から帰ってきてどれだけ経過したっけか。2ヶ月は経過しただろうか。つい先週雪乃と不倫旅行に行つて帰ってきた

ばかりだったはず。

時は夜。場所は自宅の寝室。

俺と結衣の愛の巣だ。

いつもと変わらない光景。

違うところを挙げるとすれば俺は普段からこのような状態にはなっていないということと、彼女の様子だ。

眼の前には蠱惑的な笑みを浮かべた愛すべき妻がこれまた一糸纏わずにこちらを見下ろしていた。

「……結衣、これはどういうプレイなんだ？」

恐る恐る彼女に問いかける。これまでそれなりに夫婦の営みとして多少なりともマニアックな行為を試してきた俺達だが（勿論、公序良俗には違反しない範囲でだ）、こういった趣向はじめての試みだ。

いや、そんなわけがないだろう。何か彼女に、いや、俺達の関係に何かが生じたからに違いない。

そして、彼女は俺の質問には答えずただ笑ってこう言った。

「ねえ、ヒッキー……。……ゆきのんは元気？」

「……………」

一瞬で自分の顔から血の気が引いて行くのが分かった。

言うまでもないだろう。

これはつまりそういうことだ。

彼女は知っていたのだ。いつからなのかは分からない。しかしそこにある事実を端的にいうのであれば、最も知られてはいけない秘密を最も知られてはならない人物に知られてしまったということだった。

続く

第五十七話☆

——いつからだろう。彼の心が自分から離れてしまったのではないかと感じるようになったのは。

仕事から帰ればストレスに苛まれたであろう表情を微塵も見せずにあたしの愛を漏らさず受け止めてくれる。

見るも無残で口にするのも躊躇われるような酷い出来栄えの料理でも彼は喜んで平らげてくれた。

休みの日は必ずあたしの為に全ての時間を割いてくれた。

記念日を忘れたことはなく必ずプレゼントやサプライズを用意してくれた。

そんな夫が自慢だった。

女性人気の高かった彼の心を射止めたことがあたしの誇りだった。でもある時にあたしは疑問を抱いてしまった。

それが偽りのものではないのかと。

どうしてだろう？

あたしへの愛が薄れてしまったから？

違う。あたしのは多分愛してくれている。

彼が注げるだけの愛は全てあたしに注いでくれている。

注げるだけ。

そう。

“あたしに対して注げるだけ”の愛。

彼の持つ愛の絶対量を100としてあたしに注げる愛は一体いくつなのだろう。

あたしにはその数値が分からない。

でも100じゃないんじゃないかな。もしかしたらほんの少しなのかもしれない。あたしが思っているよりもずっと少ない愛をあたしはありつたけど勘違いしたのかもかもしれない。

あたしのいちばん大切な人は、今も会えない誰かに対してずっと捧げているんじゃないか、そんな恐怖と諦めが何度も頭をよぎった。最近の出来事じゃない。彼と一緒にあってからずっとだ。大学するとき

だって、結婚する前だって、何度も自問した。そして答えを出すのが怖くなって目をそらした。

今も彼は彼女を想っているのだろう。だとしたらひどい裏切りだ。

でもそれは彼のせいじゃない。

彼女から彼を奪ったあたしのせいだ。

全てを欲しがったあたしのせいだ。

あたしには彼を許す権利も筋合いも無い。

逆だ。

あたしが二人に許されなければならぬのだから……………。

……………。

5月14日。

彼から残業するという連絡が来た。最近はずいぶん忙しいみたい。毎日のように抜け殻になった彼をベッドの上で迎える。時には彼はそのまま泥のように眠るし、時にはあたしを何かのはげ口に使うかのように熱くあたしを抱いて精を放った。それでも彼があたしのことを思ってくれていると分かってとても嬉しいし、あたしもまだまだ女性として見られているんだという安心感もあった。

彼が仕事から戻ってきたのは夜の10時頃だった。残業にしてはそれなりに早い帰宅だった。

今日は彼にエプロンを着せてみた。裸になった彼にあたしがつけていたエプロンをかけるのは今までにない興奮があった。彼もまさか自分がされるとは思っていなかったみたいで、今までに見たこともない可愛い顔をしていた。

その後のセックスは粘着質な愛撫をされた。さっきのお返しのかなと思った。

丁寧に執拗にあたしの身体をほぐしてから挿入されたから沢山声が出ちやっとなあ。あと、今日は中に出してもらった。今までは安全な日にしたり、ゴムをつけていたりしていただけど今日はちよつと危ない日だった。だけど思いつき出してもらった。そろそろいい

よね？

でもこの幸せはいつまで続くのだろう。

隣で眠る彼を見ながらあたしはそんなことを考えてしまった。

7月2日。

昨日彼があたしのことを抱いてくれた。

いつものように激しいセックスだったが、どこか行為に集中出来ていないように見えた。

勿論、あたしの中で気持ちよくなってくれているのは伝わってきた。ビクビクして何回も濃い精子を出していた。温かくてあたしを安心させてくれる。

でもなんだろう。

いつもよりも前後の運動に力がこもっている。

あたしを抱きしめる力がちよつと強い。

何か辛いことでもあったのかな？

仕事のことは極力聞かないようにしている。彼が仕事の話を持ち出さない限りは出来る限り家の雰囲気は仕事とは切り離してあげるのが妻の役目だと思っっているから。

それでも気になっってしまう。

でも聞いてしまえば何かこれまでにあたしたちが積み上げてきたものが崩れてしまうのではないだろうか。

そんな恐怖が急に襲ってきた。

何を今更あたしは迷っているのだろう。

そんな覚悟はとつくの昔に済ませたはずなのに…。

まだ……

まだ早い。

.....

「ねえヒツキー！……。ゆきのんは元気？」

呪詛のように聴こえた。生気を失った表情で彼女の顔を見た。

彼女は今どういう気持ちなのだろうか。どんな感情で俺を見下ろしているのだろうか。

彼女は笑っている。

どうして笑みが溢れているのだろうか。俺もそれにつられて口角が吊り上がる。いや、少しでも取り繕うような表情をしなければ耐えられない。

「結衣…俺は」

「うん、大丈夫だよ」

何が大丈夫なのだろうか。妻の頭の中でどんな処理が行われているのか。それをうかがい知ることが出来そうにもなかった。

「い、っからだ……？いつから知っていたんだ？」

俺の口から漏れ出たのはそんな言葉だった。今更そんなことを聞いてどうするというのだろうか。それでもなにか取り繕うようなことを口にしなければ自分の精神がどうにかなってしまっていた。

「うーん……その質問にはまだ答えられないかなあ」

予想外の回答だった。勿論、結衣が回答してくれたことに対しても驚きだったが、それよりも俺の質問に答えることが出来ないという曖昧な表現が引っかけた。

「でもヒツキーは今そんなことを考えている余裕があるのかなあ？」

「ぐ……」

確かにその通りだ。今更そんなことを聞いても後の祭りだ。

「すまなかつた…」

「謝るんなら最初からするべきじゃないと思うんだけど？」

「返す言葉もない……」

結衣は表情一つ崩さない。感情が何一つ読み取れないことが恐怖でしかなかった。

「ゆきのんとたくさんエッチしたの？」

「……ああ」

「気持ちよかった？」

「……ああ」

「そつかあ〜……ふーん……」

結衣が愚息に触れる。否応なく固くなってしまいう甲斐性のなさを呪う。

「ねえ、出したい？」

結衣が上下に優しく動かし始める。誰よりも俺のツボを心得ている女性の手淫だ。感じないわけがない。すぐにでも果ててしまいうだ。

「もう登ってきてる……」

耳元に熱い吐息がかかる。爆発寸前の肉棒を弄ぶかのように刺激を弱めたり強くしたりして、結衣は俺の苦悶の表情を楽しんでいるかのようなうだ。

「でも駄目」

絶頂間際で結衣の手が離れてしまった。結衣は蠱惑的な顔でこちらを見下ろしながら我慢汗にまみれた右手を俺に見せつけるようにしてねっとりとなめ上げた。

「今日はお仕置きの日だからね〜」

デコピンでピンと先を弾かれる。鋭い痛みが走った。

「覚悟はしていたつもりなのに……いざとなるとどうしようもなく怖いな」

「え、もしかしてヒッキーすごい勘違いしてない？」

結衣がきよとんとした顔で俺を見た。

「あたしき、別にヒッキーのことを社会的に終わらせようとか全く考えていないからね」

そういうと結衣は言い切ると大きくなった砲身をぱっくりと啜え込んだ。

「ぐ……あう」

「んむ……ちゅ……ゆきのんのフェラは上手だった？」

尋問するかのように詰め寄ってくる。やはり結衣のフェラは誰よりも気持ちが良い。

「いや…結衣のが一番良い…」

「あ、ゆきのんにフェラされたこと認めるんだね？はむ……」

「ぐ……いや、ま……!あぐ!!」

「もう……妬いちやうなあ……んちゆ。じゆる。ん……。あたしだけが唾えていると思ってたのに……」

「待っ!結衣……!」

「ふふふ、いひそうれしよ?らひたいの??」

「もう出そうだ……」

「えへへ……だめだよ」

結衣は直ぐに口を離れた。彼女の唾液に浸された肉棒がてらてらと怪しげな光を放ちつつ冷たくなった室内の空気に晒される。ひんやりとした感覚に固くなった息子や袋が萎縮していきそうだったが、それを許さないと言わんばかりに妻が執拗に刺激を続ける。硬直を失いかけると手で扱き上げて取り戻させる。それ以上のことはしない。そんなやり取りを永遠と続けられた。

幾度となく精液が盛り上がりは在るべきところに帰っていく。ストローで飲み物を吸っては飲まずにカップに戻す。子供の頃にやった遊びを結衣は俺の男根で飽きもせずただ黙って繰り返していた。

「ゆきのん以外の女の人はしたの?」

「そ…それは、ない」

「そっか……」

結衣は手を上下に動かしながら考え込むようにもう片方の手を顎に添えた。

「あたしき、あの日以来ゆきのんに会ってないんだよね」

「俺もそうだった……」

「すっごい美人になってるでしょ?」

「そうだな……」

「だらうなあ。ヒッキー性欲のお化けだから我慢できないよね」

「いゝ……………」

結衣に玉袋をぎゅっと握られた。淡い快感をしばらく与え続けられてからの鈍痛は男なら悲鳴を上げて仕方がない。

「浮気……したんだね」

ひとしきり俺で遊んだ後、彼女が確かめるかのようにこちらを見た。その顔は何の感情も見取れることは無い。ただ、無関心に事実を確認するかのように用意された顔だった。

「……………ああ」

答えだけを返す。何を言っても言い訳にしかない。理由や後悔を今の彼女に伝えたところで何も変わらないとさえ思えてしまうほどに彼女の目は虚ろに見えた。

「そっか〜。やっぱりそうなるよね〜」

彼女は底抜けに明るい声で屈託のない笑顔をあらわにした。

かたや俺はというと狐につままれたかのような顔をしている。当然だ。俺は今のこの状況を全く理解できていない。

「うん、まあ仕方ないか」

「……………え?」

「ねえ、ヒツキー。ちょっと待っててね」

そう言うと結衣はおもむろに裸のままと向かって行った。扉の開かれる音がする。おいおい、そのまま妻が変質者として近所に出回るのは自分が不倫をしたという事実を噂されるよりもキツイものがあるぞ。

しかし、俺の心配は杞憂に終わった。間もなく彼女は寝室に戻ってきた。

——最悪のゲストを連れて。

「……………な!？」

俺の驚く様子を見て、結衣は怪しく微笑んでいる。

いや、この状況で冷静になることが出来る人が居たら教えてくれ
……………。

「……………ひ、比企谷くん……………」

何故なら、目の前に俺の愛人：雪ノ下雪乃がいるのだから……………。

続く。

第五十八話☆

「結衣……どういふつもりだ？」

今の状況に頭がついていかない。どうして結衣はここに彼女を呼び寄せたのだろうか。

「ゆ、由比ヶ浜さん。こ、これは一体……？」

雪乃も不倫が結衣にバレてしまった事実よりも現状把握の方に意識が向いている。まあ家に入ろうとしたら不倫相手の妻が全裸で出てきて、寝室に案内されたと思ったら、愛人が全裸でベッドにくくりつけられてるんだから仕方ない。いや、本当にどんな状況これか。

文字通り雪乃は呆然とその場に立ち尽くしている。その後ろから悠然と結衣が歩み寄った。

「本当に綺麗になったよね、ゆきのん……」

結衣は愛おしそうに雪乃の頬を撫でる。その光景を見て得も言えぬ恐怖が背筋を走った。雪乃も得体のしれない化け物を目の当たりにしているかのようにその場を動かない。早く手を離してほしいと思いつつも抵抗が出来ないのだろう。蛇に睨まれた蛙よりもひ弱に見える。

「ご、ごめん……な、さい」

両手で顔を覆う。

「ううん、謝るのはあたしの方だよ……」

結衣は柔らかな笑顔を見せた。そして優しく雪乃とおでこを合わせる。

すると、雪乃はつぶやくように謝罪の言葉を永遠と紡ぎ始めた。

雪乃は今にも泣きそうな顔をしていた。後悔が湧いてきているのだろうか。

「ごめんなさい……。それでも……私は比企谷くんと一緒に居たかった……」

心の内を漏らす。元来、雪乃は脆い。そこだけは時間が経つても変わらないどころか、さらに雪乃は一人では自分を支えることすら出来ない。

「うん、分かっている。ゆきのんはヒッキーが大好きだもんね」

結衣がそつと雪乃から離れる。雪乃の額から汗の粒が流れ落ちた。

固唾を呑んでその場を見守る。結衣の一挙手一投足が破滅の足音のように思えて仕方がなかった。

「だから、ね…」

俺は彼女の表情に一瞬笑みが浮かんでいたのを見逃さなかった。

「だからこそ、ちょっといじめたくなっちゃう…♡」

結衣は怪しく笑うと雪乃の手首に手錠の片方をかけた。

そして素早くもう片方の手錠の輪をベッドの上方に取り付ける。

「え……う？」

職人技の如くあれよあれよという間に自由を奪われた雪乃はただ呆然とするだけだった。

「ゆ、、由比ヶ浜さん……う？」

俺の顔の横でへたりと座り込む雪乃が目の前に見える。結衣は満足したように再び俺の上にまたがるとまた俺の硬直を取り戻させるために手を動かした。

「よいしょっと。もう十分固くなってるよね？」

「おい、結衣。まさか…」

雪乃も察したのか顔色が段々と青ざめていく。結衣は雪乃を見てニヤリと笑うと先端を自身の蜜壺の入り口へとあてがった。

「それじゃあゆきのん。ちゃんと見ててね♡」

刹那、生温かい感触と共に妻の嬌声と愛人の息を呑む音が同時に鼓膜に押し寄せた。

「あ……♡はあ……ゆきのん……、ゆきのんの前で八幡としちやつてる……♡」

結衣が激しく腰を振る。怒張した肉棒を丸呑みにして縦横無尽に蜜壺の肉壁で愛撫した。

恍惚とした表情で快樂を貪る妻の顔は旦那である俺ですら見たことも無いような耽溺ぶりだった。

リズムよく刻まれる交配の接触音。荒い息遣いが寝室に響いた。

こんなことで感じたくはない。それなのに俺の愚息はみるみるうちに硬さを増していき、子種を今にも吐き出さんと脈動を繰り返している。

「あ……ひ、比企谷……くん……」

雪乃の顔が悲痛に歪んでいった。混沌とした感情が渦巻いているに違いない。親友を裏切ってしまった後悔、愛する男性を目の前で他の女性に抱かれる苦悶、他人の性行為を目の前で繰り広げられるこの異常な光景に心穏やかでいられるはずもない。それなのに彼女は俺達の行為から片時も目を離さなかった。

「ゆきのんはヒッキーの上に乗るのが好きなの？」

結衣が見せつけるように接合部を広げて雪乃の前に淫らな姿を晒した。

雪乃はまじまじとそれを見つめる。目からは大粒の涙が溢れていた。

「あれ……？ゆきのん、どうして泣いているの？」

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

「別に謝らなくてもいいんだよ？それにゆきのん、顔赤くなってる……興奮しちゃってるの？」

「そ、そんなことは……」

唐突に結衣の手が雪乃の恥丘にふれる。

「ああ……！」

「ほら、濡れてる……」

「い、いや……八幡、見ないで……」

「ふーん……八幡かあ」

「あ、いや、ちが、んん!!」

「妬いちやうなあ…そう呼んでるのは私だけだと思ってたのに……」

結衣は器用に身体の向きを180度入れ替えると近くの引き出しに手を伸ばした。その中には夫婦の営みで使用される道具が入っている場所だった。

「ゆきのんさ、これ使う？」

結衣が取り出したのは振動するあの器具だった。器用にまぐわりながら手に持った道具を雪乃の前に見せつける。

「そ、それって……」

見たことがないといった様子で雪乃がそれをじっと見た。

「あれ？もしかして使うの初めて？」

結衣がこちらを見る。

「ヒツキー、ゆきのんには乱暴しなかったんだ？」

「な、なんのことだよ……うー!」

「ふふ。イキそうなの我慢して強がっちゃうヒツキーも可愛い♡」

駄目だ。主導権を握られているこの状態ではなんの抵抗も出来ない。

「はい、ゆきのん」

雪乃は結衣からそれを受け取った。

「こ、これを、どうしたら……?」

「うーんとね、こう使うんだよ」

結衣はスイツチを入れると振動を開始したその先端を雪乃の秘所にそっと押し当てた。

「ああ!んんんんん!」

雪乃の白い身体が大きく跳ね上がった。透き通る嬌声と共に彼女の美しい肢体が美麗な曲線を描いて快楽を享受した。

「ああ!な、なに……これ……んんんんん!」

「可愛い……ゆきのんってこんな声で啼くんだ」

俺は未知の体験に対する動揺と強烈な快感がない混ぜになって目の焦点が合わなくなっていた。

「ああうう……くう、ああ!!」

細い身体を快感が駆け巡っている。雪乃が助けを求めて俺を見ている。程なくして近くにあった俺の左腕にしがみついた。

悶える雪乃を見て同じようもないくらい興奮している自分がある。

「ああ、ああああんんん！ひ…はちまん……」

「ふーん…また『八幡』かあ……」

「ひ…ご…ごめ、ああああんんん！」

「だから、謝らなくてもいいのに。…ヒツキーごめんね。ちよつと抜くよ」

そう言うとき結衣は俺の上からおもむろに降りると雪乃の秘所に顔を近づけた。ぐしよぐしよに濡れそぼった硬直が取り残された。

「脱がすよ、ゆきのん」

結衣の手が雪乃のショーツに手をかける。もう雪乃には抵抗する力は残されていない。彼女の下着は結衣の手によってあつという間に取り去られた。

「ゆきのん、もうぐつしよりだね」

「いや、見ないで」

「舐めてもいい？」

「え、いや。そんな、あああ！」

雪乃の反応を待たずして結衣が彼女の蜜壺に口をつけた。刹那、雪乃のから溢れた愛液を厭らしく音を立ててすすり始めた。それは俺に見せつけるかのように、聴かせるかのように大きく、淫猥な粘着音だった。

「じゅるる、じゅ。ぴちゅ、ちゅ。ちゅるる。じゅるる……。ぴちゅ…くちゅ…」

「ああ……あ、う……あああ……」

たおやかな雪乃の身体が美しい弧を描いて快樂の波に飲まれていく様はこんなこと言ってしまうと不謹慎に取られてしまうだろうが、芸術と評する他ないと言えるほどに扇情的で欲望を煽られる。同性の親友に身体を解され、開発されていく未知の快感に動揺しながらも、女性の悦びの新たな快感を求めて深く堕ちていくのが雪乃の表情を見てもよく分かった。

「は、はちまん……」

雪乃が結衣に陵辱されながらしきりに俺を求める。異常とも言える光景に肉棒がはち切れんばかりの肉欲を包括していた。

「ねえ、ゆきのん。ゆきのんも八幡としたいの？」

それを雪乃に聞くのは酷だろう。だが彼女は抗うことが出来ない。

雪乃はただ黙って頷いた。

結衣は一瞬表情を暗く落とすと再び柔らかな笑顔で雪乃を見た。

「いいよ」

「……え？」

「いいよ、八幡としても」

俺も雪乃も狐につままれたような表情になる。

どういうことだ？

俺は妻が発した言葉の真意が理解できなかった。

結衣は雪乃を受け入れた……？

俺と雪乃の蜜月の関係に納得したのか？

いや、納得するはずがない。

俺は夫として許されざる行為をしたのだ。それなのにどうしてその相手を許すような言動をこの場で言えるのだろうか。

「由比ヶ浜さん……それって……」

未だ整っていない乱れた息を吐きながら雪乃は狐につままれたような表情で結衣をじっと見つめる。結衣はその視線を嫌がったのかただ黙って雪乃と俺を拘束していた手錠の鍵を解いた。

「ごめんね、ゆきのん……」

結衣の口からこぼれ出たのは懺悔の言葉だった。

誰もが口を開けない静寂の中、ようやく結衣が重い口を開く。

「あたしき……分かってたんだ。3人で一緒になんてあの時のあたし達じゃ無理だった」

結衣の目尻から涙があふれる。泣いているのか。彼女は。

「ずるいよね……。ゆきのん優しいから……。それを利用しちゃった」

結衣がタオルを持って雪乃の肩にかける。

雪乃は目の前で起きている光景にただただ衝撃を隠せずにいた。

「あたしね、本当はゆきのんに帰ってきてほしいんだ」

「それって……」

「最初はね。八幡とゆきのんが会うようになってるって気づいた時はすごく悲しかった。でもね、それよりもき、ゆきのんが戻ってきてくれたことが何よりも嬉しかった。たとえばそれがどんな形であつたとしても」

それが全てだったと彼女が目で語っていた。慈愛に満ちた表情で雪乃を見つめている。

比企谷、いや、由比ヶ浜結衣にとって親友の存在は何よりも代えがたい繋がりだった。

たとえばそれが最愛の人物の裏切りを代償にしたとしても、心の底から欲しかった彼女の本物とでもいうのか。

「由比ヶ浜さん……」

雪乃はどうしたらいいかわからないと言った様子だ。自分が責められると思っていたのにも関わらず謝罪をされ、自分が必要だと求められるとは思ってもいなかったのだから。

「ゆきのんさ、八幡としたい……?」

「……え?」

「えーとね、その、ヒッキーと今エッチしたいのかなって……」

雪乃は俺の方を一瞬見ると再び結衣に視線を戻した。

「そ、それは。もう、許されることではないでしょう?」

「も。そういう世間一般の常識みたいなことを聞きたいわけじゃないんだけどなあ」

結衣が雪乃の秘所をかき回すように手を動かした。

「ああ!で、でも……んん!」

「でもさ、〃許されるようなことじゃない〃って言い方してる時点でさ、もう答え言ってるようなものじゃん。ゆきのんのそういうところって本当好き」

「んんん!?んむ!」

目の前で起こった光景を理解するのに時間を要した。心の整理整頓をするために、見たままの状況を頭の中で反芻してみる。

「んちゅ……ちゅる……んう……ゆひのん……」

「あ……ひゃん……んちゅ……ゆひ……が……んむ……！」

結衣が雪乃とキスしていた。それは場違いな嫉妬を抱いてしまうぐらいに扇情的で情熱的な接吻だった。まさに姦淫と放蕩に溺れきった美女二人の退廃の一枚絵だった。

雪乃は抵抗を見せつつも、抗いきれる程の力も感情も義理も何一つ残されていない。結衣の思惑通りなのだろう。彼女が拒まないことをしっけてわざと確認するように。結衣の嗜虐心が暴走している。俺に対してもそのように攻めに回ることが偶にあった。舌と舌が淫猥に混ざり合う音が響き渡る。聴きたくないのに聴き入ってしまう。目をそらしたくなるのに目がそらせない。それどこか男の象徴が屹立すらしてしまっていた。

結衣はそれを見ていじらしく笑っている。

しばらくして結衣は雪乃を解放した。雪乃は電池が切れたロボットのようそのままぐったりと脱力した。俺のすぐ隣で息を乱している。彼女の汗でぐしょぐしょになったベッドのシーツが純白を失っていた。

彼女と目が合った。焦点の合わない虚ろな目で必死に俺を探し求めている。俺はすぐ目の前にいるというのに。一人取り残されたと勘違いしているかのように寂しそうな切ない目で。そんな彼女が愛おしくなっていけないと分かっているながらも手を伸ばした。結衣はただそれをじっと見つめていた。

ようやく雪乃に触れる。彼女は一瞬戸惑ったような表情を見せながらも触れた手が俺のものだと分かると理解した途端愛おしそうに、俺の手を握った。

「ごめんなさい……八幡……」

「どうして雪乃が謝るんだよ……」

悪いのは俺なのに。上手く出来なかった……いや、もつとずつと前にお前を選ぶことが出来なかった俺が悪いのに。こんなにも手遅れな選択をした俺が何よりも悪なのに。

雪乃はゆつくりと身体を起こして、困惑した表情で結衣を見た。

「由比ヶ浜さん？」

「ゆきのんはさ、どうしたい？」

「ど、どうって……」

「私はゆきのんが八幡を好きなら、諦めきれないのなら、それでも良いよ。」

「え……？」

「八幡と今の関係が続けても良いよ？」

「それは、そんなの、だめ……だめに決まってる……」

結衣の言っていることはあまりにもこの国で育った人間の倫理観とはかけ離れているものだった。勿論、それが可能な国や地域があることは知っている。だが、それは彼女……いや彼女達にとって本当に最善の選択と言えるのか俺には分からなかった。いや、そんなまともな思考を働かせる事ができていればこんなことにはなっていないはずなのだから……。

「あたしはさ。最初から分かってたんだ。あの時、ゆきのんが私のお願いを受け入れてくれた時からさ。そして、いつかはゆきのんも八幡も皆離れていっちゃうって……。でもさ、あたしってずるいんだ。全部欲しくなっちゃうんだよ。何もかも大切だったから。捨てる順番なんて、決められなかったから。ううん、これも違うかな？」

「違う……違うの！由比ヶ浜さん。私が、私が頑張れなかったから……」
「違わないよ。だってさ、本当はゆきのんの願いを叶えることがさ……ゆきのんとヒツキーにとって一番正しかったんだよ……。私の願いは、間違ってたんだよ」

「どうして……そんなことを今になって言うの!？」

「あたしは捨てられなかったんじゃない。捨てるんだよ。ゆきのんを」

「~~~~~っ!」

結衣は止まらなかつた。どこまでも残酷な刃で彼女にとって最も大切な友人を容赦なく傷つける。

「ヒツキーとゆきのんが”同じ”願いだっただよ。でも、あたしが……あたしだけが……二人とちよつとだけ”違う”願いだっただよ

…」

「そんなの、私も分かった。でも貴方のことも凄く大切だったから……だから……」

「うん。だから利用した」

「………っ」

「ゆきのんは優しいから。あたしと違って、本当に優しい人だから、あたしの憧れだったから……。どうしても譲れなかった」

「私だって、譲りたくなかった」

「そうだね。だから今、こうして奪いに来たんだよね？」

「そ、そう言ったら、返してくれるの？」

「ううん。渡さないよ。だってヒツキーはあたしのもものだから」

「………そう」

雪乃は今度こそ諦めたかのように下を向いてしまった。その表情はあまりにも悲痛で見えいらなかった。

「あたしは彼のことを絶対に諦めない。どんな事があっても渡さない」

「ええ。分かってるわ……」

「分かかってないよ。やっぱりゆきのん全然分かかってない」

結衣が頭を振る。

「だってさ………」

そう言うと結衣は雪乃の両手を自分の両手でそっと包み込んだ。

「あたしはゆきのんのこと諦めるつもりないから」

「え？」

「………結衣？」

「やっぱりさ、三人一緒に居たいよ……。どんなに歪んでも、それが叶わないことだとしても、三人でいる未来が良い。あたしとゆきのん……。二人共が八幡と結婚するでも良い。あたしとヒツキーが離婚して事実婚の状態になって、三人で住むことになっても良い。それもダメなら、三人で別々に住んで、いつでも皆で会えるような関係性が良い」

それは久しぶりを見る彼女の本気の涙だった。とめどない流れではない。ただ、静かに、うつろうかのようにそっと溢れ出る。俺も雪

乃も目が離せなかった。

「…………だめ…………かな…………？あたしがいちや…………だめ…………かな？」

「そ、そんなこと。そんなわけない…………！居てはいけないのは…私、でしよ…………？」

「えへへ。やっぱり、ゆきのんは優しいよね…………」

結衣が優しく雪乃を抱きしめた。雪乃は彼女の背中に手を回そうとするも躊躇って抱きしめ返すことが出来ない。

「大丈夫。今答える必要はないよ…………。あたし、待つよ。だから、急がなくて良い。ちゃんと待つから…………。これがあたしに出来る償いだと思ってるから」

こんなものは決して贖罪などではない。彼女は、由比ヶ浜結衣は一生をかけて追い求めた理想を、偽物を守ることを誓おうとしている。だけどそれを指摘することの出来る筋合いや権利なんて俺も雪乃も持ち合わせていない。

糾弾される方がよっぽど痛くなかった。結衣は全てを認めた上でそれでも包み込もうとしている。俺たちの痛みも何もかもを一人で引き受けようとしている。そんな事が正しいなんてあるはずがない。絶対に間違っている。彼女が罪の意識を抱えるいわれなんて何一つ無い。

なのに…………。

「……………」

「……………」

俺も雪乃も、揺れてしまっている。心のどこかで少しばかりでもそんな未来を描いてしまいかけていることが、何よりも彼女のことを傷つけている。

「ごめんね。ヒッキー、ゆきのん…」

返事のない謝罪が静かな寝室に木霊した。もう破滅の足音はすぐそこまで来ているのだと予感した。

(第4部完)

第五部

第五十九話

Interlude—————。

彼女は戻ってきてくれるだろうか…。

あたしの求めるおとぎ話は完成されるだろうか。

幸せな最後は訪れてくれるのだろうか。

作り笑いはもうしたくない…。

彼女のためじゃない、あたしのために欲しいんだ…。

あたしのための彼女の樂園が…。

そのためならあたしはどこまでも自分に嘘をつける。どこまでも偽物を演じることが出来る。

そのためなら、どんな犠牲を払ったって構わない。

—Side Hachiman—

——あれから4ヶ月が経過した。

自宅の寝室で3人で会ったあの時から、ほとんど何も変わっていない。

今日に至るまでずっと抜け殻のような生活を送っていた。

結衣は変わらぬ愛情を俺に注ぎ続け、理想の妻として家にあり続けてくれている。

雪乃とは会っていないどころか連絡すらも取らなくなってしまう。最後に彼女が口にした『しばらく…一人になる時間を下さい…』という一言にあらゆる意味が込められていた。それを聞いた結衣はただそっと頷いただけだった。俺も連絡を取りたいという気持ちがあつたが、携帯の連絡先で彼女の番号を見つめる度に今連絡を入れることは逆効果だと自分に言い聞かせた。

会社の様子はあいも変わらず、喧騒としている。納期に追われる上司、資料をまとめ終わらない同僚を横目に、ただひたすらに自分に与

えられた責務を全うするだけの機関として、ただそこに存在するだけだった。まさに社会の歯車。立派な一社会人、組織の人間として適応出来た姿とも言える。芦間は俺の並々ならぬ様子の変化に少なからず事情を汲み取ったのか、敢えてこれ迄と同じ距離感で話しかけてきた。普段ちよつかいをかけてくる彼らを知っている俺からしてみれば別人にすり替わったような印象すら覚えた。とはいえそれがありがたいことであるのは間違いない。

智佐吹さんと玉木さんも変わらない態度で話しかけてくれる。最近はやけにスキンシップが増えたような気もするが、それにどぎまぎするほど自分の心に余裕が無くなっていった。それなのに、本来なら興味をなくしてしまうような扱いを受けたはずの彼女たちのアプローチが日に日に激しくなっている。そのせいで何度も色香に惑わされそうになりかけた……。わざとらしく目を覗き込んできたり、露骨にこちらに首元を見せてきたり。こんな状況だと言うのに目がそちらに向いてしまう自分。そのせいで彼女たちの拍車がかかっている。

あれだけの事が起きたのにそれでも自分の欲望が目を出そうとしているのが恐ろしい。性欲の抑止力になっていたのは彼女達の、雪乃と結衣のせつなげな表情だった。

俺は未だに自分の中で答えを出すことが出来ていない。常識で考えて、その答えが正解であると自分が納得出来て、全ての人間が間違いないと保証してくれたらどんなに楽なことか。だが、現実には自分が納得できる答えもそれを保証してくれる人物も存在しない。そんな都合の良いものが存在していたら、世界平和なんてものはとうの昔に達成されている。結局ただ意味もなく時間の解決という望み薄な逃げ道に逃げ込むだけの毎日を過ごすだけ。このままではいけないと分かっているのに、霧が晴れないどころか、ますます深くなる。もう俺には自分一人で何とか出来るというどこから湧いたのかわからない自信も、自分を導いてくれるカツコ良くて憧れだった恩師もいない。

幸い、今は繁忙期だった。お陰様で仕事申だけは何も考えずに、仕事に打ち込むだけでその場をやり過ごすことが出来る。俺の中に踏

み込もうとする周りの人間からの干渉から逃げる事が出来る。

「……………」

今日も残業だな。というか残業じゃない日が珍しい。働かずして食べるご飯の味というのを久しく味わっていない。偶にはそんな休日をごしてみたいがそんな日が来る日の目処など全く立たないのが現状だ。

「……………んばいー!」

もうすぐ昼休憩の時間になる。今日は日替わり定食がトルコライスの日だったはずだった。サラダについてくるトマトが邪魔で仕方ないが、それを差し引いても頼みたくなるメニューだ。あの赤い悪魔は甘んじて受け入れてやろう。八幡様の寛大な心あってこそだ。全てのトマトは俺にへタを地につけて感謝してほしい。

「ちよつとー先輩!ちゃんと聞いてますかあ〜!」

「ん?」

横を見ると亜麻色の髪を一つにまとめ上げたあざとい後輩の姿があった。何故かは知らないがとてつもなく不機嫌そうな顔でこちらを睨んでいる。初めて彼女に会った高校の時よりも髪がずっと長くなっているのでもとめるのが大変だろうと思う。

「ん?どうした一色?」

「その一言で“何も聞いていませんでした”という自白頂きました、ありがとうございます」

「本当にどうしたんだ?俺を振ったわけじゃないのにお前がお辞儀をするなんてらしくないぞ?」

「……………それ真面目に返したほうが良いですか?」

「…すみませんでした」

「なんでそれを最初から言えないのかなあ……………先輩って人は」

いろはすが頭を抱えていた。それよりも君みたいな会社の中でもトップクラスの人気を誇っている女性が一人の男の机でそんなプライベートな態度取るのをすぐに辞めようね?ほら、周りの男達から殺気が飛んできてるから。念を覚えて無かったら洗礼受けちゃつてるやつだよこれ?

「まあ別に良いですけど。それよりも先輩。一緒にご飯行きましょ？」

「あれ？もうそんな時間か」

時計を見ると確かに昼休憩開始から既に5分が経過してしまっていた。なんと勿体ない。休憩終了が空氣的に延長認められない雰囲気になるから早めにちゃんと入らないと損してしまうんだよなあ。

机の上を軽く片付けて先に歩いていった一色に追いつく。

「それで、どうしてさっきは俺の机に来たんだ？飯はいつものことだし、他にも用事があつたんだろ？」

「話聞いてないのか、理解する気がないのか、敢えてわたしに意地悪してるのか、脈がないのかは深くは聞かないですけど、わたしにも限度っていう物がありますからね？そっちがその態度なら今ここで思いつきり腕絡めてくつつきながら名前呼びしても良いんですよ？」

「いろはすくお昼は何食べたいく？おじさんおごっちゃうぞく？」

「は？キモッ」

「ちよつと？マジで傷つく反応止めてね。いや、俺が調子乗ってたのが悪かったのが大半だとは思うけどさ」

経験上分かる。これは割と本気で一色が怒っている時の態度だった。なんとかして宥めないと後々理不尽な要求をされかねない。

「そう思うんなら、ちゃんと反省して下さい。あと、今日は生姜焼き定食をお願いします」

「奢るのは前提なのかよ……」

生姜焼き定食か。俺もそれにしよう。

「あと先輩、今日の夜空けといて下さい。久しぶりに飲みに行きましよう、勿論先輩のおごりで」

「い、いろはす。もしかしなくても滅茶苦茶怒ってる？」

「いいえ、全然。これっぽっちも。あ、お店はわたしが決めて良いですか？」

コレもうだめなやつやん。ハチマン賢いからわかる。ダメなやつやん。あとお店絶対高いとこやん。

「……悪かった」

「何に對してですか？」

「その……だな……」

俺はそこで立ち止まって一色をじつと見た。

「ちよつと相談したいことがある……」

「……あの、それ全く答えになつていないと思うんですけど？」

一色に思いつきりジト目で睨まれた。

「悪い……」

「……はあ。まあ良いですよ」

それだけで一色なら全て伝わってしまう。

しばらくして可愛い後輩は振り返ってあざとい笑顔を見せた。

「本当にしようがない人ですね♪先輩にはわたしが居ないとダメなんですから♡」

「……結衣に連絡しておく」

「はい☆よろしくおねがいしますね先輩！」

一色は腕を絡めてきた。仕方がないので人目につくところの前までは大人しくしておく。こら、頭を擦り付けるのはやめなさい。香水とかシャンプーの匂いとか付いちやつて俺がやばいことになるから。

いつもなら鬱陶しく感じてしまう彼女の笑みが今日ばかりは天使の微笑みのようにさえ感じてしまう。それくらい今の俺にとって一色いろはという存在はとてつもなく大きくなっていた。

それが悪魔との契約になるとも知らずに……。

彼女の描いたシナリオ通りだったとも知らずに……。

続く

第六十話

「——それにしても、先輩とこうして二人で飲むのって随分と久しぶりじゃないですか？」

仄暗いカウンターの上に置かれたソルティドッグをくるくると回しながら、一色は流し目でこちらを見た。仕事場にいる時にしているまとめ髪は既に下ろしており、昔よりもずっと長くなった亜麻色の髪を怪しく靡かせている。バーの店員や他の男客達が揃って思わず二度見してしまうほどの妖艶さだった。そんな視線や男たちの『一緒に飲みませんか？』アピールに見向きもせず一色はこちらから目を離さない。

「言われてみれば…確かにそうかもな…」

そう言いながら俺は、カルーアミルクを少しばかり口に含んだ。

「最後に飲んだのって先輩が海外の長期出張から帰ってきて直ぐの頃とかだった気がします。そう考えたら、先輩はわたしのことをあまりにも放置しすぎだと思いませんか？かれこれ1クール以上ほったらかしですよ?」

「それについては申し訳ないと思ってる…。だからこうして時間を作っているわけで」

その言葉を聞いて一色は気色ばんだ。

「あのですね、わたしに誘われたから時間を作ったなんて、ケアでもなんでもないんですけど?むしろ印象超最悪です。先輩から誘ってくれない限り、マイナスであることには変わりないですよ?」

「う…」

それはごもつともだ。だからといって今更一色を誘うなんてどうしたら良いのかわからないし、どう誘えば良いのかわから…

「あの、わたし、先輩が誘ってくれるんだったら、たとえばその日に他の予定が入ってたとしても無理矢理に時間作りますよ?それぐらいガードなんてあってないようなものですよ?」

当たり前のように思考を先読みしないでほしい。バツが悪くなつてもう一度カルーアミルクを一口飲んだ。

「そう言われてもなあ。いつもお前の方から誘ってくれてたからだな…」

「それは先輩が一切誘わないからじゃないですか。正直大学の頃から一度でも先輩の方から声かけてくれたらなあって期待してたのに今まで綺麗サツパリ一度たりとも無いなんて…。こんなクソ野郎に惚れたと思うと自分が情けないですよ」

「酷い言われようだが、正鵠を射ているので返しのしようがない。

「おい、一気飲みするなよ…。いくら飲めるとはいつても、体に悪いだろう?」

「このくらいで体壊すなら、今頃わたしは先輩に女として見てもらえないストレスで100回ぐらい胃潰瘍で倒れてる自信ありますけど」

「あ、いや…。それは…。し、仕方ないだろ…」

「そうですね。先輩は結婚してますし。〃わたし〃なんかじや物足りないですよ?あ、マスター、スクリュードライバーお願いします☆」

「物騒な名前の酒を頼むなよ、背筋凍るんですけど」

「先輩も2杯目飲みましょ?」

「俺はカルーアミルク半分以上残ってる。まだ大丈夫だ…:つておい」

「ぶはっ…:めっちゃ甘いですね…」

俺からコップを取り上げて一気飲みしやがった。しかもわざと俺が口をつけたところに飲み口をしっかりと合わせてから見せつけるように。

「じゃあマスター。このスケコマシにスレッジハンマーをお願いします☆」

「やめて。そんなの飲んだらハチマン死んじゃう」

それ確か、度数かなり高かったはず。いや、酒豪からしたらそうでもないのかもしれないけど俺からしたらヤバイやつ。

「冗談ですよ安心して下さい。ごめんなさい、マスター。さっきのは無しで。それで、この女たらしにはレッドアイで」

「お前、俺がトマト嫌いなもの知っててそれ頼んだな…:あと一々バリエーション変えて俺をディスらないで下さい。これでも結構傷つく

んだぞ」

「それを言うなら先輩がわたしにつけた傷の方が何万倍もあるのに、それについてはどうお考えですか？おかげで傷物なんですよ？あと、レッドアイはわたしが口移しで飲ませてあげますから、それなら飲めますよね？」

「いや、余計に飲めなくなるわ」

「むう……」

「頬を膨らませても変更は無しだ」

「ケチ。減るもんじゃないのに」

「俺の中の理性とか確実に減るだろ」

「それはもう無くしちゃって結構です」

「帰りたい……」

こんな会話を目の前で聴いてるマスターのことを思うと俺は恥ずかしくて一刻も早くここから立ち去りたい。一色に店を選ばせるんじゃないかった。

「とうかさっきのわたしの発言、後半部分しか答えてないじゃないですか。前半の答えはどうしたんですか？」

「げ、めざといな、ついでにあざとい」

「はっ..」

「ごめんなさい、反省しています。……ていうかお前の告白はもう何回も断ってるだろ。その回数以上に俺は高校時代にお前に振られてたような気がするが」

そう言うで一色は目を丸くした。刹那、悲痛に歪む表情でこちらを睨む。

「冗談と本気を一緒にしないで下さい……。……そ、そうやって逃げられると……。ほ……。本当に泣きそうに……。なります……」

「あ、いや……。あ……。あの、だな」

一色がマジで泣きそうな表情になっていたので流石にまずい。だからといって、今の彼女に優しくしてしまえば余計に彼女を傷つけるだけじゃないのか。いつまでもこうして思わせぶりの態度を取り続けた事が彼女にとって重荷になっていたはずなのに。

「……先輩。躊躇わないで下さい……。そんな優しさ見せられると……余計に傷ついて、先輩の事が好きで好きでたまらなくなります……」

「あ、その……だから……」

ど、どうしよう。凄く可愛い。いや、違う違う。一色みたいな見た目超可愛い女の子泣かせたとなると自分の中の罪悪感は何論、周りからの冷やかな目に耐えられる自信がない。だからといって、妻がいる俺が別の女性に優しくするのも……。いや、慰めるくらいなら大丈夫だとは思うけど、いやいや、それよか二人で夜のバーとかいう根本的な問題があるわけで。というか、そんなことはどうでも良くて、今は一色の精神状態を安定させること、安心させることの方が急務であつて……。さつきから言葉遣いおかしくなってるし。明らかに俺氏、動揺してる。お客様の中に、泣きそうになっている女の子の扱い方を知っている方がいらつしやいましたら速やかに八幡に耳打ちして下さい。

そもそも言い加減彼女にきちんと答えを言うべきなのは間違いないのだ。だからこそきちんと一色いろはという女性との向き合い方も考えないといけない。ストーカー気質なところがあるとはいえ、何年間も俺なんかのことを想ってくれていることは疑いの余地が無い。

俺は彼女とどうなりたいのだろうか……。

「なーんちゃって！☆」

「……」

今までの緊張を一気に吹き飛ばすかのようにあまりにもこの雰囲気になんかふさわしくない明るい調子で一色が声をあげる。

「どーでした先輩？今のは結構罪悪感を刺激されて本当にわたしのことを考えてくれましたよね？ここ最近ずっと作戦練つてて、一番先輩がグラッと来る確率高いのを選んだんですよ。いや、いい顔見れまし

たね！隠しカメラでも仕込んでおけばよかったぐらいでしたよ。
ねえ先輩。わたし的には結構手応え感じてるんですけどどうですか
く……？」

「え、あ？へ？うん？」

あまりの展開に思考がついていけない。俺はからかわれてい
たのか？

「なーに狐につままれたような顔してるんですか先輩？この後はも
う、愛しの後輩と仲良く楽しくお話する時間ですよ？ほーらあ、
ちゃんと聴いてますか？」

頬をつんつんと突かれながらいじらしく笑う彼女。そうか、嘘……
だったのか。

それはそれで、少しショックに感じてしまう。

「……え。本当にどうしたんですか先輩？いつにもまして気持ち悪さ
が出てますね？」

ショックを感じる……か。

そうか、俺はそう思ってしまうのか。

気づいてしまったというよりは、腑に落ちた、見ようとしていな
かったことを自覚したというか。そんな気持ちだ。

俺は今、小悪魔な一色の顔を直視できない。

それは照れているからとか、からかわれて恥ずかしいからとか、そ
んな男のプライドじみた理由ではない。

それは言葉にすると至極単純な理由で、自分の愚鈍さと浅ましさに
呆れてしまうような事実。

一色いろはがあまりにも魅力的すぎるから。

この一言で全てが片付いてしまう。

ちゃんと聴いているかだつて？

聴いているに決まつてる。

でも今の俺にはお前と楽しく話して、また明日つて。それだけで終わる自信が無い。

総武高校を卒業してからずっとだ。どれだけお前のアプローチを冗談めかしてかわしてきたと思つてる。今更、お前と正面から向き合うのがどれだけ勇気のいることで、罪深いことだと思つてる。今までどんな思いでお前の誘惑をこらえてきたと思つてる。

今の一色の色つぽさは異常だ。この会社に彼女が俺を追いかけるように入社した時からずっと、毎日顔を合わせる度に、どんどんと垢抜けていって、儂げな艶めかしさと大人らしさを身にまとつていった。そんな女性としての魔性の魅力の中に、彼女本来の子供のようなあざとさが共存するようになった。年齢を重ねる度にそのギャップが洗練されていく。惑わされないわけがないだろ。これまで、彼女がアプローチを掛けてくる度に、なけなしの理性と冗談で逃げてきた。今までの距離感を壊したくなかった。

だがそれもそろそろ限界なんじゃないかと最近では危機感を抱いていた。そんな時にこんなドツキリをされて、こんなにも魅力的な一色を目の前で見せられて……。それで彼女を意識しないわけがない。

何よりも、結衣や雪乃との溝が出来てしまった今、俺に最も近い場所に、側に居てくれる女性を、ただの後輩としてだけで見るだけなんてことが出来るはずがない。

それでも俺にその手を取ることは許されない。もし手を取つてしまえば今度は結衣だけじゃない。雪乃に対してもひどい裏切りになってしまう。それだけは絶対に出来ない。それはこんな畜生に残されたなけなしの意地だった。

それでも少しなら、近づいても良いんじゃないか。

そう思った時にどうしてお前はまた、いつもの距離感に戻そうとするんだよ。わかってやってやっているんだろ？俺が距離を詰めようとしたらわざと逃げやがった。そんなことをされたら怒りと愛情でお前のことしか考えられなくなる……。

「……バレたんでしょ？結衣さんに」

「な……!？」

項垂れる俺の耳元で小悪魔が囁いた。それは俺が目を逸らそうと
していたもう一つの真実を目の前にえぐり出す残酷な言葉だった。

「先輩わかり易すぎです。あんなんじや浮気初日に結衣さんにバレ
ちやいますよ」

くすくすとあざ笑うように一色は蠱惑的な笑みで俺を見下ろした。
わざとらしく着崩したことでチラと見える白い胸元が煩惱を呼び起
こさせる。

「二人共嘘が下手なのに、結衣さんを騙せる訳ないのに。仕事や休憩
の合間にあんなにも雪乃さんを思うような切ない目しちやつてて
……本当可愛いなあ」

「……い、今更なんでそんなことを言うんだよ」

一色は明らかにこちらを挑発していた。そしてその目論見は成功
している。一色に相談したことでもあったと同時に、一番下手に触れ
てほしくない話題だったから。それを一番理解しているのは一色で
あるのにも関わらず、彼女は俺の期待をことごとく裏切るかのように
傷口を深くえぐり取る。

「なんでって？だって相談したところで、どうしようもありません
か？もうバレちゃったんですし」

「それは……そうだが……」

「答えを出すみたいなの口ぶりしておいて、結局先輩って現状維持でい
たいなあって本心が見え見えなんですよ。だから答えなんてものが
見つかるはずもないし、悩んでる自分ってなんか良いよね〜みたいな
そんなダサい状態になってるんじゃないですか」

「…お前、本当遠慮がないな」

「今先輩に気を遣ったところで、何の解決にもならないし、私との関係
が進展するわけでもないですからね〜。こんなヘタレクソ野郎は
さっさと地獄に落ちるべきって気持ちは昔も今も変わらないわけで」
「…そうだな。雪乃や結衣だけじゃない。一色には一番迷惑かけたの
かもな」

「っ！そうですよ……未だに名前で呼んでくれないし……わたしが誰よりも一番先輩に傷つけられて迷惑をかけられて……それなのに、一番にしてもらえなくて……」

一色の声が段々と小さくなる。

「ああ。そうだな」

「もつとはつきり言ってお下さい。『わたしは大切じゃない』って……」

「言えるかよ。俺は……お前のことを大事に思ってる」

「~~~~~！本当クズ！バカ！ヘタレ！女たらし！」

肩を叩かれる。

すぐにボロが出た。

さっきの威勢はどうしたんだ……。どうせ俺のために敗れてヒーローを演じて分かりやすく立ち直らせようとしたのはわかってたが、最後まで演じきれないところがまたお人好しだった。

本当に良いやつだよなあ。こんないい女がなんで俺にずっと執着しているのが全くわからない。

マスターが何も言っていないのにお水を差し出してきた。いや、本当にすいません。

「ねえ先輩。先輩がどんな事になっても、どんな選択をしても、わたしは先輩の味方ですよ？」

今度は甘えるように自分の頭を肩に乗せてすりすりと体も寄せてくる。いつもと香水の臭いが少し違う。

「そんなことしてお前に何の得があるんだよ？こんなことしたって先はないだろ……」

「そうですね。こんな偽善者の肩を持ったところでお先真つ暗ですし、だからといって新しい人生を今更探そうなんて思わないですよ」「まだ若いのに悟り開きすぎじゃないか？」

「悟りとは真逆でしょ。煩惱の塊みたいなことしてますからねわたし。理想と欲望に引つ張られっぱなしのダメな人生ですね。誰かさんのせいでも。あーあ、こんなはずじゃなかったのになあ」

「高校の卒業式で告白を断ったはずの誰かさんが、大学に追いかけるように入ってきて、まさか会社にまでついてくるなんて誰が予想した

と思うか？」

「だ、だって本当に好きなんだもん……」

「っ」

え、何この可愛い後輩。滅茶苦茶ドキツとしたんですけど。アルコールはいつてるのもあつて、心臓の鼓動が大変なことになっていく。

「……今のはどうでした？」

「それを聞かなかつたら結構落ちてた」

「そ、それは非常に残念です」

一色がふくれっ面でコップに口をつける。

「大体、お前なら一々聞かなくたって俺がどう思ってるかぐらいわかるだろ？」

「まあ、大体は。表情というか朝挨拶しただけで昨日は何があったのかとかは察せられるぐらいには」

「実例があるからマジに聞こえる」

「大マジですよ。先輩マジで顔に出すぎです。今や的中率100%だと思います。正直聞かなくてもわかるんですけど、それでもやつぱり先輩に褒めてもらいたいし、優しい言葉をかけてもらいたいから我慢できなくて聞いちやうんですよ」

「俺なんかの言葉をか？」

「そうですよ。先輩なんかの言葉がわたしにとってはたまらないんですよ。わたしがどれだけ先輩の一言一言で一喜一憂してるか、先輩には想像つかないでしょうねえ」

一色は既に3杯目を注文していた。序盤のペースが早すぎたのか、今はカシスオレンジにしている。体勢は相変わらず俺にもたれかかったままだ。それ即ち、周囲の男たちの視線がずつと突き刺さったままであるということでもある。マスターの目の前の席だからこそ今は大丈夫だが、針のむしろであることに変わりはない。

「なあ一色、俺は……どうしたら良いと思う？」

なんとなく今の雰囲気になんとも耐えられなくなつてわかりきった質問を彼女に振ることしか出来ない。一色もそれを認めた上でこちらを色

艶に満ちた扇情的な目で一瞥した。

「わたしにそれ聞きますか？わたし、自慢じゃないですけど先輩のことをもっと困らせるようなことしか言わないですよ？」

腕を絡めてぎゅっと締めてくる。

答えになっていないのにそれが一番真つ直ぐな答えになっていた。

本当に都合が良くて、それでいて俺の為にいくらでも捧げてくれる女。そんな女に俺はただ、甘えてしまっている。

「今のお前になら……もしかしたらコロツと行くかもしれないな」

「え？え？あ？？」

あ。

「あ、いや……。悪い、聞き流してくれ……。自分で言っていてあまりにも軽率すぎたわ」

クズっぷりに拍車がかかる。そんなことを口から何のためらいもなく漏らしてしまった自分の墮落の進行度に寒気がした。

「え？嘘？本当？まじ？聞き間違い？脈アリ？先輩が？あの面倒くさいひねくれ堅物が？」

隣ではいろはすが今までにないくらい動揺している。俺の一言二言で一喜一憂というのが、まさに現在進行形で証明中だ。あと、最後のは流星に聞き流せないぞ。そんな風にお前にみなされていたと思うと結構ショックなんだが。

「……えくと、先輩？」

「……なんだよ」

一色はもじもじとしながらこちらをちらと見上げた。

「この後ホテル行きませんか？」

「行かねーよ!?いや、どうしてそうなった……」

昼飯の時に結衣に連絡したっていったばかりじゃねーか。これホテル行って朝帰りしようものならどう考えても感づかれるに決まってる。逆に想像しない手段を思いつく方が難しい。

「ごめんなさい……さっきの一言でわたし、めっちゃ濡れちゃってます……」

「余計な報告はしなくても良い」

「今すぐにも先輩に抱かれないと、家に帰ったら、わたし朝まで自分で慰める自信があります」

「お前の性欲が意外に強い事実なんてもっと知りたくなかったわ……」

「そうですか？わたし、飲み会で会社の部長さんとかに”いろはちやん”ってめっちゃ性欲強そうだよ”って結構言われますよ”

「いや待て。今のは、よく言われるとかじゃなくて、セクハラ以外の何物でもない所業を犯した男共の言動を問うべきだ」

「うくん……。話しかけられても挨拶オンリーで二度と会話しないだけだと不十分ですか？先輩的には”俺の女に失礼極まりないことしやがって……二度とシヤバを歩けないようにしてやる……！”ぐらいの仕打ちをご所望ですか？」

「脚色が半端ないがまあニューアンスとしては合ってる」

「ですよね。わたしは先輩の女ですもんね〜♪」

「え、そっちょ？」

何故前半を抜き出したんだ。というか本当にさっきの俺の一言で一色の機嫌がすこぶる良くなってる。もしかしなくてもこいつって結構チョロいんじゃないかと勘違いしちゃうぞ……。他の男からしてみれば一色は玉木さんと並んで会社の中でも最難関に違いないのだが。

「そっかさっか。先輩ってばそんなにもわたしのこと心配してくれてるんですね〜☆というわけで今からホテル行きませんか？」

「行かねーわ！お前本当にさっきからどうしたんだ……浮かれすぎだろ……」

「浮かれないほうがおかしいですよ。10年近く粘って粘って粘りまくってようやく初めて”好きな人”がガード緩めてくれたんですよ？こんな歴史的快拳が浮かれずにいられますか？」

一色はグビグビとカクテルを飲み干していく。先程頼んでいたカシスオレンジからもう既に追加で2杯は完飲している。俺はというと未だにレッドアイが半分以上残っていた。あとナチュラルに好きな人とか言わないでくれ。恥ずかしすぎて頭が沸騰する。

「先輩、まだそれ飲み終わらないんですか？」

「お前のペースが早すぎるんだよなあ。そんなんで潰れても知らないぞ?。」

「潰れたら先輩が介抱する羽目になって、合法的にホテルに行くことが出来るじゃないですか。なんでそこまで頭回らないのかなあ?。」

「そういう事態を起こしたくないからに決まってるだろ。ほれ、次は水を飲め」

「先輩の口移しなら飲みます」

「この期に及んでお前はまだそんなことを…」

「ほくら先輩。んんん」

「く、口を開けるな口を」

やめて! 本当にキスしたくなつちやうから。八幡マジで限界ギリギリなんですけど…。

「……しよーがないなあ…じゃあ間接キスで我慢するんでその水一口飲んで下さい」

「そうやって宣言されてから、じゃあ飲みますにはならないだろ……」

そんな事を言いながら最悪のケースを免れた俺は渋々グラスに口をつけているわけだが。一色はニヤニヤと笑いながら今か今かとそれを見つめている。もうこうなったら全部飲み干してやろうか。いや、それはどう考えても逆効果だ。大人しく軽く口に含む程度で収めてから一色にグラスを渡した。

「……ったく。ほれ、これで良いのか?」

「……まあ今日のところはそれで良しとします。じゃあ遠慮なく♪」

観念したかのように大人しくグラスを受け取った一色を見てそつと胸を撫で下ろした。これ以上彼女からのアプローチを受け続けていたら心がどうにかなくなってしまいそうだった。

「う……流石に飲みすぎたかも……。先輩マジで冗談抜きで介抱してほしいです…」

「お前なあゝ……」

「うぷ……大丈夫です……。とりあえず落ち着くまでここに居て自力でなんとか帰るつもりではあるので……。おえ」

「いや、流石に心配だからちゃんと送るつもりだったんだけど良いの

か？」

「え？先輩をお持ち帰りして良いんですか？先に言っときますけど、朝まで返しませんよ？」

「男が普通言うやつだろそれ……」

その後1時間程して体調が元通りになった一色をタクシーに突っ込んで俺も帰宅した。そこまで飲んだわけでもないのに帰宅した瞬間にどつと疲れが出た。

結衣はもう寝ていた。彼女を起こさないようにそつとベッドの中に入って静かに眠りについた。

続く

第六十・五話☆

—Side Iroha—

火照りきつた身体をベッドの上に放り投げる。お酒のせいだけではなかった。身体の表面だけじゃない。寧ろ私の中が熱を帯びすぎていて、おさまりそうもない。着ていた服を乱雑に床に投げ捨てた。明日も仕事があるのに、本当に何をやってるんだか…。

あ。お風呂を入れないと…。

生まれた姿のままわたしは給湯ボタンを押して、流れるように寝室へと戻った。一人暮らしの独身女には似つかわしくないだっ広い一室。最低限の家具だけで他のものは殆ど置いていないモデルルームと思われてもおかしくないの虚無。幸い大手の会社に入れたこともあり、手取りも多かったわたしは、惨めさを紛らわすためだけに見栄を張った。そのくせタワーマンションの一等地ではなく、そこそこ良い立地という中途半端さがいかにわたしという人間を象徴しているのだから笑える話だ。こんなことをしてもわたしが一番欲しいと思っているものには届かないのに。そんなことだってもう何年も前から理解しているはずなのにどうしてもすがってしまう。

「ん……ちゅ……はむ……うわ……もう立つてる……ん……」

みっともないと言われてしまえばそれまでだ。そんなことは百も承知で、わたしは女性として最も大事な二十代を一人のひねくれ者に捧げてきたのだから。

この数ヶ月敢えて踏み込むことをしないでそのままの距離感を保ち続けてきた。思ったとおりそろそろ限界が来ていた。いや想像以上にわたしへの依存が垣間見えた。

思っていたよりも順調に計画は進んでいるのかもしれない。

先輩が介抱してくれた時、触れた手の位置を鮮明に思い出す。左肩と、右肩、左手の甲、左腕、右手……。介抱とはいえ本当に最低限だなあ。もつと腰とかに腕を回してくれたって良いのに。まあ、そんなことをしてくれるんだったら10年近くも落とせていないなんて状

況にはなっていないんだけど…。

「んむ……ちゅ…はむ……」

『くちゅ……ちゅぶ……ぬちよ……。くちゅ……』

それにしても、ホント変に身持ち固いよなあ先輩って。それとももしかして、わたしに対してだけ固いのかなあ。うん、十分にありえる。長い間、先輩にとつてちょうど良い距離感を保ちすぎた弊害がここに来て……ってことかな。なんと厄介な。自己評価では結構いい線いつているはずなのに、最後の壁が物凄く？い。それさえなんとかなれば、先輩ともつと近づけるのに。先輩ともつといやらしいこと出来るのに。

『ぐちゅ……くちゅくちゅ……ちゅる……ねちよ……ドロ……』

「あ……ん！い……！ああ！」

やばい、垂れてきた……。お酒のせいであつた方もストップパー外れてる。

やつぱり、先輩と二人でバーに行った後のオナニーは滅茶苦茶気持ち良い……。誰にも見られる心配のない場所で気が済むまで狂つたように自分を慰める。大学の時も毎日のようにしちやつて偶に講義にも遅れたりしたなあ。今となつてはいい思い出？なのかな。

我ながら、かなりの変態。こんな自分でもあの人なら受け入れてくれるよね？

先輩が触れた場所を触りながらも片方の手で秘所をまさぐる。触られただけじゃない。今日は間接キスだつて。それに、今日はわたしにちよつとだけ気を許してくれた。それどころかノーガードといつても差し支えなかつた。

“ 今のお前になら……もしかしたらコロツと行くかもしれないな”

あんな事言われたらもう頭が沸騰するくらいおかしくなる。だつて、今までずつとはぐらかしてきたのに。わたしがどんなにアプローチしてもなびきもしなかつたのに。浮気がバレた傷心と雪乃さんとの浮気のおかげで先輩の心に上手く入り込めた。

入り込んだんじゃない。先輩がわたしに対して一歩踏み出そうと

してくれた。

あの時、それが嬉しくて涙が出そうになった。本当に泣かなくてよかった。だって泣いてしまうと先輩はまた距離を取ろうとしてしまうから。

だから必死に誤魔化した。がらにもなく勢いでホテルに行こうとまで言ってしまった。もしあの時、嘘が真になっていたらと思うと心臓の鼓動が……。

ぺちよ……。

……濡れ方が今までの比じゃない。

愛液が湧き水のように流れ出て、シーツがぐしょぐしょになっていった。

ああ……したい……。

先輩としたい。

本当は今すぐにでも挿れてほしかった。『わたしの身体で何もかも忘れて下さい』って言ってあげたかった。もし先輩が我慢できなくなつて路地裏でしようって言われたとしても股を開いちやうくらい気を許してた。そんなことあの人は絶対に言わないけど。

腰が浮く。もつと気持ち良くなりたくて大きくのけぞらせながら中をかき回す。もう片方の手で大きくなった突起をくりくりと指で優しくこね回した。

「あつ……んふう……！ううん!!い……あああ！」

深夜なのに声が止まらない。これ以上は喘ぎ声が止まらなくなるから四つん這いになって顔を枕に押し付けた。

お尻を突き出してもう一度快樂の階段を登り始める。今わたしの頭の中では先輩に後ろから犯されている。わたしの身体に欲情した先輩が、我を忘れて腰を打ち付ける。必死に必死に動かして、わたしのことをイかせようと頑張ってる……。そんな都合の良い妄想。

ぱんぱんぱんぱん……。

「んんんんんん！ふあああ！あん!!んんんんん！ふう！あ……い、いや……！せんぱ……っんん！」

もつと……もつと振って先輩！たくさんわたしのの中にせんぱいの

を……溢れちゃうくらい……出してほしい……。

「ああ……せんぱい……」

ほしい……。

ほしいよお……。

せんぱいのせーしがほしい……。

セックスしたい……。

妄想だけじゃもう満足できない……。

早く犯してほしい。

せんぱいの、たくさん舐めてあげたい。

わたしのおっぱいに甘えてほしい。

わたしのも舐めてほしい。

舐め合いっこもしたい。

道具も使ってお互いに開発もしてみたい。

色んな体位を先輩と試してみたい。

SMだってやってみたい。

電車の中で痴漢プレイだってされてみたい……。

しちやいけない場所で……しちやいたい……。

……。

先輩がわたしのことを好きになってほしい。

それなのに……。

どうして……。

どうしてダメなんですか？

わたしじゃいけないんですか？

わたしが、誰よりもずっと先輩の側で先輩のこと守ってきたのに

……。先輩の為に時間も何もかも使ったのに……。ひどすぎる……。

なんでですか？

雪乃さんや結衣さんよりも会うのが遅かったからですか？

わたしに会った時にはもう雪乃さんと結衣さんだけで十分だと

思っただんですか？

留美ちゃんにはもう気を許したんですか？

なんで智佐吹さんや玉木さんになんでデレデレしちゃってるんですか？

なんで食堂のお姉さんにもデレデレしちゃってるんですか？

なんで会社の女性の人に話しかけられるとキョドってドキドキしちゃってるんですか？

なんでわたしにはいやらしい目を向けてくれないんですか？

芦間さんを無理やり押し付けようとして逃げようとしてませんか？

それなのに……なんでわたしが誘ったら時間を作ってくれるんですか？

それなのに……なんでわたしが踏み込もうとしたら逃げるんですか？

ずるい。

ずるいよ。

最低だよ先輩。

許せない。

結衣さんも雪乃さんも留美ちゃんも玉木さんも智佐吹さんも先輩の事が好きな他の女の人も。

そして何より先輩が一番許せない。わたしを散々都合のいい女扱いし続けて……。本当何様だよ。

あんなゴミクズみたいな女たらしは一度地獄に落ちてしまえばいいのに。

他の女が全員先輩のことを見捨てちゃえばいいのに。

そしたら、地獄行きが確定しているわたしと一緒に落ちられるのに。

そうして、先輩はわたしが独り占めできるのに。

ほら、先輩のせいで今日の夜だけで何回イっただと思ってるんですか？潮吹きすぎてシャツがビショビショになってるんですよ？せつか

く沸かしたお風呂も冷めちゃって追い焚きしないといけないんですよ？もうすぐ朝になっちゃうんですよ？今日も仕事があるんですよ？寝不足でお肌の調子も最悪で、目の下にくまができた状態出勤しないといけないんですよ？だから今日は最高に可愛いわたしを先輩に見せることが出来ないんですよ？

寝ないといけないのに……。お風呂に入らないといけないのに……。

身体が全然鎮まらない。

指が止まらない。

愛液が止まらない。

喘ぎ声が止まらない。

「あ……………う……………あ……………ん……………」

息が苦しい。腕が疲れてきた。休まないと……。

でも休んだら……………気持ちよくなれない……………。

それは嫌。

だって今わたしは先輩とセックスしてるんだもん。

対面座位で優しく抱きしめてくれてるんだもん。

ビクビクと大きくなった先輩のあそこが、わたしの中で果てようと痙攣してて……………。

ドロドロの精液を…、わたしに……………注いでくれる……………。

先輩と二人で一緒に上下に跳ねて。

そうしたらわたしの中に深く先輩が入ってきて、もつと繋がったよ
うな感覚になって。

そしたら子宮が下りてきて、上も下もキスしちゃって。

そんな幸せな交尾。

牝になったわたしが求める本物。どうしても欲しい本物。

皆で共有なんてのは詭弁だ。

わたしだけ。

わたしだけの男にしたい。

それが彼の欺瞞だったとしても。

一緒にいられるのは、最低を共有できるわたしだけ。

あの人の欺瞞と最低を受け入れられるのはわたししかない。わたしにしか出来ない。

ようやくなんですよ。

もうすぐ、やっと始まるんですよ。

わたしの本当の楽園が……………！

「イ……………く……………!!」

刹那、わたしの身体が跳ねるようにベッドで暴れた。絶頂の波に何度も何度も飲み込まれて制御が効かなくなる。中も外も電気が走ったみたいに痺れて、ビクンビクン！って脈打って……………。頭の中の先輩がありったけのザーメンを注いでくれる。それをこぼすまいと膣をキュツと締めて、ついでに先輩の竿から全部絞り出す。

わたしも先輩も疲れ果てて仰向けになって脱力した。

「……………すごい汗」

妄想が終わって我に返ると、身体中から、サウナに入ったみたい玉のような汗が出ていたことにようやく気づいた。自分の臭いだから良くわからないけど、凄い淫猥なフェロモンが充満してるんだろな。なあ。

もう、太陽が顔を出し始めている。

なのに、身体の疼きが全くおさまってない。

もう次の快感を欲してあたしの秘所がヒクヒクと飢えている。

「……………もう。責任とって下さいね……………先輩……………。ばか……………きらい

……………。んんん……………はあ……………あう……………」

徹夜を覚悟した。もうこんなことをしなくても良いんだと願いながら、わたしは何度も先輩を想って絶頂し続けた。

続く

第六十一話

—Side Hachiman—

「昨日は結構遅かったよね。もしかしていろはちゃん結構飲んじやってた？」

朝食の支度をしながら結衣が話しかける。どうやら起こさないように気を使ったものの、彼女は起きてしまっていたらしい。もしくは寝たフリをしていてずっと起きていたのかもしれない。

「悪い。うるさかったか？」

「そんなの気にしてないよ。それよりも今日も仕事なのに八幡大丈夫かなあって心配になっただけ。勿論いろはちゃんもだけど」

「店で落ち着くまでは一緒に居たし、ちゃんとタクシーで行き先を自分で伝えるのを確認してから俺も帰ったから問題ない」

「え〜!?送ってあげなかったの!?ヒッキー意外と冷たいね……」

「いや、送ったりしたら一色に無理やり家に連れ込まれちゃうだろ」

「そんなこと……。うん、いろはちゃんならやりかねないね」

あいつ、結衣にもそう思われているのか。なんというか、日頃の行いって大切なんだなと一色に教えてもらった気がする。いや、この言葉も俺に刺さる。

そんな会話をしながら結衣の機嫌を伺うのが最近の俺のモーニングルーティンになっていた。

「それじゃあ、そろそろ行ってくるわ」

「うんー気をつけてね!八幡!」

結衣が大きく手を振る。それに応えるように手を振り返すと俺は静かに扉を閉めた。

エレベーターの中でぼんやりと考え込む。それはあまりにも短い時間で自分の状況を整理する時間にさえならない。

この4ヶ月間。ずっと心臓の奥深くにどす黒いモヤモヤとした感情が渦巻き続けていた。

あれから歪なことに、結衣は変わらず最低でも週に一度は俺を求めてきた。俺も彼女の愛に応えるようにしていた。それはまるで最初から雪乃とのことが、雪乃の存在が無かったことになっているような錯覚さえ起こしてしまう。そんな危ういバランスの上に今の家庭は成り立っている。雪乃と交わってからというもの、皮肉にも結衣との夜が気持ち良くてたまらなくなっていた。このような形で何年も味わってきた妻の中の気持ちよさを再認識することになるとは。あまりにも自分の節操と甲斐性のなさにほとほと呆れる。それもこれも結衣がベッドの上では雪乃の話題を出してくるからだ。

『ゆきのんの中はどうだった？』

『ゆきのんってどこが弱いのか？』

『ゆきのんはどんなふうにはっキーのここを気持ちよくするの？』

そんなことを腰を振りながらずっと聞いてくる。その度に、二人に対する裏切りの罪悪感が出てきてしまうのに、身体はこれでもかというくらいに悦びを得て砲身から精を放っていた。意識が飛びそうになる絶頂を終えるといつも結衣は愛おしそうに俺の顔をじつと見てキスの雨を降らせてきた。

そんなある日の夜のことだった。

『この浮気者……』

行為を終えて、俺の上に倒れ込んだ彼女はいつもそう言って俺を糾弾した。お互いに何度も何度も頂点に達して息も絶え絶えになっていた。お互いの身体に付着した体液がそれを物語っている。

『ゆきのん……帰ってきてくれるかな……？』

『やっぱり結衣は雪乃に帰ってきてほしいのか？』

『うん……。だってあたし、ゆきのんのこと本当に好きなんだもん。』

あ、勿論はっキーに対する好きとは別だよ？』

『それは……分かってる』

『はっキーもゆきのんに戻ってきてほしいでしょ？』

『誘導尋問か？』

『ううん。単純に気になっただけ』

結衣はもぞもぞと動いている。そのまま果てたばかりの俺の愚息をそつと握り直した。

『……戻ってきてほしいと思ってる』

『節操ないなあヒツキーって』

ポカポカと胸を叩かれる。同時に子種袋をぎゅつと握られた。

『いつ……いっわ、悪い……』

『まあでもね、そんなふうにはヒツキーを追い詰めちゃったのはあたしだからさ……』

俺の胸に顔を擦り付けて甘えてくる。

『だからさ……許すも許さないも違うんだと思う。あたしは、ヒツキーの側に要られてこうして愛してくれるだけで、ワガママを叶えてくれるだけで嬉しいんだよ。』

『いや、ワガママを聞いてもらってるのはいつも俺……』

『ヒツキーは一度もあたしにワガママを言ったことなんて無いよ。だから……今回は初めて。最初はやっぱりかあって思ったけどさ。それでもなんだろう。今までのヒツキーって、ちよつとどこか無理して感じがしてたから。そういう意味ではちゃんと自分の気持ち表に出してくれるようになったんだよなあって前向きに捉えられた』

『そんなわけあるか。ただの酷いやつだろ。自分の奥さん裏切っただけの』

『だくかくら。なんですぐ悪ぶっちゃうかなあ……。そりやああたし、めっちゃ泣いたけどさ……ヒツキーに浮気された時』

『それについては返す言葉もない……』

『あ、いや。ごめんね。別にそういうことじゃなくて、あ、いや、そういうことなんだけどさ……なんて言ったらいいんだろ……?』

結衣は慎重に言葉を選んでいる。

『浮気しても良いよってことではないんだけどさ……ゆきのんに盗られるのは仕方ないのかなあって思ったり思わなかったり……。これも違うかなあ。いや、そうなんだけどうーん……』

どうにかして俺を安心させる一言をひねり出そうとして結局自分が納得できないループに何度も陥っていた。

『とにかくあたしはゆきのんと仲直りがしたい！……ってことなんだと思う……』

『それは……それだけはよく分かる……』

『だよね、だからヒツキーはあたしに隠れてゆきのんとイチャイチャしたんだもんね』

『痛ア！だ、だから、そこを握らないで……下さい』

『ふふ……。やっぱりヒツキーは。喘いでる時が一番可愛いね』

優しく頬をなでながら結衣はもう一度唇を重ねてきた。

『一人で抱えないですよ……。ヒツキーがゆきのんのこと本当に大事に思ってるのよく分かってるから……』

『……………』

『あ、でも離婚はする気ないよ？だってあたしヒツキーのことは絶対に譲らないし』

『それは……俺だって……そうだぞ……』

『うーん……説得力ないなあ……』

『しょ……正直……弱ってる時に他の女に誘惑されたら、そのまま流される自信はなくてもない……』

『ヒツキーも男の子だもんね……』

『あ、いや。本当ごめんなさい』

『またすぐしおらしくなる……。まあ二度と浮気なんてしません』
“って言われる方が信用ならないからいいけどね』

『俺また浮気するって思われてる？』

『うん。すると思うし、次に誰とするのかも予想できるかな』

何という信用のNASA。いや、そりやそうだろうけど……。

『だからといって公認もしないけどね……。まあそうだったら仕方ないかあつて。ヒツキーだし』

『俺ってそんなに浮気っぽいところあった？』

『ヒツキーみたいな責任おぼけはね……。最初の壁はすっごく高いんだけど、一度やってしまったら二度目のハードルが凄く低くなるタイプなんだよっ。』

『再犯率が？いつてことか……』

性犯罪者と同じじゃねーか……。

『そう。だからヒツキー、もしいろはちゃんとそういう関係になったら、あたしはいいけどゆきのんは大変なことになるから絶対にゆきのんにバレないようにね』

『おい、なんでそこで一色の名前が出てくるんだ』

『だって、総武高校の卒業式でいろはちゃんに言われたもん。"先輩のことを本気で奪うつもりなので先に了解を得ておきたいです"って。まさか、職場まで同じにするなんて思わなかったからさ……。その時から流石に、いろはちゃんの粘り勝ちが頭にはつきりと浮かんだよ……』

あいつそんなことしてたのか。確かに俺と結衣が結婚した後も粘着するってすごい執念としか言いようがない。そして、籠絡されそうになってるからぐうの音も出ない。

『それに、ゆきのんとは別に、いろはちゃんのことあたしは大好きだから……。いろはちゃんが悲しむところは見たくないかなあ……』
『それがもしお前にとって悲しい結果を引き起こすことになるとしてもか?』

『ヒツキーが家に……、あたしのところに戻ってきてくれるなら、それ以上は望まないよ。だって、本当ならこの場所に居たのはあたしじゃなくてゆきのんだから……』

『……………』

『もう、少しは否定してほしかったのになあ……』

『……………悪い』

『良いよ。もうずっと前から分かっている。ヒツキーだって分かっていたでしょ?それでもあたしのことも大事にしてくれてありがとう……。おかげであたしは……救われた……』

結衣の目から涙が溢れる。

『なあ……これが本当にお前が望んだものなのか?』

『ちよつと違う……。よ。でもね……。それでも良いの。あたしには……。どうしても欲しい"もの"があるから。今は、ゆきのんの答えを待ちたい……』

『……分かった』

結衣がそう言った以上、俺はもう何も言えなかった。
……………。

気がつけばもう会社に着いてしまっていた。

エントランスで玉木さんに挨拶をする。彼女はいつものように明るく手を振って俺に微笑みかけてくれた。最初はどぎまぎとしていたものの、今ではそれなりに手を振り返すくらいには慣れてきている。とはいえ、手に触れてきたり肩をポンと叩いたりとスキンシップが入るようになってきたので、また童貞男子の反応に逆戻りしたのだが。

一色はいなかった。こんな状態で今一番会いたいと思った相手が一色だった。それなのに、俺が求めた時に、彼女は側にいなかった。でもこれは逆に本当に都合が良い。もし出会ってしまったら歯止めが効かなかったかもしれないから。

彼女が俺に側にいて欲しいと思った時には一度たりとも居たことがないのにな。

あんないい女を都合の良い女扱いして。

バチが当たらないはずがない。

甘ったれた自分を戒めた。それがほんの5分さえもたない稚拙な覚悟であることに目を瞑って。

「おはようございます」

誰にかけたかもわからない挨拶が室内に木霊した。

今日もまた、気怠い空虚な一日が始まろうとしていた。

続く

第六十二話

—Interlude—

彼は罪悪感に押しつぶされそうになっていた。
そうなるように仕向けたのはあたしなのに。

彼女も同じようにつらい思いをしている。

そうなるように仕向けたのはあたしなのに。

彼が色々な女性に目移りをするようになった。

そうなるように仕向けたのはあたしなのに。

彼が後輩の女の子を抱きしめてしまう日はそう遠くない。

それは……正直ちよつと想定外……だったけど仕方ないかも。

彼女が彼を必死に求める日はも、もうすぐだろう……。

そうなるように仕向けたのは……あたしだから。

大丈夫……。あたしたちは間違っている。けどこれ以上は間違わない。

—Side Hachiman—

「流石に眠いな……」

別に昨日は飲みすぎたわけでもないのに疲労感が半端じゃない。いつも以上に仕事に身が入らない。理由は考えなくても分かる……。自分がここまで昨日の一件を引きずろうとはおもいもしなかった。今朝からずっと一色の姿が朝から離れない。そんな時に限ってあいつは昼飯を誘いに来ないものだからこっちはモヤモヤがずっと取れずにいる。

「……っ」

あまりにも集中出来なくなってしまうので、ラウンジの自動販売機でコーヒーを買うことにした。マッカンが血糖値が急激に上がって現状が悪化する未来しか見えないので、ブラックコーヒーにした。

入り口で扉が開く音が聞こえる。俺はそれを気にもとめず椅子に座ってコーヒーを飲んでいた。

あと数週間もすれば、4月になってまた新入社員たちが入ってくる季節になる。そうすればまた、忙しくなる。後進の指導にあたってこんな自分を忘れることが出来るだろうか。

留美はこの部署に配属されるのだろうか。少し前に彼女から大学卒業の連絡と弊社に本社入社する旨のメッセージを貰っていた。そしてポストンで会った時以降お互い、気持ちの整理がつくまで会わないようにしようと約束していた。それなのに、自分の携帯で彼女にメッセージを送ろうとしている自分をすんでのところで止めるといった事があれから何度もあった。

分かってる。

今留美に甘えてしまったらそれこそ一番彼女のことを傷つけてしまうということ。彼女は結衣の代わりでも雪乃の代わりでもない。

改めて考えると、俺は既に雪乃と結衣の二人以外の女性にも既に手を出しているじゃないか。それなのに責任やら、甲斐性やら意地なんでものを語ろうなんて。へそが茶を沸かす以外の何物でもない。

だったら俺は一体何に対して罪悪感を感じているというのか。罪悪感を感じることで逃げているんじゃないか？

自分が悪いと思うだけで何かが許されて変わるんじゃないかと思っただけなんじゃないか？

今だっただけだ。

逡巡してるフリをしておいて結局一色に逃げようとしている。アメリカの時と何も変わらない。雪乃の代わりに留美に甘えて、今度は留美の代わりに一色に甘えてしまっているじゃないか。

そんなものは……俺が一番嫌っていた欺瞞では？

忌むべき物を許容し、あまつさえ求めてしまっている。とんだ道化がここにいるわけだが、今となってはもうそんな自分を変えようなんて気すら起こらないほど自分という人間は墮落していた。

だっただけだ？

あんな甘美な時間を味わって忘れられるはずがない。

倫理、規則、体裁、義務、あらゆる道理を無視して快樂を求めた先にあんなものが待っていると知ってしまったらもう戻れない。

雪乃との時間を無かったことに出来るはずがない。

あんなにも背徳と淫蕩に満ちた幸福を我慢出来るはずがない。

何もかも忘れて姦淫に耽溺することが人類の目的であるかのよう
にさえ思える時間だった。

きちんと決着をつけて結論を出す。

そんな聞こえの良い模範解答の導き方がわからない。

まともに戻れるはずがない……。

自分がどれだけ麻痺してしまっているかも分からないのに。

自分がどれだけ壊れてしまったのかも分からないのに。

そんな自分を受け入れてくれる人間しか俺の周りにはいないのに。

留美と一色。

留美はいざという時に怒ってくれる、導いてくれる。

一色も……俺を誘惑しながらも最後は理性が勝って俺のことを叱
咤してくれる。

それでも俺が本気で彼女たちを求めてしまえば間違いなくそれを
受け入れてしまう。

俺はその答えに甘えてしまう。

そうやってなんども同じ過ちを繰り返して深みにハマっていく。

傷つけて、裏切って最後は……一人になる……。そうなっても俺はま
た誰かを求めるに違いない。

俺が選んでしまった選択肢はこの先どうあがいても光の見えない
最低でしかないのだから。

そう思ってしまった時、また悪魔の囁きが聴こえてしまう。深淵に
引きずり込む悪魔の導きが……。

もう結衣も雪乃も……俺も……二度と戻れない……。

それなら……もう……

「あ……」

女性の声だった。誰か入ってきたらしい。

その声があまりにも聞き覚えのある声だったので、思わずそちらに目をやる。

「あ……」

かく言う俺も同じような声が出てしまった。何故ならその女性がまさしく俺がずっと一言会って話したいと思っていた人物だからだ。

「せ……先輩」

「お、おう……。一色か」

「一色か……」って見たらすぐ分かるでしょ？嫌味ですか？」

何故かあざとい後輩は不機嫌そうだった。俺を見るなり可憐な表情はどこへやら、あつという間にしかめっ面へと変貌してしまった。

「その……昨日は大丈夫だったか？」

「ええ。お陰様で無事」1人で「家に帰りましたよ」

やけに1人つてところを強調して言ってきた。ならやっぱり、送れば良かったのか。

「自分だけでも大丈夫って言ったのはお前じゃないか」

「そうですね、私は優しい後輩ですから。先輩に気を使ってあげたんですよ。感謝してほしいですね」

やっぱり本当は昨日結構キてたようだ。だからといって、同情で彼女を家まで送ってしまった時、自分の理性がどうなるか想像もつかない。最悪のケースは十二分に想定内だったと思う。我ながら節操がない。

「その……俺も昨日きちんとお前のペースを考えて飲ませるべきだった。すまん」

頭を下げて謝罪した。どうしても俺はいつも肝心なところで彼女の優しさに甘えてしまう。

「え……いや、あの……そういうことが言いたかったんじゃないですかね……」

一色は動揺していた。彼女らしくもないオーバーなリアクションで両手を前に突き出してぶんぶんと振っている。しばらくしてようやく落ち着きを取り戻した。

「もう……。なんでそうやって甘やかすかなあ……」

ぶつぶつと文句を言いながらも一色はカフエオレを手に持って俺の隣りに座ってきた。周りには誰もおらず、自動販売機の空調の音が響いている。

「わたし、とつても寂しかったんですよ？」

身体の色々なところが密着していた。彼女の顔を窺うところなしか、頬が赤くなっている。

「すまない……」

「もう……そう思うんならちゃんと責任とつて下さい……」

手をもじもじとさせて、上目遣いでこちらを見る。期待しつつもどこか諦めたような表情。

そんな彼女を見て思う。

何年もそんな苦しい思いをさせ続けてきた。押し寄せる罪悪感を素知らぬフリと冗談で何年も誤魔化してきた。自分が一番大変なときや、誰か側にいて欲しい時にずっと一緒に居てくれた彼女のことを誰よりも蔑ろにしてきた。

そんな酷い最低の男に付いてきて見守ってくれたのが一色いろはという女性だった。

高校の卒業式で告白される前よりもずっと前から。俺は真正面から彼女と向き合ったことが無い気がする。いつも斜に構えて、どこかのらりくらしとして接していた。こんなにも長い付き合いのはずなのに。

俺はもしかすると初めてこの後輩と正直にぶつかり合おうとしているのかもしれない。それが彼女にとつても俺にとつても甘美な地獄への始まりと分かっているながら、俺はこの女性と一緒に深淵の奥底深くに飛び込もうとしている。

「……っあ……」

喉から出かかった言葉が、言葉となって伝わる前にその勢いを失いかける。虚無と欲望が黒いヘドロとなって心臓から湧き出てくる。今またこうして自分が間違おうとしていることを警告するように、際限のない罪悪感を連れて。

視界が歪む。虚ろな目で彼女をもう一度見る。

可愛らしくて、明るくて、それなのにどこか儂げで、危うさを抱えている。今も彼女は俺に真っ直ぐな眼差しで澄み切った愛を求めている。そんな希望など存在し得ない。

手を伸ばしてとところで待っているのは怠惰な享樂に満ちた終着点。俺はそれが今一番欲しい。

少しでも今のこの気持ちが無くなるのならそれを求めたい。

そしてその相手が目の前にいる女性であればいいと思う。

結衣でも雪乃でもない。

彼女なら……彼女だけはそんな俺の感情を理解してくれるんじゃないか……？

最低の欺瞞と傲慢で無理矢理、出かかった声を音にして押し出す。

「……………お……………お前がもし……………本気なら……………ちゃんと……………取りたいと思ってる……………」

「……………え？」

一色が手に持っていたカフェオレを落としそうになっていた。自分が今しがた聞いた言葉が信じられずに、何度も反芻しているようだ。

「……………もう一度言ったほうが良いか？」

「あ……………え……………ちよ……………え……………？」

状況がきちんと飲み込めていないのだろうか。なけなしの勇気だったのにな。

なら、今度こそはつきりと途切れることなく彼女に伝わるように口にする。

「一色が本気なら、俺もそれに応えようと思う」

一度言ってしまったえばあとは楽だった。自分の中の壁を壊して、墮落を受け入れてしまえば良いだけだったから。なんで今まで、こんなにも悩んでいたのだろうかと呆れるくらいに底辺を貫く。眼の前にいるこの女性がどうしようもなく欲しくなったから。ただそれだけの理由で。

「はうわ!？」

なんだその奇声は……………。こっちは声を出すのだけにもこんなに気

が遠くなりそうなのに。

「……………返事は……………今じゃなくても良い……………」

「……………せんぱい……………?」

「今言うのはとんでもなく卑怯だって分かっている……………。お互いの弱みにつけこむみたいで……………」

「そうですね。結衣さんも雪乃さんのことも振って〃お前だけなんだ!〃とか期待してたのに幻滅も良いところですよ」

「……………そうだな。あまりにも虫が良すぎる。何考えてるんだろうな俺は……………」

本当に俺は何を考えているんだ。自分は一色を利用しているクスだった。自分の中の悪魔の甘言に流されて、大切な女性をまた傷つけた。拭えない事実が罪悪感の波を引き連れてまた押し寄せ
る。

「先輩」

「悪いな一色。今は……………自分が悪かった。出来ることなら忘れて欲しい」

彼女の顔を見るのが怖い。

どんな表情をしているのかも確認したくない。頬から落ちる汗が冷たい。

俺はまたその場から逃げ出すように立ち上がった。

……………。

立てない。

足に力を入れようとすると、それを拒むように右手から椅子に引きずり落とされる。

彼女が俺を逃すまいと腕を掴んで体重をかけるように引いていたからだった。

何度も失敗した。

そのうちに両手で頬を挟まれてぐいと顔を相手の方に向けさせられてしまう。

「なんでこっちは見ないんですか?」

案の定、一色は怒っていた。激昂というよりは静かな怒りを沸々を心の中に強引にしまい込んでいるようでふるふると震えている。噴火寸前の火山のようだった。

「どうして、そうやって逃げるんですか？」

「……それは」

「わたしからも結衣さんから雪乃さんからも皆逃げて、それで解決するんですか？」

「……っ」

「それは責任逃れですよ」

一色は決して声を荒らげない。本当はふざけるなど大声を上げたいに違いないのに。

「たとえば、結衣さんと雪乃さんが先輩が逃げるのを許してしまっても……私は絶対に逃しませんし許しません」

「それが俺を甘やかすことになっててもか？ダメにすると分かっててもか？」

「何言ってるんですか先輩。先輩はもうずっと前からダメな人間じゃないですか」

「そ、そういうことじゃないだろ」

「いつつもそうやって冗談めかして誤魔化してたんですよ？それを今更良い子ぶって反省しましたとか。不倫の謝罪会見じゃないんですから、そんなん見たって誰も信じないですよ」

後頭部に手を回されて引き寄せられる。気がつくとなんはすっぽりと彼女の胸の中に収まっていた。

離れようと思えば引きはがせる程度の弱い力だった。

俺が拒絶しようと思えば簡単に出来る程度の抱擁だった。

なのに、離れたくない。

あまつさえ自分も彼女の肩を抱くように手を添えてしまっている。「良いじゃないですか。最低でも。ダメダメな人間でも。わたしが全部受け入れてあげます」

優しく後頭部を撫でられた。

やっぱりそうだ。一色いろはは俺の全部を受け止めてくれる。

だからこそ甘えてはいけなかった。

そしたら俺は一生、彼女に甘えていないと生きていけなくなってしまう。

一色いろはという女性の虜になって何も考えられなくなってしまう。

「先輩ならやれますよ。仕事で失敗しても、結衣さんと雪乃さんに呆れられちゃっても。それでもね、先輩って人は頑張っちゃうんですよ。そして、なんとかしちゃうんです。たとえ自分が壊れてしまってもやり遂げてしまおう。誰のためにもならない奉仕活動を延々と続けて、自分は生きたんだーって満足しちゃうんですよ」

「そんなことはねーよ……結局一人で出来なくなつて、迷惑かけて、誰かに拾われて。拾ったくれたやつを傷つけて。それで……最後は一人になつて……」

「ならないですよ。少なくとも一人じゃなくて……二人です。わたしが居ます。信用ならないですか？これでも10年近くも敗戦濃厚の恋に人生捧げてきたんですよ……うちよつとくらい、信じてくれても良くないですか？」

一色が耳元に口を寄せる。彼女の甘い吐息がダイレクトに伝わって、心地よい快感が生まれてくる。

「わたしが言い訳になつてあげます。わたしに甘えても良いんですよ？わたしが……わたしだけが……先輩の全部を受け入れて肯定してあげます♡」

「そんな契約……受け入れられるはずがないだろ……」

なんとという甘い響きだろう。だが、それは当然悪魔の契約だ。しかもとてつもなく悪質で魅力的な誘惑。本気で奪おうと思えば奪えるのに、最後まで俺に委ねて、判断を鈍らせる。一色の常套手段。彼女が見せる意地悪で狡猾な一面。一番の魅力とも言える素顔。

そんなものを同時に見せつけられて、俺の心が揺らがないわけがない。

「……お、俺……は……んんんむー！」

途中で口を塞がれた。俺に考える余地を与えさせまいとする彼女

の最後の一押し。

それは久しぶりに感じる彼女の唇だった。ずっと前にカフエで奪われた強引な口づけとは違う。一色の柔らかい、熱い感触が脳髓を突き抜けるように浸透していくような長くて蕩けるような甘いキス。会社のラウンジといういつ誰が来るかも分からない状況の中で繰り広げられる情事。理性がドロドロに溶かされていく感覚に酔いしれて、一色いろはのことで頭が埋め尽くされていく。

舌は侵入してこなかった。それなのに、甘酸っぱさなんてものは毛程も感じられない。濃厚で欲望の限りを貪るような熱い接吻。絡み合うように互いの腰に回される腕。体中の血液が沸騰して動悸が止まらない。

ちゅ……ちゅ……ちゅく……。

きつつきのようにくつついては離れる。弾けるようなみずみずしい唇の感触を覚え込まされる。

「……………ふは……………えへへ……………」

1分近く経過してようやく解放された。眼前に広がったのは艶々とした後輩の唇と扇情的で情欲をかき立たせるような彼女の蕩けきった目だった。そのまま彼女は俺の目の前に回り込むと両足をまたぐようにして俺の股の上に座った。首に両腕を回される。香水の匂いと彼女が放つフェロモンで理性を完全に破壊させられた。生殺しのような体勢で一色はしばらく俺の間拔けな面を恍惚とした表情で楽しんでいた。

「……………今のは前金です……………」

整わない息遣い。紅潮した頬。首から滴り落ちる汗。ちらと見える、高校の時とは見違えたハリのある胸。全てが煩惱を刺激してやまない。

そして、顔を耳元にもう一度寄せると、白く透き通った人差し指をいやらしく俺の唇にあてがった。

「続きは……………ホテルで……………」

一色はもう片方の手で、さわさわと俺の怒張した股間を優しく撫でる。俺はもう一色いろはという女を抱くことしか考えられなくなっ

てしまっていた。

呆けきつた俺を残したまま彼女は軽い足取りで席を立つ入り口で振り返るとこちらを見ていやらしく笑いかける。

えっち……

分かりやすく口パクで俺に伝えるとその後は一度も振り返らずにラウンジを出ていった。

これ以上ない最悪の仕打ち。ここまで焦らされて、昂ぶらせておいて、生殺しで仕事をしろというのか。

その時ピコンと受信音が鳴り響く。送り主は今さつきまで一緒に居た人物からだった。

『すごく固かった………／／／／／』

軽く撫でただけで硬さが分かるわけないだろ……。それなのに男の尊厳を褒められたような気がして浮かれてしまっていた。

それに……タメ口のせいで余計に興奮が……。

我に返ったのは、程なくして他の男性社員が入室し、怪訝な顔でこちらを見ていることに気づいてからだだった。唇に付いた彼女の口紅を乱暴に拭き取ってその場から逃げるように退出した。

続く

第六十三話

長かった残業を終えてようやく会社の外へ出る。久しぶりに吸う外の空気に思わず深呼吸してしまった。

あれから悶々としたまま、業務が終わるまで仕事に打ち込み続けた。頭の中で何千回と除夜の鐘を鳴らし続けてようやく片付ける事ができた。

今日とはとにかく早く家に帰りたかった。誰かと話していると一色の顔を思い出してしまつて会話の内容が全く頭に入らない。会議が無くて本当に良かった。

さて、時間も時間なのでどこかで軽く食べてから帰らなければ…。残業が長くなりそうだったので。今日の夜は必要ないと昼間のうちに結衣に連絡しておいたのだが、この時間となると居酒屋かコンビニくらいしか選択肢が存在しない。

「コンビニで買ってさっさと家に帰ろう……」

その時だった。人通りの少なくなった会社のビルの前で、後ろからタツクルを受けたかのような衝撃を受ける。

「あいたあ」

たたらを踏んで振り返る。

「お仕事お疲れ様です！先輩☆」

一色いろはだった。何度も確認した。やはり、いつも仲良くしているあざとい後輩だった。ぱつと見様子は変わらない。これまでのいろはすだ。敢えてそうしているのか、本当に日中のことは気にしていないのか、一瞬の気の迷いを有耶無耶にしようとしているだけなのか。俺には皆目検討がつかない。

こっちは目が泳ぎすぎて止まったらマグロみたいに死んでしまうんじゃないかというくらいに動揺している。

「お……おう……。サンキュ。一色もお疲れさん」

「どちらかというの仕事よりも先輩を待つ方が疲れました☆」

「悪かったな。仕事量半端なかったんだから仕方ないだろ」

「わたしは定時キメました♪ 玉木さんがこっちに仕事投げてきそうだったから、危なかったですね☆」

その後ちよつとやつれた顔になった玉木さんとエントランスでバツタリ出くわした時には超気まずかったんですよと付け加える一色。そりやそうだろうなあ。定時で上がったはずの後輩がずっとビルの一階で誰かを待っていたと思うと、心中穏やかでいられるはずもない。

つまり一色はそこまでして、俺を待っていたということになる。どういう腹づもりなのだろうか。

日中、あんなことがあったのに彼女はあっけらかんとしている。恥ずかしさは微塵も感じられなかった。

「明日玉木さんにこつてり絞られるんじゃないか？」

「定時退社の何がいけないんですかね〜？ だってわたしは自分の仕事はきっちり終わってから帰ってるんですから別に社会的規律は何も違反してないですよ？」

「俺が言ってるのは暗黙の了解というか日本人にありがちな忖度とかそういう話だよ。お前分かって話しそらしただろ」

「ふふふ、そうですね。こうなつた時の先輩って面倒くさそうだから流すことにしてるんです」

「説教臭くてごめんね。でもいろはすのためを思つてのことだから」

「パワハラ訴えられた人の言い訳みたいな事言わないで下さい。セクハラで訴えますよ？」

「え、なんで!？」

「冗談です☆だいたいこんなんで、訴えること出来たら、昼間のわたしの行動なんて性犯罪ですよ？」

「なっ……………!？」

「……………あ……………」

何こいつ墓穴ほってるんだ。自分で言つてからようやく気づいたらしい。なんたる間抜けな。

「あ……………その……………えーつとですね……………」

一色はどうか仕切り直そうと打開を試みるが糸口を全く見いだ

せないまま、会話を繋げてしまったらしく、その後の言葉が続かない。「とりあえず、ご飯一緒に行きませんか？」

「え、普通にコンビニで飯買って帰るつもりだったんだけど」「は？」

いや、マジで急にトーン落として殺意マシマシになるのやめて。八幡泣きそうになるから。つーか、怖すぎて一瞬死期を感じたから。と
いうか卑怯じゃないですかね。自分は定時であがったにもかかわらず、残業で夜遅くまで仕事をしてた貴方の為に待っていたからそれ
相応のサービスをしろみたいな。ギブアンドテイクってそういう使
い方じゃないんですよ？

「……この時間だと居酒屋ぐらいしか空いてないけど良いのか？」

「問題なしです♪先輩と食べられるのならどこでも♡」

相変わらずあざといなあ。いつものことだけど。

「そうか。なら念の為、お前の最寄りに近いところにしておくか」

終電なくなったら怖いしな。

「ありがとうございます！しかも先輩が身銭を切って全額負担だなんて……☆」

「おいまで、いつから俺が全部金を出すことが前提になっているんだ。異議あり！」

「却下です」

いや、それはないだろ。

「暴君だ……。人間の血が通つてるとは思えない」

「かわいい女の子の血が通ってるんですよ？ほら、とくんとくんと聴こえるでしょ？」

「わかった。俺が全部払うから、俺の手をお前の胸に持っていくのを止めてくれ……。理性がもたん」

しかも超柔らかい。とうかさつき抱きしめられた時にも思ったことだが、一色の胸ってあんなに大きかったっけ？勿論、結衣ほどではないにしてもそれなりの弾力を感じた。万乳引力の力か○
「もたなくなっただけいいのに……」

一色が胸を抱くようにして寄せあげる。視線が離れない……。

わざと俺に聴こえるようにぼやかなくてもいいのに……。とりあえず、一色の最寄り駅近くへ移動することにした。移動はもう面倒くさかったのでタクシーを使った。

—Side Iroha—

……さっきのはわざとらしすぎたかなあ。

だってああでもしないとこの朴念仁ひねくれクズ野郎先輩はわたしのこと意地でも意識しようとしてくれないから。本当、割に合わない……。

タクシーの中でも喧嘩したカップルみたいな変な距離感で座ってるし。

もう少し、こっちに寄ってくれたって良いじゃないですか……。それとも運転手さんを警戒しているのかな。本当に恋人だったり、夫婦だったりすればそんな気遣いも必要ないのに、今のわたしたちにはそれが必須だと思うと少し悲しくなる。

やっぱりどんなに頑張ってもこの人の一番隣にはなれないのかなあ……。

試しに先輩の右手にわたしの左手をそつと近づける。触れるか触れないかの距離。先輩は多分気づいてる。見ないようしているのが、バレバレだった。わたしも極力先輩の方を見ないようにして素知らぬ顔で距離を詰めていく。

左手の小指をそつと当ててみた。

先輩の右の小指がピクツと反応した。表情に変化は見られない。でも身体が少しばかり強張っている。意識してるんですよね？☒

今度は小指を乗せてみた。先輩は嫌がる素振りを見せない。顔が紅くなってきた。わたしのことちゃんと女の子として見てくれているんだってわかって凄く嬉しい……。

ああ……もう……可愛いなあ……我慢できない……。

思い切って手を握った。しかも恋人繋ぎのように指を一本一本しつかりと絡めて。

「っ!？」

先輩は一瞬驚きで目を見開いた。頭は動いていないけど、一瞬わたしの方を先輩が見た気がした。わたしは先輩の方を見ていなかった。だって、目が合ってしまうともっと先輩が欲しくなる…。抱きついて、腕を組んで頭を肩に乗せてしまう。それはまだ早い。だから窓越しに先輩を見るだけで我慢した。

先輩を焦らして、焦らして、焦らして。先輩の中のわたしの存在をゆっくりを膨らませていく。急激な熱の上昇はすぐに冷めてしまうから。そうじゃなくて……じっくりとわたしへの愛情を温めてもらいたい。そのための約十年……。高校の時から進めてきたわたしの作戦。偶に欲望が暴走して先輩に強引に迫ってしまったことが何回かあったけど。

一色いろはという女性の必要性を先輩の人生に緩やかに浸透させていって、他の女性の領域を奪う。ゆっくりと回る毒のように、わたしの愛情を先輩の意識の中にじっくりと染み込ませる。

ほら、先輩。わたしの指から伝わるでしょ？力を軽く入れるだけで解ける指なのに。決して拒絶しない。先輩は優しいから。お人好しだから。こんなわたしみたいな悪女にも情けをかけちゃう。

だからこそ……欲しい。

こんなわたしですらも受け入れてしまうから。魅力として認めてくれるから。

左手をぎゅっと握りしめる。

渡したくない…。

この人だけは譲れない。

本当はもつと前に強引に奪ってしまいたかった。でもわたしは待った。

何故なら、一夜の過ちなんてものでは、わたしは満足出来ないから。

一人の大切な女性として認めてほしかったから。

タクシーが止まった。もう目的地に着いてしまったらしい。もう少しこの状態を楽しみたかったけれど仕方ないかな。

先輩がお金を出そうとするのを制するようにわたしが代金を支払った。

先輩は気まずさと驚きで表現し難い気持ち悪い表情になっていた。これも作戦。そうすれば先輩は罪悪感で少しだけわたしに對するガードが甘くなる。

タクシーを降りて大きく伸びをした。そして当たり前のように先輩の腕に抱きつくようにして、腕を絡める。先輩は何も言わずにまっすぐ歩き始めた。抵抗が無かったから逆にわたしが動揺しちゃうんですけど……。どうしたんだろう……。もう観念しちやったり？いや、この人に限ってそれはないなあ。

居酒屋に入って先輩が店員さんに話をすると、あつという間に席に案内された。ピークよりもちよつと遅い時間だから、待ち時間もなくて座ることが出来たみたい。途中、出来上がっていたサラリーマン達の下卑た視線にさらされたけど、それには目もくれず先輩の腕の感触を思いつきり楽しんだ。

席は4人席のものだった。

普段なら正面に座るけど、わたしは敢えて隣に座った。店内にかかっている洋楽がうるさい。雰囲気ぶち壊しで不快になる。

「そつちに座れば良くないか……？」

そう言つて、先輩は反対側の椅子を指差した。

“座れ”とは言わずあくまで自発的な行動を促すかのような注意の仕方。警戒してるけど、どこかわたしのことを受け入れている時の反応。だから、わたしは言うことを聞かない姿勢を見せて断固拒否した。

「……、で何飲む？」

折れてくれた。ドリンクのメニューを開いて、気怠げにカクテルのページを見せてくる。わたしがカクテルをよく飲むのを知っているからだろう。こういう優しさでもっと好きになる。でもわたし、先輩と飲む時は大体1杯目はビール行くじやないですか。いや、それをわかってて、2杯目以降のためにメニューを見せてくれたんだろうけど。

「生キメてから、日本酒にします☆」

「え、本当に？」

「ボトル一緒に開けましょ！」

「滅茶苦茶飲む気じゃねーか」

本当はあんまり日本酒は飲まないんだけど、嫌いなわけじゃない。それに先輩が日本酒をよく飲むみたいだから、一緒のものを口にして感想を言い合ったりしてみたい。そんなバカみたいな理由だなんて予想だにしないだろうなあ。

「先輩、お通し来るまでに食べるもの先に決めませんか？」

「そうだなあ……て……っ!?」

「どうしたんですか先輩？」

「どうって……お前……」

そりゃあ驚くのも無理ないか。でも手を繋いだくらいでそんな嫌そうな反応しなくても良いじゃないですか。机の下だから誰にも見えませんよ。

「とりあえず枝豆とたこわさ……とりなんとか食べたいです！」

「たこわさとは……渋いな……チョイスが」

「え、でも美味しくないですか？たこわさ。女子会やった時とかもそこそこの頻度でこれ出てきますよ？」

「え、お前女子会とか出来る友達居たの!？」

「……そう言うと思ってたから今回は不問にしておきます」

わたしってどんだけぼつちに思われてるんだろ……。先輩にぼつち扱いされるとか屈辱の極みだよ……。わたしにだって女子会をする友人の一人や二人居ないわけじゃない。玉木さんとか玉木さんとか玉木さんとか。ほら、3人いるでしょ？

……。

やばい、自分で言ってる悲しくなってきた。流石に、同性の友人を作らなすぎた気もする。

「たこわさと……とりなん……あと、生2つか」

隣で先輩が注文用のタブレット端末を使いながら、さっきわたしが言ったものを注文していく。初っ端からお冷を2つ一緒に頼んでくれるあたり、先輩らしさを感じて笑ってしまう。

「先輩は何か食べたいものとか無いんですか？わたしが言ったものし

か食べ物選んでないじゃないですか」

「そうだな。一色は他に何食いたい?」

「あの、わたしが質問したんですけど」

本当、こういうの困る。『晩ごはん何が良い?』って聞いて『何でも良いよ』って答えられる主婦の気持ちに凄く分かる。先輩と結婚したらこればかり言われそうな気がするなあ。……この妄想今までにもう何百回もやってる。

「本当に適当に頼んでも良いのか?」

「先輩のおごりなんですから、流石に決定権ぐらいは先輩にありますよ」

「え、他の権利はないってこと……?」

「いえ、『わたしを介抱する権利』とか『わたしを持ち帰る権利』とか『わたしを抱く権利』とかちゃんとありますよ?」

「全部同じじゃねーか」

先輩は悪態をつきながらも、結局串焼き盛り合わせを選んで、送信ボタンを押していた。

飲み物が来るのを待ちながら、静かな時間が訪れる。

わたしは先輩の肩に頭を乗せた。先輩はただ黙って受け入れてくれた。

……………。

……………あれ?」

そういえば先輩。さつき『わたしを持ち帰る権利』とかありますよ! って言った時に、『いや、その権利は行使しないわ』って感じのツツコミ入れてこなかった? いつもなら、いらねーわくらいの一言はにべもなく浴びせてきてたのに。

もしかして、結構満更でもない?

仕掛けてみるか。

「今日のお仕事は忙しかったんですか?」

「……忙しかったからあんな時刻に退社したんだよ」

「そうですね。繁忙期ってだいたいあのくらいの時間帯に退社なん

ですか?」

「いや、偶にもっと遅くなって日付をまたぐ時がある」

「げ。それヤバイですね…。芦間さんとか智佐吹さんとかも皆そんな感じなんですか?」

「まあな。最後の追い込みともなるとだいたいそんなもんだ」

「相変わらずみあげた奉仕の心ですね…。少しくらいはわたしにその心を割いてくれても良いのになあ」

「だから今こうして時間作ってるだろ?」

「それはわたしが待ってたからでしょ?」

「バレた?」

「バレバレです。バツとして来週もわたしに付き合ってください」

「…：来週だと水曜日なら早いと思う」

「え。結構すんなり受け入れてくれるんですね」

「あ…。いや、やっぱり無しで。水曜予定あったの思い出したわ」

「嘘ですよね?もし嘘だったら、休日デートしてもらいますよ?」

「それ、来週水曜日と週末デート両方やるやつじゃね?」

「バレました?」

「バレバレです」

「全然似てない」

「マジトーンでツッコミ入れるのやめてね。マジで怖いから」

別に脅しているわけでも嫌悪感を表しているわけでもないのに、なぜか男子から怖がられるんだよなあ。ほんと意味分かんない。

「というか、やっぱり水曜日に予定あるのは嘘ってことでいいんですよ?・暇なんですよ?」

「暇ってわけじゃないけどな…。普通に仕事が長引くかもしれないし」

「まあ水曜の方は了解です☆ それで…週末デートの方はどうします?」

「お前、俺が既婚者ってことわかってるよね?」

「それ、先輩が言ったら自分に刺さりませんか?」

「はい。その通りです…。今世紀最大の『お前が言うな』だったわ…。」

「卓球しましよ卓球！ほら、高校の時のリベンジマッチってことで！」
「そんなんでいいのか？」

「社会人になってからそんなことすら出来てないんですよわたし。先輩付き合い悪くなっちゃったし……」

「それは、流石に仕方ないだろ……」

「まあわかってて言っているの、そこまで気に留める必要はないですよ……はあ……」

「めっちゃ罪悪感抱かせようとしてるじゃねーか」

「バレました？バレバレですよ？☆」

「その前に映画ですね。あ、あと、ラーメン屋行きたいです！連れて行ってもらったあのめっちゃこってりした味のところ！」

「え、アレでいいの？アレが好きな女子とか平塚先生くらいだと思つてたけど」

「……先輩って未だに平塚先生と連絡取ってるんですか？」

「取ってるというか一方的に連絡が来るだけだぞ。仕方ないから一応月イチで二人で二郎行ったり、家系行ったり、燕三条系行ったり……」
「全部ラーメンなんですよ」

「というか月イチって。思ったよりも頻度がめっちゃくちゃ高い。下手したら、わたしよりもずっとオフデートしてるんじゃないや……。もしかして、愛人レースで今一番リードしてる女性って平塚先生!?だとしたら思わぬ伏兵すぎるし、勝ち目が……。だって先輩平塚先生のこと超好きだし。あの人がもう少し若かったら余裕で先輩の奥さんになってたと思うし。」

「因みになんですけど一緒にラーメン屋行つたときには、どんな話をするんですか？」

「大体は愚痴だな。彼氏が出来ないとか、知り合いがまた結婚したとか、前に結婚式に参加した知り合いが離婚したけど直ぐに再婚したとか」

「最後のは普通に気になってしまいますね」

「ああ。タイトル通り凄く闇の深い話だった」

「聞きたくないけど聞いてみたいかも」

「お前、他人の込み入った話とか好きだったけか？」

「先輩よりはそういう話に関心があるとは思いますが」

「……そうか」

「もしかして、先輩。『なんだ、一色も女子なんだな』とか思ったりしました？」

「い、いや……。そんなことはない、ぞ？」

「うわ、絶対思ってるやつだこれ……」

「因みに再婚相手は前の旦那と同じ会社に勤めてたらしいぞ」

「うわ、何その修羅場……。というか、話そらさないで下さい。再婚話も後で聞きますけど」

「聞くんかい……」

店員さんが、お通しと生ジョッキ2つを机に置く。何故か食い入るようにわたしのことを見つめていたけど相手にしなかった。どうせ後で個人的に連絡先を聞かれるんだろうけど、生憎わたしは今、一人の男性にしか興味がありません。連絡先も教えません。それくらい察してほしい。だってこんなに色々話していて、未だに机の下でわたしと先輩は手を繋いでいるんだから。まあわたしが一方的に手を握っているだけでも言うけど。

「じゃあ食べましょうかー♪」

ここでようやくわたしは手を離れた。先輩は少し驚いたような顔をしてこちらをじっと見た。もしかして、あーんで食べさせてくださいみたいなことをわたしがかもと危惧していたのかもしれない。正直、それも一瞬頭をよぎった。だけど敢えてそれをしなかった。先輩にもっと意識してもらいたかったし、先輩から距離を詰めてきてほしかった。

「いただきますーす」

「……いただきます」

これからだ。これからもっと貴方にはわたしに溺れてもらわないと……。

私は着ていたシャツの第一ボタンを先輩の目の前でそつと外した。否が応でも、先輩の男性としての本能を目覚めさせる。

ふふ。先輩、獣の目になってる。ほんの少しでも、頭の中でわたしを犯してくれたのかな。

まだまだこんなものじゃない。もう手は抜かないで本気で墮とすと決めたのだから。

あ、あと『あくん』は後々ちゃんとやってもらいますからね。

続く

第六十四話

（Interlude）

——今日彼は、平塚先生にあつてくると言つて家を出た。

本当はずつと可愛がつてきた後輩のあの子に会うんじゃないの？

だって、貴方は平塚先生に会う時にはそこまで身だしなみを気にしなかつた。

何度も何度も。初デートみたいに鏡を見なかつた。

気怠そうに家のドアを開けていくくせに、顔はどこか笑っているよ
うな。

彼女とデートした時もそんな顔をしてた。まるであたしのことが
見えていないんじゃないかって疑つてしまうほどに…。

これが本当にあたしが望んだ結末なのかな？

貴方はあたしのもとに戻つてきてくれる？

あたしと彼女を選んでくれる？

それとも……。

—Side Hachiman—

休日出勤という言葉を作った人名乗り出て下さい。八幡先生怒ら
ないから。

流石に、週末ということもあつてかローカル線の乗客数は決して多
くない。途中駅からの乗車であつても余裕を持って座ることが出来
た。

どうして、休みの日に出かけなければならない。旅行会社やレジャー施
設の悪しき洗脳に我々は毒されてしまったのではなからうか。いや、
偶に俺も出かけると言えば出かけるからそこまでは言わないけどね。
ちよつと考えちゃつたくらいで。

流石に早く着きすぎるかもしれない。だって、あいつを待たせたら
絶対にペナルティを儲けてきそうだし。それにしても、集合場所まで

あの時と同じにしなくても良いのでは？

改札を出て、指定された待ち合わせ場所で携帯を見る。画面には新着メッセージが1件入っているとの通知が表示されていた。

『ひよつとしてもう着いちゃいました？』

彼女からだった。俺は素早く返事を返す。

『ひよつとしなくても着いたな』

『もうちよつとかかりそうだよ〜みたいな気遣いは無いんですか？お陰様でわたしめっちゃ急がないといけないじゃないですか〜』

『別に強要はしていない。ゆつくり来てくれて構わない』

『その返しは一番反応に困ります汗 素直に罪悪感しか生まれません……』

LINEの公式キャラクターのウサギがドヨンとしているスタンプが送られてきた。別に気にしなくても良いのだが。

というのも俺が集合時刻の30分以上も前に到着したからだ。どう考えても早すぎる。俺の方が一色を急かしてしまったように申し訳ない。

まさか、勢いというかノリで話していた休日デートが本当に実現してしまうとは思ってもよらなかった。流石に、一色と二人で会ってくるとは結衣には言えなかったので平塚先生と会うことにしておいた。一応、一色とのデートが終わればそのまま夜に平塚先生に会うことになっていてというのは紛れもない事実なので嘘は言っていない。

いや、ふと改めて考えてみると女性を梯子することになってるな俺。一色には夜は他の予定があると行って日中だけと了解は得ているものの、その後の予定がバレたらとんでもないことになりそうな予感しかしない。

夜はラーメン屋じゃないほうが良いな。昼に一色とラーメン屋に行く予定になっていたので、平塚先生とまでラーメン屋になると3食のうちの2食がラーメンになってしまう。嫌いじゃないが流石に胃がもたれそうなのであっさりしたもの食べたい。もうすぐ三十路だからね俺。というか、なんであの人はアラフォーにもなって、ラーメンをあんなにもガッツリ食えるんだ……。ひよつとしなくても同

じカテゴリの生物とは思えない……。しかも、年々綺麗になつてしかも可愛くもなつてるし。本当に早く誰かもらつてあげて！じやないと俺の愛人になろうとしてくるからあの人。最近マジでアプローチ半端ないからかわすの必死なんだよ（泣）

「ごめんなさ〜い！先輩、大変お待たせしました〜！」

後ろから大声で俺を呼ぶ声がする。早速、周りの人の視線が突き刺さるからやめてほしい。彼女の相手が俺だという事実を周知させたくない。このまま黙ってやり過ぎしたい……。でもそれをやるとあの後輩はもつと過激な方法で攻めてくるからそれだけは絶対に回避しなければならぬ。

出来るだけ周りからの視線を外すように柱の陰に隠れて携帯を見るふりをした。こういう時にイヤホンでも付けていれば言い訳のしようがもつとあつたのかもしれない。

「……………なんで無視するんですか？」

横からひよっこりと顔を出して頬を膨らませている。無視をしているわけではないが見方によつてはそう見えるのかもしれない。

「……………おはよう一色」

「……………おはようございませす先輩」

納得いつてなさそうだったが、どうやらそれを飲み込んでくれたらしい。普段まとめている長い髪は今日は下ろしており、街行く男性を虜にしている。かく言う自分も多分に漏れず、そのうちの一人だった。ベージュ色のロングコートが綺麗さと可愛らしさを共存させている。総武高校の時に葉山とのデートの予行練習みたいな形で週末に付き合わされた時と似たような服装をしている。

一色は俺の前に回り込んできて、じつと顔を覗き込んできた。直視できない……………。

「どうですか先輩？今日のわたしのコーデイネートは？」

一色が見せつけるようにくるりと一回転をして今日の衣装を披露する。

「凄く似合ってるぞ。可愛すぎて真っ直ぐ見ることが出来ないくらいには……」

「もしかして、そう言っていればわたしと目を合わせずに済むとか思ってませんか?」

「そ、そんなことはない」

「はあ…これだからこのヘタレは……」

さらつとディスプレイされたな。まあいつものことだけど。ディスプレイされすぎて感覚が麻痺しているまでである。

「まあ良いです。じゃあ行きますか先輩♡」

一色が腕を絡めてきた。最近はその当たり前になってきていて、それを俺も当たり前のように受け入れている。

「えへへ♡」

「随分と嬉しそうだな」

「そりやまあまあ☆先輩と仕事終わりじゃない時に会うなんて大学の時以来ですから」

「そういえば社会人になってから、一度もなかったっけか?」

「ええ全く」

「…それはなんというか。申し訳ないことをした」

「え、なんで先輩が謝るんですか……」

「え?違うのか?」

「いえ。先輩はわたしのわがままを聞いているだけなのに……」

「そうだな。でも嫌なら断るだろ普通」

「え……それって……」

「……まあ吝かではない」

「そ、そうですか…嬉しいです…」

一色はしおらしくなっていた。こんなことを言えば調子づくかと思っていたら案外突き刺さったらしい。好意的に受け入れてくれただろうか。

何年も真つ直ぐな好意を向けられ続けている故に勘違いをしようと、何年か杞憂もないからこそその言葉。ずっと捻くれた言葉で詭弁を弄して彼女から逃げ続けてきたことに対する自分なりの贖罪。勿論、決してそれだけではない。それだけじゃないからこそ、俺は今日こうして彼女と二人でいる時間を選んでいる。

「先輩……それって同情……とかじゃないですよね……？」

「……同情が無いと言えは嘘になる。でも……それだけじゃないから。それよりも、もつと大きな感情があったからここにいる」

「っ！」

一色の腕に力が入る。しがみつくような締め付けの強さが伝わってきた。

「良いんですか？本当に……？……？」

彼女も曖昧に質問する。その言葉を口にしたら今の関係が壊れてしまうのではないかと恐怖しているかのよう。ラウンジで一度伝えていないはずなのに、やはり信じられないというのが彼女の正直な感想なのだろう。

「俺は、一色さえ良ければ俺でも良いんじゃないかと思ってる」

「結衣さんと雪乃さんのこと……どうするんですか？」

デートを始めて、すぐのことなのに彼女は早くも核心を突いてきた。

「でも、俺には……彼女たちを選ばないなんて事は出来ない」

それだけは譲れなかった。あの2人も俺にとってかけがえのない存在だ。歪んでいると分かっているけどどうしても嘘はつけなかった。

「……はい。分かっています。わたしだってそれは理解しているつもりです。先輩にとってあの2人がどれだけ大きな存在であるかも、わたしなりに納得しています」

「2人だけじゃない」

「……え？」

「俺には……2人だけじゃないだろ……。もう1人、大事な人がいる。たとえば彼女たちとは違って、それとは別に大切な繋がりだと思ってる」

「~~~~~！」

一色が真っ赤になって顔を伏せた。「誰」とのは明確には言っていないものの、真意は伝わったらしい。

「その、だな。関係とか。繋がりとかってさ。1種類というか、1つじゃないだろ？愛情とか、恋慕とか、それこそ相手を想う感情を一括

りに出来ないだろう？”LIKE”と”LOVE”だけじゃない。そんな一言で……。俺は、この関係も感情も……。括りたくない」

「そ、それ、どういう意味で言ってるんですか？」

「悪い……。上手く言えなくて……。だから、その……」

どんなに探したって、辞書で引いたって見つからない。紡ぎ出すことの出来ない感情だから。手放したくない、ずっと大切にしていきたい感情だから。それが傷つける事になっても、エゴだとわかっていても、嘘という一言で終わらせたくない。曖昧な終わらせ方で理解もしないで、終わらせたくない。わかりたい。その行為が、彼女の拒絶を生むとしても……。それ以上に今は……。彼女に踏み込んでいきたい。「俺には一色いろはが必要で、大切に、もつと隣に居てほしい存在なんだって事だと思う……」

一色は目を丸くしてこちらを見た。そして、吹き出したかのように笑みが溢れる。

「ぷふふ。意味分かんない」

「俺も自分で言ってる意味わかんねーよ」

それが説明できていたら、今頃こんなことにはなっていない。

「それ、わたしへの回答になってるようで全然なっていないと思うんですけど。てか、わたしの解釈次第でどうにでもなりません？」

「かもなあ」

「本当へタレだなあ……」

一色は呆れたようにため息を付いた。

「先輩」

「なんだ？」

「今日、ちゃんとわたしの事を恋人だと思って本気でデートして下さい」

一色は鋭い眼で俺の目をじっと見つめる。

「先輩がわたしの事を大切だと思ってくれているのなら、行動で証明して下さい。わたしを納得させて下さい」

「今日一日でか？」

「……はい。今日の終わりまでに……。わたしのことを……口説き落として

下さい」

そう言うと一色は手を解いて俺から一步距離を取った。

それは彼女からの初めての挑戦状だった。俺の気持ち、回答を試すかのような試練。

「わかった」

「わたし、そんなに軽い女じゃないですよ？」

「知ってるよ」

「もしかしたら、先輩を困らせたくて勘違いさせるようなこといっぱい言っているだけかもしれないじゃない？」

「だったら確かめないといけないな」

「……っ！………そ、そしたら、またわたしに振られちゃうかもしれないよ？」

「そしたらまた口説くよ。お前が振り向いてくれるまで、何度も振られてやる。だってもう数え切れないくらいお前に振られてるから俺。一回の失恋のダメージ程度で終わるようなやつじゃねーよ」

「……………ルール……ルール違反です。今日までに口説き落として下さいって言ったじゃないですか」

「でも明日以降も口説いてはいけないとは言ってないだろ？」

「……………っ！」

「そうやって何度も試合をしてきた仲じゃねーか俺たち。今度は俺が何年でも付き合ってやるよ。お前が10年近くそうしてきたなら少なくとも10年は同じように頑張らないとな」

「………そんなの無理です。………絶対に無理です………！」

「なんでだ？」

「だって………そんなの………一日ももたない………」

「………いや、最後がよく聴こえなかったんだが………」

「……………もう良いです！早くデートしましょ！ほら！さっさとわたしのこと口説いて下さい！！」

「おい一色！待ってっ！」

一色は俺を置いて早足でその場を去った。

彼女に置いていかれないよう俺はその後ろをなけなしの体力で必

至に追いかけた。

走っている最中、俺はかつて進路希望を聞き出そうと葉山に躍起になっ
てついていったあの頃を思い出していた。

続く

第六十五話

—Side Ironha—

ああああああああああ！もう。どうしよう……！本当にどうしよう……！

完全に予想外だ。

まさか先輩がこんなにも早く迫ってくるなんて……。

思ってた以上に先輩は精神的に追い詰められていたのか。それとも先輩がようやくわたしの魅力に気づいてくれたのか。後者だったら凄く嬉しいけど。

足が速くなる。止まってしまったら、先輩のもとに走っていったってまいそうになる。

嬉しすぎて今すぐにでも先輩に抱きつきたい。思いつきキスしたい。もし、キスしちやったら脇目も振らず何時間も続ける自信がある。

心臓が苦しい。

破裂しそうなくらいバクバク言ってる……。

今までだって、先輩のことを好きで好きでたまらなかつたはずなのに……、もつともつと上があるなんて知らなかつた。

こんなのつらすぎるよ……。

ああ、もう。

どうしようもないくらい、先輩のことが好きなんだわたし……。頭が一杯になって、自分を制御しきれないくらいの感情があるなんて……。

先輩が……先輩がわたしの事を本気で口説いてくれる……！

本当は落ちちやってるのに。とつくの昔に口説き落とされているのに。

先輩に口説かれたくて強がってしまった。

思わせぶりなこと言つて、先輩を挑発してしまった。

だって……口説いてほしいんだもん。

わたしのこと好きなんだよって表現してほしかったんだもん。
どんな態度で、どんな言葉で伝えてくれるのか楽しみで仕方がない
んだもん。

嬉しい。

ダメだ……。笑顔が堪えきれない。

わたしは先輩に口説かれる、いい女でいなくちやいけないのに。
この幸せな時間が終わってしまわないように。

ずっと先輩がわたしのことを追いかけてくれたら良いのに。
捕まえて欲しい。

早く捕まえてわたしを強く求めて欲しい。

でも終わってほしくない。

終わってしまったら先輩が追いかけてくれなくなってしまう。

でも早く先輩と繋がりたい。

そんな贅沢な時間がこれから始まる。

結衣さん、雪乃さん。ごめんなさい……………。

貴方達の先輩を奪うことを許して下さい。

貴方達の先輩を壊してしまうことを許して下さい。

でも、わたしだって貴方達に負けなくらい本気なんです。

だって10年近くも我慢したんだから。

こんな日が来ることをずっと待っていたんだから。

貴方達が幸福に満ち足りた時間を送っている時に、貴方達には想像
もつかないであろう量の苦汁を舐めてきた。

悔しくて。眠れなくて。何度も泣いて。何度も諦めかけて。

やっとわたしはスタート地点に立つことが出来たんです。

感謝は勿論しているんです。

わたしよりもちよつと早く先輩と知り合つて、先輩の心を開いてく
れて。

かけがえのない居場所を作ってくれて……………。

わたしは後からやってきた泥棒猫だつてこともわかっているんで
す。

あの輪の中には入ることが出来ないこともわかっているんです。
……………。

それでも……………。

少し遅かったからってだけで……………諦められるはずがない。

この気持ちを無かったことにして生きていくなんて出来るはずがない。

こんな人に二度と会えるとも思えない。

この人だけなんです。

わたしにはこの人しか居ない。

この人だけが……………。わたしの全部を受け入れてくれる……………。

だからもう遠慮はしない。

絶対に奪ってやる……………。

わたしが一番になってやる。

貴方達2人に対する罪悪感に苛まれながら、わたしに溺れさせてやる。
もう誰にも渡さない。

お二人にも、留美ちゃんにも、智佐さんにも、玉木さんにも……………。

先輩の足音が大きくなってきた。わたしを追いかけてきてくれて
いるんだ……………。

こんな些細なことだけでも嬉しくて心が弾んでしまう。

足取りが軽くなる。

ちよつとだけ走るように先を急いで先輩から逃げるように……………。

そしたら先輩はまた追ってきてくれる。

えへへ……………。

楽しい。

大好きな先輩。

わたしって凄く面倒くさいですよ？

もっと知って、もっと面倒くさく思ってください。

まだまだこんなものじゃありませんよ。

だから……………。

わたしは後ろを振り返って先輩に微笑んだ。

「ほら、早くしてください先輩♡」

「いきなり逃げるなよ……」

「そんなことはありませんよ?」

「そうかよ。じゃあほら」

そう言うのと先輩は右手を差し出してきた。

「……お前が逃げないように。ちゃんと手綱握っておかないとな」

「……っそ……っそですか……」

もう。なんで握ってくれないんですか!?そこは男らしくがっつと手をとつちやえばいいのに。だって、デートなんですよ?わたし随分と前から先輩のこと好きって言ってるんですよ?どうしてここまで来て、勘違い予防線張ろうとするのかなあ。本当めんどくさい。

……っと思いながらも滅茶苦茶嬉しいから喜んで握っちゃうんだけど。

「~~~~♪」

「手を握っただけで上機嫌になっってくれたのか?」

「そんなわけないじゃないですか☆この程度ではわたしは落ちませんよ?」

それにただ握っただけで恋人つなぎじゃないし。先輩から指を絡めてきてくれたらなおよし……。まあ望み薄なのは重々承知。

「とりあえず、最初は映画行くか?」

「うーん、そうですね。それ見てから卓球の流れでしたっけ?」

「ああ、その後にラーメンだな」

「ふふ。なんだか懐かしいですね」

「そうだな。そういえば、あの時もデートを採点されていたっけか」

「ですね。葉山先輩とのデートの予行練習として先輩を利用していた頃ですね☆」

「そうだったな」

「あ、今もしかして、葉山先輩にちよつと嫉妬しちゃいました?」

「……多少な」

「~~~~!」

な、なんなんだこの先輩は……。わたしが知ってる先輩じゃない。

びつくりするくらい素直で従順なんですけど!?…というかわかつてるくせに。本当は利用した相手と本命は逆だってこと。やば。からかうの面白すぎ。

可愛いつて言っただけ。だから、早くもつと口説きに来て。

「今日の映画は何を見る？」

「最近の映画情報って全然仕入れていないんですよね。先輩は何か候補を抑えてきてくれたりしてますか？」

「まあ、2つほど候補を見繕ってきた」

なんとまあ。歩く受動態の肩書を持つあの先輩が。映画候補を相手のために用意してくるなんて。なんか若干親の気持ちみたいなものが湧いてきてしまう。

「へ。そうなんですね。ちなみにどれとどれですか？」

「海外発のミステリーか、こっちのノンフィクションの邦画だな」

「なん……ですと……」

そんなバカな。普通に良さそうな持ってきたんだけどこの人。てつきりアニメ映画とか特撮をチョイスしていきたくてたのにな。しかも、このミステリー物、わたしが来週1人で観に行こうかなあって計画してたやつ。

「え〜と…。じゃあこっちのミステリーの方見ましょう」

「わかった。俺もそっちを見たかったから丁度良いな」

「は、はい……」

優しい……。

いやいやいや！わたし落ちるの早すぎでしょ！こんなもので満足してる訳にはいかない……！だって、先輩にもっと線を踏み越えてもらわないといけないんだから……！

「チケット取ってくるから待っててくれ」

「あ、はい……」

先輩は何も言わずにテキパキと事を進めていく。手際が良いのは知ってはいるけれど、こうして先輩主導で進行することが珍しいので正直どうしようって気持ちが大きい。

凄くわたしのことを思ってくれているのは伝わっているし、好感度も順調に上がっている。点数だって今の所加点要素しかない。

無理してないのかなあ。でも先輩って面倒見が良いからこれくらい当たり前のようにやるんだよね……。お米ちゃんに対してもこんな感じだし。というかお米ちゃんって今の先輩の状態知ってるのかなあ。

しばらくして先輩が駆け足で戻ってきた。時間に余裕はあるのに急ぐあたり、先輩らしさが出ていてほっこりする。

「真ん中ちよつと後ろの席が取れた」

「お、良いですね！ありがとうございます！」

先輩からチケットを受け取る。わたしがそれをしまったのを確認すると先輩はまた手を出してきた。だから許可取らなくて、いきなり握ってほしいんですけど。まあ手を出してきた瞬間に握ったんだけどね。

「9時から上映するみたいだぞ」

「もう入っちゃいます？ちよつと早い気もしますが」

「別にいいんじゃないか？特に他に回るところもないみたいだから」

「じゃあ行きましょう！」

暗いところだとドキドキするし。先輩とそういう場所に1分1秒でも長く居たいからわたしとしては寧ろ好都合だ。

会場は思ったよりも空いているみたいだ。わたし達が当日の予約で良い位置の座席を確保できたあたり、そこまで混み合うこともないはず。

先輩の方をちらつと見て様子を窺う。どこかそわそわしているよな気もするけど、いつものことと言われてしまえばその通りなのであまり気にしないことにした。

スタッフにチケットを渡して半券を返してもらおう。座席を確認するとあまり見慣れない座席番号が記載してある事にここでようやく気づいた。

「……………」

「どうかしたか？一色」

対予約してたでしよ…。何が運良く取れただよ！見え見えの嘘つかれたことの方に腹立つてきたわ！わたしがミステリー物選ぶって決め打ちしていたのか、それとも両方とも映画でカップルシート予約を取っていたのかはわからない。というかこの際どうでもいい……。でも先輩なら両方予約して万事心配ないようにするんじゃないかな。この人妙などころでリスクヘッジするし。

動揺が表情に出ているのか先輩が怪訝な顔でこちらを見ている。

「もしかして、一色。こういう席は初めてか？まあ俺もただけど……」

もしかしなくても初めてだわ！

いや、あんた知ってるだろ！こちとらあんたに青春期全部費やしてるっていうのに！

そりやあわたしも大学生の頃先輩と映画に行った時に、こういう選択肢を頭に入れなかったわけじゃない。それでも、結衣さんに申し訳ないから我慢してたんですよ!?それを、今！相手からされて、頭の中てんやわんやだよ！

こういうわかって聞いてくるところ結構ムカつく……。先輩の嫌いなところランキング上位入賞。

なのに、先輩の方からカップルっぽいことをしてくれた喜びのほうが勝って、言い返せない。我ながらなんて単純な女なんだろう。

「右と左どっちが良い？」

どっちでも良いわ！こっちはそれどころじゃねーよ！めっちゃめちゃ変に意識しちゃって、こちとら今まで当たり前のように座っていた先輩の隣を確保することに躊躇が生まれてしまっているんだよ！なんで昨日までのわたし、これが普通に出来てたんだ……。！相手好きな人ぞ？相手めっちゃ好きな人ぞ!?わかっておるのか一色いろは!?ヤバイ、混乱しすぎて口調訳わかんなくなってる。顔だつてめっちゃ赤くなってるだろうし、恥ずかしい……。！早く照明暗くなってくださいお願いします。

「じゃ……。じゃあ左で」

答えちゃったよオわたしいい！普通に回答してしまった……。！その

ままちよさんと腰掛けてしまった……！

マズイ。完全に先輩のペースだ。こんなの一日どころか午前中に落とされる……。今それくらいグラッと来てる。このまま周りが暗くなったら、もう妄想が止まらなくなるんですけど……。

……え、ちよ！先輩、密着し過ぎでは!?肩からお尻まで全部くっついてませんか!?心臓が……心臓が意味分かんない速度でバクバクしてる……！

しかもこの状態で何故肩を抱いてこない……!?そこだけ変にヘタレを残すなよ！抱いて！思いつきり力強く引き寄せて！そしたらもうトドメだから！わたしそのまま首に手を回すから！映画見ないで2時間先輩のこと見てるから！

『NO MORE!! 映画泥棒!!』

タイミング悪!!

今めっちゃいい雰囲気だったのに、運営にぶち壊しにされてるじゃん！ほら、先輩も若干気まずそうな顔してるし……。

……ぎゅ。

ここで肩抱くのかよ!?カメラ男が取り押さえられているときと同じようなことしてきたよこの人。

でも、わたしもつられて腰に手を回しちゃったよ……!頭も肩に乗せちゃったよ……!ああ……もうヤバイ!先輩の首……!がこんなに近くに……!舐めたい。キスしたい。腕だけじゃなくて足も絡ませたい。

こうなってしまうたら、近日公開予定の映画の予告情報は勿論、本編なんてまるで頭に入ってくるわけがない。

……。

結局、上映が終わるまで、腕の組み方を変えたり、手を握ったり、足を絡めたり……そんなわたしの一方的なじゃれ合いで映画館の部は終了してしまった。先輩はというと終始わたしに合わせてくれた。じんわりと広がる幸福と快感が染み渡るように全身に広がって、映画館を出る頃には何も言わず腕を組んで、密着するように次の目的地へと足を運んでいた。

映画の内容？そんな物何も覚えていない。

記憶にあるのはお互いの熱い吐息と絡み合う時の衣擦れの音だけ。他はいらない。

整う気配のない呼吸をし続けながらわたしはじっと上を見上げていた。

続く

第六十六話

—Side Ironha—

さて、、、先程までのデレデレは無かったことにして、一旦リセットしよう。

卓球をするために運動公園の体育館に到着した頃には頭を冷やすことが出来た。

流石にさつきのはわたしもエンジンかかりすぎた。あんなのは、もうわたし口説き落とされてますよサイン以外の何物でもないじゃないか。なんとというか後の祭り感が半端ないけど、一応一日でわたしを口説き落とせるか否かという勝負の真つ最中なのでそのルールと設定には則つてもらおう。正直、このルールあるのか無いのかわからないようなものになってしまっているとかは禁句。

先輩も羽目を外しすぎたと反省しているのか、さつきから微妙にわたしたとの距離が遠くなっている。それはそれでちよつと癪なんだけどなあ。先輩は無かったことにしないでほしい。

「何セットマッチにします？」

卓球台を境にお互いが向かい合つて立つ。コートに向かい側に居る先輩はあの時よりも少しだけ大人びていてドキドキする。

「2セットとかでいいんじゃないの？知らんけど」

「せっかく先輩のラーメンおごりがかかっているんですから、1セットだけは確かに味気ないですよね☆」

「ねえ、それってちゃんと俺が勝つたらとかの条件もあるやつだよね？そうだよね？」

チツ……。前回の失敗からきちんと学んでいるらしい。先輩が指摘しなければ、前みたいに負けてもわたしに何のデメリットも無いよ。うな平等条約を押し付けてやろうと思っていたのに。

「まあ良いですけど、先輩がもしわたしに勝つたらどうしてほしいんですか？」

「そうだなあ…。かと言って何か特別やってほしいことがあるわけ

じゃないんだけどな」

いや、ねーのかよ！なんなら身体とか要求されたとしても勝負に乗ったまであるのに。寧ろ、わたしが勝ったら先輩の身体を要求したいくらいなのに。

「別にわたしが奢るとかでも良いんですよ？」

「いや、別に俺が勝っても奢るつもりだったから良いよ」

「え……？」

いや、嬉しいんだけど、それ言っちゃったらわたしが頑張る意味無くなっちゃうじゃん!!馬鹿なの!?!もしかしてこの人滅茶苦茶馬鹿だったりするの？

「え〜。でも先輩がお金を出してくれるってわかってちや、この卓球にかけるモチベーションが無くなってしまふといいますか〜。何か他の条件設定してくれないとわたしも本気で挑めないますよ？」

「た、確かに。じゃあお前の命令を聞ける範囲で1つ聞くんっていうのは？」

「へ〜。その聞ける範囲ってのはMAXでどれくらいまで行けるんですか？」

「俺が現実的に、物理的に達成できるって意味でだ。勿論、非道徳的だったり、倫理観には反するものはNGだ。平塚先生に求婚してこいとかもダメだ。あの人本気になっちゃうから」

「注意書きがやたら多いのが先輩らしいですね…」

というか、具体例で平塚先生に求婚がネタにされている時点である人フラグZEROですね。なんというか杞憂に終わってほつとはしているんですけど、張り合いがないというか……。平塚先生って単純に今性欲とかヤバそう。いや、マジで偏見でごめんなさい。

ラケットでボールをポンポンと羽つきのように跳ねさせながら先輩が靴紐を結ぶのを待つ。

前回は不意打ち作戦や絶対領域戦法を活用しても勝てなかったの
で、それらの上に行く戦法を考案&実行しなければ先輩を倒すことは
出来ないからなあ。いや、正攻法で倒すとかマジでない。イカサマし
て勝つ!!必勝法を模索するのは当然の考え方でしょ♪

向こうもわたしがまともに卓球するとは思っていないはずなので、いかにしてその裏をかくか……。でも先輩って基本的に色仕掛け弱いつていう分かりやすい弱点あるんだよなあ。

そこを突いて攻略していきたい。しかも、この作戦は同時に、先輩を誘惑するという副次的効果ももたらしてくれる。寧ろそつちが本命まである。

「じゃあわたしが勝ったら、勝ってから1時間の間は先輩がわたしに触れるの禁止で！」

「づえ!？」

ふふふ……。あからさまに『なんでー!?』みたいな顔してるなこの人。この反応から察するに、さっきの映画館の手応えが良かったものだからそんなに努力しなくても口説けるだろとか思ってるんだろうなあ。甘い! 甘いですよ先輩! あの程度でわたしは崩せません! もっと積極的に情熱的に先輩から愛情を表現してもらわないと、わたしは満足できません!

「……分かった。なら俺が勝ったら同じ条件を提示させてもらう」

「ヴェエエア!？」

なんでー!? なんで先輩がお触り禁止をペナルティにしてくるの!?

「そ……そんな事言つて本当に良いんですか? わたしにアプローチ出来るチャンスをみすみす逃すなんてどうかしてますよ?」

「心配しなくてもいい。それにお前も分かってて言ったんだろ? 俺たちが提示しているのはあくまで“相手から自分への接触”であつて別に自分から相手に触れることに関しては一切の制限を設けてないつてな」

「な!？」

バレた……。やっぱバレた……。わたしが勝負に勝つて先輩を1時間ひたすらからかう計画が……。

違う!

というかマズい! ヤバイ!

先輩も同じカラクリに気づいたということとはつまり、わたしが卓球

で先輩に負けたらわたしが反対に先輩に1時間からかわれるということだ。それだけは絶対に避けないと……。

だって、そんな拷問耐えられないっ……。

5分もしないうちにわたしの方から先輩に触れたくなっちゃうよ……。

わたしがもう先輩に口説き落とされて、滅茶苦茶にされたいってことがバレてしまう……。

それは……わたしとしても本望ではあるんだけど、自分の中のプライド的な何かが崩れてしまう気がしてならない……。

絶対に負けられない戦いがここにあるっ……!!

これはもうなりふり構ってられない。

どんな手を使ってでも、先輩に勝つ!

……………。

そして……。

「……………はあ……………ふう……………。せ、先輩、いい加減折れてくれませんかね?」

「ぜえ……………ぜえ……………そ。それはこっちの台詞なんですが?」

「はあ……………はあ……………。まさかの……………10連続デユース……………なんて展開は予想だに、しませんでしたよ……………」

「ぜえ……………はあ……………ま、まったくだ。しかも……………フルセットにもつれ込んで……………」

先輩の言う通り、ゲームは完全に泥試合と化していた。てつきりどころかがあつさり勝利すると思いついていたゲームも気がつけば、互角の戦いを繰り広げてしまった。そして、現在お互いが1セットをもち取り、運命の最終セット。わたしが先にマッチポイントになり、勝負あつたかと思われた矢先、先輩による謎のサービスエースが決まってしまいデユースに。それ以降、お互いが決めきることが出来ずに泥沼の10連続デユースという状態にもつれ込んでしまっていた。正直お互いに体力の限界などどつくの昔に来ていたけど、ペナルティへ

の恐怖と子供じみたプライドが相乗効果となって無限の気力を生み出していった。お陰様でハリウッドのゾンビとしてエキストラ出演が可能なレベルには息も絶え絶えなアンデッドいろはとしてこの地に降り立っている。先輩なんて最初からゾンビみたいなものだから、ウォーキング・デッドの長だ。ワイトキングだよあれ。いや、それは骸骨か。

絶対領域色仕掛け作戦やよそ見攻撃の戦術も虚しく、このザマ。先輩意外に卓球上手いんだよなあ。これでもわたしもわたしでそれなりに自主トレーニングと研鑽を重ねてきたつもりなのに。先輩もいつか自分で卓球を練習していた時期でもあったのかな？

そして、わたしにはもう一つの大きな問題が……。

そう体力の限界。

某横綱の言葉を拝借して言うほどのことでもないけど、わたしとて立っているのが精一杯。

先輩も疲れているとはいえ、流石にまだ余力を残しているように見える。もしかして……不倫の頃にシすぎてたせいで夜の体力がつかのと同じに運動のスタミナまで付いちゃったんですか？なにそれずるい。わたしなんて……ってわたしもまあシすぎて体力付いてるかもしれないけど。尚こっちは自主トレ。泣けてくる。

しかも、さつきわたしが痛恨のサーブミスで先輩のマツチポイント。ここで1点獲られたら終わってしまう……！

こうなれば……。

「ねえ……先輩熱くないですか？」

少しだけ服をはだけさせて先輩の欲望を掻き立てる。わたしに最早プライドなんてものはない。先輩がわたしを口説き落とすゲームの最中なのにわたしの方から先輩にアプローチするとかいう本末転倒に陥っているのはこの際無視だ無視。

「別に……そこまで熱くないだろ……」

そう言いながらも先輩の視線はわたしの胸に集中しつつある。ですよね〜♪こういう疲れが出た時は性欲が出てきちゃいますよね〜☆男の人って本当単純……。下世話で醜い生物。でも先輩は別。い

や、わたしって本当単純……。

「どうですかね☆そんないやらしい目つきで言っても何の説得力も無いですよ?」

「これは……自然の摂理、真理といっても差し支えないだろ……」

股間が苦しいんですか? いつもより屈んじやって……。ふふ。先輩って本当に面白い。目だけがこっち向いたりそらしたりをずっと繰り返して……。あの時よりも胸だって大きくなって、色っぽくなつたでしょ? 実はエステとか行って豊胸マッサージとか受けてるんですよ。おっぱいを柔らかくするみたいなおコースもあってそれを一時期毎週。今でも月イチで行って……。なんでってねえ、どっかの朴念仁に見せつけるために決まってるじゃないですか。

先輩……えへへ……首から谷間に汗が落ちる様子を凝視しちゃってる……。凄く情熱的な目……。これじゃわたし、痴女だなあ。でもこれくらいしないとこの人落ちてくれないし、わたしのことを意地でも意識してくれないから。

ほら、見えますかあ?先輩のサーブですね……。サーブを逃さないように腰を低く構えて下から覗き見るように相手をじつと見つめて……。見えそうですか?もう、わたしの胸に目を奪われてサーブミスしちやえ。

先輩がトスをあげてサーブを放つ。放たれたボールは綺麗に2回バウンドしてわたしの手元に吸い寄せられるかのようにたどり着く。これを思いっきり返せばわたしにもまだチャンスはある。先輩にしては甘い球を打ってくれましたね。これでまずは……!

「……………いろは」

スカツ。

わたしは思いつきり空振ってそのまま卓球台に突つ伏した。あまにも情けない醜態を先輩の前で晒してしまう。とどのつまり、この卓球試合におけるわたしの敗北が決定した瞬間であった。

え……………ちよつと待って。今のは聞き間違い?

今……………先輩……。わたしのこと……………下の名前で……………?

「……………いろは……………」

「あーあ……………！もう先輩には二度と卓球で負けないうつてつもりだったのにくー！悔しいですけど、じゃあ今から一時間わたしの方から先輩へのタッチは自粛ですねー！」

「……………切り替え早すぎだろ」

「でもラーメンは先輩のおごりですからね☆」

そう言つてあざといポーズを見せつける。これでもう、いつものわたし。さっきは不意打ちで思わず面食らっちゃいましたけど、今後はそう上手くはいきませんよ？

「わかつてる。じゃあ、疲れて腹も減ってきたし行くか」

先輩は手を出してくる。これは手を繋ぐということだろうか。……………つて、そうか。

これは寧ろ都合が良いな。この試合、負けた方がわたしにお釣りが来る。

「なくにやつてるんですか？せんぱい…。わたしは、試合に負けちゃったからわたしから先輩に触れないんですよ？つまり……………」
わたしから先輩の手を握ることは出来ない” つてことですよ？☆”

「っげ……………」

やっぱり気づいていなかったみたい。ふふふ……………。まさか自分で提示した条件に首を絞められるとは思ってもしなかったでしょう？ほくら。今まで誘い受けてわたしに行動させていたツケをここで払ってもらいますよ〜♪

「……………じゃあ握るぞ」

「許可なんて取らなくてもさっさと握っちゃえば良いんですよ」

「仕方ねーだろ……………。正直自分から握ったことなんて殆どないんだから……………大体、結衣の方からだったし」

「へ〜……………。じゃあ、わたしが初めての相手ですか？」

「いや、その前に雪乃がいる」

「……………」

は？…なんですかそれ？いや、分かっているんですけど、なんかめつちやムカつく。雪乃さんは自分から言っておいて、わたしには許

可もらおうとしてくるんですか？何その差別。いい加減私も雪乃さんや結衣さんと最低でも同列に思ってくれていないと流石のわたしもキレますよ？ていうかもうキレてますよ？

「でも……」

「……え!?!」

先輩は指を絡めてきた。つまりこれは恋人繋ぎというやつでは……？

「この繋ぎ方を……自分からやるのは……いろはが、初めてだと思う」

「~~~~~」

何このあざとい男！めっちゃ面倒くさい！本当に面倒くさい！面倒臭すぎて若干キモい！ウザい！ムカつく！

なんでそういう事をこのタイミングで言ってくるんですか？確信犯ですか？ですよね、わたし分かってますよ。先輩って人はそうやってあざとい事をして口説かないとやってられないんですよね？本当に不意打ちが大好きな人ですね、そんな口説き方して受け入れてくれる変人まっしぐらな女性って希少価値高いですよ、いや、絶対この世に存在しませんって、わたし以外。

あ、もしかして口説いてますか？ありがとうございますわたくしって本当に回りくどくて面倒くさい人間なので、こういった変化球のアプローチってぶっ刺さりますし滅茶苦茶心に響きましたつきましては次のデート含めベッドインをするホテルの打ち合わせを行いたいと思いますのでしばらくわたしに一人で考える時間を下さいごめんなさい。

……。

あーもう本当好き。

続く

第六十七話

—Side Ironha—

「休日の昼だからサラリーマンの人少ないかなって思っていましたけど、結構多くてびっくりしてます」

「休日出勤が多いのかもしれない……」

「世知辛いですね」

「そんな中、俺達が店に入るのは確かに申し訳無さがある」

「デートですもんね」

「そ、そうだな」

行列の最後尾に並びながらわたしはぼんやりとラーメン屋のメニューを眺めていた。メニューは先輩が店の前に置かれていた待機している人用の物を取ってきてくれた。枚数に限りがあったので、先輩と2人で1つのメニューを見ている。端っこと端っこをそれぞれ握る。なんか本当のカップルみたいで良いなあ。

「先輩はどれにするんですか？」

「俺は基本、メニューの一番左上を選ぶタイプだぞ」

「先輩らしくてなんか安心しました」

「いや、オススメって書いてあるのにおすすめ選ばないのはなんか店員さんに変な目で見られそうじゃないか？」

「世間体とか先輩が気にするんですか？」

「おおうふ。それはどういう意味だ……？」

「それはもう色々な意味ですよ☆」

元々ひねくれててぼっち極めてたこととか、浮気しまくってることとか、奥さん持ちで先輩とデートしてることとか。最後の2つは同じ意味か。

「い、いろはは何にするんだ？」

「おお……。先輩がわたしを下の名前で呼ぼうと努力してくれている。なんかもう改めてそれだけでも嬉しい。」

「わたしも先輩と同じ物にしようと思ってますよ」

そうやってわたしも先輩と同じくメニューの左上を指差す。先輩

の手に触れるか触れないかの距離に指の先を添えながら先輩をじつと見る。

「……このギトギトで良いのか？」

先輩は人差し指だけをわたしの指先にそつと触れるか触れないかの位置に置いてくる。モヤモヤした気持ちが溢れてきた。

早く……。触れてよ。

先輩はそんなわたしの気持ちを弄ぶかのように、ギリギリを攻め続けてきた。やっぱりこの人わかってるんだ。だからこんな酷いことを……。女の子の気持ちをおもちやにするなんて最低過ぎます。あーもう、こうなるって分かってたからあの試合負けたくなかったのに……。

「そうですねギットギトのが食べたいです」

「平塚先生もギットギトが好きだな」

「は？なんでこんな時に他の女の名前出してくるんですか？」

「ちよ……。怖い。いろはす怖い……」

「は？いろはす？誰ですかそれ？お水？わたしがお水の人ってことですか？そうですか」

「違う違う。いや、どうしてこうなった」

「……………ぷつ。冗談ですよ☆」

本当先輩って可愛いなあ。こんなことで今更怒るわけないじゃないですか。なにせ先輩はこれまでに、わたしというものがありながら結衣さんとはともかく、頭飛び越えて雪乃さんと浮気しまくったり、あまつさえアメリカでおそらく留美ちゃんともイチャコラしやがって。いっぺんぶつ殺したろかこいつ。

「時々冗談に聞こえないんだよなあ」

「だって、8割位本気でしたから」

「それももうマジじゃん……」

「どっかの甲斐性なしのせいじゃないですか？」

「そ、それは……うん、そう、だな。このままは、良くない、よな……」
「え？」

「あ、いや。なんでもない……」

先輩はわたしを置いて店の中に入ってしまった。その後も会話が浮かばずに粛々とラーメンが来るのを待つばかり。味？そんなもの何も覚えていないわけがない。ギットギットの油が鬱陶しく感じるくらいには思考に没頭してた。先輩の言葉の真意を考えることにしか脳を使いたくなかった。

「…旨かったか？」

店を出て開口一番先輩が愚問を口にした。

「そうですね……凄く気まずかったです」

「何の感想……？」

「うるさい先輩」

わたしは先輩の腕にしがみつく。

「もう一時間経ちましたよね？」

「え？あ、ああ。そうだな」

「それで……この後はどうします？」

「胃もたれするしカフェで休憩で良いんじゃないか？」

「先輩にしてはナイスチョイスです。じゃあ行きましょう」

「あ、おい引っ張るなよ……あ……あと、めっちゃ当たってる……」

当たってるんですよ馬鹿。唐変木。女たらし。

……。

そして……。

「すっかり日が落ちてきましたね……」

「お前と話していると時間の経過があつという間だな」

「それ褒めてます？時間のムダがすぎるとかそういうニュアンスで言っていたりします？」

「普通に気が楽だつてことだよ」

「そ、それなら良いです」

あれからカフェで何時間も他愛のない話を続けてしまつて気がつ

けばすつかり夕暮れ時になっていた。

午前中や昼の積極性がどこへやら、後半は先輩は殆ど畳み掛けてこなかった。それなりに警戒していたんだけど、先輩はカフェに腰を下ろしてからはがつつきを全く見せずひたすら穏やかにわたしとの会話を続けていた。それはまるで帰宅部の放課後のダベリのように、一縷の生産性もない猶予期間。わたしと先輩の席だけが時間の流れから切り離されて残ってしまったようだった。わたしがくだらないかわさ話をすれば先輩は優しく笑ってくれた。わたしがお水や追加のカフェラテを頼もうとすれば黙って買ってきてくれた。情熱的なアプローチとは正反対の包み込んでくれるような優しい距離の詰め方。心が安らいで、この人とずつと一緒に居られたら良いのと思わせてくれるような時間だった。

どうして先輩はそんな方法を選んだのだろうか。それとも先輩が本当にそうしたかったのかな。優しく重ね合わせられたままの手のひらからは何も伝わってこなかった。

それが不安でしかない。

「それで、これからどうします?」

「いろははどうしたい?」

「今日は先輩がエスコートしてくれるんじゃないんですか?」

「俺が決めても良いのか?」

「はい。先輩が行きたいところにわたしを連れて行って下さい」

そう言ってわたしは促す…。わたしの求める展開を。わたしが望む展開を。先輩が決してそんな事はしないと分かっているながら。でもほんの僅かな希望を抱いて。

「…なら、少し座らないか?」

「え……?」

先輩が指差したのは近くのベンチだった。帰るかとか、そんな答えを予想していたけれどこれは想定外だ。どういうことだろう……。

それでも今は大人しく従うしかない。

決して人通りは多くは無い。往来から少し外れた場所にあったそこにわたしたちは座った。

なんだろうこの緊張感。先輩のことだから胸キュンな展開なんてものはわたしの頭に隕石が直撃するよりもありえないことなのに、心臓のざわめきが止まらない。

もしかしておまけのプランがあったりしちやいますか？

期待しちやつても良いんですか……？

本当に責任とつてくれるんですか……？

「いろは」

「は、はい……」

先輩が口を開く。

わたしは固唾を吞んで次の言葉を待った。

しかし、それはわたしが待ち望んでいたような言葉ではなかった。

「これで俺が計画していたデートは終わりだ。率直に聞くんだが、どうだった……？」

……。

「え、あ、え……？」

え？

どういうこと？

も……もう終わり……？夕ご飯は？そのあとは……？

嘘でしょ……？

そんな……。

こんなにも幸せな時間がもう終わりなの……？

「楽しくなかったか……？」

先輩は曲解してしまった。わたしが肩を落とすのを見て、落胆と解釈してしまったみたいだ。

「そ……そんなこと……無いです！絶対に……楽しくて、幸せ過ぎて……」

楽しくないなんてありえない。こんなにも幸せな日なんて他にない。自分がこんなにも満たされることなんて今までで一度もない……。

「そっか、良かった」

「だからこそ足りないんです！もつと……もつとわたしは……先輩と一緒に……居たいんです……！」

もつと先輩と一緒に楽しいことがしたい。もつと先輩と馬鹿みたいな話をしていたい。もつと先輩と真面目な話をして将来を熱く語り合いたい。もつと先輩とおしゃれなお店や美味しいお店に行って思い出を共有したい。もつと先輩と仲良くなってこんな関係じゃなくて……もつと前に進みたい。

だから……こんなじゃ足りない……。

こんなんで責任なんて取りきれない……。

もつと。

もつとわたしに付き合ってもらわないと割に合わない。

わたしが。わたしが止めないといけない。

先輩は今わたしを突き放そうとしている。

あれだけわたしのことを巻き込むと決心してくれたはずなのにしばらくたってまた揺らいでしまっている。

結局たった一人で抱え込もうとしている。

だからこそ淡白で中途半端な終わり方を選んだんだ。

ほんの少し、幸せな思い出だけをわたしにくれて。

……。

……なーんてね☆

まったく。ナメられたものですよね……。

そんな程度で諦めたり、踏み込むのをためらうような人間じゃないですよわたし。

ねえ、先輩。

どうして最後に理性が勝ってしまうんですか？

あれだけのこと言っておきながら、わたしの事を捨てるんですか？先輩がやっていることはわたしにとって一番無責任な行為なんですよ？

今までどれだけの言葉を交わしてきたと思っているんですか？曲がりなりにも沢山の時間を一緒にしてきたんです。まがい物の関係だからこそ先輩が抱えている闇だって一番わかっているんです。先輩が土壇場でチキンになることだって。

どうせこういうこととしてくるなんてことは最初から知ってましたよ。

だから……。

もうそろそろ本気で取りに行っても良いよね？

これだけ焦らしたんだから、そろそろだよね。

だから今日は全力で先輩にとって死ぬほど面倒くさくて、都合の良い女になってあげます。

……………。

「それが先輩の責任のとり方ですか？」

「……………え？」

「随分と身勝手に自己満足に満ち足りた提案ありがとうございます。こんな事言ってくるぐらいならやり捨てられた方がまだ納得できま

すよ」

「お前…」

「自然消滅とかでも期待しましたか？残念ですけど、こんな事されたら、もつと粘着して、先輩が我慢できないってくらいに誘惑しますよ？」

「二色…」

わたしは先輩の膝の上に跨った。会社のラウンジで2人きりになった時のように、いやそれよりも近い距離で、先輩の顔を上からじつと見つめる。わたしの長い横髪が先輩の頬をくすぐっていた。

ここからわたしは最後の追い込みをかける。

「名前呼びはどうしたんですか先輩？」

「や、やっぱり、ダメだろ……こんな関係は……」

「なんですか？もしかしてカフェでトイレに行った時に、わたしをおかずにオナニーでもして射精しちゃったんですか？それで急に冷静になって物事を考えちゃったりしたんですか？」

「ば……!?おま……」

「臭いでわかるんですよ。戻ってきてすぐ分かりました。あ、この人抜いてきたんだなって」

そう、先輩は席を外すと言ってしばらく帰ってこなかった時があった。その時点で訝しんではいたのだけれど、彼が戻ってきてそれは確信に変わった。男性が放つ濃厚な性の香りをわたしが見抜けないはずがない。

つまり先輩はわたしのことをどうしようもないくらいに性的な対象として見てくれているということだ。それは、本心ではわたしともつと深い関係になりたいということであると同義とも言える。だからといってデート中に我慢できなくなる先輩の性欲には若干どころかかなり呆れてしまったけど。そういう風にわたしが少しずつ調教したのもあるか。

いや、そもそも完全にブーメランなんだよなあ。わたしなんか仕事中にしちやったし。わたしの方がド変態まである。

それはともかく、先輩は墮ちるまでもうすぐその所まで来てい

る。なんとかして、最後の一押しが出来ればついに念願が叶う。

「ここからは、少し強めに言って揺さぶりをかけていこう。」

「デート中に我慢できないくらいわたしのこといやらしい目で見てたんですよね？仕方ないですよね。雪乃さんとも連絡が取れず、結衣さんとは情性でセックスしてるだけなんですから」

「……やめろ…一色」

効いてる効いてる。だったら、意地でもやめるわけにはいかない。先輩が折れるまで何度でも誘惑して先輩の理性を徹底的に壊してやる。獣の本性を呼び起こさせてやる。だってもうこんなチャンス二度と来ないのだから。

「良いんですよ♡わたしの身体を好きに使っても……この日のために、何年も前から先輩のために色々エステ行ったり、マッサージュ行ったりして最高の身体に仕上げたおいたつもりです。ほら、おっぱいだって大きくなったでしょ？」

わたしは先輩の腕を取り、それを豊かに実ったわたしの胸に押し当てた。先輩はひどく驚いた顔でわたしを見ている。結構着痩せして分かりづらいかもしれないけど、わたしってば結衣さん程じゃないにしてもそこらのグラビアアイドルが嫉妬するくらいには大きくなったんですよ？

「ん……んう……」

わたしは先輩の手を持ったままぐりぐりと円を書くように回している。先輩の手のひらがぷつくりと大きくなったわたしの乳首を刺激して甘い声が漏れ出てしまう……。

先輩の息が荒くなっている。理性が拒絶していても本能が逆らえない。香水だって男の人を欲情させる効果があると言われているハーブを使ったものになっている。嗅覚だけは五感の中で唯一脳に直接影響を与える。つまり嗅覚こそ本能に訴えかけることが出来る唯一無二の器官。至近距離でわたしのフェロモンも合わせて呼吸をしている先輩。一体どこまで耐えられますかねえ？

逆光で夕日に照らされたわたし。

先輩好きでしょ？

わたし、凄く魅力的になったでしょ？

こんなにいる女が近くに居たんですよ？

もう少し前に詰める。そこで股座になにか引つかかるような感触を感じた。

「あはは、固くなってる♡」

「当たり前だろ…」

勃起したんですね。興奮してくれたんですね。ああ……。先輩のおちんちんとわたしのおまんこが……。布が隔てているとはいえ、キスしちゃってる…。

動かしたい……。擦りつけたい……。

だめだ。わたしがここで流されちゃいけない。

鋼の意志で溢れ出る性欲を抑えた。わたしは尚も先輩を惑わせる。先輩の視線がわたしの身体と虚空を行ったり来たりしていた。

今だ。先輩が一番欲しいであろう悪魔の囁きをここで与える。

「わたしは先輩と一緒にならどんなになっても良いんです。言い訳だつてわたしがあげますよ。辛い時はわたしがいつでも慰めてあげます。わたしをそばに置くととってもお得ですよ？」

これはわたしの本心でもある。ほら、だめになっちゃいましょうよ先輩♡後輩の女の子となし崩しにズブズブでドロドロな関係に溺れちゃうのも悪くないと思いますよ？わたしは先輩がどんなに惨めになっても離れないですし、許してあげちゃいますよ？今先輩に一番必要なのは先輩が一番好きな人でも先輩が一番大切にしたいと思う人でもじゃないでしょ？

ゴミでクズで最低な自分をどこまでも受け入れてくれる都合の良い女こそが、貴方の隣りにいるべきだと思いませんか？

「一緒に堕ちましょう、せんぱい♡」

「っ宗教の勧誘みたいだな……」

「わたしも先輩も洗脳されちゃってるんですから似たようなものじゃないですか」

確かに、本来なら二言目にはお布施や幸せになる壺が出てくるころだろうけどわたしは神様なんてものが居たら、わたしに10年間近

くもずつと片思いをさせるなんていう粘着を強いることはないはずだと思っっているので信心深さなどかけらもない。とはいえ、先輩を偶像扱いして洗脳じみたレベルで崇めちゃってるのは否めないけど。

「お前は…まだ助かるだろう？」

「とつくの昔に手遅れですよ……。もう随分と前に、わたしは先輩と堕ちていくって決めたんです……」

「……そうか」

とうとう先輩の手がわたしの腰を包んだ。

わたしもそれに合わせて首の後ろに腕を回して抱きつくように絡み合う。

「まだ、確認が必要ですか？」

分かっているはずなのに確認が欲しくなって聞いてしまう。

「いや、もう大丈夫だ」

先輩が音を上げた。その事実を今一度わたしの中で反芻する。

それって……

「……つたく。本当、お互い面倒な性格してるよな」

「わたしは単純ですよ。先輩に比べたら」

「そうだな……」

先輩が近くなる。

……。

それは……そういうことだよね……？

受け入れてくれたんですよね……？

やった。

ああ……ついに……叶うんだ……。

どれだけ待ったと思うんですか？

どれだけ苦しんだと思ってるんですか？

一番近くでずつと……。ずつと辛かったんですよ？

でも嬉しい。

だから、もう逃さない。二度と言いつなげさせてやらない。

わたしはそつと目を閉じた……。

「ん……」

唇が重なる。

ずっと待っていた先輩からのキス。

熱くて、柔らかくて、どこか力強い。身体の中から抑えられない劣情がこみ上げてくる。制御なんて出来そうにもない。

これが…。

これが…好きな人とする本当のキスなんだ…。

自分から強引にしていたものとは比べ物にならないくらい快感が違う。全身を突き抜けるような電撃がわたしの身体を駆け巡っている。

力が抜けていく。それに反比例するかのように先輩の抱きしめる力が強くなる。

「ん…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ、ちゅ。はむ…んん！はあう…、じゅる…れろ…くちゅ…」

舌だあつ…先輩の舌、わたしの口の中をうねうね動いて…歯茎を舐め回してる。

気持ち良い。こんなの…気持ちよすぎて…声…我慢できない…。

どうしよう。

たくさんシミュレーションしたはずなのに。

先輩とちゅーしたら、こういうこととしてあげたいって沢山考えてきたのに。何一つ実行に移せてない。先輩に全部任せちゃってる…。

「んん！んむう！ちゅっ…はあ！ああう…ん！ちゅ、ちゅ。れろ…ちゅる…ぬちや…れろ…ちゅ…」

もう…だめ…先輩に犯されたい…。

誰かがわたし達を見ている気がする。でもそんな事関係ない。わたしの中の牝としての本能がほんの僅か残っていた理性を根こそぎ奪っていく。

もう先輩のことしか考えられない…。

もつと…もつとわたしを食べて欲しい…。

「ん…く…ぷはあ…」

唇を離れたのは10分近く経過してからだった。お互いの口の周りには唾液がべつとりと付いていて、淫猥な光沢を帯びている。

全速力で走った後のように息が整わない。

赤く染まった顔。

きつと夕焼けのせいだけじゃない。

わたしで……。わたしで興奮してくれてるんだ……。

「いろは」

「っはい……………」

「2人きりになれる場所に……………行かないか……………」

「っ……………はい……………!」

先輩の腕がわたし肩に回される。ああ……この腕だ。この人にこうされることをどれだけ夢見てきたか……。

大好きな人の胸の中に居られる幸せ。

ずっとわたしが欲しかったもの。

たとえそれが歪んだ関係だったとしても。わたしにとっての本物はこれなんだ……。

わたしは先輩を強く抱きしめた。

先輩も優しく返してくれた。

これからだ……。

これからもっと堕ちていってどんどんと溺れていこう。

わたしとなら……わたしだけが出来る。

公道に出ると、先輩がタクシーを呼び止めた。

そこからは何も喋らなかつた。

車内で、静かにその時を待つ。

辺りはだいぶ暗くなってしまうていた。

儀式の会場へと粛々と向かうように。張り詰めていく空気の中で色欲に染まった器が2つ。

路地裏近くで車を止めて、降りると目の前に見える歓楽街のネオンが眩しかった。

それはまるで、長きにわたるわたしの戦いの一つの区切りを祝福し

ているかのようにも見えた。

しっかりと繋がれたその手をわたしは二度と離さない。
そう心に誓った。

続く

第六十八話☆

— Side Hachiman —

重厚な扉を閉じて鍵がかけられる。これで外に出るには精算をしなければならなくなったわけでそう簡単には退出できない。隣りにいる女性は結衣でもなければ雪乃でもない。

一色いろは。

俺があのだ二人に加えて一生をかけて大切にすると決めた女性。どこまでも一緒に最低へと堕ちていくことを誓った女性。

腰まである長さの亜麻色の髪に整った顔立ち、メリハリのある身体。妖艶さと愛らしさが共存した魔性の女。高校生の時のあざとさは垣間見えつつも、更に高次元の魅力的な女性へと変貌を遂げていた。

高校の頃からずっとアプローチを受け続けてきて、はや10年経とうかという時にやっとのことで彼女のことを受け入れる決心がついた。もしかすると、結衣よりもずっと側に居た彼女。そんな女性をどれだけ待たせてしまったか。俺はこれからその責任を取り続けなければならぬ。いや、取り続けたいと思っている。

そんな彼女だが、今はおかしなことに借りてきた猫のようにどこか気まずさを感じているのか、もじもじとして入り口から動かない。

「おい…………一色さん…………？」

「ひゃ?!は…………はい!なんでしようか…………!?!」

「いや、それこっちの台詞なんだけど…………ここ…………ここに居てもなんだから、部屋の方に移動しないか?」

「そ…………そうですね…………あはは…………なんでわたし、こんなところでつつ立ってたんだろ…………」

一色は俺から逃げるようにそそくさと移動した。そして、ソファに腰掛けること無く、ベッドの前で呆然と立ち尽くしている。

「……………………ここで…………せんぱいと…………ああ…………どうしよう…………下着とか…………大丈夫だよ…………?」

一人でぼそぼそと呟いているが何を言っているのかは俺のところからではギリギリ聴こえなかった。

そんな一色をよそに一先ずソファに腰を下ろした。どつと疲れが吹き出るが、これからの事を考えるとそれも吹き飛びそうだ。

「うわあ……………こんな風に照明とか調節できるんだ……………」

一色はラブホテルの仕様に興味津々のようでもこちらに目を合わせようともしない。それが単に初めてのラブホテルへの興味なのか、わざと俺から意識を外そうとしているからなのかはよく分からなかった。

「一色？」

「ひゃい!?……………あ……………そ……………そのお……………」

あ、これはマジで動揺してるやつだ。こいつ直前まではあんなにも攻めつ気が強いのにいぎとなると急にしおらしくなるよなあ。前から知ってたけど。

「……………というか先輩。また、呼び方戻ってるじゃないですか。せつかく下の名前呼びになったんですから継続する努力をして下さい」

そこはきちんと指摘するのか。相変わらず面倒くさい。でもそこが可愛い。

「悪かった……………いろは」

「うん。許します」

どうやら落ち着いたらしくいっし……………いろはは俺の隣に座ってきた。とはいえ、未だに肩の力は抜けておらず縮こまっている。

「……………でどうしましょうか？」

「お前、あんだだけ強気なこと言っておいて滅茶苦茶ウブじゃねーか」「あつ当たり前じゃないですか!わたし、二十歳とつくに超えてるのに処女ですよ!?!純情乙女なんですよ!?!」

「いや、そ、それは知ってるけども……………」

本当今まで無理してたんだなこいつ。

「自分から行くのには慣れてるけど来られるのは初めてか?」

「そりゃあそうですよ。気になる人っていうのは葉山先輩とか居たしそういう人にアプローチかけたりとかは昔から処世術としてやって

ましたけど、マジで好きな人から来られるなんて当たり前ですけど初めてに決まってるじゃないですか。大体初恋の人が先輩なのに……」

「お、おう。そうか」

「葉山先輩が初恋じゃないのか？ って思いましたか？ まあ好きか嫌いかなら好きですよ。でも、多分本当の意味で好きとかそういうのではなかったと思います。現に高校卒業してから全く接点ないですからわたし」

「総武高校のサッカー部で同窓会的なものはないのか？」

「あつても行くと思いますか？ 自慢じゃないですけど結構避けられた自覚ありますから、わたしが行くと100%空気壊れますね。バルスします」

例えが古いな……

「あーうん。まあでも一部の男子生徒からは受けが良いんじゃないかねーの？ 知らんけど」

「名前も覚えていない人から好意的に見られてもしようがないですか？ どこぞの知らない馬の骨に”いろはす可愛いクね？ やばいっしょー”とか言われても全く嬉しくありませんよ」

「それは戸部の真似か……。驚くほど似てないな」

どこぞの馬の骨で。あいつ全く覚えられてないのかよ。いや、俺も顔浮かぶかどうか怪しいけど。

「あく……居ましたね。そういう人」

「お前、名前覚えてないのに真似したのか……。どんだけ印象だけ強いんだよ戸部」

「逆に言うとそれ止まりなのでなんともですけど」

「奴隷みたいにこき使ってたのにその仕打ちは流石にどうかと思うけどな」

「じゃあ逆に、わたしが戸部先輩……でしたっけ？ その人との思い出話を楽しそうに話し始めたら先輩どう思いますか？」

「それは、普通に嫌だな。俺、戸部以下なのかってショック受ける」

「戸部先輩への嫉妬じゃなくて、そっちでダメージ食らうんですね。わたしが言うのもなんですけど、先輩の戸部先輩？ に対する評価も相

当ですよ」

「まあな。でも戸部の話をしながら手を繋いでくるお前もどうかと思うぞ」

「うるさい。先輩。うるさい」

いろはは指をしつかりと絡めると肩にぽんと頭を乗せてきた。もう片方の手で暇を持って余すようにリモコンを持ってテレビ画面を切り替えている。

「何か見るのか？」

「シャワーを浴びる前にエッチなビデオでも見ようかなって……つてこのリモコン反応悪すぎ……」

ポチポチと画面を遷移しながら番組を物色するいろは。無機質に女性の裸体が羅列した画面を二人で見る。それだけで今自分たちの非日常性、異常性が垣間見れる。

「というかこんなクソ明るい中でAV見るのか？」

現状部屋の明るさは入った時から何もいじっていないのでマックスである。つまり普通の室内と変わらない。多少なりとも暗くしたほうが雰囲気が出ると思うのだが。

「じゃあ先輩が思うAVを見るのに最適なライトアップを考えて設定して下さい」

「操作方法がイマイチ分からなかったのね……」

仕方なく、立ち上がってベッド近くにあるライトの操作パッドに手を伸ばす。

「4つありますね」

いつの間にか後ろにいろはが居た。

「そうだな、左端のがON/OFFで、右にある矢印のボタンで明暗の調節だな」

「へー。あ、1番押したら玄関のライトが消えましたね」

後ろから覆いかぶさるように一色が背中に体重を乗せたまま操作盤を触っている。彼女の柔らかい感触が伝わってきて、早くも股間が苦しくなっている。なんでこういう時には遠慮なく女を意識させてくること出来るのかねえ君は。

「2番は……あ、壁のライトか。3番がメインの照明で……4番がソファ上のところか」

仕方なく、ここはいろはのペースに合わせることにした。

「ソファの上のライトは消したいですよ、その方がエッチな気分になれそうです」

「逆に行為の時はそこだけ点けるのもありだけどな。間接照明みたいになるし」

「あ……う……は……はい。そう……です……ね」

「な、なんで急にしおらしくなるんだよ」

「いえ、この後するんだよなあって。なんか感慨深くなってしまって」
いろはが後ろからぎゅっと抱きしめてくる。首から回された腕の閉まる力が強まった。耳元に彼女の熱を帯びた吐息がかかって獣じみた欲望が沸々と湧き出てくる。

「いろはは俺としたくないのか?」

「そんな当たり前の質問しないで下さい。先輩の意地悪。はむ……」

耳殻を甘噛される。そして、ちろちろと舌で優しく舐め始めた。

「……っう……。AV見るんじゃないか? そっちに移動してからにしよう」

「ふふふ。やっぱりエッチなビデオは見たいですか?」

「そりゃ男だからな」

「へへ。まあ良いですけどわたしの目の前で他の女の人にうつつを抜かされるのはちよつと癪ですね。でも後でちゃんとわたしで興奮していっぱい出してくれるんなら許します」

「それは保証する……その証拠に……」

「ひゃ!?!」

いろはの手を俺の隆起した股間に引き寄せた。

「もうこうなってる」

「こ……これが……せんぱいの……もう固くなってる……」

いろはがうっとりとした表情でズボンごしにさすってくる。徐々に迫りくる快感のさざ波に腰が浮いてしまう。

「……えへへ。先輩が気持ちよくなってる……」

「当たり前だろ、誰に触ってもらってると思ってるんだ？」

「先輩の可愛い後輩です♥」

「今は可愛い後輩だけじゃないだろ？」

「うふふ。そうでした☆」

いろはは俺の顔をぐいと自分の方に向けさせると唇をそつと重ねてきた。

「ん……ちゅ……ん……」

いろはの腰に手を回そうとすると、それを彼女に制止される。人差し指を俺の唇に押し付ける。

「ほら、続きはエッチなビデオを見ながらしこしこしてあげますから♥」

「洗っていないのに汚いぞ……」

「良いじゃないですか……でも出したらダメですよ？ 最初の一発目はわたしの中で出して下さいね……あ、する時はちゃんとゴムして下さい。今日ちよつと危ないかもなんで……」

「勿論そのつもりだけど」

いろははそう言いつつ俺のベルトを外し始めた。それに合わせて俺も着ていたジャケットを脱いで近くにあったハンガーにかけておいた。

「偶には中出しもされたいなって思うんですけどね」

いろはが俺のズボンを畳みながらボヤいている。

「処女なのにえらくプランニングがしっかりしてるな」

「耳年増の典型みたいになってますからねわたし。知識だけ馬鹿みたくに蓄えて実践経験ゼロの一番扱い困るやつですよ」

「そんな相手に任せてみるというのも悪くない」

「上はインナーで下がパンツの人に言われてもなあ…威厳ってものが全く無いですよね」

いろはが太ももをなで上げてくる。身体を密着させてきて、甘い匂いとフェロモンが鼻孔をくすぐる。気がつけば彼女の腰に腕を回してしまっていた。

「座りますか？」

「ああ」

「それで、先輩はどの女優が好きなんですか？」

再びソファに腰を下ろしながらいろはがりモコンのボタンをポチポチと押している。空いた手でパンツの間から屹立した俺の愚息と引っぱり出して指先でいやらしくソフトタッチするのは勘弁してほしい。

「ん……ふう……そ、そうだなあ……」

「うふふ。ぴくぴくしてる……」

「わかつてて耳元で囁くなよ……」

「ちゅこちゅこしてほしいですかあ？♡わたしの手を……こうやって……」

いろはの手が優しく上下し始めた。これまでのウブな雰囲気とはガラリと豹変し、小悪魔な彼女の顔をのぞかせている。

「うっ……そ……それ……やばい……」

それにしても滅茶苦茶に上手い。彼女の手がまるで膣内の名器のようにペニスを包み込んでくまなく愛撫されている。

「いち。に。いち。に……ってさつきカフェで一人で抜いちやったんですかあ……？♡」

「…卓球の時に胸元見せられたら？あれで我慢できなくなった…」

「それって……もしかしてこれですか？」

いろはが胸元を開けた。ハリの良い双丘が暗闇深く先に垣間見えて、パンパンに膨れ上がった陰茎がいろはの手を追いやろうと膨張を続けている。

「ほら〜……早く好きな女優教えて下さいよ♡それともわたしのおっぱい見ながら気持ちよくなりますか？」

「う……あ……い……ろ……うっ……！」

「えへへ……しゅこしゅこ……ちゅこちゅこ……いち。に。いち。に♡」

年下の女性に優しく導かれながら、赤ちゃん言葉を囁かれながら上り詰めていく。

「あ……うう……あ……」

「ねえ……でちゃうんですかあ……？ぴゅっぴゅしたいんですか……？♡」

「やめ……ほんと……でる……」

「もつとがんばりましょーよお、せんぱい……。せんぱいだって……わたしのあそこかおっぱいにかけてたいでしょ？こんなところでせーし出しちゃったら……勿体ないですよ？ほら、ちゃんと力入れて♡かたあいのを……わたしに教えて下さい……♡」

いろはの動く速度が緩やかになる。既にも焦らしの影響は出ており、先端からは透明な体液がドロドロと流れ出ていた。いろははそれを丁寧に手で絡め取ると自分の唾液と合わせてぬちやぬちやとペニスに粘液をまとわせた。

くちゅ……ぬちや……ぬちよ……。

淫猥な効果音が鳴り響く。テレビ画面ではいろはがランダムで選択したナンパ物のAVが流れている。どうやらいつの間にか選定したらしい。

「……それにしてもAVってエッチの前にインタビューが流れてること多いですけどこのパートを飛ばさずにじっくり見る人とかいるんですかね？シークバーすっ飛ばしてさっさと前戯なり、本番なりから始める人多そう……」

「そう……だ……な……あうっ！」

曖昧な返事を返した。

今、動画の内容なんてものが頭に入るわけがないだろ……。こっちは頭おかしくなるくらい気持ちが良いのに……。

ぬちよぬちよ……クチュクチュ……ぬちよ……。ぬちやぬちやぬちや……。

音でも犯されている。隣で蠱惑的に微笑む彼女は俺の苦悶の表情を楽しみ慈しむように一定のペースで俺が絶頂しないギリギリの塩梅を攻め続けている。いろはす……お前、本当に処女なのか……？AVの知識なんてどこで仕入れて来たんだよ。

「まあ、インタビュ……で、出演者の人となりを知って……ふう……興奮する人間も……一定数……う……居るんじゃないか？」

「ふーん。そんなもんですかね〜。やっぱり先輩も見た目だけじゃなくて内面も知って興奮するタイプですか？それともいきなりセックスから？」

くちゅくちゅ。ねちよ、ぬちや……。ぐちゅ、ちゅ、ぬる…。

粘着音が鳴り止まない。いろはの手は止まることなくいやらしい演奏を続けている。ビクビクと痙攣するように肉棒が反応する度に彼女は僅かに微笑んで耳元を優しく甘噛してきた。

「お、女性が脱ぎ始めましたね。へえ〜。子供が居るのに結構色っぽいう下着付けてるなあこの人。もしかして仕込み？」

確かに、既婚の女性が着用するにしては異様に艶めかしいというか、情欲を掻き立てる造形をしていた。別に、結婚したからといって女性らしさを捨てたわけでもないはずなので、それくらいはおかしいとまでは思わないが。あと、いろはの手淫が上手すぎて身体がガチガチに力入ってしまう。

「さあな……。結衣も偶にこういうタイプのは……。んぐ……。付けてるぞ……。」

「ほえ〜。結衣さんが、ねえ。それで、先輩は下着とか気にするタイプですか？」

「寧ろ……。下着姿をずっと見ていたいまである」

「へえ〜、じゃあ、今のうちに先輩の好みの下着とか聞いておいたほうが良さそうですね〜」

ねちよねちよ。くちゅ……。ぬちゅあ……。ぬちよっ…。

「……。いろは。もうパンツまで濡れそうだから脱いでも良いか？」

「ん。良いですよ。それならわたしが脱がしましょうか？というか脱がしたいです。先輩はそのままこの人妻のおばさんがおっぱい隠して恥ずかしがつてるところを視姦し続けといて下さい」

「おばさんって、お前なあ」

いろはは俺の股の間に屈むと腰の両端に手をかけてパンツを引っ張った。脱げやすいように少しだけ腰を浮かせると、するりと足までパンツが下ろされて、淫靡に光った男の象徴が彼女の目の前に晒された。

「うわ……すごいやらしい……」

「そんなにまじまじと見つまられると、滅茶苦茶恥ずかしいんですけど」

「ん……れる……」

いろはがピンク色の舌を出して肉竿を控えめに舐めあげた。

「おい汚いからやめとけ……嬉しいけど」

「ちゅ……れる……。えく、どうせいつかは即尺もするんですから良いじゃないですか♡」

「その単語どこで覚えたんだよ……」

「それにしてもすごい臭いですね。でもちよつと癖になりそうかも」

「マジカ……」

「でも今は一緒にAV見たいから隣に座りますね☆よいしょつと……」

席に戻るいろはは何故か俺のペニスをずっと掴んだままだった。別にちよつとくらい離しても良かったんだが。着席した後はいろはは指先を器用に使って爪でカリカリと子種袋を刺激してきた。射精感がないものの肉棒を刺激される快感とは違って永遠と楽しんでられる。だが、それも最初だけで、時間が経つにつれて拷問に変わっていく。

「あ……う……うあぐ……」

「先輩って結構いじめられるの好きですか？」

「ぐ……結構、結衣が、攻めつけが強くてな……」

「その言い方だと雪乃さんは受け身っぽいですね。というかマグロ？」

「……う……。言い方に棘が……。雪乃は最初は確かに俺任せではあったけど、その後すぐに自分からもするようになったぞ……」

「へく……。先輩的にはどつちが良いんですか？」

「どつちも嫌いじゃ……ない……」

「そうなんですネ。先輩はわたしのこと好き勝手に犯してみたいですか？それともわたし主体の方が良い感じですか？」

ぬちやぬちやぬちやぬちや。しこしこしこ……。

「正直なところ……両方試してみたい……」

「っ……えへへ♡そうですか。因みに先輩がどんな性癖でも良いようにわたしなりに色々なシチュエーションとプレイは予習してあるので合わせられると思いますよ☆」

「予習ってなんだ予習って……。そんなこと言っただってお前未経験だろ……」

「その“未経験”の相手にここをカリカリされて気持ちよくなってるのは先輩じゃないですか?♡」

「う……んぐ……はあ……ふう……し、仕方ないだろ……」

「雪乃さんはともかくとして、結衣さんならこのくらいのプレイはやってそうですけどね……えいつ、えいつ……」

「そうだな……。でも滅多にやらないぞ……」

「そうなんです。ふふふ……」

玉袋をにぎにぎと形が変わる程度の強さでマッサージするように握りながらいろはは怪しく微笑んでいる。

「どうしたんだよ……?あ、悪代官みたいな、表情して」

「結衣さんと雪乃さんはわたしとの関係を知らないのに、わたしだけが先輩の女性関係を把握してるってなんか“一番の女”って感じがしませんか?」

そう言われると、改めて彼女の存在の大きさを自覚させられる。考えてみればいろはが居たからこそ、雪乃との関係に踏み切るまでの決心がついたわけで……。今になって振り返ると、彼女の思う通りに俺は動かされているんじゃないか……?結局の所、いろはが言っていた全員を選ぶという選択肢になりつつあるわけで……。

ねちよ……。ぬる……。くちゆくちゆ。

「そうだな……。なんかお前にしてやられたような気もするけどな」

「わたしってそんなに策士に思われているんですか……?」

「逆に、策士じゃなければ何だっというんだ?」

「……恋する純情乙女っというのは?」

「半分正解で半分不正解だろそれ」

「むう。でも一人の男の人を何年もずっと好きなわけですから純情と

言っても差し支えないと思うんですけど〜?」

「そう……だなあ。とはいえ……まあ純情というか、執着というべきか……っで!」

「何か言いましたか?先輩♡」

「お前…急に玉を握るのは人のやることじゃないぞ…」

割とマジで痛いんですけど。このお嬢様、機嫌の浮き沈み激しすぎない?

「本当ですね…。おかげでカチカチだった先輩のおちんちんが縮んじやいました…」

いろはは心底残念そうに呟く。そのままもう一度撫で回すように慈愛を込めて愛撫されると直ぐに復活した。我ながらなんと正直な息子なことだ。

「あ、ビデオに出てる奥さんがキスし始めましたね。わたしたちも一緒にしちやいませんか?」

「え……いや、その前にシャワーを……んん!ん……ちゅ……って返事聞く前にキスするなよ……」

「でも嬉しかったでしょ?ぴくぴくって先輩のここ…喜んでましたし」

いろはとのキスとテレビで流れるキスの音が二重奏になって部屋の中に響き渡る。淫猥な粘着音が股間から溢れそうな劣情を加速させていく。

「んちゅ……ちゅ……はう……ん……せん……ぱ……い……ん……もう……出そうですか?」

「ああ……いろは……もうやばい……」

「いや……。ちゃんと……わたしの中でイッてください……ん……」

いろはは手を離れた。AVの方は既に人妻が撮影者の男の肉棒を啜えている。それはいつも自分が結衣や雪乃にさせていた行為のほずなのはどうしてか、恥ずかしくなってしまうような。未知の領域に足を踏み入れるかのような謎の高揚感を持って見入ってしまっていた。だった。

「シャワーどうする……っ」

慌てて目をそらす。平静を装っているには順番を尋ねた。彼女は動画を食い入るように見つめていた。動画の中の女性が頬張る様子をじっと見てそれをトレースするかのようになり、舌を空で動かしている。

「先輩が先に入って下さい……。終わったらわたしが入ります」

いろははこちらに目を向けずに返事をした。

「わかった。ちよつと待っていてくれ」

「お風呂で抜かないで下さいよ？」

「わかってる」

もう一度だけ唇を合わせたくなかったが、そこはぐつと堪えてその場を後にした。いろはは、ソファに座り直すとリモコンでテレビの電源を落としていた。

静寂に包まれたまま俺はそつと洗面所の扉を静かに閉めた。

生殺しにされた影響で色欲で脳内が埋め尽くされたまま機械的にシャワーを浴びた。

俺はもう一色いろはを抱くことしか考えられなくなってしまっていた。

続く

第六十九話☆

ベッドの袖に腰を下ろして静かに息を吐く。さながら就活の面接待ちの状態。いや、正直なところ今の会社の面接の時の数倍は緊張しているかもしれない。未だかつて俺の人生の中でここまでの緊張感があっただろうか。どうして結衣や雪乃との初夜よりも切羽詰まったような心情になつているんだ俺は…。

洗面所から彼女がシャワーを浴びる音が聴こえてくる。じつくりと入念に洗っているのか、思ったよりもずっと時間がかかっていた。それとも向こうも緊張して中々出てこられないのか。どちらにしろ、お互いに気持ちを高め合うには丁度いいのかもしれないが、俺個人としてはもう高まりすぎて本番できちんと勃つかどうか心配になつてきている。いや、どどど童貞ちやうわ…。

けたたましくなっている換気扇の音が緊張を紛らわせてくれる。自分の僅かな動きで軋むベッドの古びた音でさえ聞きたくなかった。それを聴いてしまったら、今から自分が何をしでかそうとしているのか冷静に見つめ直してしまいそうだったからだだった。

轟音の隙間に微かに聞こえる扉の開閉音。いろはが浴室から出てきたことがわかった。

呼吸が早くなる。心臓の鼓動が砲身で波打つ脈動が彼女を今までと違った形で意識させられる。ずっと、可愛い後輩としてでしか見てこなかった。今その関係を壊そうとしている恐怖と高揚。一步を踏み出そうとすることがこんなにも勇気の要ることだったのかと勘違いしてしまう。こんなのが当たり前のはずがない。

彼女は…、一色いろはは特別なのだから。

他の誰にも代えがたい、歪んだ関係をどこまでも受け入れてくれる女性。壊れてしまう自分をどこまでも見捨てない女性。堕ちていく自分に付き添って、寄り添ってくれる女性。

大切にしたいという愛情と、どこまでも壊したいという欲望がないまぜになる。この体の中に収まりきれないほどの感情が一色いろは

という一人の人間に対して注がれていくような。

そんな初めての感覚に畏怖の念を抱いたほどだった。

「……先輩。お待たせしました」

バスローブを身にまとったいろはが顔を覗かせた。てっきり、バスタオルを巻いて出てくるのかと予想していたがそうではなかったようだ。やはり彼女の方は初めてということもあつてかなり緊張している様子だった。

「暗くしたほうが良いか？」

「そ、そうですね…。ちよつとだけ」

ゆつくりとした足取りでこちらにいろはが近づいてくる。それにつれて体中の血液が湧き上がるように踊っている。

「わかった。どこを点けておいたほうが良いとかはあるか？」

「先輩におまかせします」

「はいよ」

ベッド脇の操作盤で明るさを調節する。ベッドの上は微かに明かりが差す程度にして、ソファ付近や玄関のライトを少しだけ明るいまにした。ベッド上の壁ライトはOFFにした。

「これが先輩がする時のいつもの設定ですか？」

「マイセットみたいに言うなよ…。場合によって変えてるわ。今回はこれが良いかなと思つてやつただけだ」

いろははようやく隣に腰を下ろした。腕を胸の前で組んで膝を揃えたままそっぽを向いている。肩に力が入ったままで時折、目だけをこちらにちらちらと動かして俺の様子を窺っている。さつきまで俺のものを好き勝手に扱っていたあの余裕はどうしたんだ。

「先輩、勃つてないじゃないですか」

いろはがおそろおそろ手を伸ばした。バスローブ越しに俺の股間を撫でて感触を確かめている。

「してもないのにいきなり勃つのもおかしいだろ…」

「わたしとセックスできると思ったらバッキバキになつてるんじゃないかなつて期待してたんですけどね」

「それについては正直、滅茶苦茶興奮してるし俺だつて期待してる」

「へえ〜」

いろはは調子を取り戻してきたのか、ようやく身体をこちらに向けた。

「そんなにわたしに挿れたかったんですか？」

「まあな」

俺は股座にあった彼女の手にそつと自分の手を添える。そしてローブの隙間に差し込むようにして、その中へ導いた。

「あ…」

「もう固くなってきてるのわかるだろ？」

「あ、熱いですね。さつきは無我夢中で、やってたのでそこまで意識しなかつたんですけど、改めて触ると凄いです…」

「逆にいろはは…これを挿れたいって思ってたか？」

「え!?!」

「いや、その。いろはもそういう事考えてくれたりするのかなって。俺を誘うときにはそういう言動するけど、普段は違うんだろ？うなあと思ってるから」

「ふえ!?!…あ…、え〜と…。その、ですね…」

ん？

急にいろはがそわそわし始めた。いろはは何かマズイといったような顔をしている。

「寧ろ逆ですね…」

「ん？逆って言うത്？」

「ぎゃ…逆に普段の方がよっぽどエッチな妄想してます…」

「お…お…お…」

マジで性欲旺盛なのねこの子。それはそれで凄く男としては嬉しいけど。そうなることやっぱり聞きたくなるのがこの質問。

「因みに、おかずは？」

「先輩一択ですね。というか先輩以外をおかずにしたことがないです」

「……………」

いや、ここまで即答されると流石に恐怖を感じる。ちよつとくらい

おかげで浮気とかなかったのか？

「こんな事聞くのも愚問だとは思ってるんだけどさ、俺ばかりで飽きないのか？」

「そうですね。おんなじシチュエーションばかりだと飽きるのでも毎回変えてました。おかげで結構マニアックなのも先輩と脳内でやりまくりましたよ☆」

このタイミングでそのあざとい笑顔は狂気を覚えるんだが。なんか急に寒くなってきた。あれ？エアコンの温度は湯冷め対策で一時的に上げたはずなのに…。

「なんか全然エツチな気持ちになってませんね、先輩」

いろはがジト目で睨みつけてくる。なんというかあざとい鬱陶しい後輩の期間があまりにも長すぎて、きちんと責任を取るとは言つたもののイマイチ感情が付いてきていないのかもしれない。

「はあく…ホントヘタレだよなあ…童貞かよ」

「わざとらしく本人に聞こえるようにため息をつかないでくれませんかね？あと童貞ちやうわ」

「先輩」

「えっ？」

呼ばれた時には既にいろはにベッドの上に押し倒されて、彼女は俺の腰の上に馬乗りになっている状態だった。何か据わっているような目つきでこちらを見下ろすと、一気に顔を目の前にまで近づけてくる。

「もうこのまま、先輩のことレイプしてもいいですか？というか今からレイプします」

「えっ…ちよっ…えっ…待って。どういうこと？」

あまりにも話についていけないさすぎて、まずは『レイプ』を辞書で調べたいレベル。俺、今からいろはに犯されるってこと???

「だって、先輩このままだとわたしのこと結局抱いてくれなさそうだし。わたし、茶化してますけど、実のところかなり性欲爆発しそうで限界ギリギリなんで今から先輩の身体使って全部発散しちゃいますね」

いろはは後ろ手に愚息を扱き始めた。そしてバスローブの紐を解いて、みずみずしいハリのある大きな胸を俺の目の前に露出させた。「……………」

綺麗な形だ。乳首もピンク色で均整が取れている。芸術品のような双丘を見て感嘆の声を思わず漏らしてしまった。

「意外でした？わたし、意外と着痩せするんですよ？」

俺の中に生まれた嬉しい誤算を表情から察したのかいやらしく彼女が微笑む。いろははその胸の若々しきを見せつけるように腰を上下前後に振ってみせた。同時に自らの陰核を俺の身体に擦り付けるようにしているらしく、甘い声が彼女の口から出ている。

「ん……あ……ふう……あ……。あん。先輩の……身体だあ……」

縛るものが無い今、解き放たれた両胸は弾けるように踊っており、俺の中の理性の壁をグズグズに崩壊させていく。程なくして彼女が俺の顔に倒れ込んできて、視界が柔らかい乳房で覆われた。

「ん……んむう。ん……。む、んぐ……」

「えへへ〜♡せんぱいの大好きなおっぱいですよ♡ちゅーちゅーしても良いですよ♡ほら、はやく吸ってください♡」

乳首を口元にあてがわれる。そんな甘い誘惑に耐えられるはずもなく俺はその乳凸と優しく口に含んだ。それは、記憶もおぼろげな幼少時代を省みるかのように、唇に刻まれた赤子としての本能を呼び覚ました。年下の女性から母性という慈愛を施されていく。

「んん……。そ〜ですよ。そのままいっぱいちゅっちゅしてください♡もつと、もつとダメになって、えっちになって、わたしに犯されてくださいね♡」

頭を撫でられながら愚息を扱かれる。今の所レイプというよりは（赤ちゃん）プレイという方が近いのではと思いつつも、いろはに甘えることがあまりにも気持ちよすぎてそんなこともどうでも良くなってきた。もつと甘えたい。もつと淫らになってみたい。結衣や雪乃相手では出し切ることが出来なかった醜い欲望が顔をのぞかせてきている。

俺は乱暴にいろはの胸を掴んで好き勝手に揉みしだいた。

「あ、ふう…、あん。あ…んんん！あ、あ、せ、せんぱ…ふあ。嬉しい…。ずっとこうして、ほしかった…」

いろはが頭を抱きしめる。

「せんぱい、もう舐めてください…♡濡れ過ぎちゃって、はやく…おねがい…」

いろはは膝立ちになると秘所を俺の目の前に持つてきた。彼女の蜜壺は既にだらだらと愛液で満たされていて、内ももをつたるようにして、膝近くまで垂れている。見上げると部屋の怪しげな光に照らされたいろはの蠱惑的な笑みがこちらを見下ろしている。それはこれまでの長い付き合いの中で、一度も見なかったことのない情欲と慈愛に溢れた彼女の魅力あふれる笑顔だった。

湧き水のように流れ出る秘裂に口をそつと近づける。近くで見るとそこがヒクヒクと動いて今か今かと俺の侵入を待ちわびているのがわかった。

控えめに生えている彼女の陰毛をそつと撫でる。彼女の地肌には触れないように毛先だけをなんども手のひらで左右させた。いろはにはそれが微弱な愛撫となつて振動して、焦らされるかのようにもどかしい快樂をもたらす。

「ん…ふあ…せんぱい…なんで…いや…。おねがい…舐めて…」

いろはが腰を前に突き出す。その度に俺は頭を後ろに少しだけ下げ、距離を取った。ベッドが軋む音が心地よい。段々と切ない表情になる後輩が可愛くて、嗜虐心が高まる。

「ふあ。あ、あう。も、もう。いじわるしないで…ください…！」

そんな遊びを繰り返すうちにとうとういろはが俺の後頭部を持つて、自分の陰唇に押し付けてきた。

「んぐ…んむ…じゅ…」

「ん…く…ふあ…せんぱい…舌入れて…クリも舐めて。ちゅ…つて吸って…ん…ああ！」

いろはは唇に自身の突起を滑らせる。まるで俺を自慰行為の道具扱いするように乱暴に擦り付けて離さない。息が苦しい。俺が苦悶の声を漏らしても一向に彼女はそれを止めようとはしなかった。も

しかすると、自分が絶頂するまでは解放する気が無いのかもしれない。自分の為にも必死に舌を動かしていろはの秘所を食った。

「んちゅ…れる…じゅる…ちゅ。くちゅ、んむ、ちゅ、じゅ、じゅ…」
「あん…い…あ。…ああ、せんぱあい♡」

俺もいろはの腰に手を回しつつ、尻の柔肉をもみほぐす。初めて触れる彼女の臀部は引き締まっっていていつつ、程よく肉感を残しており、とん男を飽きさせない。

いろはの甘い声を聞きたびに脳髓が麻痺するかのように快楽で埋め尽くされる。呼吸が苦しくて酸欠になりそうだというのに、今も俺は彼女との行為のことしか頭にない。硬直がはちきれんばかりに膨張して、繋がりたいと蠢いている。

「はあ…、はあ…、あん♡」

ポールダンスのように滑らかに動く彼女の腰が離れる度に息を大きく吸って自分の唇と彼女の下の唇を合わせる。その度に水滴が水たまりに落ちるような静かな接着音が響く。直後に淫蕩に溺れた美女のあられもない嬌声が鼓膜に届いてきた。まるで地震の余震と本震のような関係。繰り返される度にその波は大きくなって理性や体裁という最後の壁を尽く飲み込んでしまう。

「はあ…ああ…、せ、せんぱい…。今度はわたしが舐めても良いですか？」

いろはが懇願するように口奉仕をしたと言ってきた。当たり前だが、これを拒むわけがない。俺は彼女から少し距離を取って仰向けに寝ると屹立した愚息をいろはの目の前に差し出した。

「ああっ…♡これがせんぱいの…おっきい…、かたい」

つつんと指先でつついたり、手のひらで亀頭を転がすように弄ばれる。その度に静電気が走ったような感覚に陥って悶てしまう。

「せんぱい…フェラしますか？それとも手コキの方が良いですか？」
「♡」

「…出来れば啜えて欲しい」

「はあ♡♡じゃあじゅぼじゅぼしてあげますね♡…はむっ」
「うぐっ！」

パンパンに怒張した砲身がいろはの小さな口の中に飲み込まれる。肉竿は彼女の温かく柔らかな感触に包まれて愛撫された。

そして、じんわりと広がるその感覚は得も言えぬ快感をもたらしてくれた。絶頂とまでにはいかなくともずっとこうされていたと思えるような優しさに満ちた奉仕。初めてだというのに全く歯に当たるような感じがしない。彼女が一人ですつと練習していたんというのは案外本当なのだろう。

いろはは丹念に舌を使って先っぽの鈴を転がしている。刺激が強くなりすぎないように極限にまで気を配られたそれは男にとって何よりの幸福と快感を連れてきた。

「ちゅ、ちゅ、ちゅ、ん…、じゅる、ちゅ、ちゅる、はむ…、ちゅ、ちゅ」
「やたらキスが多くないか？そんなところにしたって、何も返ってこないぞ？」

「わたしが幸せになるから良いんですよ…ちゅ…、ちゅ、ちゅ。ん…」
いろはは尚も陰茎にキスの雨を降らせた。俺は彼女がそれで満足するなら構わないと思ひ、落ち着くまでは一通り彼女の好きにさせてみることにした。

気づいた時にはいろはをベッドの上に押し倒し、むしやぶりつくように彼女の蜜壺を味わっていた。

「ああああああ…んん！…いっ…：…ああ！ふあっ！ああん、い、せ…せんば…ああ！」

口をつける度、舌で彼女の陰核を舐める度に彼女の秘裂から愛液が溢れ出る。どこまでも可愛くて、愛らしい。秘所だけじゃない。初めてまじまじと見る彼女の太ももだって、お腹だって魅力的でずっと見ていたいほどだ。ツ…と指をつたらせると、いろはは身体をくねらせて応えてくれる。そうして、彼女は俺の顔をじつと見て『もつと激しいことをしてほしい』という目で懇願するのだ。それを何度も何度も繰り返して、彼女をとことん焦らしていく。下準備は大切だ。焦らせば焦らすほど後にくる快感が高まって狂ったように淫蕩に溺れやすくなる。

「せんぱい…。顔が見たいです…。もつと抱き合いたいです…。ちゅーしたいです…」

いろはが手を広げる。こんな最低な自分をどこまでも求めてくれる彼女を愛おしいと思わないわけがない。

「んちゅ…ちゅ、れる、ちゅ…。れる、ちゅ、ちゅ、ちゅる、ちゅ…ん…せん、ぱい…んむ…ちゅ、れる…」

導かれるように彼女の唇へ飛び込んでひたすらに堪能する。舌を彼女の口内に差し入れると上顎をねっとり舐めた。彼女はビクビクと反応した。彼女はここが弱いらしい。今度は舌の付け根を狙ってつくと俺を抱きしめる力が更に強まった。そのまま彼女の耳を塞いで、周りの世界を遮断する。淫蕩の粘着音だけが彼女に届くように、彼女が姦淫の世界に没入できるようにリードした。

「ん。ふあ…、ちゅ…。んむ、ちゅ。あう、ああ…ん…すき…」

いろはが慣れないなりに懸命に俺に合わせようと頑張っているのが可愛くて仕方ない。自主トレの成果なのか、彼女は決して受け身一辺倒ということはなく俺のことを気持ちよくしようと思始努めていた。結衣や雪乃には無い、際限ない奉仕の精神。思わずこちらも彼女の思いやりに負けまいと必要以上に前戯の時間を長く取って出来る限り彼女の身体を解すことに専念した。

「はあ…はあ…はあ…せんぱい…」

「どうした？」

「舐めあいっこしませんか？わたしが上になります」

いろはは返事も待たずに俺の顔に跨ると体液でドロドロになった陰唇を俺の顔に落とした。突如、抗いようのない淫猥な香りが広がった。柔らかな彼女の秘所に顔を埋めて欲望の限りを貪っていく。

「んん…んむ、じゅる、ちゅ、ちゅる…ん、あああ！」

快樂の渦に飲み込まれながらもいろはは必死に口を動かした。入りきらないであろう俺の愚息を懸命に全て口に含もうとしている。肉棒全体が温かい感触に包まれると同時にいろはの苦悶の声が聞こえた。

しばらくして、起き上がると俺は胡座くようにベッド近くの壁によ

り掛かるとその股ぐらにいろはを座らせた。

後ろから抱きしめるようにいろはの体を抱き込む。そして、彼女のたわわに実った果実を両の手で包み込んだ。

「ふあ…あ、あん、ああ」

いろはは蕩けるような声を上げながら俺の右手を手に取ると指の一本一本を丁寧な口に入れてしゃぶり始めた。快楽に身を委ねながらも脚を交差させたり、脚をピンと伸ばしたりを繰り返している。くねくねと腰をいやらしく動かしているのが扇情的でたまらない。

首筋に舌を這わせてみた。今度はいろはの体から力が抜けるように体を俺に預けてきた。甘い吐息が彼女の口からこぼれ出ている。そのまま彼女の首や肩を舐め続けながら柔らかい双丘の感覚を楽しんだ。

しばらくするといろはが自分から自らの秘所を手で弄り始めた。ついに我慢できなくなったのか、淫らな嬌声を上げつつ手を動かしている。

「いろは、そのまま」

「あああ、あ、はあう！あ、ああああん！せ、せんぱい…だ、だめ…！ああああ！」

いろはは変わって彼女の蜜壺の入り口を解すように刺激した。自慰を多くしているとはいえ、中はまだ慣れていないはずなので、入口付近と陰核を重点的に責めた。案の定いろはの感度は良く、瞬間に快楽の頂点へと上り詰めていった。

「はあ…はあ…」

いろはが息を乱しながらベッドに倒れ込み、部屋のライトの調整版を触る。玄関やソファ付近のライトが切られて、ベッドの上の照明だけが取り残された。暗闇の中、俺たち2人を照らしていた。紅潮した美女の顔がよく見える。まだ繋がってもないのにお互いに玉のような汗をかいており、蒸気が出るのではないかと思えるくらい身体が熱い。

「ねえ…先輩…」

俺はおもむろに枕元にあったゴムの袋を空けてそそり立つ硬直に

しつかりと取り付けた。

包装が破られる様子をいろははまじまじと見つめていた。

そして、次に彼女が言う言葉と俺がしたいと思う事が一緒であることを願いながら、俺は自身の肉棒を彼女の秘所にあてがった。

「ん……」

いろはの身体が一瞬大きく跳ねた。

ほんの僅か触れただけで彼女の下の口がとてつもない熱を帯びているのがわかる。同様に彼女もまた俺の槍先がまとっている熱量に驚いたに違いない。

「……挿れて……く……ああああっ！」

その言葉を最後まで聞くことなく俺は一思いに彼女の中を貫いた。

続く

第七十話☆

いろはは大声を上げて俺の身体にしがみついた。

まなじりからは涙が溢れている。心配になって一旦抜こうかと思いい、身体をそつと上に起こそうとしたが、いろはが強く抱きついて離れようとしなかった。

その表情は喜怒哀楽では分類できない程に激情が秘めていて、それでいて切なく悲しそうで、嬉しそうでもあった。

「んん……くあ……はあう……！」

たった今破られた処女膜の感覚。当然初めて体験する破瓜の痛み。これまでずつと抱いていた思いが遂げられた喜び。ようやく結ばれたという実感。あまりにも長く自分を待たせた俺に対する怒り。あらゆる感情と感覚がミキサーのようにぐちゃぐちゃにかき混ぜられて彼女の小さな体にいつぺんに溢れ出しているのだろう。大きく息を吐きながら俺の背中に爪を立てる。

「はあ、はあ……。ん……。思ってたよりもずつと痛いです……」

「む、無理するなよ。ここでやめても良いんだぞ？」

「それはっ……絶対嫌です……。ちゃんと最後まで……しないと、わたし。家に帰った時に死んでしまうくらい後悔しちゃいます……」

「そ、そんなにっか？」

「はい……。ふう……。ん……。て、手首とか切っちゃうかも……しれませんが……？」

「それはシャレにならないし、シャレに聞こえないんだけど……」

「わたし、先輩にメンヘラ認定されてたんですか？」

「そこまでは思っちゃいけないけど……」

「……その類の中には入っているんじゃないかと。そう思ったこともなくはないとっ……」

「ちよ……。締めるのやめ……」

「まあ、完全否定できる材料に乏しいことは認めますけどね……」

半ばいろはは諦めたように身体から力を抜いた。接合部からは彼

女が純潔だった証が流れ出ている。

「…痛みは？」

「まだ全然ちよー痛いです…。これ、本当に気持ちよくなるんですかね？」

「なんつーか、お前。初体験にしてはなんか飄々としてないか？」

「いや、ね…。理想が高すぎたせいで、入った瞬間に絶頂とか想像してたんですけど…。現実とは真逆でこのままだと苦しい思い出になりそうです」

「それは漫画やアニメの見すぎかもな」

「でも先輩がロマンチックな雰囲気作りをしてくれないのにも責任があると思うんですよ」

「ロマンチックくて…。お前、俺との関係がどういふことかわかってて言ってるんだよな？」

「不倫でしょ？今は」

「おい、なんか不穏な言葉が最後につかなかったか？」

「ねえ、先輩…。第三の選択肢ってアリだと思いませんか？」

いろはが四肢を俺の身体に巻き付けてくる。途中、痛みが走ったのか一瞬苦悶の表情が見えた。

「俺に選ぶ権利も選択肢も無いと思うんだが…」

「ありますよ。先輩がわたしに溺れちゃって、他のことがどうでも良くなっちゃうって選択肢が♡」

くねくねと腰をよじらせながら甘い声でささやく。気持ち良くて腰振りそうになるからやめてね…。

「前にお前が俺に言ったのは全員を選んで欲しいじゃなかったか？昔と言ってることが違うと思うのは俺だけか？」

「そうでしたっけ？☆」

「お前、本当は最初から一人勝ちするつもりだったのか…？」

「それこそどうでもいいことじゃないですか？だってもう先輩は私の処女を奪っちゃったんですし…」

「……………動くぞ」

「もう我慢できなくなっちゃいました？…ん。そろそろ痛みも引いて

きましたし、少しずつなら良いですよ…ん…あ……」

いろはの本当の狙いなどどうでも良かった。今の俺にとって最も大事なのは彼女と最高に気持ちよくなることだけなのだから。

俺はいろはに覆いかぶさるように抱きつくどゆりかごの揺れのようにお互いの身体全体を前後に動かし始めた。これなら激しい腰の運動をせずに刺激を与えることが出来るし、俺自身の射精感が登ってくることも少ない。まずは挿入の感覚に馴染んでもらわなければ彼女への負担が大きくなってしまう。

「ふう……いろは……はあ……う……」

「ふあ……く……ん……せんぱい……なんか……ふわふわします……」

どうやら少しずつだか痛みが引いて来たのか、ようやく甘い声を出し始めた。いきなり奥を刺激するのもどうかと思ったが、思いの外彼女には効果的だったようだ。

「せんぱいの背中だあ……♡ 広くて、大きい……」

いろはが愛おしそうに抱きしめる。

「そんな広い背中でもないぞ。男の中では平凡だろ」

「それでも女の子よりはずっと広いじゃないですか？だから凄く安心するんです。ん……、もう寂しくないんだなって思えるから……あう」

「不倫だぞ？もしかしたら余計に寂しくなるかもしれないのに」

「それなら……んふあ……そうならないようにたくさん先輩が、抱いて下さい……あん……」

ギシ……ギシ……ギシ……

前後に揺れ動く度に、いろはの声から微かに漏れ出る嬌声。微弱な快感とはいえ、俺の肉竿もすっかりと硬度を保ったまま彼女の膣内を刺激している。両腕でしっかりと彼女の頭を抱き込んで密着して、温もりを逃さないように運動を続けた。

いろはの中は想像を絶する気持ち良さだった。腰を振る度に射精感が上り詰めてきて、くぐもった声が漏れ出てしまう。蜜壺のヒダが吸い付くように絡みつき柔らかい感触とともに絶頂を促してくる。正直、雪乃や結衣よりも挿れた時の感覚とは似て非なるもので特に膣口付近上のザラザラとした刺激が亀頭を限界にさせる。それを避け

るために、いろはの奥深くに差し込んだまま腰を動かすことで誤魔化していた。

「んく。ふう、はあ、ああ、きもちいい」

長い時間をかけてほぐしたおかげでいろはも交わりの快感を全身で享受し始めた。俺の動きに合わせて腔内が律動し、身体を巻きつけてくる。少しでも身体の多くの場所を俺と密着させたいようだった。

俺はいろはの後頭部を抱きかかえて、体重を彼女に預けた。いろはは苦しそうな様子を微塵も見せずただ、俺の身体をそつと受け入れて慈しんでいた。

「つづるいよ…」

「何がだ？」

「結衣さんも雪乃さんもずるい…。こんなにも、幸せなことを独り占めしてたなんて…」

唇が重なる。生気を抜き取るかのような情熱的で劣情に溢れたキス。飢えた獣になった彼女は俺の口をしばらく放さなかった。

「…ん。はあ、はあ、はあ。せんぱい、もつと振つて下さい。先輩の好きに、乱暴に、滅茶苦茶に、わたしを犯して下さい。わたしは先輩の所有物なんだつてわたしの身体に、叩き込んで下さい」

「…：…良いのか？」

「調教してほしいです…。先輩優しいから。わたしのこと大事にしようとしてくれちゃう。それじゃ、ダメなんです。もつと、わたしを。欲望のはけ口にしてください…。道具みたいに使い倒して下さい。がまん、しないで…」

いろはが両頬に手を添えてくる。聖母のような優しい声で、男の欲望を全身で受け止めることを誓う彼女はもう、俺にとって何者にも代えがたい女性として認めることしか出来なかった。

「いろは、四つん這いになってくれ…」

「は…♡」

いろはは後ろを向くと綺麗で引き締まった臀部を俺の前に突き出した。ヒクヒクと動く膣口に狙いを定めたままじつと彼女の姿を見て辱める。

「挿れて…焦らさないください…さっきのでまだイッてないんですよ。」

「でも俺の好きにしていんだろ？」

俺はいろはを色々な角度から舐めるように見つめる。今からどれくらいこの陵辱を施そうか。どれだけの快楽を与えて調教してやろうか。そんな下卑た視線を何度も浴びせる。彼女の目の前で固くなつたままの肉棒をちらつかせた。

「うう…。でも、こんなの…耐えられない…。ぶつてくれた方がもつと嬉しい。乱暴に犯されて口の中に突っ込まれて射精される方がもつと嬉しい…。ねえ、先輩。お願いだから、触れて下さい…。先輩に触れられてないと…身体が疼いて、おかしくなっちゃいます…」
必死に舌を伸ばして、肉竿を舐めようとしているらしい。こんなにも淫らで性に奔放な彼女を賞翫出来る喜びを再び噛みしめた。

いろはは恥ずかしさよりも、俺に触れられない切なさの方が勝っているらしい。想っていた反応とは違っていたが、これはこれで悪くない。必死に俺に懇願する弱々しくなった一色いろはを堪能するのが楽しくてたまらない。

「いろは。その状態のまま、俺にどういう風に犯されたいか、言ってみてくれ」

腰を下ろしているいろはに触れないように耳元でそつと囁く。

「い…いえ…。そんなの…せんぱいに…ひかれ、ちやう」

いろはは腰をもじもじと振りながら甘えた声を出す。

「引くわけないだろ…俺だってお前にこんな事させてるんだぞ？いろははこんな俺を知って引いたか？」

「…そんなわけない、です。わたしだけが知っているせんぱいの一面なんだって、凄く嬉しくなりました…」

今まで誰にも見せたことのない欲望のままに言葉を、行動をする自分。抑圧されていた自分の中の何かのダムが決壊のように勢いよく流れ出る。

「じゃあ言ってくれ。俺はいろはが言った通りにの事をしてあげようと思う」

「あう、意地悪ですね…。それってわたしがちやんと恥ずかしいことを言わないと気持ちよくなれないってことじゃないですか…」

いろはは唇を前に突き出してキスを求めてきた。俺は器用に顔をいろはの方に寄せて唇を合わせる。身体には触れないようにするのが意外と難しい。

「じゃあ…後ろから挿れて思いつきり抱きしめて下さい…」

「わかった」

俺は彼女の腰の方へ回り込むと膝立ちになっていろはの淫猥な秘裂目がけて愚息を差し入れた。ずむずむと膣内に飲み込まれていく光景は男の情欲の炎を蘇らせるには余りある。

「ん、あああ…きたあ…」

恍惚とした表情で腰を弓なりに反らす。結合の快感に酔いしれながら、愛人の肉棒の味をじっくりと反芻している。

「せんぱい…早くくっついて。ぎゅーっして♡」

「こ、こっか？」

言われるがままにいろはの小さな背中に覆いかぶさる。透き通った柔らかく決めの細かい肌が密着して気持ちが良い。口元をいろはの首元近づけると彼女の汗の味を確かめるように舌で舐めあげる。

「あ…、そ、そうですっす♡えへ…、せんぱあい」

いろはは繋がったまま器用に後ろを振り返るとキスを求めてきた。俺は流されるがままに彼女と唇を合わせて合図も無しに唇を乱暴に貪る。巻きつけた腕で彼女の双丘に手を添えた。

「あ…♡」

いろはがうつとりとした目で俺を見る。そんなに触りたいのかと聞いているようだった。俺は視線で当たり前だと返すと乳腺を刺激するように側面を優しくなぞった。同時に腰をゆっくりと前後に動かして彼女の膣内の摩擦を堪能する。

「あ、あん…、あふう、いう、あ、ん…、あ…、いやらしい…せんぱい、すぐくえっちですね…」

初めて直に触れるいろはの胸はあの頃よりも二周りほど大きくなっているような気がした。彼女が持つ女性の象徴はハリが良く、も

みほぐすとマシユマロのようにその形を変える。みずみずしさと柔らかさを兼ね備えたそれは男性の理性を崩壊させ、虜にするには十二分だった。

「あん…、せんぱい、おっぱいもつとたくさん揉んで下さい…。腰もたくさん振つて下さい…。ん…」

「ん…、もつと激しい方が良いか？」

正直これ以上早くしてしまうと一瞬で射精してしまいそうになる。それくらいいろはの中は締めりがよく、間違いなく名器というやつではないだろうか。

「せんぱいをもつと感じたいんです…。それに…もつと、気持ちよくなって壊されたい…」

「いろは…」

「せんぱい…。わたしをめちゃくちゃにしてください…」

限界だった。

俺はいろはの頭を上から押さえつけた。そのまま尻を上突き出すように腰を持つと今度は一切の迷いなく彼女の置く目がけて自身を打ち付けた。

「い…あ、んあああああああああ！」

彼女のペースも考えずただひたすらに動いた。弾けるような音と、乱暴に身体を蹂躪されるいろはの嬌声とがけたたましく響きわたる。乳房を掴み上げ、弾力と固くなった乳首をコリコリとこねまわす。全体重を彼女に乗せて、一心不乱に、肉棒を刺激する。それは単なる獣の交配そのものだった。

「あ…ああ!!先輩!せんぱい…:…っ!うれしい!もつと…:…!もつと、おかしてえ!」

腰を引いては叩きつけ、また引いては思い切り打ちつける。ゴリゴリと膣肉を抉るような激しいピストンで欲望のままにセックスをする。限界まで怒張した剛直が暴れまわり、いろはから絶頂の喘ぎ声を引き出そうと促す。

いろはの両手首をもって強引に手前に引き寄せる。自然と彼女は弓なりに背中を反らし快楽を存分に享受できる体勢になった。

「はああ！アう！あああ！いああ！はあうっ！あつ、あつ！せんぱい、はげし、すき、せんぱいの、」

「俺の何だ？いろは…」

奥深く差し込んだまま、いろはに微弱な快感を与えつつ、陵辱を続けた。

膝立ちになって、滝のような汗を流しながら両腕を拘束された状態。いろははそれを維持するのめんどくさそう。彼女自身と俺の体液でベトベトになった彼女の綺麗な亜麻色の長い髪がベッドに垂れ下がり、淫靡な光を反射させる。

「い、いじわる、あつ!!はあう！きも、ち、いいんです…あつ！」

「俺の何がだ？」

「ああああああ！手前です！手前をゴリゴリされるのが、気持ちよくて、とんじやう」

「どこの手前をどうして欲しい？」

急かすようにもう一度膣奥を貫いた。たわわに実った彼女の胸が弾む。

「あああああああああ！お、お、おちんちんです！せんぱいの、かたいおちんちんでもっとおまんこゴリゴリしてほしいんです！」

いろはが絶叫しながら淫猥な言葉を叫んだ。

「わかった。なら、ケツを突き出して突っ伏しておけ」

そう言って俺は両手を離れた。いろははベッドの上に投げ出されぐしよぐしよになった陰部を淫らに俺の前に差し出した格好になる。

「あ…、あ、せんぱい…、はやく、きて…」

左足だけをベッドの上に突き立てて、右足は正座の形で後ろに折り曲げる。そのままもう一度いろはの中に侵入した。今度は彼女のりくエスト通りに、出入り口を入念にかき回しながらGスポットを重点的に擦り上げる。

「あ、ああ、はあう！そ、それ、だめ、きちやう……」

経験の少ない彼女はやはり奥よりも手前の方、特に陰核やGスポットの方が快感を覚えるようだ。優しさを忘れないようにしながらも力強く刺激した。

程なくして、いろはは絶頂した。男としての悦びをこれ以上無いくらいに教えてくれる嬌声を聞きながら彼女をまた犯し始める。

「ああ…♡うれしい…。せんぱいが…またおかしてくれてる…♡」

いろはは蕩けきった表情で膣内を締め上げてきた。この日をずっと夢にまでみて待ちわびてくれていたのが分かった。

俺だって、今日の朝から、いや何年もずっと前からずっとうして犯してみたかった。

私服が最高に好みで身体も見た目も最高で、あざとくて可愛くて、いやらしいくらい蠱惑的な表情と仕草で。

一度溺れてしまえば二度と抜け出すことが出来ないと分かっていた。そんな悪魔的な誘惑。彼女の身体を味わってしまうと、彼女の包容力に甘えてしまうと、自分の中の何かが完全に崩壊してしまうような恐怖があった。

だからこそ、最後の一线だけは超えてはならないと思っていたのに。

気づけば本能の赴くままに彼女の身体を賞翫してしまっている。

何故なら、彼女は全てを受け入れてくれるから。

彼女にだけはどんな醜い自分も見せられるから。

彼女はそんな自分も包み込んでくれるくらいに自分だけを認めて愛してくれているから。

そんな女とのセックスが最高じゃないわけがない。

あまりにも気持ちが良いすぎる…。

一色いろはとのセックスが気持ちよすぎて何も考えられない。

心も体も満たされていくような感覚。

少しでも離れてしまうとまた彼女が欲しくなって、餓死してしまうような恐怖にかられる。

もう戻れない…。

こんな快感を知ってしまったら二度と普通の愛あるセックスで満足なんて出来ない。

一色いろはと離れることなんて二度と出来ない。

雪乃の時よりも快感が数倍違っていた。

何か本当に自分の中で崩れた感覚。

快楽に溺れて自分を破滅させると諦めてしまったこと、それを受け入れることにしてしまったことによって、枷が完全に外れてしまった。

今はもうこの罪悪感すら媚薬のように快楽を何倍にも増幅させる薬にしかない。

勿論、雪乃や結衣に対する申し訳無さがなくなったわけじゃない。でも……。

彼女たちを裏切ってしまったっていうことが気持ちよさに繋がってしまっていることを否定できない。

いろはの身体を抱きしめる。

いろはは後ろを振り向いて唇を重ねてきた。そのまま腰を互いに振り子のように寄せ合って、快感を求め続ける。

深く深く堕ちていく。

最低で最悪であればあるほど、いろはとのセックスが気持ち良い。

「はあ、はあ…っ、いろは……」

「ああーあ、あっ、あっ、あうはあああ!!!んちゅ、ちゅる……。せんぱい、すごい、ねえ、せんぱい、もっと、もっと好きにしてください……。せんぱいがしたいこと、はあ…はあ…、わ、わたしとせんぶ、んちゅ…、やりましょう……っ」

「……はあ、はあ。どんなこと言っても…引かないのか?」

「ああん、はあ、あう…!せ、せんぱいの方が…、ひいちやう、ようなこと、わたしが、言っちゃうかも、ですよ…?」

そんなことを言われたら余計にいろはから抜け出せなくなってしまう。

「望むところだ。あと、そろそろ……もう…出そうだ…」

「あ……うん……。あっ!はあ、ああ…、う、わ、わたしも、もう……。だめ……。せんぱい、さいごは、だきあって……。きすしながらがいいです……」

いろはは一瞬俺から離れると即座に仰向けになって両手を広げて俺を出迎えた。飛び込むようにいろはの中へと入り込むと温かい感

触に全身が包み込まれる。それに応えるように俺もいろはの背中に手を回して、出来る限り密着するようにして腰を振り続けた。

「はあああ！あああ！あつ！あん……んむう！ちゅ、ちゅく、じゅ、じゅるる！んむちゅ……ちゅ、ちゅ、じゅ、んあああ！だ……だめ……！」

「いろは……っ！」

「せ、せんばいーい……く……あああああああああああああああああああああ!!」

いろはが俺の背中にしがみつくように背中に手を回して絶頂の嬌声をあげた。程なくして俺も激しい律動と共に肉棒から精を放った。

「う……ぐ……ん……」

十回近く痙攣しながらポンプが精液を組み上げるのをいろはは抱きしめながら、エクスタシーの余韻の中ずっと待っていてくれた。落ち着いてから肉棒を引き抜くとコンドームの中には見たことない量の子種が放出され溜まりに溜まっていた。

「はあ……はあ……。こんなの………やつぱり………ずるい………きもちよすぎる………」

いろはは悔しそうな表情で快感を噛みしめていた。

いろははしばらくして身体が動くようになったのか、それを俺から奪い取ると一滴残らず中身を飲み干した。

綺麗サツパリなくなったゴムの中と自身の口の中を見せつけてきて、俺の愚息を掃除し始める。

「んちゅ、くちゅ、れる、ん、んむ、じゅぼ………しえんふあい、ちゅぽっ……。また一緒にAV見ませんか？今度はオフィスラブをする設定物のやつで」

「良いぞ、それ見てもう一回したら今日は上がろう」

「はい。あ、それから先輩」

「なんだ？」

隣に座り直したいいろはを見ると今度は唇を優しく重ねてきた。

「ん………これから、よろしくおねがいます。一緒にもっとエッチなことしたり、危ないデートいっぱいしましょうね♡」

いつも俺に見せてくれていたはずのあざとい笑顔はこころなしか、色気を更に帯びて妖艶さを放っていた。

俺はもう一度、いろはを押し倒した。そして、時間の許す限り彼女と情欲の限りを尽くした。

続く

第七十一話

—Side Hachiman—

「今日からまた1つ先輩の道を歩むことになったな比企谷」

朝っぱらから芦間にだる絡みされた。出社早々全くツイていない。

「他人事みたいに言ってるが、それはお前も同じことだろ」

今日から会社に新人が入ってくる。芦間はその事について話しているのだろう。俺は手元にあつた資料を流し読みしながら雑に回答した。

「新入社員だからなあ。今年は豊作とのことだが、どうなるか期待だな」

「豊作ってどっちの意味でだ？」

俺が聞きたいのは純粹に優秀な人材が多く入ってきた事による豊作か魅力的で上のおじ様たちが喜びそうな良い容姿の女性の豊作なのか。芦間が言うのと両方の意味を含んでいそうな感じする。

「そりゃあ、お前聞くまでもないだろ。って、そのうちの一人に唾つけてるくせによく言うわ比企谷」

「何のことだかさっぱりだな」

「おいおい、しらを切るなよ。留美ちゃんなんて、今年の一番人気筆頭を開戦前から手籠めにしておいて何言ってるんだか」

「昔の縁があつただけだろ。そんな関係にはなってるぞ」

「……今のところは？」

「さあな……」

本当は心当たりがあつたが聞き流すことにした。ブラックコーヒーを口に含みながら、隣をちらと盗み見ると、芦間は既にメールの返信を始めている。周りも新人が来るということでもそわそわしているものの、自身の業務に戻っているようだった。かく言う自分も全く落ち着きがない。久しぶりに会う彼女に対してどういった顔をすれば良いのか皆目検討もつかないからだ。とはいえ、今日は研修もとい社内の案内であろうから、俺達のところには来るかも分からない。挨拶程度はあるとは思っているが、留美の事は気にはなってい

だが、考えても仕方がないことだったので仕事に集中した。とは言いつつも昼休憩まで全く身が入らなかった。

……。

「せくんばい！一緒に行きましょー！」

俺の机にわざわざ出向いて昼飯に誘ってきたのは一色……いや、いろはだった。つい先日彼女とは深い関係を結んでしまった手前、彼女の顔を見るのが恥ずかしい。

「お、おう。どうしたんだよ……いろ」

言い切る前にいろはが手で俺の口を塞ぐ。

「馬鹿ですか先輩は!?こんなところで下の名前で呼んだら怪しまれるでしょー！」

小声で叱られた。言われてみれば至極当然なことをいろはは言っている。あれだけ、いやいやながらもランチに付き合っていたという状態に見られている俺がいきなり下の名前で彼女のことを呼んでいようものならあつという間に会社中の噂になってしまう。それだけ一色いろはという女性の認知度と話題性は高いことを忘れがちになる。近い距離にずっと居すぎた弊害とも言えよう。

「わ、悪い。そうだったな。ちよつと今やってるのだけ片付けたら行くから先に行って席でも取っててくれ」

「先輩が終わるまで待つんで大丈夫です。廊下で待っていければ良いですか?」

「いいのか?」

「一緒にご飯食べようって誘っているのに先に行く方がおかしいと思うんですけど。先輩、今度は逆にわたしのこと避け過ぎです。いつも通りで良いんですってば」

意識しすぎていたせいで普段の言動を完全に忘れている。我ながら本当に隠し事が下手なんだと自覚させられる。

「…わかった」

「じゃあ待ってますね☆早く来てくれないと、他の男社員たちがわたしのこと口説いてきて先輩の首が余計に絞まりますよ?」

「既に絞殺寸前なのか?」

いや、もう慣れちゃったけど周りからの冷たい視線半端じゃないからね？しかも俺結婚してるから尚更逆風が酷い。

「それはもうお約束じゃないですか。それに、これからもっと肩身が狭くなるでしょ？」

いろはは明言していないものの“彼女”の事を言っているのだろう。いくら違う部署とはいえ、同じ仕事場に在籍するのだから必然的にいつかは顔を合わせることになる。早いうちに引き合わせておいた方が後々の俺へのダメージもとい、いろは達からの糾弾も少ないはずだ。

「じゃあ、外で待ってますから早く来てくださいね」

いろはがその場を後にする。画面のパワーポイントを虚ろな目でじつと見ながら図形を挿入してスライドのレイアウトを仕上げた。いった。毎度のことだが、この業務だけは他の人に委託したい。面倒だし、結構建設の設計レベルで細かく指示飛ばされて修正くらうし。まあ、汚いスライドのプレゼンってだけで相手の聞く気が失せることもあるから仕方のないことではある。

思いの外、キリのいいところが見つからず5分ほどかかってしまった。

廊下に出ると案の定、他の部署の男性社員達が一人で廊下に立っているいろはに話しかけていた。内容は言うまでもなく一緒にランチでもどうかという誘いの話だろう。珍しく俺が居なかったことで好機と見たのかもしれない。いろはは素人でも丸わがりの営業スマイルでにべもなく断っていた。

いろはは遠目に俺の姿を認めると素人でも丸わがりの本気笑顔で目を輝かせながら俺のもとへと走ってきた。

「お〜そ〜い〜！」

そんな女子高生のような口振りで言わないで欲しい。あざとい。あざとすぎて、他の女の子がやってたらまじでイラツとしちゃうやつ。正直、いろはですであつてもちよつとイラツとしちゃってるし。まあかわいいから許すけど。

「待たせた。んじゃ、そろそろ行くか」

「はいー」

流石の彼女も俺の腕に自身の腕を絡めてくるような真似はしてこなかった。後ろをちらと振り返ると男達の恨めしそうな視線が突き刺さった。俺は申し訳無さを表情に出しつつそそくさとその場を後にした。いろははというと、後ろを振り返ることは一度もなかった俺の顔をじつと見つめていた。

「にしても、お前。挨拶ぐらいはしておいたほうが良いんじゃないのか？」

「良いですよ別に。前に何回も断ってますし」

同じ会社の社員である人間との摩擦は出来る限り少なくしたほうが良いという含みも込めて彼女を諫めるも暖簾に腕押しのようにだった。

「何回も断られてもアプローチしてくるなんてよっぽどお前のことが好きなんだな」

「どうですかね？あの人、いろんな部署の可愛い子を食い物にしていることで有名ですから。ただ単純にわたしとセックスしたいだけだと思いますよ。自分のエロ履歴書に箔をつけたいだけのヤリ●ン野郎ですね」

「そ、そうなのか…」

いろはす、裏の顔が出た時マジで言葉を選ばないよなあ…。

「まあ玉木さんからの受け売りですけど。わたしは元々先輩以外の男性に興味がない人間なのでその人の情報は聞いても無駄でしかないので更々覚える気無かったですけどね。あまりにもしつこいので玉木さんに愚痴った時に聞きました」

「食い物にしているのも陰でやってることだろうから表に出ないのかな？」

「それはわたしもなんとも…。でも女の子の間で噂が回る速度って光回線よりも速いですからね」

「最強のネットワーク回線だな」

「ですね、5Gも敵じゃないですよ」

「なんというか比喩がいろはらしくないな。珍しく知性を感じる」

「偶にダイレクトに失礼な事言いますよね先輩って…」

「もう慣れっこだろ？」

「まあ、昔はそういうのって雪乃さんにしか言わなかったですからね。わたしにもそうやって当たり前に言うようになってくれたことに関しては素直に嬉しく思ってます」

「そ、そういう解釈をされるとは思ってもなかった」

いろはは穏やかに微笑んだ。その笑顔はあまりにも絵になりすぎていて、一瞬で大半の男達を虜にしてしまうこと必至だ。

隣を歩く彼女をじつと見る。いろはは時折、俺の方を見てそつと微笑んでは前を見るのを繰り返してた。

こうして改めて彼女を観察すると高校の時から彼女の容姿はガラリと変わっていた。

セミロングだった髪の毛は腰にかかるほど長くなり、顔や体つきも大人びて高身長とまでは行かなくとも、十二分にモデルでも通用する見た目に様変わりしている。にもかかわらず、どこか暗い闇を落としたりするような儂げな雰囲気を漂わせているものだから男達が放っておくわけがない。今はその長い髪をビジネス用に短くまとめ上げて結んでいるものの、それはそれで知的な女性を印象付ける良いアクセントになっている。

「……なんでそんなに舐め回すようにわたしのこと見つめているんですか先輩」

「あ、いや。特になんでもない」

いろはが訝しむ。あまりにもジロジロと見ていたせいで物凄いジト目で睨まれていた。

「そんな大したことじゃないぞ。ただ、まあ、いろはが昔と比べるとめちゃくちゃ見た目が変わったなあつとしみじみ回想してた」

「え、な、なんですか急に…!?なんか、キモい…」

「お前は中々の頻度でダイレクトに失礼な事言うよな…」

「それはいつものことじゃないですか？」

「それはそうなんだけど、改めて思うと俺はワンチャンでお前を訴えることが出来るんじゃないかと思う頻度だと思っんですけど」

「なら、わたしは先輩が全然わたしの思いに応えてくれなかった恨みで訴訟し返します」

「それが通用したら全国のストーカー共が各地の裁判所に一堂に会する状態になるだろうな…」

「それはそれで変態たちを一網打尽にできる妙案ですね」

「司法に仕える方々の気苦労と引き換えにな」

「どうか何気に先輩、今わたしの事ストーカー扱いしませんでした？先輩も先輩で中々の頻度でエグい発言してくると思うのはわたしだけですか？」

「事実だけ見ればそうじゃないか？」

「否めないのが苦しいところ…でもそのストーカーに根負けして関係持ちっちゃったのはどこの誰だと思えます？」

「それを言われてしまったら、ぐうの音も出ない」

「そういうことです。この変態」

「え、俺も変態になるの？」

「いや、だって。あんなねっとりとしたセックスされたらねえ〜♪」

「おまつ…！周りに気をつけるよ…」

「それは先輩もでしょ？さっきから周りを気にしすぎです。意識しないように意識して、結局挙動不審になっちゃってますよ？」

「わ、悪い…」

「はあ…先が思いやられますね、これは」

いろはは俺のことを非難しながらも破顔していた。そしてこころなしか俺の横を歩く彼女の距離感以前と比べると近くなっているような気がする。それは意識しなければ気づかれることのないようなコンマ数ミリの違い。肩が触れるか触れないかの絶妙な距離感で、社内の廊下を歩く。

周りには怪しまれていないだろうか？どうにも気になって周りをキョロキョロと見回してしまう。雪乃と関係を持っていた時は、彼女が会社には居なかったものでそれなりにいつも通りの立ち振舞をすることが出来たが（いろはは曰くバレバレだったらしいが）、社内不倫ともなると俺も初めてのケースだ。正直、内心どうしたら良いものか緊張

しっぱなしだ。

逆にいろははというとこれまでと全く変わらないといった様子で、俺との関係の変化を微塵も感じさせない。昔から仮面をかぶって自分を偽ってきた技術の差とも言えるのかもしれないが、そんなことを言ったら絶対にいろはが不機嫌になるので言わない。いつも通りのいろはが俺にとってには生殺しのような距離感になっており、焦らされているような状態になるのがまた一段と俺をモヤモヤとした気持ちにさせる。

もしこれが彼女の戦略の一部だとしたら、一色いろはという女性ほど俺のことをよく理解している女性はこの世に存在しないだろう。

いろはの顔を見るとこちらが見ていることに気づいたのか、怪しく微笑んで指先だけをそつと俺の手の甲に一瞬触れさせた。やはり侮れない。こうして蜜月な関係を結んだ今でも彼女は俺との駆け引きを楽しみ続けているのだと確信した。いろははすこわい。

「今日は仕事早く終わりそうですか？」

「まあ、それなりに」

「なんですかその曖昧な答えは」

「正直予想がつかない。午後に仕事をぶち込まなければ珍しく定時にあがるかもしれないけど」

「じゃあ今日は玉木さんと3人で飲みに行きませんか？」

「え？」

どういう風の吹き回しだろうか。俺としては玉木さんと飲めるのは嬉しいことだけど、いろはの考えが読めない。

「毎度毎度2人きりだと怪しまれるじゃないですか……」

俺の頭に浮かんだ疑問を解消させるかのように直様いろはが補足した。思考を読まれることに関しては、流石にもう驚かなくなってきた。

「それに、玉木さんが先輩と一度飲んでみたいって言っていました……不本意ですけど」

「しれっと最後に本音が出たな」

それにしてもあの人いろはを使うとは……。今までは直接誘いの

話に来ることしかなかったから、どうにもきな臭さを感じてしまう。これまで玉木さんは俺と話すための口実にはろを使わないようにしていたと思っていたからだ。下手したら陽乃さんよりも掴みどころのない人だから正直怖いという気持ちのほう大きい。嬉しさもあるけど。

「先輩って玉木さんみたいな女性めっちゃ好きでしょ？」

「見た目だけならな」

「そこは正直に言うんですね…」

いろはにジト目で睨まれる。だって、嘘ついても君分かつちやうじゃん。

「見た目だけなら」…ねえ。まあ言わんとしていることはよく分かります」

「なんだかんだお前が会社の中では一番近い人物だろうしな」

「そうですね。そのわたしですらあの人の心の中には不用心には入らないって決めてるくらいですから。あれはもう樹海よりも広くて深いですよ」

「何がだ…?」

「闇が」

「激しく同意だ」

「でも男の人てそういうところに惹かれるものじゃないですか?特に先輩みたいな物好きは」

「場合によるだろ。そういうのは別に変人だから好きになるってわけでもないしな」

「雪乃さんのことが好きなのにそれ言います?」

「まああいつの面倒臭さは滅茶苦茶好きだけど…」

「うわ、こいつめんどくさ」

「お前が言うなよ…。正直面倒臭さで順位付けするならお前はダントツの一位だぞ」

「げ、マジですか!?!」

いろはが信じられないといった様子でこちらを見る。

「自覚がおありでない?」

「……先輩に面倒くさい認定されることがここまで屈辱的だとは思いませんでした」

「お前本当に失礼だよな……。俺だけに対して」

「心を許しているってことですよ。わたしみたいな可愛い後輩に心を開いてもらえるなんて先輩は幸せものですね☆」

「無理くりいい話にまとめようとするな」

「むう」

あざといポーズをしているいろはが頬を膨らませた。

……………

「…食堂混んでそうだな」

「ですね。新入社員の友達とタイミング被っちゃいましたね」

いろはの言う通り、社会人生活への期待と不安の表情がごちゃ混ぜになった若い世代たちが群をなして券売機の前に並んでいた。これでは当分買えそうにもないし、座席が確保できる可能性すら怪しい。

「同席するか誰かの隣に座るしかなさそうだな」

「え〜…先輩と2人きりが良かったのに…」

こいつ2人で話している時はかなり露骨に俺に甘えてくるようになったな。しかも可愛いから困る。

「あ」

その時俺たちを見て何かハツとしたような声を上げる女性がいた。その声の方へ顔を向けるとそこには俺がよく知る彼女の姿が見えた。

「…っお、お前…いたのか」

「ん、どうしましたせんぱ…っ！」

「お前」 じゃない」

食堂に居る男達が等しく見とれてしまうような艶のある黒髪とすらつとした長身。大人びた顔立ちにどこか幼さを感じさせるその女性是不機嫌な表情を顔に作りながら俺たちをじつと見て言った。

「留美」。久しぶり、八幡」

「ここは会社なんだから、ちゃんと苗字で呼べ、ルミルミ」

「む。八幡だっと呼んでないじゃん…。そんなことよりも…」

留美はこちらへ近づくとニツコリとした笑顔を見せた。しかし、き

のせいだとは思うのだが、黒いオーラを纏っているように見える。

「ねえ八幡……」

「な、なんでしょう」

全然きのせいじゃなかった。

助けを求めるように横にいるいろはに目をやると、

「せくんくぱくく♪」

「……………」

俺の隣ではもうひとりの美女がそれはもう、これでもかかってくらいどす黒いオーラを全身から放ち、冷たい笑みでじっと俺を見ている。それに対抗するかのようには、留美からも同様に暗澹とした恐ろしい冷気が流れ出る。

あ、これは……………。

「この女誰？」ですか？」

どうやら悲しいことに平穏な時間はしばらく俺には訪れないらしい。

続く

第七十二話

「そうですから。この子がアメリカで再会したっていう留美ちゃんなんですわ☆」

「八幡、この人の事は聞いてないんだけど…」

「い、いや、えくとだな…」

俺は今食堂で尋問を受けている。正直、目の前にある味噌汁を温かいうちに飲みたいのだが、食事を摂ることすら許されないような状況下に置かれていた。俺の両隣をしつかりと確保し、逃すまいと2人の美女が俺を監視しているからだ。しかも全く笑顔を崩さないのが怖くて仕方がない。蛇に睨まれた蛙の方が幾分生きた心地を味わっているのではないかと思えるくらいには俺は生きた心地がしていない。というか生きながらにして死んでいる。

周りの様子をうかがうとどちららと俺たちを見ては目をそらすといった行為を繰り返している。どうやら注目の的になってしまっているらしい。正味、いろはと飯を食べていると必然的とも言えるくらいには視線を集めてしまうのだが、今日はそのいろはに負けずとも劣らない容姿の留美もいるため大変なことになっている。そんな女性二人に囲まれている俺は当たり前だが、針のむしろになるわけだ。

だが、今回に限ってはそんな男達からの冷ややかで恨みの籠もった嫉妬の視線の方がすこぶるマシと思える程に両隣からの圧が尋常じゃない。心臓を直接掴まれたかのような息苦しさを感じる。俺の精神が摩耗しきって潰れようと、この2人は自分たちが納得するまで俺のことを詰問し押しつぶしてくるに違いない。俺に残された選択肢は死にながら質問に答えきって彼女たちを納得させるしかない。

現在に至るまで俺は2人との関係性を根掘り葉掘り喋らされている。とはいえ、核心部分についてはまだ触れていないような状況だ。あくまで、表向きの俺たちの関係性というものを把握している段階にある。

「先輩、留美ちゃんのこととはまあ聞かされてはいましたけど、まさかここまで親密になってるとは思いもありませんでしたよ。しかも休日

デートを何度もした仲間なんですってね？わたしなんかたったの一回しかしてもらってないのに」

いろはが脇腹を思いつきりつねる。痛みなど正直感じない。いろははこうして詰め寄る度に留美との対応の違いを責め立ててきた。

「それは一色さんが八幡に受け入れてもらっていない証拠」

「あゝあゝ？」

「ちよ、ちよつと……!?ルミサン？」

その度にルミルミが火に油を注ぐような事を言ってくるから収集がつかない。いろはがあまりにも憤怒の業火に包まれすぎて溶岩原人みたいになっている。そろそろれんごくかえんでも吐きそうな勢いだっただけだ。

「チツ……。言わせておけば生意気な……」

ちよ、ちよつと……。いろはは？マジで表情が大変なことになってるけど大丈夫？これまで会社で築き上げてきたイメージとか総崩れの恐れがあるけど平気なの？かたやその矛先を向けられているルミルミはというと歯牙にもかけない様子で冷ややかにいろはをじつと見つめている。

「ごちとら、10年近くも側にいて計画を進めてきたっていうのに……まったくとんだ邪魔が入った……」

いろははすが何やらおぞましいことを口にしていたような気もするが、それについて聞くのはまた今度にしよう。今はそれどころではない。

「そんなこと私には関係ないでしょ？生意気も何も、私はほんの数回で八幡の心をつかんだ。その何が問題なの？単に一色さんよりも私の方が八幡と相性が良かったってだけのことじゃない？」

それがトドメの一言になったのかいろはが噴火したのが直ぐに分かった。

「あははははははははははははははは。先輩、こいつ殺しても良いですか？いや、絶対ぶっ殺します」

「お、落ち着いて。頼むから手に持つてるナイフをテーブルの上に置いてくれ……」

悪鬼羅刹と化した一色いろは閻魔王を鎮めるのに苦勞しながらもなんとか場をおさめていく。いや、おさめきれしていないからこうなっている。

周りからは何事かと言った視線で見られていた。これは俺もいろはも明日以降の身のあり方を考える必要があるぞ…。

「八幡、愛人はちゃんと選んだ方が良いんじゃない？いくら見た目が凄く良いからって見境無いのはどうかと思うよ?」

ルミルミから見当違いの忠告が出てくる。いや、合っているんだけど今言うことではないんじゃないか？

「ま、まあ見た目が良いのは当たり前ですけどね、ふん!」

なんでいろははちよつと懐柔されちゃってるんだよ。それこそ留美にナメられるのに。

「ねえ、八幡。この人って普段からこんな感じなの?」

「いや、俺が絡むとこうなるだけだぞ」

「ふくん…。八幡も罪な男だね」

留美がくすくすと笑う。

「というか愛人って。先輩もしかして、この子も手箒めにする気ですか?」

いろはは冷静になったのか留美の一言を反芻して聞いた。だしてきた。

「え、あの、だな」

「八幡は私のこと好きって言ってくれたよ」

「な?!?」

「お、おい…!」

「あゝゝq●wせ○dr*&~%ftgyふJIこー☆▲XO(。D。)」

いろはすがもう言語化出来ないようなうめき声をあげて頭を抱えている。

「それよりも八幡」

「な、なんだよ…」

「さつき一色さんが『この子』も手箒めにするんですか?』って言う

てただけどき、あれってどういう意味かな？」

留美が俺の手首を鷲掴みにする。

「え、えと…その…留美…さん？」

前門の虎、後門の狼とはまさにこういうことを言うのだろう。俺には一切の逃げ場が無い。

「雪ノ下さんのことは聞いていたけどまさか、それ以外の人にも声をかけているとは思わなかったなあ…」

留美の右手に力がこもる。このまま握りつぶされるのではないかという程に力強く締め上げてきた。俺の手がうつ血仕掛けているのも関係無しだ。

「私と連絡取っていない間にこんな事になってるなんて、流石の私でも我慢の限界つてもものがあるんだけど？」

ルミルミコワイ。笑顔なのが本当にコワイ。

「まあそれに関してはわたしも同意ですね。しかも、この子雪乃さんにそっくりじゃないですか。というか上位互換だし」

いろはの視線が留美のある部分に集中している。もしその言葉を聞かれたらいろはも雪乃にあの世送りにされるんだけどな。まあたしかに留美は大きい方だ。どことは言わないけど。

「…変態」

俺の視線に気づいたららしい留美が自身の胸部をかばうようにしてこちらを見ていた。

「い、今のは一色が悪いだろ…」

「一色？」

いろはが鬼のような形相に変わる。いや、お前が人前ではこれまで通りの呼び名にしろって言ったんじゃないか…。なんで名前呼びじゃない事にキレてるんだ。

留美はというと恥ずかしそうにしながらも赤みがかった頬を見せながら俺をそっと見上げる。

「まあこれで八幡が気に入ってくれたのなら嫌な気持ちはしないよ。他の男からは嫌な気持ちにさせられるけど」

こういうことを当たり前前につちやうから留美って可愛いんだよ

なあ。ほら、案の定いろはすがとんでもない表情してるし。

「やっぱり大きい方が好きなんだね、八幡」

それを無視して会話を続ける留美。絶対わざとだ…。

「まあ、な」

「変態」

「自覚はある」

いろはに言われたせいで余計に彼女の豊かに胸に目が行ってしま
う。確かに留美は大きい方だと思う。スーツの上からでもわかるく
らいには女性の象徴が実っているのがわかる。

「開き直るんだ」

「だってもうバレてるだろ？」

「心理テストやったからね」

そういえば心理テストで性欲の深さ広さが太平洋級みたいな不名
誉な称号を与えられた覚えがある。

「あれはもう忘れてくれ…」

「ふふふ。どうしよつかな〜」

「それで！留美ちゃんは先輩のことどう思ってるんですか!？」

俺達とのやり取りに割り込むようにいろはが口を挟んだ。彼女は
ハンバーグを切らずに、フォークで山賊食いしながら留美を睨んでい
る。そこまでに目の敵にする必要はないと思うのだが。

「ど、どうって…。その…」

自分が標的になった途端にしおらしくなる留美。こういうところ
は幼さが抜けていないと思わされる。

「どう思ってるって質問に率直に回答するなら、私は八幡の事好きで
すよ、異性として」

「な?!？」

いろはがまたもや奇声を発した。こいつ、この昼飯の間で何回キャ
ラ崩壊を起こすのだろうか。留美の回答に俺も思わずそんな奇声を
発しそうになったから人のことはとても言えないのだが。いろはの
圧迫面接にもすっかりと自分の考えを伝える留美の胆力にも目をみ
はるものがある。

しばらく黙り込んでいたいろはだったが、ようやく顔を上げるとすぐに口を開いた。

「先輩、今日の夜は本当に楽しみですね☆玉木さんにも報告する内容が増えたことですし、これは3人でじっくり話し合わないといけないですね〜☒」

異論は認めないという強い目で俺をじつと睨んでいる。おとなしく首肯するしかなさそうだ。

「はあ、本当に先が思いやられますね…でもまあ、こういう人だつてのは分かってたから良いんですけど」

呆れられすぎて許容されている。これでも見捨てないのが一色いろはの凄いとところだと思ふ。最早この程度は想定内といった様子だった。いろははすごい。俺は一生彼女に頭が上がらないのだろう。「降りる気はないんですか？」

留美がいろはに尋ねた。言葉足らずだが、内容がわかってしまう。「それはごっちのセリフなんだけど。まだまだ若いのにそうやって人生捨てることもないと思うけどなあ」

いろはは挑発的な目で留美を見下ろした。というか俺と付き合うことを人生を捨てるという表現に変えるあたり、この後輩、俺に対して辛辣すぎる。だが、それが良い。そうやって貶すくせに俺に首つたけなところが世界一可愛い。というかこの2人妙に敵対意識が強い気がする。いろはに関しては想像に難くなかったが、留美もとは思ってなかった。いや、怒られるし呆れられるとは思っていたけど。

「この話は水掛け論になると思いますがね」

留美はどこか諦念を持っているかのようにいろはを論じた。いろはは留美が牙をむくかと考えていたところに冷水を浴びせられたような状態になり、面食らってしまったている。

「まあここで争うのは得策ではないというのは同意するけど」

「3番手は譲る気はないですよ？」

留美がいろはに宣戦布告をする。しかし、それを聞いていろはは安心したような表情を見せた。

「なら、別に三番手は好きにしてくれちゃってどうぞって感じですね

「わたしを狙っているのは一番ですから☆」

「な””!?”」

いろはが留美の目の前で堂々と腕を絡めると今度は留美が声を上げた。周りの視線もあるというのにどういっつもりなんだ。

「別に周りも本気だとは思ってませんよ。冗談の一つと捉えてくれま
すって」

いろははいつものように俺の心を読むと当たり前のようにフオロ―した。確かにこれまでの俺といろはのやり取りを断片的にでも知っている連中であればまたいつものかと呆れるよう展開に見えるだろう。そう見られていると計算した上でのいろはの行動であると納得はしたものの、それもそれで問題ではないのか…?

「…八幡」

「な、なんだ…?」

「一色さんとの時間が終わったら直ぐに私にLINEしてね」

「アツハイ…」

留美はそれだけ言うといつの間にか食べ終わっていた食器をまとめて返却口へと向かって行った。残された俺はいろはの方をちらと見る。いろはは訝しげに留美を目線で追っていた。そして、俺に僅かに届くような小さな声で『手強そうだな…』と呟いた。

続く

第七十三話

いろはが集合場所に指定した店はいつも俺たち2人が行くような場所とは全く異なる雰囲気をもった料亭だった。

路地裏にひっそりと佇んでおり、一見さんを寄せ付けない入り口。

一本隣の道路では二次会へ向かおうとするサラリーマンとOLのグループが店を見ながら次の場所を選んでいる。そんな世界から隔絶されたように今回の店は存在している。

これだけで今日の幹事は彼女ではなく玉木さんだということが良く分かる。あの人もいつもこんなところに行っているのだろうか。

2人は店内に居るのだろうか。人目を避けるという理由で現地集合の形をとったのは良いものの現地というのが店の中なのか、店の前なのかまでは自分が聞いていなかった。結果として、入口の前で右往左往する不審者になってしまっている。

携帯を取り出して、いろはにメッセージを飛ばす。『集合場所に到着した』という端的なメッセージを送れば『これは入るべきなのか、それとも玉木さんを待つべきなのか？一人だと滅茶滅茶怖いから早く来てくれ』という裏のメッセージまできちんと読み取ってくれるだろう。それを理解した上で俺に嫌がらせしてきそうだからいろはは怖い。でもそういうところが凄く可愛い。

いろはからは『わたしももうすぐ着くので店の前で待っていてください！玉木さんのことだから一人だと滅茶苦茶入りづらいお店選んでる可能性が高いです！』と返信が来た。全くもってその通りだいろはす。俺は今サービスカウンターに迷子として自ら名乗り出てしまっている。迷子というくらい迷走している。

「お疲れ様、比企谷君」

そんな俺をなだめるかのような落ち着いた着き払った透き通る声。声がある方へ振り返ると、セミロング気味のボブカットをした背の高い女性がちやちや歩いてきている。玉木さんだった。出社している時にいつも着ているベージュ色のカットソーがよく映える。仕事場では

見られない少しだけ着崩したジャケットがやけに扇情的で目が離せない。どうして、ただ着崩しているだけでこんなにも色気を放っているのか。やっぱりこの人の容姿は会社の中でも群を抜いている。

「お疲れ様です、会社の時とだいぶ雰囲気違いますね」

「そうかな？でも、それは比企谷君もだと思うよ。ちよつと気怠げで部活終わりの高校生みたい」

「それはイジられているのか、好意的に見てもらっているのか微妙だな…」

この人何考えているのかさっぱりわからないし。

「そんなに勘ぐらなくても普通に後者で見てくれて大丈夫なんだけどなあ」

「そ、そうですか」

玉木さんはくすくすと笑っていた。彼女のように大人びて、麗しきすら覚える女性が急に見せてくる子供のような無邪気な笑顔は反則だと思う。可愛いだけ売り込んでいる女性が逆立ちしても敵わない。昔のいろはだったら、絶対対抗意識燃やしまくってただろうなあ。もしかしたら、今もそうなのかもしれないが。

「仕事場では毎日話しているのに、こうやって勤務外で話すのは案外初めてだね」

「確かにそうですね」

一応、この会社に入って数年は経過しているものの振り返ってみると玉木さんと仕事場以外の場所で話すのは初だった。俺の平日は玉木さんへの挨拶で毎朝始まるのに。

「一度くらいご飯に誘ってくれても良かったのになあ…。これでも私待ってたんだよ?」

玉木さんが一歩近づく。甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「それは、まあ。家内も居ますし。正直玉木さんとは一度こうした機会は設けたいなどは常々思っていました」

「ふふ。そういうフォローの仕方を教えてくれたのはいろはちゃんかな?」

「そんなことはないですよ。あいつが教えてくれるのは自分の機嫌の

とり方だけで玉木さんのトリセツは無かったですね」

「私って家電とか地雷女みたいに思われてるの!?!そんなに難しい性格してないって自己評価なんだけどなあ」

玉木さんは頬をポリポリとかきつつこちらをじっと見上げた。なにそれ、めつちやきれいな人がそれやるとクソ可愛いんですけど。

「玉木さんは掴みづらいキャラクターをしているというのが俺の貴方に対する評価ですかねえ」

「え、シヨックだなあ…。せいぜい、パンフレットのぐらいの厚さのトリセツだよ?」

「え、六法全書のほうがまだ薄いんじゃないですか?」

「言うね〜比企谷君。仕事の時とは別人みたい」

ちよつとした皮肉すら彼女は楽しんでるように見える。やはり一筋縄ではいかなさそうである。いや、別に彼女と勝負をしているわけでもなんでもないのだが。小声で『まあいろはちゃんの方が分厚いよね』と言っていたのはスルーすることにした。

「そんなに変わってますか?別に自分は仕事するときもオフのときもインドアで皮肉屋な雰囲気を出していると思ってますけどね…」

「それはうん、なんか私と同じ匂いがする」

「それ本気で言ってます?俺みたいな陰キャオタクの波動は感じないですが」

こういう店を選んでいる時点で俺とは趣味嗜好がまるつきり違うような印象を受けてしまう。どうにも信じられん。

「そうだよ。だって私、学生の頃は授業がない時はひたすらアニメだったもん!」

「え、本当に?」

「だってあんまり仕事場では表に出していないけど、今使ってるクリアファイル、これだよ」

「渋!」

玉木さんは嬉しそうにカバンからクリアファイルを取り出した。確かに、それは一昔某漫画雑誌で連載されていた漫画作品のものだ。しかも、ダーク寄りのものだし当時の他の連載作品と比べてもかなり

コアなのは言うまでもない。

それにしてもまさか玉木さんが隠れオタクだったとは思ってもよらなかった。こんな近くに同士がいようとは。

「これは普通に今年一番のサプライズニュースかもしれないです」

「あはは。そんなに驚くことでもないと思っただけだなあ。そんなに意外だった?」

「はい。全くそんな感じがしませんでしたから」

「隠れキリシタンみたいなものだね。私、ちーちゃんにすらこういう一面は見せないようにしているから」

俺は思わず目を丸くした。

「え、流石に智佐吹さんは知っていると思っただけど違うんですね」

「うん。これをリアルの人間関係の人に言ったのは比企谷君が初めてだよ」

玉木さんはウインクした。いろはがやったらあざとく見えるのにこの人がやると写真集の1ページに思えてしまう。

「その辺の話、ちよつと詳しく聞いてみたいですね。正直自分も趣味の話が出来る知人がほとんど居ないので」

結衣は俺が家で一人楽しそうにしているのを後ろから生温かく(?) 見守ってるだけだし、比企谷家では見守るも無しに放置だったし。趣味を共有できるコミュニティってマジでなかったんだよなあ。材木座は除く。

「私も是非、比企谷君とは熱く語り合いたいと思ってるよ〜!でも、今日それをやっちゃったらいろはちゃんが拗ねちゃうからまた今度になりそうだけどね」

「それは言えますね」

絶対嫉妬して後日どえらいことになるのが目に見えている。そして、今の口振りからして玉木さんは俺というのはの関係性については察しがついているのかもしれない。この人の洞察力は常軌を逸している。

「それにしても、どうして智佐吹さんにすら言っていない自分の趣味の話で俺なんかにくれたんですか?」

「ん？どうしてって…言わないと分からないの？」

玉木さんは甘えるような猫なで声で俺を見上げてきた。ほとんど身長差のない俺達なので、自然とその綺麗な顔が眼前に迫ってきて思わず後ろに引いてしまう。

「そ、その秘密を共有したことで脅されるとか？」

「比企谷君…。冗談でもそれはないんじゃないかな」

「す、すみません…」

「まあ、信頼の証ということで。ね？」

「無理やり背負わされた気もしますが…」

「そうとも言う！」

クレしんみみたいな言い切り方したぞこの人。

「いや、自信満々に言うところじゃないでしょ」

「いろはちゃんみたいに先出しして事後承諾を得る戦法が比企谷君には有効だなと」

「それ反則技ですよ。分析合っているとは思いますが」

「そう言いながらも受け入れちゃうから比企谷くんは可愛いんだよなあ…」

いたずらが出来たといじらしく微笑む彼女。その子供のような純真さに思わず惹かれてしまう。

「可愛いと言われて喜ぶ男はそう多くないので気をつけたほうが良いですよ」

「比企谷君は言われると喜ぶタイプ？」

「自分はショックを受けるタイプですね」

「男として見られていないって感じちゃうから？」

「そうですね。完全に別カテゴリーに入れられた認定って感じがします」

こんな話を総武高校の時にいろはと話した記憶がある。

「あ、それなら安心して。逆に私の中では『可愛い』って伝えるのが恋愛対象ですよ認定みたいなものだから」

「そ、それは素直に喜んでも良いんですか？」

「比企谷君が私のことを愛人にしたいって思っているなら喜んで良い

んじやない?」

「な!」

「あはは。冗談だよ。ちょっとからかっただけ」

玉木さんはつんつんと俺の頬を人差し指でつついてきた。この人と話し続けていると一生手玉に取られる気がする。

「でもさ、実際のところ私は候補としてはどうかかな?」

「そ、それもさっきの冗談の延長ですか?」

「秘密。だから比企谷君の好きに答えてくれて良いよ」

玉木さんは若干緊張しているような顔つきでこちらをじつと見た。その表情から俺も真面目に答えなければならぬという雰囲気を感じながらに感じ取った。いや、もしかしたら自分の勘違いかもしれない。

「正直、知り合ってからかなりの時間は経過しているものの、今日初めてこうして踏み込んだ話をしたばかりですし、なんとも言えないって感じですかね。でも、趣味の話が出来そうなのでもっと仲良くなりたいたいというのは本当です」

「そっか。それは、本当に良かった」

玉木さんは胸をなでおろした。

「どういうことですか?」

「ん? 私が比企谷君に毎日のようにアピールしてたのも無駄じゃなかったなあって」

「っ!」

それはそういう意味で受け取ってしまったても良いものなのだろうか。曖昧なので良く分からない。それに聞いたとしても煙に巻かれる未来しか見えない。

「別にいきなりお近づきになりたいとかまでは思っていないけどね。でもこうして、偶には二人で話すのも悪くないと思いませんか? つてアピールは今日の三人での飲み会で思ってもらえたら嬉しいなって」

「まだ始まってすらいなのに、随分と攻めてきますね」

「あんなに毎朝話しかけてるのに今更って感じじゃないかな?」

「それは、確かに…」

玉木さんが少なからず好意的に俺のことを見てくれているのは随分と前から感じていたことだ。

「それに有耶無耶にするよりも『そのつもりです』って最初から言っただけのほうが意識してくれるかなって思ったから」

俺の逃げ道を塞ぎたかったというところだろう。本当にこの人は俺のことをよく理解している。

「とりあえず玉木さんだけは絶対に敵に回したくないですね…」

「じゃあ手籠めにする？」

「それもそれで膝に爆弾抱えてるスポーツ選手みたいな状態になりそうではありますが」

「ふふ。なにそれ。でも、自覚はあるなあ」

「まあ、こういう皮肉も受け止めてくれるところは凄くやりやすくて楽しいですよ」

「ありがと。もうすぐいろはちゃん来るかもだね。彼女には集合時間5分だけ遅く伝えておいたから」

「え」

「嘘。冗談だよ☒」

俺が怖いって言っているのは、そういう事さらっと言うところだよ玉木さん…。

「あ、今のうちに連絡先教えてくれない？」

「え、一色から聞いていないんですか？」

「いや、いろはちゃんってば比企谷君の連絡先だけは頑なに教えてくれないんだよね…」

「ああ……」

いや、気持ちは分からなくはないんだけど流石に強情を張るのも違うと思うぞいろはすよ…。それにこういう結果になることは目に見えていただろうに。

「じゃあこれ、自分のLINEのQRコードです」

「これはいつも使う用？それとも愛人との連絡用？」

「…ご想像にお任せします」

「あ、愛人居るんだね、比企谷君」

「え」

え、これって言質取られたの？回答ミスったの？

「そこは持っているのは一つだけって言わないと…」

「…す、すいません」

「はい言質取った」

「え」

「謝っちゃったら確定じゃん。さっきのはまだ全然グレーだったのに。うふふ。可愛いなあ本当…」

もうやだこの人。

「メッセージ送ったから確認してね」

「は、はい」

気を落としながら、雪乃や留美と連絡を取る用の携帯を取り出してメッセージを確認する。確かに、玉木さんと思わしきアカウントからスタンプと写真が送られてきていた。

「玉木さん、アカウント名は『M a k i』なんですね」

「本名がたまきまきだからね。まきまきとかでも好きに変えてくれちゃって大丈夫だよ」

「そ、それでもし俺が本当に玉木さんの表示名『まきまき』に変えたらどうするんですか？」

「それはそれで面白いし、比企谷君への好感度が爆上がりするね」

「まじか」

「まじです。だから、一緒に画面見るから今ここで変えてほしいなあ」

「ちよーち、近いです…」

胸とか肩とかとにかく全部あたって。しかも滅茶滅茶柔らかくていい匂いがする…。

「変えてくれないと離れないよ？それとも、比企谷君的にはこのまま変えないでこの状態を楽しむ方が良いかな？」

「か、変えるので一旦離れてください…」

仕方なく俺は速攻で玉木さんの登録名を『まきまき』に変更した。その画面を見せると玉木さんは満足したように俺から2歩ほど下がった。

「抜き打ちチェックするからね？もし変えてたら、いろはちゃんに有る事無い事言いつけちゃうから」

「それ、卑怯じゃないですか？」

「嘘。冗談☒」

玉木さんはくすくすと笑っていた。

続く

第七十四話☆

「……それで、結局わたしがお店に到着する前に玉木さんと連絡先を交換してしまったということですか？」

「ま、まあそうなるなあ……」

いろはと玉木さんの飲み会が終了し、駅の前で解散をした後のことである。案の定、俺はいろはに尋問される始末となっている。彼女は、自分が集合場所にやってくる前に俺と玉木さんの間で何かあったのではないかと睨んでいたらしい。まあそれは当然のように凶星であり、彼女に対して一切の隠し事が出来ない俺は早々に自白をした。打ち明けられた事実は彼女にとって想定内ではあったものの、好ましくはないようで……。

「先輩が断りづらい状況下にあったことは重々に理解してはいますけど……」

いろはは空いていた左手を顎にあてがいながら難しい顔をして俺をじっと見る。それは俺のことを見ているようで見ていなかった。

「はあ……」

いろはは盛大なため息を漏らした。

「先輩、今度いつ会えそうですか？」

「い、いやそんなことよりもだな……」

「流石にまた今週末とかに会うのはヤバそうですよね。でも流石のわたしも先輩の体が恋しくなってきたから、近いうちに抱いてほしいんだけどなあ……」

「いや、だ、から、だな……うっ!」

「ちよつと、変な声出さないでくださいよ。周りから変な目で見られちゃいますよ?」

「お、お前が扱くのをやめればいい話だろ……」

そう。俺はいろはの右手に愚息を握られ刺激を与えられ続けた。た。

しかも、夜の公園のベンチで。

屋外でだ。誰かに見られでもしたら公衆猥褻で一発アウト必至。

そんなものはスリリング通り越して、ネジが飛んでいると表現するべきだ。

人通りが少ない場所だから良いものの、その静けさに肝試しが出来そうな物々しさすら覚える。良いもののはつてなんだ。俺の感覚大分おかしくなっていないか…？

「でも先輩その割には腰浮かせて気持ちよさそうな顔してますけど？ほら、わたしが唾液垂らしてもいないのにぬちゃぬちゃ言ってます。我慢汁出まくってるじゃないですか♡」

「せ、生理現象だろ、男として当然の反応だな。どうやら俺は健康体らしい…」

「そうみたいですわね。そういうえば最近ちゃんと射精しましたか？」

「い、一週間近くは…してない、と思う」

「じゃあ不健康ですわね。先輩みたいな性欲おぼけがそんなにも長い間出していないなんて、可及的速やかに解決しないといけないじゃないですか」

いろはの手が早くなる。彼女の柔らかい手に包まれた砲身が呼応するようにビクビクと脈打ち、俺の意に反して発射の準備を進めてしまふ。

「ば、ばか…でる…！」

「良いですよそのまま出しても。そのためにわたしのストロールを先輩のおちんちんに被せてるんですし」

いろはが今日首にかけていたストロール。それは今俺の股間を覆い隠すように置かれている。

「き、汚いだろ…今更言うのもどうかと思うけど…。そ、それに臭いとか、洗つてもとれるかどうか保証できないし…」

「何言ってるんですか先輩。臭いを付けるために被せてるんですよ。そうすれば先輩が居ない時にそれをおかずに出来るじゃないですか」「な!？」

へ、変態だ…。変態がここにいる。

「今更先輩に変態扱いされようとも全く気にしませんよ。それに性癖の歪み具合で言えば、お互い様だと思ってますし。このストロールもこ

の寒い春先が終われば買い換える予定だったので気にしなくても大丈夫ですよ」

「ま、まだお前にはそんなに俺の性癖を見せていないだろ…」

いろはとはまだたったの一回しか体を合わせていない。しかも彼女が初夜ということもあって、マニアックなことはせず王道な体位でしか行っていないし、前戯もオーソドックスなものだけにしていたはずだ。

「初めての夜だったのに、羞恥責めして若干陵辱気味なプレイをしたのにはですか？」

「そ、そうだったっけか？」

今思い返してみればそんなこともしたような気がしなくもない。うん、したね俺。

「まあわたしってMっ気もあるから、それはそれで滅茶苦茶興奮しました。なのでお咎め無しですけどね」

ストールの中から聞こえる卑猥な粘着音に両耳を犯されつつ、いろはにされるがままになっている。いろはは追い打ちをかけるように俺の耳元に濡れそぼった唇を近づける。

「ふふふ…。先輩って昔からこうやって耳で囁かれるのに凄く弱かったですよね♡ 総武高校の時、いつも耳を押さえて顔真っ赤にしたの凄く可愛いなあって思っていましたよ…」

「俺のことからかって楽しんでたわけだ」

「はい♡ まああの頃から先輩のことずっと好きでしたし…。だから今こうして先輩がわたしの手コキで気持ちよさそうにしているのを見るだけでも濡れちゃって…」

いろははそこで、茎部分を抜く動作から袋の方へ狙いを変えて、爪でカリカリとシワの部分的刺激し始めた。

「あ…あう…ぐ…」

「えへへ…♡ せんぱい、これに弱いですよね？ おちんちんよりもこっちの方が感じるんですか？ でも、こっちだと射精できないから段々と苦しくなっちゃいますね…」

「ぐっ…うあ…うう…」

「ふふ。出したいですかあ？そうですね〜わたしの手、凄く気持ち良いでしょ？」

「わ、わかってること、きくなよ…」

「だしたい…？」

俺は言葉にせず、首を縦に振ってそれに答える。でも…

「でもカリカリも好きなんですよね？」

もう一度首を縦に振った。

「あはは…♡じゃあ、出したくなったら、わたしのおっぱいを揉んで教えて下さいね」

そう言っているのは俺が胸を揉みやすいように背中を預けるようにして俺の体にもたれかかった。そして後ろ手に器用に俺の股間をまさぐり、子種袋を弄んでいる。

目線を下にやるといろいろはの胸が眼前に広がり、その奥では彼女の手と俺の愚息との情事が営まれている。

このストールの下で一体どれぐらい怪しく艶かしくいろいろはの右手は蠢いているのだろうか。男の欲望の防壁をアルカノイドのように崩して行き、快樂の魔の手が忍び寄る。蠱惑的な笑みを浮かべた後輩は俺の理性が崩壊するのを今か今かと待ち望んでいるのが分かった。

首元から香る香水の甘い香り。それが直接鼻腔にすべて流れ込んできて、煩惱を刺激した。ますます脳が正常な判断を下せなくなっていく。

もつと触れたい…。

今直ぐにでも彼女のたわわに実った大きな双丘に両手を添えて乱暴に揉みしだいてみたい。

勿論、彼女はそれを許してくれるだろう。

むしろそれを喜んでくれて更に淫らなことを要求してくれるだろう。

俺はその甘美な誘惑に溺れても良いのだろうか。いや、今にも溺れなくて仕方がない。

逡巡する間にも彼女の手は止まらない。細長い指の腹と爪を器用に使って玉袋を刺激してくる。その度に子種を砲身に送り出そうと

精巢の動きが活発になつて射精したい欲望が膨れ上がった。

「はあ…ふう…う…ぐ」

気がつけば俺は本能に流されるがままにいろはの後ろから手を回して彼女の両胸を乱暴に掴み上げていた。

「ふあ…あう…ん…い…」

快感に悶たいろはの口から淡い嬌声が漏れ出る。そのままストールの途中で暴れる右手を袋から硬直へと移し、そつと握りしめた。

「あん…も、もう、出したくなつちやつたんですか？」

いろはの挑発には全く耳を貸さず、ただひたすらに欲望のままに彼女の胸を揉みしだいた。吸い付くような柔らかい感触を楽しみつつ、彼女の息が荒くなつていくのを賞翫した。それに伴つて、彼女の右手の上下の運動が激しくなる。射精感が段々とこみ上げてきた。脈打つ律動が彼女に興奮と快樂の反応を伝えている。

「ああ…はう…んん！せ、せんばい…きす…しよ？」

後ろを振り向いて嘆願するいろはの唇を貪るように味わつた。柔らかな感触を確かめた直後、蛇のように差し込んできた彼女の舌に口内を犯される。卑猥な粘着音の二重奏。噴火はもうすぐそこまで来ていた。

「ん…ちゅ…ちゅる…じゅる…ちゅ、ちゅ、ちゅる、んはあ、あん、んむ！ちゅ、ちゅ、ちゅ…しえ、しえん、ふあい…らひて、いいれふよ…」

「んちゅ…じゅる…い、いろは…い！」

いろはの体を思い切り抱きしめる。そして全身でビクビクを痙攣を起こしながらいろはの手の中で精を放つた。焦らされ続けた影響で止めどない量の精液が噴出しているのが分かる。

「あ…あはは…♡手の中に収まりきらなくらい出ちやつてる…」

「はあ…はあ…わ、わるい…お前のストールにも滅茶苦茶かかったよな…？」

「良いんですよ。かけてほしくて被せてるんですから。これで先輩の臭いがべつとり付きましたね…」

「ふう…はあ…」

「ふふふ。そんなに気持ち良かったですか？」

外に出していた自信の愚息をしまいつつ正直な感想を吐露する。

「…頭がおかしくなりそうなくらい気持ちよかった」

「それはとても嬉しいことを聞けました…それにおかずまで提供してただけて…。でも…」

いろはの表情はどこか不満そうだった。ストールを綺麗に畳んでカバンの中にししまいつつこちらをじっと見る。

「わたしがまだイッてないです…」

「まずい、嫌な予感がする…。」

「お、俺にここで同じことをしろってことか…?」

「いいえ…、先輩ってまだ出来ますよね?」

「そ、それって…」

いろはは身につけているタイトスカートのファスナーを緩めた。俺はこれから自分の身に起こるであろうイベントに戦慄しながらもどこか高揚感を覚えた。

「この公園の木陰って結構〃穴場〃なんですすよね♡」

続く

第七十五話☆

「んむ…ちゆる…じゆる…じゅぼ…じゅ、じゅ、んん。むう、ん、ちゆく…じゅぼ…じゆるる…」

「うあ…」

「んふふ…しえんふあい…ひもひいいれふふあ？」

街頭のない木陰。広場から少し外れたその場所で俺はいろはに舐られていた。暗闇の中、いろはの口から奏でられる淫猥な音だけが響いている。

男の急所を知り尽くしたかのような執拗な奉仕。裏筋を的確に捉えて放さない。今しがた出したばかりだというのに、瞬く間に硬直を取り戻した俺の愚息は既に射精の準備を始めようとしていた。

「お前…こんなのどこで…覚えたんだよ…」

「ふえ？そんなに気持ちいいですか？自主トレも馬鹿にならないですね」

右手で肉棒を扱きながら胸元のボタンを外して胸をはだけさせる。水色のブラに収まった大きな胸がシャツの隙間から見えた。いろはが動く度に見えたり見えなかつたりするので、それがまた男の興奮を増幅させる。視界にチラチラと映るレースをずっと見ていたくてたまらない。

「んちゅ…んむ…ぐ…ん…じゅ…じゅぼ、ぎゅ、ぎゅぼ、じゆるる…ん…んむ…ちゅ、んぐ…」

いろはは俺の愚息を啜えながら自分の胸をもみ始めた。恍惚とした表情を浮かべつつ俺の顔をじっと見つめている。それに応えるようにして彼女の頭を両手で添えるようにして撫でた。

「はあ…はあ…いろは…凄く良い…」

「んちゅ…ど、どうしたんですか、急に？」

驚いたいろはが肉棒から口を離してこちらを見る。

「正直に言うのがそんなにおかしかったか？」

「そりゃあそうですよ。先輩って捻くれ者ですからあんまりストレー

トに感情とか意見を表現しないじやないですか。しかもわたしに対しては特に言わないですし…はむ…」

「お、おまえ…喋ってる途中にまた唾えるなよ」

「んじゅ…はむ…んむう…ぷは…。なんか、もう先輩のを定期的に啜えていないと心が落ち着かないです…はむ…」

「ひ、頻度が高すぎやしないか？というか啜えていないと落ち着かないって…ヘビースモーカーぐらいしか言ってるの聞いたことないぞ…」

「んちゅ…それって平塚先生が言っているのをよく聞いてるって自白と捉えても良いんですかね？」

不意にいろはが仏頂面になる。他の女性の話題を出されたと思つて不快になったのだろうか。別に今の発言は平塚先生を全く意識していないで言つたものではあるのだが。下手なことを言うと言つて急所に歯を立てられかねない。

「そんなつもりはないんだけどなあ…。それにあの人最近禁煙頑張ってるっぽいし…」

「え、そうなんですか？」

「タバコを吸う女は無理って合コンで言われたらしいぞ」

「そ、それは切実ですね」

流星のいろはも同情したらしい。その影響で禁煙によく禁欲が性欲に向かっているのは、必然なのかもしれない。あの人最近会う度に俺に迫ってくるから困る。しかも四十代近いはずなのに信じられないくらい美人で体つきも最高だし。なんであの人に彼氏が出来ないのか不思議でならない。

「先輩は、平塚先生ともエッチしたいって思いますか？」

「そ、その聞き方は卑怯じやないか？」

「じゃあしたいんですね…はむ…」

「ちよ！強く吸わないでくれ…出そうになる…」

「そうになったら金玉握って止めてあげるんで大丈夫ですよ…んちゅ…」

「DSかよ…。でも平塚先生と関係持ったら、お前や雪乃たちとの関

係を続けるのは絶対無理だろ。あの滅茶苦茶重いから」

「そうですね…。ちゆる…じゅぼ、じゅぼ、ん…。絶対他の女とヤツたなんて聞いたたら、包丁持ち出してきてもおかしくないと思います。地雷女待ったなしですね」

いろはは先つぽをチロチロと舐めながら茎の部分を扱っている。

「お、お前。結構酷いこと言ってる自覚あるか？」

「まあ事実ですし良いんじゃないですか？」

「事実だからって言ってる良いわけじゃないだろ…ん…う…」

突如いろはの綺麗な顔が股間に密着するかのごとく接近して、肉棒が温かい感触に包まれる。

「じゅぶ…じゅぶ…もう平塚先生のごことは良いでしょ？早くもっど気持ちよくなりませんか？ん…む…」

「いろは…やばい…もう出そうだ…」

「じゅぶ、じゅぼ…。えへへ…そんなにわたしのフェラ気に入ってくれたんですねえ♡」

いろはは立ち上がると履いていた下着に手をかける。

「じゃあ今度は先輩の番です。もうぐっしょくしょくになってるんで、スーツに愛液が垂れないように気をつけてくださいね…」

「分かってる…じゃあその木に寄り掛かるように立ってくれ」

「はい…。ああ！」

いろはは俺が秘所に口をつけた途端、悦びを全力で表現するかのよう大声を上げてしまった。裂け目から抗うことの出来ないフェロモンが溢れ出ている。彼女の言う通り、蜜液によってその場所が怪しい光を放っていた。

「お、お前…。周りにバレるぞ…」

「ご、ごめんなさい…。でも…思った以上に気持ち良すぎて、我慢できないかもしれません…」

「この前、クンニしただろ…初めてじゃないだろうに」

「でも、あの時は先輩と繋がった悦びで頭が一杯で…快感の方に意識回ってなかったんですよ…。はあう！」

「良いから口元を手で押さえてろ…。ん、じゅる、じゅるる、れろ」

いろはを木に追いやるようにして、自身の顔を彼女の股の間に埋めた。泉から湧き出る愛液を一滴も漏らさないように丹念にすすり上げた。舌を使って形の整った陰唇を周りに沿ってなぞる。ガクガクといういろはの体が震えだし、自身の体を支える力がなくなっていくのが分かった。

いろはは必死に声を出すまいと堪えている。声を出したくないという自制の心ともっと気持ちよくなりたいという欲望へのジレンマでどうして良いのか分からない様子だ。しかし、その状態が一番快楽を享受しやすい。

誰も居ないこの暗い場所で一人の美女が淫らに肉欲に溺れている。その姿を独り占め出来ていることに対する優越感が股間を怒張させていた。

「んん！はあ…、あ、う、ああ、んんんん！」

ど、どんどん溢れてくる…。いろはは濡れやすい体質なのか、湯水のように愛液が出ており、彼女のストッキングが濡れて変色してしまふほどだった。

「お、お前。これ下着大丈夫か？」

「…はあ…あう…。ぬ、濡れすぎてちよつとやばいです…。でも、濡れても良いからやめないでください…。先輩の口でイきたい…」

「わかった…舌入れるぞ…」

「はい…んんんんんんんん！」

膣内に舌を差し込んだ瞬間、いろはがおとがいを上げた。右手で口元を押さえながら、左手で俺の頭を抱えた。そのまま秘所にぐりぐりと押し付けるように、引き寄せてもつと激しくしてほしいとねだっている。

「ああん！んんむう！」

いろはは人差し指を噛みながらじつと堪えている。生まれたての子鹿になりながらも、快楽を求めて必死に腰を振った。

「い、いっっちゃう…」

「んじゅ…じゅる…。どうしたらいい？」

「あん…う…い、いかせて…ああああああ！」

いろはの言葉を待たずに、俺は充血しきっていた彼女の陰核に吸い付き、舌の上で転がした。5秒と経たないうちに、彼女は絶頂してその場から崩れ落ちた。

腰が下がる彼女を抱きかかえるようにして支える。いろはは熱い吐息を漏らしながら、再び勃起した俺のペニスを優しく撫でた。

「せ…せんぱあ…いい、挿れて…」

「もう大丈夫なのか？」

「はい…。後ろから…犯してください…」

いろはは先程までもたれかかっていた木に両手をついて、臀部を俺の前に突き出した。

「立ちバックか…あまり慣れていないからもしかしたら、うまく出来ないかもしれない。先に謝っておくわ」

「大丈夫ですよ…。そんな余計な心配しなくてもいいです。青姦つて時点で興奮がヤバいので」

「…そういえばそうだったな」

「先輩は…外するのは初めてですか？」

「する機会もないから初めてに決まってるだろ」

「結衣さんや雪乃さんとはしなかったんですね…」

「結衣とは屋内ですれば良いだけの話だしなあ。雪乃は言わずもがなだ」

「わたしの変態っぷりに振り回されちゃってますね」

「苦勞が絶えないな」

「でも、先輩も興奮してるでしょ？」

「そりゃあこんなにな固くなってるし」

「あん♡ 結構力チカチですね…」

屹立した肉棒で彼女の尻を叩いた。みずみずしい音が興奮を促進させてくれる。

「ねえ、はやく挿れてください…よ…。先輩のおちんちん早く欲しいです」

「ゴム付けるからちよつとだけ待ってろ」

「生でいいじゃないですか…雪乃さんともゴム使ってたんで

しょう。なんで、わたしには変に律儀になっちゃうのかなあ…」

「い、良いのか？」

「今日は大丈夫な日ですよ」

「お前はたとえ危険日でもそういう事を言いそうだから怖いんだけど…」

「むう…そこまで信用ないんですかわたしって…」

「自分で言うのもアレだけど、いろはって俺のことになると急に盲目になるからなあ…。普段は滅茶苦茶計算高いのに」

「それ、ダブルパンチでデイスってません？」

「そういうところが可愛くて良いってことだよ」

「ん…それ、あそこがキュンってなりました」

目の前でいやらしく腰を振る彼女を横目に財布から素早く避妊具を取り出して自身の硬直に取り付けた。

「じゃあ入るぞ」

「はい♡来てくださいい…」

彼女はすでに準備万端のようだ。ペニスを彼女の秘裂にあてがい、ゆっくりと腰を前に進める。底なし沼に沈むように肉棒は彼女に飲み込まれた。同時に温かく柔らかい感触に包まれて、水を得た魚のように肉棒がビクビクと反応した。

「ああ…ん…はあ…。せんぱいの…やつぱり気持ち良い…」

「い、いろは…の、絡みついてきて…」

動いていないのにもかかわらず、彼女のヒダが餌に群がる動物のように一斉に蠢いて肉竿を刺激した。きつく締まった膣口が逃すまいとして精液を搾り取ろうとしてくる。

「な…なんだこれ…」

「ああ…ん…。えへへ…、先輩とする時のためにずっと膣トレしてたんですよ♡」

「き、鍛えることとか出来るのか？」

「あるんです。それに疑っていいようとも、現に成果がここで実証されていますし☆」

「そ、それは間違いないな」

まずい。本当に気持ちよすぎる…。膣内全体が別の生き物のようになって砲身を包み込んでいる。今直ぐにでも全てを解き放ちたい衝動に駆られてしまう。砕けそうになった腰を支えるためにいろはの背中にすがるようにのしかかった。そのまま彼女の胸を後ろから鷲掴みにする。ゴム越しでもこの快感だ。生でしようものなら一瞬で果ててしまいそうだ。

「あん♡先輩にマウント取られちゃいましたね♡ちゅ…んむ…」

こちらを振り向いたいろはが唇を重ねてくる。残念ながら、こちらには啄むような甘い接吻を楽しむ余裕が無い。

「う、動いたらすぐにも果ててしまいそうだ…」

「良いですよ、先輩の好きなタイミングで出しちゃってください」

「といっても…直ぐに出したら…申し訳ないだろ？」

「…その割には…ん…あ…結構激しく腰振ってませんか？」

いろはの言う通り、俺は肉欲を貪るがままにいろはの中を蹂躪していた。腰を打ち付ける度に肉壁に優しく愛撫されて、ヒダが一斉に肉部に群がるような感覚に襲われた。

「これ…ヤバすぎだつて…」

肉棒に伝わる感覚一つで全身を掌握されてしまった。支配的な快樂の奔流に、あつという間に飲み込まれていく。

「あはは…せ、先輩が狂ったように腰を振っているって思うと滅茶苦茶興奮しちゃいますね…」

単純作業をこなすための機械のように、ただひたすらに腰に全体重を乗せていった。その度に俺に報酬を与えるが如く、いろはから歓喜の嬌声が届けられた。

「あ、う、お、うう」

自身の口から情けないうめき声が漏れ出る。男の尊厳なんてあつたものじゃない。しかし、そんなことなど今の俺にとっては些末なことだった。いろはの中に存在するということだけが至上命題とすら思ってしまうほどに快樂を求めている。快感を求めれば求めるほどいろはの膣内も比例するようにさらなる刺激をもたらしてくれる。

「あん…うう…ああーあ、あ、あん、しえ、しえん……ぱあい…♡」

悶えるようにいろはの腰がくねくねを扇情的に動く。肉竿がまるごと持っていかれそうになるような強烈な快樂の一撃。腰がいつ崩れ落ちてもおかしくない。

公園に植えられた広葉樹の木々の間で行われる獣の戯れ。草葉が擦れ合う音の広がる空間で、あまりにも自堕落に満ちた放蕩。

絶世の美女が腰を淫らに振って俺を誘惑している。

俺はただその事実だけを処理すれば良い。その他一切の余計な情報排除して、淫蕩に耽る。

「あ…ん…せ、せんぱい…せんぱいの感じている顔が…見たいです…んう…！」

「わ、わかった…」

一瞬でもいろはの中から離れてしまうことを名残惜しく感じつつも肉棒を彼女の秘所から引き抜く。ポタポタと滴る愛液を纏ったそれが夜風にさらされる。いろはがゆっくりと正面を向き、片足を持ち上げるよう俺に誘導した。

均整の取れた右足を抱えてもう一度俺は彼女の中へと帰っていく。

緩やかに快樂の沼へ自身の一部が引きずり込まれていく様を凝視しながら目の前の彼女の恍惚とした表情を独り占めした。

いろはの両腕が俺の首に回される。お互いに寒さを感じないようにしつかりと密着しながら肉欲を深く貪り始めた。

「あ…せ、せんぱいのがまた…あ…」

先ほどとは違う場所を刺激されているのか、いろはは蕩けるような甘い声を漏らした。

持ち上げられた右足の先はピンと伸びている。俺がよそを向いているのが分かるとそれを許さないと言わんばかりに彼女は自身の唇を俺の唇に押し付けてきた。

「んちゅ…ちゅる…ちゅば、ん…んむ、ちゅ、ちゅ…」

唇の接触に合わせて腰を打ち付ける。柔らかい胸の感触と共に最高の快感がもたらされた。

いや、それだけではないのだろう。

初めての野外での行為にハイになってしまっているのだ。

悪魔的な刺激の強さ。一種のトランス状態のようになってい
かもしれない。

それはいろはも同じに違いない。

前回は初めてということもあって、快感よりも痛みの方が記憶に
残っていたのかもしれない。というか2回目で青姦で、こいつの性癖
これから大変なことになるのでは…？その相手をしている俺が心配
をするのはお門違いにも程があるというものだが。

腰を振り続けていると、段々というはの目の焦点が失っていくのが
分かる。快楽に飲み込まれて自我がなくなっているみたいだった。

「せんぱい…これ…すきです…もつと…して…」

強烈な快感の渦の中、言葉を必死に絞り出そうとしている彼女が愛
らしくて仕方なかった。

俺は彼女の膺の感触を何度も確かめるようにペニスを前後させた
後、彼女の奥深くに精を放った。

お互いが果てた後もしばらく繋がったまま深く抱き合っていた。

「いろは…」

「せんぱいのえつち…すつこい出ちやってますね。コンドーム越しで
も温かいです…ん…」

今度は俺の方からいろはの唇を奪った。そうしたかったからした。
滴る愛液が夜風にさらされる。

そこからひんやりとした感覚が足元から襲ってきた。

それでも行為を終えるまで股間が熱を失うことはなかった。

続く

第七十六話

「八幡、これってどうしたら良いの？」

「ルミルミ。仕事なんだから、ちゃんと『比企谷さん』って言うようにしような」

「八幡だつて私のこと『ルミルミ』呼びしてるじゃん」

俺の机のところにもまでわざわざやってきて、手順の説明を要求してくる留美。本来であれば教える役目は俺ではないのだが、何故か彼女は俺のところにもで来るのだった。理由はなんとなくわかる気がするが、わからない。そう、そういうことにしている。

留美曰く、智佐吹さんの手が空いている時は彼女に聞くらしい。まあ、あの人の場合、手が空いている時が珍しいので、基本的には他の人に聞くことになるのだが。

つまり留美の実質的な教育係は俺ということである。ロサンゼルス就活の時、留美が部下になったら自分が育てると豪語していたはずの上司は滅多に顔を見せない。あの時の発言の是非を問いたいたいところだ。

「それなら、お前の近くの席の葛西さんとかに聞けばいいじゃねーか…」

「なんかあの人、下心丸出しで話しかけてくるから嫌い」

「え、あの人そんなことないと思うんだけど」

「入って一週間ぐらいで連絡先聞かれた。一応業務の連絡もあるし交換したんだけど、その後しばらくして、2人きりの食事に誘ってくるメッセージばかりだよ」

「ほえー…あの人そんなイメージ無かったが」

「疑うなら証拠見せようか？」

「いや、それは俺が見たらいけないものだろ絶対…」

留美が携帯を出して本気で見せてこようとしてきたため制止した。俺、あの人と偶に業務で連絡取り合うから変なところで溝を作りたくないんだよ。ただでさえ普通に苦手なのに。いや、もうその話聞いちやっただから溝できちやっただけどね。

「…君たち本当に仲がいいですねえ」

俺たちの会話を隣で聞いていた芦間がジト目で睨んでいた。

「それにしてもさつき話していた話題に関しては何しばかり興味深かったなあ」

「お前ってそういう話に首突っ込むタイプだっけか？」

「まあ聞いたところで明日にはどうでも良い情報になっている気がする」

「だよなあ…」

「でも、あの人経理の人と二人で飯食ってたのこの前見たけどな」

「え、そうなの？」

「ただ不倫がはびこっているんだよ、ここ。俺が一番言っているのはならないことだとは思うけど。」

「経理の子ってあの背の高い子でしょ？」

「あ、そうっすそうっす。経理の中ではマドンナ的な…って何下世話な話に興味津々なんですか智佐吹さん…」

後ろを振り返ると、美人で有名なうちの上司がそこに立っていた。さり気なく俺の肩に手を置いているのが、ちよつとドキドキする。隣の留美の温度が下がっているような気がするのは気のせいだと願いたい。

「2年くらい前に私も葛西に口説かれたけど、未だにそうやってとつかえひっつかえ漁っているんだね〜あいつ」

「その話し方からして、意外に女子コミュニティでは有名なんですか？」

「真紀も口説かれたって言ってたし。まあ二人共速攻で断って、何かあったら口説いてきたことばらしてやるって脅しておいたから、それ以降は何も無いけどね。本当奥さんが可哀想」

その発言に彼女以外の全員の血の気が引いた。この人と玉木さんを敵に回すのだけは絶対にやめておこう。

「いろはちゃんにも手を出そうとしたみたい。というか彼女は比企谷君にお熱なのによくチャレンジしたなと褒めてあげたいぐらいだけだ」

「なんで唐突に爆弾投下したんですか」

おかげでルミルミが修羅の相になっているじゃないですか。彼女がへそを曲げたらしばらく戻らないんだから大変なのに。責任とつてくださいね（いろはす風）

「まああの人とっても綺麗だから仕方ないですね」

留美がふてくされたように吐き捨てる。それは自分を口説いてきた葛西さんへの同情などでは決してないことはこの場にいる全員が理解しているだろう。

「留美から見てもそう思うのか？」

気まづくなつて話をそらすように話題を振った。留美は俺の意図を汲み取って更に気色ばんだような表情をしたが、周りに悟られないように直ぐに戻した。

「うん。あんなに美人な人少なくとも私は会ったことない。あくまで私の個人的な感性に依るものってことわりはあるけどね」

「そ、そうか…」

ここ10年近くはいろはとずっと顔を合わせていたから俺視点の彼女に対する評価は全く当てにならないので聞いてみたのだが。思った以上の高評価（？）が返ってきて驚きを隠せない。確かに今のいろはは誰が見ても美人であるというのは間違いないのだが、留美が言うと言説力が違う。

「留美ちゃんが言うから重みがありますよね」

「そ、そんなことないです…」

芦間が同じようなことを口にしていた。留美も留美で今年の新入社員の中での女性人気は他の追随を許さない圧倒的一位だろうからなあ。そのくせ褒められるとこれなのでうぶなのがまたあざとい。いろはとは違って天然物のあざとさ。

「それで、何か用でもあったから俺らのところに来たんじゃないですか？」

珍しく芦間が真面目に軌道修正をした。今世紀とまでは流石にいかないが、今月最大のびつくりであることには間違いない。

「あ、そうそう。来月ね、B社の案件で出張があるんだけど…」

「お断りします」

「はや」

智佐吹さんが全てを言い切るよりも早く口を挟んだ。この流れは確実に俺に出張の話が飛んでくると経験で知っている。

「まあお察しの通り、比企谷君に頼もうと思っただけだよ」

「メンバーは？」

「うん？君一人。まあ国外じゃなくて名古屋なんだけどね」

「ゑ？」

「もしかして私と行きたかった？」

智佐吹さんが怪しく微笑む。だから留美をわざと焚きつけるような言動は控えて欲しいというのに。

「良いなあ〜出張」

「会社勤めにもう飽きが来ているのか？入ったばかりだろ？」

「別にそういうことじゃないですよ比企谷さん」

「こんな時だけ急にビジネスライクになるなよ…」

やはり留美の機嫌が悪くなっている。これはあとが怖い。

「女子からの不意の敬語って殺意を感じるよね」

「芦間は余計なことを言わなくて良い」

「いろはちゃんもそんな感じなの？」

「智佐吹さんは何故急に一色の話題を口にしたんですか…」

話が逸れてしまったが、どうやら俺は出張をしなければいけないようになったらしい。

……。

「……ということでは俺は近いうちに名古屋の方に行かなければいけなくなったらしい」

「へ〜、引きこもりの先輩が出張となるとまた大変そうですね」

「全くだ。誰かに変わってもらいたかったが」

「ねえ先輩。それって誰か他の人も一緒に行くんですか？」

「いや。今回は俺一人らしい」

「そうですね。それなら安心ですね」

二人で昼食を取りながらいろいろははホツとしたような表情を見せた。
「何が安心なんだ？」

「先輩が出先で愛人候補を増やさなかつて心配ですよ」
「どこまでも信用がないんだな俺は……」

「そんなこと言っておきながら自身の行動を振り返ってみればいくらでも思い当たる節があるんじゃないですか？」

「……………そうだな、バーゲンセールかっつてぐらい一瞬で黒歴史が頭の中で一列に並んだわ」

「自分で言うのもどうかとは思いますがね…。反省する気ゼロじゃないですか」

「というか出張といつてもたったの一日でしかもほぼクライアントに拘束される状態になるので旅行気分なんてもものには一ミリもなれない。自由時間があるのかすらも怪しいレベルだな」

「そうやって変なフラグを建てるのも先輩の悪い癖だと思います」

「いや、本当にないから。マジよりのマジだから」

「ふくん…」

いろいろは微塵も俺を信頼していない模様。まあ知ってた。

「やっぱ先輩はわたしが管理したほうが良いのかなあ」

「何しれつとサイコパスみたいな発言してるの君？」

「冗談ですよ。GPSアプリをこっそりぶち込むだけで許してます」

「え、嘘。お前入れてんの？」

「いや、冗談ですよ。流石にそこまでデリカシーの無いことはしませんつてば。あ、でも先輩のスマホのパスワードは知ってますよ」

「おい。全く安心できねーじゃねーか」

「先輩、エビフライ貰っても良いですか？」

「俺が良いよと言う前に口に運ぶのやめようね。あと、さっきのツツコミ終わってないからね」

「良いじゃないですか別に。わたしに見られたら困るLINEとかあるんですか？」

「それは嫁が旦那に言うやつだろ…」

「やっぱり愛人に携帯見られたら困ります？」

「お前、もしかしなくても“愛人”って言いたいだけじゃないか？」

「あ、バレました？」

「バレバレです☆」

「全然似てない」

「マジトーンで返さないでいろはす」

「あだ名じゃなくてちゃんと名前で読んでくださいね」

「いや、ここ会社だから駄目だろ…」

こいつ本当相変わらずだなあ。まあ、こういう関係になる前よりもわがままっぷりを表にずつと出すようになった気がする。それはいい傾向だとは思っている。ただ、俺以外の男への接し方は更に悪化したので相殺どころかマイナスだ。

「ねえ先輩。次はいつ会えそうですか？」

結構な寂しがり屋だなあ。会う度に言われている気がする。

「ん？今会ってるだろ？」

「怒りますよ？」

『は？』って言われるよりも何倍も怖いなそれ」

「ムカついた分だけ次回余分に搾り取ります」

「それは嬉しいような、恐ろしいような…」

「先輩ってどんなプレイとか体位でやってみたいですか？」

「なっ!？」

おま、食事中だぞ…。しかも周りで誰が耳を傾けているかも分からないような場所で。

「大丈夫ですよ。わたしだって周囲を警戒しながら話していますから。先輩じゃあるまいし」

「余計な一言を言わなくて良い。というか、お前普段からそんなことばかり考えていたのか？」

「え？そんなことってどんなことですか？」

「いや、その。俺とどういう事をしてみたいとかそういう話…」

「暇さえあれば妄想ばかりしてますね。先輩と肉体関係になった時のシミュレーションの回数はそれはもう数え切れないくらいです☆」

あざといポーズを決めながらとんでもない発言をしてくる後輩。

「しかしまあ、益々俺がお前に好かれる理由がわからないな。なんで俺なんかを好きになったんだ？」

「愚問じゃないですか？多分、先輩がわたしを好きになってくれた理由と同じですよ」

いろははナプキンを手にとると、俺の口元についたソースの汚れを拭き取った。

「出来る奥さんって感じがしません？」

「口元吹いただけでその称号を獲得できたら、世の中の女性が皆いい女になるぞ」

「むう。褒めてくれたって良いじゃないですか」

「めったに褒めないから良いんだろ。ほら、普段怖い先生が褒めてくれた時って印象に残るやつ」

「不良が善行してみたみたいなのですか？」

「まあな。俺ああいうの超嫌いだけ」

こち亀の両津の兄貴がめっちゃ良いこと言ってるやつね。アレ共感しかない。最初から悪いことしないやつが偉い。そして俺は偉くない。

「だったらわたしがいい事した時の先輩からの評価も爆上がりしても良くないですか？」

「俺に悪いことしてたって自覚はあるのね」

「無かったら本当に嫌なやつじゃないですかわたし…。もしかしてその可能性も追われてました？」

「いや、それはないだろ。お前、頭良いし気も遣えるし」

「そ、そうですね…」

「間違えた。計算高いし。頭の中で電卓弾きまくる系女子だし」

「一瞬でも先輩のことを見直したわたしが馬鹿でした」

いろはは呆れていた。

「先輩はわたしと何かしたいこととか無いんですか？」

「正直、お前と居られたらそれでいいって感じだなあ」

「……………」急にドキッとすること言わないでくださいよ。全然予定していないところで言われたから結構クラフときています」

「それは何よりだ」

俺はいろはの生姜焼きを一切れ無許可で取った。いろははそれを全く咎めることなくそれを俺が食べるところを自愛の表情でじつと見つめている。

「じゃあ、先輩。うちに来ませんか？」

「え？」

「そのですね…。先輩にわたしの手料理でも食べてもらえたらなあつて」

「それは嬉しいが、休日にそれは流石に厳しいだろ。平塚先生をスケープゴートにして出かける方法も何回も使えるわけじゃないし」

「先輩の平塚先生に対する扱いが酷いですね…。多分8割ぐらいわたしのせいですけど」

「安心しろ、今日の夜に二人飲みすることになってるからそれでフオーは出来てる」

「ちゃんと帰れるんですかそれ？」

「チェーン店でバカ飲みするだけだから問題ない。俺が飲まなければ良いだけだからな」

「平塚先生が呑んだくれるのは確定事項なんですわね…」

「合流前にウコンの力とか液キャベを相手のために買って会場に乗り込むのがルールみたいなのところある」

「ご愁傷様です」

「全くだ」

「でも先輩って平塚先生のこと大好きですもんね」

「まあな。あれでも恩師だからな」

「そういう意味で聞いたんじゃないんだけどなあ…。まあ良いです。わたしの家に来るのは平日の仕事終わりとかでも大丈夫ですか？」

「早上がり出来た時だな。とはいえ、予定が立てづらいけど平気なのか？」

「もし先輩が押しかけてきたら、みたいなシミュレーションを毎日やっているのでもいいです☆」

「お、おう…」

「いや、ドン引きしないでくださいよ…。自分でも危ないなって自覚は無きにしもあらずですが」

「……無駄な努力にならなくて良かったな」

「お陰様で。じゃあ来てくれるのを楽しみに待ってますね♡」

いろはは嬉しそうに席を立つと一足早く食堂を後にした。ちよつとだけ手に触れてくるのやめてほしい。しばらくいろはのことしか考えられなくなる。

続く

第七十七話

平塚先生との飲み会が終了して帰路に着くまでの途中に携帯を見ると一件メッセージが入っていた。いろはか結衣からだろうか。

『雪ノ下さんとはどうなったの?』

留美からだった。単刀直入な切り出し方はいかにも留美らしい。

『なんというか。文面だとしても説明しづらいような状況になっている』

『…もしかしてバレたの?』

『そのまさかだな』

『それダメじゃん。というか文面で説明できてるけど?』

『そうだな…』

『今話せる?』

『今はちよつと無理だ。このままでも良いか?』

『うん。声が聞きたかったけど我慢する』

なんでこういう可愛いことを普通に言うのかねこの子は。

『悪いな』

『それで今は謹慎してるの?』

……。

『……まあそんなところだ』

いろはとの関係は留美には黙っておくことにした。なんとなくだが、留美というは馬が全く合わなさそうな気がする。

『謹慎している割には一色さんと仲良さそうだったけどね…』

こわい。ルミルミこわい。

『俺とあいつは昔からあんな感じの距離感だぞ?』

『それはそれでびっくりだけど…。だって一色さんってこの会社でも一番人気の人みたいだし』

『え、そう言われてんの?』

『誰が見ても滅茶苦茶美人じゃん。今日も会社で言ったけどあんな美人な人、私は初めて会ったよ』

『留美が言うど皮肉に聞こえかねないから気をつけとけよ』
『それって遠回しに褒めてくれてるの？』
『好きに捉えてくれて構わない』
『相変わらず愛情表現が捻くれてるね。でもありがとう』
『礼を言われるような事をした覚えがないな』
『そうやって女の人口説いてるんだ？』
『なんでそうなる…』
『私もそれで落とされたから』
『今めっちゃ顔赤いわ…』
『え？それすごく見たい』
『絶対イヤだわ』
『ケチ。もつと恥ずかしい所見られてるじゃん』
『意味深な発言止めなさい』
『八幡、セクハラだよ？』
『え？これ俺が悪いの？』
『八幡の心が汚れているとも言えるかな』
『それは間違いない。否定できないとはいえ、その言い方も中々に卑怯じゃないか？』
『かもね（笑）』
『俺の恥ずかしいところはまだまだ留美には見せてないけどな（ドヤ）』
『なんでドヤ顔なの』
『イキただけだから気にするな。真面目に対応されるとボロが出る』
『私あんまり冗談通じないよ？』
『嘘つけ。アメリカンジョークたんまりと携えてんだろ？』
『一個も笑えなかったからストックしてないよ』
『元々留美は皮肉屋だからストックする必要がなかったと？』
『誰かさんの教育の賜物なんじゃない？』
『言うてそんなに教えてないだろ。ほとんど一緒の時間過ごさせてなかったし』

『こういうのは量より質でしょ？』
『俺たちの関係は密だったと？』
『そうなるかどうかはこれからの八幡次第でしょ？』
『痛い所を突いてくるな』
『どうなの…？』
『それLINEで言うことか？』
『でも電話できないんでしょ？』
『今はな。留美はどうしたいんだ？』
『それLINEで言うことかな？』
『そりやそうだ』
『好きだよ』
『言うのかよ…』
『顔赤い？』
『噴火しそうだ』
『じゃあ興奮した？』
『なんで若干エロい聞き方してくるんだよ（――；）』
『八幡が変態だから。こういう言い方のほうが喜ぶかなって思った』
『ルミルミも案外ムツツリだったりしてな』
『それは実際に確かめてみてよ』
『……』
『八幡どうしたの？』
『い、いやなんでもない…』
『八幡は私とエッチしたくないの？』
『すごい質問だな。じゃあ留美は俺としたいか？』
『うん』
『……』
　　なんだろうこの子。めっちゃめっちゃ積極的。
『なんで黙るの…？』
『留美ってLINEだと遠慮がないよな』
『違う顔になるね（笑）運転すると顔が変わるみたいな？』
『それだったら留美がLINEでめっちゃ怖くなるじゃん』

『同じ方が良い?』

『違っても良いんじゃないかって思ってる。それはそれで悪くない』
『ちゃんと真っ直ぐに褒めてくれたら良いのに。でもありがと。八幡はあんまり変わらないね』

『変わらないのが長所だ。誰にでも同じ。小町以外皆平等』

『それはちよつと引くけど:』

『こういう時は乗ってくれないのね』

『八幡の正しい扱い方はこんな感じじゃないかと』

『それは学習しなくても良い』

『八幡の扱い方が上手いからこの会社に採用されたのかもね』

『そんな理由だったらびっくりだわ。ただの1社員に対しての待遇としたらやばすぎでは?』

『あはは。そうだね。ねえ、今度仕事終わったら二人でご飯に行かない?』

『良いけど、親御さん心配しないのか?』

『あのさ:八幡。私もう社会人だし、一人暮らしも始めてるよ?』

『そ、そうだったか』

『いつまでも子供扱いしすぎ:』

『保護者ぽかったか。でもどうしても俺の中の留美って小学生で止まってるんだよなあ』

『じゃあ八幡は子供に欲情するんだね』

『何故そうなる!?!』

『だって私のこと子供だと思ってるんでしょ?でも八幡は私に欲情した、ってことは八幡はロリコンってことになっちゃうけど』

『その三段論法は良くない。色々と間違っている。まず俺はロリコンじゃない。はい論破』

『なんで三段論法の最後を否定してるの:~? (——;)』

『真面目に返されたorz』

『あ!じゃあ私のこと好きなのは否定しないんだね!?!』

『:~:~:~』

『なんで無言!?!』

『いや、その…だな』

『キスもだいぶ前からしてるし、私の胸も触ってるのにそれはないと思うんだけどなあ…』

『そ、その節は本当に申し訳ございませんでした』

『別に謝ってほしくて言ったんじゃないんだけど…』

『留美のことは大事に思ってるよ』

『それ言えばいいって思ってる無いです？』

『そんな軽くは言わないようにしてるけどなあ…』

『ん。なら良いよ。私にとっては八幡が4割くらいかな』

『うわあ凄いいリアルな数字』

『たった1人に対して40%ならなかなかの数値じゃない？』

『それはそうだ。むしろ高すぎるくらいだ』

『でしょ？八幡なんて、私のこと大事とか言っておきながらどうせ5%くらいなんだし』

『5%は低く見積もりすぎだろ』

『じゃあいくつくらい？』

『30くらい』

『本当はその半分くらいでしょ？』

『えらく悲観的だな』

『だって八幡優しいから。本当は雪ノ下さんが6割7割のはずだよ。後は奥さんのことと、一色さんとかいう女狐で20%。有象無象のその他女子で1%』

『成分表みたいだ…』

『八幡の女性に対するリソースの注ぎ方分析。当たってた？』

『ノーコメントだ』

『けち』

『とうかなんで100%女性のことだけなんだよ…（――；）これって日常のこととか諸々全部含めるんじゃないのか？』

『え、八幡って今女性関係以外のこと考えられるの？』

『一応これでもちゃんと仕事してるんだぞ…？』

『一応？』

『留美に仕事を教えているのは誰だ？』

『智佐吹さんでしょ？』

『その人よりも何倍も質問してる相手がいるだろ…』

『6万？』

『8万だ。なんで“2”も少なくしたんだよ（――；）』

『八幡は全部にちゃんとツツコミ入れてくれるよね（笑）』

『二人で話してるんだから俺が拾わないと収集つかなくなるから仕方なくだ』

『ツンデレだ』

『おっさんのツンデレとか誰得すぎんか』

『八幡自分のことおっさんで思ってるの？』

『年齢的にはそうじゃないか？もうすぐ30だし』

『二十代はまだ大丈夫でしょ』

『確かに。さっきも俺が自分のことをおっさんって言ったら昔の担任から殺意を向けられたわ』

『…八幡。もしかしてその担任の先生って女の人？』

あ。やべ…。

『そ、そうだな』

『節操がなさすぎ』

『なぜ俺がその人を口説いているような感じになっているんだ…（――；）』

『違うの？てつきり恋愛対象なのかと思ってた』

『留美も俺に対する認識がドン底まで来ていることが良くわかった』

『それは全て八幡の日頃の行いのせいってことわかってる？』

『返す言葉もございません…汗』

『今日あった人もどうせ美人さんなんでしょ？』

『見た目は間違いなく美人だな。中身はともかく』

『何その含みのある言い方…』

『いや、まあそういうことよ。早く誰かあの人のことをもらってあげてと応援している』

『八幡ですらもう気がないと』

『なんで俺がルミルミの中で事故物件請負人みたいなポジションになってるの?』

『私の中では八幡はその手の業者じゃないかって、2%ぐらいは怪しんでる』

『マジカヨ…そんなふうに使われていたなんてショックだ』

『というかその言い方だと、自分含め、いろはや雪乃のことも事故物件と揶揄してるのでは?』

『首ったけだと思ってた?』

『自惚れと取られてもしょうがないとは思いますがそう思ったり、思わなかったり』

『ふふ。そっか。でもそれは当たっているから大丈夫だよ』

……………。

『ねえ、本当に電話できないの?一言だけでもだめ?』

『今、家だぞ?出来たとしても業務連絡の一言程度だ』

『それでも良いから』

『…わかった。ちよつと待ってる。こつちからかける』

俺はトイレに行くふりをして玄関の方まで進むと先程まで連絡をとっていた相手に音声通話をかけた。

「…もしもし」

『八幡…。すきだよ』

通話が切れた。

……………。

それっきり留美にどれだけLINEをしても返事が返ってくることはなかった。どうやらそのまま眠りについたらしい。

え?それだけのために電話したの?

そんな一言、今更な気もするが、改めて言われると本当に照れる。

あと、顔が赤くてしばらくリビングに戻れそうにない。

もし結衣になにか言われたら、腹を下したことにしよう。

ほてった顔を隠すようにトイレの中に逃げ込んだ。

続く

第七十八話

「いろはちゃんの後から合流するって言ってたよ」

「そうですか、それなら先に行きますかね」

珍しく食堂ではなくラウンジで昼休憩を取っている。理由はいろはに玉木さんと一緒に三人でご飯を食べないかという誘いがあったからだ。少し前に一緒に仕事終わりに飲んでからというもの週一でこの手のイベントが開催されるようになった。これまでは玉木さんとは朝の挨拶程度の関係ではあったが、実際話してみると意外にも共通の趣味が多いことが判明した。たまにボディタッチが妙に扇情的で良からぬ感情が芽生えそうになるのが玉に瑕だが。

「比企谷君、今日はお昼どうするの?」

「ああ…それ、なんですけどね…」

俺はお茶を濁すしかなかった。いや、濁した時点でこの人の洞察力を持つてすれば看破されること間違いなしなんですけどね。

「……ああ。そゆこと?」

「ええ。まあ」

「比企谷君も大分大胆になったよね」

玉木さんはクスクスと笑っている。俺を咎めるといふ様子は微塵も感じられず、傍観者として成り行きを見守る構えなのだろうか。そうと願いたい。

「どうしても断れなかったんですよ」

「そういうことになっておいてあげる」

「助かります」

「じゃあ来週は私が交代で」

「勘弁してくださいよ…」

「あ、お待たせしました〜!」

目の前の悪女に追い詰められそうになった刹那、救世主のように現れたのはあざとい後輩だった。今回ばかりはいろはが聖女に見えてしまう不思議。世の中想像もつかないことがよく起こるものだ。

「おう。助かった」

「え、わたしいつの間にも先輩のこと助けてたんですか？」

脈絡を全く理解していないいろはからしてみれば俺がまた世迷い言を言っているように聞こえたことだろう。玉木さんは俺たちのやり取りを見ながらニヤニヤと含みのある笑いをしている。

「もしかして、玉木さんにいじめられました？」

「よくわかったな。ドンピシャりだ」

「え、そんな覚えはないんだけどなあ……？」

そんなはずはない。玉木さん被害者の会の会長であるいろはと副会長の俺が言うんだから間違いない。ちなみに参謀は智佐吹さん。

「大方、来週は先輩に昼ごはん作る役目をわたしから奪おうとしたんじゃないですか？」

エスパーいろはさん。流石のテレパス能力である。

「凄いな、いろはちゃん。大当たりだよ。流石は私の一番弟子！私が教えることはもう何も無いね！」

玉木さんがパチパチと賛辞の拍手を送った。

いや、本当冗談に聞こえない。まじでエスパーなんじゃないかって90%ぐらい信じてる。あと拍手しているこの人は120%そう。

「先輩はもう少し断る力を身につけるべきです」

いろはがジト目で俺をにらみつける。彼女のにらみつけるはフアイヤーの比じゃないので、俺の防御力はまたたく間に0になった。

「それともまんざらじゃないか思ってます？」

「そ、そんなつもりはまったくないぞ……」

段々と目からハイライトが消えかかっているので慌てて訂正した。

「どうだか。留美ちゃんにまで唾つけてるみたいですし。玉木さんもあんなだけ美人でスタイルもいいから先輩すぐに籠絡されそうですけど。しかも趣味も似ているみたいですし」

いろはの言葉に非常に棘を感じる。針のむしろになることは慣れているつもりだったが、異性からのオーラというやつに対してはいままでたつても順応できる気がしない。

「本当仲いいね〜二人とも…夫婦みたい」

「ですよね〜♪ 玉木さんもそう思いますか〜?」

一瞬で機嫌が元に戻った。玉木さんからしたら扱いやすいだろうなあいろはす。

「ほら〜玉木さんからのお墨付きですよ?先輩はどう思います?」

厭味つたらしい顔でいろはが俺の耳元でささやく。くすぐったさを感じて少しだけ彼女から離れた。

「あまりまともに受けるなよ。ああいうお世辞はあの人の18番だぞ」

「う、それは確かに…。でも信じたくなくなっちゃうじゃないですか〜」

目の前に玉木さんがいるというのにいろはは甘える様子を止めようともしていない。

「……まあ他の人は周りには居ないし、私もある程度事情は察しているからお気になさらずどうぞ」

玉木さんはもう仙人みたいなこと言い始めてるし。いろはは多分話しては居ないのだろうが、この人には話さずとも一瞬でバレてそう
だ。

「あ、そうだ。先輩、早く食べましょ?今日早起きして頑張ったんですからね!」

いろはは弁当が入った小包を俺の目の前に置いた。空けてみるとのり弁当のようだ。

「シンプル・イズ・ベストってやつですね」

「英語なら最大級にはT H Eを付けないとだめだぞ」

「そういう細かいところ気にします?あと、今言うべき言葉それじゃないですよ?礼を言うのが恥ずかしいからって誤魔化すのはどうかと思いますよ?」

「わ、悪かった。ありがとうな、一色」

「やり直し」

「ありがとう。い、いろは」

「はい! ☆全部食べてくださいね先輩♡」

この後輩、あざとい。そしてとても面倒くさい。だがそれが良い。「その笑顔を業務中にもやってくれると満点なんだけどもなあ」

「そんなに笑わないんですか？」

「そういえばいろはが仕事をしている時の姿は見たことがない。同じ会社に居るとはいえ、部署も全く違うので当然といえればそうなのだが。」

「まあ、男の人はいろはちゃんの元々の可愛さで全員イチコロなだけど女の人、特に比企谷君の部署に用がある人に繋いでほしいってことになるともう手に負えないくらい敵意むき出しって感じだね」

「そ、そうですか…」

自分で聞いておきながら反応に困る回答をもらってしまった。いろははというとバレてしまったのがよほど恥ずかしいのかかなり顔が赤い。

「まあちーちゃんが居るから比企谷君が表に出てくることなんて滅多に無いんだけどね」

「そこでどうして智佐吹さんの名前が出てくるんですか？」

「だってちーちゃんって比企谷君のこと過保護ってくらいに自分のそばに置きたがるでしょ？そういうこと」

そういうこととはどういうことなのだろうか。あまり深く突っ込みすぎるとエラい事になりそうなので深掘りしないでおう。

「でもそれって職権乱用じゃないですか？羨ましい」

「後半の言葉がおかしいぞ」

「ね、本当に羨ましい」

「玉木さんもそこ被せなくて大丈夫です」

あと玉木さん、ちよくちよく俺の目を真っ直ぐ見つめてこないでください。コミュ障は相手の目を見られないんだから。

「先輩、今週の予定はどんな感じですか？」

「今週は忙しいぞ。週末は留美に会うことになってる」

「あゝ!？」

「ほ、他にも人はいるって…。留美の同級生だった人とか。男子も居るし普通に会って話すだけだよ」

「留美ちゃんに男の子の知り合いがいるという情報の方が先輩の誠実さよりも信憑性が低いですね…」

「俺の信頼度ってそんなに低いのか？」

「低さで言えば地面といい勝負するんじゃないですか？」

「それももう0じゃねーか……」

「休日デートまたしたかったのに……」

「平塚先生に会うって口実はしばらく使えないぞ」

「じゃあ休日出勤ってことにしましょう」

「ただ俺に会いたいんだよ。もしかして俺のこと好きなの？」

「はい」

「お前、本当凶太くなつたよな……」

「これくらいじゃないと先輩の愛人名乗れませんからね☆」

「たくましくて何よりだ」

俺は磯辺揚げを口に運びながら感心した。端末を見ると新着メッセージが一件入っていたのでそちらを確認する。

『今週末はカフェでまったり話す感じで大丈夫？』

留美からだった。今週末の予定の確認らしい。

一応、全員と繋がりがある留美が幹事的なポジションを担っていた。会って話すだけなので、別に凝ったお店でオシャレにランチするわけでもない。でもいいっちゃ良いんだが。いかんせんルミルミは律儀なのでしつかりと計画を立てたがる。

「そんなこと別に口頭でさつと聞けばいいのに」

いろはがボヤいていた。こいつしれつと俺の携帯の画面見たな……

「留美ちゃん、比企谷君にかまってもらいたいんだよ」

いろはすの愚痴の一言だけでメッセージの差出人と内容を読み取る玉木さん。もうやだこの人。

ん？もう一件メッセージが……って玉木さんからだった。いや、目の前に居るのになんでLINEで連絡が来るんだ。もしかして俺とは口もききたくないってことですか？ハチマンカナシイ。

内容をプレビューを見ると、メッセージではなく画像ファイルが一枚送られてきているだけのようだった。トークを開いて確認してみると、

「ふほおおお二！」

「な、なんですか!?!先輩」

添付された画像のあまりの刺激っぷりに思わず吹き出してしまった。何故ならそこに写っていたのは玉木さんのオフショットだったからだ。部屋着を着崩しているだけなのに、あまりにも蠱惑的なその被写体に興奮を隠しきれない。と、とりあえず保存してクラウドに上げておこう…。

「ま、なんでもない。クライアントからとんでもない要求が来たただだよ」

「それ電話じゃなくてチャットで来るんですか?」

いろはに明らかに怪しまれているが、ひとまずそれは置いておいて返事を返した。

『ちよ、何もこのタイミングじゃなくても良いでしょう!?!というかあれなんなんですか!?! (。D。)』

『気に入ってくれた?』

『それはもちろん』

『いろはちゃんばつかりに構ってたから妬げちゃった♡』

「……!」

足にゾワゾワとした感覚が。おそらく玉木さんが足先で俺の脛をなで上げているのだろう。

目の前の彼女の目を見るとこれ以上ないくらいの嗜虐心に満ちた蠱惑的な目をしている。

『コスプレしてる写真とかもあるけどほしい?』

『た、例えば…?』

『ナース服とか (笑)』

思わず妄想してしまった。玉木さんのナース服とか絶対萌える。間違いなく何千人かの男が昇天する。

「……先輩、何さつきから気持ち悪い顔してるんですか?」

「なんでもない。妄想をしていただけだ」

「それは大問題ですね……」

いろはに軽く流されてしまった。最近俺の扱いにも慣れてきたのか俺の小粋なジョークは皆全て等しく右から左に受け流される。

「…にしてもこの弁当うまいな」

「でしょー!というか、そういうこと言ってくれるのずっと待ってたんですからね!」

いろはがデユクシしながら照れている。今どきの小学生はデユクシをするのだろうか。そんなどうでも良いことをぼんやりと考えながら、いろはの弁当を胃袋にかきこんでいく。雪乃や結衣の味付けとはテイストが違うものの、家庭的でいくらでも食べていたいと思える。雪乃の料理はとんでもなく美味しいのだが、料亭の味の如くなんとなく気が引けてしまう。

「そういえばバレンタインイベントやった時のチョコレートも悪くなかった」

「まああれは別にチョコレート自体は市販のものなんでそこ褒められてもそこまで嬉しくはないんですけどね…。でもわたしとの思い出を覚えてくれていたことに関してはいろは的にポイント高いですね!」

「小町じゃないから八幡的にポイント低い」

「うわ、ホントこいつシスコンだな」

「ちよつと…?マジで引くのやめてねいろはす?」

「やっぱり先輩は年下好きなんですネ?」

「いやおかしい。シスコンは年下好きという方程式はおかしい」

「じゃあ年上が好みなの?」

「玉木さんは定期的に爆弾を投下しないでください!」

この人絶対雪ノ下さんと気が合うだろ。なんか昔好きじゃないとか言っていたような気がするけど。

「年下も年上も好みじゃないと同じ年しか選択肢が残されていないわけですが?」

「ゼロイチじゃないだろうというの。あらゆることに白黒つけたがるの日本人の悪いところだぞ」

「いや、あんたも日本人でしょ…!」

いろはが冷静にツツコミを入れる。ノリが悪いなと思いつつもこういう、切り替えの早さもまた彼女の魅力の一つとも言えよう。

「……玉木さんと仲良くなったんですね」

いろはがあからさまに不機嫌な表情をしながらこちらを見る。

「仲良くなっただが浮ついた話は微塵もないから安心しろ」

俺は携帯でメッセージを打ちながらいろはの方を見ずにそう返した。

「え、ほんとにぎぎるか？」

「良い同志にはなれるかもな」

俺は『送信』ボタンを押した。それとなくいろはに携帯を確認するように目線で促す。

「なんですかそれ……ん？」

いろはは怪訝な顔をしたが、自分の端末にメッセージが来たことに気づくと携帯を手にとって内容を確認していた。いろはは無表情のまま一瞬で返事を返した。

「まあ、先輩がそう言うなら信用してあげます」

「そりやどうも」

今度は俺の携帯の受信音が鳴った。内容を確認して、いろはの手をバレないようにそっと握る。いろははちらと周りを見渡してから一瞬唇を重ねてきた。

俺たちはそのまま何も言わずただ黙って自分たちの持ち場へと帰るのだった。

『今夜、家に寄ってもいいか？』 既読

『お待ちしております♡』

続く

第七十九話☆

ドアの前でインターホンを押すと、直ぐに扉が開いているはに迎え入れられた。

「お仕事お疲れ様です先輩♪」

エプロン姿のいろはは新妻感があつて非常に愛らしい。あざといのになんかエロい。ポニーテールにしているのがまた憎たらしい。

「おう。お疲れさん」

「あ、それと……」

いろはは駆け寄るように俺のもとに近寄ってくると唇を啄んだ。

「ん…おかえりなさい先輩」

「ここは俺の家じゃないんだけどな」

「なんでそう現実的なこというのかなあこのクズは」

キスした相手にえらい言いようだがそれも一色いろはの魅力と捉えれば可愛く見える。

「はあ…なんでこんな人に惚れたんだろわたし……」

「そんなに残念か俺って？」

「自覚ないんですか？」

「自分では優良物件だと思ってるんだが？ 専業主夫もできる仕事もできる」

「まあ、先輩はまあ言う慣れば、駅近五分の敷金礼金無料で窓の外が一面墓地みたいな物件って感じですね」

「類は友を呼ぶって言いたいのかお前は」

「それ言ったらわたしも自分で巻き添えくらいに行ってるじゃないですか…」

「お前は死んだ魚の目をしてないからまだ大丈夫だ」

「中身は腐ってますけど大丈夫ですかね？」

「自覚はあるのか…」

「完全な事故物件を誇りに思ってるくらいには。いわくつきは避けられないですね」

「いい性格してるなあ」

「先輩も良い性格してると思いますよ。お似合いですねわたし達♡」

エプロン姿のまま俺の腰に巻き付いてくる。かばんを玄関に置いて俺も彼女をそっと抱きしめ返した。

「えへへ…先輩がわたしに甘えてくれてる…」

「そんなに変か？」

「恥ずかしいところ見られると悶絶してそうなタイプだし、あんまり人に見せたくないんじゃないかなって思ってたけど」

「それは大正解だ」

「それでも見せてくれるっていうのは…つまりそういうことですか？」

「いろはが何を想像しているのかがよくわからないからなんとも言えないところだが、まあそういうことだ」

「…そうやって適当に返事して後で痛い目見ることになっても知りませんよ？」

「忠告痛み入る。すでに手遅れかもしれないが」

そう言いながらもいろはの尻を愛おしそうになでている自分の矛盾っぷりに呆れる。いや、呆れるを通り越してそれでいいとすら思っ
てしまっている。

「ん…せんぱいってお尻も好きなんですか？」

「好きか嫌いかと問われたら好きだと答えるかもな」

「なんですかその煮え切らない言い方…。というか『どちらかといえ
ば』みたいな言い方した割には結構丹念にわたしのお尻を揉んでる
じゃないですか…。この変態スケベ捻くれ陰キャ」

「え、なんで急にオーバーキルされた？」

「このくらいジャブじゃないですか？先輩なら軽く受け流せるでしょ
？」

「受け流せるのは俺と戸部ぐらいだと思っぞ。お前のデイスりは芯に
来る。メキシコのボクサーが打ってくるやつ」

この歯に衣着せぬ物言い何人の勘違い野郎を葬ってきたのかと思
うと思わずお手々のシワとシワを合わせて幸せ南く無くとしたく

なってしまう。R. I. P同志達。

「後半は何言ってるのかさっぱりでした」

「そうだと思ってたから良い」

「相手に理解されないの承知で自分だけが理解しているみたいな中二病くさいところはいい加減直したほうが良いと思いますよ…」

「お前マジで容赦ないな今日」

「玉木さんにデレデレしてるせんぱいを見てたら無性に腹が立ちました」

「あ、いや。それについては申し訳ないと言いますか。生理現象でいたしかたないと言いますか…」

「謝罪しておきながら反省する気ゼロじゃないですか…れる…」

いろははおもむろに俺の耳を舐め始めた。家に入った瞬間にさかるとか変態スケベの称号はお互い様ではないのか。

耳を丹念に舐め回しながら彼女は丁寧に俺のスーツのボタンを外していく。流されるがままになっていると今度はズボンのベルトを手探りでガチャガチャといじり始めた。自分がやろうとするとそれを制止して脱がそうとしてくる。あれよあれよという間に下は下着一枚。上はワイシャツの状態にされた俺はいろはに導かれるようにリビングへと手を引かれた。

「さ、寒いんだけど…」

「一発出してからまた着てください…」

どうやら思った以上にいろはは嫉妬しているらしい。唾を付けないと気が済まないと言表情が物語っていた。

「…いきなりするのか？今、飯作ってるんだろ？」

リビングに入ると夕食のいい匂いがした。焼き魚を焼いているのだろうか。香ばしい香りがする。

「もうあとは盛り付けるくらいなので大丈夫です。でも、換気扇回してるんですけどちょっと臭いますよね…」

「いや、焦げた臭いじゃないんだから全然問題ないだろ」

「そうですか。良かったです…」

いろはの髪を撫でながらソファに座る。いろははエプロンを付け

たまま、俺の股の間に腰を下ろした。

「基本フェラから入るのな」

「嫌いですか？あむ……じゅ……ちゅ……ちゆる……んちゅ……」

返事をしないうちにいろいろはに啞えられた。温かく柔らかい舌の感触が肉棒に伝わる。彼女の優しい舐め方はいつも安心感を与えてくれる。それでいて、髪を結んでいるエプロン姿の女性に奉仕されるのは悪くない。むしろたまらない。

「ん……ちゅば……。ジロジロ見てないで気持ち良くなって下さいよ」

よだれがベツタリとついた砲身をいやらしい音をたてて手で扱きながらいろいろはが睨みつけてくる。俺が感じている様子を拝みたいらしい。

「いや、ちゃんと気持ち良くなってるぞ？顔に出してないだけで」

「それなんか癪です……。先輩が我慢できなくなって声が出ちゃうのが好きなのに……はむ……」

いろいろの顔が上下する速度がさつきよりも速くなった。同時に我慢しなければ一気に持っていかれそうなほどの強い快感が押し寄せてくる。

「正直ずつとこうして穏やかな快感を享受しながらってのも悪くないとか考えてたんだけどな……ん……ぐう……」

「ん……じゅる……じゅぼ……じゅぼぼ……んちゅ……ん……じゅるる！」

いろいろは啞えながらも器用に空いた手を使って玉袋を優しく揉みほぐした。強烈な快感の中に淡くじんわりと広がる快樂がない混ぜになって下半身を熱くさせた。

「くあ……本当にそれ良いな……」

「じゅぼ……じゅる……。んふふ。せんばいって本当にここモミモミされるの好きですよ。それともカリカリされる方が良いですか？」

挑発的な口調で爪を立てつつ陰囊を刺激してくる。射精には繋がらないが悶絶してしまうほどの快感を覚えさせられた。またたく間に射精感が上り詰めてくる。

「エプロンに精子かけますか？」

「いや、顔がいい」

「か、顔ですか…この後セックスするからまだ化粧崩したくないんだけどなあ…」

「すっぴんでも十二分に可愛いし良くないか？それに俺は少しくらい崩れていても気にしないぞ」

「先輩がそうであつてもわたしのプライドの問題なんですよ…。やっぱり先輩には最大限綺麗なわたしを抱いてほしいです…」

珍しくいろはが食い下がる。ここは大人しく彼女に従ったほうが懸命だろう。

「ならエプロンにかけても良いか？」

「っ！はい♡良いですよ♡」

俺はそのまま立ち上がると中腰に構える彼女の身体目掛けて性を放った。複数回に分けて発射された精液が無事に彼女の胴体を覆う布に付着した。律動する肉棒をと快感に浸る俺の顔を交互に見つめながらいろはは恍惚とした笑みを見せた。

「うわあ…ベタベタ♡」

「床にちよつと飛んでるな。ティッシュで拭くわ」

「少しだけでもつたいない気もしますが、賃貸ですしそうします」

「賃貸でなくてもそうしてくれ、」

購入してたらそのままにするつもりなのだろうか。そんなどうでも良い疑問を抱えながらダイニングの机の上にあるティッシュの箱を手にとった。いろははいつの間にか俺の下半身を再び啜えこんでいる。

「ん。ちゅぱ…。あ、わたしも拭きますね」

俺の精液がべつとりとついたエプロンを着ているいろは。なんとも言えない複雑な気持ちになりながらもティッシュを2, 3枚取って彼女に渡した。

「二人で拭く必要あつたかこれ？」

「初めての共同作業つてやつです☆」

「初めての共同作業が床に飛んだ精子を拭き取るつてもどうなんだ…結婚式でそんなアナウンス流れ良うものなら炎上待ったなしだぞ」
「え？それつてわたしとの結婚を考えてくれてるつてことですか

？」

「遅しいなお前…」

「えくそういう風に受け取ることだって出来るじゃないですか。先輩ってそういう誤解させやすい言葉を使う系のラノベ主人公？」

「どういうツツコミだそれ。というかいろはってラノベ読むのか？」

「いえ全然。でも先輩の話とか聞くとそんな感じなのかなって」

「俺そんなにラノベの話とかお前にしてた？」

「先輩ってわたしが聞いてないと思って自分語りすることあるじゃないですか？ああいう時意外とわたしって返事は生返事ですけど、ちゃんと内容覚えてるんですよ？」

「マジカヨ。特殊能力じゃん。すげーよお前」

「いや、普段どんだけ無視されてるんですか先輩…」

結衣や雪乃はこういう時本当最初から聞く耳持たなかったからなあ。諦めた上で話すこと多かったけどいろははすって絶対反応してくれるから本当可愛い。

これだけ呆れられるようなことを言ったとしても一色いろはという女性は俺に愛想を尽かささない。悪態をつきながらも最後には仕方がないと受け入れてくれるのだった。その優しさが、俺にだけ向けられる優しさが最大の魅力である。あらゆる人間の目を奪う美貌などそのおまけに過ぎないのかもしれない。

「どうしますか？軽く風呂入りますか？」

「そうだな。脱いだ服も玄関に置きっぱなしだし」

「あれどうします？」

「こつちに置いてもいいか？」

「わたしは別に問題ないですよ。それに魚の臭いとか付けたほうが居酒屋に寄ったことにしやすそうな気がします。女の子の匂いってすぐにバレちゃいますし」

「そこまで考えてるのねいろはす」

「先輩がノープランすぎるんですよ、ん…ちゆる…ん…」

「お、おいちよ…ま…また啞えるな…あう…」

そのままその場に崩れ落ちた俺は二発目を吐き出すまでいろはに

拘束されたのだった。ちなみに3分後には彼女の口内に一滴も漏れることなく解き放たれることになる。

続く

第八十話☆

S i d e I r o h a

先輩はわたしの作った料理を美味しそうに食べている。一口食べるごとに感想を述べてくれる。わたしを最大限喜ばせるように一生懸命違う言葉を使つて。今までに読んできた書籍のボキャブラリーを総動員してわたしを口説いている。それがたまらなく嬉しい。嬉しくてもつと料理を作りたくなる。毎日食べて欲しくなる。

わたしの作る料理がこの後に行くセックスのエネルギーとして使われるかと思うと、ちよつと興奮してしまう。わたしの料理が先輩の一部を構成して、先輩の一部がわたしの中に入ってくる。そんな循環が完成する。それつて先輩と今までよりももつと一つになれるつてこと？欲しい。もつと精液を飲んであげたい。でも膈内にも欲しい。顔にも身体にもいっぱいかけてほしい。

口元にご飯粒がついている。舐め取つて綺麗にしてあげた。ついでに先輩の舌も味わつた。

お水を口移しで飲ませてあげた。先輩はゴクゴクとそれを飲んでくれた。ちゃんと移せなくて少しだけ口元からお水が垂れてしまつている。そうなると結局またキスしちやつて今度は涎がべつとりとついた。

「――結衣先輩といつつもこんなことしてるんですか？」

そうきくと先輩は「たまに俺の隣りに座つて啞え始めるときもある」と答えた。なにそれ。わたしもそれやりたい。そう思ったときにはすでにわたしは先輩の隣を占領してその股ぐらに顔を沈めていた。先輩も期待していたのか、股間が熱くなつていて取り出すのにちよつとだけ苦勞した。もう今日だけで4回目だ。お風呂に入る前に2回、お風呂の中で1回。何度啞えても止められない。10年近く我慢していた反動が抑えられない。

なんか真面目に優等生やつてる人ほど足元崩れた時に大変なことになるとはよく言つたものだけど、自分がそんな感じなのかもしれない。一応、規則と言うか表面上はまともに生きてきたつもりだから。

行儀の良い先輩から少しだけ聞こえる食器の音をかき消すくらいに大きなわたしの粘着質で淫猥な音。箸を持っていた右手は既にわたしの頭に添えられてもつと早く動けと急かしてる。意地悪しなくなつてわざとゆっくりめにねぶりあげる。根本までわたしの口の粘膜で包み込んだまま、丹念に亀頭を舐め回す。頭は動かさずに舌の感触だけを伝えた。諦めた先輩が再び箸を手にとつて食事を再開したらまた頭を動かした。そうすると先輩はまた手をわたしの頭に持つてくる。そしたらまたわたしは動くのを止める。その繰り返し。

プライドの高い先輩は『イかせてほしい』なんて言葉を口にはしない。ただ一言そういえばいいだけなのに。そうすればたつぷりの精液を全部飲んであげるのに。先輩は頑固で捻くれ者だからそれが言えない。それが可愛くて本当に好き。

結局先輩は食べ終わるまで我慢していた。逆にわたしが観念して動かしてくれるのを待つていたのかもしれない。正直、わたしは何時間でもずつとこうしていても全く問題ないんだけど。根比べで負ける気がしない。

食べ終わったから自分が皿洗いをすると先輩が言った。わたしはそれを無視して食器を流しに運んだ。後ろから飼い犬のようについてくる先輩。着崩れたズボンの履き方をしているのがまた面白い。さつきまで好き勝手にフェラされていたから歩き方もぎこちない。普段どおりに歩いたら先っぽが下着の布と擦れて感じてしまうのだろう。そんな先輩を横目に手際よく汚れた食器を順番に洗い流していった。

先輩が感心するような目でわたしの仕事っぷりを観察している。もしかして未だにわたしが家庭的な女性であることに懐疑的なのだろうか。だとしたら物凄い業腹なんですけど。

「隣に突つ立つていられるのも邪魔なだけなんで、ソファで座つて待つて下さいすぐ行くので、今のうちに歯磨きでもしておいて下さい。先輩用の歯ブラシ洗面台に置いてありますから」

「お、おう。用意が良いなあ」

先輩は一瞬落ち込んだような表情を見せたが大人しく従つてくれ

た。トボトボと洗面所の方へ移動していく様はおあずけを食らった子供のようで愛らしい。わたしのような人間の中にも母性というものがあるとは…。多分だけど先輩とエッチして子供ができたとしたら自分の子供にすら嫉妬して先輩のことを独占しようとする。わたしってばそれくらい先輩に対する執着が異常になってきている。まあ漫画みたいに周りの女を誰これ構わず殺そうとかそういう感情は無い。というかアレは理解出来ない。

皿洗いを終えてリビングに戻ると先輩は既にソファに座っていた。姿勢良くこちらを見ている。

「…て、何今更緊張してるんですか？」

「い、いや。別に…」

「童貞ですか？」

「どどど童貞ちゃうわ！」

「そのネタが出来るくらいには冷静なんですね」

本当この人っていざエッチって時になると雰囲気壊してくれるなあ。流石フラグクラツシャーの異名を持つだけのことはあると言わべきか。

まあ緊張しているならわたしが誘惑してその気にさせればいいだけのことなんですけどね。

わたしは先輩を無視してリビングの明かりを落とすとそのまま寝室に誘導した。寝室の照明を暗くして間接照明の電源を点ける。わたしの部屋で交わるのは初めてなのにこんなにも手際が良いのはいつもこうやって妄想しているからとか、もしその時が来たらと思っただけでシミュレーションしていたからとか諸々の理由があるけれどそんなことは今はどうでも良い。

「い、いろ…ん…ぐ…んむ…」

先輩に思考させる時間を与えぬまま唇を重ねる。そのまま肩を軽く押すと先輩はベッドの上に仰向けになって転がった。

「先輩。ちょっと相談したいことがあるんですけどいいですか？」

「な、なんだよ…」

期待と不安が入り混じった表情で先輩はわたしをじっと見る。

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。ただ、先輩がどの下着が好きなのかアンケートを取りたいんです」

そういうとわたしは下着をしまっているかごを置いてその中身をベッドの上に並べた。

大好きな人に見てもらえるようにわざと目の前に移動して衣服を少しずつはだけさせていく。こんな痴女みたいな誘惑、あざとすぎてどうかなと心配したけれど翌々考えたらわたしってあざといクソ女のレツテル貼られてたから寧ろ看板に偽りなしといったところか。

というか意外にも先輩には効果は抜群みたいで、下半身に立派なテントが出来上がりつつある。なんとかという先輩に性的な目で見られていると思うとわたしもすごく濡れてきちゃう。

「色とか希望ありますか?というかブラかキャミかとかの好みも知りたいです」

初めて会ったときから一回りも二回りも大きくなった胸を見せつけながら四つん這いになって先輩に這い寄る。胸の谷間から乳首を覗かせるような角度で先輩の目の前に胸を持っていくのがコツ。これはずっと前から練習してた。案の定先輩は釘付けになっている。

「と、とりあえず色々試してくれるとありがたい。じ、実際に着てみるのとは印象も違うと思うし」

「ふふ。結構乗り気じゃないですか先輩♡」

「そりゃあ…。お前の下着姿拝めるなら誰だってそう言うだろう」
「…っそ。そうですか」

なんで急に口説くんですか、もしかしなくても口説いてますよね? ありがとうございます。是非とも今夜だけとは言わずに毎日毎晩わたしの家に来てご飯を食べてエッチなこととしてイチヤイチャして、お出かけデートとかしちゃいませう、というかも隣に一緒に座っているだけでも幸せなのでそうしましょう。

「というか今わたしが着ている下着はどうですか?」

わたしが着ているのは水色のレースの付いたブラだった。まあ先輩が家に来るということで帰宅してから急いで着替えたものなんだけど。一応わたしのお気に入りで勝負下着でもある。

「…悪くないな」

「そこは恥ずかしがらずに『良いと思う』って言ってくれたほうが嬉しいのに…」

「めっちゃ好みだ」

「訂正した後のワードの破壊力が最初の時とまるつきり違うんですけど!？」

「やばい。めっちゃ顔赤くなってる。というか良かった。先輩、これ気に入ってくれてるみたい。感性は近いらしい。ちよつと価値観が違う程度で嫌いになるなんてことはまずないんだけど、それでもやっぱりこうして相性が良いってことを確認できると飛び上がりたい気持ちになる。」

「じゃあ先輩的にはどれを着てみてほしいってありますか？」

「正直全部見てみたいけど、強いて言うならこれとかは想像つかないから見てみたい」

「カップ付きのキャミですか？し、しかもこれ…」

「こ、これ普段着用のやつで先輩に見せるために用意したやつじゃない!うっかり紛れ込んでしまったやつ。」

「こ、こんな質素な感じなので良いんですか？」

「な、なんとというかランジェリーとかは奇をてらいすぎてないか?いや、勿論好きなんだけどね」

「下着の好みまで捻くれてるのかこの人は。しかも『奇をてらいすぎてる』て。ランジェリーの存在意義を全否定している発言じゃないですかそれ…。」

「先輩が見てみたいなら着ますけど、結構これほんとう普通のやつじゃないですか。無●良品と肩を並べられるくらいのシンプルさですけど良いんですか？」

「馬鹿野郎。お前●印舐めんなよ?あれは最高だ。シンプル・イズ・ザ・ベストを体現した最高の企業だ。リング Store みたいなもんだ」

「先輩の地雷を踏んでしまったのかやたら饒舌になっている。いや、わたしも無●好きなんですよ。家に置いてあるものとかほとんどそ

この製品だし。というかりんゴStoryて…。

「はあ。わかりました。じゃあちよつと後ろ向いてて下さい」

「着替えているところを見るのはだめなのか？」

「それじゃちよつと感動が薄れる気がしませんか？出来上がった姿を見せるから『おお！』ってなるわけで」

「確かに。でも着替えているところも見たいってのはある」

「胸寄せたりしているところとか見たいんですか？結構鬼畜なこと言いますね先輩って」

「寄せなくても十分大きいだろ。もうどうしようもないやつとかいるんだぞ？」

「先輩。雪乃さんに殺されないように夜道気をつけてくださいね？」

「いや、雪乃を名指ししているお前も同罪だろ…」

ちやんと最後までツツコミを入れてくれる先輩。本当優しい。それにちやんと後ろを向いて自分の手で目隠しまでして。そんなに期待されると逆に気まずい。自分の容姿には自信があるとはいえハードルを上げすぎた気がする。

「今はもう雪乃さんのことはいいでしょ？わたしの裸だけ考えて下さい」

「その言い方なんかめっちゃエロいな」

「興奮するようにならぬとエッチな言葉を選んでるつもりなので♪」

先輩が悶々としている様子を見るだけで一時間は保つなあ。まあ一晩中一緒にいられるわけじゃないからそんな時間の使い方はしない。とはいえいつもとは違う路線でせめてみるのも悪くないのかもしれない。

「じゃあわたしが『良いですよ』って言うまで後ろを振り向かないでくださいね」

「え？ここにきて生殺しにされるの？」

「たまには趣向を変えないとって思いませんか？」

「下着の鑑賞会はどうなるんだよ？」

「それも勿論やりますよ。後で」

「後でってそんなに時間あるわけじゃないんだけどなあ…」

「良いじゃないですか〜！ね？」

そういつてわたしは先輩の背中に抱きつく。出来る限り身体が密着するようにしっかりと身体を押し付けた。

「あ、おつきくなりましたね」

「そりゃあ抱きつかれてるんだから当然だろ…」

「先輩。そのまま自分で扱ってみてくれませんか？」

「じ、自分ですかよ」

「ふふ。いつでもわたしが抜いてあげると思っていたら大間違いですよ。」

「いよいよ本当に趣旨が変わってきてないか？」

「そんなことはないですよ？多分」

「おい、絶対今の思いつきで言っただろ」

「まさかまさかそんな〜☆」

凶星なんだけどね。でもオナニーを見せ合うっていうのをやってみたかったのは本当。だから嘘はいつてないんですよ。ちよつと言い方が違うだけです。

「俺が自家発電しているところを見ていろはは興奮するのか？」

「まあ、そうです、ね。多分、結構、濡れちゃうと思います」

「な、なら、わかった…」

仕方なく先輩はベッドの上で足を開いて柔軟を取るような体勢になる。パンツを脱ぎ捨てると怒張した先輩のそれがあらわになった。「改めて見るとこんなにおっきいのがわたしの中に入ったんですよ？」

「全部ぱっくり飲み込まれたな」

そういつて先輩はしこしこ自分の手を動かし始めた。同時にベッドが軋む音が聞こえた。規則正しく動く右手の中でごくたまにおちんちんが脈動しているのが見える。精管が刺激されて感じているのがわかった。お互いに無言のまま肅々と事が行われている。あの先輩が快感を貪るだけの行為に耽っている。そう思うと見ているだけというのもむず痒くなる。

「ビクンってなると先っぽがちよつと膨らむんですね」

自分がうずいってしまったているのを誤魔化すように先輩に話しかける。先輩の下半身を見ようとして膝立ちになつて後ろから覗き込む。密着していた乳首が擦れて気持ち良い。

「そうですね…これを何回か繰り返していると絶頂します」
「自動車教習所のビデオみたいなの無機質な口調で言わないでくださいよ…」

間接照明の光に晒されて先輩の先っぽが光った。もうおつゆが垂れてきちゃったんだ。

「我慢汁。もう出ちゃったんですか？」

「そりゃあ気持ち良くなったら出てくるもんだ…」

「女の人が濡れるのと同じような感じで男の人もそうなるんですね…。なんというか神秘的です」

「そんな感想を持たれるとは思わなんだ…」

なんかもう本当勝手に垂れてくるんだなあ。くちゆくちゆ音がなるようになってきたし、我慢汁出し過ぎじゃないですか先輩？そんなの見せられたらわたしも我慢できなくなっちゃいますよ？

「そろそろ出そうだ…」

「じゃあこっち見てもいいですよ。でも本期待しすぎないで下さい。なんでこんな地味な下着着てほしいって言ったのか先輩を恨んでるくらいですから」

「そ、そんな風に思われてたのか…」

先輩が恐る恐るこちらを振り返る。わたしも何故か異常に恥ずかしくなってしまう。ページユ色のキャミソール姿。こんな地味なので先輩は興奮してくれるのだろうか？

「あ、やばい、出る……」

そんな心配が杞憂だったと証明するかのよう先輩はわたしの下着姿を見た瞬間に盛大に射精した。今日で4回目だと言うのに濃厚な白濁がキャミソールを汚す。独特の雄の匂いが充満してわたしを高ぶらせた。

「そ、そんなに良かったですか？これ」

「はあ…はあ…。めっちゃくちや好みだった」

どうやら先輩のお眼鏡にかなったらしい。人に見せるられるような代物ではないと思っていたから、一安心だ。

「いろは。他のも見せてもらっても良いか？」

「良いですよ。とことん見て興奮して下さい。先輩が変態なのはよく知ってますから☆」

「それはお互い様だろ…」

わたしは意気揚々と次に見せる下着選びを始めた。

続く

第八十一話☆

Side Hachiman

「ああ！あん！…はあう…はあはあ…はあ…ん…あつ…せ、せん、ば、い…」

いろはが激しく呼吸を乱しながら俺の上で動いている。紫色のラズジェリーを着た彼女はこの上なく扇情的で彼女の中に入っていないくても見ているだけで絶頂してしまいそんな悪魔の魅力を放っていた。色々な候補の中から厳選された一着だ。

「やつぱり…先輩のおちんちん。すごく、良いです…。もう何回もイカされちやつてるのに、何度でも欲しくなります…」

いろははもう何十分も腰を振り続けていた。前後に激しく運動したり、上下に激しく動いたり、はたまた円を描くようにぐりぐりと回したり。様々な試行錯誤を繰り返して最も自分が気持ちよくなれる動き方を模索しているようだった。全身から玉のような大粒の汗を流しながらそれでも彼女は快楽を貪ることをやめない。新たな生命を育むための行為とはかけ離れた。色欲の深淵をしゃぶりつくすように俺たちは耽溺した。

いろはは俺の身体に執着するかのように焦点の合わなくなった目で執拗に俺の目をじっと見つめる。

「先輩…先輩…ああ…ん…」

汗でべつとりとなった彼女の髪は艶身を帯びてこれまでよりも一段と妖艶に淫靡に輝いている。頬に張り付いた前髪の一本一本がフェロモンを分泌しているかのようだった。彼女が動くたびにハリのある大きな胸が動く様は何時間と見ていられるほどの絶景だった。暖色の怪しい光に照らされた彼女はさながら淫魔のようで自分の中に在る精力を根こそぎ搾り取ってくるような激しさだ。

愛を確かめ合うなどという生易しいものでは断じて無い。これはお互いの性を喰らい合う一種の生存競争のようなものだと思う。いろはが激しく腰を動かせば俺も負けじと胸を掴み快樂の波へと引き

ずり込む。快樂を通して交わされる食うか食われるかの命のやり取り。一色いろはとだからこそ出来る。否、一色いろはとしか出来ないセックスだった。お互いを氣遣うつもりも必要もない。己の欲望を全力でぶつけ合うだけの行為。それが楽しくて仕方がない。

「いろは……」

「きや……」

攻守交代と言わんばかりに俺はおもむろに起き上がると対面座位の状態からそのままいろはを仰向けに押し倒す。なすすべもなく身体を投げ出した彼女の空いた口に強引に自信の怒張した肉棒をねじ込んだ。

「おぐぐ……ぐ……ん……じゅ……ぐぐ……お……え……ん……じゅんぐ……」

いろはの頭を掴んで奥まで押し込む。いろはは何度もえさずきそうになりながらも必死にそれをしやぶった。まなじりに涙を浮かべながら口から涎を垂らす。それを見て流石に引き抜こうとしたが逆にいろはが俺の腰を引き寄せた。

「良いのか？」

返事ができない彼女は俺の腰を抱きしめることで肯定の意を示した。

「っいろは……」

仰向けになつたいろはの口内にくさびを打ち込むかのように自身の硬直を上下させる。そのたびに彼女の粘膜がねつとりと絡みつき、肉棒がまるごと優しく愛撫された。

「おぐ……う……ぐ……ん……ん……！……ぐ……あぐ……ぎ……ん……ん……」

何という背徳感だろうか。年下の絶世の美女の口の中を自分勝手に犯し尽くすことがこんなにも嗜虐心と優越感をもたらしてくれるとは。普段あれだけ小悪魔なキャラクターを見せているいろはが男に蹂躪されるのを見るのは重畳の極みだ。

理性をなくし、墮落の限りを尽くした行為。それを一色いろはという女性は大海よりも広い心で受け入れてくれる。こんなことは結衣や雪乃相手では絶対に出来ない。

別に彼女たちの方が大切でいろはのことをどうでもよく思ってい

るからということではない。寧ろいろはに対する特別な信頼があるからこそ出来る行為。

肉棒の上下に合わせていろはは必死に舌を絡みつかせていた。彼女なりに最大限俺を喜ばせようと奉仕している。

口元から涎なのか俺の精液なのかわからない透明な体液が溢れており、息も絶え絶えになっていた。

「…いろはっ…このまま喉の奥に出すぞ」

「ソグーえぐう…おえ…ぐ…んんむ！あが……ん、じゆる…ぎゅ…ぎゅぼ…ん！」

彼女の許可を待たずして腰の動きを早めていく。いろはの口から人間が出せるとは思えないような酷い陵辱の音色が漏れ出る。自身が欲望にまみれた獣になっていくのを自覚しながら俺は言語にならないうめき声を上げていろはの喉奥に精液を発射した。

「おぐ…いんっ…えぐ…ん…あう…ぐむ…ん…じゅ…おえ…」

10回近く繰り返される痙攣の最中俺はいろはの頭を鷲掴みにしていた。吐精が終わるまでずっと根本まで啜えさせ、終わってからもしばらく彼女の口内から抜き出さなかった。

「ごほっ…っう…かは…けほ…」

いろはの目から涙がこぼれ、口元から体液が流れ出ている。大量の汗を流して化粧も無いに等しいほど乱れきった彼女はそのような有様になっても尚、気品を失ってはいなかった。

「はあ…はあ…。えへへ…先輩がわたしで気持ち良くなってくれた…」

お互いの体液でドロドロになった身体をくねらせて自慰に耽る。俺を誘っているのだろうか。

「ねえ、今夜は一緒に居ましようよ？一晩中エッチなこととして気持ちよくなりましよう？」

いろはは俺を逃すまいと大人しくなった俺の下半身のそれを啜えた。

「はむ…ちゆる…ん…むう…。もっと先輩と一緒に沢山汗かきたいです…」

「汗かきたいならリングフィットでもしたらどうだ？」

「話ちやんと聞いてました？…はむ…じゅ…ん…。ちゆ。わたしは先輩と一緒に汗をかきたいって言ったんですよ」

「もう十分かいただろ？もうシーツまでグシヨグシヨになってるし」

「それはそうなんですけど…まだまだ先輩に精子かけられ足りないですよ」

「いろはってエロ漫画みたいな精液ドロドロになるのやりたいのか？」

「先輩なら出来そうじゃありませんか？」

「俺は男優じゃないんだぞ？」

「先輩ならいけそうなの」

「お前、俺が汁男優でデビューするの想像できるか？」

「先輩がわたし以外の女性で気持ち良くなるのを見るのは嫌ですね…」

「そういう感想を抱くのか…俺が出るようとかはないのね」

「え？先輩出たいんですか？たまにファン感謝祭みたいなありますし応募してみたらどうですか？」

「応募して受かったときのことを考えると応募できないな」

「ほう。ならバレなきやAV女優とやってみたいと」

「曲解しないで頂けると大変ありがたいのですが…」

「ふふ。冗談ですよ」

「冗談に聞こえないから怖いんだよなあ」

「それにそこらへんのAV女優を抱くよりも結衣先輩やわたしの方が見た目もスタイルも勝つてると思いませんか？」

「それは間違いない」

「そう言っただけ俺は再び硬くなった一物をいろはの秘所にあてがう。

「せっかく綺麗な下着だったのに汗でべっとりだな」

「先輩に興奮してもらうための衣装なので、このランジェリーも本望ですよ…あん」

「ふう…はあ…はあ…」

「い、入れた瞬間から喋らなくなっただけ腰振るだけの動物になるの面白

いですね…。もつと体重をわたしに預けて良いですよ？あと射精する前のあのケダモノの声も聞いていたいです。先輩のことなんて恥ずかしいとか思っちゃうかもしれないけど、あれを聞いているとわたしも凄く興奮して、はあ…。あん。き、気持ちよくなってくるんで…」

いろはの華奢な身体に全体重を預ける。彼女の柔らかな感触を堪能した。何度挿れても彼女の膣内は相性が良いのか最高に気持ちが良い。

「ふふ。うねうねして先輩のおちんちんも気持ちよさそうですね」

「挿れてるだけで出そうになる」

「良いんですよ？出してよ」

「妊娠したらどうするんだよ…。薬飲んでるわけじゃないだろう？」

「あれって一回飲んで慣れちゃうと本当に赤ちゃんできづらくなる体質になるみたいです。ホルモンバランスに影響とか出そうでなんか怖いんです。でも今日は大丈夫な日なのでこのまま生で良いですよ」
「お前の中に生で入れると結衣とやった時にイけなくなるんじゃないかってホント心配になる」

「そ、そんなに気持ち良いですか？わたしのおまんこ…ん…あ…」

「正味、啜えてもらうのも好きだけどいろいろはの中でずつとこうしてるのも悪くない」

「ふふ。先輩って結構甘えん坊なんですね。いっつも結衣先輩にもこうやって甘えてたんですか？」

「よくやってたな」

「過去形なのが妙に引っかけられますね…。わたしが触れる話題じゃないとは思いますが…」

「過去形になった元凶の1人ではあるからなあ」

「えー、一番は雪乃さんじゃないんですか？」

「それは…そうだが…。なんだかんだずつと誘惑してきたのはお前なわけだし…」

「そりゃあ寝取るために誘惑してましたから…あ…んむ…」

「まんまとやられたな…」

「はい♪わたしの粘り勝ちです☆」

いろははしてやったりと満面のドヤ顔を見せた。

「本当なんでこんな男に時間費やしてんだよ…」

「わたしの人生なんですからわたしの勝手ですよ…。結局先輩よりも好きになれる男の人が現れなかっただけのことです」

いろはは両手足を使って俺の身体に巻き付いてきた。

「だからちゃんと責任とってくださいね♡」

「責任ってなあ…」

「んあ…別に結衣先輩と離婚してわたしを選んでくれなんてことは言わないですよ…。それはお互いの迷惑になると思いますし…ん…♡」

「今のこの状態も結構やばいと思うが？」

「それはもう…どうしようもなくないですか？それに前にも言いましてたけど、結衣先輩には高校の卒業式の時点で宣戦布告と承諾は済ませてあるので」

「…お前って本当凄いやな」

「女のプライドをかけた勝負で負けるつもりないんでわたし。ん…ちゅ…」

「じゃあ動くぞ」

「どうぞ。いっぱい出して下さい。そして孕ませて下さい」

「今日大丈夫な日って言ったよな？」

「え、そんなこと言いましたっけ？」

あっけらかんという彼女。あざとすぎる。だがそれがいい。

俺達は先程までの動物的な交わりを止めて、深く深く愛し合うように求めあった。最後の最後までじっくりと時間をかけて深い吐息とともに彼女の中で果てた。

いろはは一滴も零すまいと秘所に蓋をするように手をあてがいそのまま下着を着直していた。

「先輩…」

玄関で靴を履いているいろはが寂しそうに立っていた。

「また来てくれますか？」

「いろはさえ良ければ…んむ…っ」

「ちゅ…ん…、じゅる…絶対ですよ…」
いろははそれから15分近く唇を離さなかった。その後立ったま
ま、いろはの口でまた果ててしまったのは言うまでもない。

続く